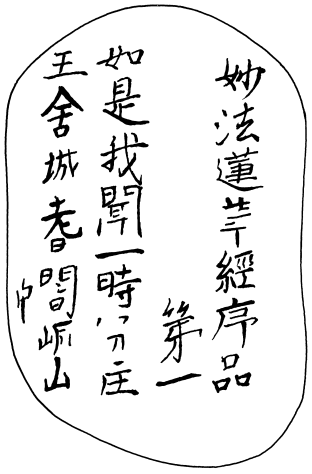
高根沢町埋蔵文化財調査報告第９集

会橋久保経塚

発掘調査報告書



2019.3

高 根 沢 町 教 育 委 員 会

会橋久保経塚（かいばしくぼきょうづか）

発掘調査報告書

2019.3

高根沢町教育委員会

序

高根沢町は、栃木県の県都宇都宮市の東部に位置し、農業を中心に発展してきました。首都から新幹線で 60 分、車で 120 分程度の利便性で、現在では宅地化や工業化も進み、人と自然が融和した豊かなまちづくりを目指しています。

しかし、地域の発展や社会情勢の変化により、町の風習や民俗、文化財などが失われつつあります。これらを守り、次世代を担う子どもたちに引き継ぐことはわたしたちの重要な責務です。

この度、町の西部に位置する宝積寺地内で「会橋久保経塚（かいばしくぼきょうづか）」の発掘調査が行われ、その調査報告書を発行することとなりました。今回の発掘調査では、法華経を墨書した石 2,063 個が出土し、町内での信仰や民俗に関する貴重な資料を得ることができました。この調査結果が今後のさまざまな文化財研究に役立つことを願ってやみません。

最後に、本発掘調査にご協力いただいた経塚の土地所有者と、ご指導いただいた栃木県教育委員会文化財課及び関係各位に、心から厚く御礼申し上げます。

平成 31（2019）年 3 月

高根沢町教育委員会

教育長　小 堀　康 典

例　言

1　本書は、高根沢町都市計画道路の建設工事に伴う会橋久保経塚の発掘調査報告書である。

2　会橋久保経塚は高根沢町大字宝積寺字会橋久保に所在する。『栃木県遺跡地図』では会橋久保庚申塚としているが、発掘の結果、経塚であることが判明したため、遺跡名を改称した。

3　発掘調査の期間および調査体制は、以下のとおりである。

調査　期間　平成 29 年２月６日～平成 29 年３月 10 日

担当者名簿

年度	平成２８年度	平成２９年度	平成３０年度
実施内容	発掘調査	洗浄・注記	整理・報告書作成
教育長	小堀康典	小堀康典	小堀康典
生涯学習課長	戸井田和明	戸井田和明	齋藤耕太郎
〃 課長補佐	菊地滋徳	菊地滋徳	赤羽康弘
〃 公民館・文化係長	山口桂子	山口桂子	山口桂子
〃 公民館・文化係	長谷優太	野中優吾	沼能香奈子
文化財専門嘱託員（発掘調査担当）	石橋知明	石橋知明	石橋知明

4　本書の作成は高根沢町から委託により、期間および体制は以下のとおりである。

事業　期間　平成 30 年４月４日～平成 31 年３月 15 日

事業主体者　公益財団法人　とちぎ未来づくり財団　理事長　小林延年

事業　担当　埋蔵文化財センター　所長　齋藤　繁

副所長　藤田典夫、整理課副主幹兼課長　津野　仁

5　本書の編集は津野が行い、第１章について高根沢町教育委員会 石橋知明、第４章総括の第３節について当財団 池田敏宏が執筆した。遺構写真は石橋、その他は津野が担当し、池田が仏教学的校訂を全面的に行った。整理作業では整理補助員　武田智子が補助した。

6　発掘調査・整理作業は、石橋知明・森　三枝子・小川征男・福井元子・五十川恵梨が担当した。

7　発掘調査および本書の作成にあたっては、下記の方々のご協力を賜った。記して感謝致します。（敬称略）

中山　晋・本間岳人・宮島基行 (高野山高徳院)

8　出土品および各種記録類については、高根沢町教育委員会で保管する。

凡　例

1　遺跡の略号は、ＴＮ－ＫＫ（TakaNezawamachi － KaibashiKubo）である。

2　写真・釈文を載せた石経番号・実測図・計測表の番号と本文の石経番号は一致する。石経番号は、各品の冒頭から末尾に至まで経文に沿って付けた。なお、礫石経の名称については、経碑に「石経」とあることから、当時の呼称により、「石経」とする。

3　法華経の石経の釈文は、大藏経テキストデータベース研究会による、大正新脩大藏経テキストデータベースを引用し、これと文字が異なる場合は、注として本文脇に提示し、以下のようにした。

写経であることから、基本的にデータベースの経文にはない文字で、書写者が石に誤写した可能性がある。これは以下のように分類でき、注にして補足した。

①同じ経文の位置を重複して書写する**重複書写**

②経文と違った文字を書写した**誤字書写**

③経文の一部を書写し忘れて文字が抜けている**抜字書写**

④経文にない文字を誤って加筆した**加筆書写**

⑤経文と同一文字であるが、字体・字形が異なる**異字形**

このうち、②③④については、法華経の諸本と対校しなければ峻別できず、大正新脩大藏経データベースとの相違点として提示する。春日版は『法華経』上・中・下（岩波文庫）による。

4　石経の書写文字は、新･旧字体の両方用いている。釈文は原則書写文字に従ったが、電植上にない文字は、新字体で提示した。これには異体字を含む。なお、以下の文字は上述のデータベースと異なっており、逐一提示していない。

データベース：徳→経石：德（以下、徳→德のように略す。）

隷→隸、即→卽、教→敎、乗→乘、喩→諭、修→脩、遍→徧、懐→懷、他→陀／佗、加→跏、
匝→帀、踊→涌、寶→寳、既→旣、幡→旛、焼→焼、末→抹、琉→瑠、伎→妓、床→牀、蓋→盖、
福→福、縁→緣、鐵→銕、毘→毗、祇→祇、默→黙、昇→昇、憙→喜、禪→禅、殖→植、怪→恠、
菓→果、遙→遥、顔→顔、勅→勅、士→土、眞→真、祕→秘、來→来、鄰→隣、躯→軀、面→面、
顛→顚、酥／蘇→蘓、禰→禰、藏→蔵、樂→楽、權→権、名→名、世→世、

また、以下の文字も一部異なっているが、電植上ないことから、書写文字と異なり異字形となっている。

數、難、出、廣、勧、餘、懃、繞、護、観、禮、饒、葉、獲、樹、兇、諂、無、壊、寳、曾、神、戀、疑、視、華、歎、蜜、濟、尊、艱

5　釈文に付した記号などは以下のとおりである。

□：判読不明な文字で、写経のため本来ある文字を□内に示した。

｜：字画から想定できる文字で、本来ある文字を｜の脇に示した。

┊：大正新脩大藏経テキストデータベースと異なった文字

┊部分で異字形・字体について、上述の文字は大正新脩大藏経テキストデータベースの記載文字については凡例４のとおりとする。それ以外の文字は注で、「大経」（大藏経テキストデータベースの略）として、提示した。

目　次

序
例言 …… i
凡例 …… ii
目次 …… iii

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　発見された遺構と遺物 …… 7
　第１節　調査の方法 …… 7
　第２節　遺構 …… 7
　　（１）経塚封土 …… 7
　　（２）積み石 (石経) の規模・配置 …… 7
　　（３）石経の出土位置 …… 9
　　（４）積み石直下の遺構 …… 9
　　（５）経碑 …… 10
　第３節　遺物 …… 17
　　（１）石経 …… 17
　　（２）古銭 …… 28

第４章　総括 …… 425
　第１節　会橋久保経塚の『法華経』書写と石積み …… 425
　　（１）書写と施主 …… 425
　　（２）『法華経』全二十八品の出土位置からみた石経の積み方と封土 …… 425
　　（３）会橋久保経塚の造立 …… 425
　第２節　下野国における『法華経』書写供養・読誦供養・念仏供養 …… 427
　　（１）『法華経』書写供養 …… 427
　　（２）『法華経』等の読誦供養 …… 452
　　（３）念仏供養と講 …… 462
　　（４）会橋久保経塚の写経・念仏供養との比較 …… 465

第３節　『法華経』に関する基礎知識－会橋久保経塚を解釈する一助として－ …… 466
（１）インドにおける初期仏教～部派仏教～大乗仏教への流れ …… 466
（２）『法華経』概観 …… 466
（３）『法華経』が与えた影響 …… 469
（４）『法華経』と他信仰の関係 …… 471

挿図目次

第１図　会橋久保経塚の位置 …… 1
第２図　栃木県及び会橋久保経塚周辺の地形図 … 3
第３図　周辺の法華経・念仏関連石造物と寺院位置図 4
第４図　会橋久保経塚平面・断面図 …… 8・9
第５図　積石区割り図 …… 9
第６図　会橋久保経塚積石経平面・断面図 …… 10
第７図　会橋久保経塚積石経上面平面図 …… 11
第８図　会橋久保経塚積石経下面平面図 …… 12
第９図　積石下の遺構 …… 15
第 10 図　会橋久保経塚経碑実測図 …… 16
第 11 図　筆跡の分類 …… 20
第 12 図　経文の特徴ある字形 …… 21
第 13 図　表裏面で筆跡の異なる石経と字形 …… 24
第 14 図　B 筆跡の特徴的な字形 …… 26
第 15 図　古銭 …… 28
第 16~37 図　巻第一　序品第一（１）~（22）…… 29~50
第 38~59 図　巻第一　方便品第二（１）~（22）…… 51~72
第 60~92 図　巻第二　譬喩品第三（１）~（33）…… 73~105
第 93~107 図　巻第二　信解品第四（１）~（15）…… 106~120
第 108~114 図　巻第三　藥草喩品第五（１）~（７）…… 121~127
第 115~122 図　巻第三　授記品第六（１）~（８）…… 128~135
第 123~154 図　巻第三　化城喩品第七（１）~（32）…… 136~167
第 155~165 図　巻第四　五百弟子受記品第八（１）~（11）…… 168~178
第 166~172 図　巻第四　授學無學人記品第九（１）~（７）…… 179~185
第 173~185 図　巻第四　法師品第十（１）~（13）…… 186~198
第 186~201 図　巻第四　見寶塔品第十一（１）~（16）…… 199~214
第 202~210 図　巻第五　提婆達多品第十二（１）~（９）…… 215~223
第 211~216 図　巻第五　勸持品第十三（１）~（６）…… 224~229
第 217~235 図　巻第五　安樂行品第十四（１）~（19）…… 230~248
第 236~252 図　巻第五　從地涌出品第十五（１）~（17）…… 249~265
第 253~262 図　巻第六　如來壽量品第十六（１）~（10）…… 266~275
第 263~277 図　巻第六　分別功德品第十七（１）~（15）…… 276~290
第 278~283 図　巻第六　隨喜功德品第十八（１）~（６）…… 291~296
第 284~301 図　巻第六　法師功德品第十九（１）~（18）…… 297~314
第 302~309 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（１）~（８）…… 315~322
第 310~315 図　巻第七　如來神力品第二十一（１）~（６）…… 323~328
第 316･317 図　巻第七　囑累品第二十二（１）・（２）…… 329･330
第 318~332 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（１）~（15）…… 331~345
第 333~342 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（１）~（10）…… 346~355
第 343~353 図　巻第八　觀世音菩薩普門品第二十五（１）~（11）…… 356~366
第 354~359 図　巻第八　陀羅尼品第二十六（１）~（６）…… 367~372
第 360~367 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（１）~（８）…… 373~380
第 368~375 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（１）~（８）…… 381~388
第 376 図　品巻位置不明の墨書石 ……389
第 377 図　法華経以外の墨書石 ……389
第 378~387 図　石経実測図（１）~（10）…… 390~399
第 388~390 図　石経碑の時期（１）~（３）…… 431~433
第 391~399 図　石経碑拓影（１）~（９）…… 437~445
第 400 図　日光市山内・萩垣面付近の経碑 ……450
第 401 図　石経碑位置図 ……451

表 目 次

第 1 表　各品石経の出土位置個数表 …… 13
第 2 表　巻第一 序品第一石経計測表 ……400
第 3 表　巻第一 方便品第二石経計測表 ……401
第 4 表　巻第二 譬喩品第三石経計測表 ……403
第 5 表　巻第二 信解品第四石経計測表 ……406
第 6 表　巻第三 藥草喩品第五石経計測表 ……407
第 7 表　巻第三 授記品第六石経計測表 ……407
第 8 表　巻第三 化城喩品第七石経計測表 ……408
第 9 表　巻第四 五百弟子受記品第八石経計測表 …410
第 10 表　巻第四 授學無學人記品第九石経計測表 …410
第 11 表　巻第四 法師品第十石経計測表 ……410
第 12 表　巻第四 見寶塔品第十一石経計測表 ……411
第 13 表　巻第五 提婆達多品第十二石経計測表 ……412
第 14 表　巻第五 勸持品第十三石経計測表 ……413
第 15 表　巻第五 安樂行品第十四石経計測表 ……413
第 16 表　巻第五 從地涌出品第十五石経計測表 ……414
第 17 表　巻第六 如來壽量品第十六石経計測表 ……415
第 18 表　巻第六 分別功德品第十七石経計測表 ……416
第 19 表　巻第六 隨喜功德品第十八石経計測表 ……416
第 20 表　巻第六 法師功德品第十九石経計測表 ……417
第 21 表　巻第七 常不輕菩薩品第二十石経計測表 …418
第 22 表　巻第七 如來神力品第二十一石経計測表 …418
第 23 表　巻第七 囑累品第二十二石経計測表 ……419
第 24 表　巻第七 藥王菩薩本事品第二十三石経計測表 …… 419
第 25 表　巻第七 妙音菩薩品第二十四石経計測表 …420
第 26 表　巻第八 觀世音菩薩普門品第二十五石経計測表 …… 420
第 27 表　巻第八 陀羅尼品第二十六石経計測表 ……421
第 28 表　巻第八 妙莊嚴王本事品第二十七石経計測表 …… 421
第 29 表　巻第八 普賢菩薩勸發品第二十八石経計測表 …… 422
第 30 表　品巻不明の墨書石計測表 ……422
第 31 表　法華経以外の墨書石計測表 ……422
第 32 表　判読不可能な墨書石計測表 ……423
第 33 表　経典供養・念仏供養石造物一覧 ……453
第 34 表　『法華経』全二十八品の内容 ……470

図 版 目 次

図版一　遠景・遺構一
　会橋久保経塚遠景（南西から）
　経塚・碑全景
　経碑

図版二　遺構二
　表土除去状況
　Ｃグリッド土層と積石確認状況
　Ｃグリッド積石確認状況

図版三　遺構三
　古銭出土状況
　Ｂグリッド土層と積石確認状況
　積石全景

図版四　遺構四
　積石全景
　積石全景
　積石全景

図版五　遺構五
　Ｄグリッド積石上面
　Ｂグリッド積石石経
　Ｃグリッド積石上面

図版六　遺構六
　Ｄグリッド積石上面
　Ｄグリッド積石石経
　積石断面

図版七　遺構七
　積石断面
　積石の南北断面
　Ｄグリッド下面の石経

図版八　遺構八
　Ｂグリッド下面の石経
　下面の石経全景
　下面の石経全景

図版九　遺構九
　Ｂ・Ｃグリッド下面の石経
　Ｂグリッド下面の石経
　Ｄグリッド下面の石経

第 1 章　調査の経緯

第 1 節　調査に至る経緯（第 1 図）

本経塚のある高根沢町は栃木県のほぼ中央部に位置し、県庁所在地である宇都宮市と接している。

地勢は大きく 4 つに区分され、東側は八溝山系の丘陵が南北に連なり、中央は広大な水田地帯が広がっている。西側には商店街や住宅地が広がり、その南にはＲ＆Ｄ（研究開発）企業を集積した「情報の森とちぎ」が立地し、西南端は「御料牧場」や芳賀・高根沢工業団地が立地している。

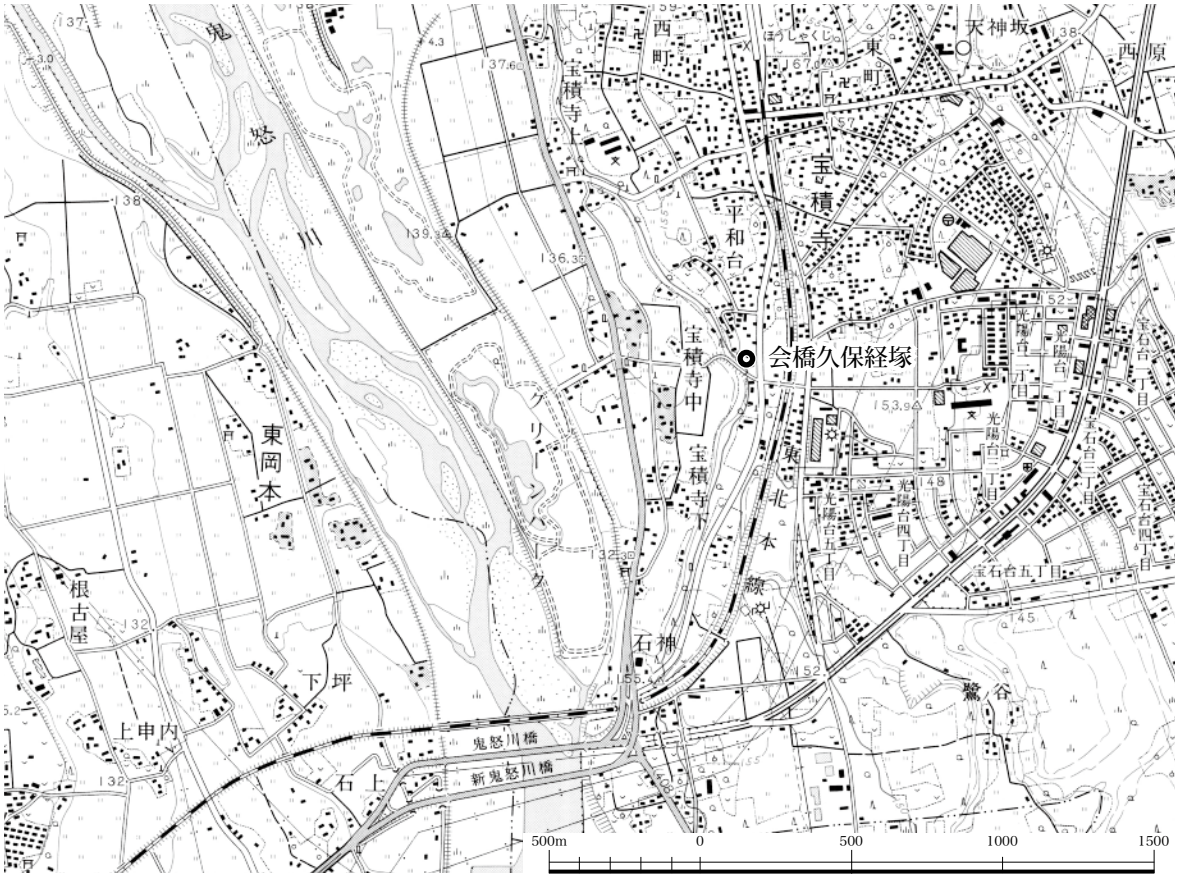
町の西側を南北に縦断する一般国道 4 号線は、東北自動車道、北関東自動車道と繋がり、これらの工業団地と首都圏や東北地方を結ぶ重要な幹線道路である。

近年、北関東自動車道から当地域を通り一般国道 4 号に至る、一般国道 408 号宇都宮高根沢バイパスの建設も本経塚付近で進んでいる。また、本経塚の隣接にも都市計画道路 3・4・401 宝積寺西通りの建設が昭和 47 年に都市計画を決定し、計画されている。

平成 9 年度に宝積寺駅西側の約半分が、宝積寺駅西第一地区として区画整理事業に着手するのにあわせて、都市計画道路 3・4・401 宝積寺西通りの築造が始まった。この工事に伴い、本経塚は発掘調査を実施することとなり、調査の開始は工事の進捗状況をみて判断し、具体的な方法や体制については、町生涯学習課内で検討することとなった。

平成 28 年度に、本経塚付近の工事の開始が、翌年度当初となることが判明した。

このため、町教育委員会は 1 月に文化財保護法第 99 条に伴う発掘届を栃木県教育委員会に提出し、発掘



第 1 図　会橋久保経塚の位置

調査の体制を整え、2 月 6 日から調査に入り 3 月 10 日に終了した。

同年 3 月 16 日、県教育委員会より今後の作業である整理・報告書作成等について指導を受け、出土した経石の洗浄と注記の作業は、平成 29 年度に町が直接行うこととなり、整理作業と報告書の作成は、平成 30 年度に公益財団法人とちぎ未来づくり財団に依頼することとなった。

平成 30 年 4 月 4 日付けで「経石調査整理及び報告書作成業務委託契約」が高根沢町と公益財団法人とちぎ未来づくり財団との間で締結され、整理作業が行われ、本報告書刊行に至っている。

第 2 節　調査の経過

2 月 6 日　調査に先立ち安全確保のため塚の上の石碑を移動。塚の植栽を移動。基準杭の設置。中央に十字にベルトを設置しＡＢＣＤグリッドとし，表土除去作業の実施。

2 月 7 日　硬化面を検出。この面にて寛永通宝 1 枚を発見。

2 月 8 日　Ａグリッド硬化面下層より多数の川原石を検出。

2 月 10 日　Ｃ、Ｄグリッドからも同様の川原石群を検出。

2 月 13 日　川原石の一部を洗浄し、墨書されていることが判明。検出した全ての川原石が墨書されており、経石と判明。

2 月 14 日　四角錐状に積み上げられた経石群の全体判明。

2 月 15 日　検出面での図面作成。経石の取り上げ準備。

2 月 16 日～ 3 月 6 日　グリッド毎の経石の取り上げ。

3 月 6 日　最下層面の図面作成、経石の取り上げ継続。

3 月 9 日、10 日　全ての経石取り上げ完了。底面の精査。現場撤収。

表土除去作業開始

墨書石検出

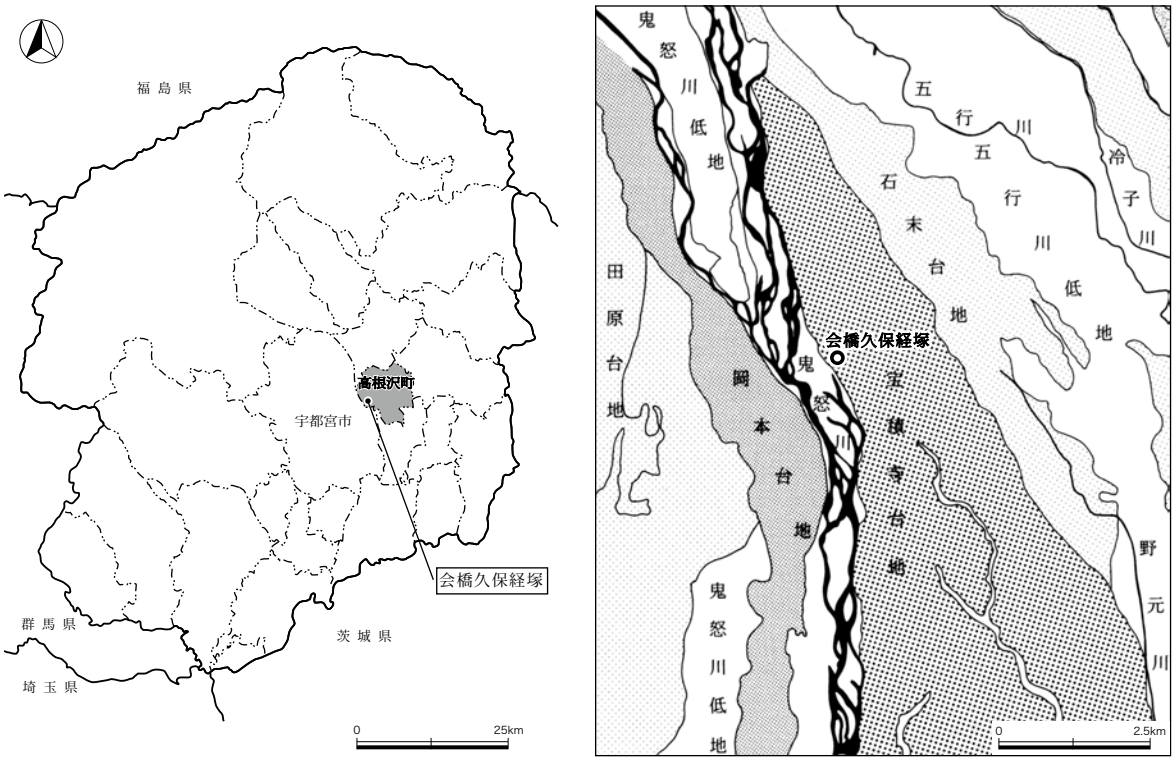
第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境（第２・３図）

会橋久保経塚の所在する高根沢町は、栃木県の中央部からやや東側にある。栃木県の地形は大きく東部の山地、中央部の平地、西部の山地に分けられる。東部山地は南北に走る八溝山地で、南に向かって標高が低くなっていく。中央部の平地は丘陵・台地・低地からなり、北から高久（白河）丘陵、那須扇状地（那須野ヶ原）、喜連川（塩那）丘陵、宇都宮を中心とした県の中部から南部の台地や低地と並んでいる。西部山地は、那須・高原・日光から、足尾山地に連なる。これらの３つの地形は、北から南に向かって傾斜しており、県内の主要な河川である鬼怒川・那珂川・思川、さらに鬼怒川の支流である五行川・田川、姿川・黒川などが地形の傾斜と同じく北から南に向かって流れている。これらの河川は、浸食によって沖積低地を作っており、河川の間には浸食されなかった台地が南北に、河川に平行してのびている。

遺跡のある高根沢町周辺の地形は、大きくは前述の中央平地にあたる。細かくみると、県東部に広がる丘陵部と日光山系の北西方向から南下して流れる鬼怒川が開析した平野部に大きく区分される。東部から喜連川丘陵、その西側の五行川低地、氏家・仁井田台地・五行川低地、その西側に幅が狭く、比較的低い石末台地、さくら市の氏家勝山から南にのびる宝積寺台地、西部の鬼怒川低地と鬼怒川に区分される。五行川低地は今も穀倉地帯となっている。

遺跡は、南北に長くのびる宝積寺台地の西端に所在し、台地の北部にあたる。経塚は台地端まで 10 m程の位置にあり、鬼怒川低地から宝積寺台地までは比高差 30 m近くあり、段丘となっている。経塚の位置は段丘上からみると、男体山などの県西部山地や鬼怒川を望む景勝地になっている。



第２図　栃木県及び会橋久保経塚周辺の地形図

第３図　周辺の法華経・念仏関連石造物と寺院位置図

第２節　歴史的環境

本経塚が江戸時代後期のものであることから、江戸時代の高根沢地域の様相について概観する。

宝積寺の支配者　江戸時代初めに経塚のあった宝積寺村を含めた高根沢町域の大半は、宇都宮藩領であった。しかし、近世前期の宇都宮藩主は頻繁に交代し、宇都宮氏改易後に戸田氏が藩主となるまで８人の大名家が交代した。会橋久保経塚のある宝積寺村も、江戸時代初めから宇都宮藩の領地であった。天明２年 (1782) ～８年 (1788) には北に隣接する中阿久津村とともに幕府による天領となったが、その後宇都宮藩領に戻った。

高根沢町域の村　江戸時代における高根沢町域の村の様子は、郷帳や村明細帳によって判明し、21 の村

からなっていた。『元禄十四年七月　下野国郷帳』(1701 年)・『天保五年十二月　下野国郷帳』(1834 年) でも村の数に変化はなくて、人口や石高生産力に大きな変動はなかったようである。村の位置を確認すると、現在まで名称が残る地域が大半であり、江戸時代の「村」の位置比定ができる。

会橋久保経塚のある宝積寺村（註１）の北には上阿久津村・中阿久津村、宝積寺台地を降りた東側には石末・大谷・関俣などの村があった。上阿久津村（註２）・中阿久津村は鬼怒川左岸の低地にあって、洪水の影響を受けることから、年貢免除措置もとられていた。宝積寺村は鬼怒川低地と宝積寺台地上にあったが、低地部では３ヶ村で鬼怒川から取水する釜ヶ淵用水によって農耕を行った。用水路は寛延２年 (1749) には存在しており、村で自普請として管理していた。

宝積寺村の戸数・人口は、寛延２年 (1749) には 146 軒・658 人、安永３年 (1774) には 148 軒・590 人、慶応元年 (1865) には 91 軒・449 人になっている。中阿久津村には河岸があり、宝積寺村でも安永から天明の頃（18 世紀後半）には、村持船による舟運業も行い、江戸まで通じていたようである。また、村所有の舟は生業にも使われた。『寛政元年四月　馬渡船壱艘小船壱艘所持証文』(1789) によれば、この村には鬼怒川の対岸にも村の新畑と荒地 13 町歩余りのまぐさ場があり、牛馬の飼料運びなどにも用いられた。

東隣の石末村は、安永４年には人口 744 人を擁していたが、石高生産力は宝積寺村よりも低かった。野元川流域に低地が広がっており、ここが水田地帯である。鬼怒川から取水して氏家から大谷村を経て石末村に用水路が通じていた。寛文年間以降には野沢源左衛門などの有力者によって、新田開発が盛んに行われた。

宝積寺村の民衆　経塚の築かれた 18 世紀の宝積寺村の様子については、指出帳によって知ることができる。この村については、寛延２年 (1749)・安永３年 (1774)・天明７年 (1787) の指出帳が残っている。特に、天明７年の指出帳では会橋久保経塚が作られた寛政５年 (1793) 年の６年前の実態を知ることができる。村では農民が階層化されており、寛延２年の指出帳によれば村の人数 658 人、百姓の家数は 146 軒、年貢や諸役の課される本百姓 52 軒、下層農民である合地 33 軒、隷属的農民である水呑 10 軒や前地 11 軒、さらに家督を譲った隠居も 38 軒ある。安永３年には、百姓家数 148 軒のうち、年貢や諸役の課される本百姓 52 軒、下層農民である合地 41 軒、隷属的農民である水呑 10 軒や前地３軒、さらに家督を譲った隠居も 40 軒ある。村の運営は、寛延２年の指出帳末の署名者によって、庄屋・組頭・惣代・長百姓からなっていた。庄屋・組頭・惣代は村方三役で、前二者は村方全般事務に関することを行っており、正月 20 日には村方一同が役元に集まった。

水田は鬼怒川低地などにあったと推測されるが、川の氾濫に苦慮していた。天明７年明細指出帳や慶應元年の明細書上帳には、「押堀石砂入引」や「欠川畑作場引」・「川欠」・「川欠石砂入引」など田畑に石砂が流入してことを伝える。

村人の生業は田畑のほかに水運の仕事も行っていた。指出帳によれば、周辺の村から人足を集め、上阿久津の河岸から石積船を出した。また、上阿久津や石井村の代表のもとに竹木を江戸に出すのに筏に組んで運んでいた。

村の信仰　18 世紀後半の宝積寺村指出帳によれば、宝積寺村内には福寿院と宝蔵寺があり、寺には僧１人がいた。しかし、『天保十五年三月　宝積寺村社堂寺院書上帳』(1844) によれば、この時に寺は無住になっていた。現在宝積寺にはこの寺は残っておらず、廃寺となっている。また、村内の宗教施設として、百姓地内に３間９尺四方の堂が７箇所あった。堂は尊像によって地蔵堂・薬師堂・観音堂・阿弥陀堂・十王堂と呼ばれ、堂には支配人（管理人）が置かれるか、村の管理となっていた。支配人は、百姓の中でも長百姓や小前と呼ばれる人々であった。また、江戸末の『慶応元年五月　宝積寺村宝積院明細帳』(1865) によれば、不

動明王を本尊とする宝積院があった。高根沢町域には、現在真言宗の寺に浄蓮寺・大安寺・広蔵寺・広林寺・大聖寺、日蓮宗の寺では妙福寺・妙顕寺、曹洞宗の寺は量山寺・地蔵寺、浄土真宗の寺には定専寺・徳明寺があった。

次に、宝積寺村を含む高根沢町域に存在する石造物から仏教信仰についてみる。仏像では大日如来・阿弥陀如来・地蔵・六地蔵・観音・如意輪観音・馬頭観音・大黒天・弁財天などが確認されている。地蔵像は最も多く造られた石造物で、子授けや安産・育児などに祈願される子安地蔵なども建てられた。大谷天沼の地蔵坐像には大谷村の女人講が地蔵念仏供養を行っている。民衆の苦しみを取り、利益を与えるとされて、その像も多い。女人講によって念仏供養されたことを文挟の明和７年塔の銘が伝える。

石造物で多いのに庚申塔がある。60 日に一度廻ってくる庚申の日に夜寝ずに健康長寿を願う信仰である。各村には講が結成されて盛んに行われた。また、二十三夜塔も多くて、この夜の月は阿弥陀の化身とされ、村や講を単位として念仏を唱して供養した。

仏教関連の動きでは、全国を巡礼することが行われ、四国や西国、板東や秩父を巡拝した碑が残っている。また、全国各地に法華経を納めて廻る六十六部廻国供養塔もある。上高根沢の明和７年塔は、信州の行者によるものであろうか。また、経を読み供養することも行われた。町域では大乗妙典千部供養や大般若経書写・延命地蔵経読誦などのほかに、光明真言を百万遍唱えることなどが行われている。石造物の銘文によれば、奉唱は村単位や村内に複数の講を結成してなされていた。また、南無阿弥陀佛を唱える念仏供養塔も確認され、宝積寺みゆき坂の明和７年塔では故人の供養を目的にしたことが刻されている。宝篋印塔は、陀羅尼経を納めることを目的にした塔で、町域にも 27 基確認されている。石末の寛保３年塔は、災難や患いの際にこの塔を礼拝すれば除かれることを示し、庶民の災難除去などに信仰されていたことがわかる。このように、広く庶民に仏教が生活のなかで浸透していた。

註

１　宝積寺村の成立について、最も古い文献の記述は元和６年 (1620) の『宝積寺村検地帳』であるが、明治初期の「地誌編輯材料取調書」では慶長２年 (1597) に宝積寺という尼寺を建立したが、翌年に寺が移転して、廃寺になったので下阿久津村を宝積寺村に改称したとする。

２　近世の奥州街道は宇都宮市白沢からさくら市上阿久津・松山へと繋がる。古代の東山道は宇都宮市岡本付近から鬼怒川を渡り、平和台・宿原・花岡・伏久まで直線道路が明治時代の地図には確認でき、那須烏山市の長者ヶ平官衙遺跡に至るルートが推定されている（島方ほか 2012）。

【参考文献】

古口利男　1986『高根沢の信仰』高根沢町教育委員会

島方洸一ほか　2012『地図でみる東日本の古代』平凡社

高根沢町史編さん委員会　1996『高根沢町史　史料編Ⅱ　近世』高根沢町

高根沢町史編さん委員会　2000『高根沢町史　通史編Ⅰ　自然　原始古代・中世　近世』高根沢町

高根沢町史編さん委員会　2003『高根沢町史　民俗編Ⅰ』高根沢町

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　調査の方法

発掘調査開始前、塚頂部には植栽と経碑があった。塚表土を除去する前に、植栽を抜き、移動した。その後、経碑の転倒を避けるために、経碑を別な場所に移した。経塚は、土層観察用のベルトを十字状に四分割して、表土を除去した。その結果、硬化面が現れ、塚の封土面と理解した後、20㎝幅で現況測量図を作成した。測量図作成後に、塚の封土を掘り下げたところ、東西 1.38 m、南北 1.69 m、高さ 0.35 mの範囲で、紡錘状に積まれた墨書石経が多量に出土した。このため、この段階で写真撮影ならびに経塚封土の記録作業を行った。経塚封土と土層観察用ベルトを除去後、紡錘状石積み (石経) の状態を改めて写真撮影、最上層の石経については番号を付して取り上げた。その後、経塚をＡ～Ｄグリッドに四分割し、出土地区・出土層位を記録しながら積み石 (石経) を取り外していった。なお、積み石基底面の石経についても、写真撮影後、番号を付して取り上げた。平面図は積み石の細部写真を撮影して、整理作業時に合成することとした。

さらに、経塚範囲を含めた約４m四方についても、塚の基底面である江戸時代の旧表土面まで掘り下げを行った。積み石 (石経) を全て取り上げた後、下部構造物の有無を確認するため、地山断ち割り調査を実施した。旧表土面で平面プラン確認作業を行ったところ、円形のピット１基が確認された。トレンチ断ち割り調査分については、土層の記録を行った。

現地調査後の整理作業では、経碑の実測・銘文の拓影採取を実施し、本経塚と経碑との関連などを分析・検討した。

第２節　遺構

（１）経塚封土（第４図、図版一・二・三）

表土を取り除いた段階での経塚封土の大きさは、南北 5.1 m、東西 4.25 mである。形状は平面長方形に近い。封土の高さは、石積み基底部である当時の地表面から硬化した塚の頂部まで 1.2 mになる。調査時、塚の頂部は楕円形状に平坦になっていた。封土は、西側から北側にかけて削平が進んでいるが、南側から東側は比較的遺存状況が良かった。南東部隅は隅丸方形になっており、南東から南西部では塚の稜線が確認できる。これらから、本来の経塚は南北が東西よりも少し長く、塚の頂部が平坦な截頭逆方錘形であったと推定される。

封土は、褐色土や黒褐色土が用いられ構築されている。紡錘状の積み石 (石経) の直上層はサラサラした褐色土であるが、その上の硬く締まった黒褐色土は積み石を被覆している感がある。

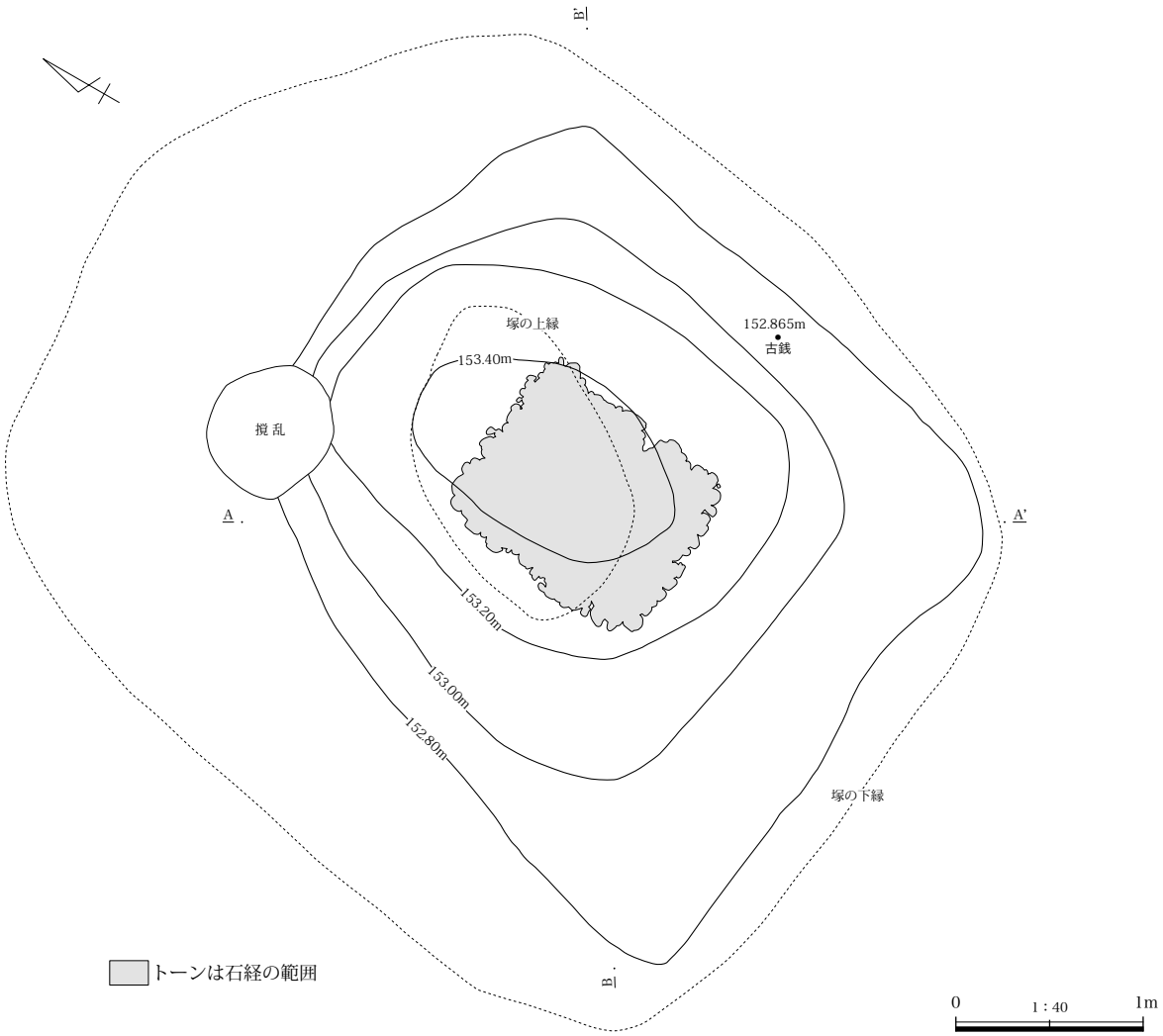
表土は、南北 3.8 m、東西 4.1 mの範囲を約 15 ～ 20㎝除去して、掘り下げた。経石を積んだ最下面よりも５～７㎝程下のレベルで、黒褐色土上面に達した。この面でも封土周囲に溝などの遺構は確認されなかった。

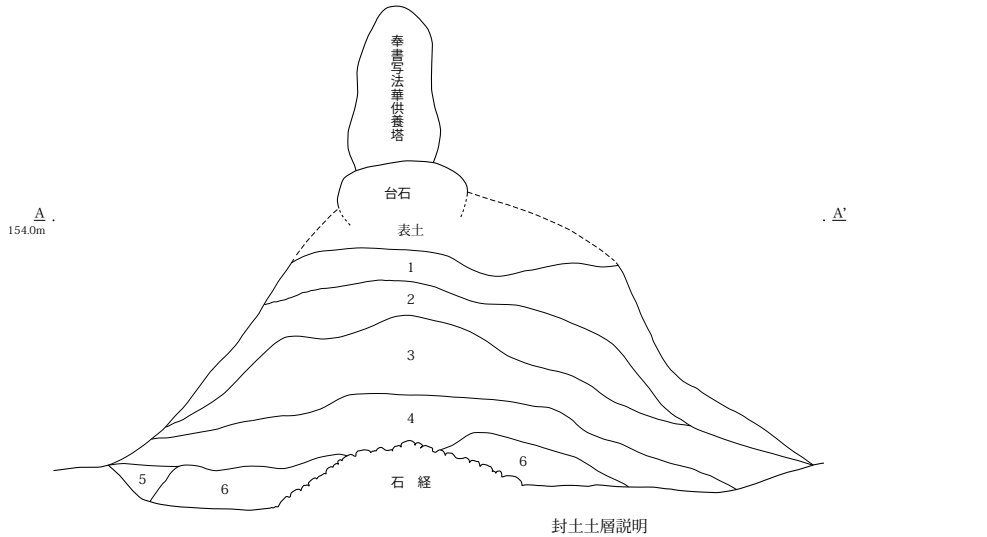
（２）積み石 (石経) の規模・配置（第６図、図版三・四）

硬く盛った塚の下から経文を書写した川原石を積んだ経塚が確認された。積み石の範囲は基底部で南北 169㎝、東西 138㎝で、やや長方形に近い形となっている。高さは、基底面から頂部まで 35㎝程であり、頂部は比較的尖っており、横断面では逆方錘形となっている。

南辺の積み石下半部は、やや大型で扁平な石を３～４段前後、東辺も２～３段木口積み気味に並べて、壁を作るようになっている。その内側には小型の石を不規則に積んでいる部分があり、積み石の崩落防止を図ったものと推測される。

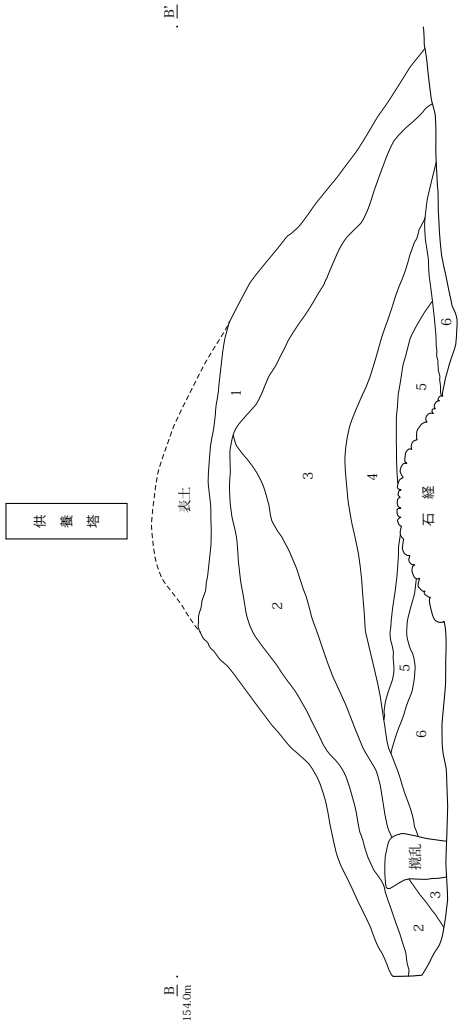
基底部では四周の石は扁平気味で大型の石を配して、その中に石を並べていく。上面は概して水平気味に

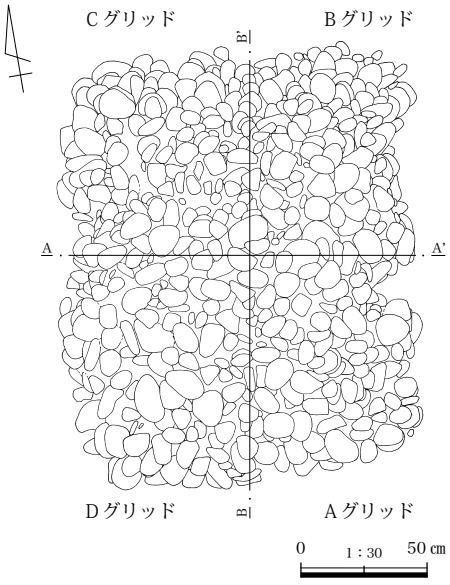




封土土層説明
1　黒褐色土　しまりなし。表土。
2　黒褐色土　硬くしまりあり。以下、封土。
3　黒褐色土　２層よりも硬くしまりあり。
4　褐色土　　サラサラした褐色土を含む。
5　褐色土　　サラサラした褐色土を４層よりも少量含む。
6　黒褐色土　硬くしまりあり。

第４図　会橋久保経塚平面・断面図





第５図　積石区割り図

置かれている。その内側の石は、斜位や水平など明確な配置は看取されない。

（３）石経の出土位置（第５・７・８図、第１表、図版五～九）

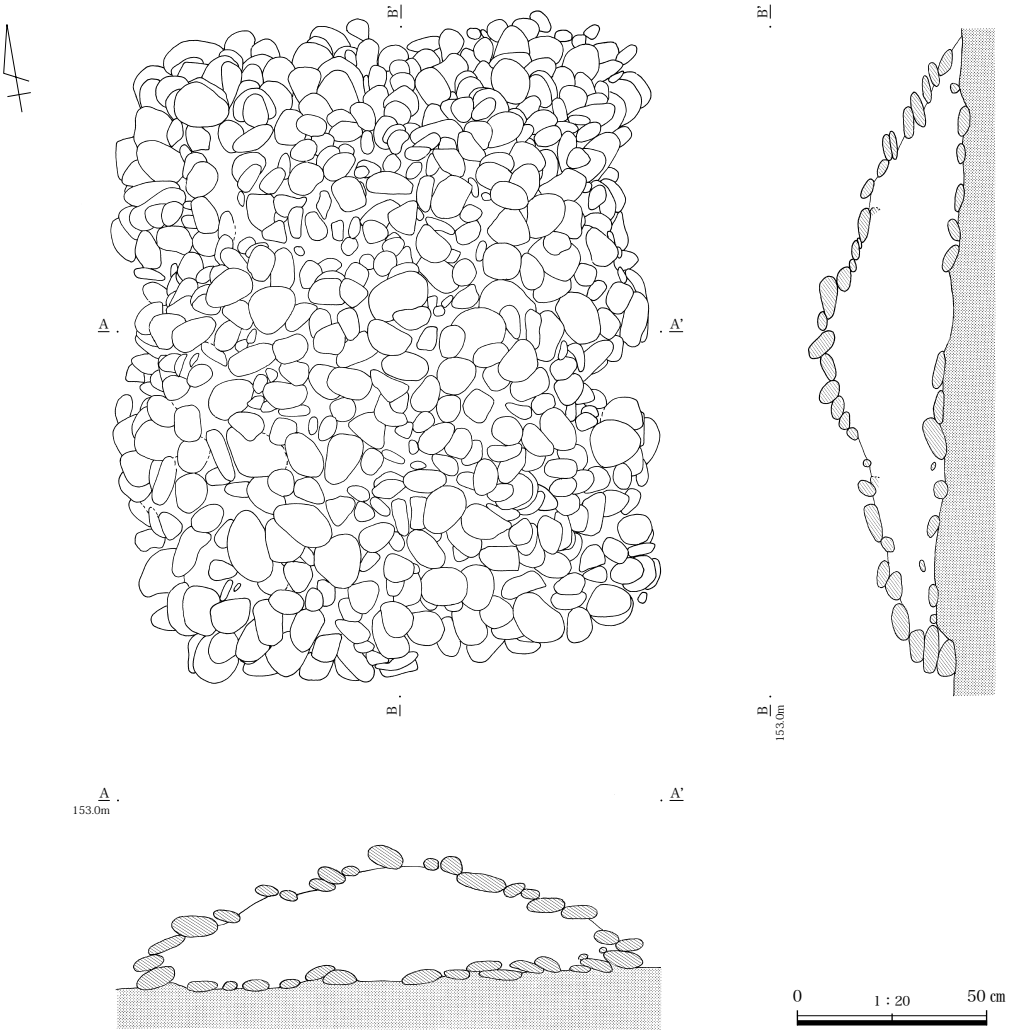
本経塚から出土した墨書石経は全点で 2,063 点 (ほとんどが『法華経』全二十八品の墨書書写) ある。これらを山積みした後、封土で覆い、塚を形成している。現地調査では、経石の最上面・最下面及び土層観察ベルトに掛かった石経は番号を付したが、これ以外は塚を四分割して、上層・下層・最下層と出土層を区分して取り上げた。平面的に四分割した部分は、積み石塚の南東部をＡグリッド、北東部をＢグリッド、北西部をＣグリッド、南西部をＤグリッドと呼称した。積み石の上面と最下面のみは番号を付けて取り上げた。また、上面の経石は上層出土として数えた。なお、各グリッド・層位の出土個数については第１表を参照されたい。

次に『法華経』各品石経の出土した層位の概要を記す。まず、「序品第一」の経石は上層から 44％、下層から 31％、最下層からも 25％出ている。平面的にも上層の４分割した各グリッドから出土しており、最下層でも各グリッドから出ている。一方、末尾の「普賢菩薩勸發品第二十八」は上層 27％、下層から 32％、最下層から 41％出ている。本品は、最下層から比較的多く出ているものの、上層からも一定数が確認される。平面的には各グリッドともに上層・下層・最下層において、近似した数の経石が出ている。これらの点からみて、『法華経』全二十八品の順に石経を置いて、積んでいったとは考えがたい。各巻品の経石が混在した状態で持ち込まれて、積まれたと想定される。

後述するが、鹿沼市富岡の寛保３年塔に「奉讀誦法華千部石經供養塔」と刻されており、書写した経石は読誦されることもあった。この場合には経石を巻品順に並べて保管しておく必要があり、保管所から埋納場所に箱で運んだとすると垂直分布や平面分布でも各品でまとまって出る可能性がある。会橋久保経塚では、石経が巻品ごとにまとまった出方はしておらず、書写後に整然とした石経保管をしていたとは考えがたい。経碑に刻されているように書写供養を行うことが目的であったと思われる。

（４）積み石直下の遺構（第９図）

積み石最下面の石経を取り除いた後に、その下面に遺構が存在するか確認した。南北に長いトレンチ１では、積み石の



第６図　会橋久保経塚積石経平面・断面図

下面である江戸時代後期の地表を確認し、硬くしまった黒褐色土であった。このため、積み石は表土の掘り込みなどは行わずに、地表に直接置いていったことが想定される。

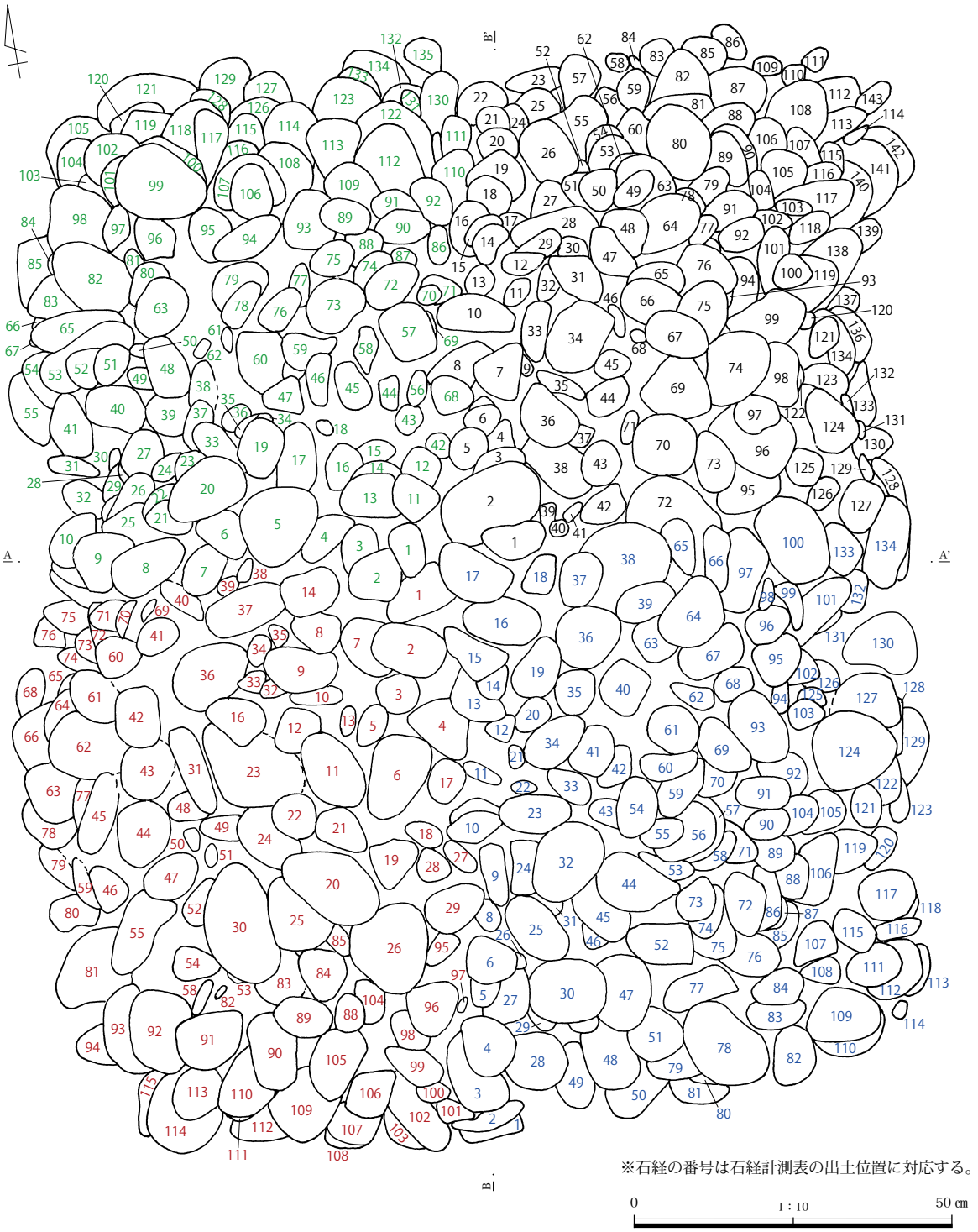
東西方向にも細長いトレンチを設け（トレンチ２）、ここで平面円形のピットが発見された。その位置は、積み石の中央やや南西寄りになる。ピットは径 24㎝、深さ 17㎝で、覆土はサラサラした黒褐色土である。しかし、ピット内からは遺物等は出土せず、封土・積み石との関連を特定することはできなかった。

（５）経碑（第 10 図、図版一）

調査前の経碑は、法華経書写供養面を南西に向けて塚上の現表土上に据えられていた。今回発掘調査による土層観察の結果、(ⅰ) 本来、経碑は封土硬化面上に安置されていた (現表土－ 20㎝程の位置) →(ⅱ) 後世、封土硬化面上に現表土が堆積→ (ⅲ) 現表土上に経碑を安置し直した可能性が考えられそうである。

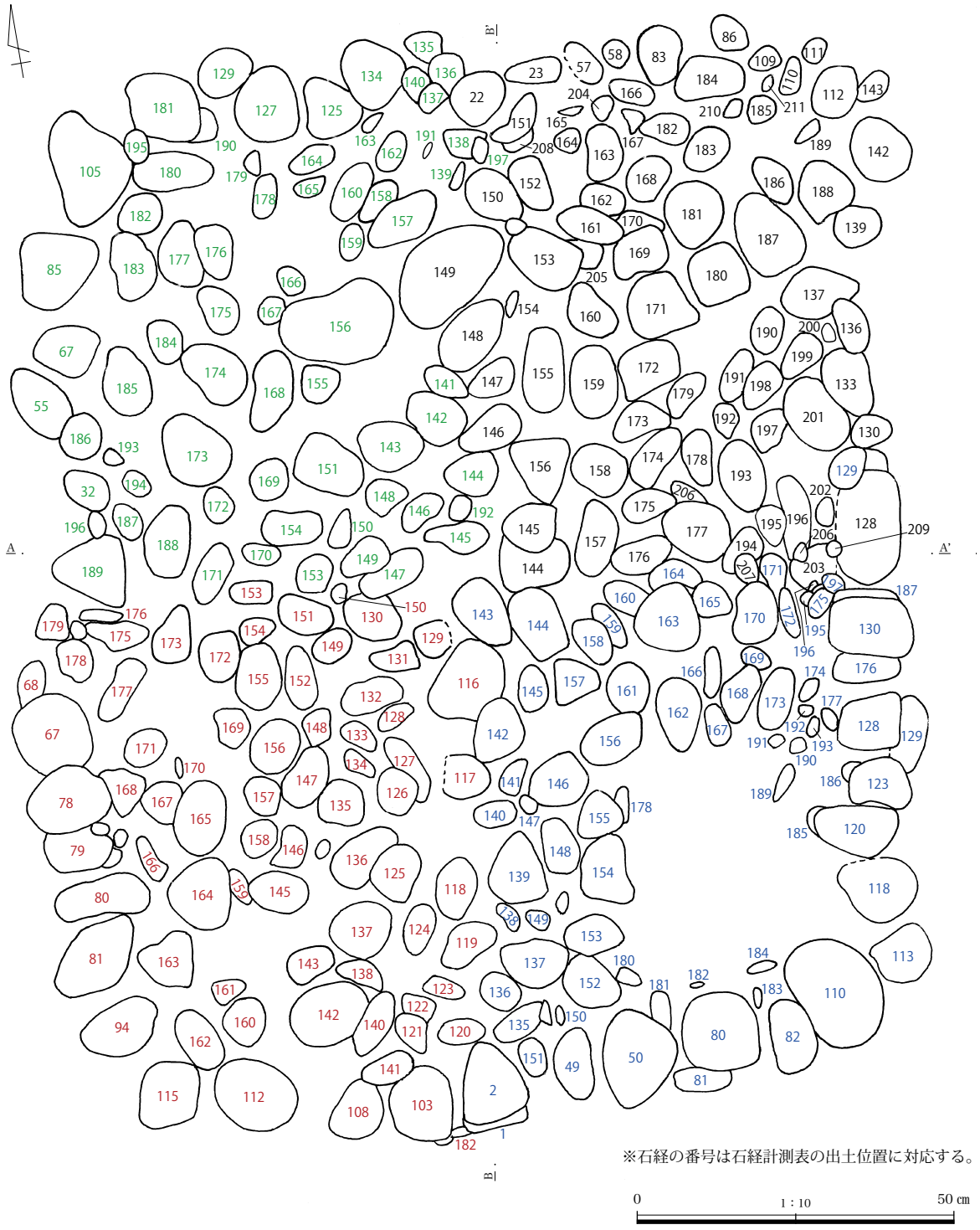
なお、経碑は発掘調査開始以前に、塚の南約 10 ｍの位置の畑脇に移設された。移設後の経碑は、北面を法華経書写供養面、南西面を念仏供養面、南東面を造立紀年名 (寛政５年) 面にして現在位置に据えられている。

経碑の材質は砂岩で川原石を転用したものである。形状は、短軸断面隅丸三角形の棒状を呈している。経碑台座は安山岩を用いているが、コンクリートにより固定されている。なお、台座ならびにコンクリート固定は調査開始前の写真でも確認できることから（写真図版参照）、移転後の大きな改変は行われていないよ



第７図　会橋久保経塚積石経上面平面図

うである。経碑の大きさは、調査時の計測で、高さ 95㎝、このうち台座 10㎝、幅 48㎝、奥行 35㎝である。整理作業中の実測・採拓時における計測では高さが 100㎝であった。これは、台座が調査前よりも浅く据えられたためと判断される。経碑最下端の「養」の文字が埋まっていることから、本来の経碑は現在高よりも大きかったと推測される。経碑の頂部は将棋頭状に一方に寄った形態をしている。経碑表面は平な自然面であり、碑文は３面全面に刻まれている。



第８図　会橋久保経塚積石経下面平面図

碑文は、いずれも楷書で端正に書かれているが、念仏供養面の「天下和順　日月清明」(『仏説無量寿経』経文の一部) や、施主名の「藤」などは行書気味になっている。なお、後述のように、一部の字形に特徴があり、「念」の「心」の２画目の下げ方や「佛」や「億」の人偏が竪画から右に撥ねている点は、経石に書写された字形と類似している。また、念仏供養面の願意文にある「清」の「氵」も３画目が「し」の字状になっており、石経の字形と似ている。法華経書写供養面では「宝積寺村」の斜め下に門構えのような字形があるが、

第１表　各品石経の出土位置個数表

序品第一

	A	B	C	D	計(比率)
上層	14	20	17	8	59(44%)
下層	12	11	6	13	42(31%)
最下層	12	4	6	12	34(25%)
計(比率)	38(28%)	35(26%)	29(21%)	33(25%)	135

方便品第二

	A	B	C	D	計(比率)
上層	18	26	16	19	79(44%)
下層	10	17	17	27	71(40%)
最下層	6	5	8	10	29(16%)
計(比率)	34(19%)	48(27%)	41(23%)	56(31%)	179

譬喩品第三

	A	B	C	D	計(比率)
上層	23	36	23	22	104(48%)
下層	13	17	14	19	63(29%)
最下層	13	9	10	18	50(23%)
計(比率)	49(23%)	62(28%)	47(22%)	59(27%)	217

信解品第四

	A	B	C	D	計(比率)
上層	6	9	13	11	39(50%)
下層	6	3	3	16	28(36%)
最下層	0	5	3	3	11(14%)
計(比率)	12(15%)	17(22%)	19(24%)	30(39%)	78

藥草喩品第五

	A	B	C	D	計(比率)
上層	4	4	2	9	19(54%)
下層	1	5	2	4	12(34%)
最下層	1	0	1	2	4(12%)
計(比率)	6(17%)	9(26%)	5(14%)	15(43%)	35

授記品第六

	A	B	C	D	計(比率)
上層	5	7	3	5	20(53%)
下層	6	0	1	4	11(29%)
最下層	4	1	1	1	7(18%)
計(比率)	15(40%)	8(21%)	5(13%)	10(26%)	38

化城喩品第七

	A	B	C	D	計(比率)
上層	8	15	38	15	76(42%)
下層	14	16	14	28	72(40%)
最下層	8	7	7	10	32(18%)
計(比率)	30(17%)	38(21%)	59(33%)	53(29%)	180

五百弟子受記品第八

	A	B	C	D	計(比率)
上層	2	2	7	5	16(38%)
下層	3	1	4	4	12(29%)
最下層	4	2	5	3	14(33%)
計(比率)	9(21%)	5(12%)	16(38%)	12(29%)	42

授學無學人記品第九

	A	B	C	D	計(比率)
上層	3	4	2	0	9(38%)
下層	1	2	0	4	7(29%)
最下層	1	1	3	3	8(33%)
計(比率)	5(21%)	7(29%)	5(21%)	7(29%)	24

法師品第十

	A	B	C	D	計(比率)
上層	5	8	15	6	34(49%)
下層	6	6	3	5	20(29)%
最下層	2	5	5	3	15(22%)
計(比率)	13(19%)	19(28%)	23(33%)	14(20%)	69

見寶塔品第十一

	A	B	C	D	計(比率)
上層	10	10	10	9	39(42%)
下層	5	8	8	13	34(36%)
最下層	1	6	5	9	21(22%)
計(比率)	16(17%)	24(26%)	23(24%)	31(33%)	94

提婆達多品第十二

	A	B	C	D	計(比率)
上層	4	0	1	2	7(32%)
下層	0	2	1	3	6(27%)
最下層	1	4	3	1	9(41%)
計(比率)	5(23%)	6(27%)	5(23%)	6(27%)	22

勸持品第十三

	A	B	C	D	計(比率)
上層	0	1	1	5	7(33%)
下層	2	3	2	2	9(43%)
最下層	0	2	1	2	5(24%)
計(比率)	2(9%)	6(29%)	4(19%)	9(43%)	21

安樂行品第十四

	A	B	C	D	計(比率)
上層	12	13	16	4	45(42%)
下層	6	15	8	13	42(39%)
最下層	5	8	3	5	21(19%)
計(比率)	23(21%)	36(33%)	27(25%)	22(21%)	108

從地涌出品第十五

	A	B	C	D	計(比率)
上層	10	10	15	9	44(47%)
下層	8	7	8	8	31(33%)
最下層	1	6	5	7	19(20%)
計(比率)	19(20%)	23(24%)	28(30)%	24(26%)	94

如來壽量品第十六

	A	B	C	D	計(比率)
上層	9	3	8	6	26(60%)
下層	1	0	3	5	9(20%)
最下層	1	3	2	3	9(20%)
計(比率)	11(25%)	6(14%)	13(29%)	14(32)%	44

※数字は個数、アルファベットはグリッドを示す。

分別功徳品第十七

	A	B	C	D	計(比率)
上層	5	2	4	10	21(41%)
下層	5	8	4	9	26(51%)
最下層	0	1	1	2	4(8%)
計(比率)	10(20%)	11(21%)	9(18%)	21(41%)	51

藥王菩薩本事品第二十三

	A	B	C	D	計(比率)
上層	6	5	14	10	35(43%)
下層	4	4	6	10	24(30%)
最下層	3	8	4	7	22(27%)
計(比率)	13(16%)	17(21%)	24(30%)	27(33%)	81

隨喜功徳品第十八

	A	B	C	D	計(比率)
上層	4	0	3	4	11(46%)
下層	2	2	0	2	6(25%)
最下層	1	1	2	3	7(29%)
計(比率)	7(29%)	3(13%)	5(21%)	9(37%)	24

妙音菩薩品第二十四

	A	B	C	D	計(比率)
上層	6	3	9	6	24(48%)
下層	0	4	2	6	12(24%)
最下層	1	6	1	6	14(28%)
計(比率)	7(14%)	13(26%)	12(24%)	18(36%)	50

法師功徳品第十九

	A	B	C	D	計(比率)
上層	17	5	19	15	56(57%)
下層	3	6	6	15	30(30%)
最下層	2	4	4	3	13(13%)
計(比率)	22(22%)	15(15%)	29(29%)	33(34%)	99

觀世音菩薩普門品第二十五

	A	B	C	D	計(比率)
上層	2	6	8	3	19(37%)
下層	4	4	3	11	22(42%)
最下層	1	2	3	5	11(21%)
計(比率)	7(13%)	12(23%)	14(27%)	19(37%)	52

常不輕菩薩品第二十

	A	B	C	D	計(比率)
上層	6	6	3	5	20(61%)
下層	2	2	1	1	6(18%)
最下層	0	3	2	2	7(21%)
計(比率)	8(24%)	11(34%)	6(18%)	8(24%)	33

陀羅尼品第二十六

	A	B	C	D	計(比率)
上層	2	4	0	2	8(45%)
下層	2	1	0	1	4(22%)
最下層	2	1	3	0	6(33%)
計(比率)	6(33%)	6(33%)	3(17%)	3(17%)	18

如來神力品第二十一

	A	B	C	D	計(比率)
上層	1	1	10	0	12(42%)
下層	6	2	2	4	14(48%)
最下層	0	0	0	3	3(10%)
計(比率)	7(24%)	3(10%)	12(42%)	7(24%)	29

妙莊嚴王本事品第二十七

	A	B	C	D	計(比率)
上層	5	3	1	3	12(33%)
下層	3	2	3	4	12(33%)
最下層	1	5	3	3	12(34%)
計(比率)	9(25%)	10(28%)	7(19%)	10(28%)	36

囑累品第二十二

	A	B	C	D	計(比率)
上層	2	2	1	0	5(50%)
下層	0	1	0	0	1(10%)
最下層	0	2	2	0	4(40%)
計(比率)	2(20%)	5(50%)	3(30%)	0(0%)	10

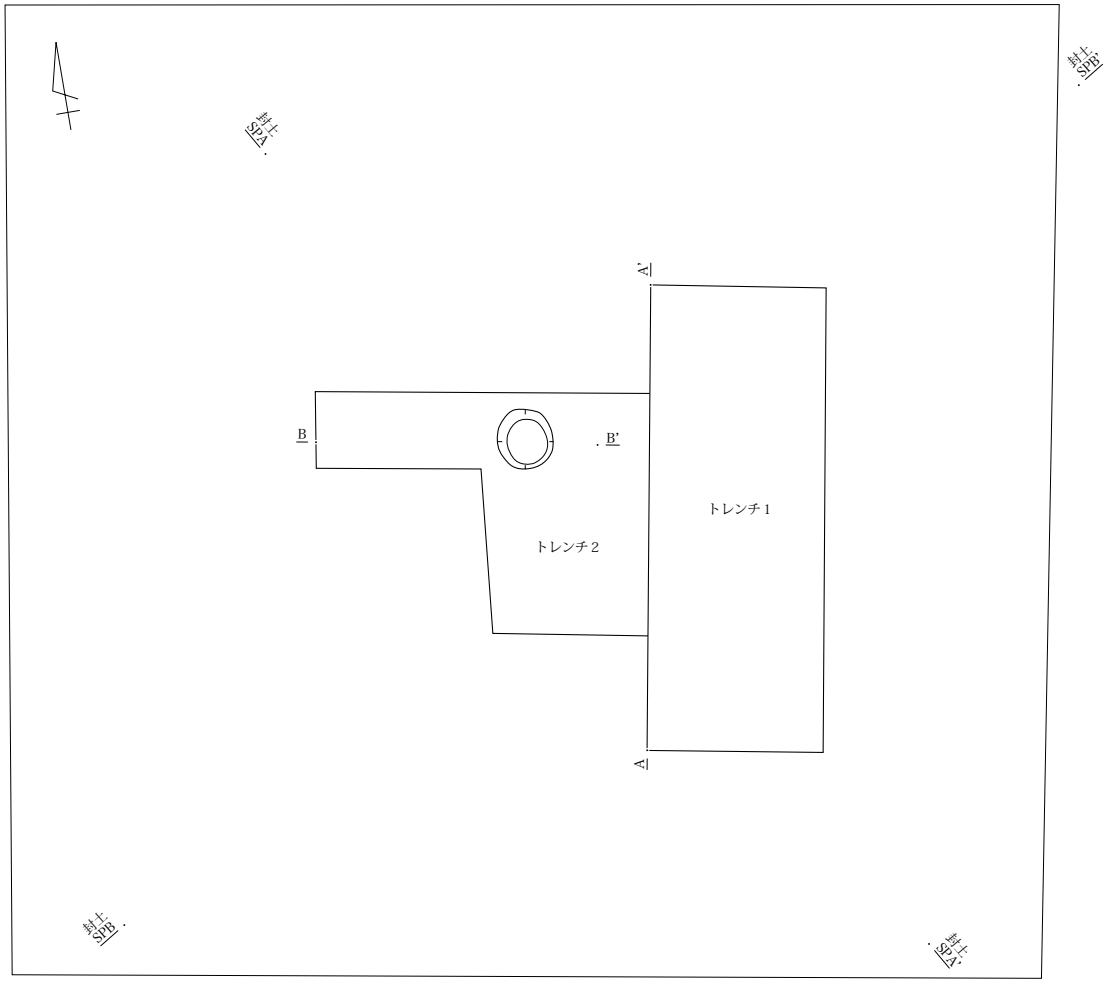
普賢菩薩勸發品第二十八

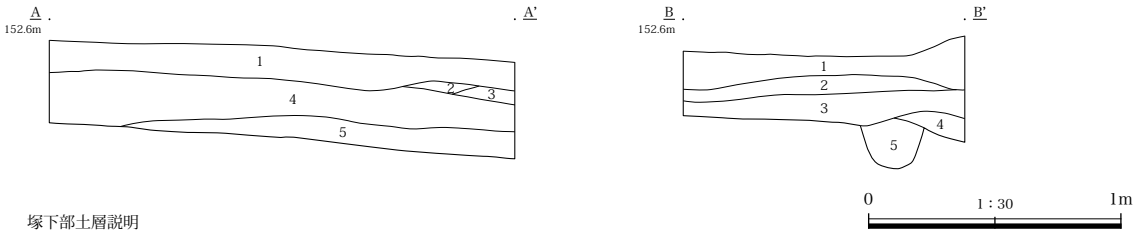
	A	B	C	D	計(比率)
上層	2	3	2	2	9(27%)
下層	3	3	2	3	11(32%)
最下層	3	4	3	4	14(41%)
計(比率)	8(24%)	10(29%)	7(21%)	9(26%)	34

※数字は個数、アルファベットはグリッドを示す。

判然としない。また、施主の「加藤氏」の「加」の偏は確認できるが、旁は不明瞭である。

経碑の造立は、寛政５年(1793年)３月である。念仏供養・法華経書写供養が近い時期に行われたとみられる。なお、本経碑は、法華経書写供養面の上端に梵字バク(釈迦如来の種子)を、念仏供養面の上端に梵字キリーク(阿弥陀如来の種子)を施している。これらから、本経碑ならびに経塚の造立に密教系・浄土系知識をもつ者の関与が想定できそうである(「第４章総括」にて詳論)。





塚下部土層説明

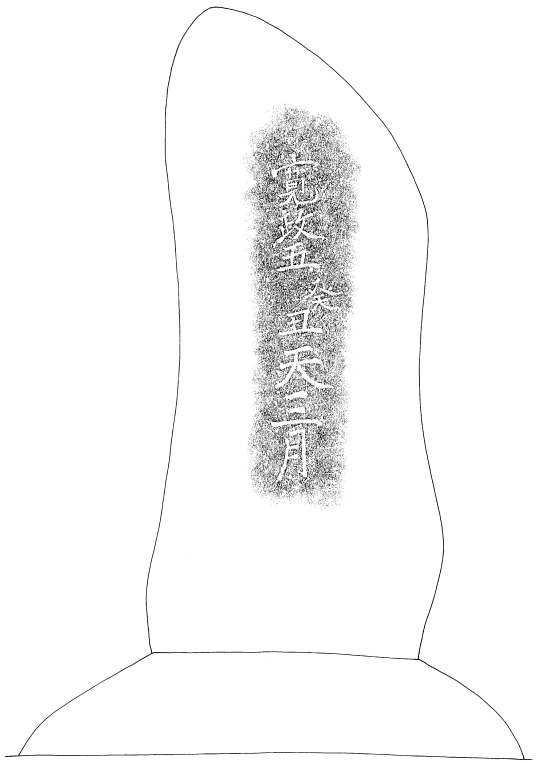
Ａ－Ａ’

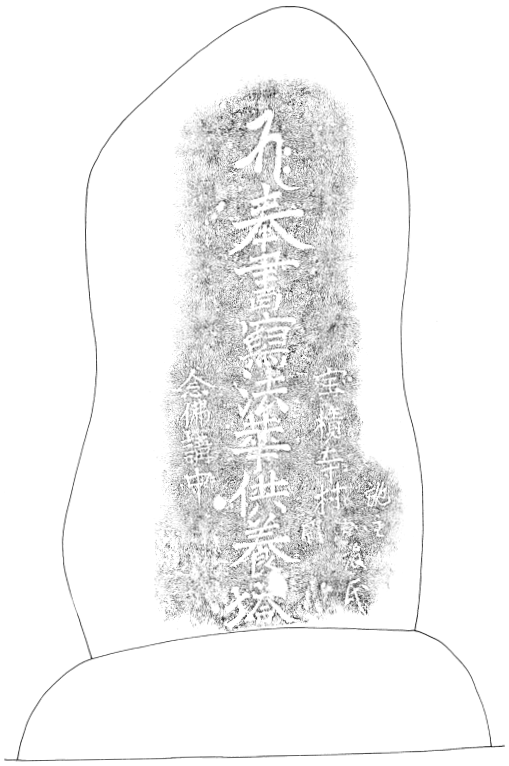
1　黒褐色土　硬くしまりあり。旧地表。
2　黒褐色土　３層にも少し類似する土層。
3　褐色土
4　黒褐色土　ローム粒を多量含む。
5　黄褐色土　ロームブロック（径８～ 10 ㎝程、七本桜軽石）と黒色土の混合土。

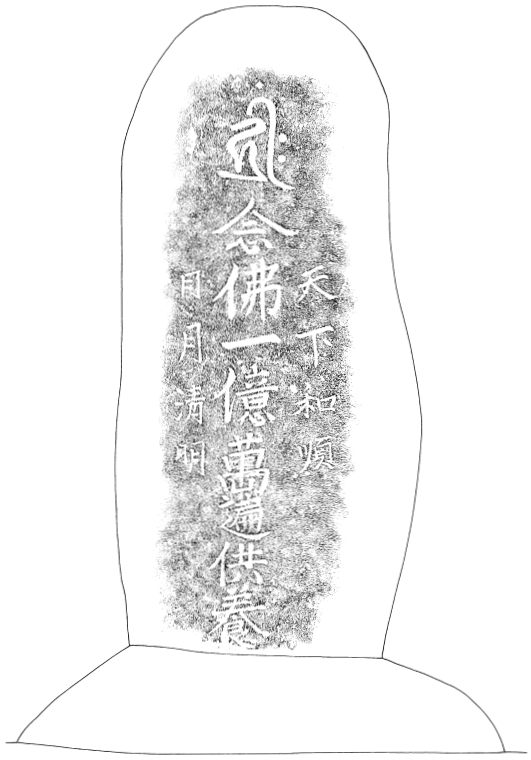
Ｂ－Ｂ’

1　黒褐色土　硬くしまりあり。旧地表。
2　褐色土
3　黒褐色土　ローム粒を多量含む。
4　黄褐色土　ロームブロック（径８～ 10 ㎝程、七本桜軽石）と黒色土の混合土。
5　黒褐色土　しまりなし。

第９図　積石下の遺構





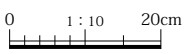


釈　文

天下和順
念佛一億萬遍供養
日月清明

施主
宝積寺村
加藤氏
奉書寫法華供養塔
念佛講中

寛政五癸丑天三月



第 10 図　会橋久保経塚経碑実測図

第３節　遺物

本節では、発見された石経と古銭について説明する。なお、石経の番号は、写真・釈文を掲載した、各品の番号に対応する。

（1）石経

本経塚では、総数 2,063 個の石経が出土した。総重量は 633.46㎏であった。このうち 155 個については風化によって書写文字が不鮮明で判読できなかった。ここでは、判読できた 1,908 個の石経について、石経の特徴や書写した文字の特徴などを概述したい。

（A）石経と書写

まず、石経の傾向や書写面、文字の配置などについて記す。

a）石経

石経は全て川原石である。形状は、扁平で平坦面のあるものが多いが、棒状の石や小型のものでは塊状の石も一部確認できる。手のひら大の石が最も多いが、大型品は長さ 25㎝に及ぶものもある。なお、本経塚は鬼怒川の河岸段丘端に立地していることから、石材は河川敷などで採集したものと推測される。

b）書写面

書写する面は扁平な石であれば表・裏２面であるが、厚みがある石の場合には片側面・両側面に及び４面書写する事例も少数存在する。

c）改行

本石経の経文改行は、石の大きさに合わせ、各行の文字数を揃えようとしている。このため各石経とも文字数は近似する場合が多い。ただし、経文書写が進行した石の左端では１・２字程になることもしばしば確認される。世尊が偈を説く部分は経文では４～５文字で改行しており、『法華経』本文と書写石経が合致した改行の例として「序品第一」の 106 番石経がある。

我念過去世
無量無數劫
有佛人中尊
號日月燈明　（106 番石経 - 表面）
世尊演説法
度無量衆生
無數億菩薩
令入佛智慧　（106 番石経 - 裏面）

として、経文の偈文改行と合致する。106 番石経は小判形の形状を呈しており、経典本と同様の改行ができたと推測される。ただし、裏面の４行目は字間を詰めて書いている。

次に、『法華経』本文と合致しない改行の事例として、「方便品第二」の 46 番石経を挙げたい。

〈経文〉 無上兩足尊　　【石経】 無上兩足尊願説
願説第一法　　第一法我
我爲佛長子　　爲佛　（46 番石経 - 表面）
長子
唯垂分別説　　唯垂分別説
是會無量衆　　是會無量衆能敬

能敬信此法　　信此法佛已曾世世教
佛已曾世世
教化如是等　　化如是等皆一心合掌　（46 番石経 - 裏面）
皆一心合掌

となっている。46 番石経の平面形は、三角形状を呈している。このため、この形状に合わせ、偈文の区切り方を副次的に扱ったのであろう。

ｄ）誤字・脱字・重複書写

『法華経』の石経書写にあたって誤字・脱字や同じ部分を重複して写している部分が散見する。釈文でも示したが、以下のように分類できる。釈文中に注として記したので参照されたいが、ここでは一例を挙げておきたい。

①同じ経文の位置を重複して書写する重複書写

「化城喩品第七」の 98 番石経では、

〈経文〉 亦以不受　一切法故　而於諸漏　心得解脱　從是已後

【石経】 亦以不受一切　法故而　而於諸漏　　心得解脱　從是　已後

のように「而」を２回書いているが、これは単純な書き間違いとみられる。

②経文と違った文字を誤字書写

写経で文字が異なって最も多いのは誤写である。例えば、「序品第一」29 番石経 - 裏面では、

〈経文〉 作是念今者世　尊現神變相以何　因緣而有此瑞今佛　世尊入于三昧是不可　思議現希有事

【石経】 作是念今各世　尊現神變相以何　因緣而有此瑞今佛　世尊入于三昧是不可　思議現希有事

と、「者」を「各」と書いている。字形が比較的類似している文字の誤写と言えよう。

この他では、同音で異なった字を書いている場合が多く、「遍」は「徧」、「幡」は「旛」、「伎」は「妓」などである。事例を挙げると「序品第一」10 番経石 - 裏面では、

〈経文〉 二萬天子俱　復有名月天子　普香天子

【石経】 二萬天子俱　復有名月天子　普光天子

と記されている。「香」を「光」と音読みし、誤写したのであろう。また、「序品第一」80 番石経 - 表面では、

〈経文〉 應供 正遍知 明行足 善逝 世間解 無上士 調御 丈夫 天人師 佛 世尊

【石経】應供正徧知明行　足善逝世間解　無上士調御　丈夫天人師　佛世尊

とある。音も意味も同じ事例である。

さらに、「序品第一」71 番石経 - 表面では、

〈経文〉 縱廣正等　二千由旬　一一塔廟　各千幢幡

【石経】 縱廣正等　二千由旬　一一塔廟　各千幢旛

となっている。いずれも「旗」の文意ではあるが、異字を用いている。「序品第一」72 番石経 - 表面でも、

〈経文〉 人及非人　香華伎樂　常以供養　文殊師利　諸佛子等

【石経】 人及非人　香華妓樂　常以供養　文殊師利　諸佛子等

となっている。いずれも同意である。

③経文の一部を抜字書写

経文の書き忘れとみられる事例であり、各巻で散見する。一事例を挙げれば、「方便品第二」40 番石経では、

〈経文〉 舍利弗 欲重宣此義 而説偈言

【石経】 舍利欲重　宣此義　而説偈　言

とある。「舍利弗」は固有名詞 (人物名) であるが、「弗」を書き忘れている。

④経文にない文字を加筆書写

「序品第一」３番石経 - 裏面は、

〈経文〉 訶拘絺羅 難陀 孫陀羅難陀 富樓那彌多羅尼子

【石経】 訶拘絺羅　難陀孫陀羅難　羅陀富樓那彌　多羅尼子

と、世尊の弟子「孫陀羅難陀」に「羅」を加筆して「孫陀羅難羅陀」と誤写している。

また、「序品第一」60 番石経 - 表面では、

〈経文〉 又見菩薩　處林放光　濟地獄苦

【石経】 又見菩薩　處林放光　濟地獄苦　地

と、改行したのち、最後の行に「地」が書き加えられている。書写した法華経の典拠によるのであろうか。なお、加筆書写は複数事例存在することから、『法華経』原本系譜や、書写態度、書写者の熟練度等を考証していく上での手掛かりになり得るであろう。他の経文や経石と比較照合していくことによって、今後これらの点が解明されていくことを期したい。

（Ｂ）石経の筆跡

筆跡の分類（第 11 図）

書写した文字の筆跡からみると、感覚的な分類であるが、大きく２種類、小さな差異でさらに１種類、合計３種類に分類できた。以下、その特徴を概述するが、書風の分類のため、感覚的であることは否めない。

Ａ筆跡は、大振りな楷書である。文字は幅・高さが近い方形のものもあるが、縦長に書く文字も散見する。

Ｂ筆跡は、丁寧な楷書である。言偏や難の部首隹などの横画が幅広で、横画の縦間隔が狭くて、文字が横長になる書風。

Ｃ筆跡は、Ａ筆跡のような大振りな文字ではないが、Ｂ筆跡のような慎重な書風で、横画が長くのびてはいない。Ａ筆跡とＢ筆跡の中間的な筆跡である。

このように分類して、本経塚出土石経 (『法華経』全八巻二十八品) についてみると、Ａ筆跡が圧倒的に多かった。このため、以下ではＢ筆跡・Ｃ筆跡と判断した石経番号のみ提示して、分類不明部分は示していない。石経番号は、「品」の冒頭から「品」末尾に至るまで経文に沿った順番である。

「序品第一」　３番石経・28 番石経 - 裏面・76 番石経・81 番石経はＢ筆跡、56 番石経・79 番石経・80 番石経はＣ筆跡、58 番石経はＢかＣ筆跡

「方便品第二」　164 番石経はＢ筆跡かＣ筆跡

「譬喩品第三」　214 番石経 - 裏面５・６行はＢ筆跡

「信解品第四」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし

「藥草喩品第五」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし

「授記品第六」　３番石経はＢ筆跡

「化城喩品第七」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし

「五百弟子受記品第八」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし

「授學無學人記品第九」　15 番石経はＢ筆跡

「法師品第十」　52 番石経 - 裏面はＢ筆跡

「見寶塔品第十一」　13 番石経・55 番石経 - 表面・78 番石経はＢ筆跡

「提婆達多品第十二」　７番石経・16 番石経 - 裏面の一部はＢ筆跡
「勸持品第十三」　10 番石経・14 番石経・19 番石経はＢ筆跡
「安樂行品第十四」　48 番石経 - 裏面はＢ筆跡
「從地涌出品第十五」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし
「如來壽量品第十六」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし
「分別功德品第十七」　３番石経 - 表面１行目・24 番石経 - 裏面・27 番石経 - 表面はＢ筆跡
「隨喜功德品第十八」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし
「法師功德品第十九」　11 番石経・13 番石経・16 番石経 - 裏面・25 番石経 - 表面はＢ筆跡
「常不輕菩薩品第二十」　21 番石経・24 番石経 - 表面・25 番石経 - 表面はＢ筆跡
「如來神力品第二十一」　１番石経・５番石経 - 表面・13 番石経 - 表面・19 番石経 - 裏面・20 番石経 - 表面はＢ筆跡
「囑累品第二十二」　８番石経はＢ筆跡
「藥王菩薩本事品第二十三」　９番石経・59 番石経 - 表面・79 番石経はＢ筆跡
「妙音菩薩品第二十四」　５番石経・13 番石経・32 番石経 - 表面はＢ筆跡
「觀世音菩薩普門品第二十五」　31 番石経 - 表面・47 番石経 - 表面はＢ筆跡
「陀羅尼品第二十六」　11 番石経 - 表面・18 番石経 - 表面はＢ筆跡
「妙莊嚴王本事品第二十七」　３番経石 - 表面・12 番石経 - 表面・15 番石経 - 裏面はＢ筆跡
「普賢菩薩勸發品第二十八」　Ｂ筆跡・Ｃ筆跡なし

経文の特徴ある字形（第 12 図）

本経塚出土石経中には、特徴的な字形がある。これは、各筆跡と特徴ある字形を縦横で見ることによって、書写人数を判断する一助となり得よう。以下、特徴と事例を列挙する。ここでの事例は、本写経で主体となっている後述のＡ書風から挙げておき、他の書風と比較対照する際の参考としたい。

ａ）部首や旁の一部に特徴がある文字

「女」の１画目は左側への屈曲が強く、屈曲後に垂直気味に下がる。３画目の横画は１画目の屈曲部に近い低

第 11 図　筆跡の分類

い位置に書かれ、２画目の上端も横画の上に出る。用例としては、

　告舍利弗　我亦如是　衆聖中尊　世間之父　一切衆生 (「譬喩品第三」143 番石経 - 裏面)

がある。

「阝」は「陀」・「随」などで縦画の下端から右斜め上に長くはねる。異なった文字でも共通した字形である。「力」は２画目のノの位置が１画目の横画の左端に寄っており、「衆」の旁の竪画が弧状になっている。また、「説」の旁１画目と２画目が「八」の字状になる。事例としては、

　第一之導師　得是無上法　隨諸一切佛　而用方便力　我等亦皆得　最妙第一法　爲諸衆生類　分別説三乗（「方便品第二」163 番石経 - 表面）

がある。

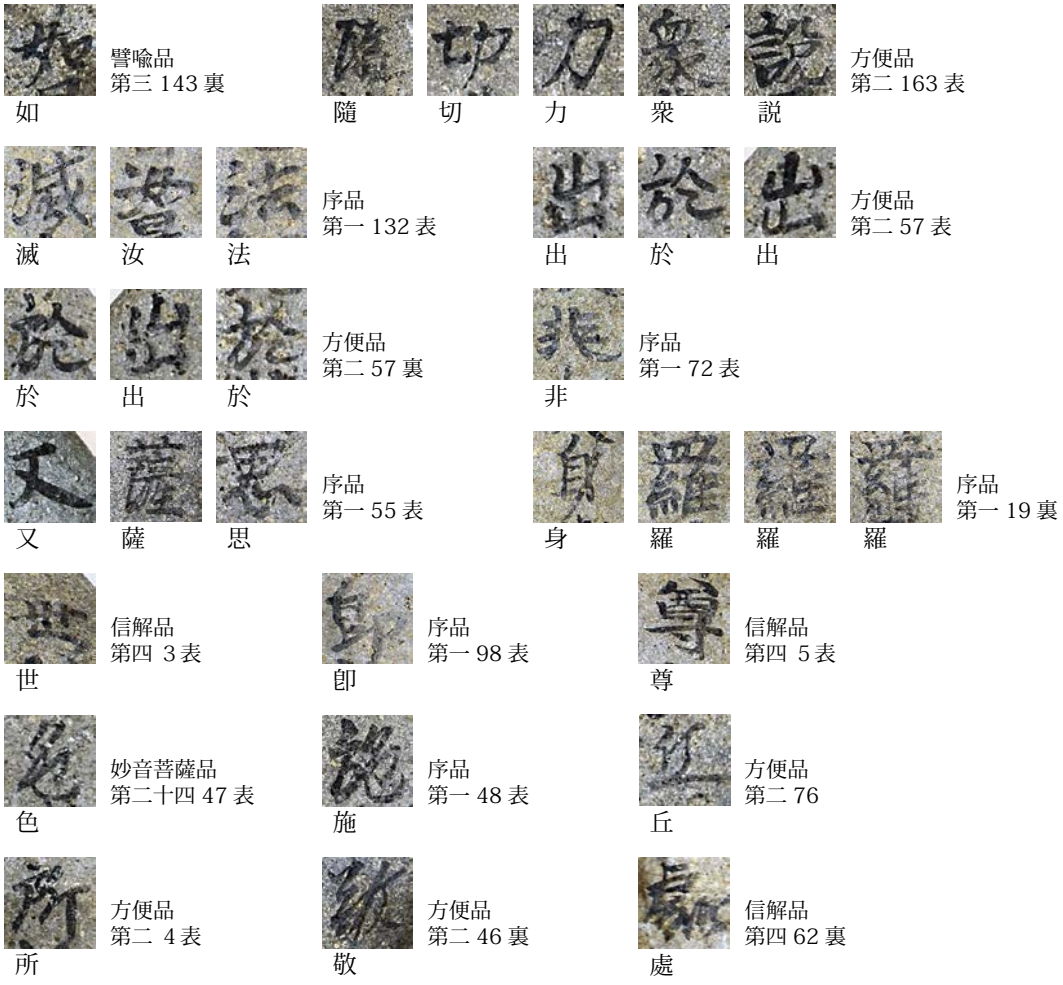
部首「氵」は３画目が「し」のような字形で先端が長く右上にのびる。事例としては、

　彼佛滅度後　懈怠者汝是　妙光法師者　今則我身　是（「序品第一」132 番石経 - 表面）

がある。

「於」の旁は、３画・４画が連続しており、乙に似た字形になっており、「出」は「山」２段重ねで書く。事例としては、

　知故出現於　世欲令衆生悟　佛知見故　出現



第 12 図　経文の特徴ある字形

　於世　欲令衆生　入佛知見道故　出現於世舍利弗（「方便品第二」57 番石経）
がある。
「非」の竪画２本が「八」の字状に両裾広がりになる。事例としては、
　人及非人　香華妓樂　常以供養　文殊師利　諸佛子等（「序品第一」72 番石経 - 表面）
がある。
「又」・「叉」の１画目が分かれて、「一」と「乂」を組み合わせた字形になる。「阝」は「薩」などで縦画の下端から右斜め上に長くはねる。また、「心」は２画目が垂直近い角度で下がり、横には短く、３画目に移る。３画目と４画目は繋がっている。事例としては、
　又見菩薩　勇猛精進　入於深山思　惟佛道（「序品第一」55 番石経 - 表面）
がある。
「身」の３画目の竪画部分が短くて、「自」に近い字形である。さらに、「羅」の部首が「皿」になっており、両端に横画が出ている。事例としては、
　大身迦樓羅王　大滿迦樓羅王　如意迦樓羅王（「序品第一」19 番石経 - 裏面）
がある。
「世」の「廿」の部分で、下の横画が省略されることがある。事例としては、
　世尊授舍利　弗阿耨多羅　三藐三菩提　記發希有心（「信解品第四」３番石経 - 表面）
がある。
「卽」の「卩」が低い位置に書かれ、事例としては、
　於六十小劫　説是經已卽於　梵魔 (「序品第一」98 番石経 - 表面）
がある。
「尊」の１・２画目が「八」の字状に開いている。これは、「説」の旁と同じである。事例としては、
　瞻仰尊顔　而白佛言　我（「信解品第四」５番石経 - 表面）
がある。
ｂ）一部が行書風になる文字
「色」の「巴」部分が行書風になっている事例としては、
　佛告華德菩薩善　男子其三昧名現　一切色身妙音菩　薩住是三昧中能　如是饒益無量　衆生（「妙音菩薩品第二十四」47 番石経 - 表面）
がある。
「施」の旁のみ行書風になる事例としては、
　種種因緣而求　佛道或有行　施金銀珊　瑚（「序品第一」48 番石経 - 表面）
がある。
「丘」・「所」が行書風になっている事例としては、
　若有比丘　實得阿羅漢若不（「方便品第二」76 番経石）
　衆生令離諸著　所以者何如來方　便知見波羅蜜　皆已具足（「方便品第二」４番石経 - 表面）
がある。
「敬」の草冠から「句」が行書になっている事例としては、
　長子　唯垂分別説　是會無量衆能敬　信此法佛已曾世世教　化如是等皆一心合掌（「方便品第二」46 番石経 - 裏面）

がある。

「處」の「処」が行書になっている事例としては、

　諸物出入　皆使令知　猶處門外　止宿草庵　（「信解品第四」62 番石経 - 裏面）

がある。

表裏面で筆跡の異なる石経と字形（第 13 図）

石経一個体内において、表・裏面で筆跡が異なる場合がある。以下、表記は下線でA筆跡　B筆跡として、記す。ゴシック部分が特徴的字形のある文字を示す。

①「譬喩品第三」214 番石経

　質直柔軟　常愍一切　恭敬諸佛　如是之人　乃可爲説（表面）

　復有佛子　於大衆中　以清淨心　種種因緣　譬論言辭　説法無礙（裏面　以下、同じ）

②「法師品第十」52 番石経

　欲捨諸懈怠　應當聽此經

　是經難得聞　信受者亦難

③「常不輕菩薩品第二十」25 番経石

　説是經故　得無量福

　漸具功德　疾成佛道

④「如來神力品第二十一」13 番石経

　解説書寫　如説修行　若經卷所

　住之處若於　園中若於林　中若於樹下

⑤「如來神力品第二十一」19 番石経

　以佛滅度後　能持是經故

　諸佛皆歡喜　現無量神力

⑥「如來神力品第二十一」20 番石経

　囑累是經故　讃美受持者　於無量劫中　猶故不能盡

　是人之功德　無邊無有窮　如十方虚空　不可得邊際

⑦「觀世音菩薩普門品第二十五」31 番石経

　觀世音菩薩　卽解頸衆寶　珠瓔珞價直

　百千兩金　而以與之作是　言仁者

⑧「妙莊嚴王本事品第二十七」12 番石経

　願母見聽　於彼佛所出　家修道爾時　二子欲重宣

　其以偈　白母　願母放我等　出家作沙門

⑨「妙莊嚴王本事品第二十七」15 番石経

　白父母言善哉父　母願時往詣雲雷　音宿王華智佛所　親覲供養所以者何

　佛難得値如優　曇波羅華又如　一眼之龜値浮木　孔而我等宿福　深厚

⑩「觀世音菩薩普門品第二十五」47 番石経

　衆生被困厄　無量苦逼身　觀音妙智力　能救世間苦

　具足神通力　廣修智方便　十方諸國土　無刹不現身

このほかにも、「藥王菩薩本事品第二十三」59 番石経、「妙音菩薩品第二十四」32 番石経などがある。こ

れらの諸例は全体数からすれば少ないが、石の表面と裏面で筆跡の異なるものがあることは明らかである。

ところで、これらの表裏面で筆跡の異なる石経について、前述の特徴ある字形が各筆跡で確認できるかみてみる。本経塚の筆跡ではＡ筆跡が圧倒的に多く、上述の特徴的な字形もＡ筆跡の書き手によると判断される。この各種の特徴的字形がＢ筆跡にも確認できれば、筆跡が異なっているが、筆者は同じことが証明される。

「力」はＡ筆跡では③・⑥、Ｂ筆跡では⑤・⑥で、ともに２画目のノが１画目の横画の左寄りに書かれている。

「女」はＡ筆跡では⑥、Ｂ筆跡では④・⑦・⑨で、横画の上に１・２画目が長くのびている。

「氵」はＡ筆跡では③・⑧、Ｂ筆跡では⑨、２画目から３画目が「し」の字状になっている。

「所」はＡ筆跡では⑨、Ｂ筆跡では④・⑧で、全体に行書風になっている。

「於」はＡ筆跡では④、Ｂ筆跡では⑥・⑧で、旁の「𠂉」が「乙」字状になっている。

「阝」はＡ筆跡では⑥、Ｂ筆跡では⑦で、竪画の下端から右上に「レ」の字状にのびている。

「身」は⑩の表裏面ともに、右側の竪画は長くのびずに、「自」の字に似た字形で、右下が少し出るのみになっている。

このように、１個の石経のなかで、特徴的な字形が筆跡の異なった表裏面でも、ともにみられることが確認できた。特に⑥では表裏面で異なった筆跡であるが、同一石経で「力」の字形が共通しており、同一人物の筆と判断することが至当であろう。

第 13 図　表裏面で筆跡の異なる石経と字形

Ｂ筆跡の特徴的な字形（第 14 図）

次に、Ｂ筆跡で書かれた石経の特徴的な字形について代表例を挙げてみてみる。

「力」・「阝」・「羅」の「皿」

劫賓那憍梵　波提離婆多　畢陵伽婆蹉　薄拘羅摩

訶拘絺羅　難陀孫陀羅難　羅陀富樓那彌　多羅尼子須菩（「序品第一」３番石経）

「力」は「ノ」が横画の左に寄っており、「羅」の部首は下辺の横画が両端に出ており、「皿」の字形になっている。

「氵」・「出」・「心」・「於」・「處」・「説」・「所」

妙法蓮華經如來神力品第二十一　爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩從地涌出

者皆於佛前一心合掌瞻仰尊顏而白佛言　世尊我等於佛滅後世尊分身所在國土滅

度之處當廣説此經所以者何我等亦自欲（「如來神力品第二十一」１番石経 - 表面）

「氵」は３画目が「し」の字状になっており、「出」は「山」を２段に書いている。「心」の２画目は垂下気味に書いており、「於」の旁の「冫」は「乙」字状になっている。「處」の「処」は運筆早く、行書になっており、上半部の楷書気味の字形とは対照的である。「説」の旁の１・２画目は八の字状に開く字形である。「所」は左側から右側に移る部分も行書気味である。

「尊」・「叉」・「阿」・「羅」・「衆」

得是真淨大法受持讀誦解説書寫而供養　之爾時世尊文殊師利等無量百千萬億

舊住娑婆世界菩薩摩訶薩及諸比丘比丘　尼優婆塞優婆夷天龍夜叉乾闥婆阿脩羅

迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等一切衆　前（「如來神力品第二十一」１番石経 - 裏面）

「尊」の１・２画は八の字状に開く字形で、「叉」の１画目の横画から斜め下に移る際、連続せずに新たに入筆している。「衆」の下半分は「豕」のようになっている。

「非」

男聲女聲　童子聲童女聲　法聲非法聲苦　聲樂聲凡夫聲（「法師功徳品第十九」11 番石経 - 裏面）

「非」の右側竪画が裾広がりに書かれている。

「於」・「説」

誰能於此　娑婆國土廣　説妙法華經（「見寶塔品第十一」55 番石経 - 表面）

「阝」・「衆」・「敬」

善逝世間解　無上士調御　丈夫天人師

佛世尊爲無量　無邊菩薩大衆　恭敬圍繞（「妙音菩薩品第二十四」５番石経）

「薩」の「阝」は、竪画の下端から右上に長く撥ねている。「衆」の下半分は「豕」のようになっており、「敬」の草冠と「句」の部分のみが行書気味に書かれている。

「衆」・「身」・「女」

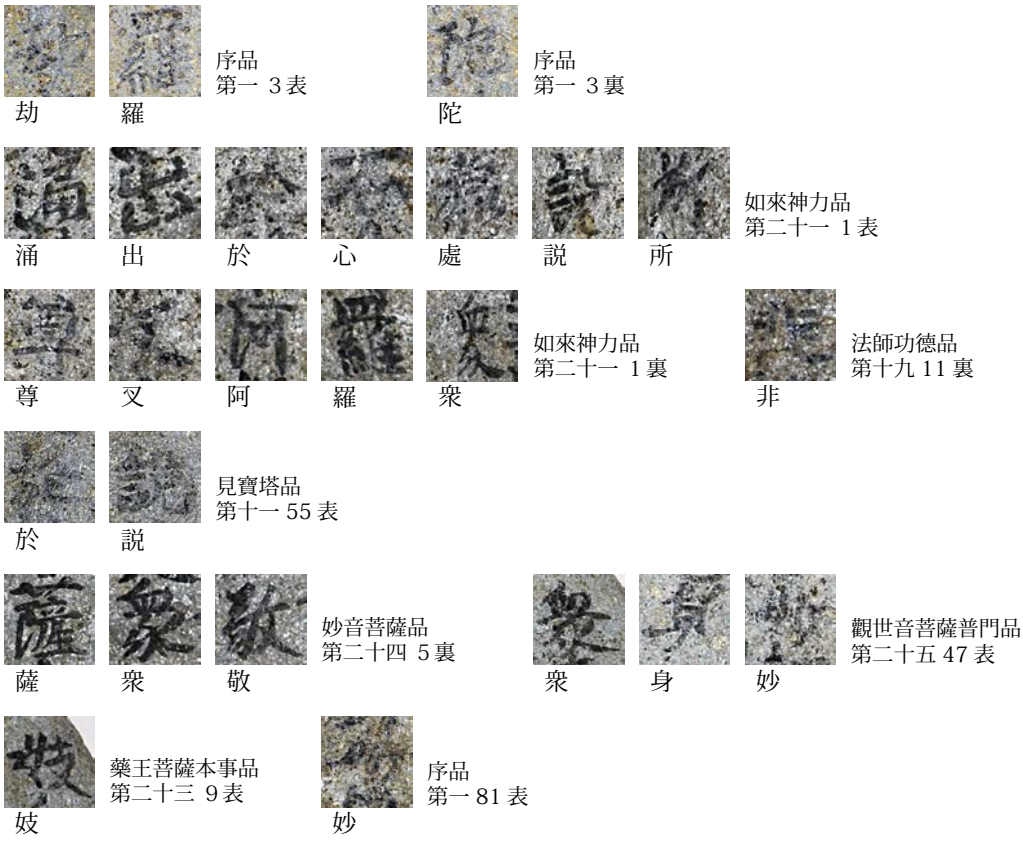
衆生被困厄　無量苦逼身　觀音妙智力　能救世間苦（「觀世音菩薩普門品第二十五」47 番石経 - 表面）

「身」の右側竪画は短くて、「妙」の女偏は１・２画目の竪画入筆部から横画の間隔が長くて、１・２画が横画上に長く突き出る。

「女」

妓樂歌歎於佛　以爲供養爾時　彼佛爲一切（「藥王菩薩本事品第二十三」９番石経 - 表面）

「妓」の女偏は、１画目がくの字状に強く折れ、左側に突出している。



第 14 図　Ｂ筆跡の特徴的な字形

「女」

其義深遠其語巧妙純一　無雜具足清白梵行之　相爲求聲聞者説應四諦（「序品第一」81 番石経 - 表面）

「妙」の女偏は１・２画が横画の上に長く出ている。

これらのＢ筆跡における字形や一部行書気味にする点は、Ａ筆跡とも類似しており、筆跡の違いを超えた字形の共通性を示している。この事実は、１個の石経の表裏面で、特徴的な字形が共通していることと通じており、同じ人物が異なった筆跡で写経したと推測することができる。

（Ｃ）書写の連続（第 122・123 図）

『法華経』「授記品第六」末尾の 38 番石経は、

吾今當説　汝等善聽　佛告諸比丘（表面）

乃往過去　無量無邊不　可思議　（裏面）

と記されている。このうち､表面に書かれた「吾今當説　汝等善聽」までは「授記品第六」の末尾である。だが、「佛告諸比丘」と裏面は「化城喩品第七」の冒頭部分である。異なる品を同じ石に連続して書写している。両品は同じ巻 (巻三) であることから、二つの品を連続写経したと推定される。なお、別な人物が異なった時・場所で書写した場合は、このような出来事は起こりがたい。少なくとも同一巻内は同一人物が書写していたことをうかがわせる貴重な資料である。ちなみに、「化城喩品第七」の冒頭の品名は、別の石経 (１番石経) に書写されている。二つの品を連続書写してから、品名を書いて挿入したことが想定される。巻品書写の連続から写経の実態を探ることが可能になるであろう。

（D）『法華経』本文以外の墨書文字（第 290・301・315・377 図）

石経を全点確認したところ、『法華経』本文以外の墨書文字が確認された。以下、列挙する。

・「十月廿日
　南無阿弥陀佛
　六月八日
　□南□□女大」（「法師功徳品第十九」35 番石経）

・「南無阿弥陀佛
　南無地蔵菩薩」（「法師功徳品第十九」99 番石経）

・「南無薬師如來
　南無阿弥陀佛
　決定無有疑※　　※この部分は如來神力品第二十一末の経文
　南□釋迦牟尼佛
　南無多寶佛」（「如來神力品第二十一」29 番石経）

・「南無阿弥陀佛」（B - 上層出土１番石経）

・「南無阿弥陀佛」（B - 下層出土２番石経）

・「南無阿弥陀佛」（Bベルト - 下層出土３番石経）

・「南無阿弥陀佛」（C - 下層出土４番石経）

・「南無阿弥陀佛」（C - 下層出土５番石経）

・「南無阿弥陀佛」（D - 上層出土６番石経）

・「三界萬霊有縁無縁
　乃至法界平等利益
　安山了□信士
　鏡円妙照信女
　爲菩提也」（B - 上層出土７番石経 - 表面）」

・「南無薬師如來
　南無釋迦牟尼佛
　南無阿弥陀佛」（B - 上層出土７番石経 - 裏面）

・「南無阿弥陀佛
　南無妙法蓮華經」（B - 下層出土８番石経）

上述したように、『法華経』本文以外の墨書文字としては「南無阿弥陀佛」が多い。このうち、最後に提示したB - 上層出土７番石経が本経塚の性格を考えていくうえで多々示唆的である。

７番石経の表面「三界萬霊有縁無縁　乃至法界平等利益」の語は、この世の全ての世界 (欲界・色界・無色界の三界) の精霊を供養する文言 (『諸回向清規式』等から派生した回向文の一種) と考えられる。そして回向次第のとおり、「安山了□信士」「鏡円妙照信女」の菩提を祈願した後、石経の裏面に薬師如来 (東方瑠璃光浄土の主尊)、釈迦牟尼仏 (『法華経』の説教主)、阿弥陀如来 (西方極楽浄土の主尊) の尊名を記している。実際の儀礼時は、供養願文を唱えたのち、祈願本尊の尊名を誦唱する。なお、阿弥陀如来と念仏供養・『法華経』書写の関係や、薬師如来・地蔵菩薩と『法華経』書写の関係については、「第４章」にて改めて検討したい。

（２）古銭（第 15 図、図版三）

封土の東側裾において、軟らかい表土の下で硬くしまった黒褐色土上面で寛永通寶１点が出土した。出土層位は、経塚の封土表面にあたり、塚構築後に表土が堆積する前に、この位置にあったものと推測される。

寛永通寶は、外径 2.3㎝、内側に 0.6㎝角の孔があいている。摩耗により文字はやや不鮮明になっているが、文字の判読は容易である。裏面に文様や文字はない。錆びて緑青が吹き出ている。

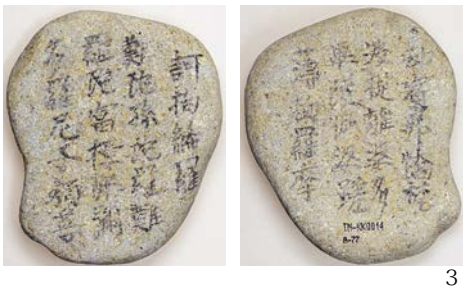
第 15 図　古銭

妙法蓮華經序品
第一
如是我聞一時佛住
王舍城耆闍崛山
中
與大比丘衆萬二
千人俱皆是阿羅
漢諸漏已盡無復
煩惱逮得己利盡

1

諸有結心得自在
其名曰阿若憍陳
如摩訶迦葉優
樓頻螺迦葉迦耶迦葉
那提迦葉舍利弗
大目揵連摩訶
迦旃延阿㝹樓馱

2



劫賓那憍梵
波提離婆多
畢陵伽婆蹉
薄拘羅摩
訶拘絺羅
難陀孫陀羅難
羅[注1]陀富樓那彌
多羅尼子須菩

注1　加筆

3

提阿難羅睺
羅如是衆所
知識大阿羅
漢等復有學
無學二千人
摩訶波闍
波提比丘尼與
眷屬六千人俱
羅睺羅母耶輸
陀羅比丘尼

4

亦與眷屬
俱菩薩摩
訶薩八萬人
皆於阿耨
多羅
三藐三菩[注1]
提不退轉皆
得陀羅尼樂
說辯才轉

注1　異字形

5

第16図　巻第一　序品第一（1）

不退轉法輪供
養無量百千諸
佛於諸佛所植
衆德本常爲諸佛
之所稱歎以慈修
身善入佛慧通達
大智到於彼岸
名稱普聞無

6

量世界能度無
數百千衆生其名
曰文殊師利菩薩
觀世音菩薩
得大勢菩薩
常精進菩薩

7

不休息菩薩
寶掌菩薩
藥王菩薩
勇施菩薩
寶月菩薩
月光菩薩
滿月菩薩
大力菩薩
無量力菩薩
越三界菩薩

8

毗陀婆羅菩薩
彌勒菩薩
寶積菩薩
導師□[注1]菩薩
如是等菩薩
摩訶薩

注1　春日版なし

9

八萬人俱爾
時釋提桓因
與其眷屬
二萬天子俱
復有名月天子
普光[注1]天子

注1　誤字 大経では香

10

第 17 図　巻第一　序品第一（２）

四大天王與
其眷屬萬天
子俱自在天子
大自在
天子與其眷屬
三萬天子俱娑
婆世界主

11

梵天王尸棄
大梵光明大
梵等
與其
眷屬

12

萬二千天子俱
有八龍王難陀
龍王跋難陀
龍王
娑伽羅
龍王和脩
吉龍王德
叉迦龍王

13

阿那
婆達多
龍王摩那
斯龍[注1]優鉢羅
龍王
等各
與若干百
千眷屬俱
有四緊
那羅
王

14

注1　抜字　大経では王あり

法緊那羅王
妙法緊那羅王
大法緊那羅王
持法緊那
羅王
各與
若干百千
眷屬俱右[注1]
四乾闥婆王

15

注1　誤字　大経では有

樂音乾闥婆
王美乾闥婆王
美音乾闥婆
王
各與若干
百千眷屬俱
有四阿脩羅王

16

第18図　巻第一　序品第一（3）

婆稚阿修
羅王佉羅騫
馱阿修羅王

17

毗摩質多羅阿
脩羅王羅睺阿
脩羅王

18

各與若干
百千眷屬俱
有四迦樓羅王
大威德迦樓羅
王
大身迦樓羅王
大滿迦樓羅王
如意迦樓羅王

19

各與若干百
千眷屬俱
韋提希子
阿闍世王
與若干百千
眷屬俱

20

各禮佛足退坐
一面爾時世尊四衆
圍遶供養恭敬
讚歎爲諸菩
薩説大
名無量義教

注1　抜字　大経では尊重あり

21

菩薩法佛
所護念
佛説此經
已結跏趺
坐入於無
量義處

22

三昧身心
不動是時
天雨
曼陀羅華

23

第 19 図　巻第一　序品第一（4）

而散佛上及
諸大衆普佛
世界六種震
動爾時會中
比丘比丘尼
優婆塞優婆
夷天龍夜叉
乾闥婆

24

阿修羅迦樓[注1]
緊那羅摩睺羅迦[注2]
人非人及諸小王
轉輪聖王是
諸大衆得未曾有
歡喜合掌一心
觀佛

注1　抜字　大経では羅あり
注2　誤字　大経では伽

25

爾時佛放
眉間白毫[注1]
照東方萬
八千世界

注1　抜字　大経では相光あり

26

靡不周徧下至
阿鼻地獄上至
阿迦尼吒天
於此
世界盡見
彼土六趣衆生
又見彼土現在
諸佛及聞

27

諸佛所説經法
并見彼諸比丘
比丘尼優婆塞
優婆夷諸修行
得道者復見諸
菩薩摩訶薩種
種因緣[注1]種種信
解種種相貌行

注1　誤字　大経では縁

28

第20図　巻第一　序品第一（5）

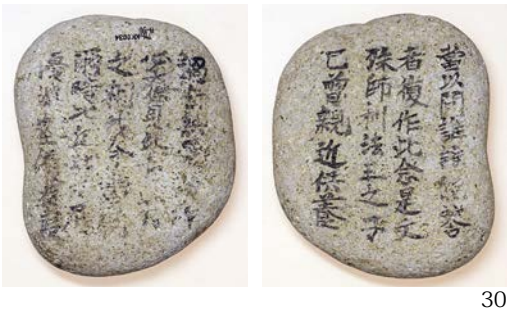
菩薩道復見諸佛般
涅槃者復見諸佛般
涅槃後以佛舍利起
七寶塔爾時
彌勒菩
薩
作是念今各[注1]世
尊現神變相以何
因緣而有此瑞今佛
世尊入于三昧是不可
思議現希有事

注1　誤字　大経では者

29

當以問誰誰能答
者復作此念是文
殊師利法王之子
已曾親近供養
過去無量諸成[注1]
必應見此希有
之相我今當問
爾時比丘比丘尼
優婆塞優婆夷

注1　誤字　大経では佛



30

及諸天龍鬼
神等
咸作此
念是佛光
明神通之相
今當問誰
爾[注1]彌
勒菩薩

注1　抜字　大経では時あり

31

32

欲自決疑又
觀四衆比丘
比丘尼優婆
塞
優婆夷及諸
天龍鬼神等
衆會之心

33

而問文殊師利言
以何因緣而有此瑞
神通之相放大
光明
照于東
方萬八千土悉
見彼佛國界
莊嚴於
是

34

第 21 図　巻第一　序品第一（６）

35

彌勒菩
薩欲重宣
此義以偈問曰
文殊師利
導師何故

36

眉間白毫
大光普照
雨曼陀羅
曼殊沙華
梅檀香風
悦可
衆心

注1　異字形

37

以是因
緣地皆
嚴淨而
此世界
六種
震動

38

時四部衆
咸皆歡喜
身意快然
得未曾有

40

受報好醜
於此悉見

39

眉間光明
照于東方萬八千
土皆如金色
從阿鼻獄
上至
有頂

41

又覩諸佛
聖主師子
演説經典
微妙第一
其聲清淨出
柔輭音教諸
菩薩無數億

注1　異体字 大経では軟

第22図　巻第一　序品第一（7）

萬梵音深妙令
人樂聞各於
世界
講説正法

42

種種

43

因緣[注1]
以無量諭
照明佛法
開悟
衆生

注1　誤字 大経では縁

44

若人遭苦
厭老病死爲
説涅槃盡
諸苦際若
人有福曾供
養佛志

45

求勝法爲説
縁覺若人[注1]佛子
修種種行
求無上慧
爲説淨道

注1　春日版では有

46

文殊師利
我住於此
見聞若斯
及千億事
如是衆多
今當略説
我見彼土
恒沙菩薩

47

種種因縁而求
佛道或有行
施金銀珊
瑚
眞珠
摩尼硨[注1]
磲碼[注2]碯金剛
諸珍奴婢車乗

注1　誤字 大経では車
注2　誤字 大経では馬腦

48

第 23 図　巻第一　序品第一（８）

寶飾輦輿
歡喜布施
迴向佛道
願得是
乘三界
第一

49

諸弗[注1]所
歎或有菩
薩駟馬寶
車
欄楯華蓋
軒飾布施
復見菩

注1　誤字　大経では佛

50

薩身肉手
足及妻子施
求無上道
又見菩薩

51

頭目身體
欣樂施與
求佛智慧

52

往詣
佛所
問無上
道

53

便捨樂王宮殿臣
妾剃除鬚髮而
被
法服或見菩薩
而作比丘獨處
閑靜樂誦經典

54

又見菩薩
勇猛精進
入於深山思
惟佛道
又見離欲
常處空閑

55

第 24 図　巻第一　序品第一（9）

深修禪定
得五神通
又見菩薩
安禪合掌

56

以千萬偈讚
諸法王復見
菩薩智深
志固

能問
諸佛聞
悉受持又
見佛子定
慧具足

57

以無量諭
爲衆講法
欣樂説法

58

化諸菩薩破魔
兵衆而擊法鼓
又見菩薩寂
然宴默

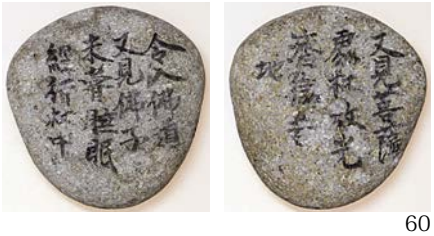
天龍
恭敬
不以爲喜

59

又見菩薩
處林放光
濟地獄苦
地[注1]

令入佛道
又見佛子
未嘗睡眠
經行林中

注1　加筆



60

勤求佛道
又見具戒
威儀無缺
淨如寶珠
以求佛
道

又見佛子
住忍辱力
增上慢人
惡罵捶打
皆悉能忍

61

第 25 図　巻第一　序品第一（10）

以求佛道
又見菩薩
離諸戲咲[注1]
及癡眷屬
親近
智者一心
除亂

注1　同音異義字 大経では笑

62

攝念山林
億千萬歲
以求佛道
或見菩薩
肴饍[注1]飲食
百種湯藥
施佛及僧

注1　異体字 大経では餚

63

名衣上
服價直
千萬或
無價衣
施佛
及
僧

64

千萬億
種

65

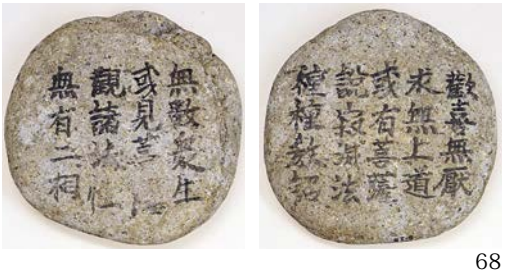
衆妙臥具
施佛及僧
清淨園林

66

流泉浴池
施佛及僧

67

歡喜無厭
求無上道
或有菩薩
説寂滅法
種種教詔
無數衆生
或見菩薩
觀諸法性
無有二相



68

第 26 図　巻第一　序品第一（11）

猶如虛空又見佛子
心無所著以此妙慧
求無上道

文殊師利
又有菩薩
佛滅度後

69

供養舍利
又見佛子
造諸塔廟

無數恒沙
嚴飾國界
寶塔高妙
五千由旬

70

縱廣正等
二千由旬
一一塔廟
各千幢旛

珠交露
幔寶鈴
和鳴諸
天龍神

71

人及非人
香華妓樂
常以供養
文殊師利
諸佛子等

爲供舍利
嚴飾塔廟
國界自然
殊特妙好

72

如天樹王
其華開敷

佛放
一光我及衆
會見此國界

73

種種殊妙
諸佛神力
智慧希有
放一淨光

照[注1]無量國
我等見此
得未會有
佛子文殊

74

注1　裏面　文字改行不明

第 27 図　巻第一　序品第一（12）

願決衆疑四衆欣
仰瞻仁及我
世尊何故
放斯光明

75

佛子時咨決疑
令喜何所饒益
演斯光明

佛坐道場所得妙法
爲欲說此爲當授
記示諸佛土衆寶
嚴淨及見諸佛

76

此非小緣文殊
當知四衆龍
神

瞻察仁者
爲說何等

77

爾時文殊師利語彌
勒菩薩摩訶薩及
諸大士善男子等
如我惟忖今佛世尊
欲說大法雨大法雨

吹大法螺擊大法鼓
演大法義諸善
男子我於過去
諸佛曾見此瑞放
斯光已卽說大法

78

是故當知今佛現光
亦復如是欲令衆生
咸得聞知一切世間
難信之法故現
斯瑞

諸善男子
如過去無量無
邊不可思議阿
僧祇劫爾時有佛
日月燈明[注1]如來

79

注1　抜字 大経では號あり

應供正徧知明行
足善逝世間解
無上士調御
丈夫天人師
佛世尊

演說正法初善
中善後
善

80

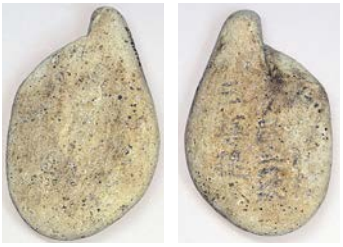
第 28 図　巻第一　序品第一（13）

其義深遠其語巧妙純一
無雜具足清白梵行之
相爲求聲聞者説應四諦
法度生老病死究竟
涅槃爲求辟支佛者
説應十二因緣法爲
諸菩薩説
應六波羅蜜

82

81

令得阿耨
多羅三藐
三菩提
成一切種智
次復有佛
亦名日月燈明


83

次復有佛亦名
日月燈明如是
二萬佛皆同
一字
號日月燈明
又同一姓姓頗
羅憧[注1]

注1　異字形

84

彌勒當知初佛
後佛皆同一字
名日月燈明
十號具足
所可説法初中後
善其最後佛未
出家時有八王子

85

一名有意二名
善意三名無量
意四名寶意五
名增意六名
除疑意
七名嚮意
八名法意

86

第 29 図　巻第一　序品第一（14）

是八王子威德自在
各領四天下是諸王子
聞父出家得阿耨多
羅三藐三菩提悉捨
王位亦隨出家發
大乘意常脩
梵行皆爲法師已於
千萬佛所殖諸善
本是時日月燈明佛
說大乘經名無
量義教菩薩

87

法佛所護念說
是經已卽於大衆中
結加趺坐
入於無量義處
三昧身心不動

88

摩訶曼
陀羅華
曼殊沙
華摩訶
曼殊沙華

89

而散佛上及
諸大衆普佛
世界六種震
動爾時會中
比丘比丘尼
優婆塞優婆
夷天龍夜叉
乾闥婆

90

阿修羅迦樓
羅緊那羅摩
睺羅迦[注1]
人非人及諸小
王轉輪聖王

注1　誤字　大経では伽

91

等是諸
大衆得未
曾有歡喜
合掌一心
觀佛
爾時如來
放眉間

92

第 30 図　巻第一　序品第一（15）

白毫相光
照東方萬八千
佛土靡不周遍
如今所
見是諸佛土彌
勒當知爾時
會中有二十億

93

菩薩樂欲
聽法是諸菩
薩見此光明
普照佛土得
未曾有欲知
此光所爲因
緣

94

有八百弟子是
時日月燈明佛從
三昧起因妙光菩
薩説大乘經名
妙法蓮華教
菩薩法佛所護
念六十小劫
不起于座

95

時會聽者
亦坐二處六
十小劫身
心不動聽

96

謂如食頃
是時衆中
無有一人
若身若心
而生懈惓
日月燈明佛

97

於六十小劫
説是經已即於
梵魔
沙門
婆羅門及天人
阿修羅衆中

98

第 31 図　巻第一　序品第一（16）

而宣此言如來
於今日中夜當
入無餘涅
槃
時有菩薩名曰
德藏日月燈明
佛卽授其記

99

告諸比丘是德藏
菩薩次當作佛號曰
淨心[注1]多陀阿伽度阿
羅訶三藐三佛陀
佛授記已便於
中夜入無餘
涅槃佛滅度
後妙光菩薩持
妙法蓮華經

注1　誤字　大経では身

100

滿八十小劫爲人演說
日月燈明佛八子皆師
妙光妙光敎化令其堅
固阿耨多羅三藐三
菩提是諸王子供
養無量百千萬億
佛已皆成佛道其最
後成佛者名曰燃燈八
百弟子中有一人號
曰求名貪著利養

101

雖復讀誦衆
經而不通利多
所忘失故號求
名是人亦
以種諸
善根因緣
故得值無量
百千萬億諸佛

102

供養恭敬
尊重讚歎
彌勒當知
爾時妙光菩薩

103

第 32 図　巻第一　序品第一（17）

豈異人乎我身
是也求名菩薩
汝身是也
今見此瑞與
本無異是故惟
忖今日

104

如來當說大
乘經名妙法蓮
華教菩薩
法佛所護
念
爾時文殊
師利於大
衆中欲重
宣此義而說
偈言

105

我念過去世
無量無數劫
有佛人中尊
號日月燈明
世尊演說法
度無量衆生
無數億菩薩
令入佛智慧

106

佛未出家時
所生八王子
見大聖出家
亦隨修梵
行時
佛說大乘
經名無量義

107

於諸大衆中
而爲廣分別
佛說此經已
即於法座上
加趺坐三昧
名無量義
處

108

天雨曼陀華
天鼓自然鳴
諸天龍鬼神
供養人中尊
一切諸佛土
即時大震動
佛放眉間光
現諸希有事

109

第 33 図　巻第一　序品第一（18）

110

此光照東方
萬八千佛土
示一切衆生
生死業報
處
有見諸佛土
以衆寶莊嚴

111

梨色
斯由佛光照
及見諸天人

112

乾闥緊那
羅各供養其
佛又見諸
如來
自然
成佛道身色
如金山踹嚴甚
微妙如淨琉璃中

113

聲聞衆無數
因佛光所照
悉見
彼大衆
或有諸比丘
在於山林中
精進持淨戒
猶如護明珠
百見諸菩薩
行施忍辱等
其數如
恒沙
斯由佛光照
又見諸菩薩
深入諸禪定
身心寂不動
以求無上道

114

115

注1　誤字　大経では又

第 34 図　巻第一　序品第一（19）

見日月燈明[注1]
佛現大神通力
其心皆歡喜
各各自相問
是事何因緣
天人所奉尊
適從三昧起

注1　加筆　春日版なし

116

讃妙光
菩薩汝
爲世間眼
一切所
歸信

117

能奉持法藏
如我所説法
唯汝能證知
世尊既讃歎
令妙光歡喜
説是法華經
滿六十小劫

118

不起於此座
所説上妙法
是妙光法師
悉皆能受持
佛説是法華

119

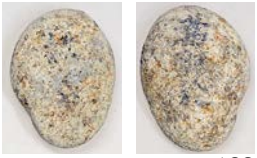
令衆歡
喜已尋
即於是日
告於
天人衆諸
法實相義
已爲汝等
説

120

我今於中夜
當入於涅槃
汝一心精進

121

當離於
放逸


122

第 35 図　巻第一　序品第一（20）

諸佛甚難値
億劫時
一遇

123

世尊諸子
等聞佛
入涅槃

各各懷
悲惱佛
滅一何速

124

聖主法之王安慰
無量衆我若
滅度時[注1]勿憂怖

是德藏菩
薩於無漏實
相心已得通達

125

注1　抜字　大経では汝等あり

其次當作佛
號曰
爲淨身

126

亦度無量衆佛此夜
滅度如薪盡火滅分布
諸舍利而起無量
塔比丘比丘尼

其數如恒沙

127

倍復加精進以求無上道
是妙光法師奉持佛法
藏八十小劫中廣
宣法華經

是諸八王子
妙光所開化堅固
無上道當見無
數佛

128

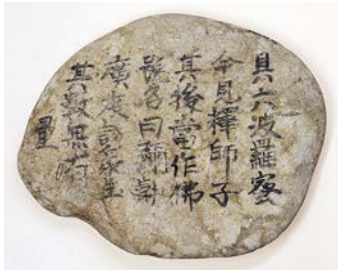
供養諸佛已
隨順行大道相繼
得成佛轉次而授記
最後天中天號曰燃燈
佛諸仙之導師

129

求名利無厭
多遊族姓家
棄捨所習誦
廢忘不通利

130

第 36 図　巻第一　序品第一（21）



131

以是因緣故
號之爲求名
亦行衆善業
得見無數佛
供養於諸佛
□[注1]隨順
行大道

具六波羅蜜
今見釋師子
其後當作佛
號名曰彌勒
廣度諸衆生
其數無有
量

注1　加筆

132

彼佛滅度後
懈怠者汝是
妙光法師者
今則我身
是

我見
燈明佛
本
光瑞如此

133

以是知今佛
欲說法華經
今相如本瑞
是諸佛方便
今佛放光明

助發
實[相]
義
諸人今[當]知
合掌一心待

134

佛當雨法雨
充足求道者
諸求三乘人

135

若有疑悔者
佛當爲除斷
令盡無有餘

第 37 図　巻第一　序品第一（22）

妙法蓮華經方便品
第二
爾時世尊從三昧安
詳而起告舍利弗
諸佛智[注1]甚深無量
其智[注2]門
難解難入一切聲
聞辟支佛所不能
知所以者何佛曾
親近百千萬億

注1　抜字　大経では慧あり
注2　抜字　大経では慧あり

1

無數諸佛盡行
諸佛無[注1]法勇猛精
進名稱普聞
成就甚深未
曾有法隨宜所
說意趣難解

注1　抜字　大経では量道あり

2

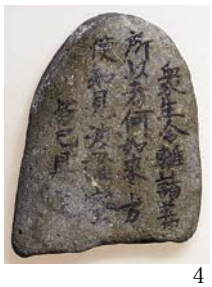
舍利弗吾
從成佛已
來種種因
緣[注1]種種
譬喻廣
演言教無數
方便引
導

注1　誤字　大経では縁

3

衆生令離諸著
所以者何如來方
便知見波羅蜜
皆已具足[注1]
廣大深
遠無量
無礙力

注1　抜字　大経では舍利弗如來知見あり


4

無所畏禪
定解脫三
昧深入無
際成
就一切未
曾有
法

5

6

邊未曾
有法佛悉
成就止
舍利弗
不須復說
所以者
何

7

第38図　巻第一　方便品第二（1）

佛所成就第一希有
難解之法唯佛
與佛乃能
究盡
諸法實相
所謂諸法如是
相如是性如是體

8

如是力如是
作如是因如
是緣如是
果
如是報如是
本末究竟
等爾時

9

世尊欲重宣
此義而説偈
言
世雄不可量
諸天及世人
一切衆生類
無能知佛者

10

佛力無所畏
解脱諸三昧
及佛諸餘法
無能測量者
本從無數佛
具足行諸道
甚深微妙法
難見難可了

11

如是大果報
種種性相義
我及十方佛
乃能知是事

12

是法不可示
言辭相寂
滅
諸餘衆
生類無有
能得解

13

一切漏已盡
住是最後身
如是諸人等
其力
所不堪

14

正使滿十方
皆如舍利弗

15

第 39 図　巻第一　方便品第二（２）

16

亦滿
十方刹

17

亦復不能知
辟支佛
利智

18

無漏最後身
亦滿十方界
其數如竹林
斯等共一心
於億無量劫
欲思佛實智
莫能知少分

19

了達諸義趣
又能善說法
如稻麻竹葦
充滿十方刹
一心以妙智
於恒河沙劫
咸皆共思量

20

不能知佛智
不退諸菩
薩
其數如恒沙
一心共思求
亦復不
能知

21

又告舍利弗
無漏不思議
甚深微妙法
我今已具得
唯我知是相
十方佛亦然
舍利弗當知
諸佛語無異
於佛所說法
當生大信力
世尊法久後
要當說眞實

22

告諸聲聞衆
及求緣覺乘
我令脫苦縛
逮得涅槃者
佛以方便力
示以三乘教
衆生處處著
引之令得出

第 40 図　巻第一　方便品第二（3）

23

爾時大衆
中有諸聲聞
漏盡阿羅漢阿若
憍陳如等千二百人
及發聲聞辟支佛心
比丘比丘尼優
婆塞優婆夷
各作是念今
者世尊何故
慇懃稱
歎方便而作是
言佛所得法
甚深難解
有所言說
意趣難知一切
聲聞辟支佛

24

所不能及佛
說一解脫義
我等亦得此法到
於涅槃而今不
知是義所趣爾
時舍利弗知四衆
心疑自亦未了而白
佛言世尊何因何
緣慇懃稱
歎諸佛第一方便
甚深微妙難解之
法我自昔來
未曾從佛聞
如是說今者
四衆咸皆有疑

25

唯願世尊
敷演斯事世尊
何故慇懃稱歎
甚深微妙難
解之法爾時舍
利弗欲重宣
此義
而說偈言

26

慧日大聖
尊久乃說是法
自說得如是
力無畏三昧
禪定解脫等
不可思議法
道場所得法
無能發問者

27

28

第 41 図　巻第一　方便品第二（４）

諸天龍鬼神
及乾闥婆等
相視懷猶豫

29

願佛爲解說
於諸聲聞衆
佛說我第一

30

瞻仰兩足尊
是事爲云何

我今自於智
疑惑不能了
爲是究竟法
爲是所行道

佛口
所生子
合掌
瞻仰待

31

願出微妙音
時爲如實說
諸天龍神等

其數如恒沙
求佛諸菩薩
大數有八萬

32

又諸萬億國
轉輪聖王至
合掌以敬心
欲聞
具足道

33

爾時佛
告舍利弗
止止不須
復說

34

若說是
事一切世
間諸天
及人皆

35

當驚疑
舍利弗
重白

36

佛言世尊唯
願說之[注1]所以
者何

是會
無數百千萬
億阿僧祇

37

衆生
曾見
諸佛

38

注1　抜字　大経では唯願説之あり

第42図　巻第一　方便品第二（5）

諸根猛利
智慧明了
聞佛
所説則能
敬信爾
時

39

舍利[注1]欲重
宣此義
而説偈
言

注1　抜字　大経では弗あり

40

法王無上尊

41

唯説願
勿慮是會
無量衆有
能敬信者
佛復止舍利
弗若説
是事

42

一切世間
天人阿
修羅皆

43

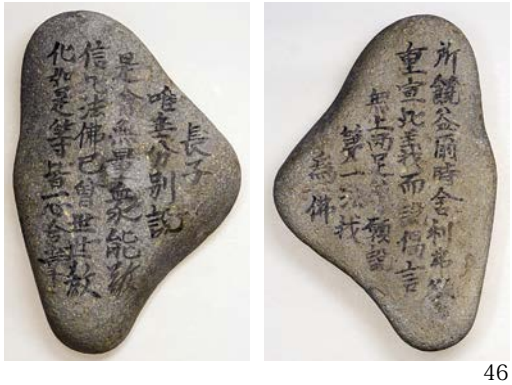
將墜於
大坑
爾時世尊
重説偈言

44

止止不須説我
法妙難思諸増
上慢者聞必不
敬信
爾時舍利弗
重白佛言世
尊唯願説之

45

所饒益爾時舍利弗欲
重宣此義而説偈言
無上兩足尊願説
第一法我
爲佛
長子
唯垂分別説
是會無量衆能敬
信此法佛已曾世世教
化如是等皆一心合掌



46

第 43 図　巻第一　方便品第二（６）

則生大歡喜
爾時世尊告舍利弗
汝已慇懃三請豈得
不說汝今諦聽善思

47

念之吾當爲
汝分別解說
說此語時
會中有

比丘比丘
尼優婆
塞優婆
夷五千人等

48

以不住世尊默
然而不制止
爾時
佛告
舍利弗

49

我今此衆無復
枝葉純有貞
實舍利弗如是
增上慢人

退亦佳矣
汝今善聽當爲
汝說舍利弗言
唯然世尊

50

願
樂欲聞佛告
舍利弗

51

如是妙法諸佛
如來時乃說之如
優曇鉢華
時一現耳舍
利弗汝等當
信佛之所

52

第 44 図　巻第一　方便品第二（7）

説言不虚妄
舍利弗諸佛
隨宜説法意
趣難解所以者

何我以
無數方便種種
因緣譬喻言辭
演説諸法

53

是法非思量分別
之所能解唯有

諸佛乃能知之

所以者何諸佛
世尊唯以

54

一大事因緣故出現
於世舍利弗云何名

諸佛世尊

唯以一大事
因緣

55

故出現於世
諸佛世尊欲令
衆生開佛

知見使得清
淨故出現於
世欲示衆生
佛

56

注1　知故出現於
注2　世欲令衆生悟
佛知見故
出現

於世
欲令衆生
入佛知見道故
出現於世舍利弗

注1　抜字　大経では之あり
注2　抜字　大経では見あり
（春日版なし）

57

是爲諸佛以
一大事因緣
故出現於世

佛告舍利弗

諸佛如來但
教化菩薩諸
有所作常爲一

58

第 45 図　巻第一　方便品第二（８）

事唯以佛之
知見示悟衆
生舍利弗
如來
但以一佛
乘故爲衆生
說法無有
餘乘

59

種種因緣譬
諭言辭而爲
衆生演說
諸法是法皆
爲一佛乘故是
諸衆生從諸佛

60

皆得一切種
智舍利弗

61

亦以無量
無數方便種
種因緣譬
諭言辭

62

而爲衆生演
說諸法是法
皆爲一佛乘
故是諸

63

衆生從佛
聞法究竟皆
得一切種
智

64

現在十方無
量百千萬億佛
土中諸佛世尊
多所饒益
安樂衆生
是諸佛

65

無數方便種種因緣
譬諭言辭而爲衆生
演說諸法是法皆爲一
佛乘故是諸衆生從
佛聞法究竟
舍利弗
是諸佛

67

66

第 46 図　巻第一　方便品第二（9）

但教化
菩薩
欲以
佛之知見

68

欲令衆生入佛之
知見故
舍利弗

69

我今亦復如
是知諸衆生
有種種欲
深心所著隨
其本性以種種
因緣譬諭言

70

辭方便力
故而爲説法
舍利弗
如此皆爲
得一佛乘一切
種智故

71

舍利弗十方
世界中尚無二乘
何況有三舍利弗

72

命濁如
是舍利弗
劫濁亂時
衆生垢
重慳貪
嫉妬

73

分別説三舍利弗
若我弟子自
謂阿羅漢辟
支佛者不
聞
不知諸佛
如來但教化
菩薩事此非
佛弟子非阿羅
漢非辟支佛又舍
利弗是諸比丘

74

第 47 図　巻第一　方便品第二（10）

阿耨多羅三藐三菩提
當知此輩皆是增上
慢人所以者何

75

若有比丘
實得阿羅漢若不

76

者是人難得
若遇餘佛

77

於此法中便得決
了舍利弗汝等
當一心信解受持
佛語諸佛如來

言無虛妄無
有餘乘唯一佛
乘爾時世尊
欲重宣此義
而說偈言

78

比丘比丘尼

79

有懷增上慢
優婆塞我慢

80

護惜其瑕疵
是小智已出

81

眾中
之糟糠
佛威德
故去

82

斯人
勘福德

83

不堪受是法
此眾無枝葉
唯有諸貞
實舍利弗
善聽

84

諸佛所得
法無量方
便力
而爲
眾生說

85

眾生心
所念
種種所
行道

86

若干諸欲性先世
善惡業佛悉知是已
以諸緣譬喻言
辭方便力令一切
歡喜

87

第 48 図　巻第一　方便品第二（11）

或説修多羅
伽陀及本事
本生未曾有
亦説於因緣
譬喩
并祇夜
優波提舍經
鈍根樂小法
貪著於生死
於諸

89

88

無量佛不行
深妙道衆苦
所惱亂
爲是説涅槃
我設是方便
令得入佛慧
未曾
説汝等

91

90

今正是其時
決定説大乘
我以[注1]
九部法

注1　誤字　大経では此

92

隨順
衆生
説

93

諸佛所
而行
深妙道

94

我記如是人
來世成佛道
以深心念佛
脩持淨
戒故

95

此等聞得佛
大喜充遍身
佛知彼心
行
故爲説
大乘聲
聞若
菩薩

96

乃至於一偈
皆成佛無疑

97

第 49 図　巻第一　方便品第二（12）

十方佛土
中唯有一乘法
無二亦無三
除佛方便説
但以假名字
引導於衆
生

98

説佛智慧故
諸佛出於世
唯此一事實
餘二則非眞

99

終不以小乘
濟度於衆
生

佛自住大乘
如其所得法
定慧力莊嚴

100

以此度衆生
自證無上道
大乘平等法

若以小乘化
乃至於一人
我則墮慳
貪

101

此事爲不可
若人信歸佛
如來不欺誑
亦無貪嫉意

斷諸法中惡
故佛於十方
而獨無所畏
我以相嚴身

102

光明照世間無量衆
所尊爲説實相印
舍利弗當知我
本立誓願

欲令一切衆
如我等無異如
我昔所願今
已滿足

注1　抜字 大経では者あり
注2　異字形

103

化一切衆生皆
令入佛道若
我遇
衆生

衆生
盡教以
佛道無智者錯
亂迷惑不受教

注1　加筆して重複

104

第50図　巻第一　方便品第二（13）

我知此
衆生未曾修
善本堅著於五欲
癡愛故生惱
以諸欲因緣
墜墮三惡
道

105

輪迴六
趣中備受
諸苦毒

106

受胎之微形
世世常
增長

107

薄德少福人

108

衆苦所逼迫

109

入邪見稠林
若有若無
等

110

依止此諸見
具足六十二
深著虛妄法
堅受不可捨

我慢自矜高
諂曲心不實

111

於千萬億劫
不聞佛名字
亦不聞正法
如是人難度

是故舍利弗
我爲設方便
說諸盡苦道
示之以涅槃

112

我雖說涅槃

113

是亦非眞
滅

114

諸法從本來
常自寂滅相
佛子
行道已

來世得作佛
我有方便力
開示三乘法[注1]

注1　書き加え

115

一切諸世尊
皆說一乘道
今此諸大衆
皆應除疑惑

諸佛
語無異
唯一無二乘

116

無量
滅度佛

117

第 51 図　巻第一　方便品第二（14）

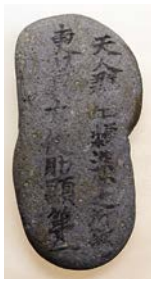
118

如是諸世尊
種種緣譬諭

119

無數方便力
演説諸法相
是諸世尊等
皆説一乘法

化無量衆
生令入於佛
道又諸大聖
主知一切世間


120

天人群生類深心之所欲
更以異方便助顯第一

121

義若有衆
生類値諸過
去佛若聞

法布施或
持戒忍辱
精進禪智等

122

如是諸衆生
皆已成佛道
諸佛滅度已

供養舍利者
起萬億種塔
金銀及頗梨

123

砗磲與碼碯[注1][注2]
玫瑰琉璃
珠清淨
廣嚴飾莊
校於諸塔

注1　誤字　大経では車
注2　誤字　大経では馬腦

126

乃至童子戲
聚沙爲佛塔
如是諸人等
皆已成佛道

125

積土成佛廟

124

若於曠野中

第52図　巻第一　方便品第二（15）

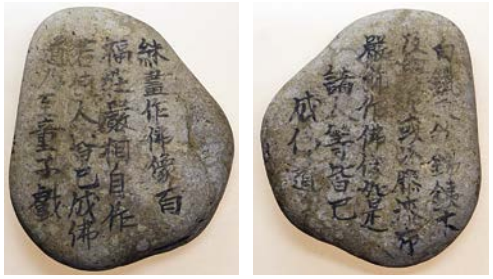
若人爲佛故
建立諸形像
刻彫成
衆相
皆已成佛道

127

或以
七寶成
鍮石赤
白銅

128

白鑞及鉛錫鐵木
及與泥或以膠[注1]漆布
嚴飾作佛像如是
諸人等皆已
成佛道



129

注1　誤字　大経では膠
注2　同音同義字　大経では彩

綵[注2]畫作佛像百
福莊嚴相自作
若使人皆已成佛
道乃至童子戲

若草木及筆
或以指爪甲
而畫作佛像

130

如是諸人等
漸漸積功德
具足
大悲心
皆已
成佛道

131

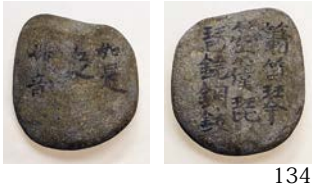
但化諸
菩薩
度脫
無量衆

132

若人於塔廟
寶像及畫像
以華香幡蓋
敬心而供養
若使人作樂
擊鼓吹角貝

133

簫笛琴
箜篌[注1]琵
琶鐃[注2]銅鈸
如是
衆
妙音



134

注1　異字形
注2　異字形

第 53 図　巻第一　方便品第二（16）

136

歌唄頌佛
德

135

或以
歡喜心

盡持
以供養

138

供養
於畫像

乃至
以一華

137

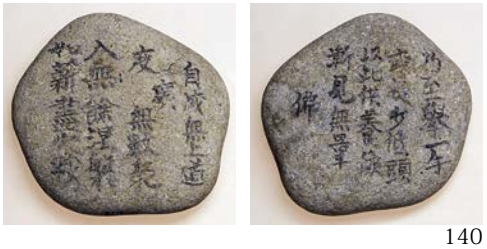
若人散
亂心

乃至一小音
皆已成佛道

139

漸見無數佛
或有人禮拜

或復
但合掌


140

自成無上道
度廣[注1]無數衆
入無餘涅槃
如薪盡火滅

乃至擧一手
或復小低頭
以此供養像
漸見無量
佛

注1　文字順逆　大経では廣度

141

一稱南無佛
皆已成佛道

於諸過
去佛

142

若有聞是
法皆已成佛道

未來諸世尊
其數無有量

143

亦方便
說法

144

入佛
無漏智

若有
聞法者

無一
不成佛

145

諸佛
本誓願

我所行佛道

146

第 54 図　巻第一　方便品第二（17）

普欲令
衆生亦
同得此
道未來
世諸佛
雖説
百千億
無數諸
法門其
實爲一乘

147

導師方便説
天人所供養

148

知第一
寂滅
以方便力故

149

雖示種種
道

150

其實
爲佛乘
知衆生諸行

151

精進力
及諸根
利鈍

152

以種種
因緣注1

153

貧窮無福慧
入生死險道相續苦
不斷深若注1於五欲
如犛牛愛
尾

154

注1　誤字　大経では縁

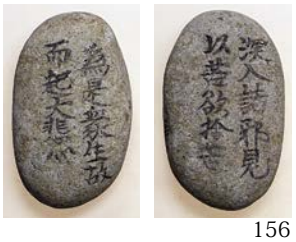
注1　誤字　大経では著

以貪愛自蔽
眉注1瞑無所
見
不求大勢佛
及與斷苦法

155

注1　誤字　大経では盲

深入諸邪見
以苦欲捨苦
爲是衆生故
而起大悲心



156

第 55 図　巻第一　方便品第二（18）

我始坐道場
觀樹亦經行
於三七日中

思惟如是事
我所得智慧
微妙最第一

157

衆生諸根鈍
著樂癡所盲

如斯之等類
云何而可度

158

爾時諸梵王
及諸天帝釋
護世四天王

注1

恭敬合掌
禮請我轉法
輪我卽自

159

注1　裏面に書かれている可能性あり

思若但
讚佛乘

注1

衆生沒在苦
不能信是法

160

注1　抜字　大経では惟あり

破法不信故
墜於三惡道

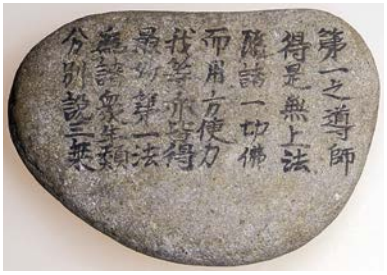
衆生沒在苦
不能信是法

161

尋念過去佛
所行方便力
我今所得道
亦應說三
乘

作是思惟
時十方佛皆
現梵音慰諭
我善哉
釋迦文

162


163

第一之導師
得是無上法
隨諸一切佛
而用方便力
我等亦皆得
最妙第一法
爲諸衆生類
分別說三乘

少智樂小法
不自信作佛
是故以方便
分別說諸果
雖復說三乘
但爲教菩薩
舍利弗當知
我聞聖師子

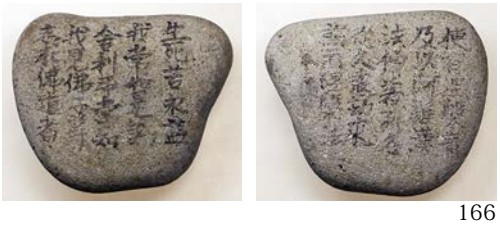
第56図　巻第一　方便品第二（19）

164

深淨微妙音
喜稱南無佛
復作如是念
我出濁惡世
如諸佛所說

165

我亦隨順行
思惟是事已
卽趣波羅柰
諸法寂滅相
不可以言宣
以方便力故
爲五比丘說
是名轉法輪



166

便有涅槃音
及以阿羅漢
法僧着[注1]別名
從久遠劫來
讚示涅槃法
生死苦永盡
我常如是說
舍利弗當知
我見佛子等
志求佛道者

注1　誤字　大経では差

167

無量千萬億
咸以恭敬心
皆來至佛所
曾從諸佛聞
方便所說法
我卽作是念

168

如來所以出
爲說佛慧故
今正是其時

169

舍利弗當知
鈍根小知[注1]人
著相憍慢者
不能信是法

注1　春日版では智

170

今我喜無畏
於諸菩薩中
正直捨方便
但說無上道

第 57 図　巻第一　方便品第二（20）

菩薩聞是法疑
網皆已除千二百羅
漢悉亦當作佛如
三世諸佛説法之儀
式我今亦如是
説無分別法

諸佛興出
世懸遠值遇難
正使出于世説是法
復難無量無數劫
聞是法亦難能聽
是法[注1]斯人亦復難

注1　抜字　大経では者あり

171

譬如優曇華[注1]
一切皆愛樂
天人所希有
時時乃一出

注1　同音同義字　大経では花

172

聞法
歡喜讚

173

乃至發
一言
則爲已
供養

174

是人甚希有
過於優曇華[注1]
汝等勿有疑
我爲諸法王
普告諸大衆
但以一乘道
教化諸菩薩
無聲聞弟子

注1　同音同義字　大経では花

175

汝等舍利弗
聲聞及菩薩
當知是妙法
諸佛之祕要
以五濁惡世
但樂著諸欲
如是等衆生
終不求佛道

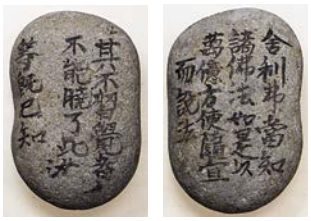
176

第 58 図　巻第一　方便品第二（21）

177

當
来世惡人
聞佛説一乘迷
惑不信受破
法墮惡道

有慚愧清淨志
求佛道者當
爲如是等
廣讃一乘
道



178

舍利弗當知
諸佛法如是以
萬億方便隨宜
而説法

其不習學者
不能曉[注1]了此汝
等既已知

注1　異字形

179

諸佛世之師
隨宜方便事
無復諸疑惑

心生大歡喜
自知當作佛
妙法蓮華經
卷第一

第 59 図　巻第一　方便品第二（22）

妙法蓮華經[注1]譬諭品第二[注2]
爾時舍利弗踊躍歡喜
卽起合掌瞻仰尊
顏而白佛言
今從世尊聞此
法音心懷踊躍[注3]
得未曾有所以者何
我昔從佛聞如是

注1　抜字　大経では巻第二あり
注2　誤字　大経では三
注3　誤字　大経では勇

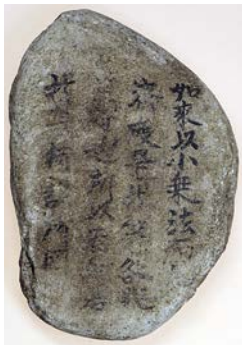
1

法見諸菩薩受記[注1]
作佛而我等不預[注2]
斯事甚自感傷
失於如來無
量知見
世尊我常
獨處山林樹下
若坐若行每作是
念我等同入法性
云何

注1　誤字　大経では授
注2　同音同義字　大経では豫

2

如來以小乘法而見
濟度是我等咎非
世尊也所以者何若
我等待説所因



3

成就阿耨多羅三
藐三菩提者必以大乘
而得度脫然
我等不解方便隨
宜所説初聞佛法
遇便信受思惟

4

取證世尊我
從昔來終
日竟夜
毎自
剋責

5

而今從佛
聞所未聞
未曾有法

6

第 60 図　巻第二　譬喩品第三（１）

斷諸疑
悔身意
泰然快得
安隱今
日乃知

7

眞是佛子
從佛口生從
法化生
得佛
法分爾時
舍利弗欲重

8

宣此義而
說偈言
我聞是法音
得所未曾有
心懷大歡喜
疑網皆已除

9

昔來蒙佛教
不失於大乘
佛音甚希有
能除衆生惱

10

我已得漏盡
聞亦除憂惱

11

我處於山谷
或在林樹下

注1　文字順逆　大経では樹林

12

若坐若經行
當思惟是事時
鳴呼深自
責
云何而自欺
我等亦佛子
同入無漏法

注1　誤字　大経では常

13

不能於未來
演説無上道
金色三十二
十力諸解脱

14

同共一法中
而不得此事
八十種妙好
十八不共法

15

第 61 図　巻第二　譬喩品第三（２）

16

如是等功德
而我皆已失

17

見佛在大衆
名聞滿十方
廣饒益衆生

18

自惟失此利
我爲自欺誑
我常於日夜
每思惟是事

19

欲以問世尊
爲失爲不失
我常見世尊
稱讚諸菩薩
以是於日夜籌
量如此事今聞
佛音聲隨宜而

20

說法無漏
難思議
令衆至
道場我本

21

著邪見爲諸
梵志師世尊
知我心拔邪
說涅槃
我悉
除
邪見

22

於空法
得證
爾時心
自謂

23

得至於滅度
而今乃自覺

25

龍神等恭
敬是時乃可謂
具三十二相
天人夜叉衆

24

非是實滅度
若得作佛時

第62図　巻第二　譬喩品第三（3）

永盡滅　無餘佛於　大衆中　説我當作佛　聞如是法音

26

心中大驚疑

28

譬諭巧言説　其心安如海　我聞　疑網斷

30

亦皆説是法　現在未来佛　亦以諸方便　如今者　世尊

32

得道轉法輪　亦以方便説　世尊説實道　波旬無此事

以是我定知　非是魔作佛　我墮疑網故　謂是魔所爲

35

聞佛柔軟音　深遠甚微妙　演暢清淨法　我心大歓喜

36

疑悔永已盡　安住實知[注1]中　我定當作佛　爲天人所敬

37

注1　春日版では智

轉無上法輪　教化　諸菩薩

38

佛説　過　去世

31

佛以種種　因緣　惱亂　我心耶

29

疑悔悉　已除初聞　佛所説

27

第 63 図　巻第二　譬喩品第三（４）

爾時佛告舍利弗吾
今於天人沙門婆羅門
等大衆中説我昔曾於
二萬億佛所爲無上道
故常教化汝[注1]亦長夜
隨我受學我以方便引
導汝故生我法中舍利弗
我昔教汝志願佛道汝
今悉忘而便

注1　抜字　大経では汝あり

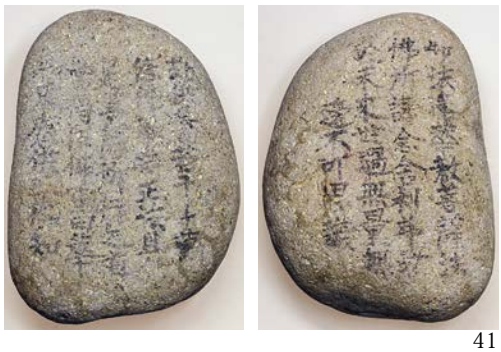
39

聲聞説是
大乘經名

40

妙法蓮華教菩薩法
佛所護念舍利弗汝
於未来世過無量無
邊不可思議
劫供養若干千萬
億佛奉持正法具
足菩薩所行之道
當得作佛號曰華
如来[注1]應供正遍知

注1　抜字　大経では光あり



41

明行足
善逝世
間解
無上
士調御
丈夫

42

交道黄金爲
繩以界其
側[注1]其傍
各有七
寶行樹

注1　異字形

43

第64図　巻第二　譬喩品第三（5）

44

華兜如来亦以三乘教化
衆生舍利弗彼佛出時
雖非惡世以本願故説三
乘法其劫名大寶莊
嚴何故名曰大寶
莊嚴其國
中以菩薩
爲大寶故彼諸菩薩
無量無邊不可思
議算數譬喩所不能
及非佛智力無能知
者若欲行時寶華

注1　以降 文字改行不明

45

承足此諸菩薩非初
發意皆久殖德本
於無量百千萬億
佛所淨修梵行
恒爲諸佛之所
稱歎常修佛慧
具大神通
善知
一切

46

諸法之門質[注1]無僞志
念堅固如是菩薩充
滿其國舍利弗華兜
佛壽十二小劫[注2]華光
如來過十二小劫授
堅滿菩薩阿耨多羅

注1　抜字 大経では直あり
注2　抜字 大経では除爲王子未作佛時其國
人民壽八小劫あり

第 65 図　巻第二　譬喩品第三（６）

記告諸比丘是堅
滿菩薩次當作佛號曰
華足安行多陀阿伽度
阿羅訶三藐三佛陀
其佛國土
亦複[注1]如是舍利弗
是華光佛滅度之後正
法住世三十二小劫像法
住世亦三十二小劫

注1　誤字　大経では復

47

爾時世尊欲
重宣此義
而説偈言
舍利弗來世
成佛普智尊
號名曰華光
當度無量衆

48

供養無數佛
具足菩薩
行
十力力[注1]等
功德

注1　加筆

49

證於無上道
過無量劫已
劫名大寶嚴
世界名離垢

50

以琉璃爲地
金繩界其道
七寶雜色
樹常有華菓
實

清淨
無瑕穢

51

52

第66図　巻第二　譬喩品第三（7）

53

彼國諸菩薩志念常
堅固神通波羅蜜皆
已悉具足於無數
佛所善覺[注1]菩薩道如
是等大士華光佛所化
佛爲王子時棄國捨

注1　誤字　大経では學

54

世榮於最末後
身出家成佛
道
華光
佛住世壽十
二小劫其國

55

人民衆壽命
八小劫
佛滅
度之後正法

56

住於世
三十二小劫

57

舍利弗[注1]廣
流布天人普
供養
華光佛所爲
其事皆如是

注1　加筆

58

其兩足聖尊
最勝無倫匹
彼即是汝身
宜應自欣慶

59

爾時四部衆
比丘比丘尼
優婆塞
優婆夷

60

天龍夜叉乾闥
婆阿修羅迦樓
羅緊那羅摩睺
羅伽等
大衆見
舍利弗於
佛前受阿耨多
羅三藐三菩提

第 67 図　巻第二　譬喩品第三（８）

記心大歡喜踊躍
無量各各脱身
所著上衣以

61

供養佛釋提
桓因梵天王等

與無數天子亦
以天妙衣天

62

曼陀羅華摩訶
曼陀羅華等

供養

於佛所散天衣住
虚空中而自迴

轉諸天伎樂
百千萬

63

種於虚空
中一時俱作雨
衆天華而作是
言佛昔於波羅
柰

64

初轉法輪今乃
復轉無上最大法
輪爾時諸天子
欲重宣此義
而説偈言

昔於波羅柰轉四
諦法輪分別説諸
法五衆之生滅今
復轉最妙

65

數聞世尊説未曾聞
如是深妙之上法

世尊説是法我等
皆隨喜大智舍利弗
今得受尊記我等

66

亦
如是
必當得
作佛

67

第68図　巻第二　譬喩品第三（9）

於一切世間
最尊無有
上
佛道
叵思議

68

今世若過世
及見佛功德
盡迴向佛道
爾時舍利弗

69

白佛言世尊
我今無復
疑悔親
於佛前
得受阿耨多
羅三藐三菩
提

70

記是諸
千二百

71

心自在者昔住
學地佛常教化
言我法能離
生老病死空[注1]
竟涅槃是學[注2]
人亦各自以離
我見

注1　誤字　大経では究
注2　抜字　大経では無學あり

72

及有無見等
謂得涅槃而今於世
尊前聞所未聞皆墮
疑惑善哉世尊願
爲四衆說其因
緣令離疑
悔爾時佛告
舍利弗我先不
言諸佛世尊以種
種因緣譬喩言
詞[注1]方便說法皆爲
阿耨多羅

注1　誤字　大経では辭（春日版と同じ）

73

三藐三菩提耶是
諸所說皆爲化菩薩
故然舍利弗今當
復以譬喩更明
此義諸有智
者以譬喩得
解舍利弗

74

第 69 図　巻第二　譬喩品第三（10）

若十二十或
至三十在此
宅中
長者見是
大火從四面
起即大驚怖

75

而作是念我雖
能於此所燒之
門安隱得出
而諸子等於火
宅内樂著嬉戲
不覺不知

76

不驚不怖火來
逼身苦痛切己
心不厭患無求出
意舍利弗
是長者作是
思惟我身手有
力當以衣裓若
以几(注1)案從舍

注1　同音同義字　大経では机

77

出之復更思惟是舍
唯有一門而復狹小諸
子幼稚未有所識戀
著戲處或當墮落
爲火所燒
我當爲說
怖畏之事此舍已燒宜
時疾出無令爲火之
所燒害作是念已
如所思惟

78

具告諸子汝等速
出父雖憐愍善言
誘諭而諸子等
樂著嬉戲
不肯
信受
不驚不畏了
無出心亦復不知何
者是火何者爲舍
云何爲失但東西

79

第70図　巻第二　譬喩品第三（11）

80

走戲視父而已
爾時長者卽作是
念此舍已爲大火所
燒我及諸子若不時出
必爲所焚我今當設
方便令諸子等
得免斯害父知諸
子先心各有所好種
種珍玩奇異之物
情必樂著而告之
言汝等所可玩
好希有難得

81

汝若不取後必憂悔如
此種種羊車鹿車牛車
今在門外可以遊
戲汝等於此
火宅宜速出來
隨汝所欲皆當與
汝爾時諸子聞父
所說珍玩之物

82

適其願故心各勇
銳互相推排競共
馳走爭出火宅
是時長者見諸
子等安隱得
出皆於四衢
道中露地而坐
無復障礙其心
泰然歡喜踊躍
時諸子等各

83

白父言父先所許
玩好之具羊車鹿車牛
車願時賜與舍利弗
爾時長者各賜諸子
等一大車其車
高廣衆寶
莊校周匝欄楯
四面懸鈴又於其上
張設幰蓋亦以珍奇
雜寶而嚴飾之寶
繩絞絡垂諸華

第 71 図　巻第二　譬喩品第三（12）

纓重敷縟安置丹
枕駕以白牛膚色充潔
形體姝好有大筋力行
步平正其疾如風又多
僕從而侍衞之所以者
何是大長者財富

無量種種諸藏悉皆充
溢而作是念我財物
無極不應以下劣小車
與諸子等今此幼童皆
是吾子愛無偏黨
我有如是七寶

84

大車其數無量應
當等心各各與之不
宜差別所以者何
以我此物

周給一國猶
尚不匱何況諸子
是時諸子各乘大車
得未曾有非本
所望

85

舍利弗於汝意云何
是長者等與諸子
珍寶大車寧有虛
妄不舍利弗言不也

86

世尊是長者但令
諸子得免火難全其
軀命非爲虛妄何
以故若全身命
便爲已得玩好
之具

況復方便於
彼火宅而拔濟
之世尊若是長者
乃至不與最小一車
猶不虛妄何以故

87

是長者先作
是意我以方便
令子得出以是
因緣無

虛妄也
何況長者自
知財富無量

88

第 72 図　巻第二　譬喩品第三（13）

欲饒益諸子等與大
車佛告舍利弗善
哉善哉如汝所言
舍利弗如來亦
復
如是則爲一切世
間之父於諸怖畏
衰惱憂患無明暗[注1]
蔽永盡無餘而悉

注1　同音同義字　大経では闇

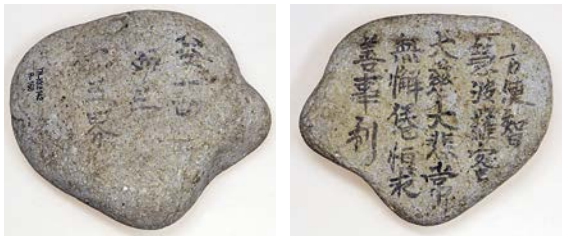
89

成就無量知
見力無所畏
有大神力及
智慧力具足

90

方便智
慧波羅蜜
大慈大悲常
無懈倦恒求
善事利
益[注1]一切
而生
三界

注1　異字形



91

朽故火宅爲度衆生
生老病死憂悲苦惱
愚癡闇蔽三毒之
火教化令得
阿耨多羅
三藐三菩提見諸
衆生爲生老病死

92

不生厭不求解脫於此
三界火宅東西馳走雖
遭大苦不以爲患
舍利弗佛見此
已便作是念
我爲
衆生
之父應拔
其苦難與
無量無邊佛智慧樂
令其遊戲舍利弗
如來復作是念若

93

第 73 図　巻第二　譬喩品第三（14）

但以神力[注2]智慧力
捨於方便爲諸
衆生讃如來知見力
無所畏者衆生
不能以是得度所以
者何是諸衆生未免
生老病死憂悲苦
惱而爲三界火宅
所燒何由能解佛
之智慧舍利弗

注1　抜字 大経では我あり
注2　抜字 大経では及あり

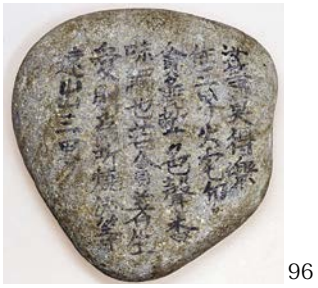
94

如彼長者雖復身
手有力而不用之
但以殷勤方便勉濟
諸子火宅之難然後
各與珍寶大車
如來亦復如是
雖有力無所畏而不
用之但以智慧方便
於三界火宅拔濟
衆生爲説三乘
聲聞辟支佛佛
乘而作是言

95

汝等莫得樂
住三界火宅勿
貪麁弊色聲香
味觸也若貪著生
愛則爲所燒汝等[注1]
速出三界
當得三乘聲
聞辟支佛佛乘我
今爲汝保任此事
終不虚也汝等
但當勤修精進
如來以是方便

注1　加筆（春日版あり）



96

誘進衆生復作是言
汝等當知此三乘法皆是
聖所稱歎自在無繫
無所依求乘
以[注1]無漏根力覺
道禪定解脱三昧等
而自娯樂便得無量
安隱快樂舍利弗

注1　抜字 大経では是三乗あり

97

第 74 図　巻第二　譬喩品第三（15）

若有衆生内有智
性從佛世尊聞法
信受慇懃精進
欲速出三界
自求
涅槃是名
聲聞乘
如彼諸子

98

99

爲求羊車出於
火宅若有衆生
從佛世尊聞法信
受慇懃精進求自
然慧樂獨善寂深
知諸法因緣是名
辟支佛乘
如彼諸子爲[注1]鹿車
出於火宅若有衆生
從佛世尊聞法信受
勤修精進求一切智
佛智自然智
無師智如來知見
力

注1　抜字　大経では求あり

無所畏愍念安樂
無量衆生利益天
人度脱一切是名大
乘菩薩求此乘故
名爲摩訶薩如彼
諸子
爲求生車出
於火宅舍利弗如彼
長者見諸子等安
隱得出火宅到無
畏處自惟財富
無量等以大車

100

而賜諸子
如來亦復如是
爲一切衆生之
父若見無量
億千衆生以佛
教門出三界苦
怖畏險道

101

第 75 図　巻第二　譬喩品第三（16）

102

得涅槃樂如來爾時便
作是念我有無量無邊
智慧力無畏等諸佛
法藏是諸衆生皆是
我子等與大乘不令有
人獨得滅度皆以如來

103

滅[注1]度之是諸衆
生脫三界者悉與
諸佛禪定解脫等
娛樂之具皆是
一相一種聖所
稱歎能生淨妙[第]
一之樂舍[利]弗[如][彼]
長者初[以]三車

注1　抜字　大経では滅度而あり

104

誘引諸子然
後但與大車寶
物莊嚴安隱第一
然彼長者無虛妄
之咎如來
亦復如是
無有虛妄
初説三
乘

105

[如][來]
[有][無量][智慧]
[力][無所畏][諸]
[法之藏][能]
[與]一切
[衆生]
[大乘]之法

106

以是因緣[注1]當知
諸佛方便力故
[注2]一佛乘分別
説三
佛欲重
宣此
義而説
偈言

注1　誤字　大経では縁
注2　抜字　大経では於あり

第 76 図　巻第二　譬喩品第三（17）

107

譬如長者
有一大宅
其宅久故
而復頓弊
堂舎高危
柱根摧朽
梁棟傾斜
基陛隤毀
牆壁圮坼
泥塗褫落
覆苫亂墜

108

椽梠差脱
周障屈曲
雑穢充徧
有五百人
止住其中
鴟梟雕鷲
烏鵲鳩鴿
蚖虵[注1]蝮蠍
蜈蚣蚰蜒[注2]
守宮百足
狖[注3]貍鼷鼠
諸悪蟲鞅
交横馳走

注1　誤字　大経では蛇
注2　異字形
注3　異字形

109

注1　異字形

屎尿臭處
不淨流溢
蜣蜋諸蟲
而集其上
狐狼野干
咀嚼踐蹋
齲[注1]齧死屍
骨肉狼藉
由是群狗
競來搏撮
飢羸憧惶

110

注1　異字形

處處求食
鬪諍搪掣
唎[注1]嗥吠
其舍恐怖

111

變狀如是
處處皆有
魑魅魍魎
夜叉惡鬼
食噉人肉
毒蟲之屬
諸惡禽獸
孚乳産生
各自藏護

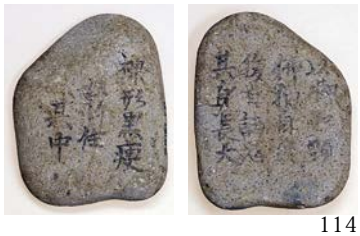
第 77 図　巻第二　譬喩品第三（18）

夜叉競來
爭取食之
食之既飽
惡心轉熾
鬪諍之聲
甚可怖畏
鳩槃荼鬼
蹲踞土堆

112

或時離地
一尺二尺
往返遊行
縱逸嬉戲
捉狗兩足
撲令失聲

113



以脚加頸
怖狗自樂
復有諸鬼
其身長大
裸形黑瘦
常住
其中

114

發大惡聲
叫呼求食
復有諸鬼
其咽如針
復有諸鬼

115

首如牛頭
或食人肉
或復噉狗
頭髮蓬亂
殘害兇險
飢渇所逼

116

叫喚馳走
夜叉餓鬼
諸惡鳥獸
飢急四向
問(注1)看窻(注2)牖
如是諸難
恐畏無量
是朽故宅
屬于一人

注1　誤字　大経では窺
注2　旧字　大経では窓

117

第 78 図　巻第二　譬喩品第三（19）

其人近出
未久之間
於後宅舍[注1]
忽然火起
四面一時
其焰[注2]俱熾
棟梁椽柱
爆聲震裂

注1　文字順逆　大経では舍宅（春日版と同じ）
注2　同音同義字　大経では炎

118

摧折墮落
牆壁崩倒
諸鬼神等
揚聲大叫
雕鷲諸鳥
鳩槃荼等
周章惶怖
不能自出

119

惡獸毒蟲
藏竄孔穴
毘舍闍鬼
亦住其中
薄福德故

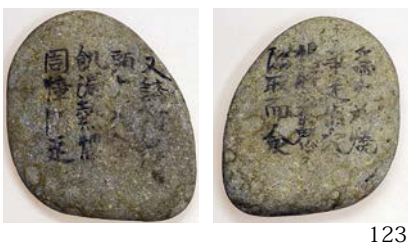
120

爲火所逼
共相殘害
飲血噉肉
野干之屬
竝已前死
諸大惡獸
競來食噉

121

臭烟熢薈
四面充塞
蜈蚣蚰蜒
毒蛇之類

122



爲火所燒
爭走出穴
鳩槃荼鬼
隨取而食
又諸餓鬼
頭上火燃
飢渇熱惱
周[注1]憧悶走

注1　誤字　大経では章

123

第 79 図　巻第二　譬喩品第三（20）

124

其宅如是
甚可怖畏
毒害火灾[注1]
衆難非一
是時宅主
在門外立
聞有人言
汝諸子等

注1　異体字　大経では災

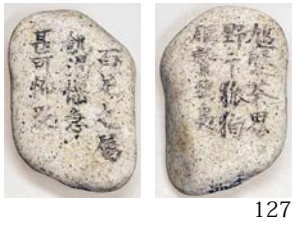
125

先因遊戯
來入此宅
稚小無知
歡娯樂著
長者聞已
驚入火宅
方宜救濟
令無燒害

126

告喩諸子
説衆患難
惡鬼毒蟲
灾[注1]火蔓延
衆苦次第
相續不絶
毒蛇蚖蝮
及諸夜叉

注1　異体字　大経では災



127

鳩槃荼[注1]鬼
野干狐狗
鵰[注2]鷲鵄梟
百足之屬
飢渇惱急
甚可怖畏

注1　誤字　大経では荼（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では雕（春日版と同じ）

128

此苦難處
況復大火
諸子無知
雖聞父誨

129

猶故樂著
嬉戲不已
是時長者
而作是念
諸子
如此益我
愁惱

第 80 図　巻第二　譬喩品第三（21）

今此舍宅無一可樂
而諸子等耽湎嬉戲
不受我教將爲火
害卽便思惟
設諸方便告諸
子等我有種種
珍玩之具妙寶
好車羊車鹿車

130

大牛之車
今在門外
汝等出來
吾爲汝等
造作此車
隨意所樂
可以遊戲

131

諸子聞說
如此諸車
即時奔競
馳走而出
到於空地
離諸苦難
長者見子
得出火宅

132

住於四衢
坐師子座
而自慶言
我今快樂
此諸子等
生育甚難
愚小無知
而入險宅

注1　表面　文字改行不明

133

多諸毒蟲
魑魅可畏
大火猛炎
四面俱起
而此諸子
貪樂嬉戲
我已救之
令得脫難
是故諸人

134

135

我今快樂
爾時諸子
知父安坐
皆詣父所

136

第 81 図　巻第二　譬喩品第三（22）

137

而白父言
願賜我等
三種寶車
如前所許
諸子出來
當以三車
隨汝所欲

138

今正是時
唯垂[注1]給與
長者大富
庫藏衆多

注1　異字形

139

金銀
琉璃硨磲[注1]
碼碯[注2]以衆寶物
造諸大車
莊校嚴飾
周帀欄楯

注1　誤字　大経では車
注2　誤字　大経では馬腦

140

四面懸鈴
金繩絞絡[注1]
眞珠羅網
張施其上
金華諸瓔
處處乘[注2]下

注1　誤字　大経では交（春日版と同じ）
注2　誤字　大経で垂

141

衆綵雜飾
周帀圍繞
柔軟繒纊
以爲茵蓐
上妙細氎[注1]
價直千億
鮮白淨潔
以覆其上

注1　細部字形違いあり

142

有大白牛
肥壯多力
形體姝好
以駕寶車
多諸儐從
而侍衛之
以是妙車
等賜諸子

第 82 図　巻第二　譬喩品第三（23）

143

諸子是時　告舍利弗
歡喜踊躍　我亦如是
乘是寶車　衆聖中尊
遊於四方　世間之父
嬉戲快樂　一切衆生
自在無礙　皆是吾子

144

深著世樂　三界無安
無有慧心　猶如火宅

145

衆苦充滿　病死憂患
甚可怖畏　如是等火
常有生老　熾然不息

146

如來已離　寂然閑居
三界火宅　安處林野

147

今此三界　其中衆生
皆是我有　悉是吾子

148

而今此處　唯我一人
多諸患難　能爲救護

第 83 図　巻第二　譬喩品第三（24）

雖復教詔
而不信受
於諸欲染
貪著深故
是以[注1]方便

注1　文字順逆　大経では以是

149

爲説
三乘

150

令諸衆生

151

知三界苦
開示演説
出世間道
是諸子等

152

如[注1]舍利□[注2]
我爲衆生
以此譬諭
説一佛乗

注1　誤字　大経では汝
注2　誤字　大経では弗

153

汝等若能
信受是語

154

一切皆當
成得佛道
是乘微妙
清淨第一

155

所應稱讃
供養禮拜
無量億千
諸力解脱
禪定
智慧及
佛餘法

156

得如是乘
令諸子等
日夜劫數
常得遊戲

157

與諸菩薩
及聲聞衆
乘此寶乘
直至道場

158

第 84 図　巻第二　譬喩品第三（25）

以是因緣
十方諦求

159

更無餘乘
除佛方便
告舍利弗
汝諸人等
皆是吾子
我則是父
汝等累劫
衆苦所燒

160

我皆濟拔
令出三界
我雖先說
汝等滅度
但盡生死
而實不滅

今所
應作
唯佛
智慧

161

若有菩薩
於是衆中
能一心聽諸佛
實法

諸佛世尊
雖以方便
所化衆生

162

皆是
菩薩

163

若人小智
深著愛欲
爲此等故
說於苦諦

164

衆生心喜
得未曾有
佛說苦諦
眞實無異
若有衆生
不知苦本
深著苦因
不能暫捨

165

爲是等故
方便說道
諸苦所因
貪欲爲本

166

第 85 図　巻第二　譬喩品第三（26）

若滅貪欲
無所依止
滅盡諸苦
名第三諦

167

爲滅諦故
修行於
道

168

是人於何
而得解脫
但離虛
妄名爲解脫

169

其實未得一切解脫
佛說是人未實滅度
斯人未得

170

無上道故
我意不欲
令至滅度
我爲法王
於法自在
安隱衆生
故現於世

171

在所遊方

172

勿妄宣傳
若有聞者
隨喜頂受
當知是人
阿鞞跋致
若有信受
此經法者

173

是人已曾
見過去佛
恭敬供養
亦聞是法
若人有能
信汝所說
則爲見我
亦見於汝
及比丘僧
并諸菩薩

174

第 86 図　巻第二　譬喩品第三（27）

斯法華經
爲深智說
注1

注1　裏面 文字改行不明
淺識聞之　迷惑不解か

175

176

一切聲聞及辟支佛
於此經中力所不及
汝舍利弗尚於
此經以信得入
況餘

聲聞其
餘聲聞信佛語故
隨順此經非己智分
又舍利弗憍慢懈
怠計我見者

莫說此經
凡夫淺識
深著五欲

聞不能解
亦勿爲說
若人不信

177

毀謗此經
則斷一切

178

世間佛種
或復斷壞

而懷疑
惑

179

若佛在世
若滅度後

其有
誹謗

180

如斯
經典

見有
讀誦

181

書持經者
輕賤憎嫉

182

而懷結恨
此人罪報
汝今復聽

注1

注1　裏面 文字改行不明
其人命終　入阿鼻獄か

183

具足一劫
劫盡更生
如是展轉
至無數劫

從地獄出
當墮畜生
若狗野干
其影頒瘦
注1

注1　異字形

184

第 87 図　巻第二　譬喩品第三（28）

185

黧黮疥癩
人所觸嬈
又復爲人
之所惡賤
常困飢渴

186

注1　生受楚毒
死被瓦石
斷佛種故
受斯罪報

注1　抜字 大経では骨肉枯竭あり

187

若作駈駝
或生
驢中注1

注1　文字順逆 大経では中驢

188

身常負重
加諸杖捶
但念水草
餘無所知

189

謗斯經故
獲罪如是
有作野干
來入聚落
身
體疥
癩

190

又無
一目
爲諸
童子

191

注1　表面 文字改行不明
之所打擲　受諸苦痛か

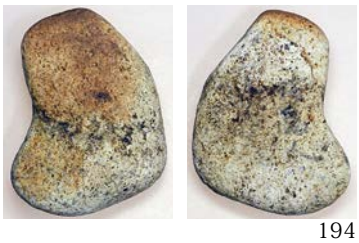
或時致死
於此死已
更受蟒身

192

注1　誤字 大経では蜿

其形長大
五百由旬
聾騃無足
宛注1轉腹行
爲諸小蟲
之所唼食

第88図　巻第二　譬喩品第三（29）



194

若得爲人
諸根闇鈍

193

晝夜受苦
無有休息
謗斯經故
獲罪如是

195

注1　大経では攣（春日版に似た字形）

矬陋痣[注1]躄
盲聾背傴
有所言説
人不信受
口氣常
臭鬼
魅所
著

197

雖親
附人
人不
在意

196

貧窮下賤
爲人所使
多病痟瘦
無所依怙

198

若修醫道
順方治病
更増佗疾
或復致死

199

注1　抜字　大経では人あり

若自有
病無[注1]救
療
設服
良藥

200

抄劫
竊盜

201

注1　同音同義字　大経では斯

如是等罪
横羅其殃
如斯罪人
永不見佛
衆聖之王
説法教化
如是[注1]罪人
常生難
處

第 89 図　巻第二　譬喩品第三（30）

狂聾心亂　永不聞法　於無數劫

注1　表面 文字改行不明
如是之人　乃可爲説か

202

如恒河沙　生輒聾瘂

203

諸根不具

204

常處地獄　如遊園觀　在餘惡道

如己舍宅駝驢猪狗是其行處　謗斯經故

205

獲罪如是　若得爲人　聾盲瘖瘂　貧窮諸衰

206

如是等病　以爲衣服　身常臭處　垢穢不淨　深著我見

207

謗斯經故　獲罪如是　告舍利弗　謗斯經者　若説其罪　窮劫不盡

208

以是因緣　我故語[注1]無智　人中莫説此經　若有利根　智慧明了　多聞強識　求佛道者

注1　抜字 大経では汝あり

209

第 90 図　巻第二　譬喩品第三（31）

若人曾見
億百千佛

210

植諸善本深心堅固
如是之人乃可爲説
若人精進
常修慈心

不惜身命乃可爲説
若人恭敬無有異心離
諸凡愚獨處山澤

211

如是之人
乃可爲説
若見佛子
持戒清潔
如淨明珠

212

求大乘經
如是之人

乃可爲説
若人無瞋

213

質直柔軟
常愍一切
恭敬諸佛
如是之人
乃可爲説

復有佛子
於大衆中
以清淨心
種種因緣[注1]
譬諭言辭
説法無礙

214

注1　誤字　大経では縁

如是之人
乃可爲説
若有比丘
爲一切智

四方求法合掌
頂受但樂受
持大乘經
典

215

第 91 図　巻第二　譬喩品第三（32）

乃至不受
餘經一偈
如是之人
乃可爲説
如人至心
求佛舍利

216

如是求經
得已頂受
其人不復志求餘經
亦未曾念外道典籍
如是之人乃可爲説
告舍利弗我説是相
求佛道者窮劫不盡
如是等人則能信解
汝當爲説妙法華經

217

第 92 図　巻第二　譬喩品第三（33）

妙法蓮華經
信解品第四
爾時慧命
須菩提摩
訶迦旃延

1

摩訶迦葉摩
訶目犍連從
佛所聞
未曾有法

2

世尊授舍利
弗阿耨多羅
三藐三菩提
記發希有心

3

歡喜踊躍
即從座起
整衣服偏
袒有肩[注1]
有膝[注2]著地
一心合掌曲
躬恭敬

注1　誤字　大経では右
注2　誤字　大経では右

4

瞻仰尊顏
而白佛言
我
等
居僧之首
年非朽[注1]邁

注1　誤字　大経では竝

5

堪任不復進求
阿耨多羅三
藐三菩提世尊
往昔説法既
久我時在座

6

身體疲懈
但念空無相
無作於
菩薩法
遊戲神通
淨佛國土

7

第 93 図　巻第二　信解品第四（１）

成就衆生
心不喜樂
所以者何
世尊令我
等出於三
界得涅槃

8

證又今我
等年已朽邁
於佛教化
菩薩阿耨
多羅

9

三藐三
菩提不生
一念好樂
之心我等
今於佛前
聞授

10

聲聞阿耨多
羅三藐三菩
提
記
心甚歡喜

11

得未曾有
不謂於今
忽然得聞
希
有
之法深自

12

慶幸獲大善
利無量珍寶
不求自得世尊
我等今者
樂說

13

幼稚捨父逃逝

14

第 94 図　巻第二　信解品第四（2）

15

久住佗國
或十二十
至五十
歲
年既
長大
加復

16

窮因[注1]
馳
騁

注1　誤字　大経では困

17

漸漸
遊行
四方以求
衣食

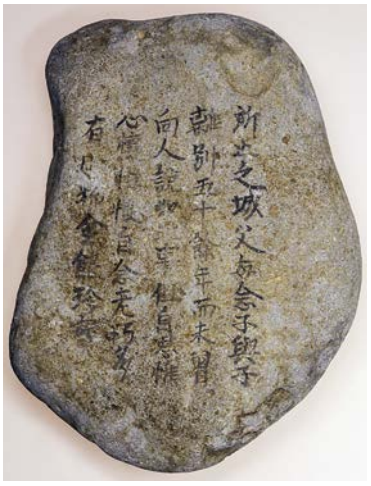
18

遇向本國
其父先
來求子

19

不得中止
一城其家大
富財寶

注1　裏面　文字改行不明
無量金銀琉璃か



20

珊瑚琥[注1]珀頗梨珠等其諸倉
庫悉皆盈溢多有僮僕臣佐
吏民象馬車乘牛羊無數
出入息利乃徧佗國商估賈
客亦甚衆多時貧窮子遊
諸聚落經歷國邑遂到其父

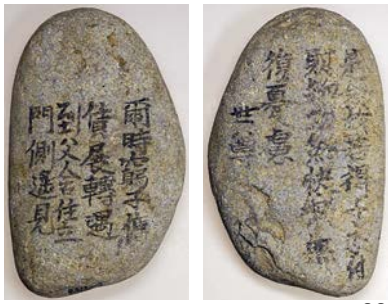
所止之城父[注2]毎念子與子
離別五十餘年而未曾
向人説如此事但自思惟
心懐悔恨念老朽多
有財物金銀珍寶

注1　誤字　大経では虎
注2　誤字　大経では母

第 95 図　巻第二　信解品第四（３）

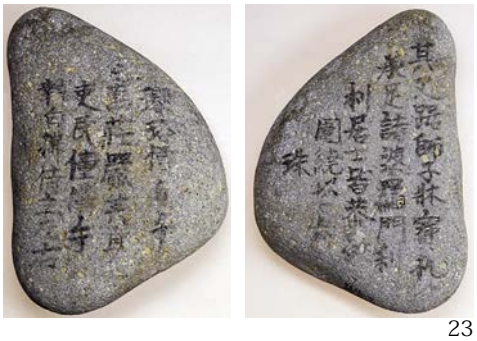
倉庫盈溢無
有子息一旦終
沒財物散失
無所委付
是以慇懃毎
憶其子復作

21



是念我若得子委付
財物坦然快樂無
復憂慮
世尊
爾時窮子傭
賃展轉遇
到父舍住立
門側遙見

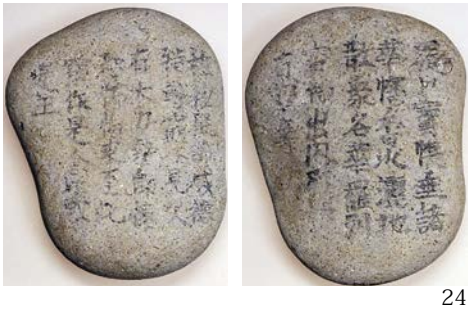
22



其父踞師子牀寶机
承足諸婆羅門刹
利居士皆恭敬
圍繞以眞
珠
瓔珞價直千
萬莊嚴其耳[注1]
吏民僮僕手
執白拂侍立左右

注1　誤字　大経では身

23



覆以寶帳垂諸
華幡香水灑地
散衆名華羅列
寶物出内取與
有如是等
種種嚴飾威德
特尊窮子見父
有大力勢即懐
恐怖悔来至此
竊作是念此或
是王

24

或[注1]是王等非我傭
力得物之處不如
往至貧里肆力有
地衣食易得
若久
住此或見逼迫強
使我作作是念已
疾走而

注1　表面　文字改行不明

25

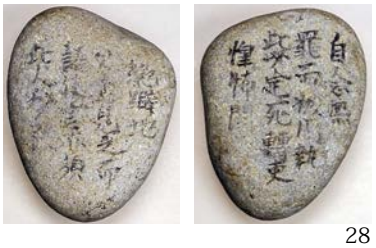
第 96 図　巻第二　信解品第四（４）

去時富長者於師子
座見子便識心大歡喜
即作是念我財物
庫藏
今有所付我常
思念此子無由見之
而忽自來甚適我
願

26

我雖年
朽猶故貪惜即
遣傍人急追將還
爾時使者疾走往
捉窮子驚愕
稱怨大喚
我不相犯何爲
見捉使者執之
愈急強牽將
還于時窮子

27



自念無
罪而被囚執
此必定死轉更
惶怖悶
絶躃[注1]地
父遙見之而
語使言不須
此人勿強

注1　同意同義字　大経では壁（春日版と同じ）

28

將來以冷水灑面
令得醒悟莫復與
語所以者何父知
其子志意下劣
自知豪貴爲
子所
難審
知是子而以方便
不語他人
云是
我子

29

第 97 図　巻第二　信解品第四（５）

30

使者語之我今
放汝隨意所趣窮
子歡喜得未曾有
從地而起往至
貧里以求衣食
爾時長

者將欲誘引其子
而設方便密遣二
人形色憔悴無威
德者汝可詣彼徐語
窮子此有作處
倍與汝直窮子
若許

31

將來使作若言
欲何所作便可
語之雇汝除糞
我等二人亦共

汝作時二使人
卽求窮子旣
已得之具陳上
事爾時窮子

32

先取其價尋
與除糞其父見
子愍而恠[注1]之又以
佗日於窻[注2]牖中
遙見子身

羸瘦憔悴
糞土塵坌汚穢
不淨卽脫瓔珞細
輭[注3]上服嚴飾之具
更著麁弊垢膩

注1　俗字 大経では怪
注2　旧字 大経では窓
注3　異体字 大経では軟

33

之衣塵土坌身
右手執持除糞
之器狀有所畏
語諸作人汝等

勤作勿得懈息
以方便故得近
其子後復告言
咄男子汝常此

第98図　巻第二　信解品第四（6）

作勿復餘去當
加汝價諸有所須
瓮器米麵鹽醋之
屬莫自疑難

亦有老弊使人須
者相給好自安意
我如汝父勿復憂
慮所以者何

34

我年老大而汝少壯
汝當作時無有欺怠
瞋恨怨言都不見汝
有此諸惡如餘
作人自今

已後如所生子
即時長者更與作
字名之爲兒爾時窮
子雖欣此遇猶故
自謂客作賤人由是

35

之故於二十年中
常令除糞過是已
後心相體信入出

無難然其所止猶
在本處世尊爾時長
者有疾自知

36

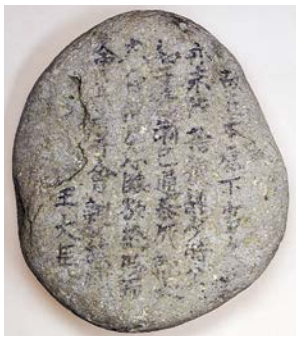
將死不久語窮子
言我今多有金
銀珍寶倉庫
盈溢其中

多[注1]所應取與
汝悉知之我心
如是當體此意
所以者何今我

注1　抜字　大経では少あり

37

第 99 図　巻第二　信解品第四（７）



38

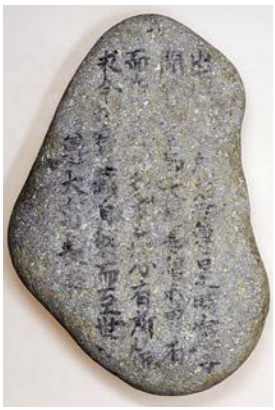
與汝便爲不異宜
加用心無令漏失爾時
窮子卽受教勅領知
衆物金銀珍寶及諸
庫藏而無悕取一
飡之意然其所止

故在本處下劣之心
亦未能捨復經少時父
知子意漸已通泰成就大
志自鄙先心臨欲終時而
命其子并會親族國
王大臣

39

刹利居士皆悉已集
卽自宣言諸君當
知此是我子我之所
生於某城中捨吾逃走
伶俜辛苦五十餘

年其本字某我名某
甲吾在本城懷憂推
覓忽於此間遇會得
之此實我子我實其
父今我所有一切財
物皆是子有先所



40

出內是子所知世尊是時窮子
聞父此言卽大歡喜得未曾有
而作是念我本無心有所悕[注1]
求今此寶藏自然而至世
尊大富長者

則是如來我等
皆似佛子如來常說我等
爲子世尊我等以三苦故於生死
中受諸熱惱迷惑無知樂著
小法今日世尊

注1　誤字　大経では希

第100図　巻第二　信解品第四（8）

令我等思惟蠲除諸
法戲論之糞我等於中
勤加精進得至涅槃一
日之價既得此已心大
歡喜自以爲

足而便自謂於佛法中
勤精進故所得弘多然
世尊先知我等心
著弊欲樂

41

於小法便見縱捨不爲分別
汝等當有如來知見寶藏
之分世尊以方便力
說如來智慧我等
從佛得涅槃一日之
價以爲大得於

此大乘無有
志求我等又因
如來智慧爲諸菩薩
開示演說而自於此無有
志願所以者何佛知我等心
樂小法以方便力

42

隨我等說而我等
不知眞是佛子今我等
方知世尊於佛智慧無
所悋惜所以者何
我等昔來眞
是

佛子而但樂小法若
我等有樂大之心佛則
爲我說大乘法今[注1]此
經中唯說一乘而昔於
菩薩前毀呰

43

注1　誤字　大経では於（春日版と同じ）

44

[注1]樂小法者
然佛實以大乘
教化是故我等說
本無心有所悕求
今法王大寶自
然而至如佛子
所應得者

皆已得之
爾時摩訶迦葉
欲重宣此義而說
偈言
我等今日聞佛音教
歡喜踊躍得未曾有
佛說聲聞當得作佛

注1　抜字　大経では聲聞あり

第 101 図　巻第二　信解品第四（９）

無上寶聚
不求自得
譬如童子
幼稚無識
捨父逃逝
遠到佗土
周流諸國
五十餘
年其父憂念
四方推求

45

46

求之既疲
頓止一城
造立舍宅
五欲自娛
其家巨富
多諸金銀
砗磲[注1]碼碯[注2]
眞珠琉璃
象馬牛羊
輦輿車乘
田業僮僕
人民衆多

注1　誤字　大経では車
注2　誤字　大経では馬腦

出入息利
乃徧佗國
商估賈人
無處不有
千萬億衆
圍繞恭敬
常爲王者
之所愛念
群臣豪族
皆共宗重
以諸緣故
往來者衆

47

48

豪富如是
有大力勢
而年朽邁
益[注1]憂念子
夙夜惟念
死時將至
癡子捨我
五十餘年
庫藏諸物
當如之何
爾時窮子
求索衣食

注1　異字形

從邑至邑
從國至國
或有所得
或無所得
飢餓羸瘦
體生
瘡癰
漸次經歷
到父住城

49

第102図　巻第二　信解品第四（10）

傭賃展轉
遂至父舍
爾時長者
於其門內
施大寶帳
處師子座

50

驚悶自怪
何故至此
覆自念言
我若久住

52

眷屬圍遶
諸人侍衛
或有計算
金銀寶物

51

或見逼迫
強驅使作
思惟是已
馳走而去

53

借問貧里
欲往傭作
長者是時
在師子座
遙見其子

54

默而識之
即勅使者
追捉將來
窮子驚喚
迷悶躃地
是人執我

注1　同音同義字　大経では躄

55

必當見殺
何用衣食
使我至此
長者知子
愚癡狹劣

注1　異字形

56

第 103 図　巻第二　信解品第四（11）

57

不信我言
不信是父
卽以方便
更遣餘人
眇目痤[注1]陋
無威德者
汝可語之
云當相雇

注1　誤字　大経では矬

58

除諸糞穢
倍與汝價
窮子聞之
歡喜隨來
爲除糞穢
淨諸房舍
長者於牖
常見其子

59

念子愚劣
樂爲鄙事
於是長者
若[注1]弊垢衣
執除糞器
往到子所

注1　誤字　大経では著

60

方便附近
語令勤作
旣益汝價
并塗足油
飮食充足
鷹席厚煖
如是苦言
汝當勤作

61

又以軟語
若如我子
長者有智
漸令入出

62

經二十年
執作家事
示其金銀
眞珠頗梨
諸物出入
皆使令知
猶處門外
止宿草庵

第 104 図　巻第二　信解品第四（12）

自念貧事
我無此物
父知子心
漸已
曠[注1]大

注1　誤字　大経では廣

63

欲與財物
即聚親族
國王大臣
刹利居士
於此大衆
説是我子
捨我佗行
經五十歳

64

周行求索
遂來至此
凡我所有
舍宅人民
悉以付之
恣其所用
子念昔貧
志意下劣

65

今於父所
大獲珍寶
并及舍宅
一切財物
甚大歡喜
得未曾有

66

佛亦如是
知我樂小
未曾説言

67

汝等作佛
而説我等
得諸無漏
成就小乗
聲聞弟子
佛勅我等
説最上道
修習此者
當得成佛

68

第 105 図　巻第二　信解品第四（13）

69

我等雖說　佛法寶藏　自無志願　亦復如是　我等內滅　自謂爲足　唯了此事　更無餘事

但爲菩薩　演其實事　而不爲我　說斯眞要　如彼窮子　得近其父　雖知諸物　心不希取

70

一切諸法　皆悉空寂　無生無滅　無大無小　無漏無爲

我等若聞　淨佛國土　教化衆生　都無欣樂　所以者何

71

而自於法　謂是究竟　我等長夜　修習空法

如是思惟　不生喜樂　我等長夜　於佛智慧　無貪無著　無復志願

72

注1　表面　文字改行不明

得脫三界　苦惱之患　住最後身　有餘涅槃　佛所教化　得道不虛か

則爲已得　報佛之恩　我等雖爲　諸佛子等　說菩薩法

注1

73

觀我　心故初不　勸進說有　實利如富　長者

以求佛道　而於是法　永無願樂　導師見捨

74

調伏其心乃教大智　我等今日得未曾有　非先所望

而今自得　如彼窮子　得無量寶　世尊我今

第106図　巻第二　信解品第四（14）

得道得果
於無漏法
得清淨眼
我等長夜
持佛淨戒
始於今日
得其果報
法王法中

75

我等今者
眞阿羅漢
於諸世間
天人魔梵

76

77

寶衣布地
如斯等事
以用供養
於恒沙劫
亦不能報
諸佛希有
無量無邊
不可思議
大神通力
無漏無爲
諸法之王

78

能爲下劣忍于斯事
取相凡夫隨宜爲說
諸佛於法得最自在
知諸衆生種種欲樂
及其志力隨所堪任
以無量喩而爲說法
隨諸衆生宿世善根
又知成熟未成熟者
種種籌量分別知已
於一乘道隨宜說三
妙法蓮華經卷第二

第 107 図　巻第二　信解品第四（15）

妙法蓮華經[注1]藥草喩品
第五

爾時世尊告摩訶
迦葉及諸大弟子
善哉善哉迦葉善
説如來

注1　抜字　大経では巻第三あり（春日版と同じ）

1

眞實功德誠如所言
如來復有無量無邊
阿僧祇功德汝等若

於無量億劫説不能盡迦葉
當知如來是諸法之王
若有所説皆不虚也

2

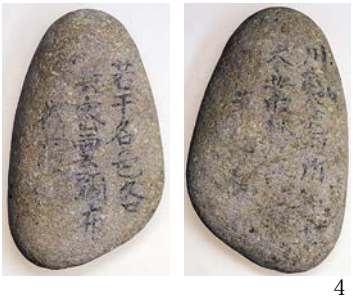
於一切法以智方便而
演説之其所説法皆
悉到於一切智地如來
觀知一切諸法之所
歸趣亦知一切

衆生深心所行通
達無礙又於諸法
究盡明了示諸衆生
一切智慧迦葉譬如
三千大千世界山

3

川谿谷土地所生卉
木叢林及諸藥
草種類

若干名色各
異密雲彌布
徧覆


4

三千大千世界一時
等澍其澤普洽
卉木叢林及諸藥草

小根小莖小枝
小葉中根中莖中
枝中葉

5

第 108 図　巻第三　藥草喩品第五（１）

大根大莖大枝
大葉諸樹大小
隨上中下
各[注1]所受一雲
所雨稱其種性
而得生長華

注1　抜字　大経では有あり

6

菓數實雖一地
所生一雨所潤
而諸草木各
有差別迦
葉當知如來亦
復如是出現於世
如大雲起以大

7

音聲普遍世界
天人阿修羅如彼
大雲遍覆三千
大千
國王
於
大衆中而唱是言
我[注1]是如來應供正遍知明行
足善逝世間解

注1　改行不明

8

無上士調御丈夫
天人師佛世尊
未度者令度
未解者令解未
安者令安未涅
槃者令得涅槃

9

今世後世如實知
之我是一切知者
一切見者知道者
開道者説道者
汝等天人阿修羅
衆皆應到此爲
聽法故爾時無數千
萬億種衆生來
至佛所而聽法
如來于時觀是
衆生諸根利鈍

10

第 109 図　巻第三　藥草喩品第五（２）

精進懈怠隨其所
堪而爲説法種種
無量皆令歡喜

快得善利是諸衆
生聞是法者[注1]已現世□[注2]
隱後生善處以道

注1　加筆
注2　異字形 大経では安

11

力所能漸得入道如彼大雲
雨於一切卉木叢林及諸藥
草如其種性具豆[注1]蒙[注2]潤各得
生長如來説法一相一味所謂
解脱相離相滅相究竟至
於一切種智其有衆生

聞如來法若持讀誦如説
修行所得功德不自覺知
所以者何唯有如來知此衆
生種相體性念何事思何
事修何事云何念云何思
云何修以何法念

注1　異体字 大経では足（字形が異なる）
注2　異字形

12

以何法思以何法
修以何法得何法衆生
住於種種之地唯有
如來如實見之明
了無礙如彼

卉木叢林諸
藥草等而不自
知上中下性如來知
是一相一味之法
所謂解

13

脱相離相
滅相究竟
涅槃常

寂滅相終
歸於空佛
知是已觀

14

第 110 図　巻第三　藥草喩品第五（3）

15

衆生心欲而將
護之是故不即爲説
一切種智汝等迦葉甚
爲希有能知如來
隨宜説法注1注2難知爾
時世尊欲重宣此

義而説偈言
破有法王出現世間
隨衆生欲種種説法
如來尊重智慧深
遠久默斯要不務

注1　抜字　大経では能信能受所以者何諸佛世尊隨宜説法あり（春日版なし）
注2　抜字　大経では難解あり（春日版あり）

16

速説
有智若聞
則能信解
無智疑悔
則爲永失
是故迦葉
隨力爲説
以種種縁
令得正見

迦葉當知
譬如大雲
起於世間
徧覆一切
慧雲含潤

17

其有注1普等
四方俱下
流澍無量
率土充洽
山川險谷

注1　誤字　大経では雨（春日版なし）

18

幽邃所生
卉木藥草
大小諸樹
百穀苗稼
甘蔗蒲萄
雨之所潤

第 111 図　巻第三　藥草喩品第五（４）

無不豐足
乾地普洽
藥木並茂[注1]
其雲所出
一味之水

注1　新字体　大経では竝

19

分別演說
諸法之實
大聖世尊
於諸天人
一切衆中
而宣是言
我爲如來
兩足之
尊

20

出于世間
猶如大雲
充潤一切
枯槁衆生
皆令離苦
得安隱樂
世間之樂
及涅槃樂
諸天人衆
一心善聽
皆應到此
覲無上尊

21

我爲世尊
無能及者
安隱衆生
故現於世

22

爲大衆說
甘露淨法
其法一味
解脫涅槃
以一妙音
演暢斯義
常爲大乘
而作因緣

23

我觀一切普皆平等
無有彼此愛憎之心
我無貪著亦無限礙
恒爲一切平等說法

24

第 112 図　巻第三　藥草喩品第五（5）

如爲一人衆多亦然
常演説法會無他事
去來坐立終不疲厭
充足世間如雨普潤
貴賤上下持戒毀戒
威儀具足及不具足

25

或處人天
轉輪聖王
釋梵諸王
是小藥草

26

求世尊處
我當作佛
行精進定
是上藥草
又諸佛子
專心佛道
常行慈悲
自知作佛

27

決定無疑
是名小樹
安住神通
轉不退輪
度無量億
百千衆生
如是菩薩
名爲大樹

28

佛
平
等説
如一味雨
隨衆生性
所受不道[注1]

注1　誤字　大経では同

我雨法雨充
滿世間一味之
法隨力
修行
如彼叢林
藥草諸樹
隨其大小
漸增茂好

29

諸佛之法
常以一味
令諸世間
普得具足

30

第 113 図　巻第三　藥草喩品第五（６）

31

處於山林
住最後身聞
法得果是名
藥草各得
増長若
諸菩薩
智慧堅固
了達三界

32

求最上乘
是名小樹
而得増長
復有住禪

33

得神通力
聞諸法空
心大歡喜
般放無數
光度諸
衆生

是名大樹
而得増長
如是迦葉
佛所説法
譬如大雲

注1　加筆

35

迦葉當知
以諸因縁
種種譬喩
開示佛道

34

以一味雨
潤於人華
各得成實

第 114 図　巻第三　藥草喩品第五（７）

2

弟子摩訶迦葉於未來世

1

爾時世尊說是偈已告諸大衆唱如是言我此

3

當得奉覲三百萬億諸佛世尊供養恭敬尊重讃歎廣宣諸佛無量大法於最後身得成爲佛

4

名曰光明如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天

5

國名光德劫名大莊嚴佛壽十二小劫正法住世二十小劫像法亦住二十小劫國界嚴飾無

6

諸穢惡瓦礫荊棘便利不淨其土平正無有高下坑坎堆阜琉璃爲地寶樹行列黄金爲繩[注1]以界道側散諸寶華周徧清淨其國菩薩無量千

注1　異字形

7

億諸聲聞衆亦復無數無有魔事雖有魔及魔民皆護佛法爾時世尊欲重宣此義而説偈言

第 115 図　巻第三　授記品第六（１）

告諸比丘我以佛眼
見是迦葉於未来世
過無數劫
當得作佛
而於來世
供養奉覲

8

三百萬億諸佛世尊
爲佛智慧淨修梵行
供養最上二足尊已
修習一切無上之慧
於最後身
得成爲佛其土
清淨琉璃爲地
多諸寶樹行列
道側金繩界道

9

見者歡喜常出好
香散衆名華種種
奇[注1]妙以爲莊嚴其
地平正無有丘坑諸
菩薩衆不可稱計
其心調柔逮大神通
奉持諸佛大乘
經典諸聲聞衆
無漏後身法王之子
亦不可計乃以天眼
不能數知其佛當
壽十二小劫

10

注1　大経では奇

皆悉悚慄一心合掌
瞻仰世[注1]尊[注2]目不暫
捨卽共
同聲而説
偈言大雄猛世尊
諸釋之法王哀愍我等
故而賜佛音聲

11

注1　加筆（春日版あり）
注2　抜字　大経では顔あり

若復得王教
然後乃敢食
我等亦如是
每惟小乘過
不知當云何
得佛無上慧
雖聞佛音聲
言我等作佛

12

第116図　巻第三　授記品第六（2）

心尚懐憂懼
如未敢便食
若蒙[注1]佛授記
爾乃快安樂

注1　異字形

13

大雄猛世尊
常欲安世間
願賜我等記
如飢須教食

爾時世尊知諸
大弟子心之所念
告諸比丘是須菩

14

[注1]於當來世奉覲
三百萬億那由陀
佛供養恭敬尊重

讃歎當
修梵行
具菩薩道

注1　抜字　大経では提あり

15

於最後身得成爲
佛號曰名相如來應
供正徧知明行足

善逝世間解無上
士調御丈夫天人
師佛世尊

16

國名寶[注1]生其土
平正頗梨爲地
寶樹荘嚴無諸
丘坑沙礫荊棘
便利之穢

寶華覆地
周徧清淨其土
人民皆處寶臺
珍妙樓閣聲聞
弟子無量

注1　以降　文字改行不明

17

第 117 図　巻第三　授記品第六（３）

18

無邊算數
譬諭所不能知諸
菩薩衆無數千萬
億那由他佛壽十二
小劫正法住世二十
小劫像法亦住二
十小劫其佛常處
虛空爲衆説法度
脱無量菩薩及
聲聞衆

19

爾時世尊欲重宣此義
而説偈言諸比丘衆
今告汝等皆當一心
聽我所説我大
弟子須菩提者
當得作佛號
曰名相
當供無數
萬億諸佛隨佛
所行漸具大道最後身
得三十二相端正姝妙猶
如寶山其佛國土嚴
淨第一

20

衆生見者無不愛樂
佛於其中度無量衆
其佛法中多諸菩薩
皆悉利根轉不退輪
彼國常以菩薩莊
嚴
諸聲聞衆不
可稱數皆得三明具六
神通住八解脱有大
威德其佛説法現於
無量神通變化不
可思議諸天人民

21

數如恒沙皆
共合掌聽受
佛語其佛當
壽十二小劫
正法住世
二十小劫
像法亦住
二十小劫爾時
世尊復告諸比丘

第 118 図　巻第三　授記品第六（4）

衆我今語汝是
大迦旃延於當來
世以諸供具
供養奉事八千
億佛悉敬
尊重

注1

注1　裏面 文字改行不明

諸佛滅後各起塔廟高千由旬縦廣正
等五百由旬皆以

22

金銀琉璃硨磲[注1]碼碯[注2]
磂眞珠玫瑰七寶
合成衆華瓔珞塗
香抹香燒香
繒蓋幢幡
供養

塔廟過是已
後當復供養
二萬億佛亦復
如是供養是諸佛
已具菩薩道

注1　誤字 大経では車
注2　誤字 大経では馬瑙

23

當得作佛號曰闍
浮那提金光如來
應供正遍知
明行足

善逝世間
解無上士調御
丈夫天人師佛世
尊其土平正頗
梨爲

24

無量萬億莊嚴
其國佛壽十二
小劫正法

住世二十
小劫像法亦住
二十小劫爾時

25

第 119 図　巻第三　授記品第六（５）

而說偈言
諸比丘衆皆一心
聽如我所說
眞實無
異

是迦栴延
當以種種
妙好供具
供養諸佛

26

諸佛滅後
起七寶塔[注1]
亦以華香
供養舍利
其最後身
得佛智慧
成等正覺
國土清淨
度脫無量

萬億衆生
皆爲十方
之所供養
佛之光明
無能勝者
無能勝者
其佛號曰
閻浮金光
菩薩聲聞
斷一切有
無量無數

27

注1　異字形

莊嚴其國
爾時世尊復
告大衆我

今語汝是大
目揵連當以
種種供具

28

供養八千
諸佛恭敬
尊重諸佛

滅後各起塔
廟高千由旬
縱廣正等
五百由旬皆

29

以金銀琉璃硨[注1]
磲碼[注2]碯眞珠玫
瑰七寶合成

衆華瓔珞
塗香抹香
燒香繒蓋
幢幡以

30

注1　誤字　大経では車
注2　誤字　大経では馬瑙

第 120 図　巻第三　授記品第六（6）

用供養[注1]是已後
當復供養二百
萬億諸佛亦
復如是當得
成佛號曰
多摩羅跋
栴檀香如來應
供正徧知明行足
善逝世間解無
上士調御

注1　抜字 大経では過あり

31

丈夫天人師佛世尊劫名
喜滿國名意樂其土平
正頗梨爲地寶樹
莊嚴散眞珠
華周徧清淨見者
歡喜多諸天人菩薩聲
聞其數無量佛壽
二十四小劫正法

32

住世四十小劫
像法亦住四十小
劫爾時世尊欲
重宣此義而說
偈言
我此弟子大目揵
連捨是身已得
見八千二百萬億
諸佛世尊
爲佛道故

33

供養恭敬
於諸佛所
常修梵行
於無量劫
奉持佛法
諸佛滅後
起七寶塔
長表金刹
華香伎樂
而以供養
諸佛塔廟
漸漸具足
菩薩道已

34

第 121 図　巻第三　授記品第六（７）

於意樂國
而得作佛
號多摩羅
栴檀之香

其佛
壽命
二十四
劫

35

菩薩無數
志固精進
於佛智慧
皆不退轉

佛滅度後
正法當住
四十小劫
像法亦爾

36

我諸弟子
威德具足
其數五百
皆當授記

於未來世
咸得成佛
我及汝等

37

吾今當說
汝等善聽
佛(注1)告諸比丘

乃往過去
無量無邊不
可思議

注1　以降　四行は大経の
化城喩品第七の頭を書写

38

第 122 図　巻第三　授記品第六（８）

妙法蓮華經
化城諭品第七

1

注1　二行は大経の授記品第六の末部分を書写
38番石経に授記品第六末と化城喩品頭を連続書写

吾今當説　注1
汝等善聽
佛告諸比丘
乃往過去
無量無邊不
可思議

2

阿僧祇劫爾時
有佛名大通智勝
如來應供正徧知
明行足善逝
世間解無上
士調御丈夫

3

天人師佛世尊
其國名好成劫
名大相諸
比丘
彼佛
滅度已來
甚大久遠
譬如三千
大千世界

4

所有地
種假使有人
磨以爲墨過於
東方千國土
乃下一點大如微
塵又過千
國土

5

第 123 図　巻第三　化城喩品第七（１）

復下一點如是展
轉盡地種墨於汝
等意云何是
諸國土若算師
若算師弟子
能得邊
際知其數不
不也世尊諸
比丘是人所經
國土若點不點
盡末爲塵一塵一劫
彼佛滅度

6

已來復過
是數無量
無邊百千
萬億阿僧祇
劫我以
如來知見力
故觀彼久遠猶
若今日爾時世尊

7

而説偈言[注1]

8

注1　他に配される可能性あり

如是諸國土
點與不點等
復盡抹爲塵
一塵爲一劫

9

此諸微塵數
其劫復過是
彼佛滅度來
如是無量劫
如來無礙智
知彼佛滅度
及聲聞菩薩
如見今滅度

10

諸比丘當知
佛智淨微妙
無漏無所礙
通達無量劫

11

第 124 図　巻第三　化城喩品第七（2）

12

佛告諸比丘大
通智勝佛壽
五百四十萬億
那由他劫其佛
本坐道場破
魔軍已垂
得
阿耨多
羅三藐三菩
提而諸佛法
不現在前如是
一小劫乃至十
小劫結跏趺坐

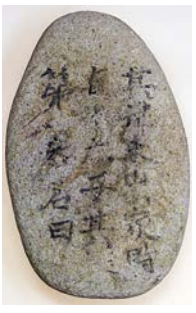
13

身心不動而諸佛
法猶不在前爾時
忉利諸天先爲彼
佛於菩提樹下
敷師子座
高一由旬佛於此
座當得阿耨多羅
三藐三菩提適坐
此座時諸梵
天王

14

注1　抜字 大経では智あり

佛當擊天鼓其餘諸
天作天伎樂滿十小
劫至于滅度
亦復如是
諸比丘
大通[注1]勝佛
過十小劫



15

諸佛之法乃
現在前成阿
耨多羅三藐
三菩提
其佛未出[注1]家時
有十六子其
第一者名曰

第 125 図　巻第三　化城喩品第七（３）

智積
諸子各有種種
珍異玩好之具聞父
得成阿耨
多羅
三藐
三菩提皆捨所
珍往詣佛所
諸母涕泣而
隨送之

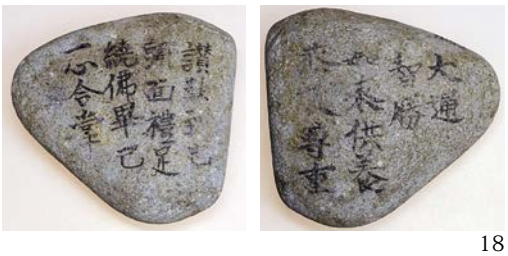
16

其祖轉輪
聖王與一百
大臣及餘
百千萬億
人民皆共
圍繞隨至
道[注1]咸欲親
近

注1　抜字　大経では場あり

17

大通
智勝
如來供養
恭敬尊重
讚歎到已
頭面禮足
繞佛畢已
一心合掌



18

瞻仰世尊
以偈頌曰
大威德世尊爲度
衆生故於無量
億歳[注1]爾乃
得成佛
諸願
已
具足

注1　誤字　大経では劫（春日版と同じ）

19

善哉吉無上
世尊甚希有
一坐十小劫
身體及手足
靜然安不動
其心常恢怕
未曾有散亂

20

第 126 図　巻第三　化城喩品第七（４）

究竟永寂滅
安住無漏法今
者見世尊
安隱

成佛道我等
得善利稱慶
大歡喜衆生
常苦惱

21

盲瞑無導師
不識苦盡道不
知求解脫長

夜增惡趣減損
諸天衆從冥
入於冥永不聞
佛名

22

今佛得最上
安隱無漏道
我等及天人

23

爲得最大利
是故咸稽首
歸命無上尊

爾時十六王子
偈讃佛已
勸請世尊
轉於法輪

24

咸作是言
世尊説法
多所安隱

憐愍饒益
諸天人民
説偈言

25

世雄無等倫
百福[注1]莊嚴

26

注1　抜字　大経では自あり

第 127 図　巻第三　化城喩品第七（５）

27

得無上智慧
願爲世間説
度脱於我等

及諸衆生類
爲分別顯示
令得是智慧
若我等得佛

28

衆生亦復然
世尊知衆生
深心之所念
亦知所行道
又知智慧
力

29

欲樂及修福
宿命所行業
世尊悉知已
當轉無上輪
佛告諸比丘

30

大智勝佛
得阿耨多
羅藐三
菩提時

注1　抜字　大経では通あり
注2　抜字　大経では三あり

31

十方各五百萬
億諸佛世界
六種震動其
國中間

第128図　巻第三　化城喩品第七（6）

幽冥之處日月
威光所不能照而皆
大明其中衆生

各得相見咸作是言
此中云何忽生衆生
又其國界

32

諸天宮殿乃至梵
宮六種震動大光
普照徧滿世界
勝諸天光

爾時
東方五百萬
億諸國[注1]中梵天
宮殿光明照曜
倍於常明諸

注1　抜字　大経では土あり

33

梵天王各作是念
今者宮殿光明

昔所未有
以何因緣
而現此相

34

是時諸梵
天王即各相詣

共議此事時彼
衆中有一大梵天王
名救一切

35

爲諸梵衆
而説偈言
我等諸宮
殿

光明昔未有
此是何因緣
宜各共求之

36

第 129 図　巻第三　化城喩品第七（７）

37

爲大德天生爲佛出世間
而此大光明徧照於十方
爾時五百萬億國土
諸梵天王與宮殿俱各
以衣裓盛諸天華

38

共詣西方推
尋是相見大
通智勝如來
處于道場
菩提樹下坐師
子座諸天龍
王

39

乾闥婆緊那羅
摩睺羅伽人非人
等
恭敬圍繞
及見十六王子
請佛轉法輪卽

40

時諸梵天王
頭面禮佛
繞百千匝
卽以天華
而散佛上

41

其所散華
如須彌山
并以供養
佛菩提樹其
菩提樹

第 130 図　巻第三　化城喩品第七（８）

高十[注1]旬華供
養已各以
宮殿
奉上彼佛
而作是言唯
見哀愍饒益我

注1　抜字　大経では由あり

42

時諸梵天王
卽於佛前
一心同聲以
偈頌曰

43

世尊甚希
有難可得
値遇具
無量功德

44

能救護
一切
天人
之大師

45

哀愍於世間
十方諸衆生
普皆蒙饒益
我等所從來
五百萬億國
捨深禪定樂
爲供養佛故
我等先世福

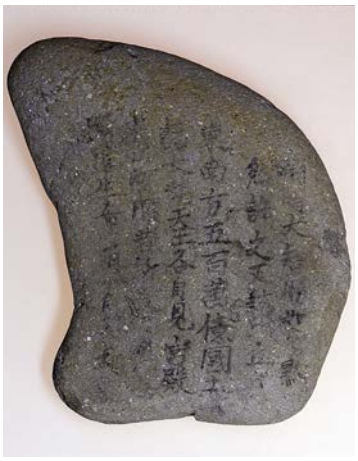
46

宮殿甚嚴飾今以奉
世尊唯願哀納受
爾時諸梵天王偈讃佛已
各作是言

47

第 131 図　巻第三　化城喩品第七（９）

唯願世尊轉於法輪度脫衆生
開涅槃道時[注1]梵天王一心同聲而
說偈言世雄兩足尊唯願
演說法以大慈悲力
度苦惱衆生



48

爾時大[注2]智勝如來默
然許之又諸比丘
東南方五百萬億國土
諸大梵王各自見宮殿
光明照曜昔所未有歡喜
踊躍生希有心即各相

注1　拔字 大経では諸あり
注2　拔字 大経では通あり

是事
何因緣
而現如
此相

49

50

未曾見此相
當共一心求

過千萬億土
尋光共推之

51

多是佛出世
度脫苦衆生
爾時五百萬億
諸梵天王

與宮殿俱各以衣
裓盛諸天
華共詣

52

第 132 図　巻第三　化城喩品第七（10）

西北方推
尋是相見大
通智勝如來
注1

注1　裏面 文字改行不明
處干道場か

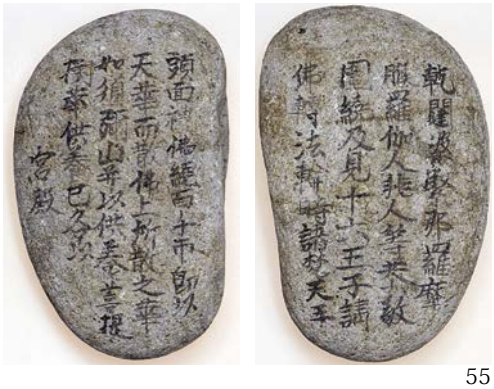
53

菩提樹下
坐師子座
諸天
龍王

54

乾闥婆緊那羅摩
睺羅伽人非人等恭敬
圍繞及見十六王子請
佛轉法輪時諸梵天王
頭面禮佛繞百千帀卽以
天華而散佛上所散之華
如須彌山并以供養[注1]菩提
樹華供養已各以
宮殿

注1　抜字 大経では佛あり


55

奉上彼佛而作是
言唯見哀愍饒益
我等所獻宮殿
願垂納
受
爾時諸梵天王
卽於佛前

56

一心同聲以偈
頌曰聖主天中天[注1]
迦陵頻伽聲
哀愍衆生者
我等今敬禮
世尊甚希有久
遠乃一現
一百八十劫
空過無有佛

注1　誤字 大経では王（春日版と同じ）

57

三惡道充滿
諸天衆減少
今佛出於世爲
衆生作眼
世間所歸趣救護
於一切爲
衆生
之父

58

第 133 図　巻第三　化城喩品第七（11）

59

哀愍饒益者
我等宿福慶
今得値世尊

爾時諸梵
天王偈讃佛已
各作是言

60

唯願世尊哀愍一切
轉於法輪度脱衆生
時諸梵天王一心同聲
而説偈言

大聖轉法輪
顯示諸法相
度苦惱衆生
令得大歡喜
衆生聞此法

61

得道若生天
諸惡道減少
忍善者増益

爾時大通智勝
如來默然許之又

62

諸比丘南方
五百萬億國土
各自見[注1]

宮殿光明
曜昔所未有歡喜[注2]

注1　抜字　大経では諸大梵王あり
注2　抜字　大経では照あり

第 134 図　巻第三　化城喩品第七（12）

踊躍生希有心
卽各相詣共
議此事以何
因緣我等

宮殿有此光
曜時彼衆
中有一大
梵天王

63

名曰妙法爲諸
梵衆而説偈言

我等諸宮殿
光明甚威曜
此非無因緣
是相宜求之
過於百千劫
未曾見是相
爲天德天生
爲佛出世間

64

注1　文字改行不明　三面に書写の可能性あり

與宮殿俱各以衣裓
盛諸天華共詣
北方推尋是相見
大通智勝如來
處于道場

菩提樹下

65

及見十六
王子請佛
轉法輪時

諸梵天王
頭面禮佛

66

第 135 図　巻第三　化城喩品第七（13）

繞百千帀卽以
天華而散佛上
所散之華如須
彌山并以供養

67

佛菩提樹
華供養已
各以宮殿
奉上彼佛
而作是言
唯見哀愍

68

饒益我等所獻
宮殿願垂納受爾時
諸梵天王卽於
佛前一心同
聲
以偈頌曰
世尊甚難見破
諸煩惱者過百三
十劫今乃得

69

無量智慧者
如優曇鉢羅[注1]
今日乃
值遇
我等諸
宮殿蒙光故
嚴飾世尊
大慈悲

注1　誤字　大経では花（春日版と同じ）

70

偈讚佛已各作
是言唯願世尊
轉於法輪
令一切
世間諸
天魔梵沙門
婆羅門

71

皆獲安隱
而得度脫時
諸梵天王
一心同
聲以偈
頌曰

72

第 136 図　巻第三　化城喩品第七（14）

唯願天人尊
轉無上法
輪
擊于大法
鼓而吹大法螺
普雨

73

衆生
我等咸歸
請當演深
遠音

74

爾時上方五
百萬億國土
諸大梵王皆
悉自覩
所止宮
殿

75

光明威曜
昔所未有
歡喜
踊躍

76

生希有心
即各相詣
共議此事
以何
因緣

77

我等宮殿

78

名曰尸棄
爲諸梵衆
而說偈言
今以何因緣
我等諸宮殿
威德光明曜

79

第 137 図　巻第三　化城喩品第七（15）

嚴飾未曾有
如是之妙相
昔所未聞見

80

爲大德天生爲

81

佛出世間爾
時五百萬億
諸梵天王與宮
殿俱各以衣裓

82

十六王子請
佛轉法輪時
諸梵天王
頭面禮佛
繞百千帀
卽以天華
而散佛上

83

奉上彼佛而
作是言唯見
哀
愍饒益
我等所
獻宮殿

84

願垂納受時諸
梵天王卽於佛
前一心同聲
以偈頌曰
善哉見諸佛救世
之聖尊能於三界
獄勉出諸衆生

85

第 138 図　巻第三　化城喩品第七（16）

普智天人尊哀
愍群萌類能開甘露
門廣度於一切
於昔無量劫
空過無有佛
世尊未出時

86

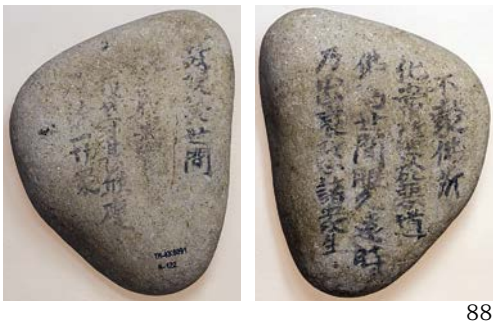
失樂及樂想
住於邪見法
不識
善此[注1]則

注1　誤字　大経では儀

87

不蒙佛所
化常墮於惡道
佛爲世間眼久遠時
乃出哀愍諸衆生

故現於世間
超出成正覺
我等甚欣慶
及餘一切衆



88

喜歎未曾有我等諸
宮殿蒙光故嚴飾
今以奉世尊唯垂
哀納受

願以此功德
普及於一切
我等與衆生
皆共成佛道

89

爾時五百萬億諸
梵天王偈讃佛已
各白佛言唯願
世尊轉於法
輪

多所安隱
多所度脫時
諸梵天王而說
偈言
世尊轉法輪

90

第 139 図　巻第三　化城喩品第七（17）

擊甘露法鼓
度苦惱衆生
開示涅槃道
唯願受我請
以大微妙音

91

哀愍而敷演
無量劫習法爾
時大通智勝
如來
受十方
諸梵天王及十

92

六王子請
即時
三轉
十二行法輪
若沙門婆羅
門若天魔梵

93

老死憂悲苦
惱無明滅則
行滅行滅
則
識滅
識滅則
名色滅
名色滅則

94

六入滅六入滅
則觸滅觸
滅則
受滅
受滅則
愛滅

95

第 140 図　巻第三　化城喩品第七（18）

愛滅則取滅
取滅則有滅有
滅則生滅生滅
則
老死憂悲苦惱
滅佛於天人大衆
之中説是法

96

時六百萬億那由
佗人以不受一切法
故而於諸漏心得
解脫皆得深妙
禪定三明六通具八
解脫第二第三第四説
法時

97

亦以不受一切
法故而
而[注1]於諸漏
心得解脫
從是
已後

注1　重複

98

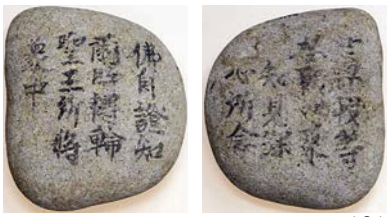
智慧明了已曾
供養百千萬億
諸佛淨修梵行
求阿耨多羅
三藐三菩提
俱白佛言
世尊是諸
無量千萬
億大德聲聞

99

皆已成就世尊
亦當爲我等
説阿耨多羅
三藐三
菩提法我等
聞已皆共
修學

100

第 141 図　巻第三　化城喩品第七（19）



世尊我等
志願如來
知見深
心所念
佛自證知
爾時轉[注1]輪
聖王所將
衆中

注1　異字形

101

八萬億人見十
六王子出家
亦求出家王
卽聽許

102

爾時彼佛受沙彌
請過二萬劫已乃
於四衆之中
説是大乘經
名妙法蓮華[注1]經

注1　加筆

103

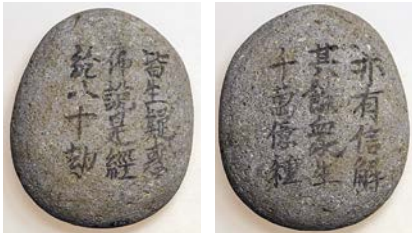
教菩薩法
佛所護念
説是經已
十六汝[注1]彌
爲阿耨多
羅三藐
三菩提

注1　誤字 大経では沙

104

故皆共受持諷
誦通利説是
經時十六
菩薩沙彌皆悉
信受聲聞衆中

105



亦有信解
其餘衆生
千萬億種
皆生疑惑
佛説是經
於八十[注1]劫

注1　誤字 大経では千

106

第142図　巻第三　化城喩品第七（20）

未曾休廢[注1]此經已
卽入靜室住於禪
定八萬四千劫是
時十六菩薩沙彌
知佛入室寂然禪
定各昇法座亦於八
萬四千劫爲四部
衆廣説分別

注1　抜字　大経では説あり

107

妙法華經一一
皆度六百萬億
那由佗恒河沙等
衆生示教利喜
令發阿耨多羅
三藐三菩提心
大通智勝佛過[注1]
八萬四千劫已
從三昧起
往詣法座

注1　異字形

108

安詳而
坐普告大
衆是十六
菩薩沙彌
甚[注1]希有
諸根通利
智慧明了
已曾供養

注1　抜字　大経では爲あり

109

無量千萬億數
於[注1]諸佛所常
修梵行受持
佛智
開示衆生
令入其中汝等
皆當數數親近
而供養之所以

注1　抜字　大経では諸佛あり

110

者何若聲聞辟
支佛又[注1]諸菩薩
能信是十六
菩薩所説
經法
受持不毀
者是人皆當
得阿耨多羅
三藐三
菩提

注1　誤字　大経では及

111

第 143 図　巻第三　化城喩品第七（21）

如來之慧佛告
諸比丘是十六菩薩
常樂說是
妙法蓮華經
一一菩薩所化
六百萬億那由佗
恒河沙等衆生
世世所生與

112

菩薩俱從其聞法
悉皆信解以此因
緣得値四萬億[注1]
諸佛世尊
于今不盡諸
比丘我今語
汝彼佛弟子十六沙彌
今皆得阿耨

注1　抜字　大経では百あり（春日版と同じ）

113

多羅三藐三菩提於
十方國土現在説法
有無量百千萬億
菩薩聲聞以爲眷屬
其二沙彌東方作佛
一名阿閦

114

在歡喜國二名
須彌頂東南方
二佛一名師子音

115

二名師子相
南方二佛一
名虛空
住二名
常滅

116

西南方二佛
一名帝相二名
梵相西方
二佛一名
阿彌陀

117

第 144 図　巻第三　化城喩品第七（22）

二名度一切
世間苦惱
西北方
二佛

118

一名多摩羅
跋栴檀香
神通
二名須彌
相北方二佛

119

第十万[注1]
我釋迦牟尼
佛於娑婆
國土
成阿耨
多羅三藐三
菩提諸比丘
我等爲沙彌

注1　誤字　大経では六

120

時[各]各教化
無[量]百千萬[億]
[恒]河沙[等]衆
生[從]我聞法
爲阿耨多羅
三藐三菩[提]

121

此諸衆生于[今]
有住聲聞地
者我常
[教]化
阿耨多羅
三藐三菩[提]

122

如來智慧
難信難解
爾時所[化]
無量恒河沙
等衆生者

123

第 145 図　巻第三　化城喩品第七（23）

汝等
諸比丘
及
我滅度
後

124

未來世中
聲聞弟子
是也

125

我滅度後復
有弟子不聞
是經
不知不覺
菩薩所行

126

自於所得
功德生滅度
想當入涅槃
我於餘國
作佛更有
異名是人

注1　異字形

127

雖生滅度
之相[注1]
入於涅[注2]槃而於
彼土求佛智慧

注1　誤字　大経では想
注2　書き加え

128

得聞是
經唯以
佛乘
而得滅
度更無餘
乘

129

除諸如來方便說法諸
比丘若如來自知涅槃
時到衆又清淨信解
堅固了達空法深入
禪定便集諸菩薩
及聲聞衆爲說是經
世間無有二
乘而得滅

130

第 146 図　巻第三　化城喩品第七（24）

131

度唯
一佛乘
得滅度
耳比丘當知
如來方便

深入衆生之性知[注1]其志樂
小法深有[注2]五欲爲是等故
説於涅槃是人若聞則
便信受譬如

五百由旬險難
惡道曠絶無人
怖畏之處若有

注1　誤字　大経では如（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では著

132

多衆欲過
此道至珍寶
處有

一導師聰慧
明達善知險道
通塞之相將

133

不能復進前
路猶遠今欲
退還導師

多諸方便
而作是念
此等可愍
云何捨大

134

珍寶而欲退還作是念
已以方便力於險道中
過三百由旬化作一城告

衆人言汝等勿怖莫
得退還今此大城可

135

第 147 図　巻第三　化城喩品第七（25）

我等今者免斯惡
道快得安隱於是衆人
前入化城生已度
想生安隱想
爾時導師
知此人衆既得
止息無復疲倦

136

語衆人言汝
等去來寶處
在近向者大
城我所化作
爲止息耳
諸比丘如來亦
復如是今爲
汝等作大

137

導師知諸
生死煩惱惡
道險難長
遠應去
應度若衆生
但聞一佛乘
者則不欲

138

親近便作是念
佛道長遠久
受勤苦
乃可
得成佛知是心
怯弱下劣

139

以方便力而
於中道爲止
息故說
二涅槃

140

第 148 図　巻第三　化城喩品第七（26）

若衆生
住於二地
如來爾時
即便爲
說

141

汝等所作未辦汝
所住地近於佛慧
當觀察籌量
所得涅槃非真
實也但

142

是
如來方便
之力

143

於一佛乘
分別說
三如彼

144

導師爲止息故
化作大作即知
息已而告之
言寶處在近
此城非實

145

我化作耳爾時
世尊欲重宣此義而
說偈言
大通智勝佛
十劫坐道場
佛法不現前
不得成佛道

146

諸天神龍王
阿脩羅衆等
常雨於天華
以供養彼佛
諸天擊天鼓
并作衆奴樂[注1]

注1　誤字　大経では伎

147

第 149 図　巻第三　化城喩品第七（27）

香風吹萎華
更雨新好者
過十小劫已
乃得成佛道

148

諸天及世人
心皆懷踊躍
彼佛十六子
皆與其眷屬
千萬億圍繞

149

俱行至佛所頭面禮佛足
而請轉法輪聖師子法雨
充我及一切

150

諸梵見此相
尋來至佛所
散華[注1]以供養
并奉上宮殿

注1　同音同義字　大経では花
（春日版と同じ）

151

請佛轉法輪
以偈而讃歎
佛知時未至
受請默然坐
三方及四維
上下亦復爾

152

散華[注1]奉宮殿
請佛轉法輪
世尊甚難値
願以大慈悲
廣開甘
露門
轉無上法輪

注1　同音同義字　大経では花
（春日版と同じ）

153

第 150 図　巻第三　化城喩品第七（28）

無量慧世尊　受彼衆人請　爲宣種種法　四諦十二緣

154　155

無明至老死　皆從生緣有　如是衆過患　汝等應當知　宣暢是法時　六百萬億姟　得盡諸苦際　皆成阿羅漢　第二説法時　千萬恒沙衆　於諸法不受

156

亦得阿羅漢　從是後得道　其數無有量　萬億劫算數　不能得其邊　時十六王子　出家作沙彌　皆共請彼佛　演説大乘法

157

慧眼第一淨　佛知童子心　宿世之所行　以無量因緣　我等及營從　皆當成佛道　願得如世尊

158

種種諸譬諭　説六波羅蜜　及諸神通事　分別眞實法　菩薩所行道

159

第 151 図　巻第三　化城喩品第七（29）

160

説是法華經　一心一處坐　八萬四千劫　是諸沙彌等　知佛禪未出

161

如恒河沙偈　彼佛説經已　靜室入禪定　爲無量億衆　説佛無上慧　各各坐法座　説是大乘經　於佛宴寂後　宣揚助法化　一一沙彌等　所度諸衆生

162

有六百萬億　恒河沙等衆　彼佛滅度後　是諸聞法者　在在諸佛土　常與師俱生　是十六沙彌　具足行佛道

163

今現在十方　各得成正覺　爾時聞法者　各在諸佛所

164

其有住聲聞　漸教以佛道　我在十六數　曾亦爲汝説

165

是故　以方便　引汝趣佛慧

166

以是本因緣　今説　法華經

第 152 図　巻第三　化城喩品第七（30）

令汝入佛道　慎勿懷驚懼　譬如險惡道　迴絶多毒獸　又復無水草　人所怖畏處　無數千萬衆

167

欲過此險道　其路甚曠遠　經五百由旬[注1]　時有一導師　強識有智慧　明了心決定

注1　誤字　大経では三（春日版はと同じ）

168

在險濟衆難　衆人皆疲惓　而白導師言　我等今頓乏　於此欲退還

169

導師作是念　此輩甚可愍　如何欲退還　而失大珍寶

170

尋時思方便　當設神通力　化作大城郭　莊嚴諸舍宅　周帀有園林　渠流及浴池　重門高樓閣

171

男女皆充滿　即作是化已　慰衆言勿懼　汝等入此城

172

第 153 図　巻第三　化城喩品第七（31）

173

各可隨所樂
諸人既入城
心皆大歡喜

174

皆生安隱
想自謂已得度
導師知息已集
衆而告言

175

汝等當前進
此是化城耳
我見汝疲極
中路欲退還

176

故以方
便力
權化作
此城

177

汝等勤精進
當共至寶所

178

我亦復如是
爲一切導
師
見諸
求道者

179

中路
而懈廢
不能度生死

180

言汝等苦滅所作皆已辦
既知到涅槃皆得阿羅漢
爾乃集大衆爲說眞實法
諸佛方便力分別說三乘
唯有一佛乘息處故說二
今爲汝說實汝所得非滅
爲佛一切智當發大精進
汝證一切智十力等佛法
具三十二相乃是眞實滅
諸佛之導師爲息說涅槃
既知是息已引入於佛慧
妙法蓮華經卷第三

第 154 図　巻第三　化城喩品第七（32）

1

妙法蓮華經[注1]
五百弟子受記品
第八番[注2]
爾時富樓那彌多
羅尼子從佛聞是
智慧方便隨宜
說法又聞授諸大
弟子阿耨多羅
三藐三菩提記
復聞宿世因
緣

注1　抜字　大経では巻第四あり
注2　加筆

2

之事復聞諸佛有大自在
神通之力得未曾有心淨
踊躍即從座起到於佛前
頭面禮足却住一面瞻仰
尊顏目不暫捨而作是念
世尊甚奇特所爲希有隨
順世間若干種性以方便知
見而爲說法拔出衆生處處
貪著我等於佛功德言
不能宣唯佛世尊能知

3

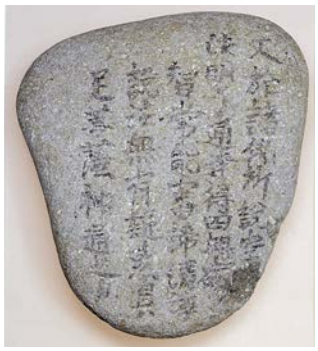
我等深心本
願爾時佛告
諸比丘汝等見
是富樓那彌
多羅尼子
不我常稱其
於說法人中
最爲第一亦當
歎其種種功德

4

精勤護持助宣
我法能於四衆
示教利喜具
足解釋佛之
正法而大
饒益同梵
行者自捨如來
無能盡其言論
之辯汝等

第 155 図　巻第四　五百弟子受記品第八（１）

勿謂富樓那但能護
持助宣我法亦於過去
九十億諸佛所護持
助宣佛之正法於彼説
法人中亦最
第一



又於諸佛所説空
法明了通達得四無礙
智常能審諦清淨
説法無有疑惑具
足菩薩神通之力

5

隨其壽命常修梵行
彼佛世人咸皆謂之實是
聲聞而富樓那以斯方便饒益
無量百千衆生又化無量阿
僧祇人令[注1]阿耨多羅三藐
三菩提

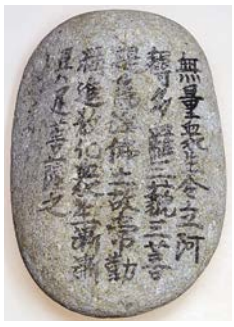
爲淨佛土故常作佛事
教化衆生諸比丘富樓那亦
於七佛説法人中而得第一
今於我所説法人中亦爲第一
於賢劫中當來諸佛説
法人

6

注1　抜字 大経では立あり（春日版と同じ）

中亦復第一而皆
護持助宣佛法亦於
未來護持助宣無
量無邊諸佛之法
教化饒益

無量衆生令立阿
耨多羅三藐三菩
提爲淨佛土故常勤
精進教化衆生漸漸
具足菩薩之



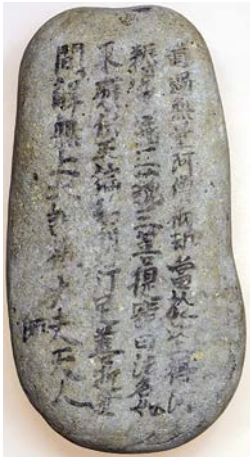
7

第 156 図　巻第四　五百弟子受記品第八（２）

道過無量阿僧祇劫當於此土得阿
耨多羅三藐三菩提號曰法名[注1]如
來應供正徧知明行足善逝世
間解無上士調御丈夫天人
師

佛世尊其佛以恒河沙等三千
大千世界爲一佛土七寶爲地
地平如掌無有山陵谿澗壑[注2]七
寶臺觀充滿其中諸天宮殿近

注1　誤字 大経では明
注2　異字形



8

處虛空人天交接兩
得相見無諸惡道亦無
女人一切衆生皆以化生
無有婬欲得大神通
身出光明飛行

自在志念堅固精進
智慧普皆金色三十二相
而自莊嚴其國衆生常
以二食一者法喜
食

9

二者禪悅食有無量
阿僧祇千萬億那由
佗諸菩薩衆得大神
通四無礙智善能教
化衆生之類其聲聞
衆算數校計所
不能知

皆得具足
六通三明及
八解脫其佛國
土有如是等無
量功德莊嚴成就
劫名寶明國名
善淨其佛壽命

10

第 157 図　巻第四　五百弟子受記品第八（３）

無量阿僧祇劫
法住甚久佛滅度
後起七寶塔偏
滿其國

爾時世尊
欲重宣此義
而說偈言

11

諸比丘諦聽
佛子所行道
善學方便故
不可得思議

12

知衆樂小法
而畏於大智
是故諸菩薩
作聲聞緣覺

以無數方便
化諸衆生類
自說是聲聞
去佛道甚遠

13

度脫無量衆
皆悉得成就
雖小欲懈怠
漸當令作佛

內祕菩薩行
外現是聲聞
少欲厭生死
實自淨佛土

14

示衆有三毒
又現邪見相
我弟子如是
方便度衆生

若我具足說
種種現化事
衆生聞是者
心則懷疑惑

今此富樓那
於昔千億佛
勤修所行道
宣護諸佛法

15

第 158 図　巻第四　五百弟子受記品第八（4）

為求無上慧
而於諸佛所
現居弟子上
多聞有智慧
所説無所畏
能令衆歡喜
未曾有疲倦

17

16

而以
助佛事
已度
大神通

18

具四無礙慧[注1]
知衆根利鈍
常説清淨法
演暢如是義
教諸千億衆
令住大乗法
而自淨佛土
未來亦供養

注1　誤字　大経では智（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では諸（春日版と同じ）

19

20

無量無數佛
護助宣正法
亦自淨佛土
常以諸方便
諸法[注1]無所畏
度不可計衆
成就
一切智
供養諸如來
護持法寶藏
其後得成佛
號名曰法明
其國名善淨
七寶所合成

注1　誤字　大経では説

劫名爲寶明
菩薩衆甚多
其數無量億
皆度大神通
威德方具足
充滿其國土
聲聞亦無數
三明八解脱
得四無礙智
以是等爲僧

21

第 159 図　巻第四　五百弟子受記品第八（５）

22

其國諸衆生婬欲皆已
斷純一變化生具相
莊嚴身法喜禪
悅食更無餘
食想

23

無有諸女人
亦無諸惡道
富樓那比丘
功德悉成滿
當得斯淨土

24

賢聖[注1]衆甚多
如是無量事
我今但略説
爾時千二百阿羅
漢心自在者作是
念我等

注1　異字形

25

歡喜得未曾有若世尊各
見授記如餘大弟子者不
亦快乎佛知此等心之所念
告摩訶迦葉是千二百阿
羅漢我今當現前次第

與授阿耨多羅三藐
三菩薩記於此衆中我大
弟子憍陳如比丘當供養
六萬二千億佛然後得成
爲佛號曰普明如來應
供正徧知明行足

第 160 図　巻第四　五百弟子受記品第八（6）

善逝世間解無上士
調御丈夫天人師
佛世尊其五百阿羅
漢
優樓頻螺迦葉伽耶
迦葉那提迦葉迦留
陀夷

26

優陀夷阿㝵樓
馱離婆多劫賓那
薄拘羅周陀莎伽
陀等皆當得
阿耨多羅
三藐三菩提盡
同一號名曰普明
爾時世尊欲重宣
此義而說偈言

27

憍陳如比丘
當見無量佛
過阿僧祇劫
乃成等正覺
常放大光明
具足諸神通
名聞徧十方
一切之所敬

28

常說無上道
故號爲普明
其國土清淨
菩薩皆勇猛
咸昇妙樓閣
遊諸十方國
以無上供具
奉獻於諸佛

29

作是供養已
心懷大歡喜
須臾還本國
有如是神力

30

第 161 図　巻第四　五百弟子受記品第八（７）

佛壽六萬劫
正法住倍壽
像法復倍是法
滅天人憂

其五百比丘
次第當作佛
同號曰普明
轉次而授記

31

我滅度之後某甲當
作佛其所化世間
亦如我今日國土
之嚴淨及諸神
通力

菩薩聲聞衆
正法及像法
壽命劫多少
皆如上所説

32

迦葉汝已知
五百自在者
餘諸聲聞衆
亦當復如是
其不在此會
汝當爲宣説

爾時
五百阿羅漢
於佛前得受記
已歡喜踊躍卽從座
起到於佛前頭面禮
足悔過自責世尊
我等常作是念
自謂已得究
竟滅度

33

第 162 図　巻第四　五百弟子受記品第八（8）

34

今乃知之如無智者
所以者何我等應得
如來智慧而便自以小
智爲足世尊譬如有
人至親友家醉酒而
臥是時親友官事
當行以無價寶珠
繫其衣裏與之
而去其人醉臥
都不覺知起已遊行
到於佗國爲衣食故
勤力求索甚大艱難若
少有所得便以爲足於後
親友會遇見之而作是
言咄哉丈夫何爲衣食
乃至如是我昔欲令
汝得安樂五欲自

35

恣於某年
日月以無價寶
珠繫汝衣裏
今故現在而
汝不知
勤苦憂惱以求自
活甚爲癡也汝今
可以此寶貿易所須
常可如意無所乏
短
佛亦如是爲菩薩
時教化我等令發
一切智心而尋廢
忘不知不覺

36

既得阿羅漢道
自謂滅度資生艱
難得少爲足一切智
願猶在不失今者
世尊覺悟我等作如是
言諸比丘汝等所得
非究竟滅我久令

37

第 163 図　巻第四　五百弟子受記品第八（９）

38

汝等種佛善根以方便故
示涅槃相而汝謂爲實
得滅度世尊我今乃知
實是菩薩得受阿
耨多羅三藐三菩提記

以是因緣甚大歡喜
得未曾有爾時阿若
憍陳如等欲重宣
此義而說
偈言

39

我等聞無上
安隱授記聲
歡喜未曾有
禮無量智佛
今於世尊前
自悔諸過咎
於無量佛寶
得少涅槃分

如無智愚人
便自以爲足
譬如貧窮人
往至親友家
其家甚大富
具設諸餚饍
以無價寶珠
繫著內衣裏

40

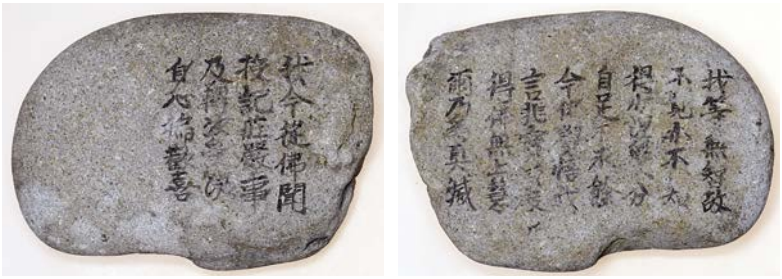
默與而捨去
時臥不覺知
是人既已起
遊行詣佗國
求衣食自濟
資生甚艱難

得少便爲足
更不願好者
不覺內衣裏
有無價
寶珠

第 164 図　巻第四　五百弟子受記品第八（10）

41

與珠之親友　後見此貧人　苦切責之已　示以所繫珠　貧人見此珠　其心大歡喜　富有諸財物　五欲而自恣　我等亦如是　世尊於長夜　常愍見教化　令種無上願



42

我等無智故　不覺亦不知　得少涅槃分　自足不求餘　今佛覺悟我　言非實滅度　得佛無上慧　爾乃爲真滅　我今從佛聞　授記莊嚴事　及轉次受決　身心徧歡喜

第 165 図　巻第四　五百弟子受記品第八（11）

妙法蓮華經授學
無學人記品
第九
爾時阿難
羅睺羅

1

而作是念我等每
自思惟設得受記
不亦快乎即從座
起到於佛前頭
面禮足俱白佛
言

世尊我等於此亦應
有分唯有如來我等所
歸又我等爲一切世間天
人阿脩羅所見知識阿難
常爲侍者護持法藏羅
睺羅是佛之子若佛[注1]授
阿耨多羅三藐三菩持[注2]
記者我願既
滿衆望

注1　抜字 大経では見あり
注2　誤字 大経では提

2

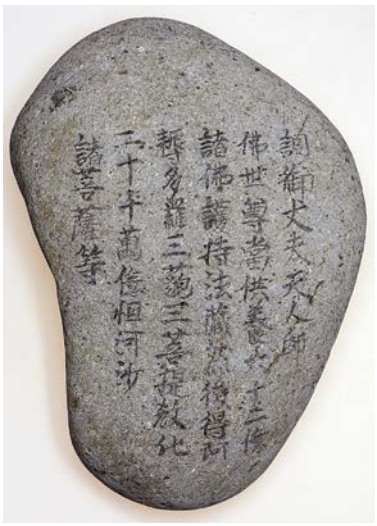
亦足爾時學無學
聲聞弟子二千人
皆從座起偏袒右
肩到於佛前
一心合掌瞻仰
世尊如阿難羅
睺羅所願住立
一面爾時

3

佛告阿難汝
於來世當得作佛
號山海慧自在
通王如來
應供正徧知
明行足善逝
世間解無上
士

4

第 166 図　巻第四　授學無學人記品第九（１）



調御丈[注1]夫天人師
佛世尊當供養六十二億
諸佛護持法藏然後得阿
耨多羅三藐三菩提教化
二十千萬億恒河沙
諸菩薩等

令成阿耨多
羅三藐三菩提
國名常立勝幡
其土清淨琉璃
爲地

注1　誤字　大経では丈

5

劫名妙音徧滿其佛
壽命無量千萬億
阿僧祇劫若人於千
萬億無量阿僧祇
劫中

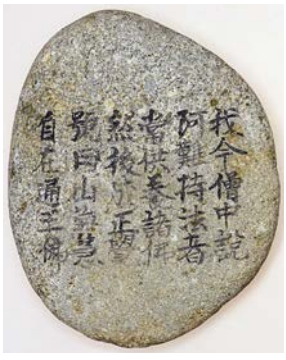
筭[注1]數校計不能得
知正法住世倍於
壽命像法住世復
倍正法阿難是山海
慧自在通王

注1　異体字　大経では算

6

佛爲十方無量千
萬億恒河沙等諸佛
如來所共讃歎稱其
功德爾時世尊欲重宣
此義而説偈言

我今僧中説
阿難持法者
當供養諸佛
然後成正覺
號曰山海慧
自在通王佛

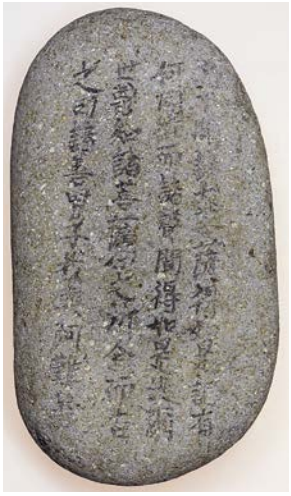


7

第 167 図　巻第四　授學無學人記品第九（２）

8

其國土清淨　名常立勝幡　教化諸菩薩　其數如恒沙　佛有大威德　名聞滿十方　壽命無有量　以愍衆生故　正法倍壽命　像法復倍是　如恒河沙等　無數諸衆生　於此佛法中　種佛道因緣　爾時會中新發意　菩薩八千人咸作是　念我等　尚不聞諸大菩薩得如是記有　何因緣而諸聲聞得如是決爾　[注1]世尊知諸菩薩心之所念而告　之曰諸善男子我與阿難等　於空王佛所同時發　阿耨多羅三藐三菩提心阿　難常樂多聞我常勤　精進是故我已得成　阿



9

注1　抜字　大経では時あり

10

耨多羅三藐三菩提　而阿難護持我法　亦護將來諸佛法　藏教化成就諸菩　薩衆其本　願　如是故獲斯記阿　難面於佛前自聞　授記及國土莊嚴　所願具足心大歡喜

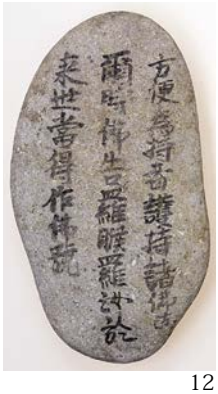
第 168 図　巻第四　授學無學人記品第九（３）

11

得未曾有卽時憶念
過去無量千萬億諸佛
法藏通達無礙如今
所聞亦識本願爾時
阿難而說偈言

世尊甚希有
令我念過[注1]去
無量諸佛法
如今日所聞
我今無復疑
安住於佛道

注1　異字形

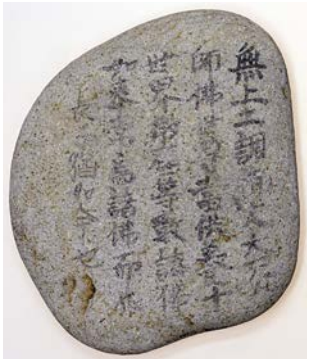
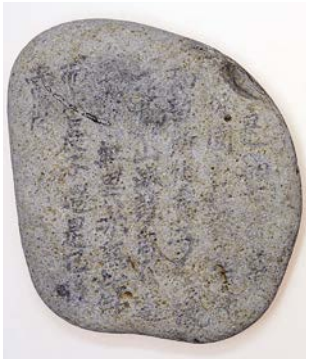


12

方便爲持[注1]者護持諸佛法
爾時佛告羅睺羅汝於
来世當得作佛號

蹈七寶華如来應
供正徧知明行足
善逝世間解

注1　誤字　大経では侍

13

無上士調御丈夫天人
師佛世尊當供養十
世界微塵等數諸佛
如來常爲諸佛而作
長子猶如今也

是蹈七寶華
佛國土莊嚴壽命
劫數所化弟子正法像
法亦如山海慧自在通
王如來無異亦爲此佛
而作長子過是已後
當得

第 169 図　巻第四　授學無學人記品第九（４）

阿耨多羅三藐三菩
提爾時世尊欲重
宣此義而説
偈言

我爲太子時
羅睺爲長子
我今成佛道
受法爲法子

14

於未來世中
見無量億佛
皆爲其長子
一心求佛道

羅睺羅密行
唯我能知之
現爲我長子
以示諸衆生

15

無量億千萬
功德不可數安住於
佛法以求無上道
爾時世尊見學
無學二千人

其意柔軟寂然
清淨一心觀佛
佛告阿難汝見
是學無學
二千人

16

不唯然已見
阿難是諸人
等當供養五
十世界微塵數

諸佛如來恭
敬尊重護持法藏
末後同時於十
方國各得
成佛

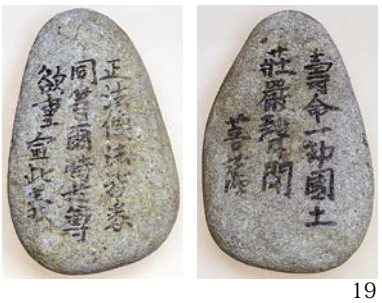
17

皆同一號名曰
寶相如來應供
正徧知明行足

善逝世間解無
上士調御丈夫
天人師佛世尊

18

第 170 図　巻第四　授學無學人記品第九（5）

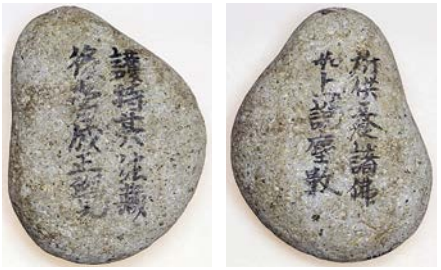


壽命一劫國土
莊嚴聲聞
菩薩
正法像法皆悉
同等爾時世尊
欲重宣此義

19

而說偈言
是二千聲聞
今於我前住
悉皆與授記
未来當成佛

20



所供養諸佛
如上說塵數
護持其法藏
後當成正覺

21

各於十方國
悉同一名號
俱時坐道
場
以證無上慧
皆名爲寶相國土
及弟子

22

第 171 図　巻第四　授學無學人記品第九（６）

正法與像法
悉等無有異
咸以諸神通
度十方衆生
名聞普周徧

漸入於涅槃
爾時學無學
二千人聞佛
授記歡喜
踊躍而
說偈
言

23

世尊慧燈明
我聞授記音
心歡喜充滿
如甘露見
灌

24

第 172 図　巻第四　授學無學人記品第九（7）

1

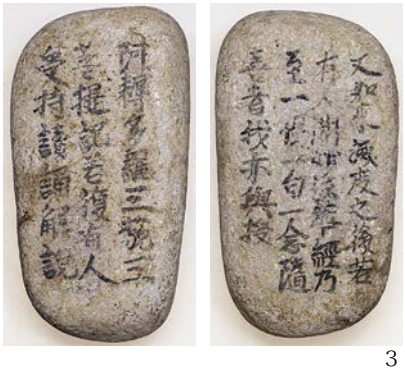
妙法蓮華經法師品第十
爾時世尊因藥王菩
薩告八萬大士
藥王汝

見是大衆中
無量諸天龍王
夜叉乾闥婆
阿脩羅迦樓羅緊
那羅摩睺羅伽人
與非人及比丘比丘尼
優婆塞優婆夷

2

求聲聞者求辟
支佛者求佛道者
如是等類咸於佛
前聞妙法華經
一偈一句乃至
一念隨喜者

我皆與授記
當得
阿耨多羅三藐三
菩提



3

又如來滅度之後若
有人聞妙法華經乃
至一偈一句一念隨
喜者我亦與授
阿耨多羅三藐三
菩提記若復有人
受持讀誦解說

第 173 図　巻第四　法師品第十（１）

4

書寫[注1]法華經
乃至一偈於此經卷
敬視如佛種種供養
華香瓔珞抹香
塗香燒香繒蓋幢幡
衣服妓樂乃至合掌
恭敬藥王當知是諸
人等已曾供養
十萬億佛

注1　抜字　大経では妙あり

5

於諸佛所成就大
願愍衆生故生此
人間藥王若有人
問何等衆生於
未来世當得作
佛應示是諸
人等於未来世
必得作佛

6

何以故若善男
子善女人於
法華經乃至
一句受持讀誦
解説書寫種
種供養經卷
華香瓔珞抹
香

7

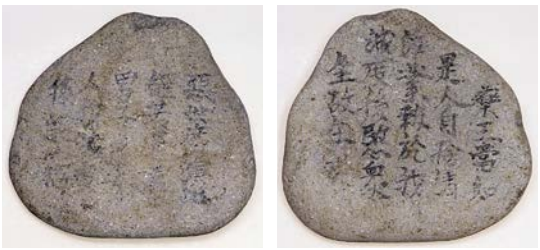
塗香燒香
繒蓋幢幡
衣服妓樂合掌
恭敬是人一切
世間所應瞻
奉應以

第 174 図　巻第四　法師品第十（2）

如來供養而供養
之當知此人是大菩
薩成就阿耨多羅
三藐三菩提

哀愍衆生願生此
間廣演分別妙法華
經何況盡能受持
種種供養者

8



藥王當知
是人自捨清
淨業報於我
滅度後愍衆
生故生於

惡世廣演此
經若是善
男子善女
人我滅度
後能竊

9

爲一人説法華經
乃至一句當知是人
則如來使如來所遣
行如來事何況於大
衆中廣爲人説

藥王若有惡人以不善心
於一劫中現於佛前
常毀罵佛其罪
尚輕

10

若人以一惡
言毀訾注1在家
出讀誦法華
經者其罪

甚重藥王其
有讀誦法華經
者當知是人以
佛莊嚴而自

注1　誤字　大経では呰（春日版は訾）
注2　抜字　大経では家あり

11

莊嚴則爲如來肩
所荷擔其所至方
應隨向禮一心
合掌

恭敬供養尊重
讃歎華

12

第 175 図　巻第四　法師品第十（３）

香瓔珞抹香塗
香燒香繒蓋幢
幡衣服肴膳[注1]
作諸妓
樂人中
上供而供養

注1　誤字　大経では餚饌（春日版は肴膳）

13

之應持
天寶而以散
之天上寶聚
應以奉獻
所以者何是
人歡喜說法
須臾聞之即
得究竟

14

阿耨多羅
三藐三菩
提跋
爾時世尊欲重宣
此義而說
偈言

15

若欲住佛道
成就自然智
常當勤供養
受持法華者
其有欲疾得
一切種智慧

16

當受持是經
并供養持者

17

若有能受持
妙法華經者
當知佛所使
愍念諸衆生

18

第 176 図　巻第四　法師品第十（4）

諸有能受持
妙法華經者
捨於清淨土
愍衆故生此
當知如是人
自在所欲生
能於此惡世
廣説無上法

19

應以天華香
及天寶衣服
天上妙寶聚
供養説法者
吾滅後惡世
能持是經者
當合掌禮敬
如供養世尊

20

上饌[注1]衆甘美[注2]
及種種衣服
供養是佛子
冀得須臾聞

注1　異字形
注2　異体字

21

若能於後世
受持是經者
我遣在人中
行於如来
事
若於一劫中
常懷不善心
作色而罵佛
獲無量重罪

22

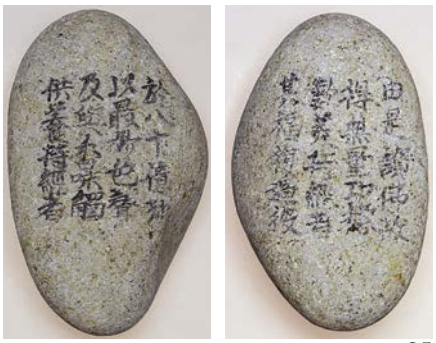
其有讀誦持
是法華經者
須臾加惡言
其罪復過彼

23

有人求佛道
而於一劫中
合掌在我前
以無數偈讚

24

第 177 図　巻第四　法師品第十（５）



由是讃佛故
得無量功德
歎美[注1]持經者
其福復過彼
於八十億劫
以最妙色聲
及與香味觸
供養持經者

注1　異体字

25

如是供養已
若得須臾聞
則應自欣慶[注1]
我今獲大利

注1　異字形

26

藥王今告汝
我所説諸經
而於此經中
法華最第一

27

爾時佛復告
藥王菩薩摩訶
薩我所説經典
無量千萬億
已説今説當
説而於其中
此法華經

28

最爲難信難
解藥王此經
是諸佛秘要
之藏不可分布
妄授與人諸佛
世尊之所
守護

29

第178図　巻第四　法師品第十（6）

30

従昔已未来曽
顯説而此經者
如来現在猶多
怨嫉況滅度
後[注1]

其能書持讀誦
供養爲佗人説
者如來則爲以
衣覆之又爲佗
方現在諸佛之

注1　抜字　大経では藥王當知如來滅後あり

所護念是人
有大信力及志
願力諸善根力
當知[注1]是與如来

31

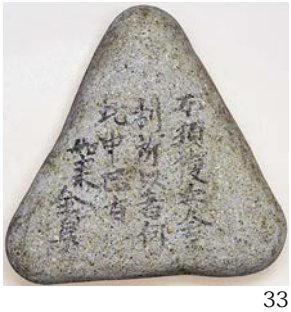
共宿則爲如來
手摩其頭
藥王在在
處處

注1　抜字　大経では人あり

若説若讀若誦
若書若經卷所
住之處
皆應起七寶塔
極令高廣嚴飾

32

不須復安舍
利所以者何
此中已有
如来全身
此塔應以一切
華香瓔珞
繒蓋幢旛
妓樂歌頌



33

第 179 図　巻第四　法師品第十（７）

供養
恭敬尊重
讃歎若有人
得見此塔禮拜
供養
當知

34

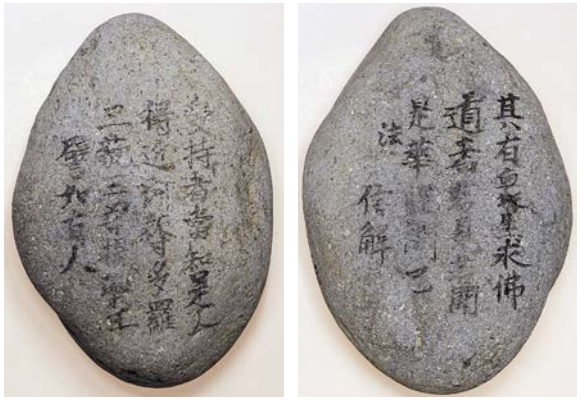
是等皆近
阿耨多羅
三藐三菩提
藥王多有
人在家出家
行菩薩道
若不能得
見聞讀誦

35

書持供養是
法華經者當知是人
未善行菩薩道
若有得聞是經典
者
乃能善行菩薩
之道

36

其有衆生求佛
道者若見若聞
是法華經聞已
信解
受持者當知是人
得近阿耨多羅
三藐三菩提藥王
譬如有人



37

渴乏須水於
彼高原穿鑿
求之猶見乾土
知水尚遠施功
不已轉見濕土遂
漸至泥其心決定
知水必近菩薩
亦復如是

38

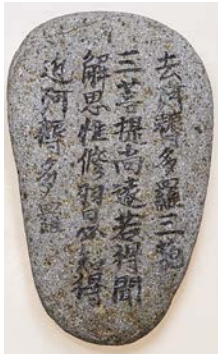
第 180 図　巻第四　法師品第十（８）

若未聞未
解未能修習
是法華經者
當知是人

39

去阿耨多羅三藐
三菩提尚遠若得聞
解思惟修習必知得
近阿耨多羅

三藐三菩提所以者何
一切菩薩阿耨多
羅三藐三菩提



40

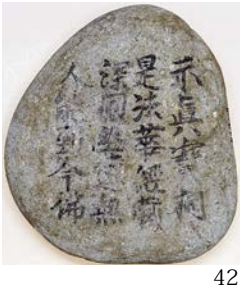
皆屬此經此
經開方便

門

41

示眞實相
是法華經藏
深固幽遠無
人能到今佛

教化成就菩
薩而爲開示
藥王若有菩
薩聞是



42

法華經驚
疑怖畏當知
是爲新發意
菩薩

若聲聞人聞
是經驚疑怖
畏當知是爲
增上慢者

43

第 181 図　巻第四　法師品第十（９）

云何應說　是善男子　善女人　入如來室

44

著如來衣　坐如來座　爾乃應爲　四衆

46

45

廣說斯經如來室者　一切衆生中大慈悲心　是如來衣者柔和　忍辱心是如來　座者　一切法空是　安住是中然後　以不懈怠心

47

爲諸菩薩及　四衆廣說是　法華經藥王　我於餘國　遣化人爲其集聽法衆　亦遣化比丘比丘尼優婆　塞優婆夷聽其說法是　諸化人聞法信受

48

隨順不逆若說　法者在空閑　處我時廣遣　天龍鬼神乾　闥婆阿脩羅　等聽其說　法我雖在

49

第 182 図　巻第四　法師品第十（10）

異國時時令説
法者得見我身
若於此經
忘失句逗我
還爲説令得
具足

50

爾時世尊欲
重宣此義
而説偈
言

51

欲捨諸懈怠
應當聽此經
是經難得聞
信受者亦難

52

如人渇須水
穿鑿於
高原
猶見乾燥土
知去水尚遠

53

漸見濕土泥
決定知近水
藥王汝當知
如是諸人等
不聞法華經
去佛智甚遠
若聞是深經
決了聲聞法

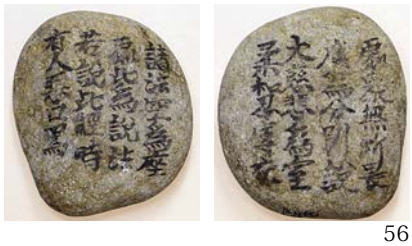
54

第 183 図　巻第四　法師品第十（11）

是諸經之王
聞已諦思惟
當知此人等
近於佛智慧

若人説此經
應入如來室
著於如來衣
而坐如来座

55



處衆無所畏
廣爲分別説
大慈悲爲室
柔和忍辱衣

諸法空爲座
處此爲説法
若説此經時
有人惡口罵

56

加刀杖瓦石
念佛故
應忍

我千萬億土
現淨堅固身
於無量億劫

57

爲衆□[注1]説法
若我滅度後
能説此經者

注1　欠損　大経では生あり

58

我遣化四衆
比丘比丘尼
及清信士女
供養於
法師

59

引導諸衆生

60

集之
令聽法

若人欲加惡
刀杖及
瓦石

61

則遣變化人
爲之作衛護

若説法之人
獨在空
閑處

62

寂寞無人
聲

63

第184図　巻第四　法師品第十（12）

讀誦此經典
我爾時爲現
清淨光明身

64

若忘失章句
爲説令通利
若人具
是德
或爲四衆
説

65

若人在空
閑
我遣
天龍王

67

空處讀誦經
皆得見我身

66

夜叉鬼神等
爲作聽法衆
是人樂説法
分別無罣礙

68

諸佛護念故
能令大衆喜
若親近法師
速得菩薩道

69

第 185 図　巻第四　法師品第十（13）

妙法蓮華經見寶塔品第十一
爾時佛前有七寶塔高五百
由旬縱廣二百五十由旬從
地踊出

住在空中種種寶物
而莊校之五千欄楯龕

1

空[注1]千萬無數
幢旛以爲嚴飾
垂寶瓔珞寶鈴
萬億而懸

其上四面皆
出多摩羅跋栴
檀之香
充徧世界

注1　誤字　大経では室

2

其諸旛蓋以金
銀琉璃硨磲[注1]碼碯[注2]
眞珠玫瑰七寶合成

高至四天王宮
三十三天雨天
曼陀羅華供養

注1　誤字　大経では車
注2　誤字　大経では馬腦

3

寶塔餘諸天
龍夜叉乾闥

婆阿脩羅
迦樓羅

4

緊那羅摩
睺羅伽人非人等
千萬億衆以一切

華香瓔珞

5

第 186 図　巻第四　見寶塔品第十一（１）

旛蓋[注1]妓樂供
養寶塔恭敬
尊重讃歎

爾時寶塔
中出大音聲
歎言善哉

注1　異体字

6

善哉
釋迦牟尼世尊
能以平等
大慧

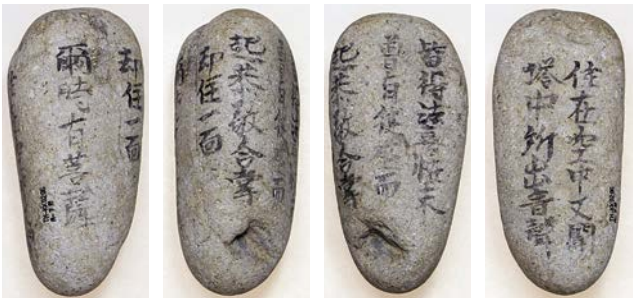
教菩薩法
佛所護念
妙法華經

7

爲大衆説
如是如是
釋迦牟尼
世尊如
所説

者皆是
眞實
爾時四衆
見大寶塔

8



9

住在空中又聞
塔中所出音聲

皆得法喜恠[注1]未
曽有從座而

起恭敬合掌
却住一面[注2]

爾時有菩薩

注1　俗字　大経では怪（春日版と同じ）
注2　異体字

摩訶薩名大樂
説知一切世間
天人阿脩羅
等

心之所疑而白
佛言世尊
以何因緣有

10

第 187 図　巻第四　見寶塔品第十一（２）

此寶塔
從地踊出
又於其中
發是音聲
爾時佛告

11

大樂說菩薩此寶
塔中有如來全身
乃往過去東
方無
量千
萬億阿僧祇
世界國名寶淨
彼中有佛號曰

12

多寶其佛本行[注1]
菩薩道時作大誓
願若我成佛滅度
之後於十方國土
有說法華經處
我之塔廟爲聽是
經故涌現其前爲
作證明讚言

注1　誤字　大経では水（春日版と同じ）

13

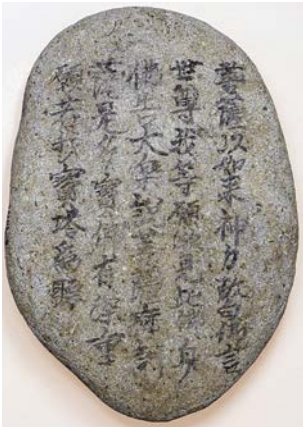
善哉彼佛成道已臨滅
度時於天人大衆中
告諸比丘
我滅度後
欲供養我全身
者應起一大塔其佛
以神通願力十方世界

14

在在
處處
若
有說
法華經者

15

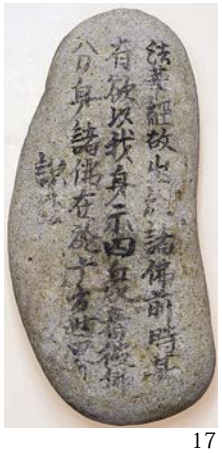
第 188 図　巻第四　見寶塔品第十一（3）



16

彼之寶塔皆涌出其前全身
在於塔中讃言善哉善哉
大樂説今多寶如来塔聞
説法華經故従[注1]涌出讃言
善哉善哉是時大樂説
菩薩以如来神力故白佛言
世尊我等願欲見此佛身
佛告大樂説菩薩摩訶
薩是多寶佛有深重
願若我寶塔爲聽

注1　抜字　大経では地あり



17

法華經故出於諸佛前時其
有欲以我身示四衆者彼佛
分身諸佛在於十方世界
説法
盡還
集一處
然後我身乃出現耳

18

大樂説我分身諸佛
在於十方世界説法
者
今應當集
大樂説白佛言世尊

第 189 図　巻第四　見寶塔品第十一（４）

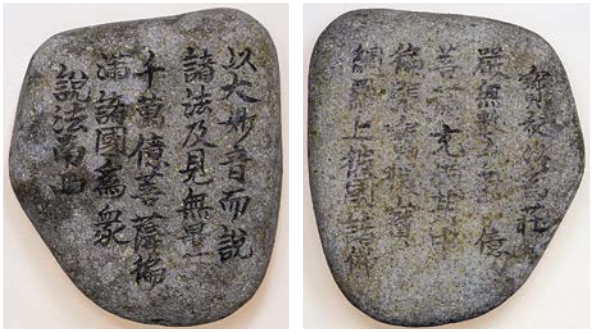
我等亦願欲見
世尊分身
諸佛禮拜
供養爾時
佛放白毫
一光即見
東方五百萬億

19

那由佗恒河沙等
國土諸佛彼
諸國土
皆以頗
梨[注1]爲地
寶樹

注1　異字形

20

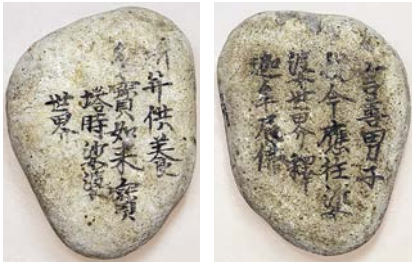


寶衣以爲莊
嚴無數千萬億
菩薩充滿其中
徧張寶幔
網羅上彼國諸佛
以大妙音而說
諸法及見無量
千萬億菩薩徧
滿諸國爲衆
說法南西

21

北方四維上下
白毫相光
所照之處亦
復如是爾時十方
諸佛各告衆菩
薩

22



言善男子
我今應往娑
婆世界釋
迦牟尼佛
所并供養
多寶如来寶
塔時娑婆
世界

23

第 190 図　巻第四　見寶塔品第十一（5）

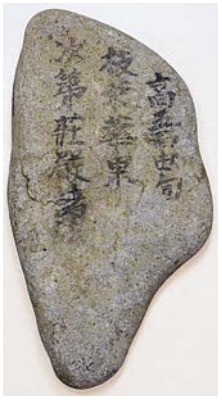
24

卽變清淨
瑠璃爲地寶樹
莊嚴黃金爲繩
以界八道

25

無諸聚落
村營城邑大海
江河山川林藪
燒大寶香

曼陀羅華
徧布其地以
寶網幔



26

羅覆其上懸諸佛各將[注1]
一大菩薩以爲侍者
至娑婆世界
各到寶樹下
一一寶樹

高五百由旬
枝葉華果
次第莊嚴諸法[注2]

注1　抜字　大経では寶鈴唯留此會衆移諸天人置於他土是時諸あり
注2　加筆

27

寶樹下皆有
師子之座高五由旬
亦以大寶而校飾
之爾時諸佛

各於此座結
跏趺坐如是展
轉徧滿

28

三千大千世界
而於釋迦牟尼佛
一方所分之身

猶故未
盡時釋迦牟
尼佛欲容受
所分身諸佛

第 191 図　巻第四　見寶塔品第十一（６）

故八方各更
變二百萬億
那由他國皆
令清淨無
有
地獄餓
鬼畜生及
阿脩羅又移
諸天人置於佗

29

土所化之國
亦以瑠璃爲地寶
樹莊嚴樹高五
百由旬枝
葉華果
次第嚴飾樹
下皆有寶師子
座高五由旬

30

種種諸寶以爲
莊校亦無大海江
河及目眞鄰
陀山摩訶目眞
鄰陀山鐵圍山
大鐵圍山

31

須彌山等
諸山王
通爲一佛國
土寶地平
正

32

寶交露幔徧
覆其上
懸諸
旛蓋[注1]

注1　異体字

33

燒大寶香
諸天寶華
徧布其地
釋迦牟尼佛
爲諸佛當來坐故

34・35

第192図　巻第四　見寶塔品第十一（7）

復於八方
各[注1]變二百
萬億那由
他國

注1　抜字 大経では更あり

36

皆令清淨
無有地獄
餓鬼畜生
及阿脩羅

37

瑠璃爲地寶
樹莊嚴樹高
五[注1]由旬
枝葉華果

注1　抜字 大経では百あり

38

次第莊嚴
樹下皆有

39

寶師子座高
五由旬亦以大寶

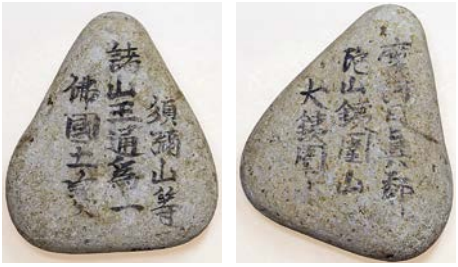
40

而校飾之
亦無大海
江河及
目眞
鄰陀
山

41

第 193 図　巻第四　見寶塔品第十一（８）

摩訶目眞鄰
陀山銕圍山
大銕圍山
須彌山等
諸山王通爲一
佛國土寶


42

地平正寶交
露幔徧覆
其上懸諸
旛盖[注1]焼大
寶香
諸天寶
華

注1　異体字

43

國土中諸佛各各
説法来集於
此如是次第十方
諸佛皆悉来集
坐於八方爾時

44

一一方四百萬
億那由陀國土
諸佛如來
徧滿其中
是時諸佛
各在寶樹下坐

45

師子座皆遣侍者
問訊釋迦牟尼
佛各齎[注1]

注1　裏面 文字改行不明
寶華滿掬而告之言善男子汝往詣か

46

耆闍崛
山
釋迦牟尼
佛所如我
辭曰

47

第 194 図　巻第四　見寶塔品第十一（9）

少病少惱氣力
安樂及菩薩
聲聞衆悉
安隱不以此寶華
散佛供養而作是
言彼某甲佛

48

各各坐
於師子之座皆
聞諸佛與欲同
開寶塔卽從座
起住虛空中
一切四衆起立合
掌一心觀佛於是
釋迦牟尼佛以
右指開七

49

来至此爾時四
衆等見過去
無量千萬億
劫滅度佛説
如是言歎未
曽有以天寶華
聚散多寶佛
及釋迦牟尼佛上

50

爾時多寶佛於寶
塔中分半座與
釋迦牟尼佛
而作是言釋迦
牟尼佛可就

51

此座卽時釋
迦牟尼佛入
其塔
中坐其
半座
結跏趺坐

52

第 195 図　巻第四　見寶塔品第十一（10）

各作是念佛
坐[注1]高遠唯願
如来以神通力
令我等輩
倶處虚空

注1　同音同義字　大経では座（春日版と同じ）

53

即時釋迦牟尼佛以
神通力接諸大
衆皆在虚空以
大音聲普告四衆

54

誰能於此
娑婆國土廣
説妙法華經
今正是時如来
不久當入涅槃

55

佛欲以此妙法
華經付囑
有在
爾時世尊欲
重宣此義
而説偈言

56

聖主世尊
雖久滅度
在寶塔中
尚爲法来

57

諸人云何
不勤爲法
此佛滅度
無央數劫

58

第 196 図　巻第四　見寶塔品第十一（11）

處處聽法
以難遇故
彼佛本願
我滅度後

59

在在所往
常爲聽法
又我分身
無量諸佛

60

如恒沙等
来欲聽法
及見滅度
多寶如来
各捨妙土
及弟子衆

61

天人龍神
諸供養事
令法久住
故来至此

62

爲坐
諸佛
以神通力
移無量衆
令國清淨

63

諸佛各各
詣寶樹下
如清淨池
蓮華莊嚴

64

第 197 図　巻第四　見寶塔品第十一（12）

身出妙香
徧十方國
衆生
蒙薰
喜不自勝

65

譬如大風
吹小樹枝
以是方便
令法久住

66

告諸大衆
我滅度後
誰能護持
讀說斯經
今於佛前
自說誓言
其多寶佛
雖久滅度

67

以大誓願
而師子吼
多寶如來
及與我身
所集化佛
當知此意
諸佛子等
誰能護法
當發大願
令得久住
其有能護

68

此經法者
則爲供養
我及多寶
此多寶佛
處於寶塔
常遊十方
爲是經故
亦復供養
諸來化佛

69

第 198 図　巻第四　見寶塔品第十一（13）

莊嚴光飾
諸世界者
若説此經
則爲見我

70

多寶如來
及諸化佛
諸善男子
各諦思惟
此爲難事
宜發大願
諸餘經典

71

數如恒沙
雖説此等
未足爲難
若接須彌
擲置他方
無數佛土

73

72

亦未爲難
若以足指
動大千界
遠擲他國
亦未爲難
若立
有頂

74

能説此經
是則爲難
假使有人
手把虚空

75

若使人書
若以大地
置足甲上
而以遊行
亦未爲難
於我滅後
若自書持

76

第 199 図　巻第四　見寶塔品第十一（14）

77

昇於梵天
亦未爲難
佛滅度後
於惡世中

78

暫讀此經
是則爲難
假使劫燒
擔負乾草
入中不燒
亦未爲難

79

我滅度後
若持此經

81

於我滅後
聽受此經
雖能如是
亦未爲難

80

爲一人說
是則爲難
若持八萬
四千法藏

83

得阿羅漢
具六神通
無量無數
恒沙衆生

82

問其義趣
是則爲難
若人說法
令千萬億

85

我爲佛道
於無量土
如斯經典
是則爲難

84

雖有是益
亦未爲難
於我滅後
若能奉持

87

諸善男子
於我滅後
若有能持
則持佛身

86

從始至今
廣說諸經
而於其中
此經第一

第 200 図　巻第四　見寶塔品第十一（15）

誰能受持
讀誦此經
今於佛前
自説誓言

88

此經難持
若暫持者
我則歡喜
諸佛亦然

89

如是之人
諸佛所歎
是則勇猛
是則
精進

90

是名持戒
行頭陀者
則爲疾得

91

無上佛道
能於來世
讀持此經
是真佛子
住淳善地
佛滅度後

92

能解其義
是諸天人
世間之眼

93

於恐畏世
能須臾説
一切天人
皆應供養
妙法蓮華経
卷第四

94

第 201 図　巻第四　見寶塔品第十一（16）

1

妙法蓮華經提婆達多品
第十二
爾時佛告諸菩薩及天人
四衆吾於過去無
量劫中求法華經
無有懈倦於多劫中
常作國王發願求於無上

2

菩提心不退轉爲欲滿
足六波羅蜜勤行布
施心無悋惜象馬七
珍國城妻子奴婢僕從
頭目髓腦身肉手足
不惜軀命時世人民
壽命無量
爲於法故捐
捨國位委政大注1
子擊鼓宣令四方
求法誰能爲我説大
乘者吾當終身供給
走使時有仙人来白王言

注1　誤字　大経では太

第 202 図　巻第五　提婆達多品第十二（1）

3

我有大乘名妙
法華經若不違我當爲
宣説王聞仙言歡喜踊躍卽
隨仙人供給所須採菓汲水
拾薪設食乃至以身而作[注1]
牀座身心無倦于時
奉事經於千
歲爲於
法故精
勤給侍令
無所乏爾時
世尊欲重宣此義而説偈言
我念過去劫爲求大法故雖作
世國王不貪五欲樂撾鍾
告四方誰有大法者若
爲我解説身當爲奴僕

注1　誤字　大経では爲（春日版と同じ）

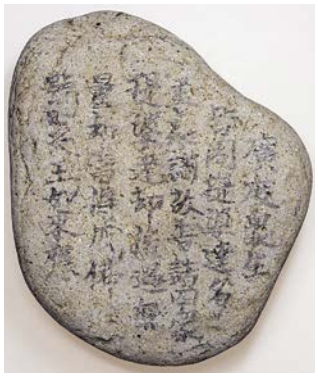
4

時有阿私仙來白於大王
我有微妙法世間所希有
若能脩行者吾當爲汝説
時王聞仙言心生大喜悦
卽便隨仙人供給於所須
採薪及果蓏隨時恭敬與
情存妙法故身心無懈倦
普爲諸衆生勤求於大法
普[注1]不爲己身及以五欲樂
故爲大國王勤求獲此法
遂致得成佛今故爲汝説
佛告諸比丘爾時王者則我身是
時仙人者今提婆達[注2]多
善知識故令我
具足

注1　誤字　大経では亦
注2　抜字　大経では多是由提婆達あり

第 203 図　巻第五　提婆達多品第十二（２）

六波羅蜜慈悲喜捨
三十二相八十種好紫
磨金色十力四無所畏
四攝法十八不共神
通道力成等
正覺

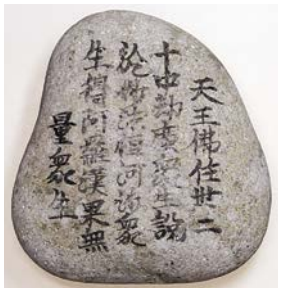


廣度衆生
皆因提婆達多
善知識故告諸四衆
提婆達[注1]却後過無
量劫當得成佛
號曰天王如來應

注1　抜字　大経では多あり

5

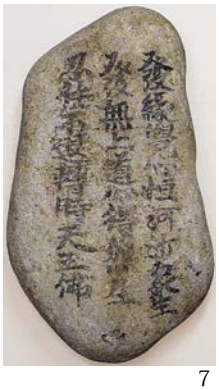
供正徧知明行足
善逝世間解無上
士調御丈夫天人
師佛世尊世界名
天道時



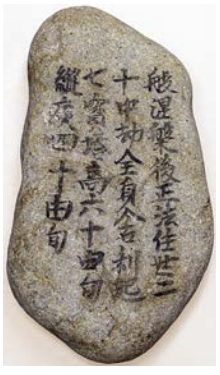
天王佛住世二
十中劫廣[注1]衆生説
於妙法恒河沙衆
生得阿羅漢果無
量衆生

注1　抜字　大経では爲あり

6



發緣覺心恒河沙衆生
發無上道心得無生
忍住[注1]不退轉時天王佛



般涅槃後正法住世二
十中劫全身舍利起
七寶塔高六十由旬
縱廣四十由旬

注1　誤字　大経では至（春日版と同じ）

7

第 204 図　巻第五　提婆達多品第十二（3）

8

諸天人民悉以雜[注1]華
抹香燒香塗香衣
服瓔珞幢旛寶蓋
妓樂歌頌禮拜供養
七寶妙塔無量衆
生得阿羅漢果
無[注2]數衆生
悟辟支佛不可
思議衆生發菩提心
至不退轉佛告諸比丘
未來世中若有善男子
善女人聞妙法華經

注1　異字形
注2　抜字 大経では量あり（春日版と同じ）

9

提婆達多品淨心信敬
不生疑惑者不墮地獄
餓鬼畜生生十方佛前
所生之處常聞此經
若生人天中受勝妙樂
若在佛前蓮華
化生

10

於時下方多寶世尊所
從菩薩名曰智積白多
寶佛當還本土釋迦牟尼
佛告智積曰善男子
且待須臾此有菩薩名
文殊師利可與相見論
說妙法可還本[注1]爾時
文殊師利

注1　抜字 大経では土あり

第 205 図　巻第五　提婆達多品第十二（4）

坐千葉蓮華大如車輪
俱來菩薩亦坐寶蓮
華從於大海娑竭羅
龍宮自然踊出住
虚空

中詣靈鷲山從蓮華下至
於佛所頭面敬禮二世尊
足修敬已畢往智積所共相
慰問却坐一面智積菩薩

11

問文殊師[注1]仁往龍宮
所化衆生其數幾何
文殊師利言其數
無量不可稱計非
口所宣非心
所測且待
須臾自當有證所言
未竟無數菩薩坐
寶蓮華從海涌出
詣靈鷲山住

注1　抜字　大経では利あり

12

在虚空此諸菩薩
皆是文殊師利之所
化度具菩薩行皆共
論説六波羅蜜
本聲聞人在
虚空中

13

説聲聞行今
皆修行大乗空
義文殊師[注1]謂智積曰
於海教化其事如此[注2]
爾時智積菩薩
以偈讃曰

注1　抜字　大経では利あり
注2　誤字　大経では是（春日版と同じ）

第 206 図　巻第五　提婆達多品第十二（５）

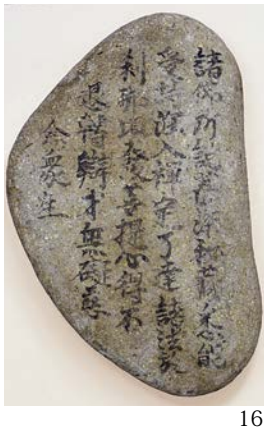
14

大智德勇健　化度無量衆　今此諸大會　及我皆已見　演暢實相義　開闡一乘法　廣導諸衆生　令速成菩提　文殊師利言　我於海中唯　常宣説　妙法華經

15

菩薩問文[注1]　殊師利言此經甚深　微妙諸經中寶世所　希有頗有衆生　勤加精進修行　此經速得佛不　文殊師利言有　裟竭羅龍王女年　始八歲智慧利根　善知衆生諸根　行業得陀羅尼

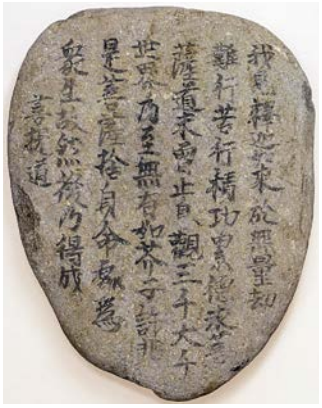
注1　大経では菩薩→智積（春日版では智積菩薩）



16

諸佛所説甚深秘藏悉能　受持深入禅定了達諸法於　刹那頃發菩提心得不　退轉辯才無礙慈　念衆生　猶如赤子功　德具足心念口演　微妙廣大慈悲仁　讓志意和雅能至菩　提智積菩薩言

第 207 図　巻第五　提婆達多品第十二（６）



17

我見釋迦如來於無量劫
難行苦行積功累德求菩
薩[注1]道未曾止息觀三千大千
世界乃至無有如芥子許非
是菩薩捨身命處爲
衆生故然後乃得成
菩提道

不信此女於須臾頃
便成正覺言論未訖
時龍王女忽倪[注2]於前頭
面禮敬却住一面以偈
讚曰深達罪福相
徧照於十方

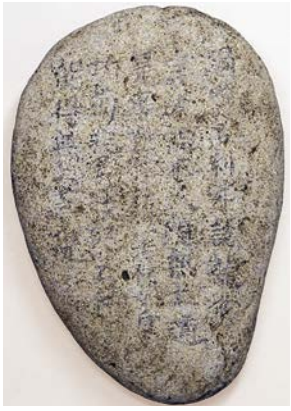
注1　誤字　大経では提
注2　誤字　大経では現

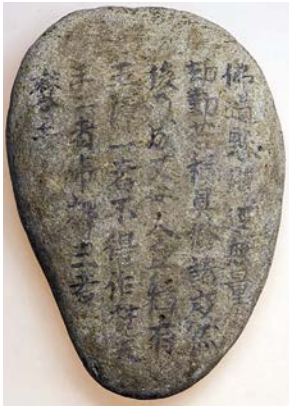
18

微妙淨法身
具相三十二
以八十種好
用莊嚴法身
天人所戴仰
龍神咸
恭敬

一切衆生類
無不宗奉者
又聞成菩提
唯佛當證知
我闡大乘教
度脱苦衆生

第 208 図　巻第五　提婆達多品第十二（7）





19

時舍利弗語龍女
言汝謂不久得無上道
是事難信所以者何女身
垢穢非是法器云何
能得無上菩提
佛道懸曠經無量
劫勤苦積具修諸度然
後乃成又女人身猶有
五障一者不得作梵天
王二者帝釋三者
魔王

注1　春日版では爾あり
注2　抜字 大経では行あり

四者轉輪聖王
五者佛身云何
女身速得成佛
爾時龍女有一
寶珠價直
三千大千世界
持以上佛佛卽
受之龍女

20

謂智積菩
薩尊者舍利弗
言我獻寶珠世
尊納受是事
疾不答言
甚疾女言以汝
神力觀我成佛
復速
於此當時
衆會

注1　異字形

21

第 209 図　巻第五　提婆達多品第十二（８）

22

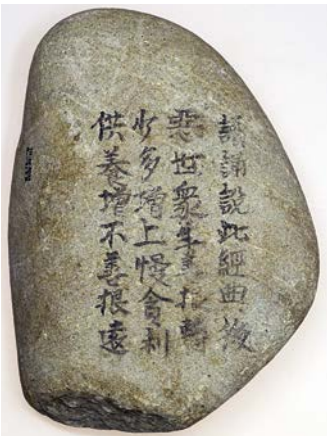
演説妙法爾時娑婆世界
菩薩聲聞天龍八部人
與非人皆遥見彼龍女成佛
普爲時會人天説法心大
歡喜悉遥敬禮無量
衆生聞法解悟

得不退轉無量衆生
得受道記無垢世界
六反震動娑婆世界
三千衆生住不退地
三千衆生發菩提心
而得受記智積菩薩
及舍利弗一切衆
會默然信受

第 210 図　巻第五　提婆達多品第十二（9）

妙法蓮華經勸持品第十三
爾時藥王菩薩摩訶薩
及大樂説菩薩摩訶
薩與二萬菩薩
眷屬俱皆於佛前作
是誓言唯願世尊不
以爲慮我等於佛滅
後當奉持

1



讀誦説此經典後
惡世衆生善根[注1]轉
少多增上慢貪利
供養增不善根[注2]遠

離解脱雖難可教化
我等當起大忍力讀
誦此經持説書寫
種種供養

2

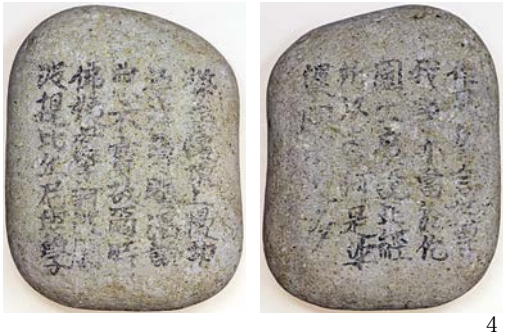
注1　異字形
注2　異字形

不惜身命爾時衆中五百
阿羅漢得受記者白佛
言世尊我等亦
自誓願
於異國土廣説
此經復有學無學八
千人得受記者從座
而起合掌向佛

3

第 211 図　巻第五　勸持品第十三（１）

作是誓言世尊
我等亦當於佗
國土廣說此經
所以者何是婆
婆國中人多
弊惡懷增上慢功
德淺薄瞋濁諂
曲心不實故爾時
佛姨母摩訶波闍
波提比丘尼與學



4

無學比丘尼六千人俱
從座而起一心合掌瞻仰
尊顏目不暫捨於時世尊
告憍曇彌何故憂色而
視如来汝心將無謂我
不說汝名授阿耨多羅三
藐三菩提記耶憍曇彌
我先總說一切聲聞

5

皆已授記今汝欲知記
者將來之世當於六萬
八千億諸佛法中爲
大法師及六千學
無學比丘尼
俱爲法師汝如是
漸漸具菩薩道當
得作佛號一切
衆生喜見如來應
供正遍知明行足
善逝世

6

間解無上士調御丈
夫天人師佛世尊憍
曇彌是一切衆生喜
見佛及六千菩薩
轉次授記[注1]阿
耨多羅三藐
三菩提爾時羅睺
羅母耶輸陀羅比丘尼
作是念世尊於授記
中獨不說我名佛告

注1　抜字　大経では得あり

7

第 212 図　巻第五　勸持品第十三（2）

8

耶輪陀羅汝[注1]来世
百千萬億諸佛法中
修菩薩行爲大法師
漸具佛道於善國中
當作[注2]佛號具足千
萬光相如来
應供正徧知明
行足善逝世間解
無上士調御文[注3]夫
天人師佛世尊
佛壽無
量

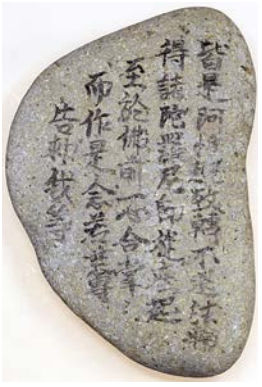
注1　抜字 大経では於あり
注2　誤字 大経では得
注3　誤字 大経では丈

9

阿僧祇劫爾時
摩訶波闍波提比丘
尼及耶輸陀羅比丘
尼并其眷屬皆大
歡喜
得未曾有卽
於佛前而説偈言
世尊導師安隱天人
我等聞記
心安具足

10

諸比丘尼説是偈已
白佛言世尊我等
亦能於佗方國土
廣宣此經
爾時世尊視
八十萬億那由佗
諸菩薩摩訶薩
是諸菩薩



11

皆是阿惟越致轉不退法輪
得諸陀羅尼卽從座起
至於佛前一心合掌
而作是念若世尊
告勅我等
持説此經者
當如佛教廣宣
斯法復作是念
佛今默然不見
告勅我等[注1]云何

注1　誤字 大経では當

第 213 図　巻第五　勸持品第十三（３）

時諸菩薩
敬順佛意并欲自
滿本願便於佛前
作師子吼而發
誓言
世尊我
等於如來滅後
周旋往返十方世
界能令衆生

12

書寫此經受持
讀誦解說其義
如法修行正憶念
皆佛之威力唯願
世尊
在於佗方遥見
守護卽時諸菩薩
俱同發聲而說偈
言

注1　抜字　大経では是あり

13

唯願不爲慮
於佛滅度後
恐怖惡世中
我等當廣說
有諸無智人
惡口罵詈等
及加刀杖者我
等皆當忍
惡世中比丘
邪智心諂曲
未得謂爲得
我慢心充滿

14

或有阿練若
納衣在空閑
自謂行眞道
輕賤人間者
貪著利養
故

15

與白衣說法
爲世所恭敬
如六通羅漢
是人懷惡心
常念世俗事
假名阿練若
好出我等過
而作如是言

16

第 214 図　巻第五　勸持品第十三（４）

此諸比丘等
爲貪利養故
說外道論議
自作此經典
誑惑世間人
爲求名聞故
分別於是經
常在大衆中
欲毀我等故
向國王大臣

17

婆羅門居士
及餘比丘衆
誹謗說我惡
謂是邪見人
說外道論議
我等敬
佛故

18

悉
忍
是諸惡
爲斯所輕言
汝等皆是佛
如此輕慢言
皆當忍受之
濁劫惡世中
多有諸恐怖

惡鬼入其身
罵詈毀辱我
我等敬信佛
當著忍辱鎧
爲說是經故
忍此諸難事
我不愛身命
但惜無上道

19

我等於来世
護持佛所囑
世尊自當知
濁世惡比丘
不知佛方便
隨宜所說法
惡口而顰蹙
數數見擯出

20

遠離於塔寺
如是等衆惡
念佛告勅故
皆當忍是事
諸聚落城邑
其有求法者
我皆到其所
說佛所囑法

21

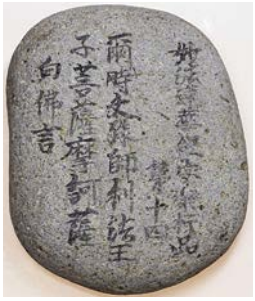
第 215 図　巻第五　勸持品第十三（５）

□注1比□
妙法蓮華經卷第四
注2成未大品
注3

注1　加筆
注2　加筆
注3　裏面　文字数改行不明

22

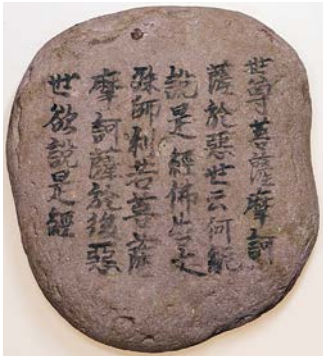
第 216 図　巻第五　勸持品第十三（6）



妙法蓮華經[注1]　安樂行品
第十四
爾時文殊師利法王
子菩薩摩訶薩
白佛言
世尊是諸菩薩
甚爲難有敬順佛
故發大誓願於後
惡世護持讀誦[注2]
説是法華經

注1　抜字 大経では巻第五あり
注2　加筆（春日版あり）

1



世尊菩薩摩訶
薩於後惡世云何能
説是經佛告文
殊師利若菩薩
摩訶薩於後惡
世欲説是經
當安住四方[注1]一者安
住菩薩行處[注2]親近
處能爲衆生演説
是經文殊師[注3]云何
名菩薩摩訶薩
行處

注1　誤字 大経では法
注2　抜字 大経では及あり（春日版と同じ）
注3　抜字 大経では利あり

2

若菩薩摩訶薩住
忍辱地柔和善順
而不卒暴心亦不
驚又復於法無
所行而
觀諸法如實相
亦不行不分別
是名[注1]菩薩摩訶薩
行處云何名菩薩
摩訶薩

注1　書き加え

3

親近處菩薩
摩訶薩不親近
國王王子大臣
官長
不親近諸
外道梵志
尼揵子等
及造世俗

4

第 217 図　巻第五　安樂行品第十四（１）

文筆讃詠
外書及路伽耶陀者
亦不親近諸有
兇戲
相扠[注1]撲及那羅等
種種變現之戲
又不親近旃陀羅
及畜猪羊鶏狗
畋獵漁捕

注1　抜字　大経では相あり

5

諸惡律儀如
是人等或時
來者則爲
説法無所
悕望又
不親近
求
聲聞

6

比丘比丘尼優婆
塞優婆夷亦不
問訊若於房中
若經行處若
在講堂中
不共住止或
時來者

7

隨宜説法無
所悕求文殊
師利又菩薩
摩訶薩

8

不應於女人身取能生
欲想相而爲説法亦
不樂見若入佗家
不與小女處女
寡女等共語
亦復不近五種
不男之人以爲
親厚不獨入佗家

9

第 218 図　巻第五　安樂行品第十四（2）

10

若有因緣須
獨入時但一心
念佛若爲女人
説法不露齒笑
不現胸臆乃至
爲法猶不親
厚況復餘事不
樂畜年小弟子(注1)
沙彌小兒亦
不樂與同
師常好
坐禪

注1　誤字　大経では少

在於閑處修
攝其心文殊師利
是名初親近處
復次菩薩摩訶
薩觀一切法
空如實相不顚
倒不動不退不
轉如虛空無所
有性一切語言
道斷

11

不生不出不起
無名無相實無
所有無量無
邊無礙
無障但以因緣
有從顚倒生故
説常樂觀如是
法相是名菩
薩

12

摩訶薩第二
親近處爾時
世尊欲重宣此
義而説偈言
若有菩薩
於後惡世
無怖畏心
欲説此(注1)經

注1　誤字　大経では是（春日版と同じ）

13

第 219 図　巻第五　安樂行品第十四（３）

14

應入行處
及親近處
常離國王
及國王子
大臣官長
兒險戲者
及旃陀羅
外道梵志

15

亦不親近
增上慢人
貪著小乘
三藏學者
破戒比丘
名字羅漢
及比丘尼
好戲笑者

16

深著五欲
求現滅度
諸優婆夷
皆勿親近
若是人等
以好心来
到菩薩所
爲聞佛道

17

菩薩則以
無所畏心
不懷悕望
而爲説法
寡女處女
及諸不男
皆勿親近
以爲親厚

18

亦莫親近
屠兒魁膾
畋獵漁捕
爲利殺害

第 220 図　巻第五　安樂行品第十四（4）

販肉自活　衒賣女色　如是之人　皆勿親近　兇險相撲　種種嬉戲　諸婬女等　盡勿親近

19

莫獨屏處　爲女説法　若説法時　無得戲笑　入里　乞食　將一比丘　若無比丘　一心念佛

20

是則名爲　行處近處　以此二處　能安樂説　又復不行　上中下法　有爲無爲　實不實法

21

亦不分別　是男是女　不得諸法　不知不見　是則名爲　菩薩行處　一切諸法　空無所有

22

無有常住　亦無起滅　是名智者　所親近處　顛倒分別　諸法有無　是實非實　是生非生

23

在於閑處　修攝其心　安住不動　如須彌山　觀一切法　皆無所有　猶如虛空　無有堅固

24

第 221 図　巻第五　安樂行品第十四（５）

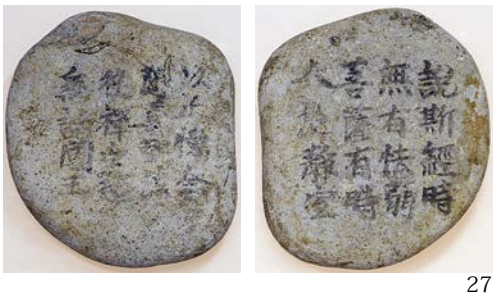
不生不出
不動不退
常住一相
是名近處

25

若有比丘
於我滅後
入是行處
及親近處

26

説斯經時
無有怯弱
菩薩有時
入於靜室
以正憶念
隨義觀法
從禪定起
爲諸國王



27

王子臣民
婆羅門等
開化演暢
説斯經典

28

其心安隱無有怯
弱文殊師利是名
菩薩安住初法
能於後世
説法華經

29

又文殊師[注1]如來滅後
於末法中欲説是
經應住安樂
行若口
宣説若
讀經時不樂説人
及經典過亦

注1　抜字　大経では利あり

30

第 222 図　巻第五　安樂行品第十四（6）

不輕慢諸
餘法師不
說佗人好
惡長短
於聲聞人
亦不稱名

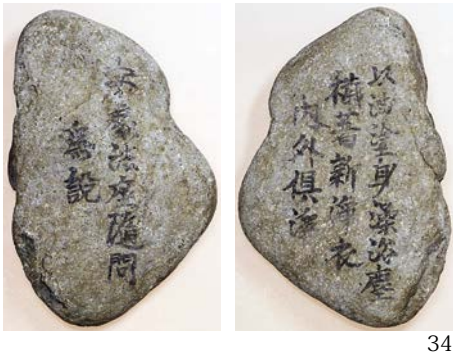
31

說其過惡亦不稱名
讚歎其美又亦不生
怨嫌之心善修如是
安樂心故諸有聽者
不逆其意有所難問
不以小乘法答但

32

以大乘而爲
解說令得一切
種智爾時世尊
欲重宣此義而
說偈言
菩薩常樂
安隱說法
於清淨地
而施床座

33



以油塗身澡浴塵
穢著新淨衣
內外俱淨
安處法座隨問
爲說

34

若有比丘
及比丘尼
諸優婆塞
及優婆夷

35

第 223 図　巻第五　安樂行品第十四（７）

國王王子
群臣士民
以微妙義
和顏爲説
若有難問
隨義而答
因緣譬論
敷演分別

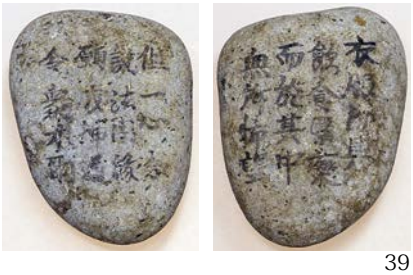
36

以是方便
皆使發心
漸漸增益
入於佛道
除嬾惰意
及懈怠想

37

離諸憂惱
慈心説法
晝夜常説
無上道教
以諸因緣
無量譬論
開示衆生
咸令歡喜

38

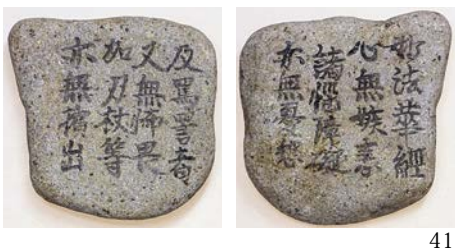


衣服臥具
飲食醫藥
而於其中
無所悕望
但一心念
説法因緣
願成佛道
令衆亦爾

39

是則大利
安樂供養
我滅度後
若有比丘
能演
説
斯

40



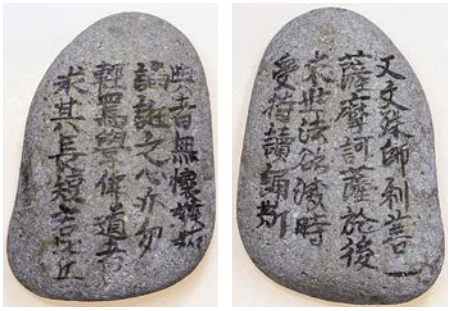
妙法華經
心無嫉恚
諸惱障礙
亦無憂愁
及罵詈者
又無怖畏
加刀杖等
亦無擯出

41

第 224 図　巻第五　安樂行品第十四（8）

安住忍故
智者如是
善修其心
能住安樂
如我上説
其人功德
千萬億劫
算數譬喩
説不能盡

42



又文殊師利菩
薩摩訶薩於後
末世法欲滅時
受持讀誦斯
注1 典者無懷嫉妬
諂誑之心亦勿
輕罵學佛道者
求其長短若比丘

注1　抜字　大経では經あり

43

比丘尼優婆塞
優婆夷求聲注1者
求辟支佛者
求菩薩道者無
得惱之令其疑
悔語其人言汝
等去道

注1　抜字　大経では聞あり

44

甚遠終不
能得一切種智
所以者何汝是
放逸之人於道
注1 解怠故又亦
不應戲論諸法有
所諍競當於一切
衆生

注1　誤字　大経では懈

45

起大悲想於
諸如來起慈父想
於諸菩薩起大
師想於十方諸
大菩薩常應
深心恭敬

46

第 225 図　巻第五　安樂行品第十四（９）

47

禮拜於一切衆生
平等説法以順法
故不多不少乃至
深愛法者
亦不爲
多説
文殊師利
是菩薩摩訶
薩於後
末世

48

法欲滅時有成就
是第三安樂行
者説是法時無
能惱亂得好同學
共讀誦是經亦
得大衆而来聽
受聽
已能持持已能誦
誦已能説説已能
書若使人書供養
經卷恭敬尊重

49

讃歎爾時
世尊欲重
宣此
義
而説偈言

50

若欲説是經
當捨嫉恚慢
諂誑邪僞心
常修質直
行
不輕蔑於人
亦不戲論法
不令陀
疑悔

51

十方
大菩
薩

云汝不得佛
是佛子説法
常柔和能忍
慈悲於一切
不生懈
怠心

第 226 図　巻第五　安樂行品第十四（10）

於諸佛世尊
生無上父
想

52

破於憍慢心
説法無障礙
第三法如是
智者
應守護

53

一心安樂行
無量衆所
敬

54

又文殊師利菩
薩摩訶薩於後
末世法欲滅時
有受[注1]持是法華經
者於在家出家
人中生大慈心

注1　加筆（春日版と同じ）

55

於非菩薩人
中生大悲心
應作是念如
是之人則爲

56

大失如来方便
隨宜説法不
聞不知不覺
不問不信不解其人
雖不問不信不解

57

第 227 図　巻第五　安樂行品第十四（11）

是經我得
阿耨多羅
三藐三菩提
時隨在何地

58

以神通力
智慧力
引之令得住
是法中
文殊師利
是菩薩摩訶
薩於如來滅
後有

59

成就此第四法
者説是法時無
有過失常爲

比丘
比丘尼

60

優婆塞優
婆夷國王王子
大臣人民

婆羅門居士等
供養恭敬
尊重

61

讃歎虚空
諸天爲聽
法故亦常

隨侍若在聚
落城邑空閑

62

第 228 図　巻第五　安樂行品第十四（12）

林中有人来欲難問
者諸天晝夜常
爲法故而

63

衛護之能
令聽者皆得
歡喜所以者

何
此經
是一切

64

過去未來
現在

諸佛神力
所護故

65

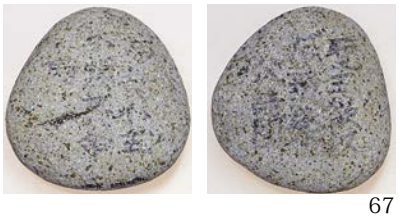
文殊師利
是法華經

於無量
國中乃至
名字不可
得聞何況

66

得見受持
讀誦文殊師
利譬如強
力轉輪

聖王欲以
威勢降
伏諸國


67

而諸小王
不順其命
時

轉輪王起種
種兵而往討
罰王見兵衆
戰有功者卽

68

大歡喜隨功
賞賜或與田宅
聚落城邑或與
衣服嚴身之

第 229 図　巻第五　安樂行品第十四（13）

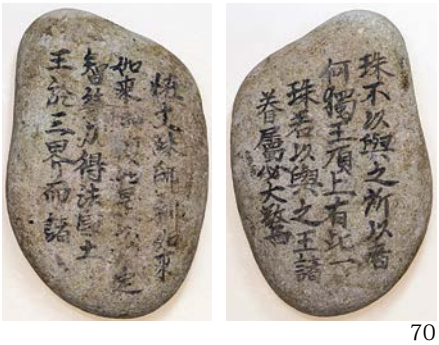
具或與種種
珍寶金銀[注1]瑠
璃硨磲[注2]碼
碯[注3]
珊瑚琥珀[注4]象馬
車乘奴婢人
民唯髻中明

注1　異字形
注2　誤字　大経では車
注3　誤字　大経では馬腦
注4　誤字　大経では虎

69

珠不以與之所以者
何獨王頂上有此一
珠若以與之王諸
眷屬必大驚
[注1]惟文殊師利如來如來[注2]
亦復如是以禪定
智慧力得法國土
王於三界而諸

注1　俗字　大経では怪
注2　重複



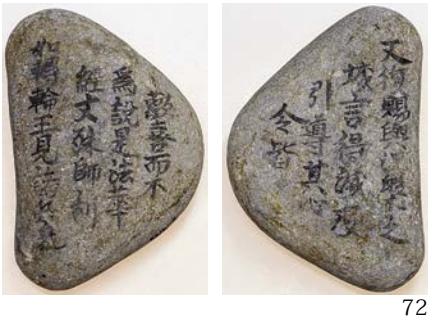
70

魔王不肯順伏
如來賢聖諸將
與之共戰其有功者
心亦歡喜於四
衆中
爲説諸經令
其心悦賜以禪定
解脱無漏根力
諸[注1]之財

注1　抜字　大経では法あり

71

又復賜與涅槃之
城言得滅度
引導其心
令皆
歡喜而不
爲説是法華
經文殊師利
如轉輪王見諸兵衆



72

亦復如是於三界中
爲大法王以法教化
一切衆生見賢聖
軍與五陰魔
煩惱魔
死魔
共

73

第 230 図　巻第五　安樂行品第十四（14）

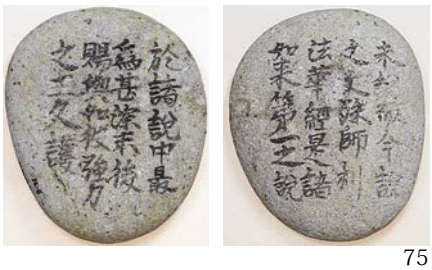
戰有大功勳滅
三毒出三界破
魔網爾時如來
亦大歡喜此

法華經能
令衆生至一切
智一切世間
多怨難信先所

74

未説而今説
之文殊師利
此法華經是諸
如来第一之説

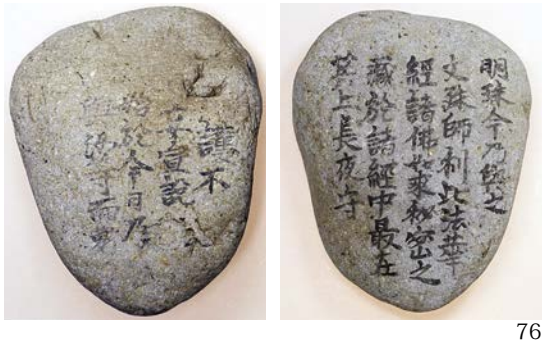
於諸説中最
爲甚深末後
賜與如彼強力
之王久護



75

明珠今乃與之
文殊師利此法華
經諸佛如來秘密之
藏於諸經中最在
其上長夜守

護不
妄宣説
始於今日乃
與汝等而敷



76

演之爾時世尊欲
重宣此義而
説偈言

77

常行忍辱
哀愍一切
乃能演説

佛所讃經
後末世時
持此經者

78

於家出家
及非菩薩

應生
慈悲

79

斯等不聞
不信是經

則爲大失

80

第 231 図　巻第五　安樂行品第十四（15）

我得佛道　以諸方便　爲説此法　令住其中

81

譬如強力　轉輪之王　兵戰有功　賞賜諸物

82

象馬車乘　嚴身之具　及諸田宅　聚落城邑

83

或與衣服　種種珍寶　奴婢財物　歡喜賜與　如有勇健　能爲難事

84

三解髻中　明珠賜之　如來亦爾　爲諸法王　忍辱大力　智慧寶藏

85

以大慈悲　如法化世　見一切人　受諸苦惱

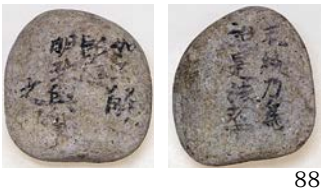
86

以大方便　説以諸經[注1]　既知衆生　得其力已

87

注1　誤字　大経では此

未後乃爲　説是法華　如三解髻　明珠與之



88

比[注1]經爲尊　衆經中上　我常守護　不妄開示

89

注1　誤字　大経では此

第 232 図　巻第五　安樂行品第十四（16）

91

欲得安隱
演說斷經
應當親近
如是
四法

90

今正是時
爲汝等說
注1

注1　裏面 文字改行不明
我滅度後　求佛道者か

92

讀是經者
常無憂惱
又無病痛
顏色鮮白

93

不生貧窮
卑賤醜陋（注1）
衆生樂見
如慕賢聖（注2）

注1　異字形
注2　異字形

94

天諸童子
以爲給使
刀杖不加
毒不能害

95

若人惡罵
口則閉塞
遊行無畏
如師子王

96

智慧光明
如日之照
若於夢中
但見妙事
見諸如来
坐師子座

第 233 図　巻第五　安樂行品第十四（17）

諸比丘
衆
圍繞[注1]
説法

97

注1　異字形

98

又見龍神
阿脩羅等
數如恒沙
恭敬合掌

99

自見其身
而爲説法
又見諸佛
身相金色

100

放無量光
照於一切
以梵
音聲
演説諸法

101

注1　誤字　大経では智

佛爲四衆
説無上法
見身處中
合掌讃佛
聞法歡喜
而爲供養
得陀羅尼
證不退知[注1]

102

佛知其心
深入佛道
卽爲授記
成最正覺
汝善男子
當於來世
得無量智
佛之大道

103

國土嚴淨
廣大無比
亦有四衆
合掌聽法
又見自身
在山林中
修習善法
證諸實相

第 234 図　巻第五　安樂行品第十四（18）

深入禅定
見十方佛
諸佛身金色
百福相莊嚴

104

又夢作國王
捨宮殿眷
屬
及上妙五欲
行詣於道場

105

在菩提樹下
而處師子座
求道過七日
得諸佛之知[注1]
成無上道已
起而轉法輪
爲四衆説法
逕[注2]千萬億劫

注1　誤字　大経では智
注2　誤字　大経では經（春日版と同じ）

106

説無漏妙法
度無量衆生
後當入涅槃
如烟盡燈滅

107

若後惡世中
説是第一法
是人得大利
如上諸
功德

108

第 235 図　巻第五　安樂行品第十四（19）

妙法蓮華經
從地涌出品第十五
爾時佗方國土諸来
菩薩摩訶薩過八
恒河沙數於大衆中
起立合掌作禮而
白佛言世尊若聽
我等於佛滅後在
此娑婆世界勤加
精進護持讀誦
書寫供養是經
典者當於此土而
孝廣説之爾時
佛告諸菩薩摩
訶薩衆止
善男子不須汝等
護持此經

1

注1　重複

2

所以者何我娑
婆世界自有六
萬恒河沙等菩
薩摩訶薩一一菩
薩各有六萬恒河沙
眷屬是諸人等
能於我滅後護
持讀誦廣説此經
佛説是時娑婆世
界三千大千國土
地皆震裂而
於其中

3

4

第 236 図　巻第五　従地涌出品第十五（１）

有無量千萬億菩薩摩訶薩
同時涌出是諸菩薩身皆金色
三十二相無量光明先盡在此娑
婆世界之下此界虛空中
住是諸菩薩聞釋迦牟尼
佛所説音聲從下發來一一
菩薩皆是大衆唱導之首各
將六萬恒河沙等[注1]眷屬

注1　加筆（春日版と同じ）

5

況將五萬四萬三萬
二萬一萬恒河沙等
眷屬者況復
乃至一恒河
沙半恒河沙四分
之一乃至千萬
億那由佗分之一

6

況復千萬億那由佗
眷屬況復億萬
眷屬況復千萬
百萬乃至一萬況復
一千二百乃至二十
況復

7

將五四三二一
弟子者況復
單己樂遠離
行如是等比
無量無邊等[注1]
數譬諭所不能
知是
諸菩薩從地
出已

注1　異体字

8

第 237 図　巻第五　從地涌出品第十五（２）

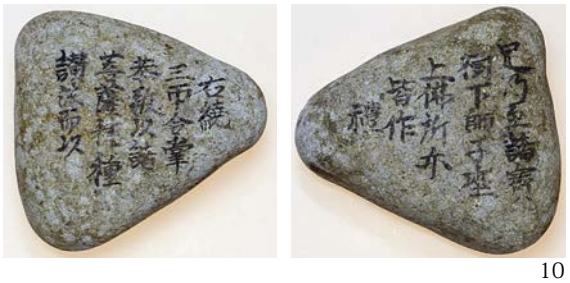
各詣虚空七寶妙
塔多寶如來

釋迦牟尼佛所到已
向二世尊頭面禮

9

足乃[注1]至諸寶
樹下師子座
上佛所亦
皆作
禮

右繞
三匝合掌
恭敬以諸
菩薩種種
讃法而以



10

注1　誤字　大経では及（春日版と同じ）

讃歎住[注1]一面欣樂瞻仰於
二世尊是諸菩薩摩訶薩
從初涌出以諸菩薩
種種讃法而讃於
佛

如是時間逕[注2]五十
小劫是時釋迦
牟尼佛默然而坐
及諸四衆亦皆默然

11

注1　抜字　大経では在あり
注2　誤字　大経では經（春日版と同じ）

五十小劫
佛神力故令諸
大衆謂如半日
爾時四衆亦以
佛神力故見諸
菩薩徧滿無量
百千萬億國土
虚空

12

是菩薩衆中
有四導師一名
上行二名無邊
行三名淨行
四名安立行是四菩
薩於其衆中最爲
上首唱導之師在
大衆前各共合掌

13

第 238 図　巻第五　従地涌出品第十五（３）

観釋迦牟尼佛而
問訊言世尊少
病少惱安樂行
不所應度者
受教易不不
令世尊生疲勞
耶爾時四大菩
薩而説偈言

14

世尊安樂
少病少惱
教化衆生
得無疲倦[注1]
又諸衆生
受化易不
不令世尊
生疲勞耶

注1　誤字　大経では惓（春日版と同じ）

15

爾時世尊於諸[注1]
菩薩大衆中
而作是言
如是
如是諸善男
子如來安樂
少病少惱諸
衆生

注1　加筆（春日版と同じ）

16

等易可化度
無有疲勞
所以者何
是諸衆生
世世已來
常

17

受我化亦
於過去
諸佛

18

供養尊重種
諸善根此諸
衆生始見我
身
聞我所説即
皆信受入如來
慧除先修習

19

第 239 図　巻第五　從地涌出品第十五（４）

學小乘者如是之人我今
亦令得聞是經入於
佛慧爾時
諸大菩薩
而說偈言

20

善哉善哉
大雄世尊
諸衆生等
易可化度

能問諸佛
甚深智慧
聞已信解[注1]
我等隨喜

21

注1　誤字　大経では行（春日版と同じ）

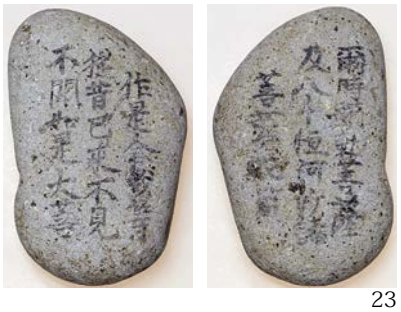
於時世尊讚
歎上首諸大菩
薩善哉善哉

善男子汝等
能於如來發
隨喜心

22

爾時彌勒菩薩
及八千恒河沙諸
菩薩衆皆

作是念我等
從昔已來不見
不聞如是大菩



23

薩摩訶薩衆
從地涌出住世尊
前合掌供養

問訊如來時

24

第 240 図　巻第五　従地涌出品第十五（５）

彌勒菩薩摩
訶薩知八千
恒河沙諸菩
薩等
心之所念
并欲自決所
疑合掌向佛
以偈問曰

25

無量千萬億
大衆諸菩薩
昔所未曾見
願兩足尊說

26

是從何所來
以何因緣集
巨身大神通
智慧叵思
議
其志念堅
固有大忍辱
力衆生所樂
見爲從何
所來

27

一一諸菩薩
所將諸眷
屬
其數
無有量如
恒河沙等

28

或有
大菩薩
將六萬
恒沙

29

如是
諸大衆
一心求
佛道

30

第 241 図　巻第五　從地涌出品第十五（６）

是諸大師等
六萬恒河沙
倶來供養
佛及護持
是經

31

將五萬恒沙
其數過於是

32

四萬及
三萬
二萬至
一萬

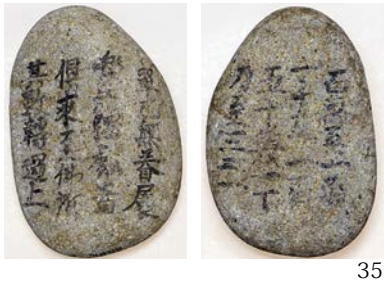
33

一千一百等
乃至一恒沙
半及三四分
億萬分之一
千萬那由陀
萬億諸弟子
乃至於半億
其數復過上[注1]

34

注1　異字形

百萬至一萬
一千及一百
五十與一十
乃至三二一
單己無眷屬
樂於獨處者
倶來至佛所
其數轉過上[注1]



35

注1　異字形

如是諸大
衆
若人行籌數
過於恒沙劫

36

是諸
大威德
精
進菩
薩衆

37

誰爲其説[注1]
教化而成就
從誰初
發心

38

注1　抜字　大経では法あり

第242図　巻第五　従地涌出品第十五（7）

稱揚何佛法
受持行誰經
修習何佛道
如是諸菩薩
神通大智力
四方地震裂
皆從中涌出
世尊我昔來

39

未曾見是事
願説其所從
國土之名號
我常遊諸國
未曾見是事[注1]
我於此衆中

注1　誤字　大経では衆（春日版と同じ）

40

乃不識一人
忽然從地出
願説其因緣
今此之大會
無量百千億

41

是諸菩薩等
皆欲知此事
是諸菩薩衆
本末之因緣
無量德世尊
唯願決衆疑
爾時釋迦牟尼
佛[注1]

注1　加筆（春日版と同じ）

42

分身諸佛從
無量千萬億
佗方國土
来者在於八方
諸寶樹下師子
座上結跏趺坐

43

第 243 図　巻第五　從地涌出品第十五（８）

其佛侍者
各各見是菩
薩大衆於三千
大千世界四方
從地
涌出
住於虛空

44

各白其佛言
世尊此諸無量
無邊阿僧
祇
菩薩大
衆從何所來
爾時諸佛

45

各告侍者諸善
男子且待須臾
有菩薩摩訶薩
名曰彌勒釋迦
牟尼佛之所授記
次後作佛已[注1]問斯
事佛今答之

注1　誤字　大経では以（春日版と同じ）

46

汝等自當因是
得聞爾時釋
迦牟尼佛
告彌勤[注1]菩
薩善哉善哉
阿逸多乃

注1　誤字　大経では勒

47

能問佛如是
大事汝等當
共一心被精進
鎧發堅固
意如來今欲
顯發宣示

48

第 244 図　巻第五　従地涌出品第十五（９）

諸佛智慧
諸佛自在
神通之力
諸佛師子奮
迅之力諸佛
威猛大

49

勢之力爾時
世尊欲重
宣此義而
說偈言

50

住於忍善中
昔所未聞法
今皆當得
聞
我今安慰
汝勿得懷疑懼
佛無不實語
智慧不可量

51

所得第一法
甚深叵分別
如是今當說
汝等一心聽
爾
時
世尊

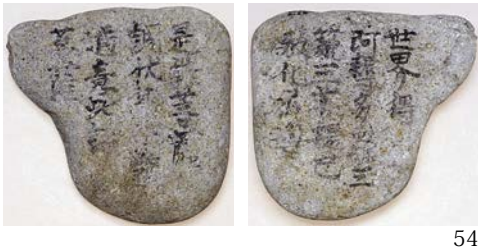
52

説是偈[注1]
已告彌勒
菩薩
我今於此
大衆
宣告
汝等

注1　誤字　大経では此（春日版と同じ）

53

世界得
阿耨多羅三
藐三菩提已
教化示導
是諸菩薩
調伏其心令發
道意此諸
菩薩



54

第 245 図　巻第五　從地涌出品第十五（10）

皆於是娑婆
世界之下此界
虛空中住於
諸經典

55

讀誦通利
思惟分別
正憶念

阿逸
多是諸
善男子
等不樂

56

在衆多有
所說常樂
靜處
勤行

精進未
曾休息亦
不依止人天

57

而住常樂深智
無有障礙亦常
樂於諸佛
之法

一心精進求無
上慧爾時世尊
欲重宣此義

58

而說偈言
阿逸汝當知是諸大
菩薩從無數劫
來

修習佛智慧
悉是我所化
令發大道心
此等是我子

59

依止是世界
常行頭陀事
志樂於靜處
捨大衆憒鬧

不樂多所說
如是諸子等
學習我道法
晝夜常精進

60

第 246 図　巻第五　從地涌出品第十五（11）

61

爲求佛道故
在娑婆世界
下方空中住

62

志念力堅固
常勤求智慧
說種種妙法
其心無所畏
我於伽耶城
菩提樹下坐

63

得成最正覺
轉無上法輪
爾乃教化之
令初發道心

64

今皆住不退
悉當得成佛
我今說實語
汝等一心信
我從久遠來

65

教化是等衆

66

爾時彌勒
菩薩摩訶
薩及無數
諸菩薩等心生
疑惑恠[注1]未曾有
而作是念

注1　俗字　大経では怪（春日版と同じ）

67

云何世尊
於少時間
教化
如是無量
無邊阿僧
祇諸大菩
薩

第 247 図　巻第五　従地涌出品第十五（12）

令住阿耨多
羅三藐三菩
提

即
白佛言世尊
如来爲大[注1]子時

注1　誤字　大経では太

68

出於釋宮
去伽耶城不
遠坐於道

場得
成阿耨多羅
三藐三菩提
從是已

69

来始過四十餘年
世尊云何於

此少時大作佛
事以佛勢力
以佛功德

70

教化如是無量大
菩薩衆當成阿耨
多羅三藐三菩提世尊
此大菩薩衆假使有人

於千萬億劫數不能盡

71

不得其邊斯等久
遠已来於無量
無邊諸佛所

植諸善根成
就菩薩道常
脩梵行
世尊如

72

第 248 図　巻第五　従地涌出品第十五（13）

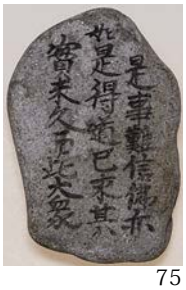
73

此之事世所
難信譬如
有人色美[注1]
髮黑
年二十
五指百歲
人言是我子
其百歲人

注1　異体字

74

亦指年
少言是
我父生育
我等


75

諸菩薩等
已於無量千
萬億劫爲佛道
故

是事難信佛亦
如是得道已來其
實未久而此大衆

76

勤行精進
善入出住無量
百千萬億三昧得
大神通久修梵行

善能次第習
諸善法巧於問答
人中之寶

77

一切世間甚
爲希有今
日世尊方

云得佛道時
初令發心教化
示導令向

78

阿耨多羅
三藐三菩提
世尊得佛未
久乃能

作此大功
德事
我等雖復信
佛隨宜所

79

悉通達
然諸新發
意菩薩於
佛滅後

說佛所
出言未曾
虛妄佛所
知者皆

第 249 図　巻第五　從地涌出品第十五（14）

若聞是語或不
信受而起破法罪業
因縁唯然世尊願爲
解説除我等
疑及未[注1]世諸善
男子聞此事已亦不
生疑爾時彌勒菩薩
欲重宣此義而説
偈言

注1　抜字　大経では來あり

80

佛昔從
釋種
出家近
伽耶

81

坐於菩提樹
爾来尚未久

82

此諸佛子等
其數不可量
久已行佛道
住神[注1]
通智
力

注1　誤字　大経では於神
通力（春日版と同じ）

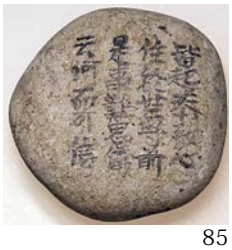
83

善學菩薩道
不染世間法
如蓮華在水
從地而涌出

84

皆起恭敬心
住於世尊前
是事難思儀[注1]
云何而可信
佛得道甚近
所成就甚多
願爲除衆疑
如實分別説

注1　誤字　大経では議



85

譬如少壯人
年始二十五
示人
百歳子
髪白而面皺

86

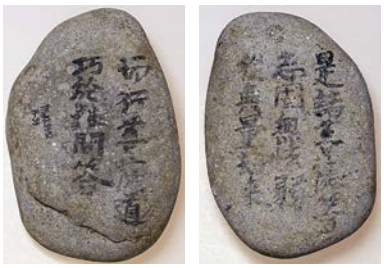
第 250 図　巻第五　従地涌出品第十五（15）

87

是等　子亦説　是父
我所生

88

父少而子老　世尊亦如是　得道來甚近
擧世所不信



89

是諸菩薩等　而行菩薩道　巧於難問答
志固無怯弱
從無量劫来

90

其心無所畏　端正有威德　十方佛所讃
忍辱心決定

91

善能分別説　爲求佛道故　我等從佛聞
不樂在人衆　於下空中住
常好在禅定

92

於此事無　解　若有於此經
疑願佛爲未來　演説令開

第 251 図　巻第五　從地涌出品第十五（16）

93

生疑不信者
即當墮惡道
願今爲解說

94

是無量菩薩
云何於少時
教化令發心

而住不退地
注1
妙法蓮華經
巻第五

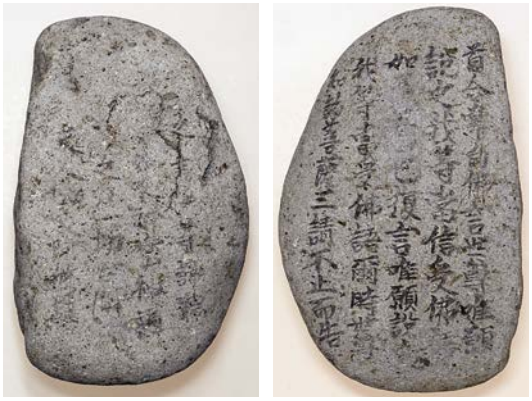
注1　加筆　以降大経になし（春日版と同じ）

第 252 図　巻第五　従地涌出品第十五（17）

妙法蓮華經如來壽量品第十六六[注1]
爾時佛告諸菩薩及一切大衆諸善男子汝
等當信解如來誠諦之語復告大衆汝等當
信解如來誠諦之語又復告諸大衆汝等當
信解如來誠諦之語是時菩薩大衆彌勒
爲

注1　重複

1



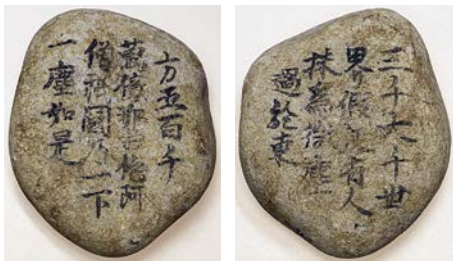
首合掌白佛言世尊唯願
説之我等當信受佛語
如是三白已復言唯願説之
我等當[注1]受佛語爾時世尊
知諸菩薩三請不止而告
之言汝等諦聽
如來祕密神通
之力一切世間
天人及阿修羅

注1　抜字　大経では信あり

2

皆謂今釋迦牟尼
佛出釋氏宮去伽
耶城不遠坐於道場
得阿耨多羅三
藐三菩提然
善男子我實成佛
已來無量無邊百千
萬億那由佗劫譬如五
百千萬億那由佗阿
僧祇

3



三千大千世
界假使有人
抹爲微塵
過於東
方五百千
萬億那由佗阿
僧祇國乃[注1]一下
一塵如是

注1　一は加筆重複

4

第 253 図　巻第六　如來壽量品第十六（1）

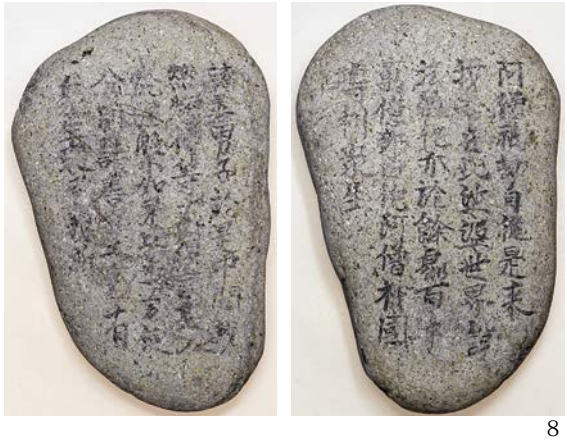
5

東行盡是微
塵諸善男子
於意云何是諸
世界可得思惟校
計知其數不
彌勒菩薩等
俱白佛言世尊
是諸世界無量
無邊非算數
所知亦非心
力所及一
切聲聞辟
支佛以
無漏
智不能思惟
知其限數

6

7

我等住阿惟越致
地於是事中亦所不達
世尊如是諸世界無
量無邊爾時佛告大
菩薩衆諸善男子
今當分明宣語
汝等是諸世界
若著微塵及不著
者盡以爲塵一塵
一劫我成佛已來
復過於此百千
萬億那由佗



8

阿僧祇劫自從是来
我常在此娑婆世界説
法教化亦於餘處百千
萬億那由佗阿僧祇國
導利衆生
諸善男子於是中間我
注1 燃燈佛等又復言其入
於涅槃如是皆以方便
分別諸善男子若有
衆生来至我所

注1　抜字 大経では説あり

第 254 図　巻第六　如來壽量品第十六（2）

我以佛眼觀其信等
諸根利鈍隨所應度
處處自説名字不
同年紀大小亦復
現言當入涅槃
又以種種
方便説微妙法
能令衆生發歡喜
心諸善男子如来見
諸衆生樂於小法

9

德薄垢重者爲是人説
我少出家得阿耨多羅
三藐三菩提然我實
成佛已來久遠若斯
但以方便教化
衆生令入佛道作如
是説諸善男子如
來所演經典皆爲度脱衆生
或説己身或説陀身
或示己身或示
佗身

10

或示己事或示佗事
注1 所言説皆實不虚
所以者何如來如
實知見
三界之相無有
生死若退若出
亦無在世及

注1　抜字 大経では諸あり

11

滅度者非實
非虚非如非異不如
三界見於三界
如斯之事如來明
見
無有錯謬以
諸衆生有種
種性種種欲
種種行

12

第 255 図　巻第六　如來壽量品第十六（３）

種種憶想分別故欲令生
諸善根以若干因緣譬
諭言辭種種説法所作
佛事未曾暫廢如是
我成佛已來甚大久
遠[注1]壽[注2]命無量阿僧祇
劫常住不滅

注1　異字形
注2　異字形

13

諸善男子我本行菩薩道
所成壽命今猶未盡復
倍上數然今非實滅度而
便唱言當取滅度如來以是
方便教化衆生所以者何
若佛久住於世薄德之人

14

不種善根貧窮下賤貧
著五欲入於憶想妄見網中
若見如來常在不滅便起
憍恣而懷厭怠不能生
於[注1]難遭之想恭敬
之心
是故
如來

注1　加筆（春日版と同じ）

15

以方便説比丘當知諸
佛出世難可値遇所
以者何諸薄德人
過無量百千萬億
劫
或有見佛或不見者
以此事故我作是言
諸比丘如來難可得見
斯衆生等聞如是語
必當生於難遭之想

16

第256図　巻第六　如來壽量品第十六（4）

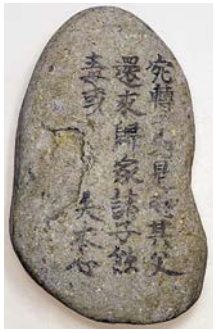
心懷戀慕渴仰於
佛便種善根是故如來
雖不實滅而言滅度又
善男子諸佛如來法
皆如是爲度衆生
皆實不虛譬如
良醫

智[注1]慧聰達明練方藥
善治衆病其人多諸子
息若十二十乃至百數
以有事緣遠[注2]至餘國
諸子於後飲陀毒[藥]
藥發悶亂

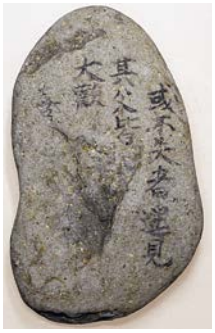
注1　異字形
注2　異字形

17

宛轉于地是時其父
還來歸家諸子飲
毒或失本心



或不失者遙見
其父皆
大歡
喜



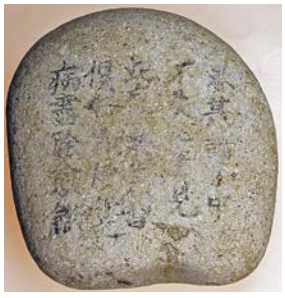
18

拜跪[問訊]善
安[隱]歸我等
愚癡誤[服]毒藥
願見[救療]更賜
[壽命]父

見子[等]苦惱如
是[依]諸[經]方求[好]藥
[草]色香[美]味[皆]
悉[具]足擣
篩和合

19

與子令服而作是
言此大良藥色
香美味皆悉具
足汝等可服速
除苦惱無復衆
患其諸[子]中
不失[心]者見
此良[藥]色香
俱好即便服之
病盡除愈餘



20

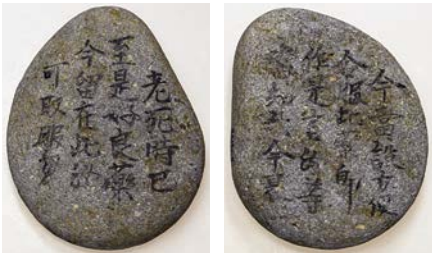
第 257 図　巻第六　如來壽量品第十六（５）

失心者見其
父來雖亦歡喜
問訊求索治病
然與其藥
而不肯服

21

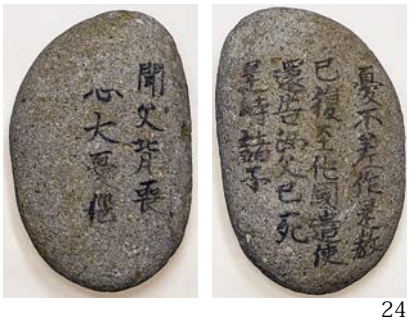
所以者何毒氣
深入失本心故
於此好色香
藥而謂不美
父作是念
此子可愍爲毒
所中心皆顚倒雖
見我喜求索救
療如是好藥而
不肯服我

22



今當設方便
令服此藥卽
作是言汝等
當知我今衰
老死時已
至是好良藥
今留在此汝
可取服勿

23



憂不差作是教
已復至佗國遣使
還告汝父已死
是時諸子
聞父背喪
心大憂惱

24

而作是念若父
在者慈愍我等
能見救護今
者捨我
遠喪
佗國自惟
孤露無復恃
怙常懷悲感
心遂醒悟乃知此
藥色香味美

注1

注1　文字順逆　大経では味香

25

第 258 図　巻第六　如來壽量品第十六（6）

卽取服之毒
病皆愈其
父聞子
悉已得
差尋便
來歸咸使
見之

26

諸善男子
於意云何頗
有人能說此良
醫虛妄
罪不不也世尊
佛言我[注1]如是

注1　抜字　大経では亦あり

27

成佛已來無
量無邊百千
萬億那由佗
阿僧祇劫爲
衆生故以方便
力言當滅度

28

亦無有能如
法說我虛
妄過者爾時
世尊欲
重宣此義
而說偈言

29

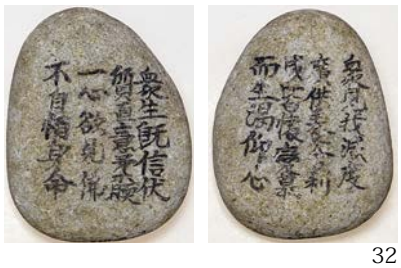
自我得佛來
所經諸劫數
無量百千萬
億載阿僧祇
常說法教化
無數億衆生
令入於佛道
爾來無量劫

30

爲度衆生故
方便現涅槃
而實不滅度
常住此說法
我常住於此
以諸神通力
令顚倒衆生
雖近而不見

31

第 259 図　巻第六　如來壽量品第十六（７）



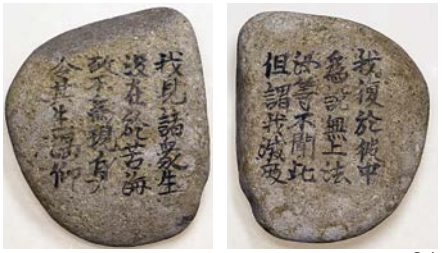
32

衆見我滅度
廣供養舍利
咸皆懷戀慕
而生渴仰心
衆生既信伏
質直意柔軟[注1]
一心欲見佛
不自惜身命

注1　異体字

33

時我及衆僧
俱出靈鷲山
我時語衆生
常在此不滅
以方便力故
現有滅不滅
餘國有衆生
恭敬信樂者



34

我復於彼中
爲説無上法
汝等不聞此
但謂我滅度
我見諸衆生
沒在於苦海[注1]
故不爲現身
令其生渴仰

注1　誤字　大経では惱（春日版と同じ）

35

因其心戀慕
乃出爲諸[注1]法
神通力如是
於阿僧祇劫

注1　誤字　大経では説

36

常在靈鷲山
及餘諸住處
衆生見劫盡
大火所焼時
我此土安隱
天人常充滿
園林諸當[注1]閣
種種寶莊嚴

注1　誤字　大経では堂

37

寶樹多花果
衆生所遊樂
諸天擊天鼓
常作衆妓樂
雨曼陀羅華[注1]
散佛及大衆
我淨土不毀
而衆見焼盡

注1　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）

第260図　巻第六　如來壽量品第十六（8）

憂怖諸苦惱
如是悉充滿
是諸罪衆生
以惡業因緣
過阿僧祇劫
不聞三寶名
諸有修功德
柔和質直者

38

則皆見我身
在此而說法
或時爲此衆
說佛壽[注1]無量
久乃見佛者
爲說佛難值
我智力如是
慧光照無量

注1　異字形

39

壽命無數劫
久修業所
得
汝等有智者
勿於此生疑[注1]

注1　異字形

40

當斷令永盡
佛語實不虛
如醫善方便
爲治狂子故

41

實在而言死
無能說虛妄
我亦爲世父
救諸苦患
者
爲凡夫顚倒
實在而言滅
以常知[注1]衆生
而生憍恣心

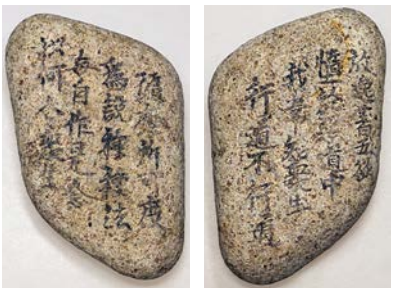
注1　誤字　大経では見我故

42

第 261 図　巻第六　如來壽量品第十六（９）

放逸著五欲
墮於惡道中
我常知衆生
行道不行道
隨應[注1]所可度
爲説種種法
毎自作是念[注2]
以何令衆生

注1　文字順逆　大経では所應（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では意（春日版と同じ）

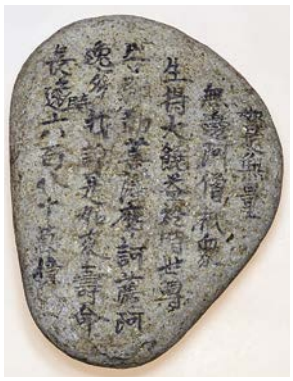

43

得入無上道[注1]
速成就佛身

注1　誤字　大経では慧（春日版と同じ）

44

第 262 図　巻第六　如來壽量品第十六（10）



1

妙法蓮華經分別功德品
第十七
爾時大會聞佛說壽
命劫數長遠
如是無量
無邊阿僧祇衆
生得大饒益於時世尊
告彌勒菩薩摩訶薩阿
逸多我說是如來壽命
長遠時[注1]六百八十萬億

注1　書き加え

2

那由陀恒河沙衆生
得無生法忍復有千
倍菩薩摩訶薩得
聞持陀羅尼門復有
一世界微塵數菩
薩

3

摩訶薩得樂說
無礙辯才復有
一世界微塵數
菩薩摩訶薩

4

得百千萬億
無量旋陀羅
尼復有三千
大千世界
微塵數菩薩
摩訶薩能轉

第 263 図　巻第六　分別功徳品第十七（１）

不退法輪復
有二千中
國土微塵數
菩薩摩
訶薩能轉
清淨法輪

5

復有小千國土
微塵數菩薩
摩訶薩八生當得
阿耨多羅三藐
三菩提復有
四四天下微塵

6

數菩薩摩
訶薩四生當
得阿耨多
羅三藐三菩提
復有三四天下

7

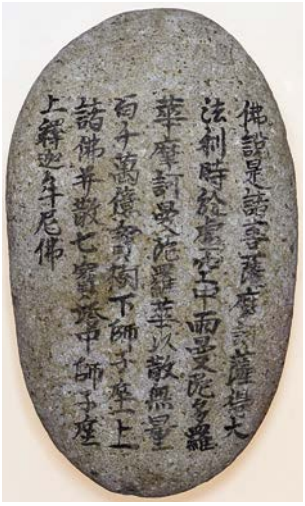
微塵數菩薩
摩訶薩三生當
得阿耨多羅
三藐三菩提
復有二四天下
微塵數菩薩
摩訶薩二生

8

第 264 図　巻第六　分別功徳品第十七（２）

9

當得阿耨多羅三藐三菩提
復有一四天下微塵數菩薩摩
訶薩一生當得阿耨多羅三
藐三菩提復有八世界微塵數
衆生皆發阿耨多羅三藐
三菩提心



佛説是諸菩薩摩訶薩得大
法利時於虚空中雨曼陀多[注1]羅
華摩訶曼陀羅華以散無量
百千萬億[注2]寶樹下師子座上
諸佛并散七寶塔中師子座
上釋迦牟尼佛

注1　加筆
注2　抜字　大経では衆あり（春日版なし）

10

珠瓔珞摩尼珠
瓔珞如意[注1]瓔珞徧
於九方衆寶香
爐

焼無價香自然周
至供養大會一一
佛上有諸菩
薩

注1　抜字　大経では珠あり

第 265 図　巻第六　分別功徳品第十七（３）

執持旛蓋次第而上至于梵天是諸
菩薩以妙音聲歌無量頌讃歎諸佛
爾時彌勒菩薩從座而起偏袒右
肩合掌向佛而説偈言
佛説希有法昔所未曾聞
世尊有大力

壽命不可量無數諸佛子
聞世尊分別説得法利者
歡喜充徧身或住不退地
或得陀羅尼或無礙樂説
萬億旋總持或有大千界
微塵數菩薩各各皆能轉
不退之法輪復有中千界

11

微塵數菩薩
各各皆能轉
清淨之法輪
復有小千界
微塵數菩薩
餘各八生在
當得成佛道

或有四三二
如此四天下
微塵諸菩薩
隨數生成佛
或一四天下
微數菩薩

12

注1　誤字　大経では復（春日版と同じ）
注2　抜字　大経では塵あり

第 266 図　巻第六　分別功徳品第十七（４）

餘有一生在
當得[注1]一切智
如是等衆生
聞佛壽長遠[注2]
得無量無漏
清淨之果報

注1　誤字 大経では成（春日版と同じ）
注2　異字形

13

復有八世界
微塵數衆生
聞佛説壽
命
皆發
無上心

14

世尊説無量
不可思議法
多有所饒益
如虚空無
邊
雨天曼陀羅
摩訶曼陀羅

15

釋梵如恒沙
無數佛土來
雨栴檀沈水
繽紛而亂墜
如鳥飛[注3]空下
供散於諸佛
天鼓虚空中
自然出妙聲

注1　異字形
注2　異体字・異字形
注3　異字形

16

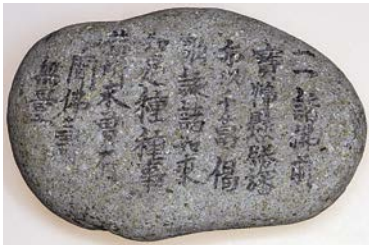
第 267 図　巻第六　分別功徳品第十七（５）

天衣千萬億[注1]
旋轉而來下
衆寶妙香爐
燒無價之香
自然悉周徧
供養諸
世尊

17

其大菩薩衆
執七寶旛蓋
高妙萬億種
次第
至梵天

注1　誤字 大経では種（春日版と同じ）



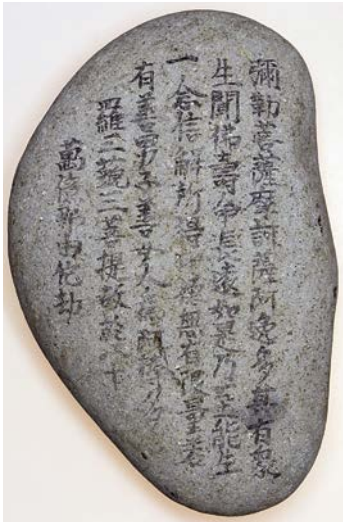
一一諸佛前
寶幢懸勝旛
亦以千萬[注1]偈
歌詠諸如來
如是種種事
昔所未曽有
聞佛壽
無量

18

一切皆歡喜
佛名聞十方
廣饒益衆生
一切具善根
以助無上心
爾時佛
告

注1　異字形

第 268 図　巻第六　分別功徳品第十七（6）



19

彌勒菩薩摩訶薩阿逸多其有衆
生聞佛壽命長遠[注1]如是乃至能生
一念信解所得功德無有限量若
有善男子善女人爲阿耨多
羅三藐三菩提故於八十
萬億那由佗劫

行五波羅蜜檀波羅蜜
尸羅波羅蜜羼提波羅蜜
毗梨耶波羅蜜禪波羅蜜
除般若波羅蜜以是功德
比前功德百分千分百千

注1　異字形

20

萬億分不及其一乃至
筭[注1]數譬諭所不能知
若善男子[注2]有如是功
德於阿耨多羅三藐
三菩提退者無有
是處爾時世尊
欲重宣此義

而說偈言
若人求佛慧於八十
萬億那由佗劫數行五
波羅蜜於是諸劫中布施
供養佛及緣覺弟子并諸
菩薩衆珍異之飲食上
服與臥具栴檀[注3]立精舎

注1　異体字
注2　抜字　大経では善女人あり（春日版なし）
注3　異字形

第 269 図　巻第六　分別功徳品第十七（7）

以園[注1]林荘厳如是等布施
種種皆微妙盡此諸劫數
以回[注2]向佛道若復持禁戒
清淨無缺漏求於無上道
諸佛之所歎若復行忍辱
住於調柔地

21

設衆惡來加
其心不傾動諸有得法者
懐於増上慢爲此所輕惱
如是亦能忍若復勤精進
志念常堅固於無量億劫
一心不懈怠[注3]又於無數劫

注1　異字形
注2　誤字　大経では迴
注3　誤字　大経では息（春日版と同じ）

願求無上道
我得一切智
盡諸禅定際

22

是人於百千
萬億劫數中
行此諸功德
如上之所説

有善男女等
聞我説壽命
乃至一念信
其福過於彼[注1]

注1　異字形

23

若人悉無有
一切諸疑悔
深心須臾信
其福爲如此

其有諸菩薩
無量劫行道
聞我説壽命
是則能信受

24

第270図　巻第六　分別功徳品第十七（8）

如是諸人等
頂受此經典
願我於未來
長壽度
衆生

25

如今日世尊
諸釋中之王
道場師子吼
説法無所畏

26

我等未來世
一切所尊敬
坐於道場時
説壽亦如是
若有深心者
清淨而質直
多聞能總持
隨義解佛語

27

如是諸人等
於此無有疑

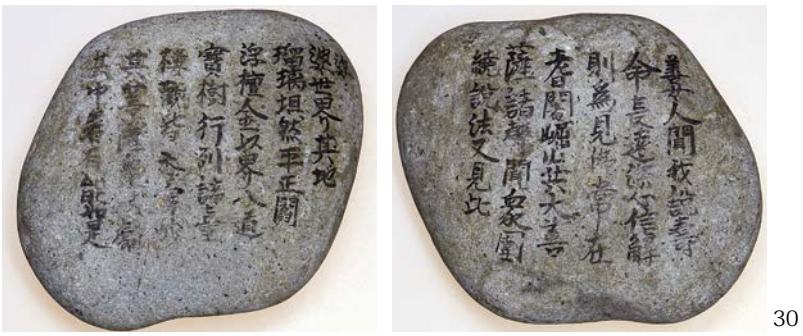
28

29

又阿逸多若有聞佛壽
命長遠解[注1]其言趣是人
所得功德無有限量能起
如來無上之慧何況廣聞
是經若教人聞若
自持若教人持
若自書若教人書若以
華香瓔珞幢旛繒蓋
香油蘇燈供養經卷是
人功德無量無邊能
生一切種智阿逸多
若善男子

注1　異字形

第 271 図　巻第六　分別功徳品第十七（９）



善女人聞我説壽
命長遠[注1]深心信解
則爲見佛常在
耆闍崛山共大菩
薩諸聲聞衆圍
繞説法又見此
娑
婆世界其地
瑠璃坦然平正閻
浮檀金以界八道
寶樹行列諸臺
樓觀皆悉寶成
其菩薩衆咸處
其中若有能如是

注1　異字形

觀者當知是爲
深信解相又復
如來滅後若聞
是[經]而不毀訾[注1]
起隨喜心當知已
爲深信解相何

注1　誤字　大経では呰（春日版と同じ）
石経では此は比と書写

況讀誦受持
之者斯人則
爲頂戴如來
阿逸多是善

32

第272図　巻第六　分別功徳品第十七（10）

33

男子善女人不須爲我復起
塔寺及作僧坊以四事供養
衆僧所以者何是善男子
善女人受持讀誦是經典者
爲已起塔造立僧坊供養衆
僧則爲以佛舍利起七寶
塔

高廣漸小至于梵[注1]懸諸
旛蓋及衆寶鈴華香
瓔珞抹香[注2]燒香衆鼓[注3]樂簫
笛箜篌種種舞戲以妙音
聲歌唄讃頌則爲己[注4]於無
量千萬億劫作是供養
已阿逸多若我滅後

注1　抜字　大経では天あり
注2　抜字　大経では塗香あり
注3　抜字　大経では伎あり
注4　加筆（春日版と同じ）

34

聞是經典有
能受持若自書
若教人書則爲起立
僧坊以赤栴檀作諸
殿堂三十有二高

八多羅樹高廣嚴
好百千比丘於其中
止園林浴池經行
禪窟衣服飲食
牀蓐[注1]湯藥一切

注1　同音同義字　大経では床褥（春日版では床摩）

第 273 図　巻第六　分別功徳品第十七（11）

樂具充滿其中如是
僧坊堂閣若干百千
萬億其數無量以此現
前供養於我及比丘
僧是故我說
如來滅後

若有受持讀誦
爲陀人說若自書若
教人書供養經卷
不須復起塔寺及
造僧坊供養衆
僧況復有人

35

能持是經兼行布施
持戒忍辱精進一心智
慧其德最勝無量
無邊譬如虛空

東西南北四維
上下無量無邊
是人功德亦復如是
無量無邊疾至一切
種智

36

若人讀誦受
持是經爲陀人
說若自書若教
人書復能起塔
及造僧坊

供養讃歎
聲聞衆僧亦以
百千萬億讃歎
之法讃歎菩薩

37

第 274 図　巻第六　分別功徳品第十七（12）

38

功德又爲陀人種種
因緣隨義解說此法
華經復能清淨持戒
與柔和者而共同止
忍辱無瞋志念堅固
常貴坐禪得諸深定
精
進勇猛攝諸善
法利根
智慧善
咨問難
阿逸多
若我滅後

諸善男子善女人
受持讀誦是經典
者復有如是諸善
功德當知是人

39

已趣道場近阿
耨多羅三藐三菩
提坐道樹下阿逸多
是善男子善女人

若坐若立若
經行處此中
便應起塔一切
天人皆應供養
如佛之塔爾時
世尊欲重宣此
義而說偈言

注1　加筆（春日版と同じ）

40

若我滅度後
能奉持此經
斯人福無量
如上之所說
是則爲具足
一切諸供養
以舍利起塔
七寶而莊嚴

41

第 275 図　巻第六　分別功德品第十七（13）

表刹甚高廣　漸小至梵天
寶鈴千萬億　風動出妙音
又於無量劫　而供養此塔

42

華香諸瓔珞　天衣衆妓樂
燃香油蘇燈　周帀常照明
惡世末法時（注1）　能持是
經者

注1　文字順逆　大経では法末（春日版と同じ）

43

則爲已如上　具足諸供養
若能持此經　則如佛現在
以牛頭栴檀　起僧房（注1）供養
堂有三十二　高八多羅
樹

注1　同音同義字　大経では坊

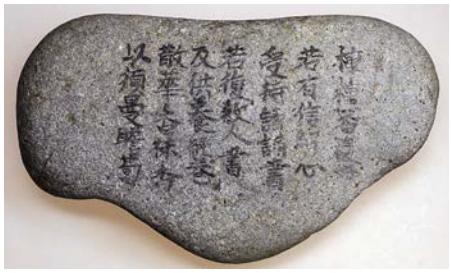
44

上膳（注1）妙衣服　牀臥皆具足
百千衆住處　園林諸浴池
經行及　禪
窟

注1　誤字　大経では饌

45

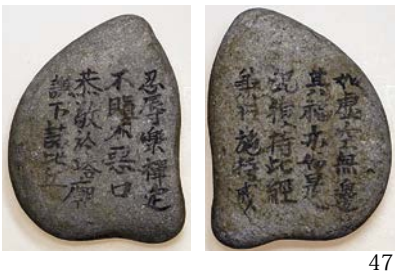
種種皆嚴好　若有信解心
受持讀誦書　若復教人書
及供養經卷　散華香抹香
以須曼瞻蔔



46

阿提目多伽　薰油常燃之
如是供養者　得無量功德

第 276 図　巻第六　分別功徳品第十七（14）



如虚空無邊
其福亦如是
況復持此經
兼布施持戒
忍辱樂禪定
不瞋不惡口
恭敬於塔廟
謙下諸比丘

47

遠離自高心
常思惟智慧
有問難不瞋
隨順爲解説
若能行是行
功德不可量
若見此法師
成就如是德

48

應以天華散
天衣覆其身
頭面接足禮
生心如佛想
又應作是念
不久詣道場[注1]
得無漏無爲
廣利諸天[注2]人

注1　誤字　大経では樹（春日版と同じ）
注2　文字順逆　大経では人天（春日版と同じ）

49

其所住
止處
經行若
坐臥
乃至説一偈
是中應
起塔

50

莊嚴令妙好
種種以供養
佛子住此地
則是佛受
用
常在於其中
經行及坐臥

51

第 277 図　巻第六　分別功徳品第十七（15）

1

妙法蓮華經[注1]
隨喜功德品第十八
爾時彌勒菩薩摩訶
薩白佛言世尊若
有善男子善女人聞是
法華經隨喜者得
幾所福而説偈言
世尊滅度後
其有聞是經

注1　抜字　大経では巻第六あり

若能隨喜者
爲得幾所福
爾時佛告彌
勒菩薩摩
訶薩
阿逸多如來
滅後[注1]比丘比丘
尼優婆塞
優婆夷及餘
智者

注1　抜字　大経では若あり（春日版と同じ）

2

若長若幼聞
是經隨喜已
從法會出至
於餘處若在
僧坊若空閑地
若城邑巷陌聚落
田里如其所聞爲
父母宗親善友

3

知識隨力演
説是諸人等
聞已隨喜復
行轉教
餘人聞已亦
隨喜轉教如
是展轉

4

第 278 図　巻第六　隨喜功德品第十八（１）

5

至第五十阿
逸多其第
五十善男子善
女人隨喜功德
我今說之

汝當善聽
若四百萬億阿僧祇
世界六趣四生衆
生卵生胎生濕
生化生若有形

6

無形有想無想
非有想非無想
無足二足四足
多足如是等在

衆生數者有人求
福隨其所欲娛樂
之具皆給與之一一衆
生與滿閻浮提

7

金銀瑠璃硨磲[注1]碼
碯[注2]硨磲珊瑚琥珀[注3]
諸妙珍寶及象
馬車乘七寶

所成宮殿樓閣等
是大施主如是布施
滿八十年已而作
是念我已施

注1　誤字　大経では車
注2　誤字　大経では馬腦
注3　誤字　大経では虎

8

衆生娛樂之具隨
意所欲然此衆生
皆已衰老年過八
十髮白面皺將死
不久我當以佛法

而訓導之即集此
衆生宣布法化示教
利喜一時皆得須陀洹
道斯陀含道阿那
含道阿羅

第 279 図　巻第六　隨喜功徳品第十八（２）

漢道盡諸
有漏於深
禪定皆得
自在具八
解脫於汝意
云何是大施
主所得功德
寧爲多

9

不彌勒白佛言世尊
是人功德甚多無
量無邊若是
施主
但施衆生一切樂
具功德無量何
況令得阿羅漢

10

果佛告彌勒我今分明語
汝是人以一切樂具施於
四百萬億阿僧祇
世界六趣衆生又令得
阿羅漢果所得[注1]功德

注1　書き加え

11

不如是第五
十人聞法華
經一偈隨喜
功德百分千
分百千萬
億分不及其一
乃至算數
譬喻所不
能知阿逸
多如是第

12

第 280 図　巻第六　隨喜功德品第十八（3）

五十人展轉聞
法華經隨喜
功德尚無量
無邊阿僧祇
何況最初於
會中聞而隨
喜者其福復
勝無量無邊

13

阿僧祇不可得比又阿逸多
若人爲是經故往詣僧房[注1]
若坐若立
須臾聽受緣是功德轉身
所生得好上妙象馬車乘
珍寶輦輿及乘天宮

注1　誤字　大経では坊

14

若復有人於
講法處坐更
有人來勸
令坐聽
若分坐[注1]
令坐是
人功德

注1　同音同義字　大経・春日版では座

15

轉身得帝
釋坐處若
梵王坐處
若轉輪聖王
所坐之處阿
逸多若復有人

16

第 281 図　巻第六　随喜功徳品第十八（４）

乃至須臾間
聞是人功德
轉身得與陀
羅尼菩薩共生
一處利根智慧
百千萬世終不
瘖瘂口氣

17

不臭舌常
無病口亦無
病齒不垢黑
不黃不踈亦
不缺落不差
不曲脣不下
垂亦不褰縮
不麤澁[注1]不

注1　俗字　大経では麁（春日版と同じ）

18

瘡胗亦不缺壞亦不
喎邪[注1]不厚不大亦不黮
黑無諸可惡鼻不匾
匾亦不曲戾面色不
黑亦[注2]狹長[注3]不窊[注4]曲無
有一切不可喜相

19

脣舌牙齒悉皆嚴
好鼻脩高直面貌圓
滿眉高而長額廣平
正人相具足世世所生
見佛聞法信受教誨
阿逸多

注1　誤字　大経では斜（春日版と同じ）
注2　抜字　大経では不あり
注3　抜字　大経では亦あり
注4　加筆（春日版と同じ）

第 282 図　巻第六　隨喜功德品第十八（５）

汝且觀是勸於一人
令往聽法功德如此
何況一心聽說讀誦
而於大衆爲人
分別
如說修行爾時
世尊欲重宣此
義而說偈言

20

若人於法會得聞是
經典乃至於一偈隨喜
爲佗說如是展轉教
至於[注1]第五十最後人獲
福今當分別之
如有大施主
供給無量衆

注1　誤字　大経では千（春日版と同じ）

21

具滿八十歲
隨意之所欲
見彼衰老相
髮白而面皺
齒踈形枯竭
念其死不久

22

我今應當教
令得於道果
卽爲方便說
涅槃眞實
法
世皆不牢固
如水沫泡焰
汝等咸應當
疾生厭離心

23

若於講法處
勸人坐聽經
是福因緣得
釋梵轉輪座
何況一心聽
解說其義趣
如說而修行
其福不可限[注1]

注1　誤字　大経では量（春日版と同じ）

24

第 283 図　巻第六　隨喜功德品第十八（6）

妙法蓮華經法師
功德品第十九
爾時佛告常精進菩薩
摩訶薩若善男子
善女人
受持是法華經
若讀若誦若解
說若書寫是人
當得八百眼功德

1

千二百耳功
德八百鼻功德
千二百舌功德
八百身功德千
二百意功德
以是功德

2

莊嚴六根皆令
清淨是善男子
善女人父母所生
清淨肉眼見
於三千大千
世界內外

3

所有山林
河海下至
阿鼻
地獄上至
有頂亦見
其中

4

一切衆生及業因
緣果報生處悉見
悉知爾時世尊欲
重宣此義而說
偈言
若於大衆中
以無所畏心
說是法華經
汝聽其功德

5

第 284 図　巻第六　法師功徳品第十九（1）

是人得八百
功德殊勝眼
以是莊嚴故
其目甚清淨
父母所生眼
悉見三千界
内外彌樓山
須彌及銕圍

6

并諸餘山林
大海江河水
下至阿鼻
獄
上至有
頂天[注1]
其中
諸衆生

注1　誤字　大経では處（春日版と同じ）

7

一切皆悉見
雖未得天眼
肉眼力如是
復次常精進
若善男子

8

善女人受持
此經若讀
若誦若解說
若書寫得
千二百耳功
德以是清淨
耳聞三千
大千世界

9

下至阿鼻
地獄上至有
頂其中内外
種種
所有語言[注1]
音聲象聲
馬聲牛聲

注1　加筆（春日版あり）

10

第 285 図　巻第六　法師功徳品第十九（２）

車聲啼哭聲
愁歎聲螺聲
鼓聲鍾聲鈴聲
笑聲語聲
男聲女聲
童子聲童女聲
法聲非法聲苦
聲樂聲凡夫聲

11

聖人聲喜
聲不喜聲
天聲龍聲
夜叉聲
乾闥婆聲
阿脩羅聲

12

迦樓羅聲
緊那羅聲
摩睺羅伽聲
火聲水聲
風聲地獄聲
畜生聲餓鬼
聲
比丘聲比丘尼
聲

13

聲聞聲辟支佛
聲菩薩聲佛
聲以要言之三
千大千世界中
一切内外所有諸
聲雖未得天耳以
父母所生清淨
常耳皆悉聞

14

知如是分別[注1]
種種音聲
而不壞耳根爾時
世尊欲重宣此義
而説偈言

注1　書き加え

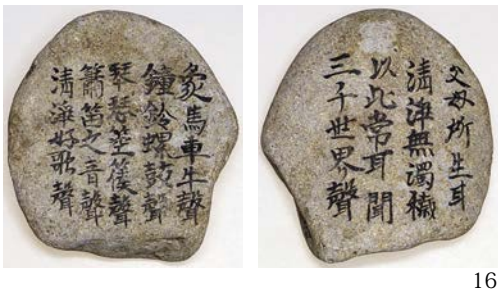
15

第 286 図　巻第六　法師功徳品第十九（3）

父母所生耳
清淨無濁穢
以此常耳聞
三千世界聲

象馬車牛聲
鍾鈴螺鼓聲
琴[注1]瑟[注2]箜篌[注3]聲
簫笛之音聲
清淨好歌聲

注1　異字形
注2　異字形
注3　異字形



16

聽之而不著
無數種人聲
聞悉能解了
又聞諸天聲

微妙之歌音
及聞男女聲
童子童女聲

17

山川嶮谷中
迦陵頻伽聲
命命等諸
鳥

悉聞
其音聲

18

地獄衆苦痛
種種楚毒聲

餓鬼飢渴逼
求索飲食聲

19

諸阿脩羅等
居在大海邊

自共言[注1]語時
出于大音聲

注1　文字順逆　大経では語言（春日版と同じ）

20

第 287 図　巻第六　法師功徳品第十九（４）

如是説法者
安住於此間
遙聞是衆聲
而不壞耳根
十方世界中
禽獣鳴相呼
其説法之人
於此悉聞之

21

其諸梵天上
光音及徧淨
乃至有頂天
言語之音聲
法師住於此
悉皆得聞之

22

一切比丘衆
及諸比丘尼
若讀誦經典
注1
法師住於此
悉皆得聞之
復有諸菩薩

注1　抜字　大経では若爲他人説あり

23

讀誦於經法
若爲陀人説
撰集解其義

24

如是諸音聲
悉皆得聞之
諸佛大聖尊
教化衆生者
於諸大會中

注1　書き加え

25

演説微妙法
持此法華者
悉皆得聞之
三千大千界
内外諸音聲

注1　異字形

26

第 288 図　巻第六　法師功徳品第十九（５）

下至阿鼻獄
上至有頂天
皆聞其音
聲
而不壞
耳根

27

其耳聰利故
悉能分別知
持是法華者
雖未得天耳
但用所生耳
功德已如是

注1　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）

28

復次常
精進若善男
子善女人
受持是經若
讀若誦
若解説若
書寫成就
八百鼻功德
以是清淨
鼻根

29

聞於三千大千
世界上下内外
種種諸香須
曼那華香
闍提華香
末利華香
瞻蔔華香
波羅羅華
香

30

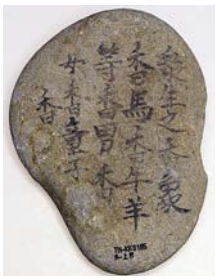
赤蓮華香
青蓮華香
白蓮華香
華樹香
菓樹香
栴檀香
沈水香
多摩羅跋香
多伽羅香

31

及千萬種
和香若抹
若丸若塗香
持是經者於
此間住悉能
分別又復
別知

32

第 289 図　巻第六　法師功徳品第十九（６）



33

衆生之香象
香馬香牛羊
等香男香
女香童子
香
童女香
及草[注1]木叢林香
若近若遠[注2]所有
諸香

注1　異字形
注2　異字形

34

雖住於
此亦聞天上
諸天之香
波利質多
羅拘鞞陀

注1

注1　表面　文字改行不明
悉皆得聞分別不錯持是經者か

35

摩訶曼陀羅
華香曼殊沙
華香摩
訶
十[注1]月廿日
南無阿弥陀佛
六月八日
□南□□女大

注1　裏面　加筆

36

曼殊沙華香
栴檀沈[注1]水種
種抹香諸
雑華香

注1　異体字

37

如是等天香
和合所出之香無
不聞知又聞諸
天身香釋提桓因
在勝殿上五欲娯樂
嬉戯時香若
在妙法堂

第290図　巻第六　法師功徳品第十九（7）

上爲忉利
諸天説法
時香若於
諸園[注1]
遊戯時
香及餘天
等男女身香
皆悉遙聞

注1　異字形

38

如是
展轉乃至
梵天[注1]上至有
頂諸人[注2]身香
亦皆聞之并
聞諸天所焼
之香

注1　誤字　大経では世（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では天

39

及聲聞香
辟支佛香菩薩
香諸佛身香
亦皆遙聞知
其所在雖聞此
香然於鼻根

40

不壞不錯若欲
分別爲佗人説
憶念不謬爾
時世尊欲重
宣此義
而説
偈言
是人鼻清華[注1]
於此世界中
若香若臭物

注1　誤字　大経では浄

41

種種
悉聞知
須曼那
闍提

42

多摩羅梅檀
沈[注1]水及桂香
種種華果
香
及知衆生
香男子女人香
説法者遠住聞
香知所在

注1　異体字

43

第 291 図　巻第六　法師功徳品第十九（８）

大勢轉輪王
小轉輪及子
群臣[注1]諸宮人
聞香知所在
身所著
珍寶

注1　異字形

44

諸人嚴身具
衣服及瓔珞
種種所塗香
聞則[注1]知其身
諸天若行坐
遊戲及神變
持是法華者
聞香悉能知

注1　誤字　大経では香（春日版と同じ）

45

諸樹華果實
及蘇油香氣
持經者住此
悉知其所
在
諸山
處[注1]
深
嶮

注1　文字順違い　大経では深嶮處

46

梅檀樹華[注1]敷
衆生在中者
聞香皆能知
銕圍山大海
地中諸衆生
持經者聞香
悉知其所在
阿脩羅男女

注1　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）

47

及其諸眷屬
鬪諍遊戲時
聞香皆能知
曠野險隘處

48

第 292 図　巻第六　法師功徳品第十九（9）

師子象虎狼
野牛水牛等
聞香知所在
若有懷妊者

49

未辯其男女
無根及非人
聞香悉能知
以聞香力故
知其初懷妊
成就不成就
安樂産福
子

50

地中衆伏藏
金銀諸珍寶
銅器之所盛
聞香悉能
知
種種諸瓔珞
無能識其價
聞香知貴
賤

51

出處及所在
天上諸華等
曼陀曼殊沙
波利質多
樹聞香悉
能知天上
諸宮殿

52

上中下差別[注1]
衆寶華[注2]莊嚴
聞香悉能知
天園[注3]林勝殿

53

諸觀妙法堂
在中而娯樂
聞香悉能知
諸天若聽法

54

注1　異字形
注2　同音同義字（大経では花（春日版と同じ））
注3　異字形

第 293 図　巻第六　法師功徳品第十九（10）

或受五欲時
來往行坐臥
聞香悉能知
天女所著衣

55

好華香莊嚴
周旋遊戲時
聞香悉能知
如是展轉上

56

乃至於梵天[注1]
入禪出禪者
聞香悉能知
光音徧淨天

57

注1　誤字　大経では世（春日版と同じ）

乃至于有頂
初生及退沒
聞香悉能知
諸比丘衆等
於法常精進

58

若坐若經行
及讀誦經法
或在林樹下
專精而坐禪
持經者聞香
悉知其所在

59

菩薩志堅固
坐禪若讀誦
或爲人
説法

60

第 294 図　巻第六　法師功徳品第十九（11）

聞香悉能知
在在方世尊
一切所恭敬
愍衆而説法

61

聞香悉能知
衆生在佛前

62

聞經皆
歡喜
如法
而修行

63

聞香
悉能知
雖未得
菩薩

64

無漏法生鼻
而是持經者
先得此
鼻相

65

復次常精進若善
男子善女人受持
是經若讀若誦
若解説若書寫
得千二百舌功德
若好若醜若美

66

若[注1]不美及諸苦澁[注2]
物在其舌根皆變
成上味如天甘露
無不美者若以舌
根於大衆中
有所演説出深妙
聲能入其心皆令
歡喜快樂又諸天
子天女釋梵諸天
聞是深妙音聲有

注1　加筆（春日版と同じ）
注2　異字形

67

所演説言論
次第皆悉來
聽及諸龍龍
女[注1]乾闥婆乾
闥婆女
阿修羅阿脩羅
女迦樓羅迦樓羅
女緊那羅緊那
羅女摩睺羅
伽

注1　抜字　大経では夜叉夜叉女あり

68

第 295 図　巻第六　法師功徳品第十九（12）

摩睺羅伽女爲
聽法故皆來親
近恭敬供養及
比丘比丘尼優
婆塞優婆
夷國王

王子群臣[注1]
眷屬小轉輪
王大轉輪王
七寶千子内
外眷屬乘其
宮殿

69

注1　異字形

俱來聽法
以是菩薩善
説法故

婆羅門
居士
國内人民

70

盡其形壽隨
侍供養又諸
聲聞

辟支佛
菩薩

71

諸佛常樂見之
是人所在方面
諸佛皆向其處説
法悉能受持一切
佛法又能出於深
妙法音爾時世尊

欲重宣此義而説
偈言是人舌根淨
終不受惡味其有
所食噉悉皆成甘
露以深淨妙聲

72

於大衆説法
以諸因緣論
引導衆生心
聞者皆歡喜

設諸上供養
諸天龍夜叉及
阿脩羅等

73

第 296 図　巻第六　法師功徳品第十九（13）

74

是説法之人
若欲以妙音
徧滿三千界
隨意卽能
至

皆以
恭敬心
而共來
聽法

75

大小轉輪王
及千子眷
屬合掌
恭敬心

76

常來聽受法

諸天龍夜叉
羅刹毗舍闍

77

亦以歡喜心
常樂來供養
梵天王魔王

自在大自在
如是諸天衆

78

常來至其所
諸佛及弟子
聞其說法音

常念而守護
或時爲現
身

79

復次常精進若善男子
善女人受持是經若
讀若誦若解說若

書寫得八百身功德
得清淨身如淨瑠璃
衆生喜見其身淨故

第 297 図　巻第六　法師功徳品第十九（14）

80

三千大千世界衆生
生時死時上下好醜
生善處惡處悉於
中現及銕圍山
大銕圍山
彌樓山摩訶
彌樓[注1]等諸山王[注2]
及其中衆生悉
於中現下至
阿鼻地獄

注1　抜字　大経では山あり
注2　加筆（春日版と同じ）

81

上至有頂所
有及衆生悉於
中現若聲聞
辟支佛菩薩
諸佛説法
皆於身[中]現
其色像[爾]時
世尊欲重[宣]
此
義而説偈言

82

若持法華[注1]經
其身甚清淨
如彼淨瑠璃
衆生皆喜見
又如淨明鏡
悉見諸色像
菩薩於淨身
皆見世所有

注1　同音同義字　大経では花者（春日版と同じ）

83

唯獨自明了
餘人所不見
三千世界中
一切諸群[注1]萌
天人阿脩羅
地獄鬼畜生
如是諸色像
皆於身中現

注1　異字形

第 298 図　巻第六　法師功徳品第十九（15）

諸天等宮殿
乃至於有頂
銕圍及彌樓
摩訶彌樓山

84

諸大海水等
皆於身中現
諸佛及聲聞
佛子菩薩等
若獨若在衆
説法悉皆
現

85

雖未得無漏
法性之妙身
以清淨常體
一切於中現

86

復次常精進
若善男子善女
人如來滅後
受持是經
若讀若誦
若解説若書寫
得千二百意功
德以是

87

實相不相
違背若説俗
間經書治世
語言資生
業等皆
順正法三千大
千世界六趣
衆生心之所
行

88

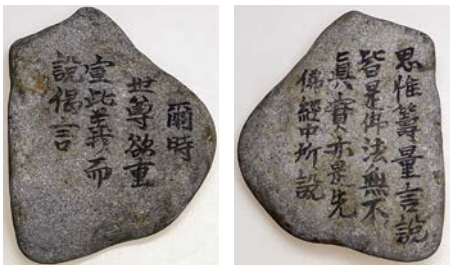
第 299 図　巻第六　法師功徳品第十九（16）

心所動作心所
戯論皆悉知之
雖未得無漏智[注1]
慧
而其意根
清淨如此是人
有所

注1　異字形

89

思惟籌量言説
皆是佛法無不
眞實亦是先
佛經中所説
爾時
世尊欲重
宣此義而
説偈言


90

是人意清淨
明利無穢濁
以此妙意根
知上中下法

91

乃至
聞一偈
通達無量
義
次第如法説
月四月至歲

92

是世界内
外一切諸
衆生
若天
龍
及人

93

夜叉鬼神等
其在六趣中
所念若干種
持法華[注1]之報
一時皆悉知
十方
無數佛
百福莊
嚴相

注1　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）

94

第300図　巻第六　法師功徳品第十九（17）

爲衆生説法
悉聞能受持
思惟無量義
説法亦無量
終始不忘錯
以持法華故
悉知諸法相

95

隨義識次第
達名字語言
如所知演説
此人有所説
皆是先佛法
以演此法故
於衆無所畏
持法華[注1]經者

注1　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）

96

意根淨若斯
雖未得無漏先
有如是相
是人持此經
安住希有地

97

爲一切衆生
歡喜而愛敬
能以千萬種
善巧之語言

98

妙法蓮華經卷第六
南[注3]無阿弥陀佛
南無地藏菩薩
分別而演[注1]説
持法華[注2]經故

注1　誤字　大経では説法（春日版と同じ）
注2　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）
注3　二行　加筆

99

第 301 図　巻第六　法師功徳品第十九（18）

妙法蓮華經常不輕菩薩品
第二十
爾時佛告得大勢菩薩
摩訶薩汝今當知若
比丘比丘尼優婆塞優婆
夷持法華[注1]經者若有惡口
罵詈誹謗獲

注1　同音同義字　大経では花（春日版と同じ）

1

大罪報如前所說
其所得功德如向
所說眼耳鼻舌身意
清淨得大勢乃往古昔
過無量無邊不可思議
阿僧祇劫有佛名
威音王如來應供正徧
知明行足善逝世間解
無上士調御丈夫天人
師佛世尊劫名離衰
國名大成

2

其威音王佛於彼世中爲
天人阿脩羅說法爲求
聲聞者說應四諦法
度[生]老病死
究竟涅槃爲求
辟支佛者說應十二因
緣法爲諸菩薩因阿
耨[注1]多羅三藐三菩

注1　異字形

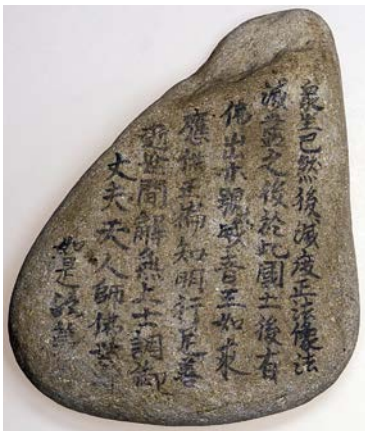
3

提說應六波羅蜜
法究竟佛慧得大
勢是威音王佛壽
四十萬億那由多[注1]
佗
恒河沙劫正[注2]住[注3]劫數
如一閻浮提微塵像
法住世劫數如四天下
微[注4]塵其佛饒益

注1　加筆
注2　抜字　大経では法あり
注3　抜字　大経では世あり
注4　異字形

4

第 302 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（1）



5

衆生已然後滅度正法像法
滅盡之後於此國土後有注1
佛出亦號威音王如來
應供正徧知明行足善
逝世間解無上士調御
丈夫天人師佛世尊
如是次第

有二萬億
佛皆同一號最
初威音王如來既已
滅度正法滅後於像法
中增上慢比丘有大勢注2力
爾時有一菩薩比丘名常
不輕得大勢注3注4一切何因緣名
常不輕是比丘凡有所見

注1　誤字　大経では復
注2　異字形
注3　異字形
注4　誤字　大経では一切→以

6

若比丘比丘尼優婆
塞優婆夷皆悉禮
拜讃歎而作是言
我深敬汝等不敢
輕
慢所以者何汝等皆行
菩薩道當得作佛
而是比丘不專
讀注1經典

注1　抜字　大経では誦あり

7

但行禮
拜注1乃至遠見
四衆亦復故往
禮拜注2讃歎注3而作是
言我不敢輕於
汝等汝等皆當作
佛四衆之中有生
瞋恚心不淨者惡口
罵詈言是無智比丘
從何所來

注1　異字形
注2　異字形
注3　異字形

第 303 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（２）

自言我不輕汝而與我
等授記當得作佛我
等不用如是虛忘授
記如此經歷多年
常被罵不生瞋
恚常作是言汝等
作佛説是語時衆
人或以杖木瓦石

注1　異字形
注2　誤字　大経では妄
注3　抜字　大経では詈あり
注4　誤字　大経では當

8

而打擲之
避走遠住猶高
聲唱言我不敢輕
於汝等汝等皆
當作佛以其常
作是語故
増上慢比丘比丘
尼優婆塞優婆
夷號之爲常不輕
是比丘臨欲終時
於虚空中具聞

9

威音王佛
先所説法華經
二十千萬億偈
悉能受持即得
如上眼根清淨
耳鼻舌身
意根清淨得
是六根清淨
已更増壽命
二百萬億

10

那由陀歲廣爲人説
是法華經於時増上
慢四衆比丘比丘尼優
婆塞優婆夷輕賤
是人爲作不輕名
者見
其得大神通力
樂説辯力大善寂
力聞其所説皆信伏
隨從是菩薩復化
千萬億衆令住

11

第 304 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（３）

阿耨多羅三藐
三菩提命終之後
得値二千億佛
皆號日月燈明

於其法中説是
法華經以是因緣
復値二千億佛
同號雲自在

12

燈王於此諸佛法中
受持讀誦爲諸四衆
説此經典故得是
常眼清淨耳鼻
舌身意諸根
清淨

於四衆中
説法心無所畏得
大勢是常
不輕菩薩
注1 供養

注1　拔字 大経では摩訶薩あり

13

如是若干諸佛
恭敬尊重讃歎
種諸善根於[注1]復値
千萬億佛

亦於諸佛法中
説是經典功徳成就
當得作佛得大勢
於意云何爾時

注1　拔字 大経では後あり

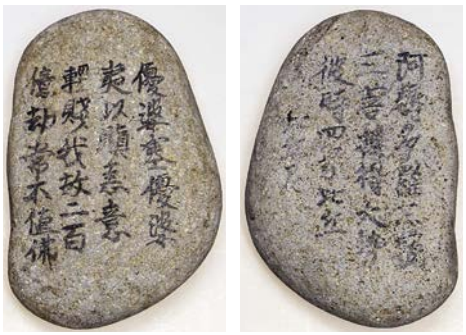
14

常不輕菩薩豈
異人乎則我身
是若我於宿世
不受持讀誦此
經爲佗人説者
不能疾得

阿耨多羅
三藐三菩提我
於先佛所受持
讀誦此經爲人
説故疾得

15

第 305 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（４）



阿耨多羅三藐
三菩提得大勢
彼時四衆比丘
比丘尼
優婆塞優婆
夷以瞋恚意
輕賤我故二百
億劫常不値佛

16

不聞法不見僧千劫
於阿鼻地獄受
大苦惱
畢[注1]是罪已復
遇常不輕菩薩

注1　異字形

17

教化阿耨多
羅三藐三菩
提得大勢
於汝意云何

18

爾時四衆常輕
是菩薩者豈異
人乎今此會中
跋陀婆羅等
五百菩薩師子月
等五百比丘尼思佛
等

19

五百優婆
塞皆於阿
耨多羅三
藐三菩提
不退轉者
是得大勢
當知是法華
經大饒益

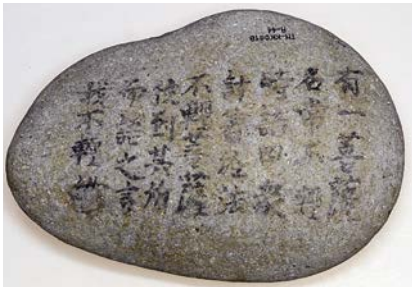
20

第 306 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（5）

諸菩薩摩訶薩能令
至於阿耨多羅三藐
三菩提是故諸菩薩
摩訶薩於如來滅後
常應受持讀誦解
説書寫是經

爾時世尊欲重宣
此義而説偈言
過去有佛

21



22

過去有佛
號威音王
神智無量
將導一切
天人龍神
所共供養
是佛滅後
法欲盡時

有一菩薩
名常不輕
時諸四衆
計著於法
不輕菩薩
往到其所
而語之言
我不輕汝

注1　重複

23

汝等行道
皆當作佛
諸人聞已
輕毀罵詈
不輕菩薩
能忍受之
其罪畢已
臨命終時

得聞此經
六根清淨
神通力故
增益壽命

注1　異字形

復爲諸人
廣説是經
諸著法衆
皆蒙菩薩

24

教化成就
令住佛道
不輕命終
值無數佛

第 307 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（６）

25

説是經故
得無量福
漸具功德
疾成佛道

26

彼時不輕
則我身是
時四部衆
著法之者

27

聞不輕言
汝當作佛

28

以是因緣
值無數佛

29

注1　誤字　大経では此

是[注1]會菩薩
五百之衆

30

今於我前
聽法者是
我於前世
勸是諸人

并及四部
清信士女

31

聽受斯經
第一之法
開示教人
令住涅槃

世世受持
如是經典
億億萬劫
至不可議

第308図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（7）

諸佛世尊
時説是經
是故行者
於佛滅後
聞如是經
勿生疑惑
應當一心
廣説此經
世世値佛

32

疾成
佛道

33

第 309 図　巻第七　常不輕菩薩品第二十（８）

妙法蓮華經如來神力品第二十一
爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩從地涌出
者皆於佛前一心合掌瞻仰尊顏而白佛言
世尊我等於佛滅後世尊分身所在國土滅
度之處當廣説此經所以者何我等亦自欲
得是真淨大法受持讀誦解説書寫而供養
之爾時世尊[注1]文殊師利等無量百千萬億
舊住娑婆世界菩薩摩訶薩及諸比丘比丘
尼優婆塞優婆夷天龍夜叉乾闥婆阿脩羅
迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等一切衆
前

注1　抜字　大経では於あり

1

現大神力出廣長舌上至
梵世一切毛孔放於無量
無數色光皆悉徧照十
方世界衆寶樹下
師子座上
諸佛亦復如是
出廣長舌放無
量光釋迦牟尼佛
及寶樹下諸佛
現神

2

力時滿百千
歳然後還攝
舌相一時聲
欬俱
共彈指
是二音
聲

3

徧至十方
諸佛世界
地皆六種
震動
其中衆生
天龍夜叉
乾闥婆

4

第 310 図　巻第七　如來神力品第二十一（1）

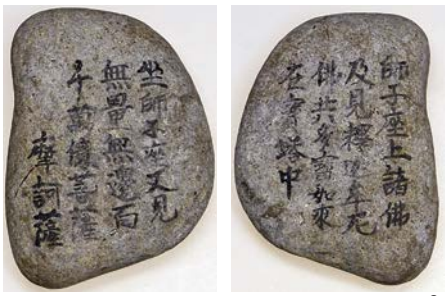
阿脩羅迦樓羅
緊那羅摩睺羅
伽人非人等

以佛神力故皆見
此娑婆世界無量
無邊百千萬億
衆寶樹下

5

師子座上諸佛
及見釋迦牟尼
佛共多寶如來
在寶塔中

坐師子座又見
無量無邊百
千萬億菩薩
摩訶薩



6

及諸四衆恭敬圍繞
釋迦牟尼佛既見是已
皆大歡喜得未曾有
卽時諸天於虛空中
高聲唱言過此無量
無邊

百千萬億阿僧祇世界
有國名娑婆是中
有佛名釋迦牟尼今
爲諸菩薩摩訶薩
說大乘經名妙法
蓮華教菩薩法

7

佛所護念汝等
當深心隨喜
亦[注1]禮拜
供養

釋迦牟尼佛

注1　抜字　大経では當あり

8

第 311 図　巻第七　如來神力品第二十一（２）

彼諸衆生聞虚
空中聲已合掌
向娑婆世界作
如是言南無釋
迦牟尼佛南無
釋迦牟尼佛以
種種華香瓔珞
幡蓋及諸嚴身
之具珍寶妙
物皆共遙散
娑婆世界所散
諸物從十方來

9

譬如雲集變成寶帳
徧覆比[注1]間諸佛之上
于時十方世界通
達無礙如一佛
土

爾時佛告上行
等菩薩大衆諸
佛神力如是無量
無邊不可思議若
我以是神力於無量

注1　誤字　大経では此

10

無邊百千萬億何[注1]
僧祇劫爲囑累故
説此經功德猶不能
盡以要言之如來一切
所有之法如來一切

自在神力如來一切
秘要之藏如來一切
甚深之事皆於此經
宣示顯説是故

注1　誤字　大経では阿

11

汝等於如來
滅後應當[注1]
一心受持
讀誦解

説書寫
如説修行所
在國土若有
受持讀誦

注1　加筆（春日版と同じ）

12

第312図　巻第七　如來神力品第二十一（3）

解説書寫
如説修行
若經卷所
住之處若於
園中若於林
中若於樹下

13

若於僧坊若
白衣舍若在
殿堂若山谷曠
野是中皆應起
塔供養所以
者何當知
是處即是道
場諸佛於此
得阿耨多羅
三藐三菩提

14

諸佛於此轉于法輪
諸佛於此而般涅槃
爾時世尊欲重宣此
義而說偈言
諸佛救世者
住於大神通

15

爲悅
衆生故
現無
量神
力

16

舌相至梵天
身放無數光
爲求佛道者
現此希有事

17

第 313 図　巻第七　如來神力品第二十一（４）

18

諸佛聲[注1]欬聲
及彈指之聲
周聞十方國
地皆六種動

注1　誤字　大経では聲

19

以佛滅度後
能持是經故
諸佛皆歡喜
現無量神力

20

囑累是經故
讃美[注1]受持者
於無量劫中
猶故不能盡
是人之功德
無邊無有窮
如十方虚空
不可得邊際

注1　異体字

21

能持是經者
則爲已見我
亦見多寶佛
及諸分身者
又見我今日
教化諸菩薩
能持是經者
令我及分身

22

滅度多寶佛
一切皆歡喜
十方現在佛
并過去未來

23

亦見亦供養
亦令得歡喜
諸佛坐道場
所得祕要法

第 314 図　巻第七　如來神力品第二十一（5）

能持是經者
不久亦當得
能持是經者
於諸法之義

24

名字及言辭
樂說無窮盡
如風於空中
一切無障礙[注1]

於如來滅後
知佛所說經

注1　異字形

25

因緣及次第
隨義如實說
如日月光明
能除諸幽冥

26

斯人行世間
能滅衆生闇
教無量菩薩
畢竟住一乘[注1]

注1　異字形

27

是故有智者
聞此功德利

28

於我滅度後
應受持斯經
是人於佛道
南無藥師如來[注1]
南無阿弥陀佛[注2]
決定無有疑
南□釋迦牟尼佛[注3]
南無多寶佛[注4]

注1　加筆（大経なし）
注2　加筆（大経なし）
注3　加筆（大経なし）
注4　加筆（大経なし）

29

第 315 図　巻第七　如來神力品第二十一（６）

妙法蓮華經囑累品
第二十二
爾時釋迦至尼佛
從法座起現大神
力
以右手摩無量
菩薩摩訶薩頂
而作是言我於
無量百千萬億
阿僧祇劫

1

修習是難得阿耨多
羅三百三菩提法今以
付囑汝等汝等
應當一心流布
此法廣令增益
如是三摩諸菩薩
摩訶薩頂而作
是言我於無量

注1　誤字　大経では藐

2

百千萬億阿僧
祇劫修習是難
得阿耨多羅三
藐三菩提
法今以付
囑汝等汝
等當受持
讀誦廣宣此
法令一切衆生
普得聞知所以者何

3

如來有大慈悲無諸
慳恡亦無所畏能與
衆生佛之智慧如來
智慧自然智慧
如來是一切衆生
之大施主汝等亦
應隨學如來之法
勿生慳恡於未

注1　誤字　大経では恪（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では恪（春日版と同じ）

4

來世若有善男子
善女人信如來智
慧者當爲演
説此
法華經使得聞
知爲令其人得
佛慧故若
右衆生

注1　誤字　大経では有

5

第 316 図　巻第七　囑累品第二十二（1）

不信受者當於
如來餘深法中
示教利
喜
汝等若
能如是則爲
已報諸佛之恩時
諸菩薩摩訶薩

6

聞佛作是説
已皆大歡喜
徧滿其身
益加恭敬
曲躬低頭
合掌向佛
俱發聲言
如世尊勅當具
奉行唯

7

然世尊願不有慮諸
菩薩摩訶薩衆
如是三反俱發聲言如
世尊勅當具奉
行唯然世尊願
不有慮爾時
釋迦牟尼佛
令十方來諸
分身佛各還
本土而作是言

8

諸佛各隨所安
多寶佛塔還可
如故説是語時十
方無量分身諸
佛坐寶樹下師
子座上者及
多寶佛并上
行等無邊阿
僧祇菩薩大衆
舍利弗等
聲聞

9

四衆及一切世間
天人阿修羅等
聞佛所説
皆大歡喜

10

第 317 図　巻第七　囑累品第二十二（２）

妙法蓮華經
藥王菩薩
本事品第二十三
爾時宿王華
菩薩白佛言
世尊

1

藥王菩薩
云何遊於
娑婆世界
世尊是
藥王菩
薩有若干

2

百千萬億那
由佗難行苦行
善哉世尊
願少
解說諸
天龍神夜叉
乾闥婆阿脩羅
迦樓羅

3

緊那羅摩
睺羅迦[注1]人非
人等又陀
國土
諸來
菩薩及此
聲聞衆聞皆
歡喜爾時

注1　誤字　大経では伽

4

佛告宿王華
菩薩乃往過去無
量恒河沙劫有佛號
日月淨明德如來應供
正徧知明行足善逝
世間解無上士調
御丈夫天人師
佛世尊其佛有
八十億大菩薩
摩訶薩

5

第 318 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（１）

七十二恒河沙
大聲聞衆佛壽
四萬二千劫菩薩
壽命亦等彼國
無有女人地獄
餓鬼畜生阿
脩羅等及以諸
難地平如掌瑠
璃所成寶樹
莊嚴

6

寶帳覆上
垂寶華旛
寶瓶香爐
周徧
國界七寶
爲臺一樹
一臺其樹

注1　異字形

7

去臺盡一
箭道此諸樹
皆有菩薩
聲聞
而坐其下
諸寶臺上
各有百億
諸天作天

注1　抜字　大経では寶あり

8

妓樂歌歎於佛
以爲供養爾時
彼佛爲一切
衆生悉見菩薩
及衆菩薩諸聲
聞衆説法華經

9

是一切衆生
喜見菩薩
樂習苦行
於日月淨
明德佛法中
精進經行

10

一心求佛
滿萬二千
歳
已得現
一切色身三
昧得此

11

第 319 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（２）

三昧已心大
歡喜卽作念
言我得現一
切色身
三昧皆是得
聞法華經力我
今當供養日
月淨明德佛

12

及法華經
卽時入是
三昧於虛
空中雨曼[注1]
陀羅華摩
訶曼[注2]陀羅
華

注1　異字形
注2　異字形

13

細抹堅黑栴檀滿虛
空中如雲而下又雨海
此岸栴檀之香
此香
六銖價直娑婆
世界以供養佛作是
供養已從三昧起而

14

自念言我雖
以神力供養於
[注1]於佛不如以身供
養卽服諸香

注1　重複

15

栴檀薰陸兜樓
婆畢[注1]力迦沈水
膠香
又飲瞻蔔
諸華香油
滿千二百歲

注1　異字形

16

已香油塗身
於日月淨明
德佛前以
天寶衣
而自纏
身已[注1]灌諸
香油以神
通力願而

注1　加筆（春日版と同じ）

17

第 320 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（3）

而[注1]自然身
光明徧照
八十億恒河
沙世界

其中
諸佛

注1　重複

18

天繒旛蓋
及海此岸
栴檀之香

如是[注1]種種
諸物供養
所不能及

注1　抜字大経では等あり

19

假使國
城妻子布
施亦所不
及善男子

是名大[注1]
第一之施
於諸施中

注1　加筆

20

最尊最上
以法供養
諸如來故

作是語已
而各默然其
身火燃千
二百歲

21

過是已後
其身乃盡一切
衆生憙見菩

薩作如是法
供養已命終
之後復

22

生日月淨明
德佛國中於
淨德王家結跏
趺坐忽然
化生

卽爲
其父而説偈言
大王今當知我
經行彼處

23

第 321 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（４）

卽時得一切
現諸身三昧
勤行大
精進
捨所愛之身[注1]
說是偈已而
白我[注2]言

注1　抜字　大経では供養於世尊
爲求無上慧あり（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では父

24

日月淨明德佛
今故現在我
先供養佛
已得
解一切衆
生語言陀羅
尼復聞是法
華經

25

八萬[注1]四千億那
由佗甄迦羅頻
婆羅阿閦婆
等
偈大王我
今當還供養
此佛白已卽坐
七寶之臺上

注1　誤字　大経では萬四千→
百千萬

26

昇虛空
高七多羅
樹往到
佛所頭面
禮足合十
指爪以偈

27

容顏甚奇[注2]妙光明
照十方我適曾供
養今復還親近[注3]
爾時一切衆生
喜見菩薩善[注4]
說是已[注5]
偈已而白佛
言世尊
世尊

注1　抜字　大経では讃佛あり（第376図2の可能性あり）
注2　大経では奇
注3　誤字　大経では覲（春日版と同じ）
注4　加筆
注5　加筆

28

29

第322図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（5）

猶故在世爾時
日月淨明德佛
告一切衆生喜見
菩薩善男子

30

我涅槃時到滅
盡時至汝可安施
床座我於今夜
當般涅槃

又勅一切衆生
喜見菩薩
善男子

31

我以佛法囑
累於汝及諸
菩薩

大弟子并
阿耨多羅
三藐三
菩提

32

法亦以三千
大千七寶世
界諸

寶樹寶臺
及給侍諸天

悉付於汝我
滅度後所有

33

舍利亦不囑[注1]
汝當令流布
廣設供養

應起
若干千塔如是
日月淨明德佛
勅一切衆生

注1　誤字　大経では付

34

第 323 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（６）

喜見菩薩已[注1]
見佛滅度悲
感懊惱戀慕
於佛卽以海此
岸
栴檀爲積供
養佛身而以燒
之火滅已復[注2]收
取舍利作八
萬四千寶瓶

注1　抜字　大経では於夜後分入於涅槃爾時一切衆生悉見菩薩あり
注2　誤字　大経では後

35

以起八萬四千塔
高三世界表刹
莊嚴垂諸旛
蓋懸[注1]
衆寶
鈴爾時[二]切衆生
喜見菩薩復
自念言我雖

注1　異字形

36

作是供養
心猶未足我
今當更
供養
舍利便語
諸菩薩大
弟子及天龍
夜叉等
一切大衆

37

汝等
當一心念
我今供養日
月淨明德佛
舍利作是語已
卽於八萬四千
塔

38

前然百福
莊嚴臂七萬
二千歲而
以供養令無
數求聲聞衆
無量

39

第 324 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（７）

阿僧祇人
發阿耨多
羅三藐三菩
提心皆
使得住現
一切色身三深[注1]
爾時諸菩薩

注1　誤字　大経では昧

40

天人阿脩羅等
見其無臂
憂惱
悲哀而作
是言此一切衆
生喜見菩薩

41

是我
等師教化
我者而今
焼臂身
不具足于
時一切衆生

42

喜見菩薩
於大衆中
立此誓言我
捨兩臂
必當得佛
金色之身若
實不虚令
我兩臂

43

還復如故
作是誓
已自然
還復由
斯菩薩
福德智慧

44

淳厚所致當
爾之時三千大
千世界六種
震動天雨
寶華一切[注1]天
人[注2]得未曽有
佛告宿王華
菩薩

注1　抜字　大経では人あり（春日版と同じ）
注2　加筆（春日版と同じ）

45

第 325 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（８）

於汝意云何
一切衆生喜見
菩薩豈異人
乎今藥王
菩薩是也

其所捨身布
施如是無量百[注1]
萬億那由佗數
宿王華若有
發心欲得

注1　拔字 大経では千あり

46

阿耨多羅三
藐三菩提
者能燃手
指乃至足

一指供養
佛塔勝以國
城妻子及三
千大千國土

47

山林河池
諸珍寶
物而供養
者若復有

人以七寶
滿三千大千
世界供養於
佛及大菩薩

48

辟支佛阿羅
漢是人所得功
德不如受持此
法華經乃至一
四句偈其福最
多宿王華辟[注1]如

注1　誤字 大経では譬

49

一切川
流江河諸
水之中海爲
第一

此法華經亦
復如是於諸
如來所説
經中

50

最爲深大又如
土山黒山小銕
圍山

大銕圍山
及十寶山
之中[注1]

注1　加筆

51

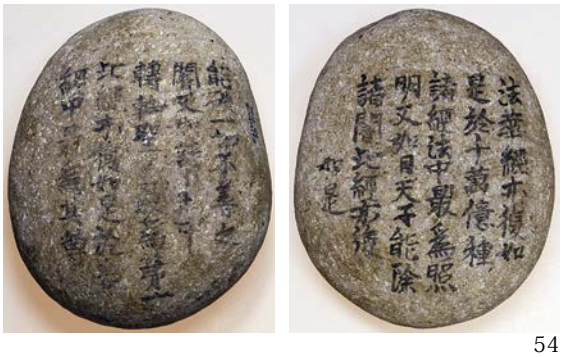
衆山之
中須彌山

52

第 326 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（9）

53

爲第一此法華經
亦復如是於諸經
中
最爲其上又如
衆星之中月天
子最爲第一此



54

法華經亦復如
是於千萬億種
諸經法中最爲照
明又如日天子能除
諸闇此經亦復
如是
能破一切不善之
闇又如諸小王中
轉輪聖王最爲第一
此經亦復如是於衆
經中最爲其尊

55

又如帝釋於三十三天
中王此經亦復如是
諸經中王又如大梵
天王一切衆生
之父此經亦復
如是一切賢聖學
無學及發菩薩心

56

者之父又如一切
凡夫人中須陀洹
斯陀含阿那含
阿羅漢辟支佛爲
第一此經亦復如是
一切如來□[注1]

注1　加筆

第 327 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（10）

所説若菩薩所説
若聲聞所説諸経
法中最爲第一有
能[注1]受持是経典者

57

注1　異字形

亦復如是於一切
衆生中亦爲第一
一切聲聞辟支
佛

58

中菩薩爲第一
此經亦復如是[注1]一切諸
經法中最爲第一
如佛爲諸法王此
經

亦復如是諸経
中王宿王華此
経能救一切衆生
者此経能令一切

59

注1　抜字　大経では於あり

衆生離諸苦
惱此經能大饒
益一切衆生

充滿其願如清
涼池能滿一切
諸渴乏者

60

如寒者得火如
裸者得衣如商
人得主如子得
母如渡得舩[注1]如

病得醫如暗得
燈如貧得寶如
民得王如賈客
得海如炬除暗

61

注1　大経では船

能解一切生
死之縛若人
得聞

此法華經
若自書若
教[注1]人書所
得功德

62

注1　誤字　大経では使（春日版と同じ）

第328図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（11）

以佛智慧籌
量多少不得
其邊若書
是經卷華香
瓔珞燒香抹
香

63

燈婆利
師迦油燈
那婆

塗香旛蓋
衣服種種
之燈蘇燈
油燈
諸香油燈
瞻蔔油燈
須曼那油燈
波羅羅油

64

65

摩利油燈供
養所得功德
亦復無量宿
王華若有
人
聞是藥王
菩薩本事
品者亦得無
量無邊

66

功德若有
女人聞
是

67

藥王菩薩本事品
能受持者盡是女身
後不復受若如來
滅後後五百歲中
若有女人聞是經典
如説修行於此命
終卽往安樂世界
阿彌陀佛大菩薩
衆圍繞住處生蓮
華中寶座之上
不復爲貪欲
所惱

68

第 329 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（12）

亦復不爲
瞋恚愚癡所惱
亦復不爲憍慢
嫉妒諸垢所惱得
菩薩神通無生法
忍得是忍已眼根
清淨以是清淨眼
根見七百萬二千
億那由佗恒河
沙等諸佛
如來

69

是時諸佛遙共讃言
善哉善哉善男子汝
能於釋迦牟尼佛
法中受持讀誦
思惟是經
爲陀人説
所得福德無量
無邊火不能燒水不能
漂汝之功德千佛
共説

70

不能令盡汝今
已能破諸魔賊
壞生死軍諸餘
怨(注1)敵皆
悉摧滅
善男子百千諸
佛以神通力共
守護汝

注1　異字形

71

於一切世間天
人之中無如
汝者唯除如
來其諸聲
聞
辟支佛
乃至
菩薩

72

智慧禪
定無有與汝等者
宿王華此菩薩
成就如是功德
智慧之力
若
有人聞是
藥王菩薩
本事品能隨喜
讃善者是人現世
口中常出青蓮華
香身毛孔中常

73

第 330 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（13）

出牛頭栴檀
之香所得功
德如上所説
是故
宿王華以
此藥王菩
薩本事品
囑囑[注1]累

注1　重複

74

於汝我滅度
後後五百歲
中廣宣流布
於閻浮提
無令斷絶惡
魔魔民諸天
龍夜叉鳩槃
茶等

75

華汝若見有受
持是經者應以

76

是念言此人不
久必當取草坐
於道場破諸
魔軍當吹法
螺擊大法鼓

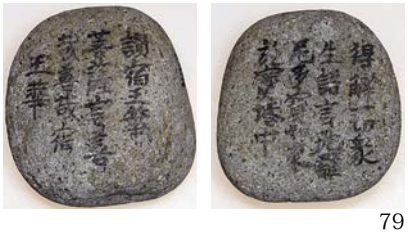
77

度脱一切衆生
老病死海是故
求佛道者見有
受持是經典
人應當如是生
恭敬心説[注1]藥王
菩薩本事品時
八萬四千菩薩

注1　抜字　大経では是あり

78

得解一切衆
生語言陀羅
尼多寶如來
於寶塔中
讃宿王華
菩薩言善
哉善哉宿
王華



79

第 331 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（14）

利益無量一切衆生

81

汝成就不可思
議功德乃
能問釋迦牟尼
佛如此之事

80

第 332 図　巻第七　藥王菩薩本事品第二十三（15）

妙法蓮華經[注1]
妙音菩薩品
第二十四
爾時
釋迦牟尼佛

注1　抜字　大経では巻第七あり

1

放大人相肉
髻光明及

2

放眉間白
毫相光徧照
東方百八萬億
那由陀
恒[注1]河沙等
諸佛世界
過是數已

注1　大経では恆

3

有世界
名淨光
莊嚴其
國有佛
號淨華宿
王智如來
應供正徧
知明行
足

4

善逝世間解
無上士調御
丈夫天人師
佛世尊爲無量
無邊菩薩大衆
恭敬圍繞

5

爲説法[注1]
釋迦牟尼佛白毫
光明徧照其國
爾時一切淨光
莊嚴國中有一
菩薩

注1　抜字　大経では而あり

6

名曰妙音久已
植衆德本
供養親近
無量
百千萬
億諸佛
而悉
成就

7

第 333 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（１）

甚深智慧
得妙幢相三昧
法華三昧
淨德三昧
宿王戲三昧

8

無緣三昧
智印三昧
解一切衆
生
語言三昧
集一切功
德三昧

9

清淨三昧神通遊戲
三昧慧炬三昧莊嚴
王三昧
淨光明三昧淨藏
三昧不共三昧

10

日旋三昧得
如是等百千
萬億恒河沙
等諸大三昧
釋迦牟尼佛
光照其身卽
白淨華宿王
智佛言世尊

11

我等[注1]往詣
娑婆世界禮拜
親近供養
釋迦牟尼佛
及見文殊師
利法王子
菩薩
藥王菩薩

注1　誤字　大経では當

12

勇施菩薩宿
王華菩薩
上行意菩薩
莊嚴王菩薩
藥上菩薩爾時
淨華宿王智佛

13

第 334 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（2）

告妙音菩薩
汝莫輕彼國生
下劣想善男
子
彼娑
婆世界
高下不[注1]平
土石

14

諸山穢惡充滿
佛身卑小諸菩
薩衆其形亦
小而汝身
四萬二千由旬
我身六百
八十萬由旬

15

汝身第一
端正百千
萬福光明
殊妙是
故汝往莫
輕彼國若

16

佛菩薩及
國土生下劣
想妙音菩薩

17

白其佛言
世尊我今
詣娑婆世界
皆是如來之力

18

如來神通
遊戲如來
功德
智慧

19

莊嚴於是
妙音菩薩
不起于
座身不
動搖而入
三昧

20

以三昧力於耆
闍崛山去法
座不遠化
[注1]八萬四千
衆寶蓮華
閻浮檀金爲

21

注1　書き加え

注1　抜字大経では作あり

第 335 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（３）

爾時文殊師利
法王子見是蓮華
而白佛言世尊是
何因緣先現此瑞

有若干千萬蓮華
閻浮檀金爲莖白
銀爲葉金剛爲
鬚甄叔迦寶
以爲其臺

22

欲從淨華宿王
智佛國與

八萬四千菩薩
圍繞而來至此

23

娑婆世界

供養親近
禮拜於我

24

亦欲供養聽
法華經文殊
師利白佛言

世尊是菩
薩種何善本
修何功德

25

而能有
是大神通
力行何三
昧願爲我

等説
注1
三昧
名字

注1　抜字　大経では是あり

26

我等亦欲勤
修行
之行此

27

三昧乃能
見是菩薩色相
大小

威儀
進止唯願
世尊以神

28

通力彼菩薩
來令我得見
爾時

釋迦牟尼佛
告文殊師利

29

第 336 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（４）

此久滅度多寶如來
當爲汝等而現其相
時多寶佛告彼菩
薩善男子來文殊師利
法王子欲見汝身于時
妙音菩薩於彼
國沒與八萬四
千菩薩俱共發
來所經諸國六
種震動皆悉雨
於七寶蓮華

30

百千天樂不鼓
自鳴是菩薩
目如廣大青
蓮華葉正使和
合百千萬月
其面貌端正
復過於此身
眞金色無量
百千功德莊
嚴威德

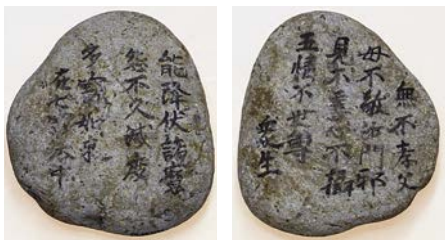
31

熾盛光明照曜諸相
具足如那羅延堅固
之身入七寶臺上昇
虛空去地七多羅樹
諸菩薩衆恭敬圍
繞
而來詣此娑婆世界
耆闍崛山到已下七
寶臺以價直百千
瓔珞持至釋迦牟尼
佛所頭面禮足
奉上瓔珞

32

而白佛言
世尊淨華宿王
智佛問訊世尊
少病少惱起居輕
利安樂行不
四大調和不世事可忍
不衆生易度不無多
貪欲瞋恚愚癡
嫉妬慳慢不

33



無不孝父
母不敬沙門邪
見不善心不攝
五情不世尊
衆生
能降伏諸魔
怨不久滅度
多寶如來
在七寶塔中

34

第 337 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（５）

35

來聽法不又問
訊多寶如來
安穩[注1]少惱堪忍
久住不世尊我今
欲見多寶佛身唯
願世尊示我令見
爾時釋迦牟尼
佛

注1　誤字　大経では隠（春日版と同じ）

36

語多寶佛是妙
音[注1]薩欲得相見
時多寶佛告
妙音言善哉
善哉汝能
爲
供養釋
迦牟尼佛及
聽法華經并見
文殊[注2]利等故來
至此爾時華德
菩薩白佛言世尊

注1　抜字　大経では菩あり
注2　抜字　大経では師あり

37

是妙音菩薩種
何善根修何功
德有是神力
佛告華德
菩薩過去右[注1]
佛名雲雷音王

注1　誤字　大経では有

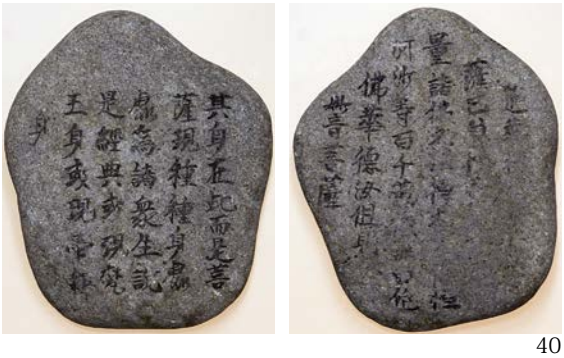
38

多陀阿伽度阿羅訶
三藐三佛陀國名現
一切世間劫名喜見
妙音菩薩於萬
二千歲以十萬
種妓樂供養雲雷
音王佛并奉上八萬
四千七寶鉢

第 338 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（６）

以是因緣果報今生
淨華宿王智佛國
有是神力華德於
汝意云何爾時
雲雷音王佛所
妙音菩薩妓樂供養
奉上寶器者豈異人
乎今此妙音菩薩摩訶
薩

39



是華德是妙音菩
薩已曾供養親近無
量諸佛久植德本又值恒
河沙等百千萬億那由佗
佛華德汝但見
妙音菩薩
其身在此而是菩
薩現種種身處
處爲諸衆生說
是經典或現梵
王身或現帝釋
身

40

或現自在天身或現大自
在天身或現天大將軍身或
現毗沙門天王身或現轉輪
聖王身或現諸小王身或
現長者身或現居士身
或現宰官身

或現婆羅門身或現比丘
比丘尼優婆塞優婆夷身
或現長者居士婦女身或現
宰官婦女身或現婆羅
門婦女身或現

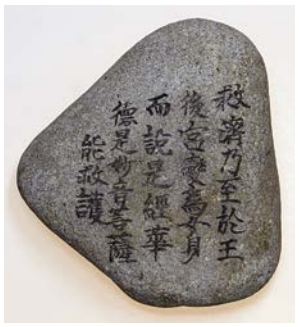
41

第 339 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（７）

42

童男童女身
或現天龍夜
叉乾闥婆阿脩
羅迦樓羅緊[注1]那
羅摩睺羅伽人
非人等身百[注2]説
是經諸有
地獄餓
鬼畜生及衆
難處皆能

注1　異字形
注2　誤字　大経では而



43

救濟乃至於王
後宮變爲女身
而説是經華
德是妙音菩薩
能救護
娑
婆世界
諸衆生者
是妙音菩薩如是
種種變化現身[注1]此娑
婆國土爲諸衆生
説是經典於神通
變化智慧無所
損減是菩薩以若干
智慧明照娑婆世界
令一切衆生各得
所知於十方恒河沙
世界中亦復如是

注1　抜字　大経では在あり

44

第 340 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（8）

45

若應以聲聞形得度者現聲聞形而爲説法應以辟支佛形得度者現辟支佛形

注[1]
爲□[注2]説法應以菩薩形得度者現菩薩形而以[注3]説法應以佛形[注4]而爲説法

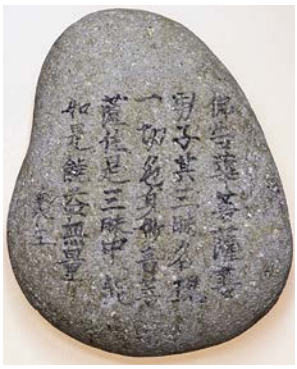
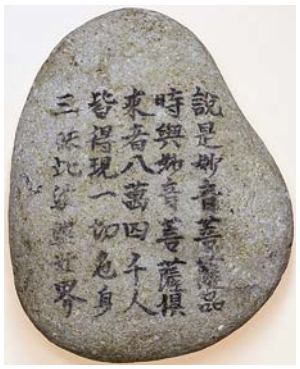
注1　抜字　大経では而あり
注2　加筆（不明文字）
注3　誤字　大経では爲
注4　抜字　大経では得度者即現佛形あり

46

如是種種隨所應度者[注1]而爲現□[注2]形乃至應以滅度而得度者示現滅度華德妙音菩薩摩訶薩成就大神通智慧之力

其事如是爾時華德菩薩白佛言世尊是妙音菩薩深種善根世尊是菩薩住何三昧而能如是在所變現度脱衆生

注1　加筆（春日版と同じ）
注2　加筆（不明文字）

47

佛告華德菩薩善男子其三昧名現一切色身妙音菩薩住是三昧中能如是饒益無量衆生

説是妙音菩薩品時與妙音菩薩俱來者八萬四千人皆得現一切色身三昧此娑婆世界

第 341 図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（９）

48

無量菩薩亦得是
三昧及陀羅尼爾
時妙音菩薩摩訶
薩供養釋迦
牟尼佛
塔[注1]
及多寶佛塔
已還歸本土
所經諸國[注2]與八萬四
千菩薩圍繞至
淨華宿王智
佛所

注1　加筆
注2　抜字　大経では六種震動雨寶蓮華作百千萬億種種伎樂既到本國あり

49

白佛言世尊
我到娑婆世界
饒益衆生見釋
迦牟尼佛及見
多寶佛
禮[注1]拜供養又見
文殊師利法王
子菩薩及見樂[注2]
王菩薩得勤精
進力菩薩勇
施菩薩等

注1　抜字　大経では塔あり
注2　誤字　大経では藥

50

亦令是八萬四千
菩薩[得現]一切色
[身]三昧説是妙
音菩薩
來往品時四萬二
千[天子]得無生
法忍華德菩薩
得[法華三]昧
[妙法蓮華經卷]第七[注1]

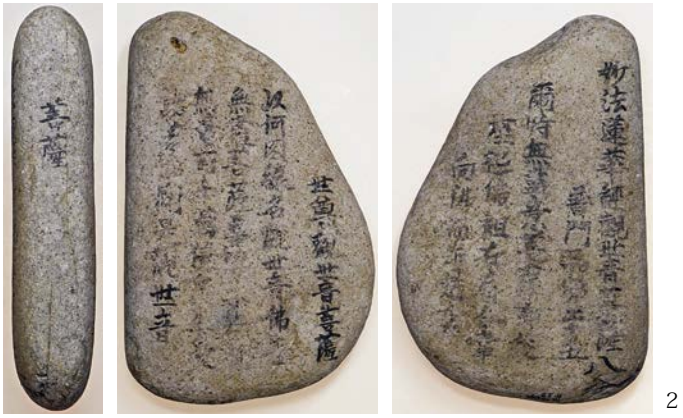
注1　一行　加筆（春日版と同じ）

第342図　巻第七　妙音菩薩品第二十四（10）

1

妙法蓮華經注1
觀世音菩
薩普門品

注1　両面重複



2

妙法蓮華經觀世音菩薩
普門品第二十五
爾時無盡意菩薩卽從
座起偏袒右肩合掌
向佛而作是言
世尊觀世音菩薩
以何因緣名觀世音佛告
無盡意菩薩善男子若有
無量百千萬億衆生受
諸苦惱聞是觀世音
菩薩

3

一心稱名觀世音菩
薩卽時觀其音聲
皆得解脫若有持
是觀世音菩薩
名
者設入大火注1不
能燒由是菩薩威
神力故若爲大水
所漂稱其名號
卽得淺處若有

注1　抜字　大経では火あり

第 343 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（1）

4

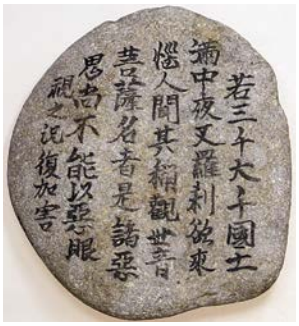
百千萬億衆生
爲求金銀瑠璃
硨磲碼碯珊瑚虎
珀眞珠等寶
入於大海
假使黒風吹其
船舫飄墮羅刹
鬼國其中若有
乃至一人稱觀
世音菩薩名者
是諸人等

注1　誤字　大経では車
注2　加筆（春日版あり）
注3　誤字　大経では馬瑙

5

皆得解脱羅
刹之難以是因緣
名觀世音
若復有人臨
當被害稱觀世
音菩薩名者彼
所執力杖尋段
段壞而得解
脱

注1　誤字　大経では刀
注2　異字形
注3　異字形



6

若三千大千國土
滿中夜叉羅刹欲來
惱人聞其稱觀世音
菩薩名者是諸惡
鬼尚不能以惡眼
視之況復加害

設復有人若
有罪若無罪杻械
枷鎖檢繫其身
稱觀世音菩薩名
者皆悉斷壞即
得解脱

注1　異字形

第 344 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（２）

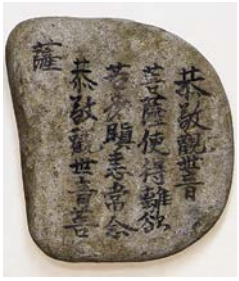
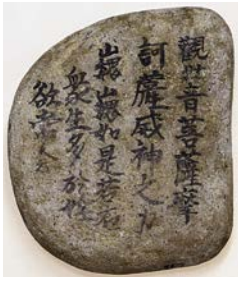
7

若三千大千
國土滿中怨賊
有一商主將諸商
人齎持重寶經
過險路[注1]其中一人
作是唱言[注2]善男
子勿得恐怖汝
等應當一心稱
觀世音菩薩名
號是菩薩能以
無畏施於衆生

注1　誤字　大経では嶮（春日版と同じ）
注2　抜字　大経では諸あり

8

汝等若稱名者
於此怨賊當得解
脫衆商人聞俱發
聲言
南無觀世音菩薩
稱其名故卽得
解脫無盡意

9

觀世音菩薩摩
訶薩威神之力
巍巍如是若右[注1]
衆生多於婬
欲常念
恭敬觀世音
菩薩使[注2]得離欲
若多瞋恚常念
恭敬觀世音菩
薩

注1　誤字　大経では有
注2　誤字　大経では便

10

便得離瞋
若多愚癡常念
恭敬觀世音菩薩
便得離癡無盡
意觀世音菩薩
有如是等大
威神[力]多所饒
益是故衆生常
應[心念]若有女
人[設]欲求

第 345 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（３）

男禮拜供養
觀世音菩薩便生
福德智慧之男
設欲求女使[注1]
生
端正有
相之女宿植
德本衆人愛
敬無盡[注2]觀世音
菩薩有如是力

注1　誤字　大経では便
注2　抜字　大経では意あり

11

若有衆生恭敬
禮拜觀世音菩
薩福不唐捐是
故衆生皆應受持
觀世音菩薩
名號無盡意若
有人受持六十二
億恒河沙菩薩
名字復盡形供
養飲食衣服

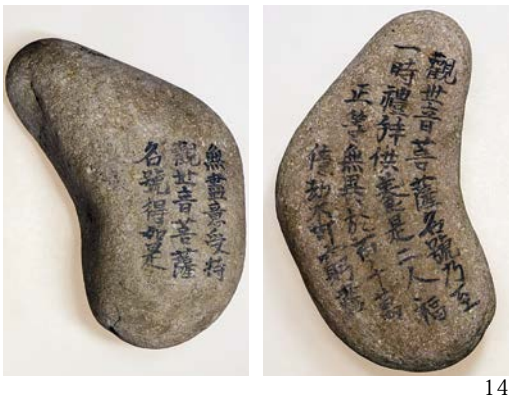
12

臥具醫藥於汝意
云何是善男子善
女人功德多
不
無盡[注1]言甚多
世尊佛言若復
有人受持

注1　抜字　大経では意あり

13

觀世音菩薩名號乃至
一時禮拜供養是二人福
正等無異於百千萬
億劫不可窮盡
無盡意受持
觀世音菩薩
名號得如是



14

無量無邊
福德之利無盡
意菩薩白佛
言世尊
觀世音菩薩
云何遊此娑婆
世界云何而爲

15

第 346 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（４）

衆生説法
方便之力其
事云何佛
告無盡意
菩薩
善男子若
有國土衆
生應以佛身
得度者

16

觀世音菩薩
即現佛身而
爲說法應以
辟支佛身得
度者即現
辟支佛身

17

而爲說法應以
聲聞身得度者
即現聲聞身
而爲說法
應以梵王身
得度者即現
梵王身

18

而爲說法應以
帝釋身得
度者
即現帝
釋身而爲說
法應以自在天身

19

得度者即
現自在天身
而爲說法
應以大自在
天身得度者
即現大自在天
身

20

第 347 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（５）

而爲説法應以
天大將軍身得
度者卽現天大
將軍身
而爲説法
應以毗沙門
身得度者
卽現毗沙門
身

21

而爲説法應以小王
身得度者卽現小王身
而爲説法應以長者
身得度者卽現
長者身
而爲説法應以
居士身得度者
卽現居士身而爲
説法應以宰官身
得度者卽現宰官身

22

而爲説法應以
婆羅門身得
度者卽現婆
羅門身
而爲説法應以
比丘比丘尼優婆
塞優婆夷身

23

得度者卽現
比丘比丘尼優
婆塞優婆夷
身

24

而爲説
法應以長者
居士宰官婆
羅門
婦女身得度
者卽現婦
女身而爲
説法

25

第 348 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（６）

26

應以童男
童女身得
度者卽現
童男童女
身
而爲説法
應以天龍夜
叉乾闥婆

27

阿脩羅迦樓
緊那羅摩[注1]
睺羅迦[注2]人非
人等身得
度者卽現[注3]
皆之而爲説
法應以執金剛
神[注4]得度者

注1　抜字　大経では羅あり
注2　誤字　大経では伽
注3　文字順逆　大経では皆現
注4　誤字　大経では身（春日版と同じ）

28

卽現執金剛神[注1]
而爲説法無盡
意[注2]觀世音
菩薩成就
如是功德

注1　誤字　大経では身（春日版と同じ）
注2　抜字　大経では是あり

29

以種種形
遊諸國土
度脱衆生
是故汝等
應當一心
供養
觀世音菩薩

30

是觀世音菩薩摩訶薩
於怖畏急難之中能
施無畏是故
此娑婆世界
皆號之爲施無畏
者無盡意菩薩白佛言
世尊我今當供養

31

觀世音菩薩
卽解頸衆寶
珠瓔珞價直
百千兩金
而以與之作是
言仁者

第 349 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（7）

受此法施珍寶瓔
珞時觀世音菩薩不
肯受之無盡意
復白

32

觀世音菩薩
言仁者愍我等
故受此瓔珞爾時
佛告觀世音菩薩

當愍此無盡
意菩薩及四
衆天龍夜叉
乾闥婆

33

阿脩羅迦樓
羅緊那羅
摩睺羅伽人
非人等

故受是瓔珞即
時觀世音菩薩
愍諸四衆及於
天龍人非人等

34

受其瓔珞分
作二分一分奉
釋迦牟尼佛

一分奉
多寶佛塔
無盡意

35

觀世音菩薩
有如是自在
神力

遊於娑婆
世界爾時無
盡意菩薩

36

以偈
問曰

世尊妙相具
我今重問彼
佛子何因緣

名爲觀世音
具足妙相
尊

37

第 350 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（８）

偈答無盡[注1]
汝聽觀音行
善應諸方所
弘誓深如海

注1　抜字　大経では意あり

38

歷劫不思儀[注1]
侍多千億佛
發大清淨願
我爲汝略説
聞名及見身
心念不空過
能滅諸有苦

注1　誤字　大経では議

39

假使興害意[注1]
推落大火坑
念彼觀音力
火坑變成池
或漂流巨海
龍魚諸鬼難

注1　異字形

41

40

念彼觀音力
波浪不能沒
或在須彌峯
爲人所推墮
念彼觀音力
如日虛空住

42

或被惡人逐
墮落金剛山
念彼觀音力
不能損[注1]一毛

注1　異字形

43

或値怨[注1]遶
各執刀加害
念彼觀音力
咸卽起慈心
或遭王難苦
臨刑欲壽終
念彼觀音力
刀尋段[注2]段壞

注1　抜字　大経では賊あり
注2　異字形

44

第 351 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（９）

45

或遇惡羅刹　毒龍諸鬼等　念彼觀音力　時悉不敢害　若惡獸圍遶[注1]　利牙爪可怖　念彼觀音力　疾走無邊方

或囚禁枷鎖　手足被杻械　念彼觀音力　釋然得解脫　呪詛諸毒藥　所欲害身者　念彼觀音力　還著於本人

注1　異字形

46

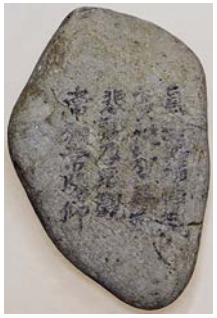
雲雷鼓掣電　降雹澍大雨　念彼觀音力　應時得消散

蚖蛇及蝮蠍　氣毒煙火燃　念彼觀音力　尋聲自迴去

47

具足神通力　廣修智方便　十方諸國土　無刹不現身

衆生被困厄　無量苦逼身　觀音妙智力　能救世間苦



48

眞觀清淨觀　廣大智慧觀　悲觀及慈觀　常願常瞻仰

種種諸惡趣　地獄鬼畜生　生老病死苦　以漸悉令滅

49

無垢清淨光　慧日破諸闇　能伏災[注1]風火　普明照世間

悲體戒雷震　慈意妙大雲　澍甘露法雨　滅除煩惱燄[注2]

注1　異体字　大経では災

注2　大経では焔（春日版と同じ）

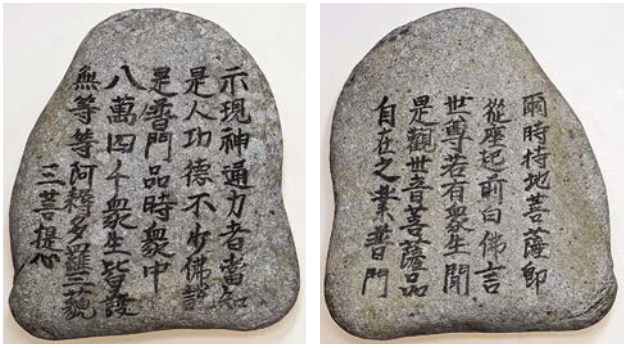
第352図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（10）

50

諍訟經官處
怖畏軍陣中
念彼觀音力
衆怨悉退散
妙音觀世音
梵音海潮音
勝彼世間音
是故須常念

51

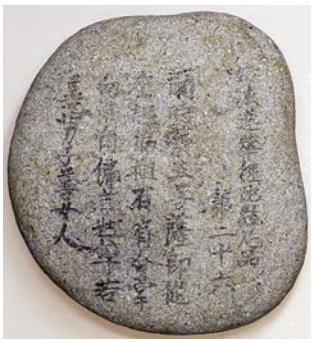
念念勿生疑
觀世音淨聖
於苦惱死厄
能爲作依怙
具一切功德
慈眼視衆生
福聚海無量
是故應頂禮



52

爾時持地菩薩卽
從座起前白佛言
世尊若有衆生聞
是觀世音菩薩品
自在之業普門
示現神通力者當知
是人功德不少佛說
是普門品時衆中
八萬四千衆生皆發
無等等阿耨多羅三藐
三菩提心

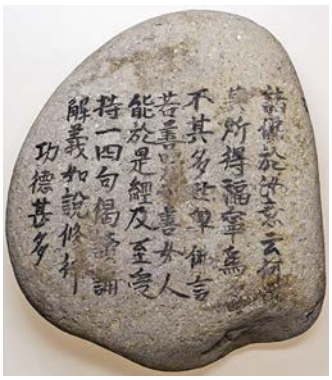
第 353 図　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五（11）



1

妙法蓮華經陀羅尼品
第二十六
爾時藥王菩薩卽從
座起偏袒有[注1]肩合掌
向佛[注2]白佛言世尊若
善男子善女人
有能受持法華經
者若讀誦通利若
書寫經卷得幾所
福佛告藥王若有善
男子善女人供養八
百萬億那由佗恒河
沙等

注1　誤字　大経では右
注2　抜字　大経では而あり



2

諸佛於汝意云何
其所得福寧爲多
不甚多世尊佛言
若善男子善女人
能於是經乃至受
持一四句偈讀誦
解義如說修行
功德甚多
爾[注1]持藥王菩薩
白佛言世尊我今
當與說法者陀羅尼呪
以守護之卽說呪曰
安爾[注2]曼爾摩禰摩摩
禰旨隷遮梨第[注3]賒咩

注1　誤字　大経では時
注2　抜字　ここから4番石経の裏面二行目までに（一）～（四十三）の数字が大経では入る
注3　加筆（春日版と同じ）

第 354 図　巻第八　陀羅尼品第二十六（1）

3

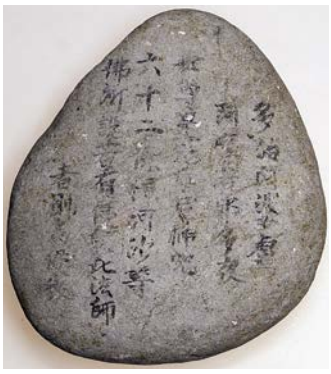
賒[注1]履多瑋羶帝目
帝目帝[注2]目多履娑
履阿瑋娑履桑履
娑履叉裔阿叉裔阿
耆膩羶帝賒[注3]履
陀羅尼阿盧伽
婆娑

簸蔗毗叉膩
禰毗剃阿便哆
邏禰履剃阿亶哆
波隸輸地歐[注4]究隸牟
究隸阿羅隸波羅
隸首迦差阿三磨
三履

注1　加筆
注2　加筆　帝目
注3　加筆（春日版あり）
注4　誤字　大経では溫

4

佛駄毗吉利袠[注1]
帝達磨波利差
帝僧伽涅瞿沙禰
婆舍婆舍輸地
曼哆邏曼哆邏叉夜多
郵樓哆郵樓哆憍舍略
惡叉邏惡叉冶



多冶阿婆盧
阿摩若那多夜
世尊是陀羅尼神咒
六十二億恒河沙等[注2]
佛所説若有侵毀此法師
者則爲侵毀

注1　異字形
注2　抜字　大経では諸あり

是諸佛已時
釋迦牟尼佛讃
藥王菩薩言善哉
善哉藥王[注1]愍念

注1　抜字　大経では汝あり
注2　抜字　大経では是あり

擁護此法師
故説[注2]陀羅尼
於諸衆生多
所饒益

5

第 355 図　巻第八　陀羅尼品第二十六（２）

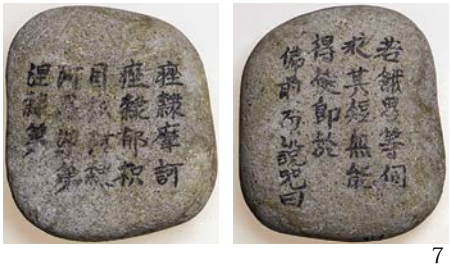
爾時勇施菩薩
白佛言世尊我
亦爲擁護讀
誦受持法華經
者説陀羅尼若[注1]法師
得是陀羅尼若夜叉
若羅刹若富單那若
吉蔗[注2]若鳩槃荼[注3]

注1　抜字　大経では此あり
注2　誤字　大経では遮（春日版と同じ）
注3　誤字　大経では荼（春日版と同じ）

6

若餓鬼等伺
求其短無能
得便卽於
佛前而説呪曰
痤隸[注1]摩訶
痤隸郁枳
目枳阿隸
阿羅婆第
涅隸第

注1　抜字　ここから8番石経表面四行目までに（一）～（十三）の数字が大経では入る



7

涅隸多婆第
伊緻枳韋緻枳
旨緻枳涅隸[注1]墀
枳涅犁墀[注2]婆底
世尊是陀羅
尼神呪

8

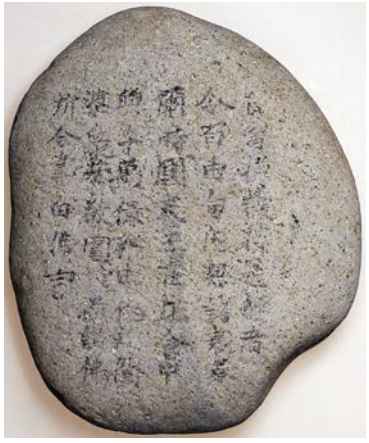
恒河沙等
諸佛所説亦
皆隨喜若有
侵毀此法師者
則爲侵毀是諸
佛已

注1　加筆（春日版あり）
注2　加筆（春日版あり）

第 356 図　巻第八　陀羅尼品第二十六（３）

9

爾時毗沙門天王護世者
白佛言世尊我亦爲愍念
衆生擁護此法師故説是
陀羅尼卽説呪曰[注1]
阿梨[注2]那利[注3]㝵那梨[注4]阿那盧
那履拘那履
世尊以是神呪擁護
法師我亦
世尊我亦以陀羅尼
神呪擁護持法華經
者卽説呪曰
阿伽禰[注1]伽禰瞿利乾
陀利旃陀利摩蹬耆
常求利浮樓莎梶頰
底世尊是陀羅尼神
呪四十二億諸佛所
説若有侵毀此法師者
[注2]



自當擁護持是經者
令百由旬内無諸衰患
爾時[注5]國天王在此會中
與千萬億那由佗乾闥
婆衆恭敬圍繞前詣佛
所合掌白佛言
爾時有羅刹女等一
名藍婆二名毗藍婆
三名曲齒四名華齒
五名黑齒六名多髮
七名無厭足八名持
瓔珞九名皐[注3]諦十名
奪一切衆生精氣是
十羅刹女與鬼[注4]子母
并其子及

注1　誤字 大経では日
注2　異字形
注3　誤字 大経では梨
注4　異字形
注5　抜字 大経では持あり

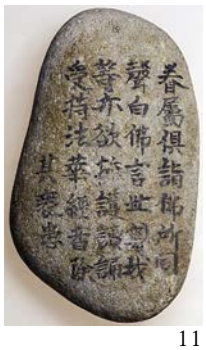
注1　抜字 ここから四行に（一）～（九）の数字が大経では入る
注2　抜字 大経では則爲侵毀是諸佛已あり
注3　誤字 大経では睪帝
注4　異字形

第 357 図　巻第八　陀羅尼品第二十六（４）

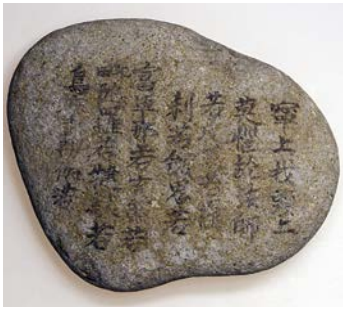
眷屬俱詣佛所同
聲白佛言世尊我
等亦欲擁護讀誦
受持法華經者除
其衰患[注1]

若有伺求法師短
者令不得便卽於
佛前而說呪曰

注1　異字形



11



12

伊提履[注1]伊提泯
伊提履阿提履
伊提履泥履泥履泥
履泥履泥履泥
履樓醯樓醯樓醯
樓醯多醯多醯
多醯兜醯㝵醯

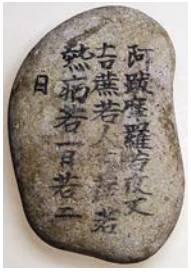
寧上我頭上
莫惱於法師
若夜叉若羅
刹若餓鬼若
富單那若吉蔗[注2]若
毗陀羅若犍駄[注3]若
烏[注4]摩勒伽若

注1　抜字 表面に（一）～（十九）の数字が大経では入る
注2　誤字 大経では遮（春日版と同じ）
注3　異字形
注4　誤字 大経では烏

阿跋摩羅若夜叉
吉蔗[注1]若人吉蔗[注2]若
熱病若一日若二
日

若三日若四
日乃至七日若
常熱病若男
形[注3]若女形[注4]

注1　誤字 大経では遮（春日版と同じ）
注2　誤字 大経では遮（春日版と同じ）
注3　異字形
注4　異字形

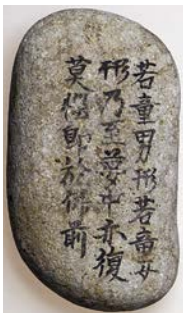


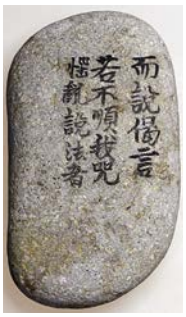
13

若童男形[注1]若童女
形[注2]乃至夢中亦復
莫惱卽於佛前

而說偈言
若不順我呪
惱亂說法者

注1　異字形
注2　異字形





14

第358図　巻第八　陀羅尼品第二十六（5）

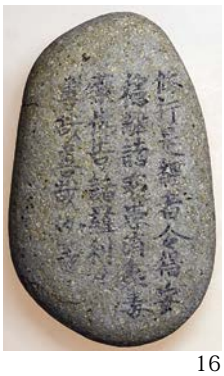
頭破作七分
如阿梨[注1]樹枝
如殺父母罪
亦如壓[注2]油殃
斗秤欺誑人
調達破僧罪
犯此法師者
當獲如是殃

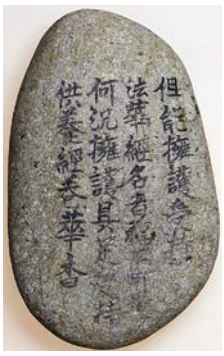
諸羅刹女
説此偈已白佛
言世尊我等
亦當身自擁護
受持讀誦

15

注1　異字形
注2　異字形

修行是經者令得安
隱離諸衰[注1]患消衆毒
藥佛告諸羅刹女
善哉善哉汝等
但能擁護受持
法華經[注2]名者福不可量
何況擁護具足受持
供養經卷華香

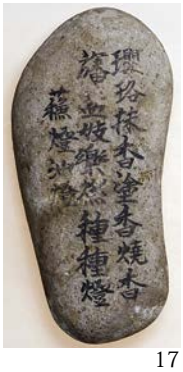




16

注1　異字形
注2　加筆

瓔珞抹香塗香燒香
旛蓋妓樂燃種種燈
蘇燈油燈
諸香油燈蘇摩那華
油燈瞻[注1]蔔華油燈婆
師迦華油燈優鉢羅



17

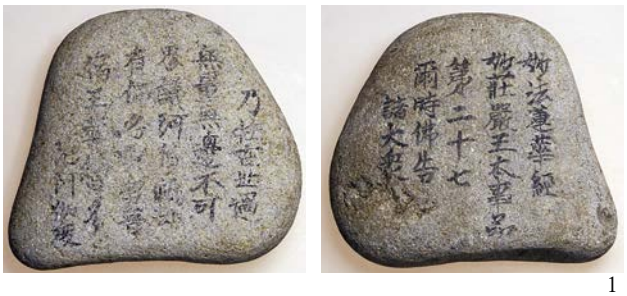
注1　異字形

華油燈如是等
百千種供養
者皐[注1]諦汝等
及眷屬應當
擁護如是法師
説此[注2]陀羅尼
品時六萬八
千人得無生
法忍
南[注3]無阿弥陀佛

18

注1　誤字　大経では單帝（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では是（春日版と同じ）
注3　加筆

第 359 図　巻第八　陀羅尼品第二十六（６）



妙法蓮華經
妙莊嚴王本事品
第二十七
爾時佛告
諸大衆
乃往古世過
無量無邊不可
思議阿僧祇劫
有佛名雲雷音
宿王華智多
陀阿伽度

1

阿羅訶三藐三佛陀國
名光明莊嚴劫名喜見
彼佛法中有王名妙
莊嚴其王夫人
名曰淨德有
二子一名淨藏
二名淨眼是二子有
大神力福德智慧
久修菩薩所行之道
所謂檀波羅蜜尸羅
波羅蜜

2

羼提波羅蜜毗梨耶
波羅蜜禪波羅蜜
般若波羅蜜方便
波羅蜜慈悲喜捨
乃至三十七品助道
法皆悉明了通達又
得菩薩淨三昧日星
宿三昧淨光三昧

3

淨色三昧淨照明
三昧長莊嚴三昧大
威德藏三昧於此三昧
亦悉通達
爾時彼佛欲引導
妙莊嚴王及愍念衆生
故說是法華經時淨
藏淨眼二子到其
母所合十指爪

4

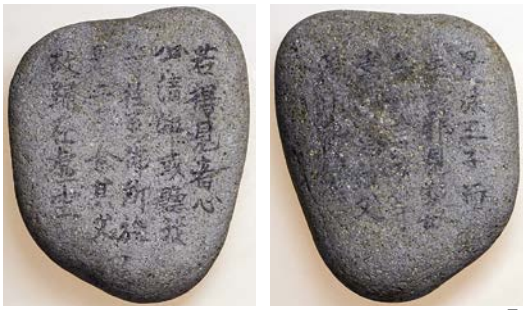
第 360 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（1）

掌白言願母
往詣雲雷音
宿王華智佛
所我等亦當
侍從親近
供養禮拜所以
者何此佛於一切
天人衆中説法
華經宜應聽
受母告子言

5

汝父信受外道
深著婆羅門
法汝等應往
白父與共俱
去淨藏淨眼
合十指爪掌
白母我等

6



是法王子而
生此邪見家母
告子言汝等
當憂念汝父
爲現神變
若得見者心
必清淨或聽我
等往至佛所於
是二子念其父
故踊在虚空

7

高七多羅樹
現種種神變
於虚空中行
住坐臥身上
出水身下出
火
身下出水
身上出火
或現大身
滿虚空中
而復現小

8

小復現大於空
中滅忽然在地
入地如水履水
如地現如是等
種種神變令其父
王心淨信解時
父見子神力如是心大
歡喜得未曽有合掌
向子言汝等師爲是

9

第 361 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（２）

誰誰之弟子
二子白言大
王彼雲雷音
宿王華智佛
今在七寶

菩提樹下
法座上座[注1]於一切
世間天人衆中
廣説法華經是我
等師我是弟子

注1　同音同義字　大経では坐

10

阿耨多
羅三藐
三菩提

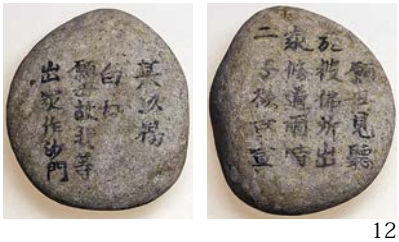
心我等爲父
已作佛事

11

願母見聽
於彼佛所出
家修道爾時
二子欲重宣

其[注1]以偈
白母
願母放我等
出家作沙門

注1　抜字　大経では意あり



12

諸佛甚難値
我等隨佛學
如優曇波[注1]羅
値佛復難
是

注1　誤字　大経では鉢（春日版と同じ）

13

脱諸難亦難
願聽我出家
母即告言聽

汝出家所
以者何佛
難値故於是
二子

14

第362図　巻第八　妙荘厳王本事品第二十七（3）

白父母言善哉父
母願時往詣雲雷
音宿王華智佛所
親覲[注1]供養所以者何
佛難得値如優
曇波羅[注2]華又如
一眼之龜値浮木
孔而我等宿福
深厚

注1　誤字　大経では近（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では鉢（春日版と同じ）

15

生値佛法是故父母
當聽我等令得出家
所以者何諸佛難値
時亦難遇彼時妙莊
嚴王後宮八萬四千人
皆悉堪
任受持
是
法華經

16

淨眼菩薩於法華三
昧久已通達淨藏菩薩
已於無量百千萬億劫
通達離諸惡趣三昧
欲令一切衆生離
諸惡趣故其王夫
人得諸佛集三
昧

17

能知諸佛祕
密之藏二子
如是以方便力
善化其父令心
信解好樂佛法
於是妙莊嚴王
與群[注1]臣眷屬
倶淨德夫人
與後宮婇
女眷屬倶
其王二子
與四萬二千
人倶一時共
詣佛所到

注1　異字形

18

19

第 363 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（４）

已頭面禮足繞
佛三帀却住
一面
爾時彼佛爲
王説法示教
利喜王大歡
悦爾時妙莊
嚴王及其夫
人解頸眞珠
瓔珞價直百

20

百千以散佛上於
虚空中化成四
柱寶臺臺中
有大寶牀敷

注1　重複

21

百千萬天衣其上有佛
結跏趺坐放大光明
爾時妙莊嚴王作是
念佛身希有端
嚴殊特成就
第一微妙之色
時雲雷音宿王華
智佛告四衆言
汝等見是妙
莊嚴王

22

於我前合掌立
不此王於我法
中作比丘精勤
修習
助佛道法當
得作佛號娑
羅樹王

23

國名大光劫名
大高王其娑羅
樹王佛有無量
菩薩衆及無量
聲聞其國平正

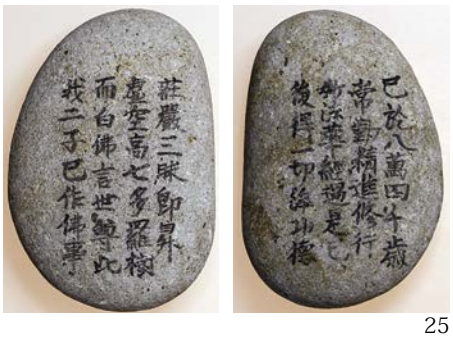
24

功德如是其王
即時以國付弟
王與夫人二子并
諸眷屬於佛
法中出家修道
王出家

注1　加筆（春日版あり）

第 364 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（5）

已於八萬四千歲
常勤精進修行
妙法華經過是已
後得一切淨功德
莊嚴三昧卽舜
虛空高七多羅樹
而白佛言世尊此
我二子已作佛事

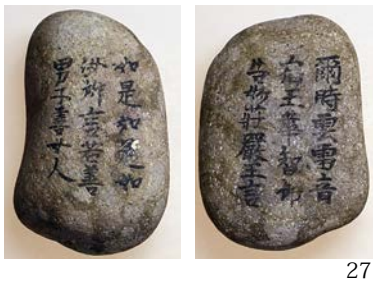


25

以神通變化
轉我邪心令得
安住於佛法中
得見世尊
此二子者
是我善知
識爲欲發起
宿世善根

26

爾時雲雷音
宿王華智佛
告妙莊嚴王言
如是如是如
汝所言若善
男子善女人

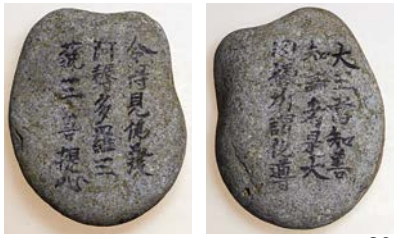


27

種善根故
世世得善知識
其善知識能作
佛事
示教利喜
令入阿耨多
羅三藐三
菩提

28

大王當知善
知識者是大
因緣所謂化導
令得見佛發
阿耨多羅三
藐三菩提心



29

第 365 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（6）

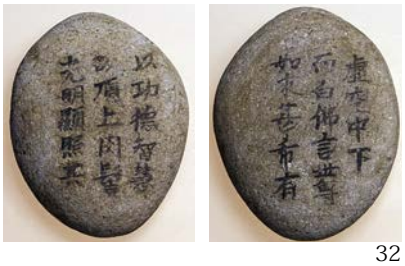
大王汝見此二子
不此二子已曾供
養六十五百
千萬億那由
佗恒河沙諸
佛親近恭敬

30

於諸佛所
受持法華經
愍念邪見
衆生令住
正見妙莊嚴
王卽從

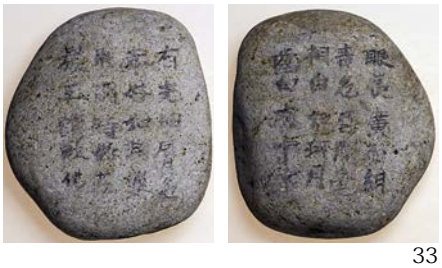
31

虛空中下
而白佛言世尊
如來甚希有
以功德智慧
故頂上肉髻
光明顯照其



32

眼長廣而紺
青色眉間毫
相白如珂月
齒白齊密常
有光明脣色
赤好如頻婆
果爾時妙莊
嚴王讚歎佛

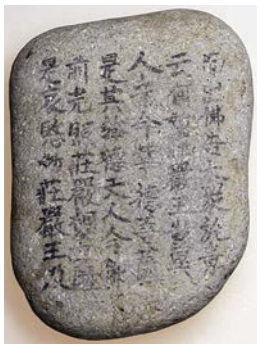


33

如是等無量
百千萬億功
德已於如來
前一心合掌
復白佛言世尊
未曾有也如
來之法具
足成就

34

第 366 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（7）



35

不可思議微妙功徳[注1]
教誡所行安隱快善
我從今日不復自隨
心行不生邪見憍慢
瞋恚諸惡之心説是
語已禮佛
而出佛告大衆於意
云何妙莊嚴王豈異
人乎今華徳菩薩
是其淨徳夫人今佛
前光照莊嚴相菩薩
是哀愍妙莊嚴王及

注1　異字形

36

諸眷屬故於彼中生
其二子者今藥王菩
薩藥上菩薩是是
藥王藥上菩薩成就
如此諸大功徳已於
無量百千萬億諸佛所
植衆徳本成就不可思
議諸善功徳若有人識
是二菩薩名字者一
切世間諸天人民亦
應禮拜佛説是妙莊
嚴王本事品時八萬四千人
遠塵離垢於諸法中得法
眼淨

第 367 図　巻第八　妙莊嚴王本事品第二十七（８）

妙法蓮華經普賢菩薩
勸發品第二十八
爾時普賢菩薩以自在
神通力威德名聞與
大菩薩無量無邊不可
稱數從東方來所經
諸國普皆震動雨寶
蓮華作無量百千萬

1

億種種妓樂
又與無數諸天龍
夜叉乾闥婆阿脩
羅迦樓羅緊那
羅摩睺羅伽
人非人等
大衆圍繞
各現威德神
通之力到娑婆
世界耆闍崛
山中

2

頭面禮釋迦牟尼佛
右繞七帀白佛言世
尊我於寶威德上
王佛國遥聞此娑
婆世界説
法華經
與無量無邊百千
萬億諸菩薩衆共
來聽受唯願世尊當
爲説之若善男子
善女人

3

於如來滅後云何
能得是法華經佛
告普賢菩薩若
善男子善女人成就
四法於如來滅後
當得是法華經
一者爲諸佛護念
二者植諸德本三
者入正定聚四者
發救一切衆生之心
善男子善女人如
是成就四法

4

注1　誤字　大経では衆（春日版と同じ）

第 368 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（１）

於如來滅後必得是經
爾時普賢菩薩白佛
言世尊於後五百歲
濁惡世中其有
受持是經
典
者我當守護
除其衰患令得
安隱使無伺求
得其便[注1]者若魔

注1　異字形

5

子若[注1]魔女若
魔民若爲魔所著
者若夜叉若羅刹
若鳩槃茶若
毗舍闍若吉蔗[注2]
若富單那若韋
陀羅等諸惱人
者皆不得便是

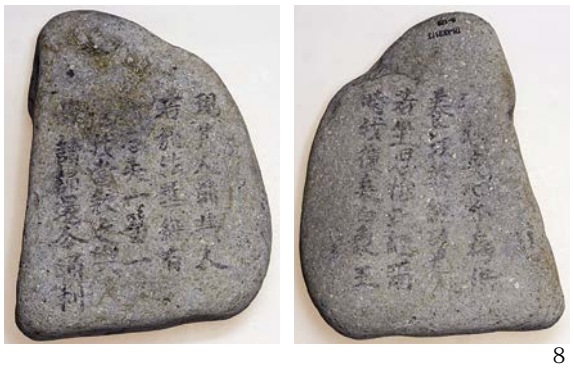
注1　抜字　大経では若魔あり
注2　誤字　大経では遮（春日版と同じ）

6

人若行若立
讀誦此經我
爾時乘六牙
白象王
與大
菩薩衆俱詣
其所而自現身
供養守護

7

安慰其心亦爲供
養法華經故是人
若坐思惟此經爾
時我復乘白象王
現其人前其人
若於法華經有
所忘失一句一
偈我當教之與
共讀誦還令通利



8

爾時受持讀誦
法華經者得見
我身甚大歡喜
轉復精進以見
我故即得三昧
及陀羅尼
名

9

第 369 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（２）

10

爲旋陀羅尼百
千萬億旋陀羅
尼法音方便陀
羅尼得如是等
陀羅尼

世尊若後世後五百
歲濁惡世中比丘比丘
尼優婆塞優婆
夷

11

求索者
受持者讀誦者
書寫者欲修習
是法華經於三七日
中應一心精進滿三
七日已我當乘
六牙白象

12

與無量
菩薩而自圍
繞以一切衆生
所喜見身現
其人前而
爲說法

示教利喜亦復
與其陀羅尼呪得
是陀羅尼故無有
非人能破壞者亦
不爲女人之所
惑亂我身亦
自當護是人唯願
世尊聽我說此陀羅
尼呪即於佛前
而說呪曰

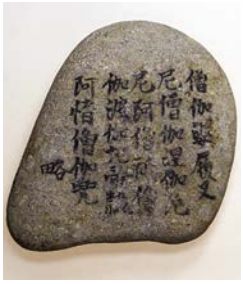
13

阿檀地[注1] 檀陀婆地
檀陀婆帝檀陀鳩
舍隸檀陀修陀隸

修陀隸
修陀羅
婆底佛
馱波
羶禰

注1　抜字 13～15番石経に（一）～（二十）の数字が大経では入る

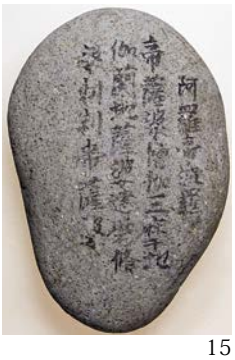
第 370 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（3）



14

薩婆陀羅尼阿婆
多尼薩婆婆
沙阿婆多尼
脩阿婆多
尼

僧伽婆履叉
尼僧伽涅伽陀
尼阿僧祇僧
伽波伽地帝隷
阿惰僧伽兜
略



15

阿羅帝波羅[注1]
帝薩婆僧伽三摩地
伽蘭地薩婆達磨脩
波[注2]利刹帝薩婆

薩埵樓馱[注3]
憍舍略阿㝵[注4]伽地
辛阿毗吉利地帝

注1　誤字　大経では婆（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では婆（春日版と同じ）
注3　異字形
注4　加筆（春日版と同じ）

16

世尊若有菩薩得聞
是陀羅尼者當知普
賢神通之力若法華
經行閻浮提有受持
者應作此念皆是
普賢威神之
力

若有受持
讀誦正憶念
解其義趣如
説修行當知
是人行普賢
行於無量無邊
諸佛所

深種善根爲諸如
來手摩其頭若但
書寫是人命終當
生忉利天上是時

八萬四千天女作衆
妓樂而來迎之其人
卽著七寶冠於婇女
中娯樂快樂何況

17

第 371 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（４）

受持讀誦正
憶念解其義
趣如説修行若
有人受持讀
誦解其義趣
是人命終爲
千佛授手
令不恐怖

18

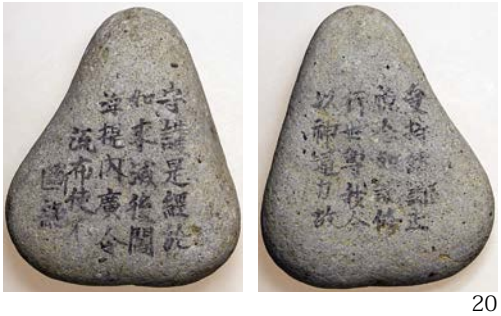
19

不墮惡趣卽往兜
率天上彌勒菩薩
注1
有三十二相大菩
薩衆所共圍繞
有百千萬億
天女眷屬
而於中生有如
是等功德利益
是故智者應當
一心自書若使
人書

注1　抜字　大経では所彌勒菩薩あり

受持讀誦正
憶念如説修
行世尊我今
以神通力故
守護是經於
如來滅後閻
浮提内廣令
注1
流布使不
斷絶

注1　異字形



20

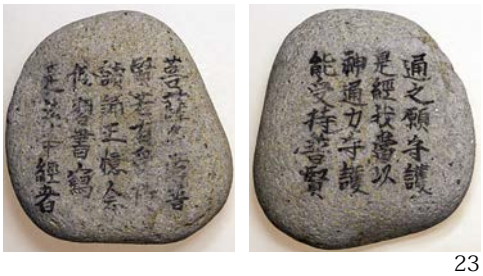
爾時釋迦
牟尼佛讚
言善哉善
哉
普賢汝能
護助是經
令多所衆
生安樂

21

第 372 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（5）

利益汝已成就
不可思議功德深
大慈悲從久遠
來發阿耨多
羅三藐三菩提
意而能作是神

22



通之願守護
是經我當以
神通力守護
能受持普賢
菩薩名者普
賢若有受持
讀誦正憶念
修習書寫
是法華經者

23

當知是人則見
釋迦牟尼佛
如從佛口聞此
經典當知是人
供養釋迦牟尼
佛
當知是人佛
讚善哉當知是
人爲釋迦牟尼佛
手摩其頭

24

當知是人爲
釋迦牟尼佛
衣之所覆注1貪
著世樂不好
外道經書手
筆
亦復不喜
親近其人及
諸惡者若屠
兒注2猪羊
雞狗

25

注1　扱字 大経では如是之人不復あり
注2　扱字 大経では若畜あり

第 373 図　巻第八　普賢菩薩勧發品第二十八（６）

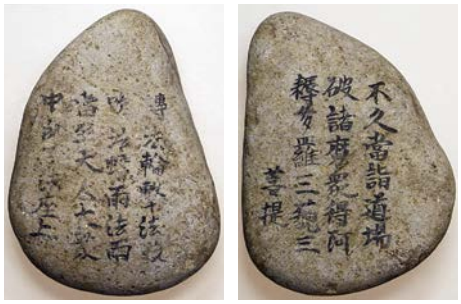
若獵師若
衒賣女色
是人心意
質直有正
憶念有福
德力是人
不爲三毒
所惱亦復
不爲嫉妒我
慢邪慢增
上慢所惱

26

若有人見受持
讀誦法華經者
應作是念此人
是人少欲知足能
修普賢之行普賢
若如來滅後後
五百歲

27

不久當詣道場
破諸魔衆得阿
耨多羅三藐三
菩提
轉法輪擊法鼓
吹法螺雨法雨
當坐天人大衆
中師子法座上



28

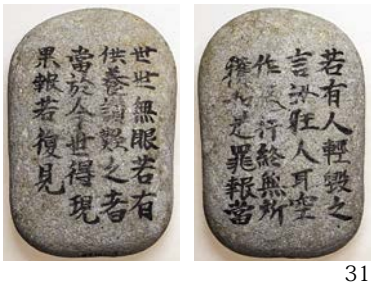
普賢若於後
世受持讀誦是
經典者是人不

29

復貪著衣
服臥具飲食
資生之物
所願不
虛亦於
現世得
其福報

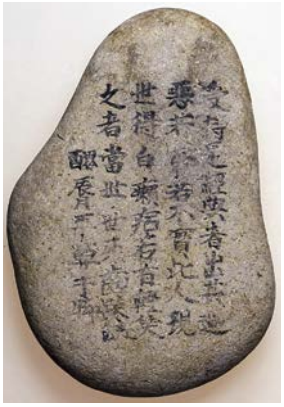
30

若有人輕毀之
言汝狂人耳空
作是行終無所
獲如是罪報當
世世無眼若有
供養讃歎之者
當於今世得現
果報若復見



31

第 374 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（7）



受持是經典[注1]者出其過
惡若實若不實此人現
世得白癩病若有輕笑
之者當世世牙齒踈缺
醜脣平鼻手脚

32

繚戻眼目
角[注2]睞身體臭穢
惡瘡膿血水腹短
氣諸[注3]重病是故
普賢若見受持

注1　加筆（春日版と同じ）
注2　誤字　大経では角
注3　抜字　大経では悪あり

是經典者當起遠
迎當如敬佛說是
普賢勸發品時恒
河沙等無量無邊
菩薩得百千萬億

33

旋陀羅尼三千
大千世界微[注1]塵
等諸菩薩具普
賢道佛說是經
時普賢等諸

注1　異字形

菩薩舍利弗等諸聲聞及諸天
龍人非人等一切大會皆[注1]歡喜
受持佛語作禮而去

妙法蓮華經卷第八[注2]

注1　抜字　大経では大あり
注2　誤字　大経では七（春日版と同じ）

34

第 375 図　巻第八　普賢菩薩勸發品第二十八（８）

1

語大　衆　如

2

□佛

3

注1　異字形

安穩注1
衆生故

第 376 図　品巻位置不明の墨書石

1

南無阿弥陀佛

2

南無阿弥陀佛

3

南無阿弥陀佛

4

南無阿弥陀佛

5

南無阿弥陀佛

6

南無阿弥陀佛

8

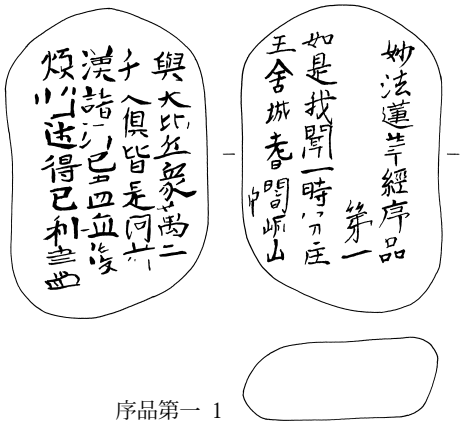
南無阿弥陀佛
南無妙法蓮華經

7

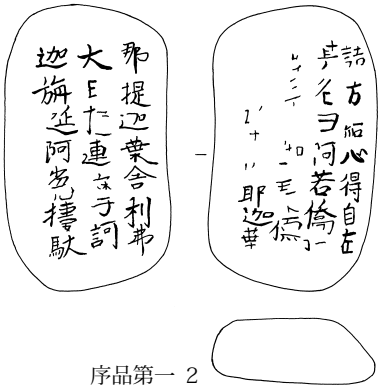
三界萬霊有縁無縁
乃至法界平等利益
安山了□信士
鏡円妙照信女
爲菩提也

南無藥師如來
南無釋迦牟尼佛
南無阿弥陀佛

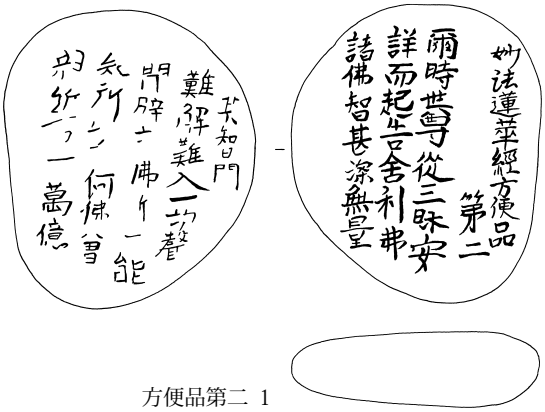
第 377 図　法華経以外の墨書石



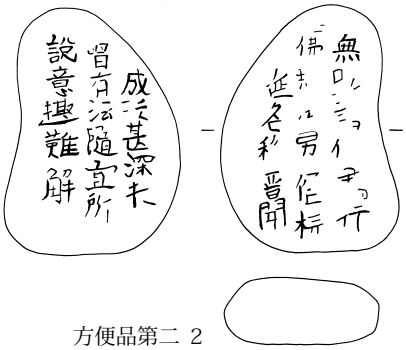
序品第一 1



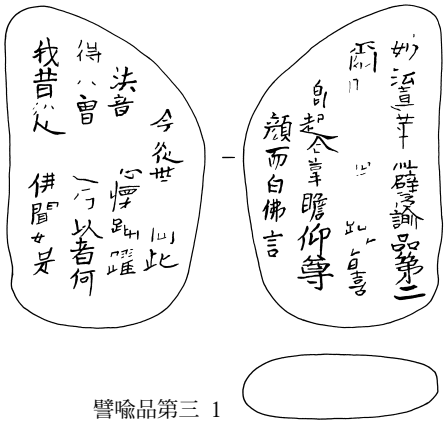
序品第一 2



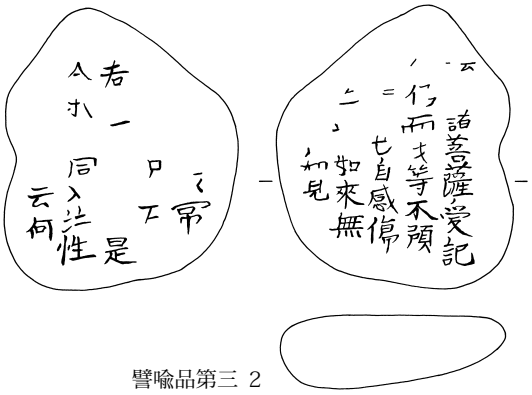
方便品第二 1



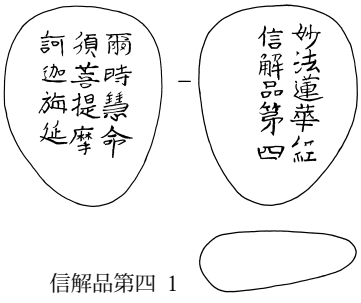
方便品第二 2



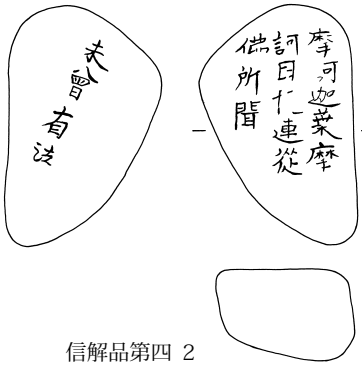
譬喩品第三 1



譬喩品第三 2



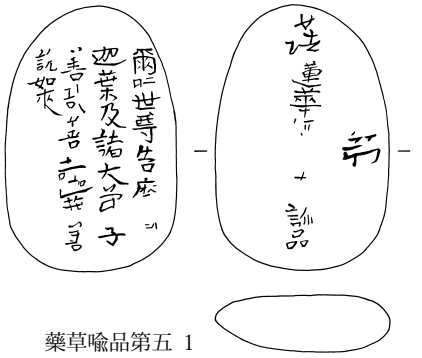
信解品第四 1



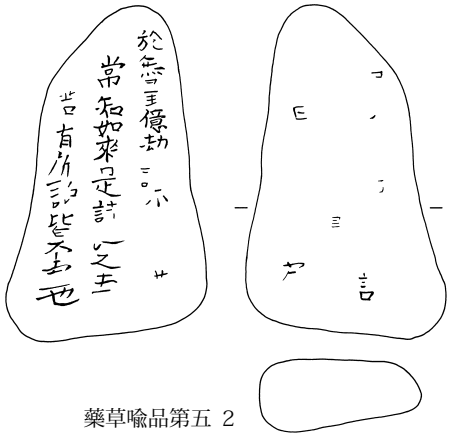
信解品第四 2

第 378 図　石経実測図（１）

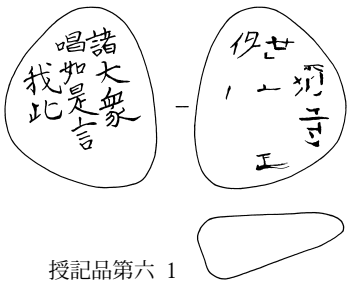
0　1：3　10cm



藥草喻品第五 1

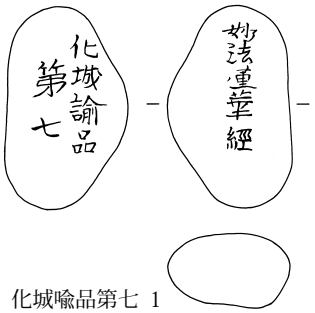


藥草喻品第五 2

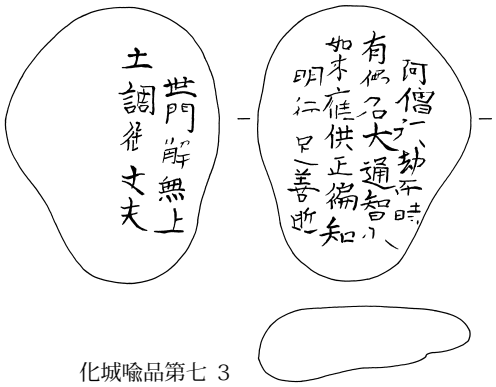


授記品第六 1

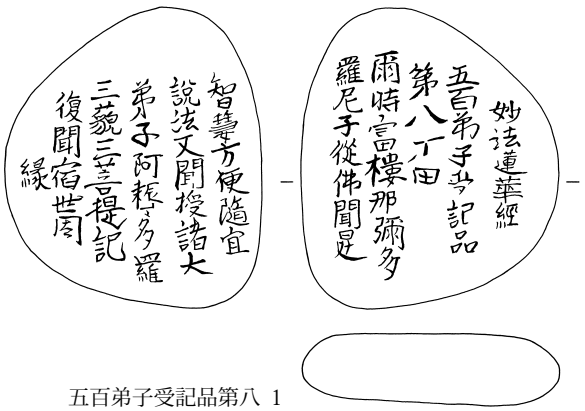
授記品第六 2



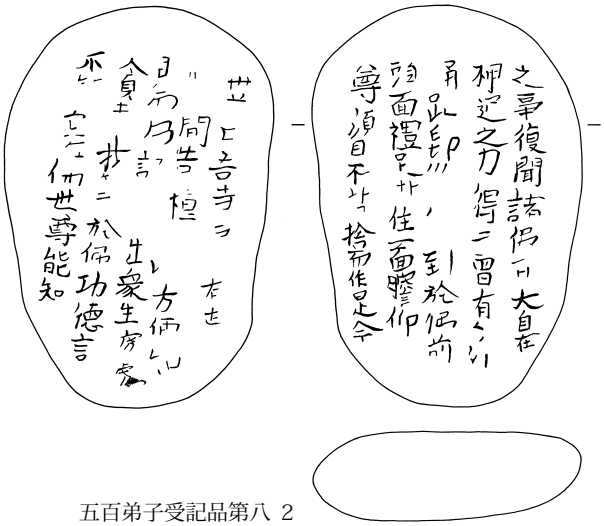
化城喻品第七 1



化城喻品第七 3



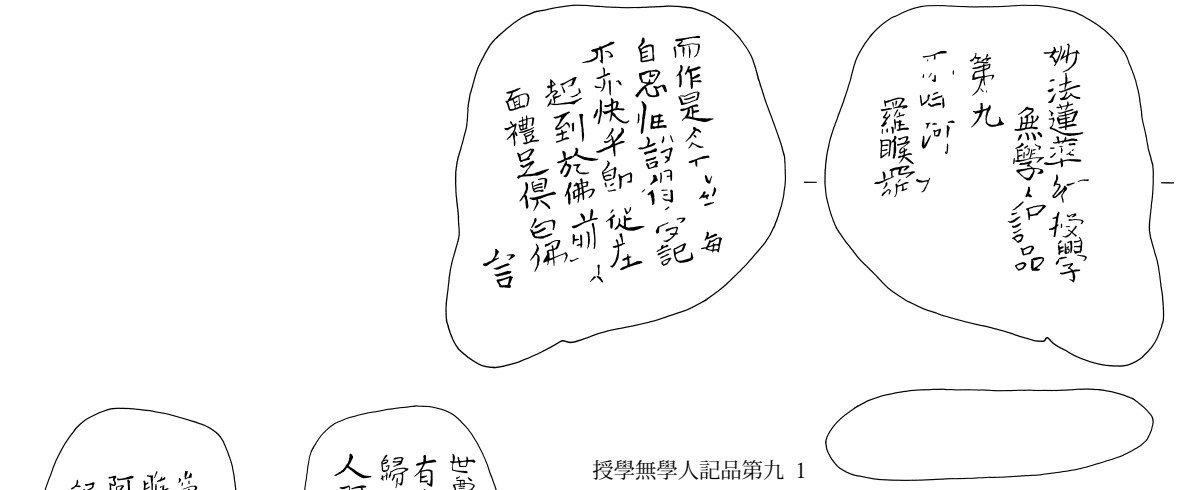
五百弟子受記品第八 1



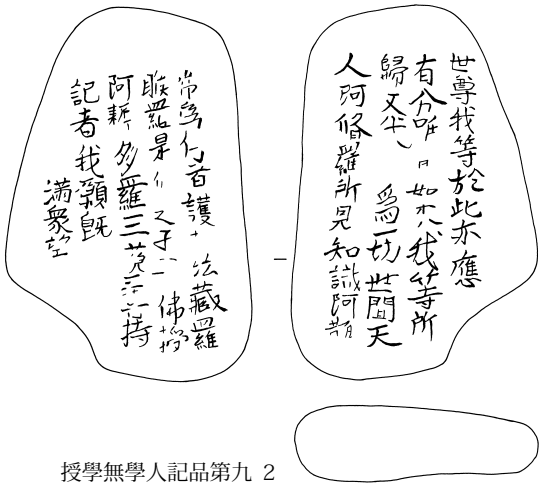
五百弟子受記品第八 2

0　1：3　10cm

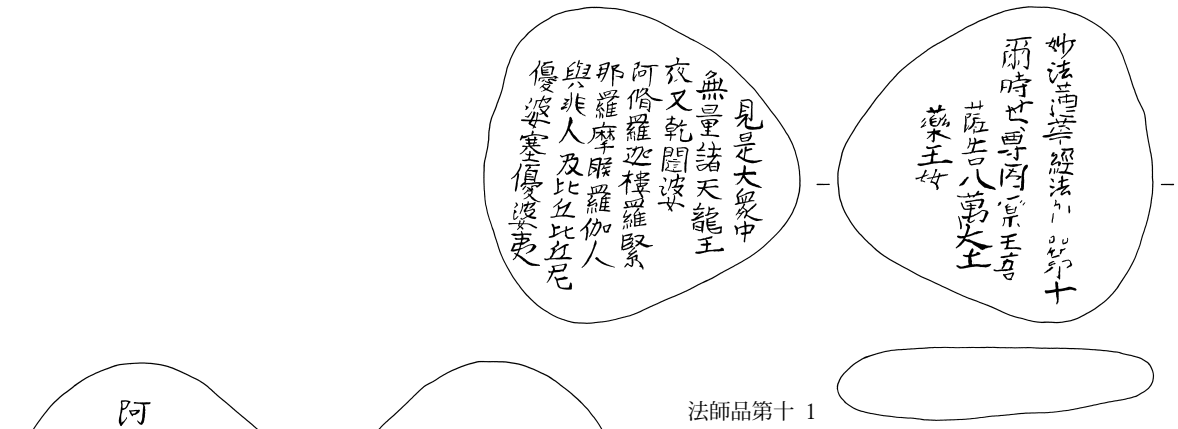
第 379 図　石経実測図（2）



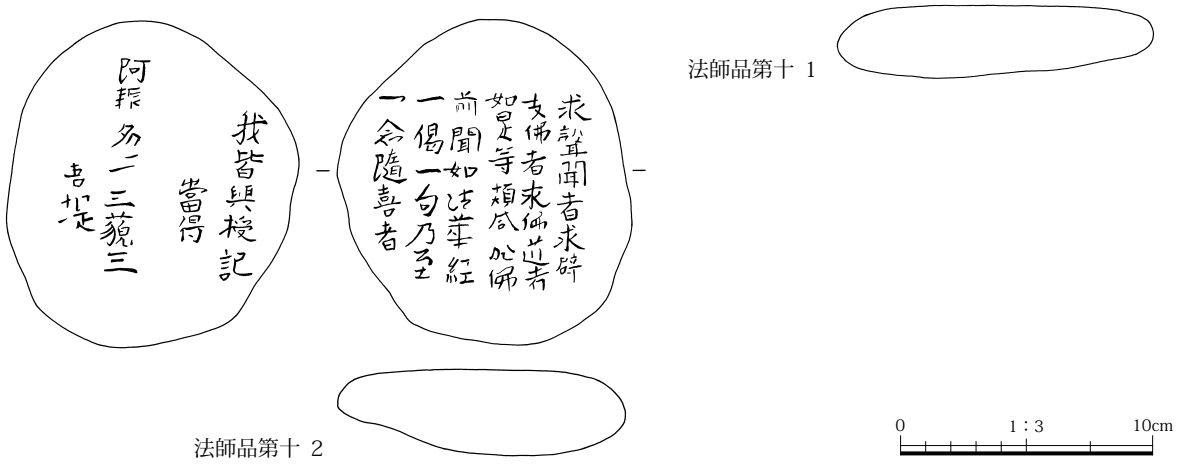
授學無學人記品第九 1



授學無學人記品第九 2

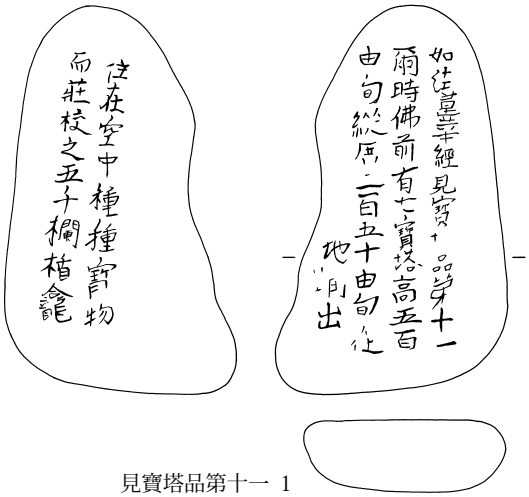


法師品第十 1

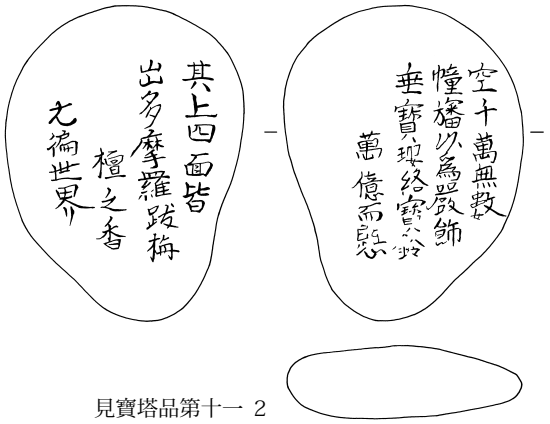


法師品第十 2

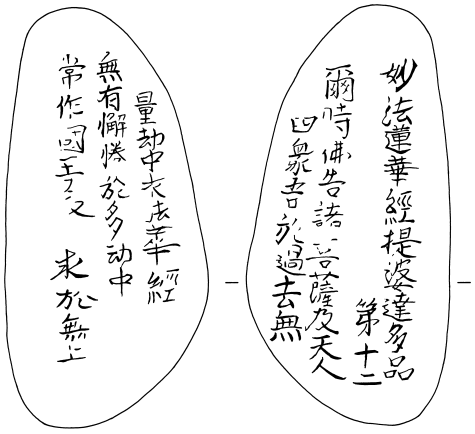
第 380 図　石経実測図（３）



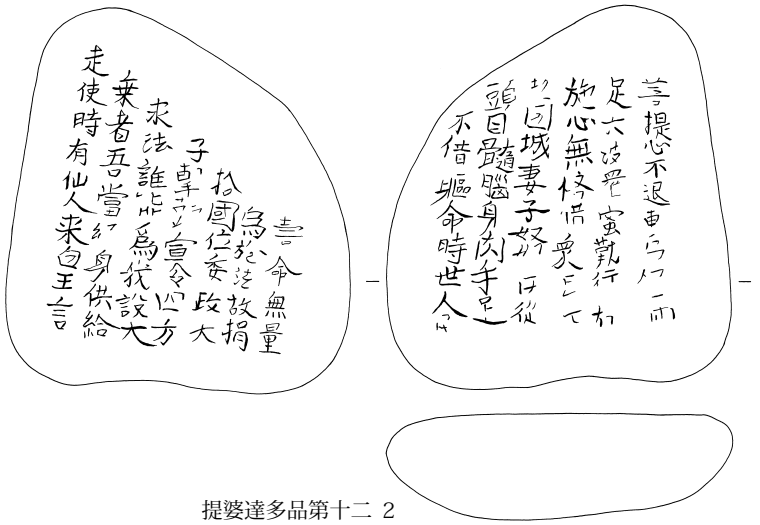
見寶塔品第十一　1



見寶塔品第十一　2



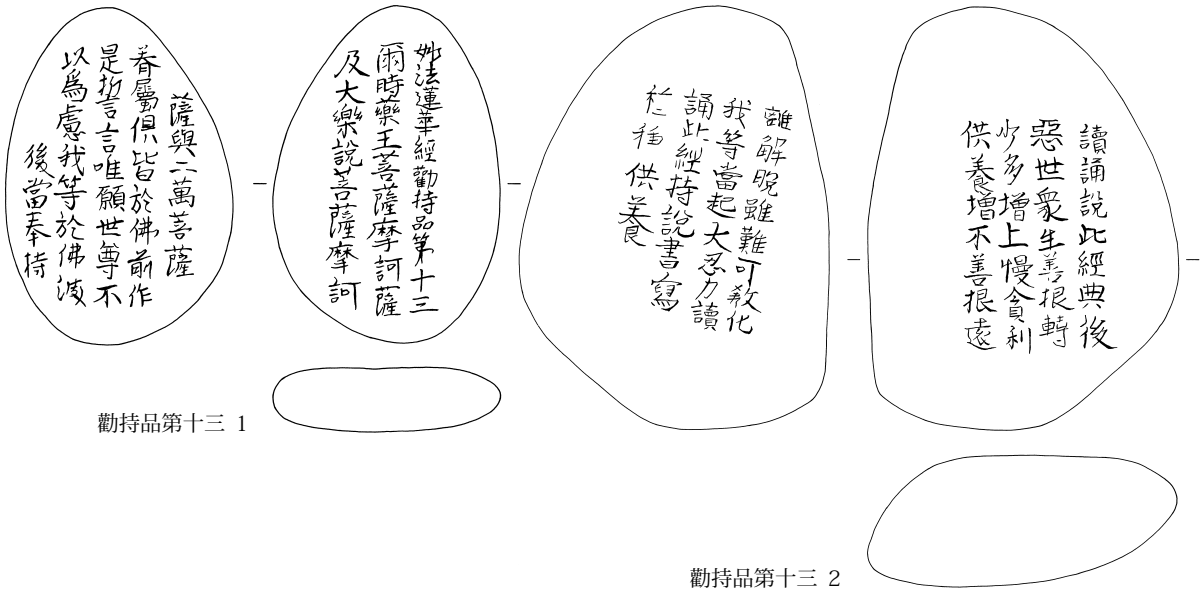
提婆達多品第十二　1



提婆達多品第十二　2

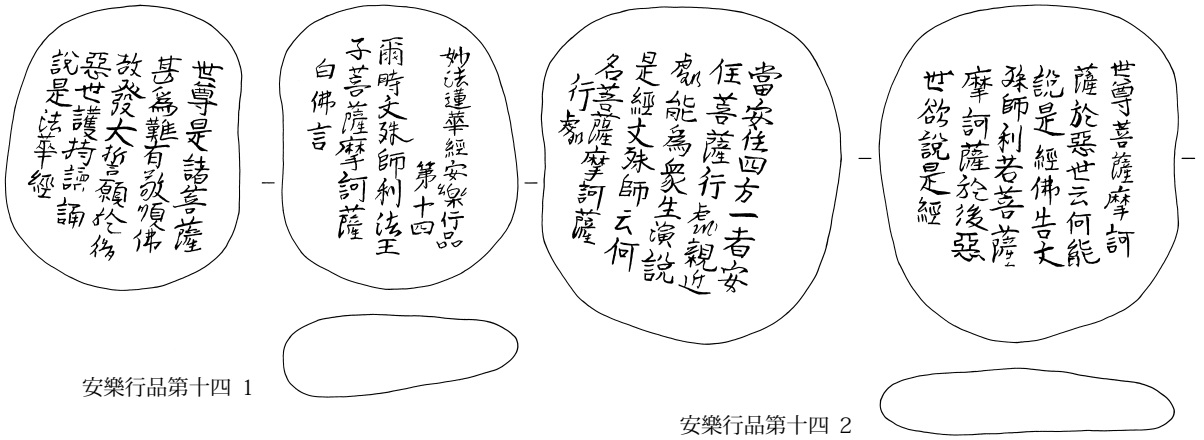
0　1：3　10cm

第 381 図　石経実測図（4）



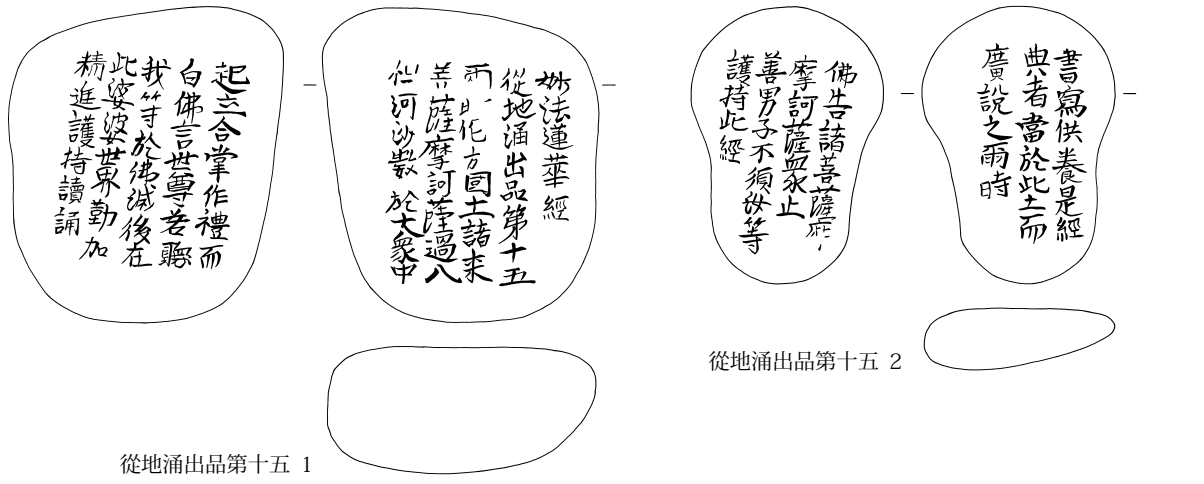
勸持品第十三　1

勸持品第十三　2



安樂行品第十四　1

安樂行品第十四　2

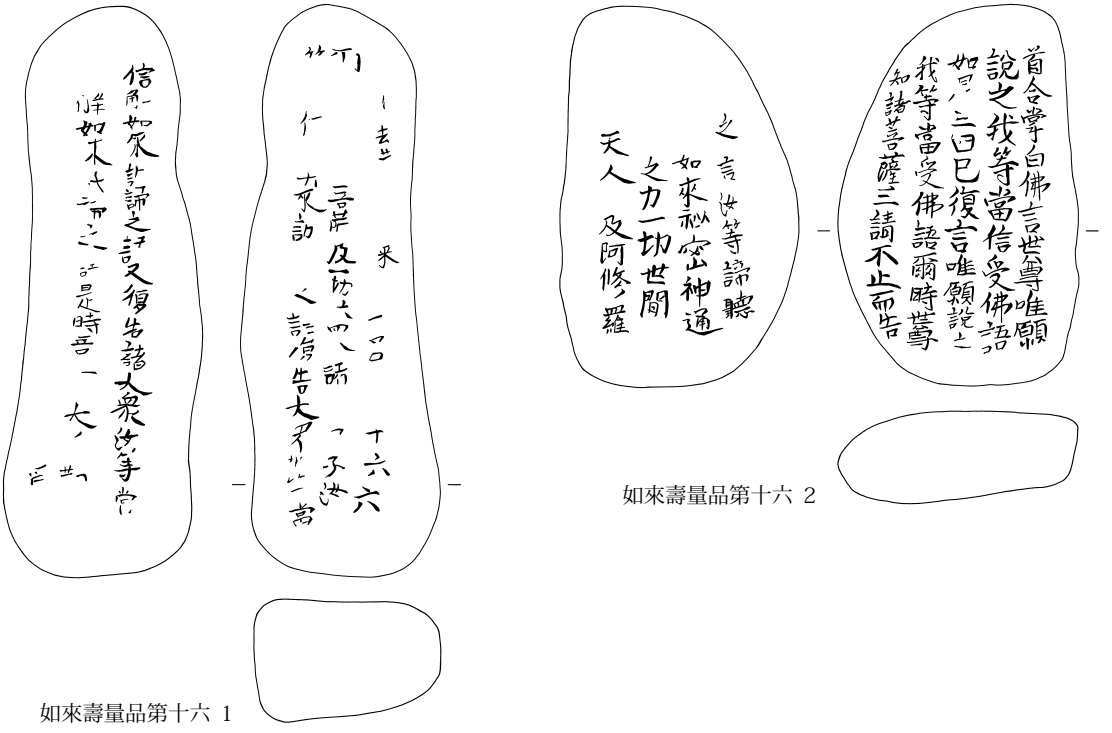


從地涌出品第十五　1

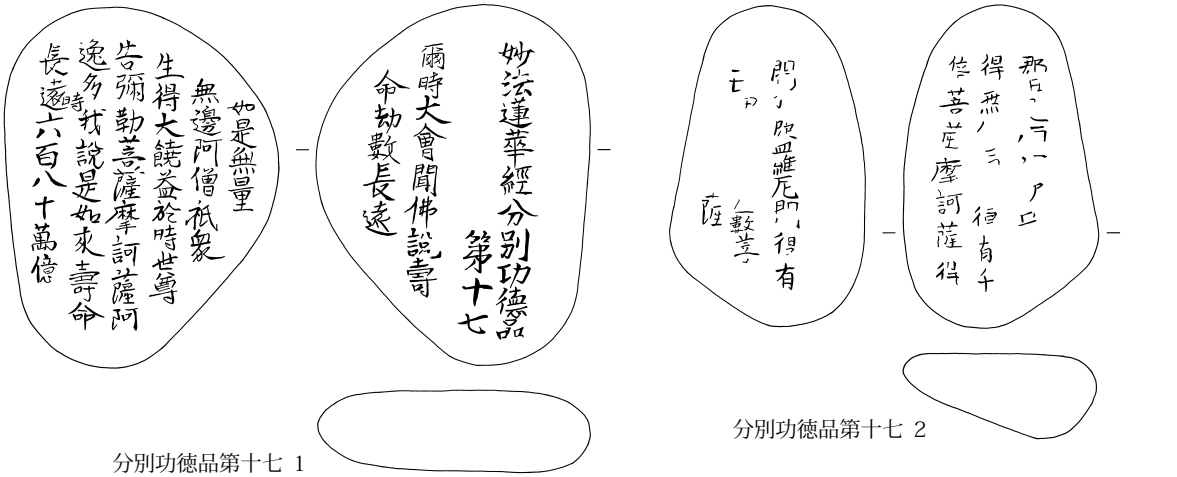
從地涌出品第十五　2

0　1：3　10cm

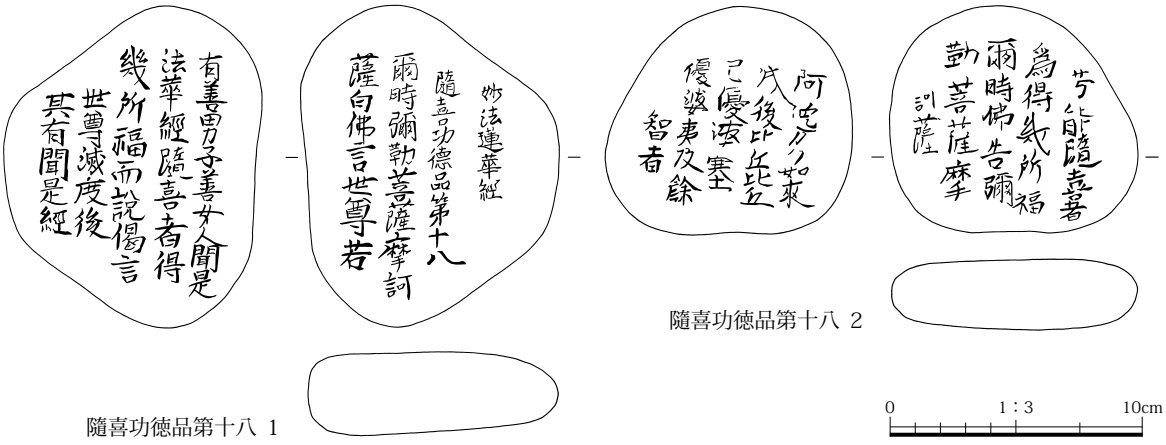
第 382 図　巻第八　石経実測図（５）



如來壽量品第十六 2　　如來壽量品第十六 1



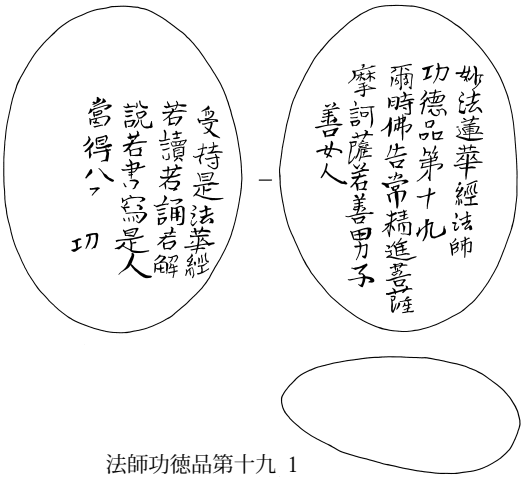
分別功德品第十七 2　　分別功德品第十七 1



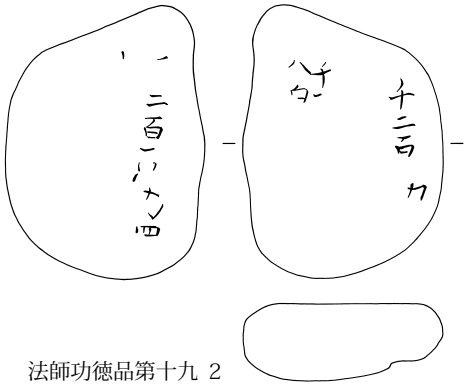
隨喜功德品第十八 2　　隨喜功德品第十八 1

0　1：3　10cm

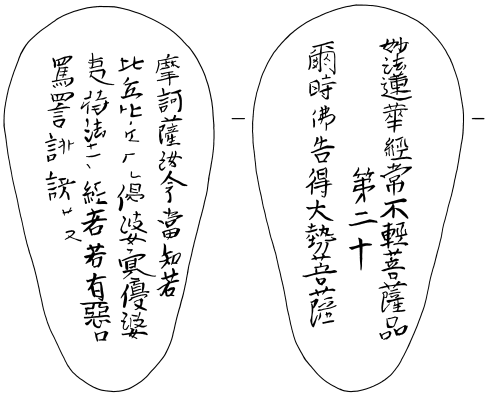
第 383 図　石経実測図（6）



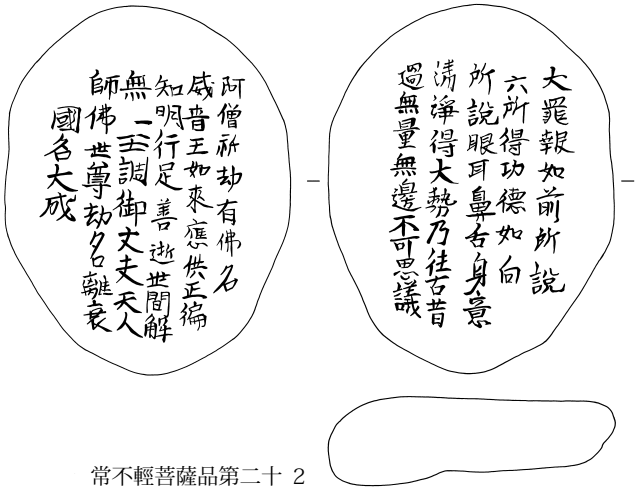
法師功徳品第十九 1



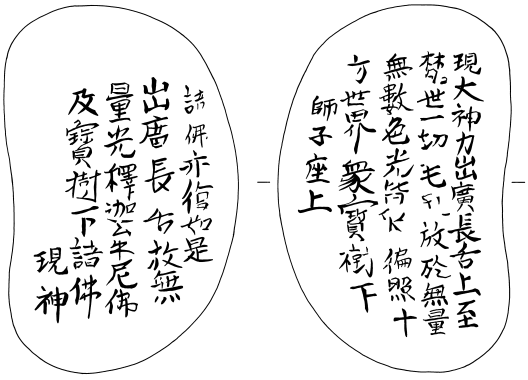
法師功徳品第十九 2



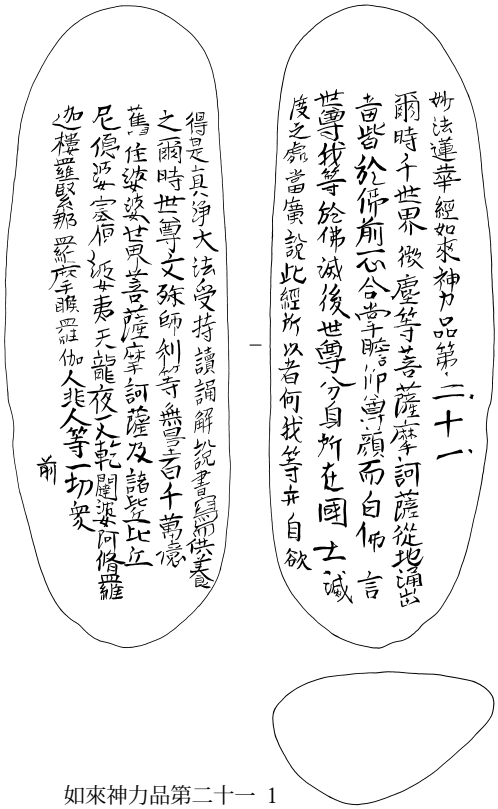
常不輕菩薩品第二十 1



常不輕菩薩品第二十 2



如來神力品第二十一 2



如來神力品第二十一 1

0　1：3　10cm

第 384 図　石経実測図（7）

嘱累品第二十二 1

嘱累品第二十二 2

薬王菩薩本事品第二十三 1

薬王菩薩本事品第二十三 2

妙音菩薩品第二十四 1

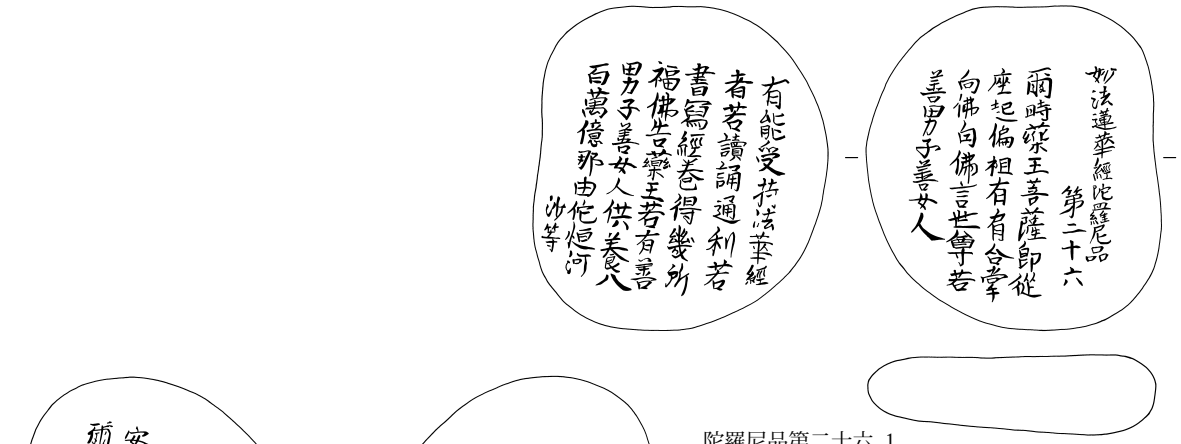
妙音菩薩品第二十四 2

観世音菩薩普門品第二十五 1

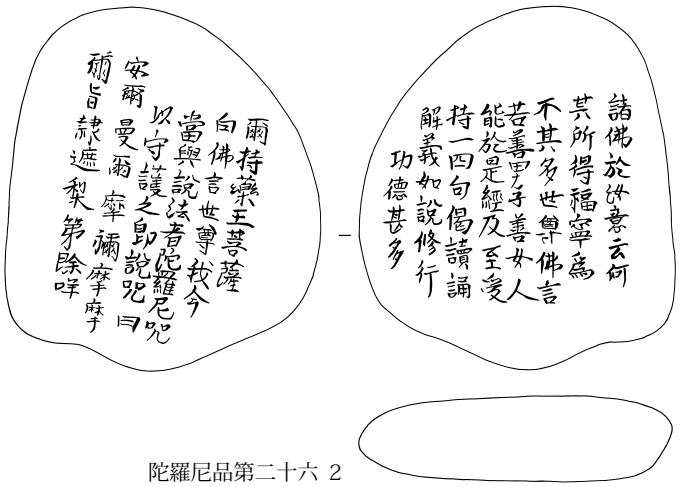
観世音菩薩普門品第二十五 2

0　1：3　10cm

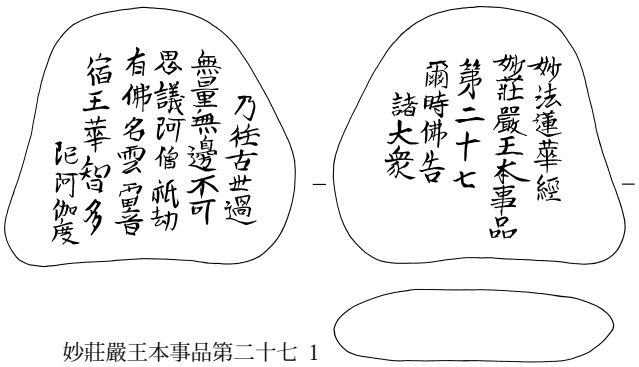
第385図　石経実測図（8）



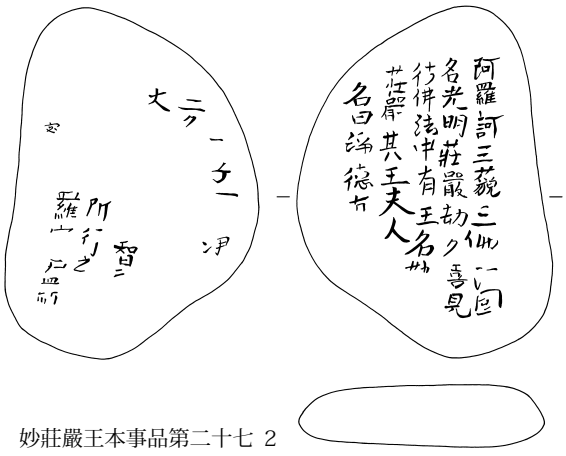
陀羅尼品第二十六 1



陀羅尼品第二十六 2



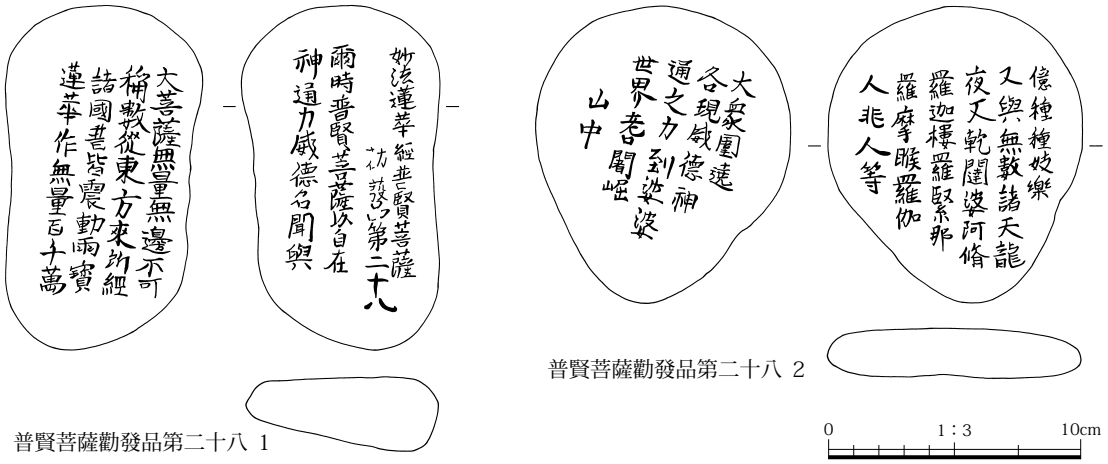
妙莊嚴王本事品第二十七 1



妙莊嚴王本事品第二十七 2

0　1：3　10cm

第 386 図　石経実測図（９）



第 387 図　石経実測図（10）

第２表　巻第一 序品第一 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.2	7.9	3.4	539.06	0130	A－176
2	11.4	6.7	3.0	397.89	1042	C－40
3	10.0	8.5	2.0	281.51	0014	A－77
4	10.4	9.5	2.0	290.87	1473	D－53
5	8.4	8.1	1.9	209.94	0247	A－上層
6	11.9	8.5	1.9	286.17	0326	A－ベルト下層
7	11.3	5.9	2.7	263.50	1879	D－ベルト下層
8	10.0	11.8	3.0	507.69	1115	C－67
9	8.3	7.2	2.4	201.27	0257	A－上層
10	9.9	6.7	3.2	290.39	0312	A－ベルト下層
11	10.6	7.1	2.8	251.83	1210	C－上層
12	7.5	4.7	2.2	118.44	1098	C－178
13	8.8	7.6	2.3	198.48	0229	A－上層
14	7.9	8.9	2.4	245.21	0356	A－下層
15	8.1	8.6	2.1	222.22	0926	B－ベルト最下層
16	8.9	6.7	1.6	163.10	0248	A－上層
17	9.0	7.0	2.1	139.02	1225	C－上層
18	10.2	7.5	2.6	287.68	1194	C－上層
19	9.8	6.7	2.7	265.53	0709	B－上層
20	8.6	7.2	3.3	248.35	1249	C－ベルト上層
21	11.2	6.5	3.1	340.76	0898	B－ベルト下層
22	6.9	5.7	2.3	128.07	1744	D－ベルト上層
23	6.7	4.9	1.7	74.51	1140	C－下層
24	9.1	8.6	2.6	344.44	0649	B－上層
25	13.0	8.1	1.9	280.14	1981	D－ベルト下層
26	7.5	5.0	2.8	158.09	1434	C－最下層
27	9.0	8.4	2.0	234.09	1574	D－168
28	11.7	8.4	3.1	463.23	2058	D－ベルト下層
29	12.7	10.1	3.3	509.94	1066	C－151
30	10.8	9.3	2.7	465.96	0034	A－56
31	7.9	3.8	2.4	95.32	0315	A－ベルト下層
32	7.2	5.9	3.2	196.21	1740	D－ベルト上層
33	9.4	6.9	2.3	214.14	1657	D－上層
34	12.0	8.7	3.5	482.11	0352	A－下層
35	8.9	5.8	3.2	189.48	0342	A－ベルト下層
36	7.4	6.2	2.0	132.71	0746	B－下層
37	5.4	6.2	2.2	114.18	0122	A－195
38	6.9	4.3	2.6	135.08	0158	A－174
39	8.5	6.9	3.0	233.09	0395	A－下層
40	9.5	6.0	2.4	180.89	1528	D－35
41	9.2	6.0	2.4	217.83	0715	B－ベルト上層
42	8.7	5.3	3.4	230.04	1287	C－ベルト上層
43	6.0	4.6	1.2	39.81	1150	C－上層
44	6.1	5.6	2.2	108.73	0436	B－115
45	8.0	6.2	2.7	198.36	0726	B－ベルト上層
46	9.4	6.2	2.4	187.38	1789	D－最下層
47	9.2	6.9	2.3	212.03	1642	D－上層
48	9.3	7.6	1.7	167.02	1880	D－ベルト下層
49	8.3	5.0	1.9	127.64	1282	C－ベルト上層
50	6.7	5.9	1.8	114.22	0615	B－97
51	6.5	4.3	1.7	66.62	0418	A－141
52	10.2	6.5	4.1	322.31	1338	C－ベルト下層
53	5.6	4.4	1.5	51.16	0462	B－111
54	10.5	6.2	2.7	237.16	1431	C－最下層
55	10.8	7.5	3.8	361.39	0302	A－ベルト下層
56	6.8	3.8	1.8	60.45	0757	B－下層
57	8.2	7.7	1.8	165.17	0620	B－101
58	8.7	6.4	2.0	151.81	0698	B－上層
59	10.4	8.0	3.5	390.46	0421	A－1
60	7.7	7.6	2.4	213.80	0271	A－上層
61	7.6	9.9	2.3	285.68	1316	C－ベルト下層
62	8.0	7.4	2.6	229.48	0249	A－上層
63	8.2	6.5	3.4	263.25	1716	D－ベルト上層
64	5.9	5.8	3.1	148.96	1256	C－ベルト上層
65	5.9	6.2	3.2	150.74	1608	D－154
66	8.0	3.8	3.1	108.28	1932	D－ベルト下層
67	6.6	5.5	1.5	73.51	0155	A－175
68	9.2	9.2	2.6	345.69	0640	B－上層
69	10.8	6.9	2.2	228.01	0358	A－下層
70	9.3	8.2	3.4	316.57	0531	B－6
71	7.6	8.7	2.3	205.88	1803	D－最下層
72	7.9	8.3	2.0	204.08	0634	B－上層
73	7.0	5.6	1.4	84.37	0415	A－138
74	6.1	7.0	1.5	103.01	0343	A－ベルト下層
75	9.6	5.8	2.3	184.27	0466	B－136
76	9.2	5.6	2.6	181.03	0234	A－上層
77	7.4	4.9	3.7	178.79	0416	A－140
78	10.9	9.7	2.8	447.20	0909	B－ベルト下層
79	12.0	8.9	3.3	459.27	0046	A－71
80	9.9	7.6	2.9	294.01	0239	A－上層
81	13.7	7.9	4.0	584.05	0766	B－下層
82	7.3	4.6	3.2	139.52	1896	D－ベルト下層
83	9.1	5.9	2.2	146.37	0927	B－ベルト最下層
84	8.4	6.9	3.3	285.16	1276	C－ベルト上層
85	10.6	6.0	2.4	199.65	1843	D－最下層
86	9.2	7.3	2.2	200.84	0552	B－89
87	11.6	9.7	2.7	474.70	0377	A－下層
88	10.6	6.0	3.0	277.60	1947	D－ベルト下層
89	6.6	5.2	1.6	88.31	1830	D－最下層
90	8.5	7.8	1.8	186.75	1577	D－171

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
91	8.5	5.7	3.3	221.73	1030	C－23
92	6.8	6.6	2.0	139.34	1563	D－179
93	9.7	6.9	3.3	296.28	0039	A－92
94	8.8	6.9	3.2	288.30	0008	A－98
95	11.0	8.4	2.4	311.39	2009	D－ベルト下層
96	7.0	5.7	2.5	131.73	0795	B－下層
97	7.8	6.3	3.6	274.31	0387	A－下層
98	8.5	6.3	1.9	138.27	0929	B－ベルト最下層
99	9.9	7.2	3.3	301.79	1198	C－上層
100	11.6	7.3	4.6	503.32	0132	A－181
101	13.8	9.9	3.0	636.09	0773	B－下層
102	8.8	7.2	1.6	152.34	1200	C－上層
103	8.2	4.3	2.7	144.75	0867	B－ベルト下層
104	9.1	5.5	2.3	157.89	0647	B－上層
105	8.4	8.1	2.2	245.22	1926	D－ベルト下層
106	9.5	6.0	2.8	215.27	0160	A－188
107	8.2	6.2	3.1	178.95	0621	B－102
108	8.5	6.6	2.2	152.11	1594	D－139
109	9.9	6.6	2.8	258.89	0965	C－29
110	9.1	6.0	2.3	178.20	0651	B－上層
111	8.0	6.3	1.4	91.51	0587	B－42
112	8.9	6.1	1.9	155.34	1586	D－184
113	8.4	6.3	2.3	155.06	0602	B－47
114	6.8	6.0	3.4	196.30	1330	C－ベルト下層
115	8.7	8.9	2.9	347.40	1931	D－ベルト下層
116	8.8	5.5	1.9	130.17	1884	D－ベルト下層
117	6.6	5.4	3.1	143.31	0146	A－171
118	7.1	5.3	2.3	143.20	1236	C－上層
119	9.3	6.5	2.6	183.04	0411	A－最下層
120	8.2	7.2	2.6	190.19	1802	D－最下層
121	9.1	5.6	1.8	112.76	1065	C－148
122	5.5	4.2	1.8	57.56	1166	C－上層
123	7.8	5.5	3.1	170.69	1611	D－157
124	6.0	5.3	2.3	104.90	0760	B－下層
125	9.9	5.3	2.3	175.87	1292	C－ベルト下層
126	6.6	6.3	2.8	159.03	0580	B－50
127	12.2	7.9	2.6	352.57	0617	B－99
128	12.1	8.0	3.0	361.59	1684	D－上層
129	11.7	9.4	2.9	517.58	1104	C－55
130	8.6	8.5	1.8	192.44	0157	A－178
131	10.1	12.7	2.2	413.36	0752	B－下層
132	9.2	11.2	2.9	380.20	2036	D－ベルト下層
133	12.9	8.6	2.5	364.77	0570	B－64
134	8.7	7.8	1.6	150.25	1344	C－ベルト下層
135	7.1	7.1	1.1	78.93	2028	D－ベルト下層

第３表　巻第一 方便品第二 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.1	10.3	3.2	562.65	0638	B－上層
2	9.9	7.0	2.7	290.68	0767	B－下層
3	7.5	7.3	1.7	153.30	0800	B－下層
4	10.4	8.1	2.9	301.99	1889	D－ベルト下層
5	8.4	6.0	2.2	162.36	1595	D－141
6	7.2	5.7	2.9	158.06	1855	D－下層
7	6.7	8.1	1.7	123.88	0278	A－ベルト上層
8	10.5	6.6	2.5	235.19	1151	C－上層
9	7.7	7.0	3.1	224.51	1942	D－ベルト下層
10	7.8	6.3	2.8	227.54	0429	B－127
11	8.8	6.5	2.6	198.50	1240	C－上層
12	8.0	5.2	2.4	141.23	1834	D－最下層
13	7.6	5.5	3.0	195.92	0869	B－ベルト下層
14	7.2	6.2	2.2	153.17	0566	B－56
15	6.2	4.2	2.5	89.42	1517	D－18
16	5.2	4.6	2.4	75.68	1713	D－上層
17	6.8	4.0	1.7	68.34	1407	C－下層
18	8.4	7.4	1.8	167.84	0578	B－48
19	7.7	6.1	2.0	130.97	0459	B－130
20	8.7	7.1	2.8	230.06	0317	A－ベルト下層
21	9.2	10.3	2.6	408.04	0590	B－63
22	9.8	6.4	3.0	281.57	1911	D－ベルト下層
23	8.9	8.4	1.9	197.68	0251	A－上層
24	8.5	5.7	2.6	196.35	1607	D－153
25	10.9	8.5	3.0	387.59	0166	A－144
26	9.9	7.1	3.2	357.84	0751	B－下層
27	9.3	7.1	3.3	338.96	0227	A－上層
28	10.0	6.3	3.6	324.07	1766	D－下層
29	6.9	5.7	1.8	97.12	0650	B－上層
30	6.7	5.0	2.2	114.83	1163	C－上層
31	7.8	6.7	2.5	168.70	1413	C－上層
32	9.1	6.6	2.8	239.68	2014	D－ベルト下層
33	11.5	8.3	3.6	393.48	1706	D－上層
34	6.0	4.5	2.2	94.37	0835	B－ベルト最下層
35	6.7	5.2	2.4	117.77	1296	C－ベルト下層
36	6.4	5.9	2.2	93.75	1159	C－上層
37	8.1	5.7	2.1	154.19	0259	A－上層
38	7.9	6.1	4.0	225.25	1976	D－ベルト下層
39	7.3	5.2	1.6	98.40	1078	C－184
40	7.4	5.6	3.3	209.95	1580	D－174

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
41	7.5	4.8	3.2	161.54	0583	B－92
42	7.6	6.8	2.3	154.30	1585	D－183
43	5.6	5.5	2.2	104.07	0731	B－ベルト上層
44	7.2	4.8	2.2	111.28	0335	A－ベルト下層
45	7.7	5.7	2.2	169.70	1237	C－上層
46	13.9	9.3	2.7	441.38	0877	B－ベルト下層
47	12.3	6.6	2.7	316.93	1247	C－ベルト上層
48	8.2	7.0	2.0	172.85	0245	A－上層
49	8.9	5.6	2.6	163.67	1978	D－ベルト下層
50	9.2	7.5	2.9	358.95	1472	D－52
51	8.1	6.5	3.6	248.64	0103	A－132
52	10.3	7.3	3.1	378.14	0336	A－ベルト下層
53	10.5	8.2	3.7	439.43	1539	D－14
54	9.1	4.1	2.6	112.56	0179	A－上層
55	12.9	6.2	4.3	440.48	1496	D－99
56	8.5	7.4	3.5	303.62	1359	C－下層
57	8.1	6.9	2.2	175.81	0758	B－下層
58	8.9	6.5	2.7	235.87	0754	B－下層
59	8.0	6.9	2.2	177.83	1750	D－下層
60	10.1	6.1	3.5	354.34	0273	A－上層
61	6.6	4.9	1.8	72.36	1675	D－上層
62	7.2	6.0	3.0	182.95	1986	D－ベルト下層
63	7.9	4.9	2.8	149.78	0261	A－上層
64	6.3	4.7	2.2	90.48	1882	D－ベルト下層
65	7.7	6.4	2.3	173.11	1562	D－178
66	13.0	4.9	3.6	295.19	1547	D－73
67	8.5	4.2	2.1	114.77	0851	B－ベルト下層
68	5.5	5.5	2.4	97.28	1722	D－ベルト上層
69	8.0	3.8	3.2	144.91	2051	D－ベルト下層
70	9.0	6.4	2.6	231.44	0723	B－ベルト上層
71	9.0	7.3	3.2	298.66	0394	A－下層
72	11.6	6.8	3.1	321.58	1498	D－102
73	6.3	5.4	3.0	149.30	1300	C－ベルト下層
74	10.6	10.1	3.5	528.83	0134	A－186
75	11.9	7.0	2.7	247.78	0813	B－下層
76	10.9	6.8	1.4	109.16	0600	B－38
77	8.9	5.0	2.7	156.42	1661	D－上層
78	9.6	6.9	2.0	221.95	1414	C－上層
79	8.1	3.7	2.9	122.45	1221	C－上層
80	8.2	4.0	1.9	100.56	1303	C－ベルト下層
81	6.1	5.1	1.7	67.02	0124	A－196
82	5.6	3.9	2.3	70.80	1385	C－下層
83	5.4	4.3	1.8	51.15	1173	C－上層
84	6.9	5.2	1.9	96.21	1358	C－下層
85	6.0	5.0	2.0	85.40	1136	C－下層
86	6.2	5.2	2.0	90.65	1067	C－159

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
87	9.3	5.9	2.1	155.41	0762	B－下層
88	8.8	5.2	2.9	186.69	1572	D－166
89	7.1	5.5	2.4	131.69	0019	A－63
90	8.5	4.5	2.1	112.29	0663	B－上層
91	7.5	4.3	2.3	100.36	0659	B－上層
92	7.4	5.4	2.0	105.08	0906	B－ベルト下層
93	5.9	5.9	3.1	130.86	1965	D－ベルト下層
94	5.5	4.1	1.5	46.29	1438	C－最下層
95	6.7	5.1	2.4	103.13	0519	B－195
96	7.9	7.2	1.9	161.27	0401	A－下層
97	9.7	4.8	2.6	148.43	0370	A－下層
98	8.5	7.8	2.8	247.57	0601	B－44
99	8.4	8.7	2.5	255.07	1928	D－ベルト下層
100	7.0	6.3	2.8	167.24	0785	B－下層
101	7.2	5.8	2.1	131.63	0441	B－105
102	9.2	7.4	2.2	196.88	1333	C－ベルト下層
103	9.6	7.7	2.0	222.06	1452	C－最下層
104	7.9	7.6	2.4	195.10	0427	B－7
105	8.0	6.2	2.2	110.23	1971	D－ベルト下層
106	7.0	6.0	4.1	180.65	0604	B－46
107	7.4	4.1	2.5	102.76	0589	B－49
108	7.0	4.4	2.8	108.96	0696	B－上層
109	7.8	4.3	2.8	115.41	0658	B－上層
110	9.0	7.2	3.4	229.16	0627	B－上層
111	7.7	7.1	2.9	225.67	0028	A－88
112	8.9	6.1	2.7	233.59	1529	D－41
113	6.4	4.8	2.4	83.88	1723	D－ベルト上層
114	6.2	4.0	2.7	86.76	1648	D－上層
115	10.6	7.4	3.3	349.83	1895	D－ベルト下層
116	7.3	6.9	2.5	188.91	1357	C－下層
117	5.2	5.0	1.5	53.14	1175	C－上層
118	8.6	4.6	2.2	119.83	0161	A－147
119	8.7	7.2	2.0	187.25	1958	D－ベルト下層
120	10.5	5.4	2.2	201.92	2039	D－ベルト下層
121	7.3	6.0	2.5	159.20	0263	A－上層
122	9.6	5.3	2.0	158.72	1635	D－159
123	6.9	5.8	2.0	115.41	0674	B－上層
124	9.0	3.7	3.2	131.09	0913	B－ベルト下層
125	6.0	4.2	1.8	75.72	0043	A－20
126	6.6	5.8	1.9	86.46	1837	D－最下層
127	7.0	5.0	2.3	112.82	0680	B－上層
128	7.0	4.8	2.6	109.55	1102	C－187
129	10.4	8.9	2.3	327.16	0671	B－上層
130	9.5	4.7	2.3	122.58	1933	D－ベルト下層
131	6.2	3.8	3.2	121.24	1298	C－ベルト下層
132	5.7	5.0	1.4	50.81	1301	C－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
133	8.2	6.3	1.4	113.77	0320	A－ベルト下層
134	6.0	5.5	1.7	86.28	1394	C－下層
135	4.4	4.5	1.6	50.32	1043	C－43
136	5.9	4.3	2.8	108.62	0402	A－下層
137	6.3	4.9	1.6	77.05	1711	D－上層
138	6.1	5.9	2.3	103.37	0242	A－上層
139	7.3	5.4	1.7	98.97	1076	C－179
140	8.7	8.9	2.3	275.22	1259	C－ベルト上層
141	8.4	7.0	2.0	159.54	1388	C－下層
142	10.4	5.9	2.6	215.18	0050	A－45
143	6.3	5.7	2.7	103.66	1881	D－ベルト下層
144	6.9	6.2	3.2	169.05	1538	D－95
145	5.7	4.6	3.1	120.54	1913	D－ベルト下層
146	6.0	5.3	1.6	79.35	0705	B－上層
147	6.1	4.3	3.3	136.24	1252	C－ベルト上層
148	6.1	4.4	2.4	93.46	0481	B－209
149	7.2	4.7	1.5	75.50	1899	D－ベルト下層
150	5.8	3.6	2.0	58.55	0700	B－上層
151	6.7	5.3	2.0	88.11	1548	D－74
152	6.6	4.6	3.4	130.00	1352	C－下層
153	6.6	3.8	2.3	90.28	2061	D－ベルト下層
154	10.8	6.0	3.1	298.16	0697	B－上層
155	9.0	6.3	3.3	243.00	0657	B－上層
156	8.4	5.0	2.3	155.66	2049	D－ベルト下層
157	8.8	6.3	2.1	160.30	0252	A－上層
158	8.5	3.6	2.2	105.04	0087	A－116
159	7.2	6.3	2.6	177.40	1829	D－最下層
160	8.3	6.0	3.0	190.42	1698	D－上層
161	9.0	4.8	2.9	182.00	1132	C－下層
162	7.8	8.2	2.2	223.22	0771	B－下層
163	10.2	14.8	3.2	831.14	0889	B－ベルト下層
164	7.9	8.9	3.0	257.42	1023	C－15
165	8.4	9.2	3.9	397.75	0852	B－ベルト下層
166	7.5	9.1	3.0	276.03	0153	A－190
167	7.4	5.9	3.0	198.48	1133	C－下層
168	7.2	5.8	2.3	125.50	1765	D－下層
169	8.9	5.6	2.1	135.49	0446	B－59
170	6.5	5.8	2.5	140.34	0344	A－ベルト下層
171	11.5	11.6	3.7	752.83	0922	B－ベルト最下層
172	8.8	5.3	2.5	170.82	0318	A－ベルト下層
173	4.2	3.0	2.1	37.52	1916	D－ベルト下層
174	6.3	4.5	2.7	93.01	1697	D－上層
175	8.9	7.4	2.5	262.87	0983	C－133
176	10.8	7.2	2.4	281.69	0195	A－上層
177	7.6	7.0	3.3	187.95	0095	A－108
178	7.8	5.2	2.8	188.47	2006	D－ベルト下層
179	8.8	7.2	2.2	190.41	1433	C－最下層

第４表　巻第二 譬喩品第三 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.8	7.9	2.6	442.27	1866	D－ベルト下層
2	11.1	9.2	3.8	462.88	1427	C－最下層
3	12.9	9.0	2.7	395.35	0404	A－最下層
4	12.4	7.1	2.8	338.64	0514	B－199
5	7.3	6.0	1.5	98.00	2040	D－ベルト下層
6	7.0	4.4	1.3	52.84	0159	A－167
7	6.0	5.0	2.6	102.63	0559	B－121
8	8.1	6.6	1.9	132.63	1629	D－133
9	9.4	6.7	2.3	201.45	1088	C－155
10	8.4	5.9	3.0	199.49	0688	B－上層
11	6.1	3.7	2.5	80.21	1070	C－163
12	7.3	3.6	2.1	75.47	0597	B－30
13	6.6	6.0	2.3	130.96	0212	A－下層
14	8.5	5.2	1.9	138.69	0667	B－上層
15	7.0	5.1	2.6	149.68	1397	C－下層
16	7.7	6.3	3.0	182.62	0539	B－4
17	7.4	5.9	2.1	132.48	0535	B－21
18	8.4	4.3	2.4	146.32	1217	C－上層
19	10.2	5.9	3.1	272.31	0445	B－55
20	6.4	5.4	2.8	128.72	1997	D－ベルト下層
21	7.7	6.8	1.5	117.65	0305	A－ベルト下層
22	6.4	4.9	1.5	70.18	0664	B－上層
23	6.6	3.7	1.5	59.81	0586	B－29
24	7.8	4.8	1.5	77.69	1814	D－最下層
25	8.5	6.0	2.2	154.15	0489	B－189
26	7.2	5.8	1.4	93.11	0284	A－ベルト上層
27	5.9	5.1	2.2	93.10	1190	C－上層
28	6.4	3.7	1.7	54.56	0612	B－79
29	6.6	4.8	1.9	73.52	1760	D－下層
30	7.5	4.8	2.6	124.93	1449	C－最下層
31	3.9	3.9	2.1	47.61	1231	C－上層
32	7.4	4.7	1.9	71.72	0147	A－150
33	7.0	4.8	2.2	97.60	0174	A－上層
34	5.6	5.8	3.0	130.70	0722	B－ベルト上層
35	7.9	6.9	2.6	228.72	0806	B－下層
36	9.2	5.2	2.1	145.02	0630	B－上層
37	7.8	7.5	1.8	151.22	1649	D－上層
38	8.0	5.1	2.3	115.70	0689	B－上層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
39	13.1	8.4	3.2	528.91	1540	D－38
40	7.6	6.1	2.0	134.59	1745	D－ベルト上層
41	12.2	9.1	4.5	747.46	0567	B－82
42	6.5	6.4	2.5	168.86	1647	D－上層
43	7.9	5.5	2.3	150.33	0506	B－182
44	14.7	9.8	3.1	677.90	0949	C－54
45	10.8	7.9	2.0	286.55	1445	C－最下層
46	13.1	11.0	2.3	558.88	1558	D－103
47	13.0	9.3	2.4	378.00	0266	A－上層
48	8.7	7.3	3.0	286.83	0035	A－73
49	8.4	6.6	3.6	269.74	1145	C－上層
50	9.3	5.7	2.5	156.47	1353	C－下層
51	6.2	4.6	2.5	84.42	0605	B－51
52	7.0	4.6	2.6	119.87	0187	A－上層
53	11.1	6.5	3.1	347.52	1033	C－26
54	7.8	6.3	2.4	162.77	1790	D－最下層
55	6.7	5.1	1.9	96.85	1709	D－上層
56	6.1	3.3	2.0	62.28	1707	D－上層
57	10.2	7.4	1.9	177.34	0164	A－172
58	7.5	5.2	2.3	125.90	0591	B－77
59	6.7	5.7	2.6	156.54	0847	B－ベルト下層
60	9.6	9.2	3.0	424.41	1501	D－106
61	10.4	6.4	2.1	195.18	1758	D－下層
62	9.6	5.8	2.9	250.20	736	B－ベルト上層
63	11.5	5.0	3.7	335.38	1948	D－ベルト下層
64	9.8	8.6	4.2	421.88	0101	A－131
65	9.8	6.2	2.6	238.06	1437	C－最下層
66	10.5	5.6	3.3	274.12	0880	B－ベルト下層
67	4.4	4.0	1.3	33.41	1838	D－最下層
68	6.8	5.5	1.5	85.34	0896	B－ベルト下層
69	8.3	5.8	2.7	180.54	0678	B－上層
70	7.5	6.3	1.5	106.74	0992	C－69
71	6.3	4.6	1.4	53.18	1702	D－上層
72	9.4	7.0	3.0	293.51	0935	B－ベルト最下層
73	10.2	9.3	2.4	350.66	1632	D－137
74	10.4	5.2	4.3	300.76	1624	D－127
75	8.4	6.2	3.1	239.37	0025	A－103
76	9.9	6.8	2.5	240.81	1506	D－113
77	10.0	8.5	2.2	295.11	0058	A－4
78	11.6	10.5	3.2	664.53	1489	D－63
79	9.9	9.4	2.2	281.57	2021	D－ベルト下層
80	12.2	11.8	2.6	585.11	0950	C－97
81	12.4	8.1	2.5	423.39	0152	A－146
82	10.7	9.8	2.8	518.54	0633	B－上層
83	13.2	10.8	3.5	768.55	0945	C－84
84	13.5	10.7	3.2	744.11	1596	D－142

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
85	11.8	8.4	2.9	405.17	0194	A－上層
86	12.0	8.7	2.8	447.24	1063	C－142
87	10.3	9.8	1.9	326.97	0545	B－41
88	9.4	7.1	2.5	259.06	0274	A－ベルト上層
89	12.2	8.3	2.4	399.79	1363	C－下層
90	9.4	6.9	1.9	184.29	1751	D－下層
91	8.4	10.1	2.6	310.56	0142	A－168
92	13.0	7.5	2.6	375.58	0772	B－下層
93	13.4	12.0	3.6	767.92	0422	A－2
94	11.8	9.0	3.1	493.26	0218	A－下層
95	12.4	10.7	4.3	723.78	1553	D－78
96	10.8	10.5	2.9	525.44	1325	C－ベルト下層
97	13.8	9.1	2.5	399.18	0469	B－137
98	11.0	8.0	2.6	304.09	0549	B－117
99	12.1	10.7	3.5	618.11	1984	D－ベルト下層
100	11.3	9.5	2.5	451.15	1561	D－115
101	9.5	7.4	3.2	281.40	1283	C－ベルト上層
102	12.3	6.5	3.5	468.98	0238	A－上層
103	11.0	8.4	2.9	402.85	0341	A－ベルト下層
104	10.3	7.8	1.9	239.85	0192	A－上層
105	10.3	10.0	3.0	387.57	0131	A－123
106	9.3	8.1	2.5	275.53	1329	C－ベルト下層
107	10.2	9.6	3.1	434.35	0114	A－113
108	9.4	10.6	2.6	457.46	0330	A－ベルト下層
109	9.9	9.4	2.4	348.45	0714	B－ベルト上層
110	8.2	4.4	1.8	99.60	2034	D－ベルト下層
111	7.3	11.0	2.3	257.53	1499	D－104
112	8.2	9.7	2.1	234.88	0327	A－ベルト下層
113	7.9	6.0	2.3	165.19	1171	C－上層
114	8.0	6.3	1.8	140.24	1053	C－60
115	9.2	4.7	2.6	170.94	0875	B－ベルト下層
116	10.5	6.9	2.7	273.99	0012	A－72
117	10.0	8.0	2.2	262.20	0165	A－161
118	8.6	7.4	2.1	187.16	1425	C－最下層
119	9.6	6.9	3.7	317.13	1168	C－上層
120	8.0	5.9	1.8	109.83	0693	B－上層
121	9.3	7.0	2.6	235.53	1391	C－下層
122	7.8	5.3	2.2	125.37	0907	B－ベルト下層
123	8.2	7.3	2.2	190.35	0677	B－上層
124	8.6	10.7	2.6	330.76	0782	B－下層
125	8.0	7.9	1.8	164.69	0711	B－ベルト上層
126	8.9	7.3	2.8	286.51	1345	C－ベルト下層
127	7.4	5.1	2.0	107.14	1725	D－ベルト上層
128	6.9	6.5	3.0	176.55	0447	B－25
129	6.7	6.2	3.0	178.73	1271	C－ベルト上層
130	11.0	6.9	2.6	292.93	0660	B－上層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
131	11.2	7.9	2.3	284.11	0413	A－137
132	6.6	6.1	2.4	133.61	1625	D－128
133	10.6	7.1	1.4	145.87	1275	C－ベルト上層
134	6.7	5.2	2.0	89.73	0456	B－58
135	6.5	4.6	1.3	69.74	0220	A－下層
136	9.0	5.7	2.3	171.72	0224	A－上層
137	9.2	8.6	2.7	313.34	1840	D－最下層
138	6.8	5.4	2.0	123.98	0618	B－9
139	8.2	6.6	2.2	161.40	0410	A－最下層
140	8.9	6.7	1.9	178.76	0753	B－下層
141	7.9	9.5	2.4	286.12	0910	B－ベルト下層
142	9.7	6.7	2.5	225.35	1726	D－ベルト上層
143	9.1	11.6	3.1	489.80	0768	B－下層
144	9.6	5.7	1.8	157.16	1261	C－ベルト上層
145	7.2	5.9	1.8	117.39	1717	D－ベルト上層
146	7.2	6.7	2.1	144.59	0264	A－上層
147	7.8	7.7	3.0	225.16	0054	A－75
148	6.5	4.8	1.5	79.90	1974	D－ベルト下層
149	10.1	6.6	3.1	304.43	1616	D－119
150	6.2	5.5	3.2	144.14	0706	B－上層
151	7.0	5.9	1.8	99.51	1161	C－上層
152	8.1	6.3	2.1	150.07	1476	D－57
153	8.4	5.6	1.7	114.82	0182	A－上層
154	6.7	4.2	1.8	72.32	1315	C－ベルト下層
155	8.2	5.1	2.3	149.60	0776	B－下層
156	7.2	9.1	2.1	207.73	2000	D－ベルト下層
157	6.2	5.4	1.9	79.36	0774	B－下層
158	8.9	4.6	2.4	129.71	0826	B－下層
159	7.9	6.1	1.6	113.13	0644	B－上層
160	7.0	6.1	1.9	105.37	1050	C－52
161	9.3	12.0	1.8	272.22	1858	D－ベルト下層
162	10.5	6.5	2.6	249.08	0406	A－最下層
163	6.8	7.4	1.9	105.03	1293	C－ベルト下層
164	9.6	7.6	2.9	261.73	1956	D－ベルト下層
165	10.0	6.6	2.2	207.94	1980	D－ベルト下層
166	8.7	6.0	2.0	156.45	0645	B－上層
167	8.9	6.0	2.3	164.03	0276	A－ベルト上層
168	5.0	4.6	1.1	39.26	1366	C－下層
169	6.3	4.2	2.1	83.44	1220	C－上層
170	12.0	6.2	1.9	207.29	0543	B－10
171	11.7	6.9	3.3	370.28	0511	B－175
172	7.2	3.6	3.4	138.54	1400	C－下層
173	9.8	6.8	2.5	254.77	1800	D－最下層
174	8.3	8.4	2.5	253.86	1546	D－71

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
175	6.5	4.1	2.2	83.21	0388	A－下層
176	10.6	8.9	2.8	416.70	1685	D－上層
177	7.8	5.9	2.2	155.71	1757	D－下層
178	6.9	3.8	1.6	56.21	1057	C－92
179	6.5	5.4	2.8	138.10	0399	A－下層
180	7.2	5.9	2.4	148.69	0280	A－ベルト上層
181	5.5	4.7	1.8	65.41	2004	D－ベルト下層
182	6.3	3.7	1.7	54.17	0293	A－ベルト上層
183	7.7	9.9	1.7	169.50	1402	C－下層
184	7.4	9.4	2.7	307.88	0176	A－上層
185	10.2	5.4	2.6	213.75	1112	C－171
186	10.9	7.6	2.8	311.54	0349	A－下層
187	9.1	5.4	2.8	170.45	1821	D－最下層
188	10.2	6.2	2.0	178.27	1185	C－上層
189	8.4	7.7	2.2	193.43	1669	D－上層
190	6.2	6.6	1.4	72.49	0530	B－5
191	8.9	5.9	1.9	129.34	1429	C－最下層
192	8.5	6.4	1.7	152.22	0458	B－139
193	7.9	9.4	3.5	354.69	0724	B－ベルト上層
194	7.9	6.4	2.2	140.93	1188	C－上層
195	8.1	11.7	3.3	385.31	1733	D－ベルト上層
196	6.7	5.1	1.4	67.60	0061	A－12
197	5.4	5.0	1.1	44.04	1696	D－上層
198	7.2	4.3	2.0	86.16	1798	D－最下層
199	5.8	5.8	1.4	75.07	0904	B－ベルト下層
200	5.4	5.3	2.3	84.03	1536	D－51
201	7.3	9.0	2.5	278.91	1470	D－47
202	8.5	6.1	2.6	137.11	1633	D－138
203	7.8	5.8	4.8	263.17	0260	A－上層
204	5.1	4.0	1.7	48.67	0783	B－下層
205	7.1	10.4	3.1	284.46	0382	A－下層
206	7.4	6.1	2.3	129.06	1979	D－ベルト下層
207	9.3	6.5	2.4	238.24	1603	D－149
208	10.8	8.7	2.3	238.54	0626	B－上層
209	8.9	6.3	2.4	205.42	0827	B－下層
210	6.7	4.3	1.3	56.54	0144	A－180
211	11.3	5.5	2.1	225.98	2029	D－ベルト下層
212	10.2	7.3	2.6	272.44	0083	A－107
213	6.9	5.2	1.6	86.36	1820	D－最下層
214	9.9	10.6	2.7	413.09	0919	B－ベルト最下層
215	8.1	6.4	2.5	181.75	0430	B－27
216	7.9	5.2	2.2	127.10	0692	B－上層
217	13.9	6.6	2.8	408.58	0319	A－ベルト下層

第５表　巻第二 信解品第四 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	7.9	6.2	2.4	177.50	1764	D－下層
2	9.3	6.0	3.6	267.38	1680	D－上層
3	9.3	8.1	3.4	426.79	1656	D－上層
4	7.1	5.8	3.1	191.59	2059	D－ベルト下層
5	7.4	5.8	2.6	161.08	1883	D－ベルト下層
6	8.7	5.6	2.6	218.97	1671	D－上層
7	9.0	6.5	3.5	291.49	1155	C－上層
8	7.5	6.1	1.8	137.40	1255	C－ベルト上層
9	8.6	5.1	2.8	154.33	1230	C－上層
10	7.0	6.1	2.3	142.92	1849	D－下層
11	9.7	6.0	3.3	267.23	1875	D－ベルト下層
12	8.0	6.3	1.9	150.06	0654	B－上層
13	9.7	8.0	3.5	421.51	0199	A－下層
14	6.8	4.5	1.3	52.36	0214	A－下層
15	6.6	5.7	2.1	116.72	1922	D－ベルト下層
16	5.0	4.4	2.6	78.43	1915	D－ベルト下層
17	6.1	4.1	2.6	93.73	1848	D－下層
18	6.5	4.7	1.6	71.42	1477	D－58
19	8.0	6.1	2.5	173.81	1699	D－上層
20	19.1	14.7	4.3	1751.80	1728	D－ベルト上層
21	8.5	6.1	1.9	136.58	0786	B－下層
22	10.9	6.7	2.2	252.80	1302	C－ベルト下層
23	12.0	8.6	3.2	473.00	1982	D－ベルト下層
24	10.8	8.6	2.7	415.52	1456	D－2
25	10.5	8.2	2.3	274.72	0484	B－197
26	11.0	6.4	2.3	261.13	1375	C－下層
27	10.5	8.8	2.5	331.91	0831	B－ベルト最下層
28	8.3	6.6	3.3	248.59	0203	A－下層
29	10.8	10.2	3.0	405.69	0298	A－ベルト下層
30	11.6	11.0	2.4	418.68	1068	C－160
31	9.4	7.9	2.7	319.93	1943	D－ベルト下層
32	9.6	8.7	2.4	302.47	0996	C－73
33	9.5	7.3	2.0	234.27	2032	D－ベルト下層
34	9.9	6.7	2.1	225.61	0607	B－66
35	10.6	8.2	2.3	290.05	1591	D－191
36	9.3	6.3	3.0	247.72	1313	C－ベルト下層
37	9.1	6.6	2.7	209.99	0691	B－上層
38	12.7	11.0	3.1	652.96	0047	A－30
39	11.3	10.4	2.3	456.08	2031	D－ベルト下層
40	15.2	10.1	2.5	545.67	0529	B－8
41	11.7	9.6	2.8	453.95	0072	A－17
42	12.2	10.2	3.3	607.07	0092	A－109
43	12.1	9.4	3.0	467.99	0683	B－上層
44	10.3	10.8	3.0	521.40	1644	D－上層
45	7.8	9.8	2.5	253.81	1059	C－110
46	9.4	10.8	2.5	335.76	0323	A－ベルト下層
47	7.5	9.9	1.6	166.84	0646	B－上層
48	7.9	10.7	3.0	372.26	1016	C－112
49	8.5	11.1	2.2	316.61	0465	B－177
50	9.3	9.1	2.5	341.71	0269	A－上層
51	7.5	4.3	1.8	97.37	1073	C－166
52	7.5	5.7	2.2	135.22	1543	D－69
53	7.6	5.6	2.7	163.79	1985	D－ベルト下層
54	8.8	6.2	2.1	167.74	1785	D－最下層
55	9.2	6.5	2.3	181.59	0733	B－ベルト上層
56	8.9	5.6	1.8	134.43	0761	B－下層
57	8.6	6.7	2.3	212.47	0836	B－ベルト最下層
58	7.4	7.1	1.8	131.77	1229	C－上層
59	9.0	5.9	2.5	175.80	1148	C－上層
60	8.1	7.8	2.1	170.77	0215	A－下層
61	7.9	5.9	1.6	99.97	0876	B－ベルト下層
62	7.3	6.5	2.6	162.61	1232	C－上層
63	8.6	5.1	2.0	139.78	2017	D－ベルト下層
64	10.4	7.0	1.8	171.63	0994	C－71
65	5.9	5.8	1.2	73.59	1147	C－上層
66	8.9	7.1	2.3	213.62	0686	B－上層
67	6.7	4.0	2.1	83.16	0837	B－ベルト最下層
68	6.9	7.8	2.6	195.53	1519	D－21
69	8.4	12.8	3.4	536.18	0082	A－111
70	7.2	9.5	3.3	349.82	1801	D－最下層
71	6.7	9.2	3.8	355.54	1872	D－ベルト下層
72	6.4	8.8	3.3	239.14	1071	C－164
73	6.3	8.3	2.6	174.60	1960	D－ベルト下層
74	13.5	6.2	2.1	237.68	0267	A－上層
75	8.2	5.5	2.5	176.59	0977	C－120
76	7.3	5.1	1.6	82.00	1199	C－上層
77	8.7	11.7	3.2	435.66	0448	B－133
78	11.4	9.7	2.7	497.15	1490	D－64

第６表　巻第三 藥草喩品第五 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	10.8	6.9	2.4	302.75	1417	C－上層
2	13.1	7.7	3.1	448.09	0117	A－182
3	11.6	8.2	2.5	334.89	2062	D－ベルト下層
4	10.4	6.3	3.1	280.56	0542	B－13
5	12.3	6.1	2.6	292.39	0065	A－9
6	9.2	5.6	3.0	274.60	1689	D－上層
7	8.9	7.3	1.9	218.99	0256	A－上層
8	11.4	9.1	2.5	297.92	1734	D－ベルト上層
9	10.0	6.6	3.2	327.28	1667	D－上層
10	10.3	5.8	4.7	433.32	2018	D－ベルト下層
11	10.2	7.3	1.9	196.26	1662	D－上層
12	15.6	11.8	3.5	1091.05	0862	B－ベルト下層
13	11.2	9.0	2.2	323.67	0861	B－ベルト下層
14	6.0	5.5	1.6	76.57	1861	D－ベルト下層
15	12.2	10.8	3.6	730.29	1488	D－62
16	10.1	16.4	4.5	1075.30	1583	D－177
17	7.6	11.3	2.1	245.55	1514	D－9
18	10.5	7.2	2.4	246.45	0272	A－上層
19	6.9	6.4	1.9	90.92	0532	B－15
20	8.5	6.5	1.9	159.62	0668	B－上層
21	6.7	10.3	2.6	252.94	1086	C－154
22	7.5	6.4	2.0	123.45	1721	D－ベルト上層
23	7.6	9.9	2.6	240.19	0765	B－下層
24	12.8	6.1	3.6	399.46	0824	B－下層
25	12.5	4.8	2.3	219.41	1469	D－45
26	5.6	5.4	1.5	69.74	0363	A－下層
27	6.6	8.5	1.7	145.58	1208	C－上層
28	7.7	11.6	2.1	275.03	0893	B－ベルト下層
29	7.6	6.5	2.4	157.92	1393	C－下層
30	6.4	5.8	2.2	113.38	1509	D－3
31	8.2	6.8	1.9	171.07	1808	D－最下層
32	7.0	5.5	1.9	113.89	0749	B－下層
33	7.0	11.5	2.6	301.22	0641	B－上層
34	7.7	5.3	2.3	127.24	1362	C－下層
35	6.6	4.5	1.5	73.20	0282	A－ベルト上層

第７表　巻第三 授記品第六 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	7.0	5.8	2.8	152.45	0365	A－下層
2	6.0	6.2	1.7	90.46	1081	C－193
3	9.1	7.5	3.1	277.76	0405	A－最下層
4	7.6	5.2	2.0	123.77	1143	C－下層
5	9.0	7.2	2.6	277.87	1712	D－上層
6	12.0	8.1	2.9	399.89	1770	D－下層
7	8.7	7.1	2.3	219.53	0729	B－ベルト上層
8	9.2	6.8	2.3	207.48	0048	A－55
9	10.8	5.9	3.3	323.69	0440	B－122
10	9.7	9.4	2.5	351.14	0175	A－上層
11	11.7	7.2	2.9	381.78	0637	B－上層
12	7.7	8.2	2.5	253.23	1753	D－下層
13	8.6	12.1	2.4	353.67	0136	A－49
14	9.3	5.7	1.9	163.60	0210	A－下層
15	9.1	7.2	2.4	245.47	1584	D－180
16	10.8	7.6	2.7	334.14	0204	A－下層
17	12.7	9.2	3.2	585.46	0613	B－80
18	11.3	8.8	3.1	516.50	0031	A－67
19	15.7	12.6	2.9	749.32	0975	C－118
20	12.5	8.9	3.0	484.96	0290	A－ベルト上層
21	7.6	7.5	2.0	186.03	0162	A－158
22	9.1	10.1	2.6	339.56	0672	B－上層
23	11.1	10.3	3.8	556.74	1636	D－上層
24	10.4	7.7	2.1	226.94	0169	A－157
25	11.3	7.5	2.9	343.76	0423	A－135
26	8.8	8.2	1.8	187.60	1674	D－上層
27	10.1	17.2	3.9	1023.88	0219	A－下層
28	8.9	6.6	3.0	268.72	0366	A－下層
29	8.5	6.2	3.5	262.59	0487	B－190
30	8.7	5.8	2.5	198.37	1527	D－34
31	10.9	9.2	3.2	495.10	0351	A－下層
32	14.8	7.9	4.0	703.04	2016	D－ベルト下層
33	11.3	9.1	4.1	627.53	0616	B－98
34	8.8	11.4	3.6	483.14	1738	D－ベルト上層
35	10.1	7.5	2.7	290.36	2023	D－ベルト下層
36	8.5	7.5	2.0	217.42	0635	B－上層
37	8.3	6.5	3.1	235.90	0989	C－61
*38	7.3	6.1	2.4	152.21	1239	C－上層

*第七No.2と同一

第８表　巻第三 化城喩品第七 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	7.6	4.9	3.5	179.74	0303	A－ベルト下層
*2	7.3	6.1	2.4	152.21	1239	C－上層
3	10.7	8.3	2.9	373.63	0408	A－最下層
4	10.4	8.8	3.3	401.57	1192	C－上層
5	11.7	7.5	3.1	395.43	0921	B－ベルト最下層
6	10.1	9.7	3.4	533.26	0086	A－112
7	8.1	7.4	2.3	221.95	0250	A－上層
8	6.7	4.1	2.1	94.13	1250	C－ベルト上層
9	8.8	6.3	2.7	201.19	1813	D－最下層
10	8.8	9.7	2.1	298.98	1998	D－ベルト下層
11	9.7	7.5	3.1	339.53	1650	D－上層
12	9.4	11.6	2.7	440.74	1213	C－上層
13	12.0	9.9	3.4	549.45	1747	D－ベルト上層
14	11.0	7.4	2.1	255.65	1944	D－ベルト下層
15	11.3	7.2	3.0	336.04	0547	B－134
16	9.8	11.3	4.2	695.95	0135	A－151
17	8.7	9.2	2.7	363.77	0309	A－ベルト下層
18	8.3	8.8	3.1	329.45	0338	A－ベルト下層
19	11.0	9.6	3.3	461.54	0923	B－ベルト最下層
20	10.6	8.1	2.6	305.79	0383	A－下層
21	9.9	7.8	3.2	363.46	0687	B－上層
22	9.6	8.1	3.3	427.22	1012	C－96
23	9.4	5.9	3.5	284.40	2008	D－ベルト下層
24	9.9	6.3	3.1	277.94	0453	B－194
25	9.8	6.9	2.5	242.16	1096	C－176
26	9.2	5.5	3.6	246.60	0145	A－166
27	9.1	7.2	2.7	213.54	0883	B－ベルト下層
28	9.3	9.1	1.9	256.06	0778	B－下層
29	8.8	7.5	2.9	304.52	1852	D－下層
30	7.9	5.0	2.9	154.88	0391	A－下層
31	10.2	6.7	2.5	255.80	1599	D－145
32	13.3	7.4	3.6	520.06	0223	A－上層
33	10.8	8.8	2.5	317.60	1864	D－ベルト下層
34	11.4	7.1	2.5	311.51	0740	B－下層
35	11.1	7.7	2.9	355.75	1666	D－上層
36	6.8	6.8	2.2	159.91	1869	D－ベルト下層
37	13.4	6.7	3.4	444.33	1763	D－下層
38	8.2	6.9	2.5	221.32	0582	B－91
39	9.9	5.2	2.3	177.63	0470	B－176
40	7.0	5.7	1.8	102.63	0734	B－ベルト上層
41	8.2	5.3	1.9	121.87	1901	D－ベルト下層
42	10.0	6.4	1.9	184.99	1064	C－145
43	7.5	5.3	1.4	90.80	1772	D－下層
44	6.8	4.7	1.5	73.90	1900	D－ベルト下層
45	7.1	6.5	1.8	124.30	1575	D－169

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
46	11.1	8.4	3.2	439.05	1628	D－131
47	17.2	10.0	4.6	1116.02	1280	C－ベルト上層
48	17.7	13.4	3.9	1179.78	1464	D－30
49	7.3	5.9	2.1	118.53	1152	C－上層
50	7.8	5.1	1.2	73.62	0254	A－上層
51	7.1	4.2	2.2	91.36	0866	B－ベルト下層
52	9.8	7.4	2.1	203.87	0522	B－179
53	8.5	6.2	2.0	144.26	1193	C－上層
54	6.2	4.5	1.7	79.93	0213	A－下層
55	13.9	8.9	4.2	747.31	1780	D－最下層
56	11.1	12.3	2.6	497.41	0340	A－ベルト下層
57	11.8	9.9	4.0	605.87	0961	C－124
58	9.5	10.4	3.0	419.85	1510	D－4
59	9.5	6.5	2.7	221.84	0980	C－130
60	11.9	7.4	4.5	559.06	0764	B－下層
61	10.2	6.1	2.4	203.59	0409	A－最下層
62	10.9	6.6	3.6	354.18	0892	B－ベルト下層
63	10.3	8.8	2.7	341.59	0070	A－10
64	10.9	6.8	5.8	581.29	0555	B－123
65	11.7	9.5	2.4	385.60	0655	B－上層
66	6.6	5.9	1.6	82.98	1411	C－下層
67	10.4	5.3	3.2	280.69	0521	B－174
68	7.8	6.6	2.5	207.26	0755	B－下層
69	10.2	8.0	2.4	306.27	0118	A－197
70	7.0	6.5	2.3	173.15	1019	C－11
71	10.2	7.0	2.8	268.21	1516	D－16
72	8.1	7.3	3.0	236.91	1011	C－95
73	7.4	5.8	3.0	182.09	1039	C－36
74	6.9	5.6	2.7	166.21	0173	A－193
75	9.4	6.6	1.8	156.21	0756	B－下層
76	7.1	6.0	2.9	202.25	0094	A－115
77	7.3	5.9	2.2	146.08	0393	A－下層
78	7.3	5.1	3.1	169.41	1954	D－ベルト下層
79	9.2	7.2	3.0	279.16	1672	D－上層
80	7.3	5.2	1.9	105.65	1868	D－ベルト下層
81	8.0	4.5	2.5	105.22	1331	C－ベルト下層
82	10.2	5.5	3.4	273.31	0716	B－ベルト上層
83	8.0	7.1	2.6	238.40	1967	D－ベルト下層
84	8.3	6.3	2.6	198.59	0593	B－147
85	10.7	7.3	3.2	336.30	1867	D－ベルト下層
86	11.7	6.1	4.6	474.70	1340	C－ベルト下層
87	8.6	4.7	2.5	118.37	1549	D－75
88	11.3	9.0	3.6	574.95	0091	A－122
89	12.2	8.1	2.1	342.95	1075	C－174
90	10.5	10.1	2.7	383.23	0006	A－36

*第六No.38と同一

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
91	10.2	8.4	2.4	277.76	0610	B－75
92	9.9	8.4	3.1	314.04	1694	D－上層
93	11.5	7.3	2.9	373.05	0741	B－下層
94	8.1	6.8	2.7	224.52	0817	B－下層
95	9.2	7.1	3.4	262.92	1486	D－60
96	11.1	8.4	2.9	372.40	0149	A－149
97	11.7	7.6	2.6	338.85	1421	C－最下層
98	11.7	8.9	2.7	357.89	1184	C－上層
99	9.0	8.1	2.5	303.06	1761	D－下層
100	10.3	7.2	2.3	233.87	0833	B－ベルト最下層
101	7.9	7.0	3.1	272.75	0306	A－ベルト下層
102	9.2	5.7	2.2	181.03	1281	C－ベルト上層
103	10.6	6.1	3.1	275.11	1095	C－175
104	7.9	7.5	2.3	207.26	0414	A－136
105	9.8	6.2	3.4	249.84	1962	D－ベルト下層
106	8.6	7.2	3.1	287.97	1700	D－上層
107	12.5	8.6	2.8	472.28	0679	B－上層
108	11.2	10.2	3.7	628.63	1436	C－最下層
109	8.2	8.1	2.8	301.32	1146	C－上層
110	10.6	8.6	3.1	443.64	0283	A－ベルト上層
111	10.5	9.2	2.5	404.28	1262	C－ベルト上層
112	11.4	8.9	2.4	306.33	1277	C－ベルト上層
113	10.8	8.6	3.7	476.27	1871	D－ベルト下層
114	12.6	5.4	3.2	338.26	0572	B－37
115	10.2	6.0	2.5	210.82	0878	B－ベルト下層
116	8.8	7.5	3.5	285.83	1361	C－下層
117	8.3	6.8	1.9	198.50	1195	C－上層
118	8.0	6.0	2.4	150.12	1020	C－12
119	8.3	6.0	2.2	154.35	1346	C－ベルト下層
120	8.7	7.5	2.1	228.84	0720	B－ベルト上層
121	10.2	8.8	2.7	342.57	1203	C－上層
122	8.9	7.0	2.6	196.50	1356	C－下層
123	8.5	6.1	1.8	119.13	1806	D－最下層
124	6.0	5.3	2.1	94.39	1310	C－ベルト下層
125	8.6	5.9	2.2	144.55	1137	C－下層
126	8.5	6.1	1.5	106.51	1309	C－ベルト下層
127	8.4	6.4	2.9	225.52	0053	A－90
128	7.7	5.0	1.9	101.31	1263	C－ベルト上層
129	6.5	5.7	1.2	65.33	1688	D－上層
130	15.2	6.4	3.5	499.73	1341	C－ベルト下層
131	8.2	5.7	3.6	270.62	1167	C－上層
132	14.7	8.0	4.0	563.38	1908	D－ベルト下層
133	8.9	7.0	2.5	216.92	1056	C－56
134	11.5	6.8	2.5	275.07	1996	D－ベルト下層
135	11.5	5.7	2.6	297.18	1969	D－ベルト下層
136	12.6	5.6	3.9	420.57	1951	D－ベルト下層
137	9.9	7.6	2.4	289.20	1786	D－最下層
138	9.1	7.4	2.8	250.58	1374	C－下層
139	9.7	6.6	2.1	191.84	1048	C－50
140	8.5	6.3	2.5	174.62	1196	C－上層
141	6.6	5.3	3.5	175.90	1389	C－下層
142	12.1	7.1	3.2	372.70	0339	A－ベルト下層
143	6.4	5.7	2.7	123.36	0884	B－ベルト下層
144	5.4	4.7	1.4	58.26	1703	D－上層
145	9.7	5.7	2.3	190.47	1216	C－上層
146	13.4	8.2	3.3	510.51	1854	D－下層
147	8.4	5.8	3.5	250.26	1169	C－上層
148	7.1	6.0	2.6	180.24	1390	C－下層
149	7.7	6.1	1.6	114.97	1973	D－ベルト下層
150	12.8	7.1	4.1	510.44	1581	D－175
151	8.4	7.2	3.0	262.82	0386	A－下層
152	8.2	7.9	3.0	272.68	1410	C－下層
153	7.4	6.6	3.4	230.78	1265	C－ベルト上層
154	8.0	4.5	1.8	85.50	1511	D－5
155	6.3	5.9	2.3	129.45	1863	D－ベルト下層
156	7.6	11.7	3.0	447.46	0432	B－53
157	9.5	11.8	3.2	534.41	0154	A－170
158	9.4	7.3	2.1	187.94	1024	C－16
159	11.3	7.7	2.2	240.82	1550	D－190
160	7.3	6.6	1.9	159.75	1270	C－ベルト上層
161	9.6	5.4	3.5	277.23	1937	D－ベルト下層
162	7.7	8.8	2.3	276.52	1894	D－ベルト下層
163	8.7	6.0	2.8	224.55	1233	C－上層
164	7.6	6.1	2.8	191.72	0997	C－74
165	6.2	5.8	2.9	155.64	0603	B－45
166	8.9	7.2	3.0	298.46	1031	C－24
167	9.8	8.0	1.9	211.25	1212	C－上層
168	9.3	6.2	1.9	153.62	1248	C－ベルト上層
169	9.1	6.2	2.6	211.05	0670	B－上層
170	9.9	6.9	2.3	233.61	2026	D－ベルト下層
171	8.5	10.0	2.5	284.79	0244	A－上層
172	8.7	6.9	2.4	210.25	1186	C－上層
173	8.0	6.9	2.7	199.46	1873	D－ベルト下層
174	7.0	5.2	2.1	99.26	1269	C－ベルト上層
175	6.8	5.6	2.6	136.63	0914	B－ベルト下層
176	6.4	5.3	2.3	116.93	0574	B－35
177	8.7	4.2	2.1	101.40	0564	B－52
178	7.5	5.3	1.9	109.68	1856	D－下層
179	6.7	4.3	1.9	76.63	0796	B－下層
180	14.7	7.5	3.1	538.17	1555	D－80

第９表　巻第四 五百弟子受記品第八 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	11.8	10.3	3.0	558.30	0718	B－ベルト上層
2	15.8	10.8	4.2	986.87	0059	A－48
3	8.9	9.3	3.5	484.39	1423	C－最下層
4	9.1	9.0	2.5	333.31	0138	A－177
5	13.0	12.0	4.0	862.31	1463	D－26
6	17.0	9.3	3.1	734.29	0963	C－82
7	12.2	8.6	4.0	603.83	2024	D－ベルト下層
8	17.6	9.2	5.1	1480.76	0915	B－ベルト最下層
9	13.5	10.6	2.6	570.36	0331	A－ベルト下層
10	13.1	14.2	4.1	1150.40	0126	A－50
11	9.8	8.5	2.7	335.60	1839	D－最下層
12	8.5	13.5	1.9	296.57	1164	C－上層
13	8.9	11.1	3.5	494.65	0196	A－上層
14	7.2	8.0	3.1	269.20	1334	C－ベルト下層
15	11.2	12.4	2.9	608.81	0976	C－119
16	8.4	5.2	1.8	123.85	0988	C－58
17	8.8	5.4	1.9	126.73	1378	C－下層
18	6.8	6.2	2.8	155.71	0314	A－ベルト下層
19	9.6	10.7	2.5	380.32	1387	C－下層
20	10.7	14.7	3.3	591.83	1083	C－143
21	9.6	12.4	4.2	755.78	0956	C－114
22	11.3	6.5	2.2	205.37	1360	C－下層
23	10.9	6.3	2.4	270.61	1621	D－124
24	10.2	6.9	2.5	245.47	0354	A－下層
25	15.1	12.4	3.4	880.63	1975	D－ベルト下層
26	11.7	6.6	2.4	268.00	1223	C－上層
27	11.9	8.6	2.9	448.39	1097	C－177
28	9.6	7.8	2.6	310.33	1783	D－最下層
29	10.2	8.8	4.1	549.38	0500	B－158
30	9.9	6.2	1.7	158.40	1021	C－13
31	10.1	10.8	1.8	331.79	1870	D－ベルト下層
32	12.5	10.0	3.8	736.58	0120	A－118
33	13.0	16.1	3.5	961.61	1462	D－23
34	15.1	17.2	3.7	1551.36	0137	A－110
35	9.6	10.0	1.7	261.00	0863	B－ベルト下層
36	12.2	9.5	2.2	404.32	1114	C－195
37	13.5	10.7	4.8	1056.69	1521	D－24
38	16.8	13.5	3.1	993.78	1544	D－66
39	11.0	15.9	4.2	1295.02	1128	C－144
40	12.4	11.7	3.0	604.62	0444	B－62
41	10.5	14.5	3.6	793.52	1518	D－20
42	10.4	14.7	2.6	693.26	1991	D－ベルト下層

第 10 表　巻第四 授學無學人記品第九 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	14.4	13.1	3.8	1073.60	0097	A－134
2	14.7	9.7	3.1	726.86	1566	D－189
3	10.8	9.7	3.0	506.83	0420	A－142
4	9.6	7.3	1.8	195.85	0064	A－14
5	20.2	14.3	4.6	1843.91	1087	C－156
6	13.8	9.4	3.5	685.75	0074	A－27
7	13.5	10.8	2.7	607.99	2002	D－ベルト下層
8	11.3	15.2	3.1	740.34	0540	B－2
9	19.2	10.7	5.7	1780.47	0477	B－128
10	12.2	11.8	3.2	693.92	0780	B－下層
11	14.4	13.6	4.3	1153.27	0951	C－98
12	14.2	8.1	3.5	500.35	2056	D－ベルト下層
13	13.8	11.7	2.6	724.55	1125	C－181
14	13.3	8.8	3.5	611.85	1557	D－94
15	8.2	6.3	2.3	173.24	0874	B－ベルト下層
16	11.2	10.5	3.3	620.63	1877	D－ベルト下層
17	10.4	9.5	2.4	368.24	0556	B－108
18	11.5	8.1	4.0	536.93	0568	B－93
19	10.0	6.6	3.6	329.48	0328	A－ベルト下層
20	9.6	8.3	2.5	248.71	1435	C－最下層
21	9.8	7.9	3.5	402.55	1779	D－最下層
22	9.6	7.5	2.7	314.38	0599	B－36
23	12.0	10.1	3.0	478.56	2037	D－ベルト下層
24	10.6	7.4	3.1	300.37	0986	C－47

第 11 表　巻第四 法師品第十 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.5	12.5	2.9	644.03	1018	C－5
2	12.7	11.8	3.2	690.60	1116	C－190
3	12.9	7.2	4.5	642.46	1663	D－上層
4	13.8	11.0	3.2	693.59	1242	C－ベルト上層
5	11.6	10.4	4.5	768.54	0960	C－123
6	11.5	9.0	2.8	469.73	0454	B－157
7	10.1	7.3	3.7	364.46	0940	C－7
8	12.1	8.9	2.1	354.04	0016	A－93
9	9.2	10.0	2.0	249.02	0942	C－9
10	14.7	11.7	3.3	810.51	0842	B－ベルト下層
11	10.2	9.4	3.4	491.89	0255	A－上層
12	11.8	9.4	2.4	390.62	1708	D－上層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
13	10.4	7.3	2.8	311.37	0088	A－79
14	9.3	7.7	2.5	272.01	0428	B－87
15	11.7	7.5	2.8	359.38	1504	D－110
16	7.4	7.0	1.7	144.75	0803	B－下層
17	8.5	4.8	2.2	119.18	0908	B－ベルト下層
18	12.1	6.1	3.5	368.73	1183	C－上層
19	9.3	6.8	2.7	253.09	0123	A－187
20	8.6	8.6	2.6	296.18	1631	D－135
21	7.8	7.0	2.1	165.95	0371	A－下層
22	10.9	7.4	3.3	370.62	0435	B－81
23	11.7	7.3	1.7	213.08	1382	C－下層
24	9.9	9.5	4.0	460.92	0815	B－下層
25	12.4	7.8	4.6	610.11	0105	A－126
26	7.6	6.8	1.6	121.16	1807	D－最下層
27	9.0	6.6	2.3	229.67	0209	A－下層
28	10.8	8.7	2.6	341.00	1160	C－上層
29	11.0	7.7	2.7	336.03	1887	D－ベルト下層
30	10.8	9.0	2.5	389.71	1176	C－上層
31	11.5	9.2	3.0	522.38	1654	D－上層
32	12.0	7.6	4.0	584.66	2045	D－ベルト下層
33	10.8	10.9	3.8	571.47	0526	B－156
34	10.9	8.7	2.9	344.73	1977	D－ベルト下層
35	8.1	7.8	2.1	213.23	0497	B－206
36	12.8	10.0	5.6	973.60	0433	B－125
37	15.0	10.4	4.2	959.90	0201	A－下層
38	10.8	7.9	3.4	495.59	0030	A－52
39	9.0	8.1	1.7	161.01	1938	D－ベルト下層
40	13.0	7.8	2.8	401.46	0417	A－140
41	8.5	5.2	2.9	195.10	1090	C－158
42	10.0	9.0	3.1	435.27	0860	B－ベルト下層
43	9.6	7.6	1.9	193.28	0938	C－3
44	9.1	7.9	2.6	240.72	0329	A－ベルト下層
45	7.7	6.0	3.0	209.48	0007	A－96
46	7.0	5.5	2.5	139.62	0930	B－ベルト最下層
47	13.2	9.4	3.8	750.67	1918	D－ベルト下層
48	17.3	10.5	3.9	999.78	1664	D－上層
49	10.3	8.3	3.2	410.88	0939	C－4
50	11.3	8.2	2.3	291.70	0685	B－上層
51	10.0	6.6	3.3	316.55	1379	C－下層
52	7.9	6.9	2.3	174.31	1055	C－42
53	8.5	6.5	3.3	220.20	0385	A－下層
54	11.5	8.7	3.1	408.14	0598	B－34
55	9.1	8.9	2.9	329.12	1735	D－ベルト上層
56	7.8	6.8	2.7	228.84	0750	B－下層
57	7.2	6.9	1.7	124.30	0628	B－上層
58	9.6	5.7	2.0	165.66	1819	D－最下層
59	8.0	7.9	3.0	242.88	1032	C－25
60	7.4	5.0	2.1	98.71	0985	C－38
61	6.9	6.4	1.6	120.59	1451	C－最下層
62	8.0	6.0	1.8	120.50	1103	C－32
63	6.3	4.7	2.6	99.92	1404	C－下層
64	7.7	5.4	2.4	139.15	1170	C－上層
65	8.6	8.1	2.9	262.42	1153	C－上層
66	8.5	6.7	2.5	205.09	0675	B－上層
67	7.3	5.8	2.9	152.01	0682	B－上層
68	10.7	6.5	3.0	293.46	1079	C－191
69	11.2	4.4	2.9	199.44	0838	B－ベルト最下層

第 12 表　巻第四 見寶塔品第十一 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	15.1	9.3	2.8	621.71	1475	D－58
2	12.3	9.6	2.9	502.18	1729	D－ベルト上層
3	10.6	6.2	3.4	336.09	1582	D－132
4	8.9	5.4	2.5	166.49	0561	B－107
5	11.3	6.1	2.3	203.10	0865	B－ベルト下層
6	8.8	7.3	2.1	203.65	0868	B－ベルト下層
7	8.7	7.6	2.1	200.16	0958	C－116
8	9.1	8.4	4.6	485.92	1909	D－ベルト下層
9	11.0	5.4	4.6	404.60	0206	A－下層
10	10.7	8.3	2.5	263.44	1502	D－107
11	8.9	7.9	3.6	322.42	1228	C－上層
12	10.0	7.6	3.6	325.46	0197	A－上層
13	11.5	9.1	2.9	446.04	1816	D－最下層
14	13.5	8.8	3.5	469.62	0810	B－下層
15	6.5	6.0	2.6	138.39	0425	B－14
16	16.4	11.6	3.4	1004.52	0918	B－ベルト最下層
17	16.4	8.0	3.6	582.92	0948	C－53
18	12.9	5.6	4.1	443.13	0205	A－下層
19	8.9	6.8	2.7	240.63	1792	D－最下層
20	10.3	7.3	3.5	326.63	0669	B－上層
21	12.2	10.8	4.2	797.44	0699	B－上層
22	11.8	7.7	2.9	354.67	2052	D－ベルト下層
23	9.3	7.4	3.1	274.09	0653	B－上層
24	11.4	8.4	1.7	205.00	1936	D－ベルト下層
25	9.1	7.7	2.8	287.03	0037	A－68
26	15.0	8.1	2.4	401.51	0666	B－上層
27	12.3	9.2	3.5	493.49	0140	A－162
28	10.0	7.9	3.1	300.06	1835	D－最下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
29	8.2	8.1	1.2	137.24	0482	B－145
30	9.4	8.6	2.6	287.41	1258	C－ベルト上層
31	9.3	5.7	1.8	172.25	1946	D－ベルト下層
32	10.0	6.4	2.3	183.36	0879	B－ベルト下層
33	8.7	6.1	2.5	159.80	1246	C－ベルト上層
34	6.5	6.6	1.6	94.01	1626	D－129
35	4.9	4.9	1.5	36.16	1903	D－ベルト下層
36	9.1	7.0	3.1	275.75	1383	C－下層
37	7.5	5.4	2.1	128.84	0534	B－18
38	8.5	5.7	2.1	138.74	0931	B－ベルト最下層
39	9.9	6.7	3.9	345.70	2015	D－ベルト下層
40	11.5	5.3	2.1	207.74	0557	B－126
41	7.6	7.3	3.4	267.79	1439	C－最下層
42	9.7	8.2	2.7	309.03	1306	C－ベルト下層
43	9.0	7.8	2.2	229.88	0080	A－121
44	10.6	5.1	3.2	251.25	0759	B－下層
45	8.4	6.1	2.5	186.74	1968	D－ベルト下層
46	11.6	8.7	2.8	369.26	1347	C－下層
47	7.5	6.2	2.2	149.57	1305	C－ベルト下層
48	8.8	5.8	2.7	219.91	0207	A－下層
49	10.2	8.3	2.0	255.91	2013	D－ベルト下層
50	9.2	7.6	2.2	268.16	1051	C－57
51	10.9	6.1	1.9	194.24	0787	B－下層
52	8.3	7.9	2.6	234.77	0066	A－13
53	8.8	6.2	2.9	239.84	1710	D－上層
54	11.8	6.8	4.4	408.06	1683	D－上層
55	9.6	6.1	3.4	268.33	1348	C－下層
56	8.3	5.7	2.0	143.48	0397	A－下層
57	7.3	5.6	2.2	136.76	0360	A－下層
58	8.5	7.0	2.6	228.29	1373	C－下層
59	7.7	6.7	2.5	137.49	1189	C－上層
60	8.2	5.3	2.7	93.91	1422	C－最下層
61	8.0	6.6	2.3	176.94	0805	B－下層
62	8.7	5.2	2.7	181.02	0505	B－162
63	8.3	6.6	3.1	230.84	1513	D－8
64	8.2	6.8	2.9	208.69	1824	D－最下層
65	9.8	7.7	2.5	289.22	1993	D－ベルト下層
66	9.2	6.6	2.5	214.33	0611	B－78
67	9.7	7.3	2.7	250.73	0742	B－下層
68	8.3	11.4	2.7	415.33	1100	C－183
69	8.4	7.2	3.7	302.12	0060	A－11
70	8.4	6.1	2.8	227.87	1377	C－下層
71	9.2	6.2	3.0	232.15	0999	C－76
72	8.3	6.6	2.8	210.55	1080	C－192
73	6.8	4.6	1.4	61.78	0479	B－143
74	8.6	8.7	3.0	305.57	0193	A－上層
75	7.2	5.9	1.9	103.99	0181	A－上層
76	8.1	6.5	2.3	187.59	0732	B－ベルト上層
77	8.4	7.2	2.3	192.30	1597	D－143
78	8.2	6.1	2.5	182.11	1235	C－上層
79	7.9	5.7	2.3	153.00	1752	D－下層
80	8.2	6.5	2.9	218.07	1620	D－123
81	7.0	5.2	1.4	71.56	1637	D－上層
82	7.3	5.7	2.6	143.92	1949	D－ベルト下層
83	7.5	5.5	2.0	125.88	1474	D－54
84	6.2	4.4	2.8	108.28	0230	A－上層
85	7.2	4.3	2.1	88.90	0191	A－上層
86	6.7	5.6	1.2	66.27	1791	D－最下層
87	8.4	5.6	2.0	139.28	1308	C－ベルト下層
88	6.5	6.2	1.3	88.99	0233	A－上層
89	7.6	6.4	1.8	135.56	1069	C－162
90	7.6	3.9	2.7	100.28	1157	C－上層
91	7.1	4.5	2.3	93.19	0508	B－192
92	7.4	5.5	3.3	207.59	1930	D－ベルト下層
93	7.8	5.0	3.8	217.46	1534	D－48
94	9.7	6.5	2.9	260.58	2053	D－ベルト下層

第 13 表　巻第五 提婆達多品第十二 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	16.8	8.1	3.7	800.97	1468	D－37
2	15.7	13.8	4.2	1410.44	1118	C－85
3	15.7	15.2	3.7	1100.95	0978	C－121
4	20.8	16.3	4.3	1817.67	1119	C－105
5	14.3	12.0	4.2	854.39	1569	D－163
6	10.9	10.4	3.5	609.35	0291	A－ベルト上層
7	13.7	8.0	2.9	500.25	1768	D－下層
8	13.2	11.8	3.1	712.70	0839	B－ベルト最下層
9	13.1	13.2	3.4	889.08	0125	A－164
10	16.4	9.8	4.2	1026.88	0491	B－155
11	15.0	11.4	2.6	700.56	1323	C－ベルト下層
12	13.6	10.7	4.3	896.69	0460	B－201
13	13.4	11.0	4.0	948.96	2047	D－ベルト下層
14	9.8	14.4	3.6	684.16	0790	B－下層
15	12.2	10.5	3.3	662.86	1442	C－最下層
16	15.5	9.9	4.0	784.75	1917	D－ベルト下層
17	15.6	12.2	2.7	851.70	0051	A－124
18	9.4	11.1	2.4	407.57	0888	B－ベルト下層
19	15.6	10.9	3.0	790.69	0492	B－187
20	12.7	9.6	4.9	829.26	0055	A－32
21	10.6	9.9	2.9	435.92	0068	A－22
22	15.3	11.8	2.7	759.90	1507	D－114

第 14 表　巻第五 勸持品第十三 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	13.3	9.0	2.5	464.33	0979	C－128
2	16.8	12.5	5.2	1685.52	0294	A－ベルト下層
3	14.0	8.3	2.5	441.50	1793	D－最下層
4	11.9	9.2	4.2	802.45	1537	D－56
5	15.8	8.7	3.7	764.20	0490	B－160
6	14.5	10.6	4.0	858.33	0443	B－140
7	13.6	9.6	3.2	571.88	0857	B－ベルト下層
8	12.6	9.8	2.6	534.02	1326	C－ベルト下層
9	13.2	11.2	3.2	684.74	0779	B－下層
10	11.6	9.7	4.5	730.10	1522	D－25
11	14.7	9.7	3.5	744.32	1526	D－31
12	12.3	12.2	5.4	1102.06	1126	C－189
13	12.9	9.8	3.6	583.72	1892	D－ベルト下層
14	8.5	12.8	3.4	575.61	0525	B－193
15	8.6	7.0	2.9	288.32	2022	D－ベルト下層
16	9.3	8.9	4.6	518.88	1339	C－ベルト下層
17	9.1	9.3	2.1	287.10	1817	D－最下層
18	8.3	12.8	2.4	311.23	0811	B－下層
19	9.0	9.3	3.1	415.54	1737	D－ベルト上層
20	8.2	11.8	3.9	492.36	1727	D－ベルト上層
21	12.9	7.7	2.9	372.13	0372	A－下層
22	7.3	4.2	2.0	92.42	1268	C－ベルト上層

第 15 表　巻第五 安樂行品第十四 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	11.1	9.4	3.3	566.63	0592	B－146
2	13.3	12.0	2.7	714.24	0895	B－ベルト下層
3	11.7	9.5	2.2	326.39	1272	C－ベルト上層
4	9.2	7.4	3.0	323.97	1386	C－下層
5	11.5	9.3	2.8	482.33	0467	B－142
6	9.5	10.3	3.1	429.05	0010	A－86
7	10.3	7.4	2.8	295.15	1180	C－上層
8	9.8	8.3	1.9	234.25	1589	D－187
9	13.3	8.9	4.2	559.18	0901	B－ベルト下層
10	11.5	10.6	3.6	592.12	0903	B－ベルト下層
11	10.9	10.0	3.4	539.50	0814	B－下層
12	10.8	8.3	3.2	438.15	1139	C－下層
13	10.3	7.3	3.4	434.97	0661	B－上層
14	7.7	8.5	2.5	241.47	1412	C－下層
15	7.9	11.1	4.0	544.43	1782	D－最下層
16	10.7	7.7	2.7	274.65	0885	B－ベルト下層
17	8.6	6.3	1.9	166.43	1904	D－ベルト下層
18	9.9	7.5	3.3	309.32	1273	C－ベルト上層
19	11.0	8.8	3.6	405.34	0141	A－154
20	8.6	12.2	3.5	508.88	0077	A－117
21	7.6	7.0	2.3	189.48	0673	B－上層
22	8.6	7.0	1.9	171.53	1027	C－19
23	9.7	6.7	3.1	320.53	1392	C－下層
24	8.3	6.4	3.3	247.51	0346	A－ベルト下層
25	7.1	5.4	2.4	127.02	0763	B－下層
26	7.8	5.5	2.1	131.83	0507	B－167
27	10.0	8.9	2.7	380.80	0544	B－19
28	7.1	6.0	2.7	141.74	1121	C－137
29	11.7	7.5	2.3	283.28	0843	B－ベルト下層
30	11.1	7.9	3.3	383.91	0310	A－ベルト下層
31	8.0	7.9	3.0	282.20	0407	A－最下層
32	13.5	7.7	2.8	414.31	2038	D－ベルト下層
33	10.9	9.5	3.7	480.55	0551	B－141
34	12.2	8.1	2.2	296.47	1295	C－ベルト下層
35	10.7	5.8	1.6	144.88	2042	D－ベルト下層
36	7.1	8.8	1.6	168.98	1209	C－上層
37	6.6	5.7	1.7	101.30	1836	D－最下層
38	8.3	10.4	2.0	261.24	0991	C－63
39	9.3	7.2	3.6	365.91	0643	B－上層
40	7.3	10.8	2.8	309.71	1416	C－上層
41	8.1	8.0	2.3	267.61	1266	C－ベルト上層
42	8.4	10.1	3.3	366.60	1253	C－ベルト上層
43	11.5	8.1	3.5	486.07	1983	D－ベルト下層
44	10.8	7.5	2.6	320.54	1014	C－108
45	13.2	8.3	2.8	446.07	0819	B－下層
46	11.0	6.9	2.4	206.29	2020	D－ベルト下層
47	11.8	10.4	3.1	497.13	0353	A－下層
48	11.7	8.0	4.3	617.33	0133	A－82
49	8.0	6.2	2.6	195.17	0439	B－85
50	7.7	10.8	3.0	372.31	1457	D－7
51	8.3	13.6	5.3	809.37	1274	C－ベルト上層
52	6.6	5.2	1.6	82.53	0873	B－ベルト下層
53	8.5	6.1	2.3	175.49	2055	D－ベルト下層
54	7.1	6.4	2.2	130.66	1925	D－ベルト下層
55	11.2	8.7	3.6	516.42	0812	B－下層
56	8.6	6.3	2.1	169.24	0243	A－上層
57	12.9	6.7	2.4	304.13	1957	D－ベルト下層
58	8.7	4.6	2.1	132.24	1403	C－下層
59	9.8	9.1	2.4	316.14	0855	B－ベルト下層
60	10.1	7.0	2.8	307.26	1579	D－173
61	9.4	5.5	2.2	160.71	0849	B－ベルト下層
62	9.5	6.6	2.4	192.02	0608	B－67

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
63	12.0	6.9	2.9	347.91	1010	C－94
64	8.2	6.9	2.4	148.06	1906	D－ベルト下層
65	7.9	5.3	2.8	175.08	0802	B－下層
66	7.3	7.9	2.6	241.44	0032	A－40
67	7.1	6.8	2.9	217.10	1520	D－22
68	10.7	9.9	3.0	495.46	0289	A－ベルト上層
69	8.8	5.6	2.1	149.03	0027	A－53
70	11.8	7.8	2.8	414.54	1218	C－上層
71	10.5	8.6	5.1	649.88	1559	D－108
72	10.9	7.8	3.4	420.54	1857	D－ベルト下層
73	11.0	9.9	3.1	474.00	0424	A－139
74	10.7	8.5	2.9	393.62	1238	C－上層
75	9.0	7.6	2.3	257.62	0442	B－90
76	11.8	9.4	3.5	506.12	0579	B－76
77	11.7	7.1	2.9	342.72	0004	A－23
78	6.7	6.1	2.1	131.92	0480	B－210
79	6.6	4.8	2.4	117.85	0062	A－5
80	6.9	4.4	2.5	78.38	1251	C－ベルト上層
81	7.4	5.7	2.1	122.03	0515	B－165
82	5.7	4.9	2.8	98.23	0232	A－上層
83	6.5	5.2	3.0	130.46	0619	B－100
84	6.0	7.3	1.7	111.12	1038	C－35
85	5.8	8.2	2.8	200.98	1343	C－ベルト下層
86	7.0	4.6	1.7	87.57	0725	B－ベルト上層
87	7.5	4.8	2.8	161.82	0362	A－下層
88	6.0	5.4	2.6	117.02	0253	A－上層
89	6.2	5.6	1.8	98.65	0268	A－上層
90	7.4	5.7	2.6	135.20	0461	B－211
91	5.8	5.8	3.7	161.30	0390	A－下層
92	9.5	5.4	1.8	125.23	1368	C－下層
93	7.6	4.3	1.7	82.61	1749	D－ベルト上層
94	9.5	4.3	3.1	171.81	0183	A－上層
95	6.0	5.1	1.1	57.12	1426	C－最下層
96	6.9	5.6	2.0	118.00	2054	D－ベルト下層
97	4.6	3.3	1.8	37.96	0872	B－ベルト下層
98	7.6	4.0	1.4	71.72	1061	C－139
99	8.2	5.8	2.2	171.51	1739	D－ベルト上層
100	6.7	6.9	3.4	230.67	0848	B－ベルト下層
101	10.4	6.7	3.7	369.28	1953	D－ベルト下層
102	9.1	6.2	2.8	250.81	0457	B－86
103	8.4	6.7	2.3	196.27	0609	B－73
104	11.2	5.6	2.3	206.29	0455	B－57
105	9.2	6.4	2.6	212.28	1929	D－ベルト下層
106	12.4	8.0	4.5	592.89	0563	B－138
107	11.2	6.1	2.3	222.93	0015	A－69
108	9.5	8.0	4.3	538.22	0468	B－83

第 16 表　巻第五 従地涌出品第十五 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.2	11.0	4.9	1041.70	0577	B－69
2	10.9	7.5	2.5	290.35	0550	B－124
3	11.7	7.1	2.8	377.60	0437	B－26
4	12.1	8.9	3.2	492.22	1567	D－161
5	18.9	9.9	4.4	1246.43	1862	D－ベルト下層
6	11.5	8.1	3.1	434.29	0044	A－70
7	12.4	7.2	3.1	430.39	0858	B－ベルト下層
8	9.7	9.1	2.4	357.82	1743	D－ベルト上層
9	10.3	5.5	2.3	198.07	0098	A－66
10	9.3	10.0	4.0	547.99	0321	A－ベルト下層
11	14.8	8.1	4.1	704.38	1886	D－ベルト下層
12	10.4	8.3	2.3	301.14	0288	A－ベルト上層
13	11.9	9.5	4.2	669.20	0829	B－ベルト最下層
14	10.7	8.2	3.1	393.53	0292	A－ベルト上層
15	10.8	8.0	2.7	347.17	0081	A－85
16	9.4	7.8	2.9	322.37	1691	D－上層
17	9.7	7.0	3.7	359.14	0171	A－153
18	9.8	6.3	3.8	269.59	0702	B－上層
19	9.2	7.6	3.7	331.68	1833	D－最下層
20	12.7	6.8	2.3	310.38	1888	D－ベルト下層
21	8.7	8.3	2.3	231.03	0816	B－下層
22	10.8	7.3	4.1	446.87	0606	B－65
23	10.7	7.1	3.5	400.39	0952	C－100
24	11.4	7.0	3.3	352.25	0301	A－ベルト下層
25	8.6	8.2	3.3	322.15	1769	D－下層
26	8.1	5.6	1.8	123.12	0993	C－70
27	7.2	7.4	1.9	154.09	1364	C－下層
28	8.7	6.5	2.5	185.04	0009	A－60
29	6.7	5.5	2.3	118.27	1003	C－80
30	6.6	6.1	3.6	198.24	1742	D－ベルト上層
31	8.1	5.5	2.2	140.66	1007	C－89
32	6.6	4.7	2.2	102.94	1756	D－下層
33	7.0	5.6	3.2	146.58	1085	C－150
34	8.3	8.8	1.9	213.02	1178	C－上層
35	9.7	6.7	2.5	235.58	1318	C－ベルト下層
36	7.7	5.1	2.5	145.96	1111	C－170
37	6.0	5.4	1.9	99.78	0478	B－109
38	9.4	6.3	3.0	240.85	0389	A－下層
39	8.8	8.3	3.3	362.11	1573	D－167
40	8.7	7.2	1.9	186.50	1927	D－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
41	7.9	6.8	1.9	151.34	0538	B－20
42	10.1	6.3	3.1	302.04	1568	D－162
43	10.0	6.1	1.9	173.49	1910	D－ベルト下層
44	11.2	8.4	3.4	421.48	1653	D－上層
45	10.1	7.1	3.0	271.29	1211	C－上層
46	10.5	7.0	3.0	390.68	1588	D－186
47	9.7	7.0	3.4	338.19	1545	D－70
48	10.7	8.6	5.1	645.49	0853	B－ベルト下層
49	8.4	7.1	2.5	208.53	1676	D－上層
50	8.1	5.1	3.0	174.04	1017	C－1
51	10.1	6.7	4.6	391.70	0079	A－83
52	11.5	8.3	2.7	346.13	1515	D－13
53	7.8	6.8	3.4	257.87	0380	A－下層
54	8.2	8.7	2.3	241.32	0246	A－上層
55	10.4	8.5	2.0	213.18	1395	C－下層
56	7.5	6.6	2.8	201.67	1342	C－ベルト下層
57	7.8	6.7	3.0	220.17	1154	C－上層
58	10.0	6.9	1.7	166.33	0485	B－166
59	10.4	7.7	2.3	242.17	1443	C－最下層
60	8.2	7.3	2.5	220.38	1376	C－下層
61	8.1	7.4	3.0	234.97	1401	C－下層
62	8.4	7.2	3.6	307.13	1026	C－18
63	9.4	5.8	2.1	156.99	0846	B－ベルト下層
64	9.5	7.0	2.4	217.89	0560	B－106
65	8.9	5.9	2.1	170.61	1182	C－上層
66	10.2	7.0	3.9	418.44	0392	A－下層
67	7.0	6.5	2.3	157.47	1285	C－ベルト上層
68	8.6	6.4	2.6	185.93	1187	C－上層
69	7.9	7.4	3.3	259.85	1646	D－上層
70	8.8	5.0	2.7	188.99	1226	C－上層
71	15.1	7.3	5.2	818.84	1243	D－1（注記C－ベルト上層）
72	10.2	6.5	2.4	250.95	0475	B－23
73	7.1	7.5	2.4	186.97	0834	B－ベルト最下層
74	7.5	5.8	3.3	204.61	0565	B－61
75	9.6	6.5	2.1	200.08	0925	B－ベルト最下層
76	9.9	7.5	3.0	302.30	1787	D－最下層
77	7.4	6.4	2.8	196.96	0818	B－下層
78	8.0	6.7	2.8	221.03	0856	B－ベルト下層
79	7.0	7.1	2.2	177.81	0809	B－下層
80	12.2	8.0	2.1	298.30	1590	D－188
81	7.9	5.3	2.2	114.69	1335	C－ベルト下層
82	7.2	5.6	2.4	158.24	1034	C－27
83	7.5	7.6	3.5	248.72	0307	A－ベルト下層
84	9.6	9.2	3.0	356.23	1172	C－上層
85	8.2	8.2	3.8	386.00	1934	D－ベルト下層
86	8.5	5.9	2.3	156.89	0367	A－下層
87	6.6	6.2	1.6	106.37	0690	B－上層
88	8.4	7.2	1.9	162.74	1311	C－ベルト下層
89	9.5	6.5	2.7	253.81	0002	A－39
90	10.4	5.9	3.0	272.41	1535	D－49
91	9.7	7.1	2.8	271.38	0924	B－ベルト最下層
92	8.5	6.6	3.0	239.90	1630	D－134
93	8.3	8.1	3.8	363.28	0198	A－下層
94	9.1	5.4	3.2	210.44	0045	A－91

第 17 表　巻第六 如來壽量品第十六 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	22.7	7.7	4.9	1327.34	0099	A－97
2	15.1	9.6	3.5	745.08	1564	D－181
3	13.5	10.0	3.0	544.58	0594	B－148
4	9.6	8.2	3.2	396.62	1773	D－下層
5	10.8	9.3	4.1	611.67	0473	B－188
6	7.1	6.3	2.0	123.56	1920	D－ベルト下層
7	13.7	11.8	3.7	802.69	1560	D－112
8	15.9	10.3	3.1	840.77	0954	C－104
9	12.6	9.8	3.9	675.27	1267	C－ベルト上層
10	14.6	10.1	3.4	748.88	0119	A－184
11	12.3	8.0	2.8	356.79	1781	D－最下層
12	11.1	8.4	2.9	408.40	2035	D－ベルト下層
13	15.1	7.4	4.3	772.74	0710	B－ベルト上層
14	16.6	6.6	3.7	604.08	0946	C－65
15	16.1	9.8	2.7	701.30	1288	C－ベルト上層
16	12.9	10.4	2.7	520.99	1094	C－173
17	14.2	12.9	2.6	747.59	0108	A－38
18	12.7	8.0	2.5	366.31	0452	B－184
19	12.1	10.0	3.6	628.97	1532	D－44
20	10.7	10.2	4.0	714.41	0106	A－127
21	10.6	9.1	3.2	419.08	1874	D－ベルト下層
22	11.7	9.4	3.8	603.92	1718	D－ベルト上層
23	9.4	7.8	2.7	309.45	0322	A－ベルト下層
24	10.8	7.2	3.2	374.19	0684	B－上層
25	10.4	10.5	3.8	623.38	1117	C－125
26	8.2	6.1	1.7	130.65	0075	A－8
27	10.0	7.2	2.9	295.93	0533	B－3
28	9.6	6.7	2.5	223.00	0021	A－57
29	8.4	7.1	2.9	254.35	0057	A－6
30	8.5	9.8	2.6	347.35	1106	C－129
31	9.3	7.0	2.8	228.84	1480	D－84
32	9.0	7.1	2.7	273.13	1940	D－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
33	7.8	9.0	2.0	227.70	0279	A－ベルト上層
34	9.3	7.8	2.6	282.53	0190	A－上層
35	9.6	5.1	1.9	152.60	1304	C－ベルト下層
36	8.7	6.4	2.2	182.85	1381	C－下層
37	9.5	6.8	1.9	193.46	1542	D－40
38	8.2	6.7	2.6	222.29	1524	D－28

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
39	10.0	6.9	2.8	300.59	0023	A－19
40	8.0	5.9	2.6	196.25	1174	C－上層
41	10.0	6.7	2.3	226.49	1332	C－ベルト下層
42	8.6	7.5	3.3	340.77	1679	D－上層
43	10.7	6.9	3.0	313.14	1058	C－86
44	7.7	6.7	2.8	188.85	1205	D－上層

第 18 表　巻第六 分別功徳品第十七 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	14.2	10.9	3.1	774.30	1885	D－ベルト下層
2	12.8	7.8	3.5	479.22	1593	D－136
3	10.1	6.1	2.7	245.95	2011	D－ベルト下層
4	9.4	6.7	3.3	304.82	1606	D－152
5	9.2	8.0	3.7	395.39	1715	D－ベルト上層
6	11.3	6.8	2.6	315.65	0881	B－ベルト下層
7	8.6	6.5	2.5	220.44	1380	C－下層
8	10.3	8.5	2.2	304.26	1493	D－91
9	19.3	11.4	3.6	1257.67	2001	D－ベルト下層
10	11.6	8.4	4.6	594.49	1767	D－下層
11	18.2	12.6	3.5	1219.88	0316	A－ベルト下層
12	10.6	14.6	4.3	871.13	0864	B－ベルト下層
13	11.9	8.6	3.0	379.95	1682	D－上層
14	9.7	7.8	3.9	479.80	0953	C－103
15	10.2	9.3	2.9	410.41	0911	B－ベルト下層
16	11.2	11.0	4.2	363.32	0882	B－ベルト下層
17	10.2	12.5	3.0	562.81	1995	D－ベルト下層
18	9.3	14.0	3.7	725.59	1091	C－168
19	20.4	13.2	4.1	1698.97	0595	B－149
20	14.8	14.8	2.5	895.24	0546	B－72
21	15.8	13.6	4.1	1443.56	2012	D－ベルト下層
22	10.1	5.6	2.5	196.93	1291	C－ベルト下層
23	11.0	8.3	3.0	406.41	0003	A－24
24	6.9	6.1	1.8	122.82	0381	A－下層
25	9.0	5.9	2.6	186.82	0431	B－88
26	7.6	4.6	2.1	119.48	0850	B－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
27	8.4	7.1	2.4	221.97	1850	D－下層
28	7.5	5.4	3.7	224.58	0304	A－ベルト下層
29	14.9	12.6	3.6	1060.80	1495	D－93
30	12.4	14.6	4.6	1299.26	0396	A－下層
31	10.5	6.5	2.9	300.61	1695	D－上層
32	9.1	5.9	2.9	235.49	1541	D－39
33	17.4	13.1	3.5	1300.41	0841	B－ベルト下層
34	12.4	10.7	3.1	607.15	2019	D－ベルト下層
35	13.5	11.1	3.4	745.89	0013	A－47
36	13.7	9.2	3.4	633.76	1503	D－109
37	10.0	9.2	2.8	410.12	0071	A－28
38	15.1	13.1	3.6	997.57	1491	D－77
39	12.4	9.5	3.5	692.52	1142	C－下層
40	10.2	8.3	3.0	390.32	0937	C－2
41	12.8	9.0	3.2	533.54	0299	A－ベルト下層
42	9.1	6.5	4.7	374.82	0789	B－下層
43	11.0	9.0	3.7	466.12	0973	C－113
44	9.6	7.5	2.5	287.57	1651	D－上層
45	9.5	7.4	3.5	329.16	0186	A－上層
46	9.9	16.9	3.9	878.85	0096	A－101
47	8.9	6.9	2.3	221.34	1776	D－下層
48	12.3	8.3	4.1	573.99	1321	C－ベルト下層
49	9.6	6.9	2.7	259.95	1681	D－上層
50	7.6	8.5	3.6	286.54	1046	C－46
51	9.1	8.5	2.3	277.02	0899	B－ベルト下層

第 19 表　巻第六 隨喜功徳品第十八 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.7	10.4	3.4	626.90	0200	A－下層
2	9.0	9.9	2.8	382.60	0270	A－上層
3	12.3	8.2	3.3	477.36	0770	B－下層
4	9.3	6.6	2.4	211.38	0504	B－183
5	11.3	9.9	2.3	351.96	0084	A－51
6	12.7	8.2	4.2	623.75	1732	D－ベルト上層
7	11.7	8.5	2.7	407.47	1122	C－147
8	14.3	9.6	3.1	742.04	0265	A－上層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
9	9.5	7.0	2.3	213.82	1690	D－上層
10	11.8	7.8	3.0	448.51	0964	C－6
11	17.7	7.7	6.0	1131.23	2003	D－ベルト下層
12	9.9	9.0	3.1	422.75	1673	D－上層
13	12.7	8.7	3.3	462.81	0112	A－129
14	17.2	7.3	4.2	802.39	0941	C－8
15	8.7	7.3	1.8	185.07	1502	D－148
16	9.8	6.5	3.7	339.65	0987	C－48

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
17	10.0	6.2	2.4	217.75	0379	A－下層
18	11.1	8.9	3.2	485.66	1748	D－ベルト上層
19	16.7	11.8	3.9	1195.59	0090	A－78
20	13.2	8.9	2.6	449.03	1841	D－最下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
21	14.1	8.0	2.2	422.27	2063	D－ベルト下層
22	9.1	6.2	2.4	218.68	0900	B－ベルト下層
23	9.5	7.7	1.8	207.97	1082	C－194
24	9.3	7.5	2.3	232.78	1613	D－160

第 20 表　巻第六 法師功徳品第十九 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	13.3	9.3	4.7	783.91	0575	B－74
2	11.0	7.9	3.2	404.72	1851	D－下層
3	9.2	5.8	3.2	265.68	0069	A－7
4	8.6	6.3	2.3	159.52	1668	D－上層
5	11.8	9.0	2.9	410.48	1455	D－32
6	11.2	7.3	2.0	257.06	0285	A－ベルト上層
7	8.7	8.1	4.2	395.93	1484	D－98
8	8.6	6.4	2.6	201.10	0156	A－159
9	8.9	8.0	2.5	260.69	1129	C－197
10	8.1	6.8	2.2	153.84	1907	D－ベルト下層
11	10.4	8.2	2.9	377.12	0917	B－ベルト最下層
12	9.6	7.2	2.3	240.73	1659	D－上層
13	9.1	8.8	1.9	226.00	1131	C－下層
14	11.8	7.5	2.9	381.40	1500	D－105
15	11.2	7.7	2.5	313.43	0548	B－119
16	10.1	9.1	2.5	338.51	1989	D－ベルト下層
17	11.1	8.7	1.9	268.85	1466	D－33
18	8.3	7.5	3.0	247.49	1123	C－149
19	9.1	6.1	2.6	205.85	1372	C－下層
20	9.1	6.6	2.4	224.65	0820	B－下層
21	8.2	7.1	2.2	192.66	0361	A－下層
22	9.8	6.5	2.2	223.26	0180	A－上層
23	7.9	6.8	1.8	151.64	0033	A－104
24	8.5	7.5	1.5	135.08	0364	A－下層
25	8.9	5.9	2.6	202.47	1022	C－14
26	8.2	6.5	2.6	224.51	1860	D－ベルト下層
27	6.7	5.2	1.7	91.81	1638	D－上層
28	10.1	6.9	2.1	200.15	0036	A－34
29	8.4	8.9	2.3	295.41	0017	A－95
30	11.3	8.3	2.4	346.26	0967	C－41
31	8.9	8.7	2.4	256.96	1622	D－125
32	9.0	7.4	2.9	252.71	0769	B－下層
33	10.3	7.9	1.8	215.03	0185	A－上層
34	10.6	9.1	2.6	373.27	1052	C－59
35	8.4	6.7	2.6	221.84	1778	D－下層
36	9.6	7.6	1.4	169.15	2048	D－ベルト下層
37	11.4	8.0	2.8	336.19	1101	C－185
38	8.0	6.3	1.5	123.24	0777	B－下層
39	8.5	6.4	1.7	129.13	1191	C－上層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
40	8.9	6.1	1.6	153.32	1005	C－87
41	10.3	9.2	2.0	260.81	1369	C－下層
42	6.8	6.1	1.4	90.60	1245	C－ベルト上層
43	9.9	8.1	2.6	317.63	0747	B－下層
44	8.8	8.1	2.7	306.35	1002	C－79
45	10.2	7.0	3.6	325.57	0228	A－上層
46	9.1	7.4	2.4	226.25	0049	A－43
47	9.5	7.5	3.4	333.84	0524	B－191
48	8.4	5.5	2.1	127.85	1797	D－最下層
49	9.8	6.1	2.1	199.19	0743	B－下層
50	9.5	7.5	2.3	253.93	1234	C－上層
51	8.7	7.3	2.2	193.33	0078	A－84
52	6.9	5.4	2.9	175.50	0100	A－18
53	9.9	7.3	2.7	228.80	0308	A－ベルト下層
54	7.7	6.5	2.0	144.64	1260	C－ベルト上層
55	9.2	7.1	2.2	207.06	1455	D－12
56	7.7	6.3	2.6	185.53	0073	A－46
57	8.0	6.0	2.1	137.91	0237	A－上層
58	7.1	6.7	2.4	147.87	0998	C－75
59	8.7	8.0	2.8	288.76	1215	C－上層
60	8.6	6.2	2.1	154.38	1294	C－ベルト下層
61	7.9	6.8	2.6	161.79	0110	A－102
62	7.0	5.9	1.2	68.32	0167	A－165
63	5.7	5.0	2.0	83.88	1952	D－ベルト下層
64	5.3	4.6	1.6	59.34	1670	D－上層
65	6.8	6.5	2.0	127.80	1775	D－下層
66	9.9	5.4	2.2	196.95	1179	C－上層
67	12.7	8.4	2.0	356.47	1531	D－43
68	9.7	9.1	3.1	392.47	0517	B－168
69	10.0	10.5	2.4	355.82	1000	C－77
70	8.9	6.5	2.8	221.86	0727	B－ベルト上層
71	8.8	5.8	3.0	244.83	1741	D－ベルト上層
72	11.4	10.9	3.1	648.05	0970	C－101
73	9.6	7.2	2.6	235.46	1460	D－19
74	6.4	4.1	1.6	61.22	1409	C－下層
75	7.4	6.9	1.7	158.14	1201	C－上層
76	8.3	5.6	1.8	104.99	1686	D－上層
77	7.4	6.4	2.6	182.06	1241	C－上層
78	8.4	7.7	3.0	270.51	1898	D－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
79	11.2	5.1	2.2	198.52	1891	D－ベルト下層
80	12.7	9.9	2.8	490.26	0286	A－ベルト上層
81	9.0	8.9	2.5	318.71	0527	B－170
82	8.2	6.4	1.9	150.80	0728	B－ベルト上層
83	8.7	11.2	2.6	384.00	1762	D－下層
84	10.3	7.3	2.1	250.45	1181	C－上層
85	10.1	7.0	1.8	190.56	1370	C－下層
86	10.0	6.0	2.7	250.47	0258	A－上層
87	8.6	8.6	2.3	262.19	1992	D－ベルト下層
88	9.3	7.4	2.1	219.59	0236	A－上層
89	9.2	7.3	3.1	285.74	1041	C－39

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
90	9.8	8.3	2.5	287.24	2027	D－ベルト下層
91	8.2	5.3	2.7	164.12	1731	D－ベルト上層
92	7.9	6.4	2.2	149.96	1072	C－165
93	6.0	5.8	1.8	98.58	0708	B－上層
94	7.5	9.9	2.4	256.15	0897	B－ベルト下層
95	9.4	7.9	3.6	357.88	1999	D－ベルト下層
96	8.7	8.0	2.6	262.16	1704	D－上層
97	9.5	6.3	2.0	179.68	1598	D－144
98	7.0	5.0	2.1	108.21	0990	C－62
99	9.2	5.1	2.1	132.48	2043	D－ベルト下層

第 21 表　巻第七 常不輕菩薩品第二十 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	15.4	8.3	3.2	559.29	0974	C－117
2	14.6	11.6	3.3	783.04	1467	D－36
3	13.5	8.3	3.3	512.90	1089	C－157
4	12.6	8.0	3.2	457.44	1508	D－101
5	16.7	13.8	3.3	1088.75	0089	A－119
6	12.4	9.2	3.1	496.24	1844	D－最下層
7	12.3	8.9	3.5	518.18	1719	D－ベルト上層
8	12.2	7.3	3.3	431.74	0226	A－上層
9	12.0	10.6	3.0	569.94	1828	D－最下層
10	9.5	8.7	2.3	322.47	0512	B－205
11	14.6	11.1	3.7	906.91	0104	A－100
12	11.8	6.9	2.4	302.27	0891	B－ベルト下層
13	13.0	9.9	2.2	402.07	1430	C－最下層
14	12.3	7.5	2.0	247.38	0703	B－上層
15	11.1	10.4	3.7	638.81	0178	A－上層
16	12.3	8.5	3.7	567.78	0523	B－159
17	12.8	6.9	3.4	453.37	1322	C－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
18	10.4	7.9	2.0	211.83	0955	C－31
19	11.5	7.0	3.5	375.59	0005	A－23
20	9.2	8.2	2.6	319.09	0569	B－120
21	14.1	11.0	3.3	729.80	0984	C－20
22	10.8	15.6	3.7	846.35	0018	A－44
23	9.9	13.2	2.9	560.68	0528	B－172
24	9.4	9.7	2.1	301.59	0573	B－70
25	8.0	6.2	1.8	128.74	1746	D－ベルト上層
26	9.5	7.8	2.6	234.80	0623	B－118
27	8.8	6.1	2.3	157.76	0665	B－上層
28	8.6	6.0	2.3	196.12	0713	B－ベルト上層
29	10.6	6.4	2.0	173.51	0313	A－ベルト下層
30	9.3	7.5	2.6	295.56	0359	A－下層
31	10.1	8.1	2.7	331.13	1487	D－61
32	10.3	8.1	3.0	359.27	0825	B－下層
33	6.9	5.6	1.8	97.66	1905	D－ベルト下層

第 22 表　巻第七 如來神力品第二十一 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	25.3	8.9	5.3	1832.18	0202	A－下層
2	14.6	9.5	4.1	873.52	0067	A－3
3	9.8	7.9	3.6	428.53	0571	B－33
4	7.5	6.8	2.1	163.00	1156	C－上層
5	11.4	8.4	2.6	340.32	0775	B－下層
6	10.6	8.0	4.2	526.56	2057	D－ベルト下層
7	12.6	10.7	2.7	604.46	1290	C－ベルト下層
8	10.4	9.4	3.6	491.12	0822	B－下層
9	14.3	11.3	4.3	1076.97	0962	C－126
10	14.1	10.9	4.6	1150.62	1454	D－116
11	14.5	10.2	3.7	781.84	0376	A－下層
12	9.8	8.1	2.9	311.38	1987	D－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
13	9.1	7.2	3.0	271.81	0211	A－下層
14	10.9	10.7	3.2	540.02	1319	C－ベルト下層
15	14.0	8.1	3.7	625.11	0300	A－ベルト下層
16	5.2	4.8	1.8	57.42	1202	C－上層
17	9.3	7.4	2.6	208.46	1158	C－上層
18	9.8	5.5	1.6	121.07	1036	C－33
19	6.8	4.9	1.8	95.54	0333	A－ベルト下層
20	7.8	6.9	2.9	228.00	1902	D－ベルト下層
21	8.7	7.0	2.5	218.37	1047	C－49
22	7.5	7.4	2.4	195.93	1941	D－ベルト下層
23	6.6	5.6	1.8	99.18	1049	C－51
24	10.0	6.7	3.1	304.36	1605	D－151

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
25	10.3	8.0	3.9	411.48	1278	C－ベルト上層
26	12.6	5.9	2.9	308.08	0957	C－115
27	8.0	6.9	2.6	188.50	0332	A－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
28	10.1	7.2	1.9	193.55	1029	C－22
29	11.2	8.2	3.5	397.16	1822	D－最下層

第 23 表　巻第七 囑累品第二十二 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	10.7	10.4	2.8	476.36	0859	B－ベルト下層
2	12.7	8.8	2.9	524.32	0011	A－64
3	9.5	9.5	3.5	478.11	1214	C－上層
4	12.4	7.8	2.6	399.40	1084	C－146
5	11.2	8.4	2.5	347.43	0636	B－上層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
6	10.3	8.3	3.7	362.29	0832	B－ベルト最下層
7	8.9	8.5	2.3	266.17	1110	C－153
8	10.7	9.8	2.8	500.94	0225	A－上層
9	11.8	10.8	4.1	747.07	0596	B－150
10	9.5	6.4	1.8	175.43	0631	B－上層

第 24 表　巻第七 藥王菩薩本事品第二十三 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	10.5	7.0	3.5	383.42	1612	D－158
2	8.0	7.1	3.2	239.45	1350	C－下層
3	9.3	7.6	2.3	236.98	0995	C－72
4	8.1	7.3	2.8	232.77	0632	B－上層
5	12.4	10.0	3.9	647.28	1446	C－最下層
6	11.1	9.7	1.6	265.02	0959	C－122
7	9.1	6.9	2.2	208.50	0373	A－下層
8	8.7	6.5	2.6	202.55	1795	D－最下層
9	9.2	5.6	2.3	177.07	0887	B－ベルト下層
10	8.5	5.6	1.9	109.56	1687	D－上層
11	7.4	5.6	3.4	170.66	1853	D－下層
12	8.9	7.3	2.7	270.22	0325	A－ベルト下層
13	6.7	6.1	2.4	150.19	2050	D－ベルト下層
14	11.4	7.4	2.2	273.71	1025	C－17
15	8.3	7.2	2.6	218.53	1736	D－ベルト上層
16	8.7	5.3	2.6	180.87	1001	C－78
17	9.0	7.3	3.3	317.83	0536	B－16
18	7.4	6.7	1.8	119.46	1371	C－下層
19	7.2	5.6	1.9	110.98	0486	B－164
20	7.1	6.5	1.7	109.52	0496	B－204
21	8.1	6.0	2.4	178.33	1827	D－最下層
22	9.5	5.5	2.8	204.35	1788	D－最下層
23	10.0	8.5	2.8	325.51	0510	B－207
24	8.2	6.7	3.1	229.96	0501	B－185
25	8.8	6.5	1.9	173.65	0052	A－35
26	9.4	7.8	2.8	275.31	0499	B－163
27	8.0	6.3	2.5	191.29	1222	C－上層
28	12.5	8.3	2.8	348.44	0029	A－76
29	6.9	4.9	3.6	185.84	0168	A－169
30	11.4	8.1	2.5	347.36	0554	B－135
31	8.9	5.9	2.2	179.73	1714	D－ベルト上層
32	9.1	6.8	4.9	423.46	0102	A－37

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
33	9.4	5.5	2.1	126.33	1428	C－最下層
34	9.3	8.0	3.8	370.90	1483	D－96
35	9.3	8.3	2.8	330.72	1587	D－185
36	9.2	7.8	1.8	179.66	1505	D－111
37	8.0	8.7	2.4	223.15	0982	C－132
38	10.3	10.9	2.5	438.56	2041	D－ベルト下層
39	7.7	5.0	1.7	93.36	1307	C－ベルト下層
40	8.2	6.8	2.6	233.58	0148	A－155
41	8.8	5.8	2.3	176.19	1692	D－上層
42	6.7	6.2	2.9	159.91	1264	C－ベルト上層
43	8.0	7.4	2.3	197.26	0056	A－61
44	5.9	5.6	2.2	126.24	1054	C－68
45	8.5	7.7	2.2	237.49	1970	D－ベルト下層
46	9.6	8.9	3.1	409.94	1206	C－上層
47	8.1	7.3	2.2	191.02	0464	B－129
48	8.3	7.6	3.0	241.86	0735	B－ベルト上層
49	9.2	5.7	3.0	221.77	0040	A－58
50	7.7	6.5	2.4	199.30	1639	D－上層
51	8.0	5.7	1.5	106.68	1008	C－90
52	7.9	6.8	4.5	322.06	1077	C－182
53	10.0	5.7	2.5	176.89	0495	B－186
54	12.6	10.2	4.6	908.88	0920	B－ベルト最下層
55	13.2	4.9	3.8	404.44	2007	D－ベルト下層
56	10.9	5.2	2.1	188.38	1890	D－ベルト下層
57	14.1	9.5	2.4	425.52	0585	B－68
58	11.3	7.6	5.6	670.08	0139	A－173
59	10.6	7.4	4.2	514.18	1525	D－29
60	10.3	6.2	2.7	233.97	1062	C－141
61	9.4	7.9	3.2	410.61	1530	D－42
62	8.2	6.8	2.9	225.42	1815	D－最下層
63	10.1	6.2	2.8	243.46	0378	A－下層
64	7.2	6.8	2.1	159.70	1006	C－88

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
65	6.1	6.0	2.7	146.49	1939	D－ベルト下層
66	10.0	8.9	2.7	391.50	2033	D－ベルト下層
67	6.1	6.1	2.0	114.00	1724	D－ベルト上層
68	14.0	12.4	5.3	1313.71	1845	D－最下層
69	9.8	8.7	2.6	329.92	1408	C－下層
70	13.5	8.7	3.3	504.62	0844	B－ベルト下層
71	10.4	7.6	3.4	323.83	0614	B－95
72	9.0	7.6	3.2	336.89	1406	C－下層
73	11.0	9.8	2.5	358.99	0345	A－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
74	8.9	6.3	2.8	252.62	1865	D－ベルト下層
75	7.9	6.3	1.4	102.46	1013	C－106
76	9.1	5.9	2.3	155.65	1219	C－上層
77	9.1	5.8	3.7	287.20	0038	A－33
78	9.3	7.6	3.8	415.38	1286	C－ベルト上層
79	7.6	7.2	3.0	258.72	0886	B－ベルト下層
80	8.8	4.5	2.6	153.07	1720	D－ベルト上層
81	8.8	4.0	2.5	137.46	1197	C－上層

第 25 表　巻第七 妙音菩薩品第二十四 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	8.9	5.7	2.4	175.57	1109	C－140
2	9.2	6.6	1.8	167.16	0739	B－ベルト上層
3	7.9	6.6	2.8	207.88	0450	B－110
4	7.5	8.1	3.7	291.68	1471	D－50
5	8.1	5.2	2.3	149.88	1312	C－ベルト下層
6	8.8	6.3	2.2	190.12	1037	C－34
7	7.4	6.8	2.6	205.90	0798	B－下層
8	8.4	6.2	2.3	187.66	0804	B－下層
9	7.5	7.3	3.1	294.65	1015	C－109
10	12.0	5.6	4.6	446.83	0502	B－178
11	7.7	7.4	2.4	224.64	0277	A－ベルト上層
12	7.7	7.8	3.9	340.35	0076	A－15
13	8.7	5.7	2.7	208.74	0894	B－ベルト下層
14	8.9	7.0	3.1	261.46	1207	C－上層
15	9.1	6.2	2.5	199.28	1950	D－ベルト下層
16	7.3	6.2	3.3	225.45	1461	D－17
17	8.4	5.6	2.3	143.08	1060	C－111
18	7.8	4.9	2.8	163.74	1652	D－上層
19	8.0	6.1	3.3	210.06	1458	D－10
20	6.7	5.3	1.9	102.36	1988	D－ベルト下層
21	9.0	6.9	4.5	327.90	1963	D－ベルト下層
22	10.9	9.2	2.8	420.23	1320	C－ベルト下層
23	7.8	4.4	1.6	94.70	0936	B－ベルト最下層
24	7.8	4.4	2.5	113.12	0262	A－上層
25	7.6	5.7	3.2	216.06	0022	A－62

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
26	7.1	6.5	2.7	159.80	0701	B－上層
27	7.7	5.0	1.9	104.57	1045	C－45
28	8.3	6.0	1.6	102.99	1162	C－上層
29	9.6	6.4	2.0	169.70	0781	B－下層
30	12.4	11.4	2.9	603.61	1485	D－59
31	9.0	9.0	3.8	476.36	0471	B－112
32	12.5	10.0	2.5	447.69	0241	A－上層
33	12.4	9.1	2.4	352.66	1831	D－最下層
34	9.0	7.9	2.8	280.88	1794	D－最下層
35	10.0	7.4	2.3	252.97	1660	D－上層
36	9.8	10.3	2.0	331.20	0042	A－59
37	9.4	5.8	3.0	278.32	1846	D－下層
38	12.1	7.9	2.5	389.09	1825	D－最下層
39	13.7	9.6	2.9	590.38	0944	C－83
40	12.7	10.5	2.1	433.54	2060	D－ベルト下層
41	16.3	11.6	3.1	1024.29	1730	D－ベルト上層
42	11.7	11.4	2.6	460.10	1823	D－最下層
43	11.7	10.9	3.0	566.48	0840	B－ベルト最下層
44	12.9	8.0	2.5	348.82	0916	B－ベルト最下層
45	11.6	10.1	3.1	538.96	1552	D－68
46	14.6	11.2	2.9	794.37	0127	A－130
47	13.6	11.2	3.5	778.83	0969	C－99
48	12.3	9.8	3.1	551.81	1570	D－164
49	10.6	10.3	3.1	538.86	0730	B－ベルト上層
50	10.3	9.2	3.8	535.65	0943	C－10

第 26 表　巻第八 觀世音菩薩普門品第二十五 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	6.6	4.3	2.0	67.06	0707	B－上層
2	15.5	9.9	3.2	790.52	0235	A－上層
3	12.6	8.2	2.6	411.45	0656	B－上層
4	9.9	9.0	1.9	263.67	1614	D－117
5	10.0	7.7	1.9	224.10	0177	A－上層
6	12.2	11.1	2.6	490.75	1990	D－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
7	13.4	10.3	3.8	832.44	2046	D－ベルト下層
8	11.8	10.3	3.3	558.57	0968	C－93
9	10.2	8.7	2.7	351.63	1349	C－下層
10	10.4	9.3	3.2	500.60	0966	C－30
11	11.0	8.9	3.2	434.18	0681	B－上層
12	11.0	8.8	2.5	337.65	2044	D－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
13	11.2	6.5	2.5	256.68	1771	D－下層
14	14.3	8.6	4.0	649.81	0348	A－下層
15	10.2	8.2	3.1	373.40	0451	B－208
16	9.5	8.3	2.8	322.14	0553	B－113
17	9.6	7.9	2.3	251.99	0624	B－169
18	9.5	7.5	2.8	256.17	1799	D－最下層
19	9.9	7.8	2.5	293.32	1035	C－28
20	8.4	5.9	2.4	181.30	1040	C－37
21	9.1	7.7	2.0	200.32	0902	B－ベルト下層
22	11.4	8.1	2.6	378.02	2025	D－ベルト下層
23	9.6	6.9	2.0	200.54	0368	A－下層
24	9.4	7.7	2.9	295.67	1415	C－上層
25	8.4	7.6	1.9	188.97	1354	C－下層
26	8.0	6.6	2.6	180.00	0652	B－上層
27	8.2	7.1	2.8	227.94	1447	C－最下層
28	8.8	6.0	2.0	142.47	1914	D－ベルト下層
29	8.2	10.1	2.8	279.71	1945	D－ベルト下層
30	12.5	7.9	2.8	395.82	0788	B－下層
31	8.5	5.8	1.9	147.63	1804	D－最下層
32	11.1	7.4	2.2	276.61	1842	D－最下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
33	8.6	7.7	2.6	263.47	1124	C－196
34	10.7	8.3	3.7	432.31	0350	A－下層
35	8.7	7.0	2.3	191.19	1645	D－上層
36	6.7	6.1	2.2	128.89	1009	C－91
37	6.6	7.0	1.7	121.97	0208	A－下層
38	8.5	5.8	1.4	119.27	0738	B－ベルト上層
39	9.1	8.5	2.2	266.16	1578	D－172
40	7.8	4.7	1.7	90.89	1224	C－上層
41	7.3	5.4	2.2	141.01	2010	D－ベルト下層
42	11.3	6.9	3.1	392.07	1966	D－ベルト下層
43	8.6	7.4	2.6	258.85	0821	B－下層
44	10.9	8.9	2.3	312.68	1755	D－下層
45	9.8	15.3	2.7	654.52	1459	D－11
46	11.4	9.0	2.1	329.92	1678	D－上層
47	8.2	8.6	4.2	462.34	0476	B－22
48	11.8	7.8	2.6	320.30	1317	C－ベルト下層
49	8.4	7.9	1.8	209.45	1130	C－138
50	8.3	7.3	1.8	149.57	1257	C－ベルト上層
51	10.6	9.7	2.9	481.87	0419	A－148
52	13.3	11.6	2.8	678.72	2005	D－ベルト下層

第 27 表　巻第八 陀羅尼品第二十六 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	12.7	11.8	3.3	770.46	0581	B－96
2	14.3	12.5	3.5	948.40	0438	B－28
3	12.3	11.2	2.7	653.66	1113	C－186
4	13.7	12.5	3.6	861.55	0463	B－144
5	12.0	7.2	2.8	377.78	0001	A－25
6	13.4	7.2	3.0	394.80	1099	C－180
7	9.1	8.0	3.6	433.32	1701	D－上層
8	10.4	9.9	2.0	303.67	0170	A－156
9	16.7	13.7	3.1	1142.07	1478	D－82

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
10	13.6	16.0	3.6	1319.36	1419	C－最下層
11	12.0	7.2	3.3	393.79	1774	D－下層
12	11.7	12.6	2.5	581.12	0221	A－上層
13	10.0	6.9	2.5	287.66	0890	B－ベルト下層
14	11.5	6.7	3.5	427.79	0639	B－上層
15	10.9	12.8	3.4	692.50	0295	A－ベルト下層
16	13.2	8.2	3.4	541.33	0150	A－160
17	13.2	6.3	2.5	339.10	0297	A－ベルト下層
18	9.3	8.8	1.8	250.13	0721	B－ベルト上層

第 28 表　巻第八 妙荘嚴王本事品第二十七 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	10.3	11.6	2.8	570.26	0513	B－171
2	13.9	10.1	2.7	552.25	0296	A－ベルト下層
3	15.0	8.8	3.0	553.49	1512	D－6
4	13.0	8.6	2.7	441.39	0324	A－ベルト下層
5	9.5	9.3	3.5	506.80	0488	B－180
6	8.7	6.6	1.7	146.45	1396	C－下層
7	11.4	9.6	3.6	635.73	0971	C－102
8	9.3	9.1	2.5	303.50	0483	B－198
9	12.6	9.2	2.1	381.96	0518	B－153
10	11.3	9.7	3.1	569.30	1440	C－最下層
11	9.6	6.6	2.7	221.04	0537	B－1

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
12	7.8	7.1	2.9	231.35	1897	D－ベルト下層
13	6.8	6.4	2.4	138.77	0584	B－43
14	8.4	6.4	3.3	291.25	0823	B－下層
15	12.2	8.5	3.7	559.83	0063	A－16
16	13.9	10.0	4.1	798.60	0287	A－ベルト上層
17	12.1	7.4	3.1	402.25	1492	D－90
18	11.0	7.9	1.9	259.68	0111	A－194
19	7.3	6.4	2.2	159.05	0799	B－下層
20	8.7	8.9	2.2	280.33	0449	B－151
21	8.5	6.2	1.5	115.39	1643	D－上層
22	13.1	9.5	3.1	568.33	1450	C－最下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
23	9.5	8.9	3.6	410.06	1351	C－下層
24	10.5	11.0	2.8	493.22	0972	C－107
25	11.7	8.0	3.5	490.64	0337	A－ベルト下層
26	7.8	7.6	1.8	185.98	0024	A－89
27	9.4	6.7	4.0	380.97	1784	D－最下層
28	7.5	7.1	2.3	185.75	1847	D－下層
29	8.9	7.0	2.3	218.33	1777	D－下層
30	9.2	6.3	2.1	182.89	0189	A－上層
31	9.2	6.2	3.1	272.80	1448	C－最下層
32	9.1	7.2	2.8	275.29	0240	A－上層
33	8.8	7.9	2.8	334.69	1600	D－146
34	9.6	7.5	3.0	342.69	0642	B－上層
35	12.8	9.6	3.6	756.65	1494	D－92
36	13.6	10.8	2.9	689.29	1551	D－67

第 29 表　巻第八 普賢菩薩勸發品第二十八 石経計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	13.7	7.9	3.0	491.52	0808	B－下層
2	11.5	10.2	2.1	355.52	0807	B－下層
3	12.1	10.0	3.3	636.41	1127	C－188
4	12.5	11.1	2.8	607.35	1571	D－165
5	13.4	9.5	3.6	683.97	1289	C－ベルト上層
6	12.8	8.9	2.4	406.92	1876	D－ベルト下層
7	8.9	7.3	2.2	219.83	1523	D－27
8	13.0	10.5	2.8	606.22	0113	A－128
9	10.1	7.1	1.7	199.29	0719	B－ベルト上層
10	11.1	8.4	2.4	342.55	1299	C－ベルト下層
11	11.9	10.4	2.7	454.72	1677	D－上層
12	12.6	8.6	2.4	372.79	1420	C－最下層
13	11.1	9.4	2.2	322.54	0520	B－152
14	10.6	8.3	2.7	365.06	0648	B－上層
15	12.7	8.7	3.5	514.68	1615	D－118
16	12.8	11.1	3.3	721.48	0121	A－80
17	12.5	8.4	2.9	475.66	1921	D－ベルト下層
18	11.4	9.6	3.1	481.65	0217	A－下層
19	11.7	9.7	3.2	537.02	0222	A－上層
20	10.9	9.1	3.3	429.61	0576	B－71
21	8.7	6.9	2.6	266.20	0928	B－ベルト最下層
22	10.5	6.5	2.6	279.46	1623	D－126
23	9.4	8.6	2.4	273.51	0275	A－ベルト上層
24	11.7	9.6	2.7	462.36	1120	C－134
25	11.7	9.6	2.2	349.54	0498	B－181
26	10.4	9.1	3.3	443.19	0748	B－下層
27	11.3	6.7	2.1	233.39	1634	D－140
28	11.3	8.4	2.8	385.01	2030	D－ベルト下層
29	10.5	7.5	2.1	271.96	0374	A－下層
30	9.6	7.6	2.1	243.26	1327	C－ベルト下層
31	9.6	6.4	2.3	262.46	1284	C－ベルト上層
32	15.2	10.5	3.7	926.99	0109	A－133
33	15.2	10.7	3.5	826.14	0403	A－最下層
34	19.2	5.7	3.7	648.93	0828	B－ベルト最下層

第 30 表　品巻不明の墨書石 計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	5.9	5.0	3.4	119.10	1107	C－135
2	6.8	6.2	3.4	181.85	1244	C－ベルト上層
3	9.3	6.4	3.1	230.81	1279	C－ベルト上層

第 31 表　法華経以外の墨書石 計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	9.3	8.8	2.3	330.20	0662	B－上層
2	8.6	5.7	2.9	185.20	0797	B－下層
3	11.9	5.3	2.9	283.22	0845	B－ベルト下層
4	10.6	7.3	2.5	295.57	1138	C－下層
5	10.3	8.5	1.9	280.85	1384	C－下層
6	11.6	7.6	3.0	442.45	1665	D－上層
7	11.7	8.1	3.2	410.70	0676	B－上層
8	11.4	8.1	2.7	360.59	0744	B－下層

第 32 表　判読不可能な墨書石 計測表

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
1	8.0	6.0	2.4	165.36	0020	A－41
2	9.0	6.5	2.1	189.41	0026	A－54
3	8.1	6.4	2.8	197.85	0041	A－74
4	12.8	7.9	3.0	506.44	0085	A－87
5	12.3	10.9	2.9	531.94	0093	A－106
6	9.3	4.8	2.3	122.18	0107	A－65
7	9.0	11.5	2.4	306.93	0115	A－81
8	13.4	9.2	2.4	426.40	0116	A－183
9	12.1	8.4	3.5	407.64	0128	A－120
10	10.8	11.7	3.4	600.69	0129	A－185
11	9.7	8.5	2.8	355.65	0143	A－152
12	11.4	11.0	2.0	387.06	0151	A－163
13	9.8	6.6	2.7	242.80	0163	A－145
14	9.8	4.8	1.7	107.34	0172	A－189
15	5.9	6.5	3.3	187.17	0184	A－上層
16	9.3	7.3	1.4	136.36	0188	A－上層
17	4.7	3.6	1.9	42.14	0216	A－下層
18	5.2	4.3	1.0	36.85	0231	A－上層
19	7.7	6.3	3.0	199.87	0281	A－ベルト上層
20	9.8	7.4	2.4	254.26	0311	A－ベルト下層
21	10.0	7.7	2.6	271.49	0334	A－ベルト下層
22	10.0	7.4	2.4	275.96	0347	A－ベルト下層
23	7.6	6.1	2.6	147.98	0355	A－下層
24	9.5	7.7	2.3	254.80	0357	A－下層
25	8.7	4.7	2.6	158.25	0369	A－下層
26	8.6	5.3	3.9	206.16	0375	A－下層
27	10.2	6.1	2.4	200.29	0384	A－下層
28	6.3	4.5	1.5	60.76	0398	A－下層
29	6.9	5.0	1.8	78.18	0400	A－下層
30	5.9	5.6	1.3	63.80	0412	A－最下層
31	7.7	4.7	1.8	99.12	0426	B－12
32	9.8	6.5	3.1	259.09	0434	B－54
33	15.7	7.7	3.4	573.45	0472	B－196
34	10.6	7.1	3.8	359.52	0474	B－203
35	5.6	3.8	2.4	69.32	0493	B－200
36	7.3	4.6	1.7	73.09	0494	B－154
37	11.6	5.5	3.3	300.02	0503	B－161
38	9.6	9.2	2.7	339.40	0509	B－173
39	7.6	5.2	2.3	126.00	0516	B－202
40	7.2	5.7	2.5	149.20	0541	B－24
41	6.1	4.5	1.7	76.73	0558	B－114
42	6.5	3.7	2.5	86.31	0562	B－116
43	7.2	6.0	1.4	95.77	0588	B－31
44	6.6	5.2	1.3	58.10	0622	B－103
45	8.6	5.7	2.0	129.22	0625	B－上層
46	7.9	7.5	2.7	195.16	0629	B－上層
47	5.8	3.8	1.9	59.24	0694	B－上層
48	6.1	3.3	1.4	36.09	0695	B－上層
49	7.0	3.7	2.2	73.07	0704	B－上層
50	7.0	5.5	2.9	145.43	0712	B－ベルト上層
51	7.5	7.6	2.6	228.22	0717	B－ベルト上層
52	7.0	5.9	1.5	86.58	0737	B－ベルト上層
53	7.2	5.1	2.5	144.85	0745	B－下層
54	6.0	5.3	2.5	110.20	0784	B－下層
55	7.0	7.8	1.5	123.15	0791	B－下層
56	8.8	6.1	1.9	162.75	0792	B－下層
57	7.2	5.1	2.4	102.15	0793	B－下層
58	5.1	4.2	2.7	86.07	0794	B－下層
59	8.3	4.8	2.7	136.80	0801	B－下層
60	7.4	6.5	2.0	135.77	0830	B－ベルト最下層
61	6.3	4.8	1.5	64.35	0854	B－ベルト下層
62	8.4	5.1	2.4	139.05	0870	B－ベルト下層
63	7.1	6.2	2.3	127.85	0871	B－ベルト下層
64	5.3	3.8	1.7	43.13	0905	B－ベルト下層
65	9.5	8.6	2.1	271.11	0912	B－ベルト下層
66	8.6	8.5	2.1	224.96	0932	B－ベルト最下層
67	8.4	8.0	2.6	263.79	0933	B－ベルト最下層
68	7.8	6.6	2.2	162.67	0934	B－ベルト最下層
69	10.8	10.3	3.9	618.28	0947	C－66
70	8.6	5.7	3.0	233.86	0981	C－131
71	8.9	4.7	2.6	147.74	1004	C－81
72	10.4	5.9	2.0	172.43	1028	C－21
73	9.1	6.1	2.7	237.24	1044	C－44
74	6.9	6.4	2.2	147.36	1074	C－167
75	8.7	7.6	2.4	219.84	1092	C－169
76	9.7	6.9	2.7	228.76	1093	C－172
77	6.5	7.8	1.9	145.25	1105	C－127
78	6.9	5.8	2.3	128.19	1108	C－136
79	8.4	6.6	3.2	213.68	1134	C－下層
80	9.3	6.1	2.8	197.64	1135	C－下層
81	4.9	4.0	1.6	37.34	1141	C－下層
82	4.7	4.6	1.9	43.61	1144	C－下層
83	5.6	3.9	2.4	77.10	1149	C－上層
84	8.4	7.0	2.0	168.04	1165	C－上層
85	8.1	8.1	3.5	309.76	1177	C－上層
86	7.5	8.9	2.0	184.21	1204	C－上層
87	7.0	4.8	1.7	70.64	1227	C－上層
88	6.1	6.6	2.4	140.42	1254	C－ベルト上層
89	5.6	3.3	1.9	43.79	1297	C－ベルト下層
90	9.3	4.8	2.5	162.76	1314	C－ベルト下層

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
91	7.4	6.3	2.6	160.43	1324	C－ベルト下層
92	8.1	7.2	2.4	192.80	1328	C－ベルト下層
93	9.3	6.3	1.7	133.09	1336	C－ベルト下層
94	5.4	5.4	2.2	80.95	1337	C－ベルト下層
95	5.3	4.2	1.2	35.77	1355	C－下層
96	6.3	5.8	1.9	102.36	1365	C－下層
97	5.0	4.1	2.7	76.13	1367	C－下層
98	6.5	5.1	1.2	58.86	1398	C－下層
99	13.1	8.2	3.4	583.90	1399	C－下層
100	8.0	5.1	2.5	139.25	1405	C－下層
101	6.0	3.2	2.2	53.49	1418	C－上層
102	9.8	6.6	3.4	265.21	1424	C－最下層
103	10.9	4.5	2.9	193.41	1432	C－最下層
104	8.8	6.2	2.0	162.53	1441	C－最下層
105	12.6	6.1	2.9	312.09	1444	C－最下層
106	7.0	4.4	1.1	54.04	1453	C－最下層
107	8.7	7.3	2.2	177.83	1479	D－83
108	5.0	5.3	1.7	86.50	1481	D－88
109	8.8	6.6	3.4	285.74	1482	D－89
110	9.9	6.6	2.3	256.25	1497	D－100
111	8.1	5.2	3.0	140.20	1533	D－46
112	9.0	10.9	2.8	396.05	1554	D－79
113	15.8	11.6	2.7	662.09	1556	D－81
114	3.9	3.5	1.7	31.73	1565	D－182
115	4.8	3.4	3.0	76.15	1576	D－170
116	6.3	4.6	1.5	65.34	1582	D－176
117	10.1	8.6	3.9	464.51	1601	D－147
118	7.1	3.6	3.2	93.90	1604	D－150
119	10.9	7.5	1.8	192.40	1609	D－155
120	7.8	6.5	1.9	166.88	1610	D－156
121	7.4	5.1	2.5	139.93	1617	D－120
122	7.3	5.7	1.6	101.92	1618	D－121
123	9.4	6.7	2.7	214.22	1619	D－122

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	注記No.	出土位置
124	9.9	8.0	2.4	282.67	1627	D－130
125	9.1	6.3	4.0	292.49	1640	D－上層
126	5.4	6.5	2.0	93.09	1641	D－上層
127	9.2	6.3	3.1	234.57	1655	D－上層
128	8.9	7.0	2.4	239.15	1658	D－上層
129	9.9	6.1	2.5	197.17	1693	D－上層
130	5.9	4.0	1.9	60.29	1705	D－上層
131	9.2	5.0	2.6	161.10	1754	D－下層
132	8.2	6.0	2.3	157.11	1759	D－下層
133	7.6	5.0	2.1	114.46	1796	D－最下層
134	6.0	5.5	2.7	109.98	1805	D－最下層
135	15.0	8.1	2.9	557.66	1809	D－最下層
136	9.6	6.4	3.7	319.29	1810	D－最下層
137	6.2	6.1	2.1	95.02	1811	D－最下層
138	10.7	6.4	2.0	190.18	1812	D－最下層
139	6.4	5.5	1.6	81.40	1818	D－最下層
140	8.0	5.9	1.9	117.99	1826	D－最下層
141	8.1	7.2	2.9	235.85	1832	D－最下層
142	9.9	8.1	2.4	257.60	1859	D－ベルト下層
143	7.3	4.0	2.3	83.54	1878	D－ベルト下層
144	11.1	3.6	3.5	229.07	1893	D－ベルト下層
145	8.5	6.1	2.2	164.52	1912	D－ベルト下層
146	11.5	8.0	2.4	260.78	1919	D－ベルト下層
147	7.1	7.7	2.3	148.99	1923	D－ベルト下層
148	6.9	5.0	1.7	85.81	1924	D－ベルト下層
149	8.6	6.1	2.1	161.53	1935	D－ベルト下層
150	6.7	5.9	2.2	110.02	1955	D－ベルト下層
151	11.4	5.8	2.5	264.70	1959	D－ベルト下層
152	8.3	6.1	2.6	169.30	1961	D－ベルト下層
153	6.6	5.2	2.4	253.21	1964	D－ベルト下層
154	9.4	4.0	2.8	137.85	1972	D－ベルト下層
155	8.6	6.2	3.2	239.98	1994	D－ベルト下層

第４章　総括

第１節　会橋久保経塚の『法華経』書写と石積み

（１）書写と施主

経碑にあるように、法華経書写は宝積寺村の加藤氏が施主となって行い、念仏講と奉納した。このため、経の書写を行ったのも念仏講の構成員で行った可能性も残る。しかし、第３章第３節　遺物のところで述べたように、筆跡の違いを超えて共通の字形が複数存在し、一個体の石経でも表裏面で筆跡が異なるが、共通した字形が確認されたことから、一人によって法華経八巻二十八品が書写されたと判断した。石経の書写が一人か複数の人で行われたか、事例を挙げてみていきたい。まず、一人で行われた場合に栃木県日光市堀端経塚を挙げることができる。経塚の近くに経碑があり、以下のように書かれている。

梵字（バク）　石経書写塔
書写師　法印秀通
寛政七 乙卯天
十有月吉　辰

とあり、秀通という僧侶が書写師となっている。しかし、報告では３人以上によって書写され、数人の協力者が写経衆として存在したと推測している（大和久 1967）。この説と本経塚をみると、様々な書写体制があったと考えられる。

（２）『法華経』全二十八品の出土位置からみた石経の積み方

『法華経』全二十八品の出土位置・層位をみると、上層・最下層からも「序品第一」や「普賢菩薩勧發品第二十八」等が出ており、全品が各層で確認されたことから、巻品の順序に石経を置き、積んだとはみられない。書写した石経は読誦することもあり、この場合には巻品の順序に並べておく必要がある。会橋久保経塚の写経目的は経碑に刻されているように書写供養であり、読誦供養ではない。このために写経による功徳や故人の菩提を行うことが願意であり、巻品の順に埋納することは行われなかったと判断された。書いた各品を混在して持ってきて積み上げたと想定される。

（３）会橋久保経塚の造立

調査前には、塚の頂部に経碑があったが、表土上に置かれており、『法華経』埋納のために硬く覆った土よりも上層に位置した。このため、塚の調査所見では、経碑は築造の時の状態であったとみることはできない。しかし、碑文は念仏供養とともに、『法華経』書写を行ったことを伝えており、本来この場所にあったとみられる。経碑の銘文は、

天下和順
念佛一億萬遍供養
日月清明　（側面）
施主　加藤氏
宝積寺村
奉書寫法華供養塔
念佛講中　（側面）

とある。この銘文は大きく２つのことを伝える。第一点は宝積寺村の念仏講で念仏供養が行われていたこと、第二点は法華経の書写供養が行われたことである。第一の念仏供養に関しては、宝積寺村の念仏講が「南

無阿弥陀仏」を一億万遍、実際にはこの数詞はないので一億回の奉唱が行われたのであろう。

念仏は、主に僧侶一人が行う場合と、千十顆の大念珠を講中が車座になって、「南無阿弥陀仏」を唱えるごとに一顆を繰る場合がある（『日本石仏事典』p112）。念仏供養塔は、全員の念仏の総計が巨大な数に達成したことの記念碑であり、この碑文からは、講中成員による念仏総数とみるべきであろう。この巨大な数によって大きな功徳が願えられたことが推測される。なお、「天下和順」とは国中の全てが和らぐ状態 (註 1)、「日月清明」とは日蝕・月蝕等の天体上の災難がない状態をさしている。つまり、阿弥陀信仰の根本聖典の一つ＝『仏説無量寿経』の「(現代語訳) 天下和順し、日月清明たり。風雨時を以てし、災励起らず」(中村ほか 1963,201 頁) の一文節を引用し、平和な社会を希求したと思われる。

第二の『法華経』書写事業については、宝積寺村の加藤氏が施主となって行われたと判断される。加藤氏は多数の江戸時代文献史料を伝える名主層身分であり、書写事業を行う経済的負担を行えたと想定される。埋納経は『妙法蓮華経』八巻二十八品であることから、埋納経と碑文が合致する。このため、経碑の多少の移動はあっても、この碑は経塚に建てられたものと判断することができる。

さらに、墨書石のなかに

・「三界萬霊有縁無縁
　乃至法界平等利益
　安山了□信士
　鏡円妙照信女
　爲菩提也」　　（B - 上層出土 7 番石経 - 表面）

・「南無藥師如來
　南無釋迦牟尼佛
　南無阿弥陀佛」（B - 上層出土 7 番石経 - 裏面）

と記すものが確認できた。この世の全ての世界 (欲界・色界・無色界の三界) の精霊を供養する文言であり、故人 (「安山了□信士」「鏡円妙照信女」) の菩提も目的に『法華経』石経の書写及び埋納が行われたのであろう。このように、故人の菩提や供養を目的にした写経は日光市堀端経塚でも石経の中に

・□印導
　　霊魂□
　代々先祖
　　諸聖霊
　善岳道観
・迦牟尼仏
　供養釈

と記すものがあり、先祖供養をしている。また、群馬県太田市相場観音経塚でも「宝室妙昧大姉」という戒名の墨書石が確認されている。経碑にあるように、この経塚築造の願意は「子孫□家長久」であるが、身内の故人供養が行われていたのである。

『法華経』と共に会橋久保経塚でも墨書石に「南無釈迦牟尼佛」などがあった。同様の事例は、鹿沼市見野交差点東側墓地の題目塔（1836 年）に

　　天下泰平　国家安全
　　南無夢多宝如来

南無妙法蓮華経

南無釈迦牟尼仏

立家御武運長久村内安全

由願浅野平作建之

天保七丙申季文月日

として、法華経の題目塔であるが、釈迦牟尼仏も奉じられている。ここでの願意は家の武運長久と村内の安全である。

ところで､浄土信仰による「南無阿弥陀仏」を奉唱する念仏講で､『法華経』が書写埋納された理由､『法華経』が浄土信仰の南無阿弥陀佛と結びつく理由が問題である。『法華経』と阿弥陀信仰・薬師信仰・地蔵信仰の関係については､「第４章第４節」を参照して頂きたい。

さらに､「南無阿弥陀佛」墨書石が 12 点発見された。阿弥陀仏を本尊とする浄土教で極楽往生を願っての所業とみられる。前掲の墨書石には題目と故人の戒名･願意が書かれていることから、故人の極楽往生を願ったものと目される。

第２節　下野国における『法華経』書写供養・読誦供養・念仏供養

会橋久保経塚の経石や経碑によって、宝積寺で『法華経』書写や南無阿弥陀仏を唱える念仏供養が講を結成して行われていたことが明らかになった。そこで、江戸時代の石造物を基にして、『法華経』書写の実態、『法華経』（大乗妙典）の読誦の実態、念仏供養の実態について、供養の形態や願意・供養集団や施主の階層などを考えていきたい。これにより、宝積寺村における念仏講や『法華経』書写事業の特徴が浮かび上がってくると思う。

（1）『法華経』書写供養（第 388 ～ 399 図）

経典供養のうち、経を書写奉納することがあり、会橋久保経塚もこの事例である。栃木県内でも江戸時代に経典書写を記念した供養塔が存在する。各市町・個人の方々などの調査報告をもとに集成したので、造立時期の順に提示していきたい。これらの塔碑から写経の願意や施主などをみていきたい。

１）元禄５年 (1692)、鹿沼市真名子　洞雲寺

元禄五壬申天　　願主興□

奉書法華石経一部三界萬霊

正月吉祥日　　洞雲八世無□

寺の記録では、洞雲寺八世は無禅寒悟大和尚（宝永５年６月２日寂）であり、寂滅 16 年前の事業になる。塔は山の傾斜面の裾に他の石造物と集合して置かれており、本来の場所から移動している可能性がある。塔は自然石である。

２）元禄７年 (1694)、日光市小百

下野都賀郡日光山領奈良原村安全所

元禄七甲戌年　　為師檀

奉書寫大乘妙典一部一石一字

七月十五日　　報恩也

釈氏曹洞沙門荘円墀厳拝書写

施主當村 惣領氏大嶋次兵衛重次

嫡同名甚之烝

施主　大しま□左ヱ門同庄右ヱ門同一□□同□右ヱ門

嫡　伊兵衛嫡庄左ヱ門同与左ヱ門同忠左ヱ門

重吉

当処男女不□軽の輩上

依此功徳二世安楽所

関本

石や　弥五右ヱ門

この経塚では一字一石経が発掘されて、大半は再度埋め戻したが、一部は個人で所蔵されており、「法」「華」「名」「天」の墨書石を確認した。塔は板状に加工されており、現在は塚が復元されている。

３）宝永４年 (1707)、佐野市戸奈良　種徳院

一字一石一石一字

宝永四龍飛丁亥林鐘吉辰

奉書寫大乘妙典石経一部

銘曰功徳不朽広済万物

妙体無想塔様□□

山形方形柱の塔で、墓碑がまとめられている。

４）宝永６年 (1709)、那須町伊王野

願以此功徳普及一切

我等與衆生皆共成佛道

法菴如水

奉書寫大乘妙典一石一字供養塔

並書敬白

自他平等

師親眷属七世父母三界萬霊

即身威佛

旹寶永六己丑天七月吉日

角石の経碑のある塚下から一石一字の墨書石経が出土したという（柿園生 1927）。

５）正徳元年 (1711)、佐野市高萩町　正福院

願以此功徳　普及於一切　願主

我等与衆生　皆共成仏道　　寛盛

奉書寫法華石経一部一字呪　天下泰平

萬民安全

正徳元年 (辛) 卯□正月吉日

塔は方形柱形で、寺の境内の一画に他の石造物と置かれており、本来の場所から移っている可能性が高い。

６）正徳５年 (1715)、鹿沼市板荷　地蔵寺跡

願以此功徳　施主

一字　普及於一切

奉書写大乗妙典全□

一石　我等與衆生

皆共成佛道　法界

正徳五乙未天　　願主

九月吉日

芸州

頓誉

塔は大形の自然石で、塚は確認されず、移動している可能性がある。

7）享保３年 (1718)、高根沢町亀梨　桜元地蔵

□自作是念以何令衆生　利

奉書寫妙法蓮華經全部平等所

得入無上道速成就佛身　益　（表面）

當處櫻本地藏尊不知何世人所□

安置□野年代甚□□□□□新也

如谷應御□願無不□□□於祈雨興

疱病二年咸應最著□□□保戊戌年

了然庵主發願修復念佛托鉢四方造　（左面）

営地輪臺座等予又企別願石寫妙法

蓮華經全部而納其下酬大士利生深恩

備法界有情成道童子聚沙功用猶成

一乘妙行□又順金口書寫之教勅手因

思増上疊石中存経寔變穢土成寂光　（裏面）

土者乎當知是處諸佛神力所護諸

天晝夜而□護之仰□□見聞膽禮之

郡類得見此塔皆近阿耨菩提倶蒙地

藏菩薩二世□道矣

享保三年戊戌十月廿四日

□棆良運誌願主了然敬白

この経碑があった位置には現在も地蔵像が置かれており、五輪塔が集積されている。径２m程で高さ 0.5m程の高まりがあり、ここに石経が埋納されているとみられる。塔は截頭方錘形の方形柱である。

8）享保５年 (1720 年)、上蒲生遺跡１号経塚

サ　　享保五庚子歳十一月吉祥日

キリーク　大乗妙典前々一万五千部供養　　敬白

サク　　荻原氏

施主　　同　氏

国府田氏

参考）上蒲生遺跡２号経塚（経文不明　1716 年）

願以此功徳普及於一切

我等与衆生皆共生仏道

キリーク　大乗妙経六千部供養之塔

荻原勝右衛門勝秀

檀主　同姓市右衛門秀重

国府田氏悔□道華

正徳六丙申歳二月摩詞吉日

県内で発掘によって確認された経塚で、経碑との関係が判明する事例である。上蒲生遺跡の経塚では、１号経塚は径 16 ～ 17 m程、高さ３mの大きな塚の上に経碑があり、一字一石経は 1.5 m程の方形の穴に埋納していた。２号経塚は 16 m程、高さ３m程で１号経塚と似た大きさであり、碑が塚の上に置かれていた。しかし、「大乗妙典○部供養塔」という定型字句の場合は経典読誦奉納を行ったことを記念するものであり、書写した石経を読誦した可能性をも示唆する資料となるであろう。

９）享保 10 年 (1725)、佐野市船越　水月院

奉建写大乗妙典一字一石

当住院

□□□

10）享保 20 年 (1735)、大田原市北野上

九州豊後直入郡下田北

願主

勒山

佛目増□

法華経一石一字供養

法倫當轉

享保二十乙卯天十月

沢の端に石造物とまとめられている。山形方形柱の塔で、現在の大分県竹田市下田北の僧が願主となって、一石一字供養を行ったことを伝える。

11）寛保３年 (1743)、鹿沼市富岡バス停「上玉田」北側

寛保三亥天

奉讀誦法華千部石經供養塔

九月廿六日　願主法山

塔は隅丸方形柱で、石造物が集積されている。

12）延享３年 (1746)、鹿沼市千手町　千手観音裏

延享三年丙寅天月

奉以石書写最□

律匠 誓深如

塔は自然石で、塚はなくて移動している可能性がある。

13）宝暦２年 (1752)、鹿沼市真名子

法界含□

奉読誦大乗妙典一千部供養塔

年代

1600年

鹿沼市真名子洞雲寺（1692）

日光市小百（1694）

参考　小百塔・塚と一字一石経

1700年

佐野市戸奈良種徳院（1707）

佐野市高萩町正福院（1711）

鹿沼市板荷地蔵寺跡（1715）

高根沢町亀梨桜元地蔵（1718）

大田原市北野上（1735）

鹿沼市富岡バス停「上玉田」北側（1743）

第 388 図　石経碑の時期（１）

年代

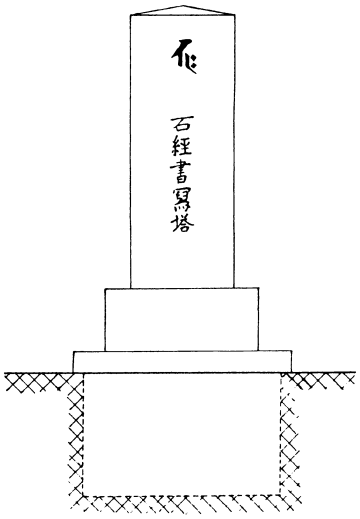
1700年

鹿沼市千手町千手観音裏（1746）

日光市山内開山堂付近（1753）

日光市轟（1769）

高根沢町宝積寺 会橋久保経塚（1793）



日光市堀端経塚（1795）

1800年

日光市安川市営第３駐車場（1807）

大田原市親園薬王寺（1814）

日光市萩垣面興雲律院（1814）

第 389 図　石経碑の時期（２）

年代

1800年

那珂川町久那瀬和尚塚墓地入口 (1814)

日光市山内華蔵院（1860）

日光市山内華蔵院（1860）

日光市萩垣面興雲律院（1860）

足利市本城心通院（1865）

佐野市閑馬下（1867）

時期不明

日光市山内華蔵院（時期不明）

参考　興雲律院 法華塔（時期不明）

第 390 図　石経碑の時期（３）

奉書写大乗妙典石経一部供養

14）宝暦３年 (1753)、日光市山内　開山堂付近

一字一石書寫妙典

願共利潤永無退轉

汰華塔

寶暦三年癸酉七月十五日

ここでは、方形基壇を石組みで造り、この上に大型の方形柱の塔が立っている。

15）宝暦３年 (1753)、那須町

善男子

宝暦三癸酉十一月二十二日各拝写

善女子

大乗妙典一字一石供養塔

為禪定院殿菩提造立鈴木宗左右門

政喬

高さ 90㎝の山形方形柱の塔である。

16）明和６年 (1769)、日光市轟

當寺十八世宝蓮社譽巖亮和尚

奉書三部経一石一字礼拝供養塔

惣村中一切諸精霊□兩縁尊

明和六己丑十月老若男女現當安全

蓮弁の台座の上に方形柱の塔が立っている。墓地の一角に他の石造物とともに置かれており、本来の位置から移動している可能性が高い。

17）安永７年 (1778)、鹿沼市三坪　妙見寺

大乗妙典書字石碑　□□不能作□唯筆力

□石写法華経奉納禅院

18）寛政５年 (1793)、高根沢町宝積寺

天下和順

念佛一億萬遍供養

日月清明

施主

加藤氏

宝積寺村

奉書寫奉法華供養塔

念佛講中

法華経全巻を多字一石経として書写し、塚を作っている。

19）寛政７年 (1795)、日光市　堀端経塚

バク　石経書写塔

書写師　法印秀運

寛政七乙卯天

十有月吉　辰

発掘された経塚で、『法華経』「方便品第二」を書写した多字一石経が出土している。

20）文化２年 (1805)、茂木町深沢下

大乗経一字一石書写供養塔

21）文化４年 (1807)、日光市安川　市営第３駐車場

法華塔　一字一石大乗妙典圓音坊住周海

書写弟子当寺現住寛明随喜建之

文化四卯四月　資助　桜井氏　榊原式部大助輔家臣

自然石のこの塔は、山際の斜面中段に立っている。

22）文化 11 年 (1814)、大田原市親園　薬王寺

瑠璃光山

薬王寺二十三世

宥超

バク　法華經一字一石供狼塔

文化十一甲戌三月大吉日

塔は高さ 83㎝、幅 36㎝、厚さ 25㎝の自然石で、移動して石造物がまとめられている。

23）文化 11 年 (1814)、日光市萩垣面　興雲律院

法華塔　一字一石

文化十一甲戌□六月

塔は自然石で、2.4 m四方、高さ 0.5 m程の塚の上にある。塚は自然石を周囲に並べている。

24）文化 11 年 (1814)、那珂川町久那瀬　和尚塚墓地入口

甲戌初夏益子氏喜時一夕没入杢林精舎予爲両親大乗妙

典一字一石書寫乞予歡喜踊躍而七軸全部書寫早□

穐風葉落芬陀利穐雨雁鳴讀誦音

一一皆如金色字収皈方寸大乘心

松林寺現住瑞光謹拝書

大乘妙典一字一石供養塔

文化十一年甲戌七月　益子弥惣右衛門喜時建

俊明軒

法性庵

石碑の周囲は３m×３m、高さ 0.5 m程高くなっており、ここが塚の可能性もある。松林寺は碑のある場所から南に３㎞程の位置である。塔は自然石で、正面のみを平坦に加工している。

25）文化 12 年 (1815)、日光市萩垣面外山

法華塔　一字一石書　長沼季雄

文化十二□亥□九月

26）弘化３年 (1846)、日光市萩垣面　興雲律院

法華塔　一字一石　願主奥州白川住　早川鉄蔵立之

弘化三丙午□四月

27）嘉永４年 (1851)、大田原市親園村下坪

一石一字地蔵

28）嘉永５年 (1852)、那珂川町小口　八幡神社

法華経一石一字塔

29）安政７年 (1860)、日光市山内　華蔵院

妙經一字

一石供養

多寶塔

安政七庚申三月

願主　田口喜三郎乗利

宝塔で基礎二段目の表面に妙經以下が、裏面に造立年と願主名を刻す。塔身には扉型となり、この上に首部・笠・相輪を載せる。塚はない。

30）安政７年 (1860)、日光市山内　華蔵院

一字一石經塔（正面）

経塔記并銘

此塔本欲起於吾興雲蘭若庭上／然功德者不若與人故贈之于華／蔵精舎輔功德林之壯観以期見／聞之利益彌多而己矣伏願自他／寫經功德周徧天下泰平上下和／親百穀登熟萬民豊樂山麓安全／人法□久乃至三有均資四恩普／報見聞随喜同成緣種銘曰／三山遊観　一歩攝高／經力□譲　福田無寫／作之者孰　功德林□／偉□勝業　法運益隆／安政龍集庚申二月望日／興雲輪住□□慧含欽誌（左面）

痊經記

吾法弟慈亮信寫經功德□大營／若自書若教人書之淨業尚矣時／□今茲多年志願已滿痊自他寫／經於境内三處各處復築山起塔／以今自他功德昭著後来可謂□／勝作萬矣興□含公願□喜之□／□輔書寫自業猶且奇以此大塔／□重可咸矣其他随喜寫経信者／□多経自□人名如裏書牒録之／也余歡喜之拜日□厥勞遂命此／林閣□功德林下仰願／一字一石　輝於塵却／功德林中　常聞妙法／旹安政庚申花朝　前大僧正慈観識（右面）

一字一石書寫経目

法華經三部 肝心陀羅尼菩薩戒経 仁王経／般若心経三巻 金光明四天王品 辯天品三巻／薬師経 彌陀経 三陀羅尼 尊勝陀羅尼／光明真言　以上法華山痊之

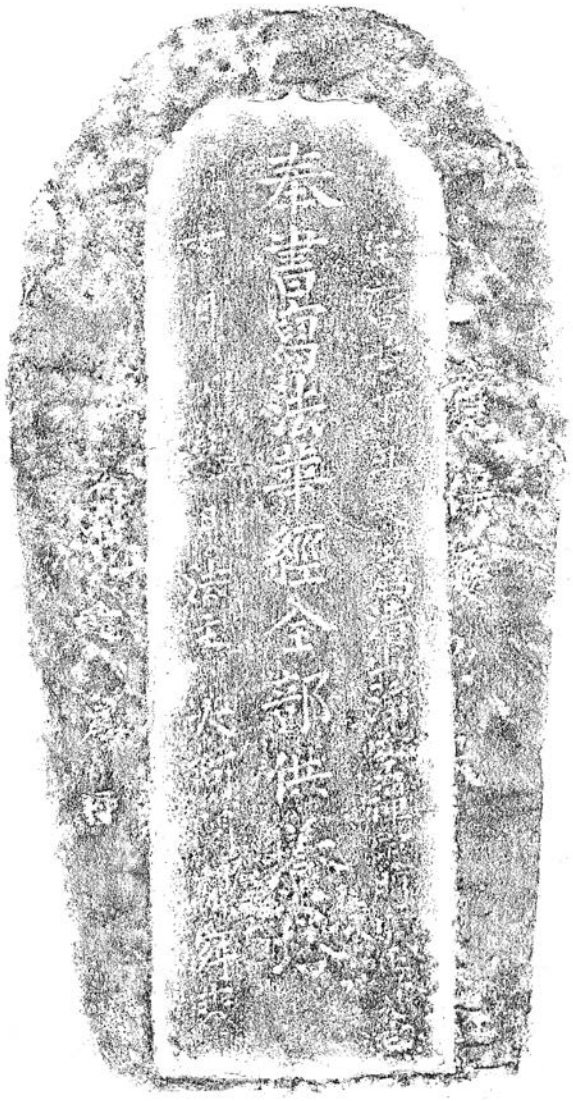
仁王經三部 法華四要品 普門品三巻　／肝心陀羅尼三巻 金光明辯天品五巻 地蔵経／本覺讃　舍利禮　寶篋印陀羅尼　／光明真言　以上仁王山痊之

金光明經三部 法華壽量品 神力品 囑累品／普門品 肝心陀羅尼 仁王護國品 心経五巻／本覺讃三巻　舍利禮 三條錫杖 千手陀羅尼／華嚴経 陀羅尼　諸真言　諸寶□／回向文　　以上光明山痊之　　（裏面）

写経の目的は功徳により、天下泰平・上下和親・万民豊楽・山麓安全などである。前大僧正慈観の法弟慈亮が写経の功徳を信じて自他が日光山の境内で写経をして、法華山・仁王山・光明山３所の築山を復して塔を起てた。一字一石の書写経は極めて多数にのぼる。

国東塔であり、基礎二段の上に反花、その上に方形石を載せる。ここの北面に塔名を刻して正面とし、他の３面に碑文を記す。その上には反花・蓮華座、梵字を刻す塔身が載る。梵字は北面にタラーク、東面にキリー

1：鹿沼市真名子　洞雲寺



4）：真岡市西田井　瑞光寺（経碑）

※経碑の番号は本文の番号に一致する。

0　1：6　10cm

第 391 図　石経碑拓影（１）

ク、南面にアク、西面にウーンの金剛界を表す。その上には笠と相輪が載る。正面は北を向いており、塚はない。

31）万延元年 (1860)、日光市萩垣面　興雲律院

法華塔

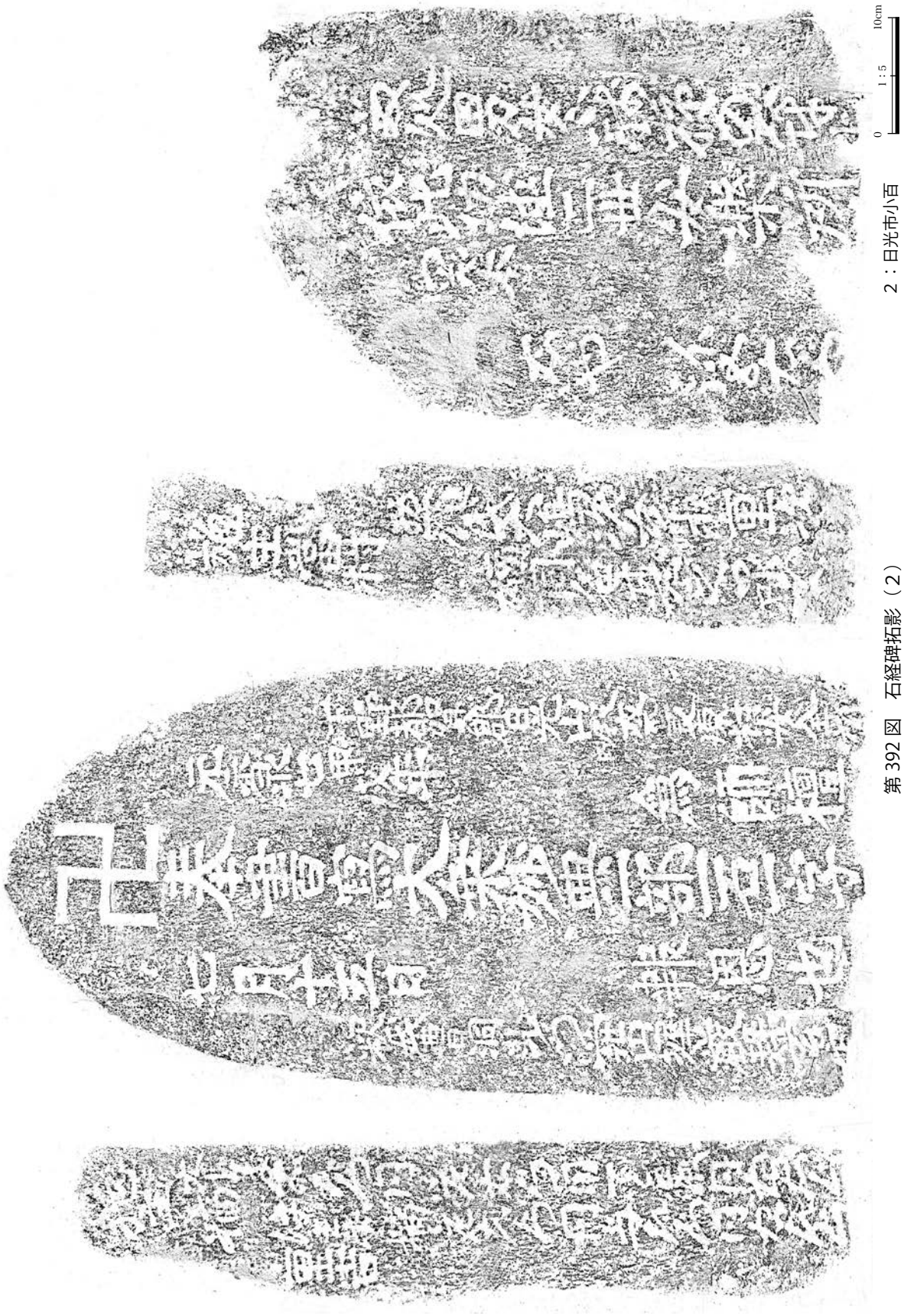
萬延紀元庚申七月

丁浣造立一字一石

経呪書寫乗甲等滅

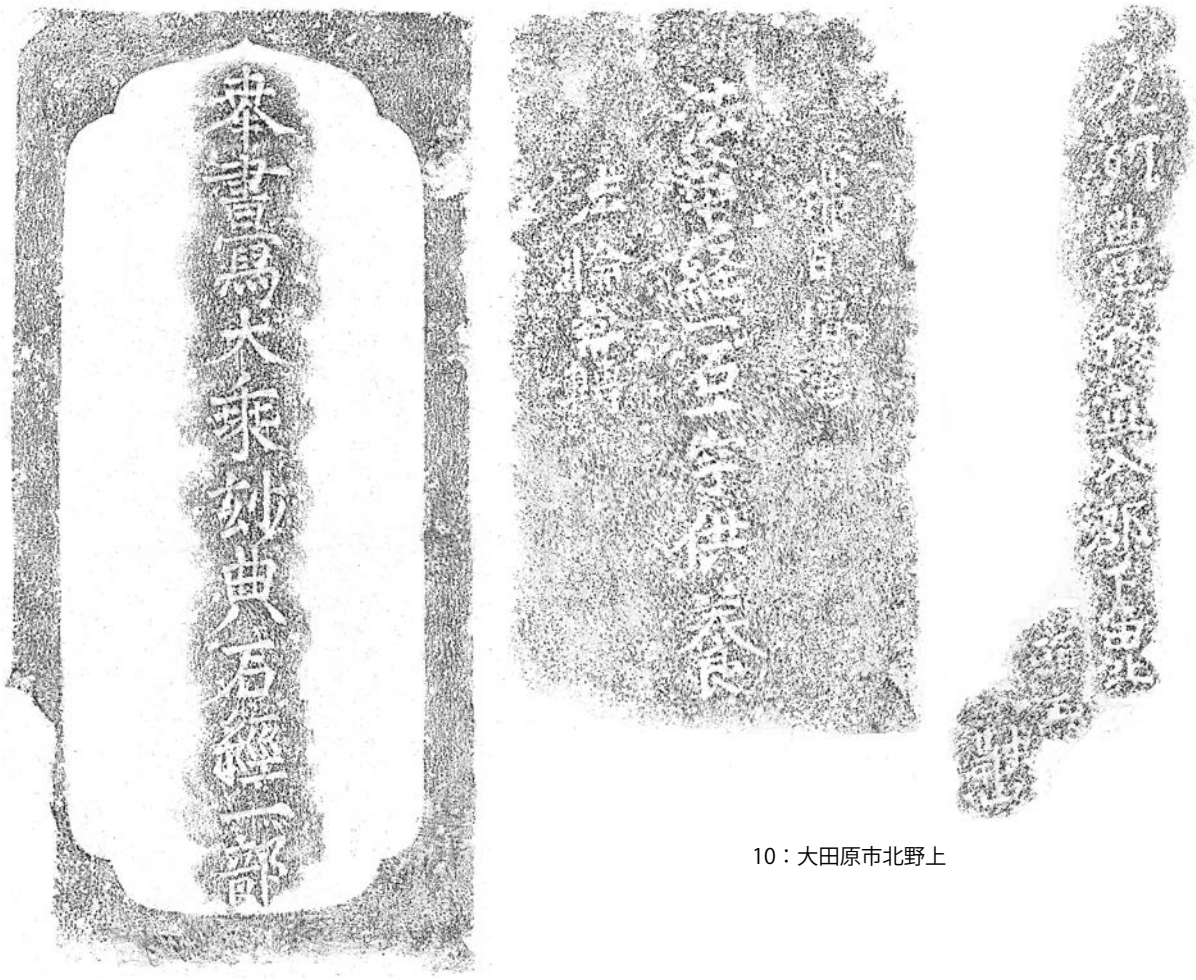
罪生□善願圓滿

塔は国東塔で、２段の基礎の上に反花、その上に方形石を載せ、これに「法華塔」、裏面に滅罪などの願文を刻す。蓮弁の上の塔身には正面にア、右にアク、左にアー、裏面にアンの梵字を刻す。この上に笠と相



2：日光市小百

第 392 図　石経碑拓影（2）



10：大田原市北野上

3：佐野市戸奈良　種徳院

0　1：6　10cm

第 393 図　石経碑拓影（３）

輪を載せる。正面は南を向いており、塚は確認できない。

32）慶應元年 (1865)、足利市本城　心通院

一字一石塔

當院前代住為法孫長久書写

□慶應元乙丑五月　現十九世敬立

墓地の斜面中腹にあり、高さ 46㎝の自然石の塔で、裏面に書写・造塔者が刻される。格座間・反花の台座に乗るが、別物であろう。

33）慶応３年 (1867)、佐野市閑馬下

慶應三年載次丁卯秋八月

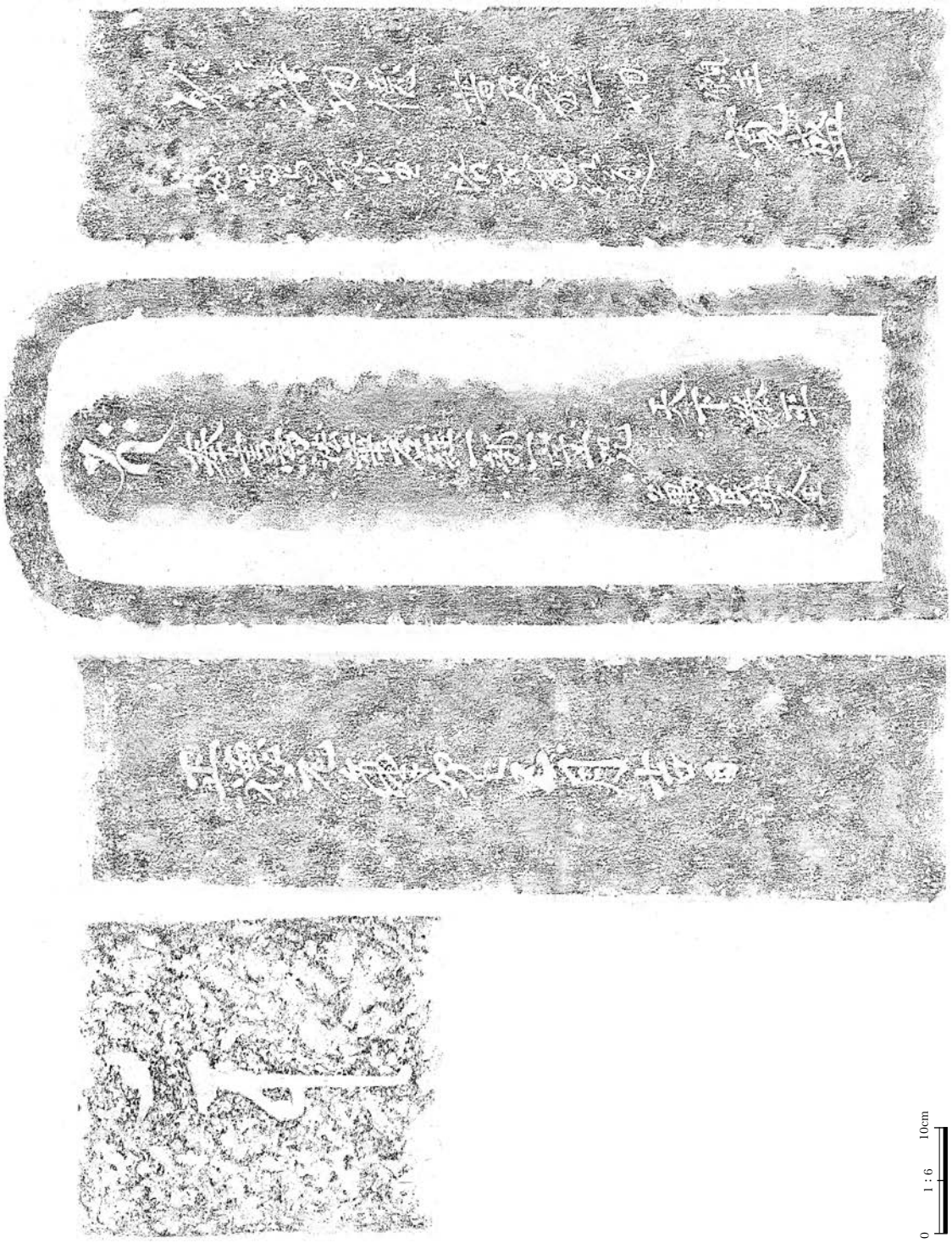
奉書写大乗妙典一字一石塔

信心堅固盡扶桑　廻國禮瞻神佛場　果願歸来書

妙典浮図磨石發清光

日本廻國神社佛閣巡拝行者　上岡治三郎

3.5 × 1.1 m以上×高さ 0.3 mで、割石で造った下部基壇上の右半分に、1.4 × 1.5 m×高さ 0.3 mの割石基壇を載せる。この上に切石基壇を二段設けて、唐破風付き笠付方形柱の経碑を建てている。切石基壇を含



5：佐野市高萩町　正福院

第 394 図　石経碑拓影（4）

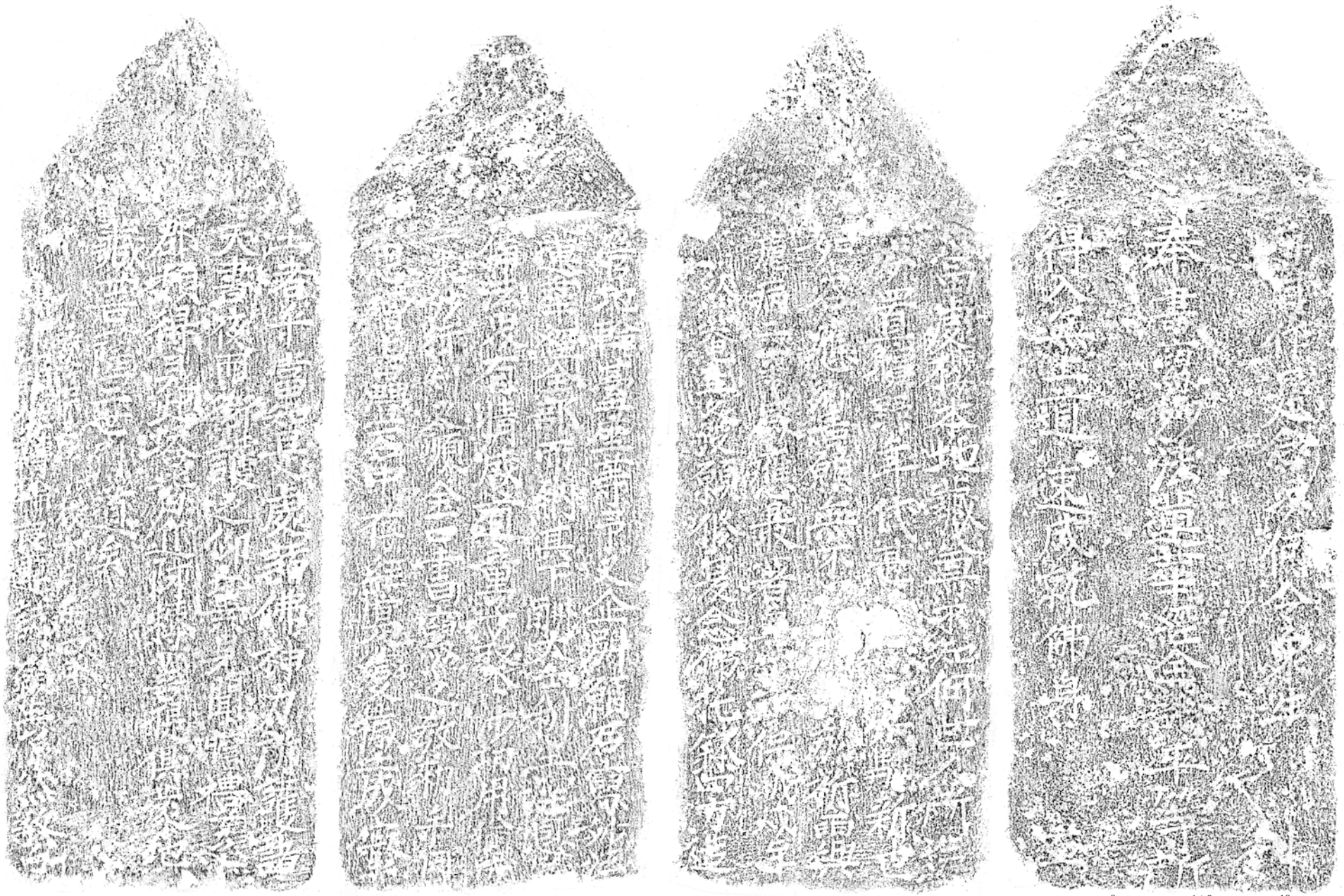
めて総高 2.15 mである。下部基壇の左半分には庚申塔と「□政戊午年三月吉日」銘の石仏を置く。

34）明治 18 年 (1885)、真岡市東沼

大乗妙典一字一石供養塔

35）明治 28 年 (1895)、芳賀町東高橋大畑　浄林寺

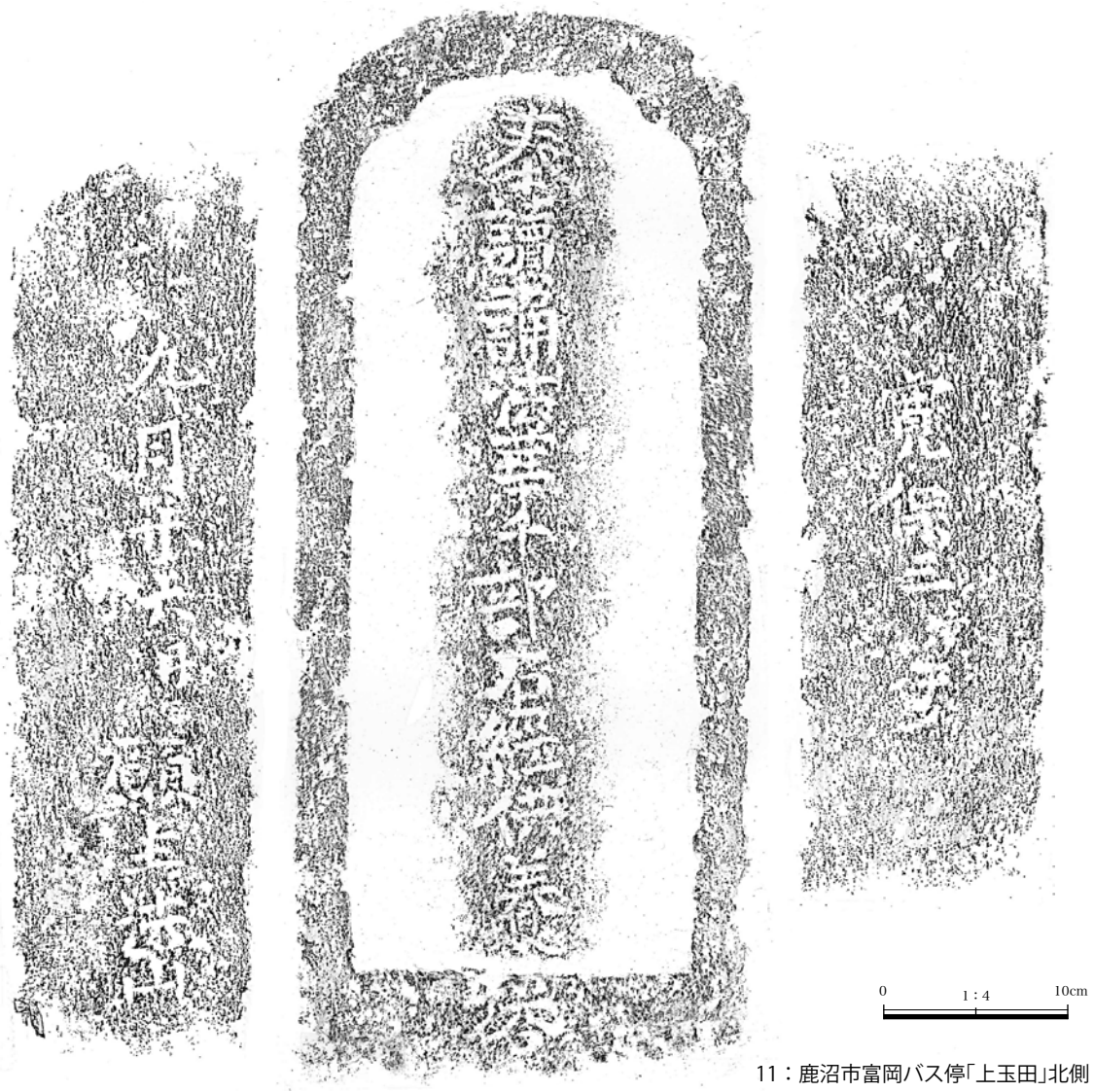
南無妙法蓮華経一字一石　大乗妙典一部　開結二柱　我一人□為救護　綱川喜四郎　明治二十八年未二



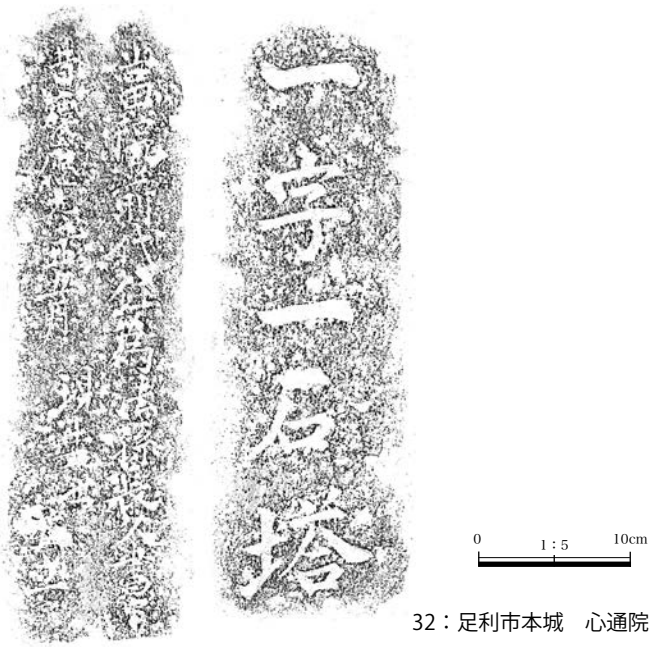
第 395 図　石経碑拓影（5）

7：高根沢町亀梨　桜元地蔵

0　1：3　10cm

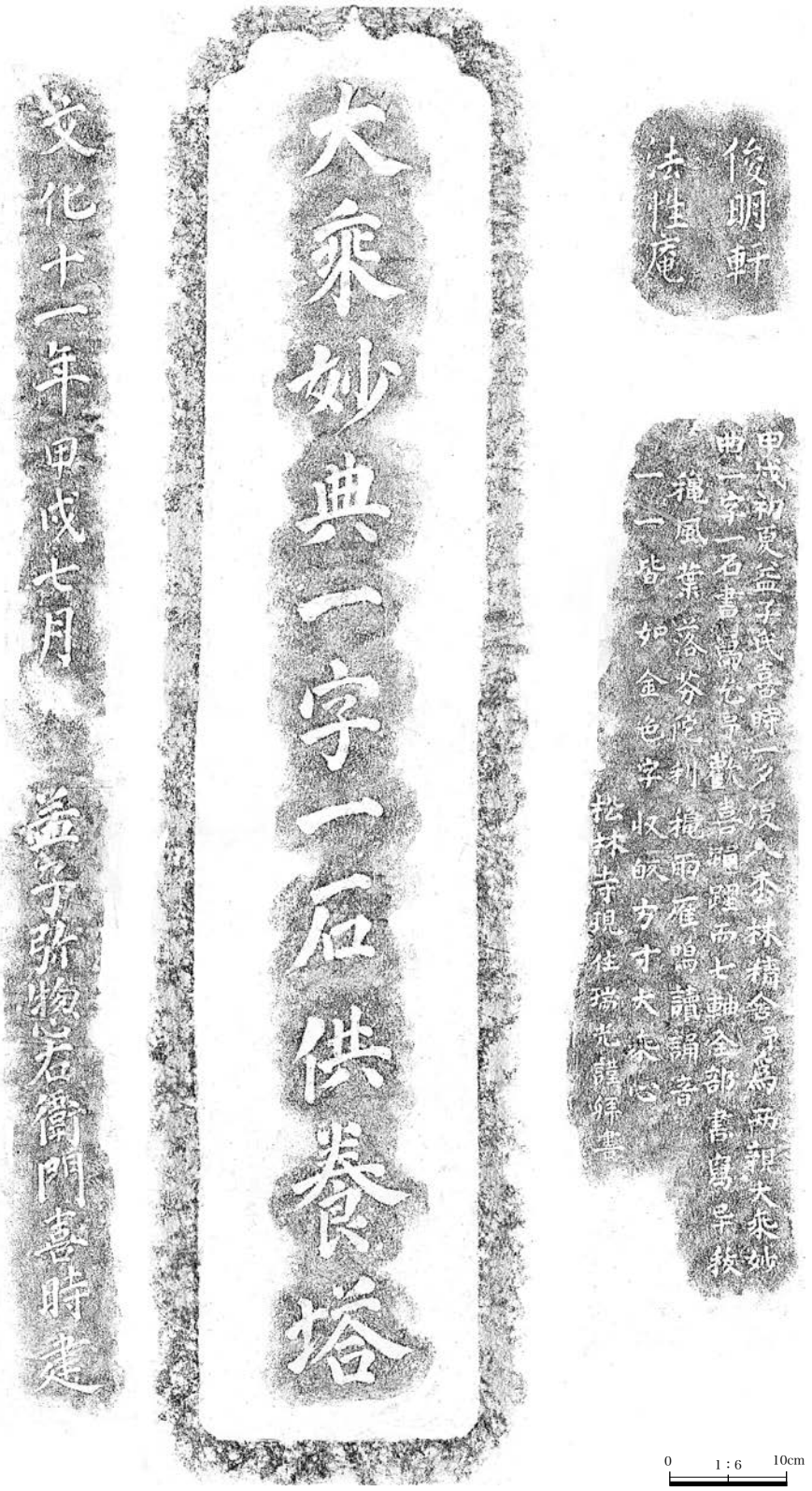


11：鹿沼市富岡バス停「上玉田」北側



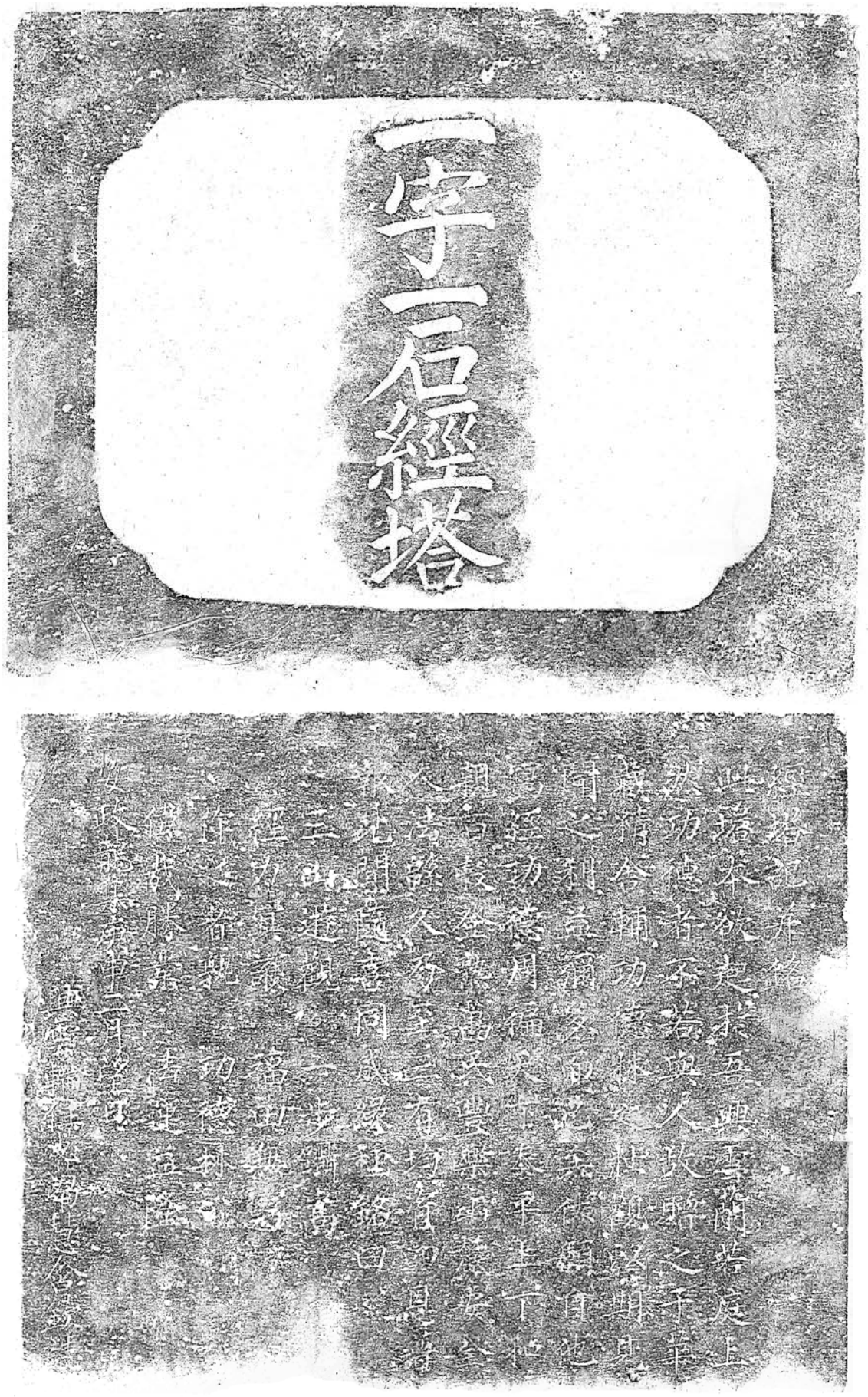
32：足利市本城　心通院

第 396 図　石経碑拓影（6）



24：那珂川町久那瀬　和尚塚墓地入口

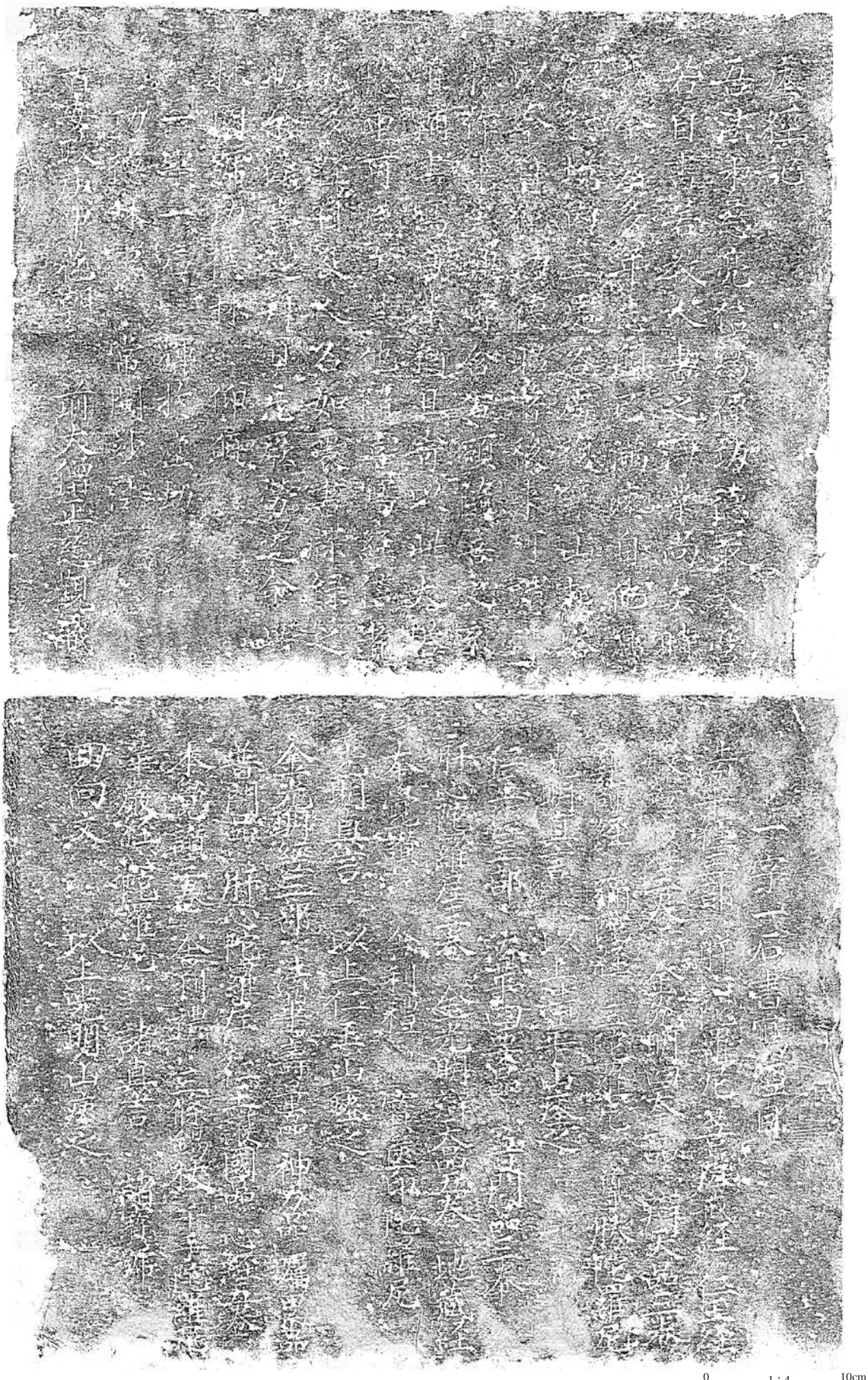
第 397 図　石経碑拓影（７）



30：日光市山内　華蔵院

0　1：4　10cm

第 398 図　石経碑拓影（8）



30：日光市山内　華蔵院

0　1：4　10cm

第 399 図　石経碑拓影（９）

月十六日　寛心院日鶴

36）時期不明　日光市山内華蔵院

一字一石經塔

方形石面に文字、宝珠正面にアの梵字を刻す。

以上のように、確認できた県内の石経書写塔は36基であった。経典の書写奉納に関する塔もあり、以下に示す。

1）寛文11年(1671)、下野市塚越

奉修造法華経妙典十部供養仏界菩提也

施主法然具足薩盤心経筐過□□谷具五智無候智大円鏡智故実覚敬白

2）享保9年(1724)、高根沢町石末

奉納大乗妙典供養二世安楽祈所

天下泰平　乃至法界　平等利益

享保九天辰　十月日　施主加藤氏　願主蓮真

3）享保20年(1735)、日光市匠町　慈雲寺

□妙法蓮華經塔　奉納書写□澤正英

享保二十乙卯□四月八日

4）宝暦7年(1757)、真岡市西田井　瑞光寺

寛　保　元

宝暦七丁丑天　為清山浄空禅定□□□□

奉書寫法華經全部供養塔

七月□日　法主大阿闍梨舜□

□　七　月　日

5）宝暦8年(1758)、高根沢町栗ヶ島

天下泰平　宝暦八戊寅歳　敬

奉書寫大般若経　六百軸　供養塔

国土安全　十月吉祥日　　白

光見寺□□

下野国栗固嶋村発起願主地蔵院□□

塩谷郡　　横須賀久兵衛建□

諸願成就皆合満足所

6）明和7年(1770)、芳賀町下高根沢

大乗妙典神佛閣納経供養塔　明和七庚寅年十月吉日

7）文化6年(1809)、小山市神鳥谷　光明寺

奉納大乗妙典　天下泰平　日月清名

文化六巳九月吉日　願主浄海

世話人　渡辺武右衛門　同利兵衛　春山治兵衛　山本長吉　畳屋弥七

このほかに、県内では一字一石経が9箇所程で確認されている。次に、これらをもとにして江戸時代における下野国内での経典書写に関して検討してみる。

①書写経　大乗妙典とは大乗仏教の妙理を説き明かした経典を示し、多くの場合は「法華経」をさす。ただし、なかには『大般若羅蜜多経 (大般若経)』等が大乗妙典として取り上げられることもある。鹿沼市千手町の書写経碑 (12) は経名の頭文字のみが残っているが、『最勝王経』であろう。この経典の供養は碑塔でみる限り少ないが、那珂川町乾徳寺の「奉金明光明最勝王経」塔などにみることができる。

写経は書写する素材によって分類される。石に書写する場合は、佐野市戸奈良塔・鹿沼市板荷塔と千手観世音塔・三坪塔・佐野市閑馬下塔などであり、鹿沼市三坪塔では『法華経』を石に写し、寺院（禅院・妙見寺）に奉納している。礫石経は一字一石経と多字一石経がある。日光市小百塔は「奉書寫大乘妙典一部一石一字」と刻し、一字一石経が埋納され、堀端経塚塔では「石経書写塔」と刻し、多字一石経が出土している。経碑文では「石経」と記すのが鹿沼市洞雲寺・鹿沼市富岡・真名子塔で確認でき、千手観音塔では「以石書写」、高根沢町桜元地蔵塔では「石寫」としている。今後、一字・多字一石経と経碑の一字一石経・石経の違いを対照して検討していく必要がある。

一方、高根沢町栗ヶ島塔・芳賀町下高根沢塔・高根沢町石末塔・小山市神鳥谷塔では経軸に仕立てての奉納とみられ、栗ヶ島塔では『大般若経』600 軸と数を明記している。下高根沢塔では神社仏閣に大乗妙典の法華経を納めている。日光市長畑普門寺には、大般若経 600 巻が伝わり、天保３年 (1832) に普門寺周囲の上猪倉・中猪倉・下猪倉・木和田島や船生などから、一人で５巻や９巻を納める者もあったという（今市市史編さん委員会 1998）。

②願意　佐野市戸奈良塔はで功徳が朽ちず、万物に広くわたるように願っているように、功徳を求めることは鹿沼市板荷地蔵寺跡塔や上蒲生２号経塚塔でも確認できる。この回向文は地蔵寺跡塔や上蒲生２号経塚塔の「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共生仏道」（註２）のような多用される偈文もある。高根沢町栗ヶ島塔では「天下泰平」・「国土安全」・「諸願成就」が願意として記される。また、石末塔では、これらに「平等利益」が加わり、華蔵寺の安政７年塔 (30) は、天下泰平・上下和親・万民豊楽・山麓安全などを功徳によってなされるよう祈願している。また、日光市萩垣面の万延元年一字一石塔では滅罪と円満が願意となっている。

書写経という性格からみて、経典の頌偈をもとにした願意が多い。しかし、前述のように会橋久保経塚や堀端経塚で故人の供養や菩提を目的にした墨書石が石経に混じって発見されていることから、施主などの個人的な写経・埋納・碑建立の目的は故人の供養・菩提でもあった。久那瀬塔でも「爲兩親大乘妙典一字一石書寫乞」うており、個人の菩提目的であろう。

日光市小百塔では「爲師檀報恩也」として僧侶や檀家の報恩、及び功徳によって二世安楽を願っている。珍しい事例としては、高根沢町亀梨桜元地蔵の経碑には、天然痘である疱瘡が二年続きで流行り、僧了然が発願して四方各地を念仏托鉢し、地蔵菩薩の台座等を造り、石写した『妙法蓮華経』全部（八巻）をその下に納めたことを伝える。僧自ら願主となり托鉢して浄財を集めて石に写経した事例である。関秀夫氏の研究によれば（関 1990）、鳥取県境港市の首なし地蔵では疫病が流行した際に一字一石の法華経を書いて村の四隅に埋めたといい、病魔退散祈願の一石経塚もあるという。桜元地蔵の経塚も病魔退散祈願の一例といえるであろう。疱瘡に対する脅威のための造立碑は県内にも確認でき、さくら市押上に「疱瘡神」(天保 14 年、1843) の線刻文字の自然石塔がある。疱瘡神供養塔（清水 1994）と同じ目的で一字一石経書写・埋納供養・造塔が行われたことを示す事例である。

三界万霊塔 (註３) と融合した事例としては、本経塚 (会橋久保経塚) と鹿沼市洞雲寺塔がある。会橋久保経塚では先述したように、念仏講供養と故人 (安山了□信士, 円妙照信女) の菩提を目的 (第 377 図７番石経)

とした『法華経』石経の書写及び埋納のようである。

一方、洞雲寺塔は「奉書法華石経一部三界萬霊」として、『法華経』石経書写を兼ねた三界万霊塔であることを全面的にうたっている。芦田正次郎氏の所説によれば、三界万霊塔は、多くの人から回向を受けやすい場所に建てる例が多いという (芦田 1994)。洞雲寺の塔は碑文が埋もれており、埋経の塚も確認できないことから、少し移動している可能性もあるが、山門に向かう参道脇にあって、『法華経』書写奉納によって修めた功徳を衆生に向かわせたと推測される。

仏法に関する祈願では、足利市心通寺塔は、仏法が長く久しくあることを祈念して、寺の住僧が経を一字一石で書写したものであり、これを現住僧（十九世）が塔を建立したことを伝える。

③施主・願主・世話人・建立者　施主は個人が多いのが書写事業の特徴である。さらに個人でも一人の場合、複数人の場合、僧侶の場合がある。

高根沢町石末塔では加藤氏、上蒲生遺跡１号経塚塔の荻原氏・国府田氏、世話人としては小山市神鳥谷塔で渡辺武右衛門氏以下４名である。このため、姓を有する俗人によって書写事業が行われたことが多いことがわかる。会橋久保経塚塔では書写供養塔の面には施主加藤氏とあるが、この面には宝積寺村念仏講中とある。このことから念仏講と書写事業の関係が問題になる。県内の資料では稀有であることから、他の資料も比較検討を要する。久那瀬塔では、益子弥惣右衛門喜時が松林寺に没入しており、両親の菩提のために僧が一字一石の書写を乞いており、施主は喜時である。

村の有力者によることが分かる事例は、日光市小百塔で「施主當村 惣領氏大嶋次兵衛重次」以下 10 名が施主となっている。

願主では、僧と俗人の場合があった。仏僧では、小山市神鳥谷塔では浄海、鹿沼市洞雲寺塔では興□、佐野市正福院塔では寛盛、鹿沼市富岡塔では法山、高根沢石末塔では蓮真が挙げられる。高根沢町栗ヶ島塔では発起願主は地蔵院の僧であろう。俗人では日光市興雲律院塔では奥州白川(現福島県白河市)の早川鉄蔵氏、日光慈雲寺塔の□澤正英氏、日光萩垣面塔の長沼季雄氏・日光安川塔の資助・桜井氏など俗人も多い傾向がある。仏名のある在家信者もあり、日光市山内華蔵院塔では願主が田口喜三郎乗利となっている。

願主は当地だけでなくて、鹿沼市地蔵寺跡塔では芸州（広島県）の僧頓誉、大田原市北野上塔では豊後（大分県）の勒山、奥州白川（福島県）の早川鉄蔵氏など遠隔地の者も石経書写の願主となっている。

埋納した経の書写事業は、基本的には埋納地の近隣で行われたと推定される。佐野市閑馬下塔では全国の神社仏閣巡拝行をしている上岡治三郎氏が書写と塔の造立を行っている。塔は一字一石塔のなかでは最も大きな部類であり、笠付方形柱という形態、及び切石基壇二段、割石基壇二段という構造からみても富裕な地域の有力階層による書写事業、造塔であったことが窺える。

日光市興雲律院塔では国を超えた白河から一字一石経の写経・埋納を行っており、日光という霊地の性格を良く反映している。日光では開山堂近くや大谷川北、及び社寺と稲荷川を挟んだ萩垣面にまとまって造立されており、霊地に写経奉納して功徳を得る目的が良く反映されている。

書写供養塔の建立者は、仏僧と俗人の場合が確認でき、仏僧としては日光市安川塔では圓音坊に住む寛明、俗人としては高根沢町栗ヶ島塔の横須賀久兵衛や日光市萩垣面塔の早川鉄蔵氏を挙げることができる。

④書写者　写経をする者は僧の場合が多い。堀端経塚では書写師の法印秀運が書写を行っている。この秀運が一人で書写したのか、秀運が代表になって複数の人で書写したのか断定はできないが、経碑の文面からは秀運によると判断される。この経塚の経石は大きさ５㎝以下が大部分で、10㎝以上は極めて少なくて、経石総数 897 個であった。

日光市安川の文化４年の法華経一字一石塔では圓音坊の周海が書写して、弟子で当寺の現住寛明が供養塔を建てている。また、小百塔は沙門の人が書写している。洞雲寺の書写塔では寺の八世無禅寒悟大和尚が係わっており、寺住僧が一石経書写を行い、埋納したと推測される。足利市心通院塔でも前代住職、那珂川町久那瀬塔は松林寺の瑞光が書写している。

書写者が僧侶でない事例も確認できるが事例は少ない。那須町の宝暦３年塔 (15) は、善男子・善女子が一字一石に各拝写して、禅定院殿の菩提を行っている。俗人が複数人で一字一石経書写したことを伝える資料である。石経ではない可能性があるが、日光市慈雲寺の享保 20 年□妙法蓮華経塔で、「奉納書写□澤正英」とあることから、個人による写経であったことがわかる。

近隣の事例では、群馬県太田市相場観音経塚で２万点近くの経石が出土し、経碑は

□□□□□七世父母佛果□□

奉書寫大乘妙典一字一石之寶塔

子孫□家長久之者宝永七寅七月十五日　願主参翁良實

誌正写

と刻され、僧侶と目される誌正が書写している。ここの２号経塚では『法蓮華経』全二十八品が書写されており、文字の書き方から複数の人が書写に携わったと推定されている。会橋久保経塚では特徴的な字形から一人による書写と判断したが、これらから一人の僧が書写したと、経碑の字句に従ってみるべきである。

伝世経典では、宇都宮市日枝神社蔵『大般若経』は室町時代から欠いた巻を書き補い折本 600 巻が伝わる（栃木県教育委員会事務局文化課 1983）。奥書に書写した者の名前が書かれている。それによれば、「宇都宮大口院尊長」(533 巻、安政三年歳次丙辰六月十日) や澄譽院恢 (534 巻、安政三年丙辰五月) や宇都宮清巌寺十五世中誉歓長 (555 巻、安政三年丙辰五月) などの寺の住僧や沙門という修行者が多いが、在俗者も書写しており、宇都宮鉄砲町鈴木清治 (408 巻、安政三年丙辰四月) や五十嵐与右門 (580 巻、安政三年丙辰六月) などを挙げることができる。また、一巻を複数人で書写することもあり、537 巻では奥書に

安政三年歳在丙辰夏六月初二日

廿三葉増渕権左衛門成栄噉盟謹書

十六葉同易三郎敬義噸首拝書

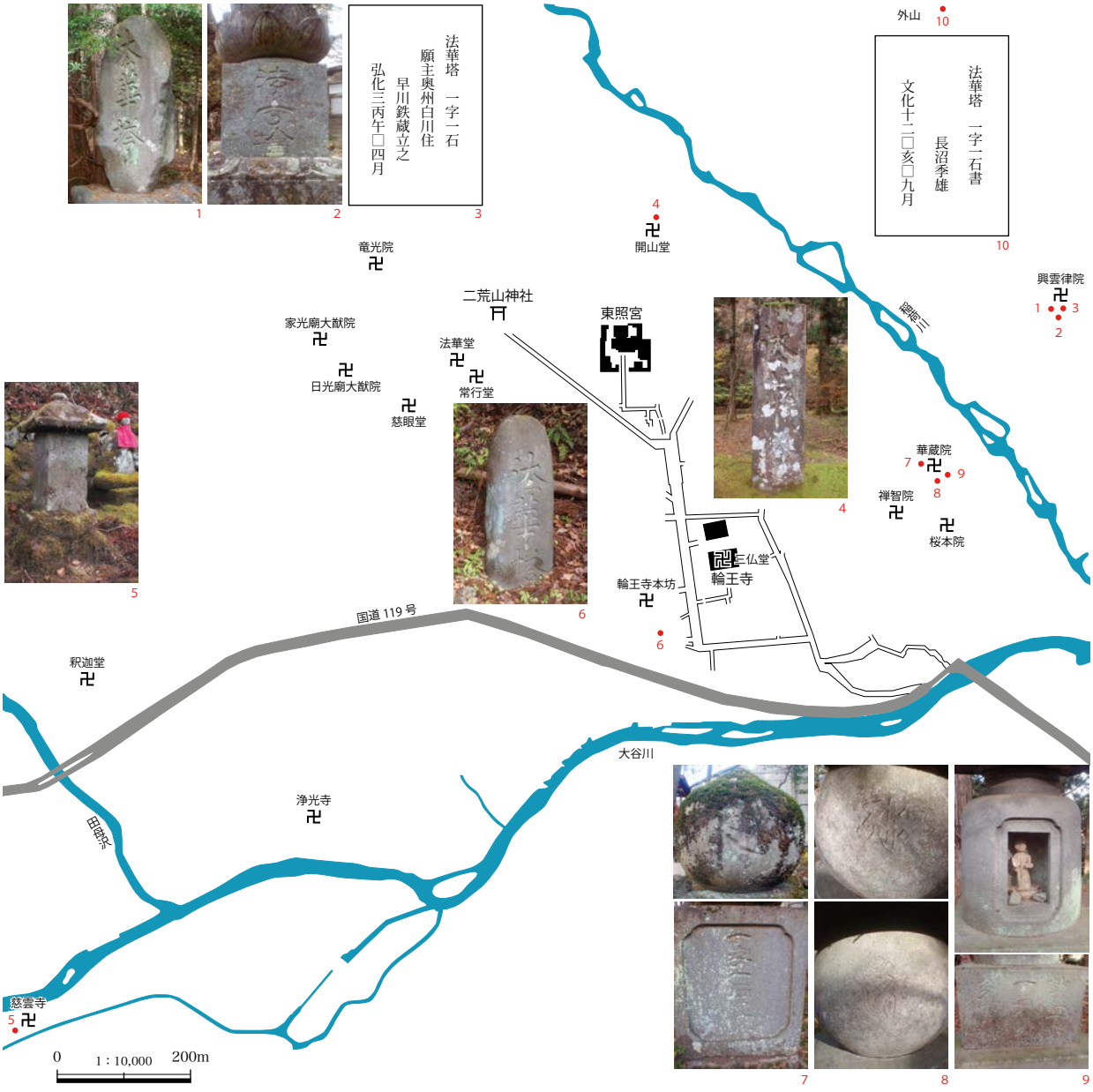
と、仏教帰依者二人が分担して一巻を書写している。このように、写経は仏僧や修行者、帰依者など様々な信仰者が行って経巻を納めていた。また、堀端経碑が伝えるように僧一人が書写する場合や日枝神社大般若経 537 巻のように複数の人で書写する場合もあった。

⑤石経の読誦　鹿沼市富岡塔は、「奉讀誦法華千部石経供養塔」とあることから、石に書写した『法華経』を保管しておき、読誦した事例である。書写石経は、直ぐに埋納すると思われていたが、千部読誦としていることからも比較的長い期間、巻品ごとに整理保管されていた可能性が高い。願主が仏名であることから、僧が係わっていたことがわかる。書写石経が埋納されるまでの過程を知るうえで貴重な資料である。群馬県大般若塚の経碑でも「讀般若六百経巻般若理趣一石一字繕寫拝誦」と刻しており、『大般若経』六百巻を読誦、『般若理趣経』を一石一字で繕写して、拝誦したという（新治村教育委員会 1988）。また、宝暦２年 (1752) の鹿沼市真名子塔は、「奉読誦大乗妙典一千部供養塔　奉書写大乗妙典石経一部供養」とあり、「大乗妙典」の石経書写と読誦を行っている。同じ経典であり一字一石、多字一石経を書写した後に読誦していた可能性がある。那珂川町久那瀬塔も松林寺住僧瑞光が初夏に大乗妙典一字一石の書写を乞い、造塔した７月には七軸書写した。その後、穐（秋）には読誦したことを伝える。三重県高田専修寺紅葉堂経塚の銘文では「丁亥

三月聚礫于紅葉堂以先朝所賜文具拝寫三部妙典痊之其傍擬旦昏諷誦　圓祥謹誌」としており（石倉 1900）、３月に紅葉堂に礫を集めて、「三部妙典」を礫に写した。病がいえて朝夕読んだといい、書写した浄土三部経 (『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』) を読誦していたのである。このように、経碑の銘文から、書写した石経は埋納するまでの間に読誦されていたことが明らかになった。

⑥経塚　経塚に碑が伴う事例は少なくて、発掘で確認されているのは高根沢町会橋久保経塚・上三川町上蒲生遺跡 1 号経塚のみであり、地表への封土はないが、日光市堀端経塚でも経碑と埋納経が発見されている。

また、日光市小百の経塚でも径 1 m程、高さ 0.2 m程の塚の上に経碑が建っており、発掘された一字一石経が再埋納されている。塚の規模では上蒲生遺跡の経塚が圧倒的に大きくて、径 16 ～ 17 m、高さ 3 mの規模を誇る。これ以外は 1 ～ 2 m程の大きさで、同様の傾向を示す。発掘されていないが、高根沢町亀梨桜元地蔵の経塚も小形の塚で、経碑があった塚の下に石経が埋納されている可能性が高い。佐野市閑馬下塔は



第 400 図　日光市山内・萩垣面付近の経碑

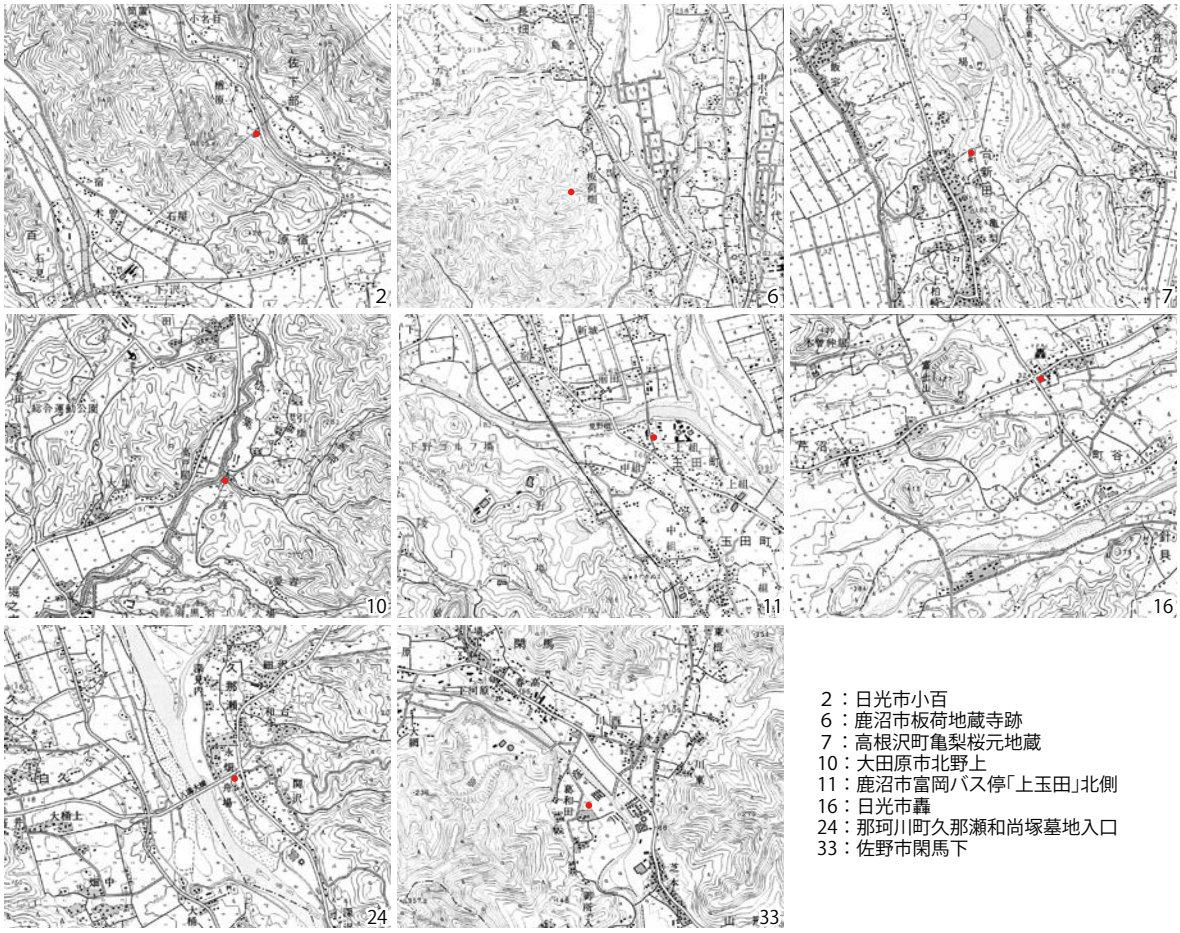
高さ 60㎝程に二段の割石造り基壇があり、ここに一字一石経を納めたと推測される。石塔の規模からみても本県最大規模で、解明が期待される。

⑦書写事業の時期　確認できた県内の石経書写塔は、鹿沼市洞雲寺塔が元禄５年 (1692)、日光市小百の元禄７年 (1694) が最も古い。18 世紀になり書写事業が多くなり、前半で 10 箇所、後半で７箇所に増える。19 世紀の事業も多く、前半で６箇所、後半のうち江戸時代が６箇所、明治に入ってからが２箇所で、明治になると格段に減っている。このうち、19 世紀になると、日光山内･萩垣面周辺で急増する傾向が明らかである。

⑧書写事業の類型化　経碑文などから下野国における江戸時代の石経書写事業をみると、その態様が多様であったので、類型化してみる。（第 400・401 図）

日光山内・萩垣面周辺の特異性：19 世紀になると、日光の山内・萩垣面に石経書写が盛んに行われ、経碑がまとまって確認できる。このような地域は下野国内では確認できず、特異さが窺える。幕府とも係わる霊地日光山内地域では、ほかの地域にない国東塔や多宝塔の石経塔も造られ、石造物としても特異である。ここの写経については華蔵院にある安政７年 (1860) の一字一石經塔に前大僧正慈觀の痊經記が示されている。法弟の慈亮が写経の功徳を信じて、多年志願していたところ、自他で日光山境内において写経をした。この善行することを喜び、修行道場に功徳が及ぶように願った。その願文が「一字一石　輝於塵却／功徳林中　常聞妙法」である。一字一石の書写事業も目録によると、村の寺の写経数と格段に異なっている。

寺の写経事業：寺の僧による石経書写である。この場合、僧が発願する場合と、俗人のために発願する場



2：日光市小百
6：鹿沼市板荷地蔵寺跡
7：高根沢町亀梨桜元地蔵
10：大田原市北野上
11：鹿沼市富岡バス停「上玉田」北側
16：日光市轟
24：那珂川町久那瀬和尚塚墓地入口
33：佐野市閑馬下

第 401 図　石経碑位置図

合がある。前者は仏法の続くことを祈願した足利市心通院塔の当院 18 世、疫病退散を祈念して発願した高根沢町亀梨塔の了然など、後者は寺に「一夕没入」する益子氏の両親のために写経を発願した那珂川町久那瀬塔などが挙げられる。日光市安川塔は書写者・経碑造立者の僧名以外の俗人名を記す。これも俗人が願主・施主で僧が写経した事例であろう。

村の写経事業：高根沢町会橋久保経塚塔は、加藤氏が施主となり、念仏講とともに書写事業を行っている。個人と講が写経事業を行う事例は稀有である。日光市小百塔は奈良原村の総領氏ほかの有志が施主となって、沙門が書写した。

石経書写の塔ある立地からみると、山村にある場合が散見した。日光市小百塔・佐野市閑馬下塔・大田原市北野上などがあり、山村での仏教信仰の浸透を知ることができる。

このように、写経事業も地域や個人の願意によって、多様な態様があったことが明らかになった。

（２）『法華経』等の読誦供養（第 33 表）

次に、『法華経』の写経と同じ経典供養である読誦塔について県内の資料を集めて、その願意や読誦集団の構成、施主・願主などを調べ、写経事業と比較して宗教活動の実態を解明していきたい。なお、集成に当たっては、市町村や個人での調査成果により行い、願意などの銘文までに及ばないものがあるが、遺存塔の数が多くて実地調査に至っていない。

①読誦の目的・願意　経を読誦供養するのは、圧倒的に利益と故人・先祖の菩提である。利益については定型的な願文であるが、分類すれば以下のようになる。

安楽・安全祈願：「一世安楽」・「二世安楽」・「国土安全」・「国土安穏」・「為先祖代々□　□現当所安楽祈願」・「村内安全」・「天下泰平」

幸福祈願：「為先祖代々仏果菩提子孫繁昌也」（小山市北飯田）

来生祈願：「安穏後生善所」（小山市東野田高松）

仏法・仏道祈願：「仏法繁昌」・「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆成仏道」・「自他法界」、「法界諸有情悉皆成仏道」（鹿沼市今宮神社）、「十界勧請　十方仏土中　唯有一乗法」（鹿沼市見野）・「受誡本寂□止宿施入両益」（鹿沼市高谷）、「寂寞無人声　読誦此経典　我爾時為現　清浄光明身」（鹿沼市智音寺）・「経曰若有聞法音　無一不成仏」（鹿沼市延命寺）、「具一切功徳　慈眼視衆生　福聚海無量　是故応頂礼」（佐野市安養寺）

成就祈願：「諸願成就」（佐野市船越　岡薬師堂）

その他：「乃至法界平等利益」・「六親眷属七世父母廻向」、「三界万霊有無両縁乃至法界平等普潤」（小山市福城寺）

現世の安全や繁昌や仏法隆昌に関する祈願は多くの碑文にみられ、『法華経』などの読誦の一般的な目的であった。先祖・故人の菩提については、代表的な事例を挙げておく。鹿沼市寺町雲龍寺の元禄２年 (1689) の如意輪観音像の銘文に

大乗妙法蓮華経
壱千部読誦奉供養
願以此功徳現世消災与楽
命終極楽国白蓮華座
光誉珠栄信女
秋誉妙薫信女為菩提也

第33表　経典供養・念仏供養石造物一覧

番号	銘文	年代	所在地
1	奉金光明最勝王経	寛延二年（一七四九）	那珂川町　乾徳寺内
2	百万遍供養塔	不明	那珂川町大内木戸
3	百万遍供養塔	明和八年（一七七一）	那珂川町久那瀬細沢　鳴井神社
4	百万遍供養塔	天明五年（一七八五）	那珂川町久那瀬　和尚塚墓地
5	奉唱百万遍供養塔	明和九年（一七七二）	那珂川町久那瀬浮見内
6	奉讀誦法華経一千部供養	天正十六年（一五八八）	那珂川町松野滝田内
7	空風火水地大乗妙典一千部供養	慶長三年（一五九八）	那珂川町松野滝田内
8	十万遍供養二世安楽	元文二年（一七三七）	那珂川町三輪　宝蔵院
9	百万遍供養塔　通寒信士　自生妙□位	天明六年（一七八六） 寛政七年（一七九五）	矢板市豊田　公民館裏
10	大乗妙典一千部供養塔　願主田野倉村安楽寺　二十五世法印道賢 当山覚慧代	寛政四年（一七九二）	矢板市寺山　観音寺
11	奉讀誦大乗妙典三千部教也　安穏後生善所　本願主　憲盛	天文二年（一五三三）	矢板市寺山　観音寺
12	百万遍供養塔　郷中百万遍	宝暦三年（一七五三）	矢板市田野原　松尾神社西
13	奉唱拾百万遍塔　爲二世安楽也　平野村百姓　三十軒建之	宝暦二年（一七五二）	矢板市平野　石田川沿
14	普門品供養	安政五年（一八五八）	矢板市後岡　観音閣境内
15	□奉□門品一萬巻供養　爲先祖菩提　願主　二世安楽　阿美弥右衛門		矢板市安沢中坪　地蔵堂墓地
16	大般若理趣分讀経一千巻供養　権大僧都法印長詮勒焉敬白　乃至自他平等利益　檀越施興　桜野邑中	安永六年（一七七七）	さくら市上阿久津　薬王寺
17	奉読誦大乗妙典一千部供養　下野國塩谷郡栗箇嶋村　大願主矢野太郎長昌	宝暦六年（一七五六）	高根沢町栗ヶ島　前原
18	奉漸読大乗妙典一千部供養塔　乃至法界　平等利益　阿久津徳左ヱ門	宝暦十二年（一七六二）	高根沢町大谷　東
19	奉読誦延命地蔵経一千巻供養塔　岡本良兵衛	天明四年（一七八四）	高根沢町花岡　東上
20	奉讀誦大乗妙典千部供養塔　願主齋藤　性　主永欽白	宝暦六年（一七五六） 昭和三一年（一九五六）再建	高根沢町宝積寺　鷲ノ谷
21	奉讀誦大乗妙典三千部供養　阿久津治郎平	天明三年（一七八三）	高根沢町大谷　東
22	百万遍供養塔	寛政八年（一七九六）	塩谷町田所
23	五百万遍供養塔	宝暦十三年（一七六三）	塩谷町大久保
24	百万遍供養塔	寛政十一年（一七九九）	上三川町磯岡　薬師堂
25	一千部供養塔	不明	上三川町多功
26	百万遍供養塔	明和九年（一七七二）	上三川町多功　見性寺
27	百万遍供養塔	延享二年（一七四五）	上三川町下神主
28	百万遍供養塔	不明	上三川町下神主
29	百万遍供養塔	寛政八年（一七九六）	上三川町石田　感応寺

施主伊矢野平兵衛貞明

とあり、二人の故人の菩提のためとしている。「願以功徳」以下の偈文は現世で災いを消して楽になり、命終えて極楽に行けるように祈願する定型的回向文に近いものである。

珍しい事例では、五穀成就（豊穣）や病気平癒を願ったものもある。栃木市藤岡底谷薬師堂（文政 11 年、1828）では、「普門品供養　五穀成就村内安全　野州都賀郡底谷村中」としており、栃木市赤麻東坪四社神社東の供養塔（嘉永元年、1848）では、「普門品供養　天下泰平五穀成就」と刻している。

病気平癒のための経読誦に関しては、目的や経緯を伝える稀有な碑文が小山市光照寺にある。長くなるが『小山市史史料編・近世Ⅱ』から全文を掲載しておく。

奉読誦阿弥陀経五千部供養基　寛延三庚午天七月十一日　同稔六月六日　釈浄以

夫以読誦大乗方等経典者双観金□一心不乱執持名号者当経仏意也、請爰江州野州郡桜生村住人小林姓惣右衛門尉正春、自禿童頃独離于爺嬢恩顔経東海山路跋渉商主産業恰俊傑士哉、固篤実柔順且宿殖善根之仁也、又有余力則修多善福徳因縁、故身仰一向専修之宗風、心崇於霊山大会之秋月、爾所将逮嚢老乃在形体之痛屢為之所悩、依之為病気平癒、且得生極楽、去従延享三寅□□日別読□阿弥陀経至寛延三庚午

番号	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
銘文	一千部供養塔	百萬人供養塔	奉唱満毎月念仏一百万遍供養　上坪山村念仏講中	一百万遍供養塔	奉真読法華経一千部供養	先祖代々諸聖霊薬師本願経一千巻　願主上野宝教	奉納天下泰平大乗妙典　当所行者□□	大乗妙典千部供養爲先祖菩提　天下太平　国土安穏　先祖戒名	普門品供養　三十七宗□成就院□□　講中連名	普門品供養塔講中　宿内安全　三九名	普門品供養塔　読誦連中村士国分村　外十五村名　当所施主七名連名	普門品供養塔	奉讀誦大乗妙典二千部供養塔　奉自讀普門品三万巻供養所□□　岡田氏　敬白　奉納大乗妙典六十六万部供養　徳侍者仁兵衛　二世安楽所	奉讀誦大乗妙典一千部供養塔　爲本瑞妙□菩提　願主粒羅源衛門眞信女	読誦任王経一千部　供養塔	大乗妙典一千部供養塔	観音経萬　当寺五世鶴州智門	大般若理趣分千座供養塔　当寺五世□□□□□	奉讀誦大乗妙典三千部供養塔　秋光院秋月貞故十一　高橋□　元禄十四年巳　施主高橋久衛門　施主高橋久エ衛	奉供養大乗妙典一千百部爲二世安楽也　向口翁連禅定門　乗法妙連禅定尼	法華経八千部金剛経万巻供養塔	大乗妙典千部供養塔	法華一千部供養塔	大乗妙典一千部供養塔	大乗妙典一千部供養塔	奉納千部供養	大乗妙典千部供養塔	大乗妙典千部供養塔	大乗妙典千部供養塔
年代	享保五年（一七二〇）	寛政五年（一七九三）	享保二十年（一七三五）	宝暦十三年（一七六三）	寛延三年（一七五〇）	明和三年（一七六六）	天保十三年（一八四二）	元文五年（一七四〇）	明治五年（一八七二）	文久元年（一八六一）	万延元年（一八六〇）	不明	正徳五年（一七一五）	元文二年（一七三七）	明和四年（一七六七）	安永四年（一七七五）	安永七年（一七七八）	天明五年（一七八五）	安政三年（一八五六）		正徳六年（一七一六）	宝永六年（一七〇九）	正徳六年（一七一六）	正徳四年（一七一四）	享保九年（一七二四）	元禄十二年（一六九九）	延享三年（一七四六）	宝暦四年（一七五四）	宝暦四年（一七五四）
所在地	上三川町上三川　善応寺	上三川町三本木	下野市上坪山　東福寺	下野市鯉沼　公民館	下野市本吉田南　黄梅寺	下野市川島　薬師堂	下野市本吉田南	下野市柴東原	下野市小金井一丁目　慈眼寺	下野市小金井一丁目　慈眼寺	下野市川中子古泉　馬頭観音堂	下野市国分甲東国分　国分寺	芳賀町東水沼　和泉観音堂	芳賀町下高根沢　梶内北共同墓地	芳賀町下高根沢　梶内西墓地	芳賀町下延生　延生寺跡	芳賀町下延生　延生寺跡	芳賀町下延生　延生寺跡	芳賀町西高橋　黒岡公民館	芳賀町東水沼　和泉観音堂下	真岡市西郷　沖渋川的場	真岡市東郷　若色北原	真岡市台町	真岡市根本愛宕下　能仁寺釈迦堂	真岡市青谷　日景	真岡市東大島　磯山	真岡市東沼　堂ノ浦	真岡市東沼　和田	真岡市東沼　和田公民館

天積向於五千部焉、多日□□雖得少悩実有仮合命数定期矣、終茲歳六月六日正□而唱仏名身心安楽如入禅□奄然卒矣、嗚呼孝子正英今相的於五七之忌辰建供養之一基、聊□于在命之志願須知弘誓願、船高棹于苦海順風□八功徳池彼岸得於阿□跋致位無疑乎、復願此功魏々永安乎、寿命長遠子孫無窮之蘭室焉、猶余薫徧法界有情含識喫於但受諸楽之香味者也、去爾

五千経巻満宝閣読誦当知大功徳積善余慶及家門同座蓮台受妙楽　当山廿六世桂光院西寛和尚敬白

生国江州野洲郡桜生村　小林太兵衛尉正英建

近江国野洲郡桜生村の小林惣衛門正春は商いを生業にした俊傑な人物で、余力は福徳を修めていた。しかし、衰えて体が痛いのが悩みであった。そこで病気平癒のため、延享３年から寛延３年までで阿弥陀経五千部を読み終えた。しかし、この年の６月６日に亡くなったので、正英が正春の生前の志願を広く知らしめるために供養塔を建てた。そして、寿命が長く、子孫が無窮であることなどを願った。

この碑文からは、『阿弥陀経』読誦の目的が老齢になっての病気平癒であったこと、五千巻読誦は延享３年 (1746) から寛延３年 (1750) までの期間を要したこと、造塔の目的は仏教を信仰した正春の志願を広め、子孫の貧窮にならないことなどを祈念することであった。

番号	銘文	年代	所在地
59	奉読大乗妙典一千部供養塔	延宝四年（一六七六）	真岡市下篭谷　中里
60	大乗妙典供養塔	正徳四年（一七一四）	真岡市上大曽
61	読誦大乗妙典経一千部	元禄十五年（一七〇二）	真岡市稲荷新田
62	百万遍供養塔	寛政十年（一七九八）	真岡市上谷貝
63	大乗妙典一千部供養塔	元禄十六年（一七〇三）	真岡市上江連
64	百万遍供養塔	不明	真岡市久下田
65	念仏一百万遍　大乗妙典一千部　普門品一万巻	元文三年（一七三八）	真岡市久下田　芳全寺
66	百万遍供養塔	享保八年（一七二三）	真岡市阿部品　八幡宮
67	大乗妙典千部供養塔	延享三年（一七四六）	日光市関谷　回顧橋
68	百万遍供養塔	明和元年（一七六四）	日光市金沢　上組公民館
69	百万編供養塔	宝暦十二年（一七六二）	日光市宇都野　根古屋
70	百万編供養塔	明和元年（一七六四）	日光市下大貫　下
71	百万編供養塔	延享二年（一七四五）	日光市下大貫　下
72	奉読誦大乗妙典一千部□供養起立	正保五年（一六四八）	日光市匠町　浄光寺
73	奉読誦大乗妙典一千部所　大阿闍梨翁慶法印覚位	元禄四年（一六九一）	日光市匠町　浄光寺
74	奉読誦大乗妙典一千部供養塔　為父母證大菩薩　施主鉢石中町之住　古橘善右衛門信吉　乃至法雨菩□十界	元禄十六年（一七〇三）	日光市下鉢石町　薬師堂
75	奉読誦法華経一千部供養□塔　六親眷属七世父母廻向乃至□□□無辺　平等遍照　維持　施主上鉢石小室七郎右衛門栄□	正徳四年（一七一四）	日光市下鉢石町　薬師堂
76	□法華経一千部供養所　瑜祇阿闍梨雄憲　宝永七庚寅天十月三十日　□本子白禅定門　正徳六丙申□正月廿八日	享保元年（一七一六）	日光市清滝一丁目　旧清滝寺墓地
77	読誦大乗妙典一千部供養	享保四年（一七一九）	日光市匠町　浄光寺
78	奉読誦大乗妙典一千部供養塔　願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成佛道	享保十三年（一七二八）	日光市上鉢石町　観音寺
79	普門品十万八千巻供養塔（戒名）	寛延二年（一七四九）	日光市匠町　浄光寺
80	法華三千部　當上人慈龍大□敬白	寛延三年（一七五〇）	日光市山内　延命坂
81	汰華塔	宝暦三年（一七五三）	日光市山内　開山堂付近
82	奉読誦妙法蓮華経一萬三千部佛説阿弥陀経十萬八千巻供養塔	宝暦四年（一七五四）	日光市山内　開山堂付近
83	普門品一万巻供養塔　大工町講中	明和八年（一七七一）	日光市清滝一丁目　清滝寺
84	永代大般若　施入之面々為一世安楽　当院八世覚邦代	寛政九年（一七九七）	日光市御幸町　竜蔵寺
85	地蔵菩薩像下置車輪法界往羽衆生成仏所　奉真誦大乗妙典一千部供養　現当二世安穏所　施主鈴木内蔵助秋信　同内女　随	明暦元年（一六五五）	鹿沼市千手町　千手院
86	奉読誦光明真言為二世安楽也　百万遍心誉寿貞　百万遍心誉寿貞　大門三左門　奉読誦大乗妙典一千部為菩提也　心誉寿貞　兵庫蔵長　大門三左衛門　乃至法界平等利益　孝子等　敬白	享保元年（一七一六）	鹿沼市千手町　千手院

②**願主・施主**　大乗妙典千部読誦供養などは、個人が願主や施主となる場合が多く、個人にも俗人と僧の場合がある。俗人が行う場合では、矢板市中坪地蔵堂墓地の普門品供養で先祖菩提のために阿美弥右衛門が願主になっており、芳賀町下高根沢梶内共同墓地の元文２年塔も菩提のため、さらに鹿沼市千手院の寛保２年塔では金子氏が 17 名の菩提のために奉読誦を行っている。在俗の仏教帰依者では、下野市川島薬師堂の明和３年塔に「先祖代々諸聖霊薬師本願経一千巻　願主上野宝教」と刻す事例などがある。個人で読誦・造塔する願文は「二世安楽」や「天下泰平」などの願意を除くと、多くが故人の菩提であって、経典供養の目的を良く示している。寺住僧が願主となる事例では、矢板市寺山観音寺塔で大乗妙典一千部供養塔があり、安楽寺道賢が願主になっている。

③**読誦経**　読まれる経は『法華経』が多くみられるが、このうち「観世音菩薩普門品第二十五 (観音経)」が多い傾向にある。経典供養で少ない事例としては、『金光明最勝王経』（那珂川町乾徳寺）・『大般若経第五百七十八巻般若理趣分品 (大般若理趣分)』（さくら市薬王寺）・『般若心経』（小山市東島田）・『延命地蔵経』（高根沢町東上）・『薬師本願経』（下野市川島薬師堂）・『仁王経』（芳賀町下高根沢）・『金剛経 (金剛般若経)』（真岡市沖渋川的場）・『阿弥陀経』（日光市山内開山堂付近）などがあった。このうち、『薬師本願経』は在俗の

番号	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111
銘文	奉読誦法華経一千部供養　戒名一七名　乃至法界　三界万霊六道四生平等普利　鹿沼町願主金子氏	妙経千部供養塔　信心施主等　願主元享海	法華十部塔　願主村上氏　施主筆子等　然蓮社良廊上人阿闍得誉在縁和尚位　文化十二乙亥天十月有二日寂	奉読誦法華経妙典一千部　法界諸有情悉皆成仏道　僧六人　俗人四人　施主敬白	十方仏土中唯有一乗法無二亦無二除仏方便説　奉□誦□□法華経一千部成就攸　欽白	奉読誦大乗妙典千部供養塔　戒名十八人　施主村上氏　当山順典代	大乗妙法蓮華経壱千部誦読奉供養　光誉珠栄信女　秋誉妙薫信女為菩提之　願以此功徳現世消災与楽命終極楽国白蓮華座　施主伊矢野平兵衛貞明	妙法蓮華経　十界勧請　十方仏土中　唯有一乗法　願主浅野平作	奉讃誦大乗妙典一千余□　乃至法界平等普利　敬白謹言	□□二拾□人男女　大乗妙典□経供養□　仏名十名	奉納大乗妙典供養塔　受誡本寂□　止宿施人両益	普門品一万八千巻供養　願主法印宥性	普門品心経万部供養塔　講中	百万遍念仏供養　廿七人	普門品供養塔　篠原□他三人の俗名	法華経一千部自読供養　願以此功徳　普及於一切　成仏道　寂寞無人声　読誦此経典　我爾時為現　清浄光明身　伝海　我等与衆生　皆共	法華経一千部供養塔　願主敬白　九部小林覚之進　ほか二十八人の名と部数　隣村中名主等　惣村中一切施主　願主大阿闍梨愿亮敬白　経曰若有聞法音　無一不成仏	奉唱満念仏百万遍供養塔　下西沢村　講中敬白	大乗妙典供養　楡木□　安生易□	奉供養大乗妙典一千部二世願望成就攸　法華読誦僧偈光順　木誉覚林信士　松月清林信女　施主　欽白　享保十二丁未天次二月廿五日　同九甲辰天二月廿六日　造立之　地主田中藤兵衛	奉読誦妙法蓮華経一千部供養之所　野州都賀郡亀和田村理解善心　敬白　礼拝之処廿一万度　天下泰平国土安穏　仏法繁昌　堅者法印舜栄　書之	普門品一万七百遍讀誦供碑　眞観禅定門俗名田那島平八	南無妙法蓮華経塔	讀誦普門品供養塔　願主十二人	普門品供養塔　駒岡講中　六人
年代	寛保二年（一七四二）	明和元年（一七六四）	寛政十年（一七九八）	慶安元年（一六四八）	承応二年（一六五三）	明和五年（一七六八）	元禄二年（一六八九）	天保九年（一八三八）	享保二年（一七一七）	享保五年（一七二〇）	宝暦十一年（一七六一）	寛政十年（一七九八）	文化十三年（一八一六）	不明	寛政六年（一七九四）	享保十一年（一七二六）	寛政十年（一七九八）	延享三年（一七四六）	宝暦六年（一七五六）	享保十二年（一七二七）	享保二年（一七一七）	元文元年（一七三六）	天保三年（一八三二）	宝暦二年（一七五二）	不明
所在地	鹿沼市千手町　千手院	鹿沼市千手町　千手院	鹿沼市千手町　千手院	鹿沼市今宮町　今宮神社	鹿沼市今宮町　今宮神社	鹿沼市石橋町　薬王寺	鹿沼市寺町　雲龍寺	鹿沼市見野　見野交差点東側墓地	鹿沼市下遠部　上共有地	鹿沼市下遠部　上共有地	鹿沼市高谷　高谷公民館西側	鹿沼市栃窪　等持院	鹿沼市酒野谷　円明寺	鹿沼市草久　林道河原小屋線	鹿沼市下久我　沢河原墓地	鹿沼市茂呂　智音寺	鹿沼市深津　延命寺	鹿沼市西沢町　北向地蔵	鹿沼市楡木町　例幣使街道大和田橋	鹿沼市楡木町　楡木町公民館西側墓地	鹿沼市亀和田町　堀切　小堂	鹿沼市中坪　寄居観音	鹿沼市下新田	鹿沼市大越路　常楽寺	栃木市尻内町駒岡　駒岡公民館

上野宝教が先祖の菩提による発願であり、『延命地蔵経』は岡本良兵衛による供養であることから、個人的な病気平癒などの目的で選ばれたことが推測される。

これらは、他の経と共に読まれることが多くて、真岡市沖渋川的場塔では『法華経』と『金剛般若経』、日光市開山堂付近の塔では『法華経』と『阿弥陀経』、小山市東島田塔では、『観音経』三十巻・『般若心経』二万巻と「光明真言」百万遍が読まれ、唱えられている。

小山市福城寺塔では「三界万霊有無両縁乃至法界平等普潤」のために『法華経』三千部・『大般若理趣分』一万巻・『薬師本願経』一万巻が僧侶によって読まれている。珍しい事例であるが、佐野市長谷場では村の 14 人の講で馬頭観音像を造立し、『観音経』一万巻を読誦している。諸願成就や馬の供養のために読誦されたとみられる。

鹿沼市千手院の享保元年塔では二世安楽のために「光明真言」、菩提のために『法華経』が心誉寿貞などによって読誦されている。同様の事例は、佐野市小見普門寺元文６年塔では下小見村講で僧円□が二世安楽のために『観音経』と「光明真言」を奉誦したことを伝え、佐野市岩崎明和３年塔でも真言 (マントラ [梵：mantra]) と『観音経』を読誦している。「光明真言」は密教において最重視される真言で、「オン・アボキャ・

番号	銘文	年代	所在地
112	奉読誦大乗妙典一千部供養　結衆二十八	享保九年（一七二四）	栃木市梅沢町坂口　大日堂
113	奉読誦普門品三萬三十巻当満願　結衆廿八人	享保十八年（一七三三）	栃木市梅沢町坂口　大日堂
114	普門品一万部供養塔　観音講中	明治十三年（一八八〇）	栃木市鍋山町　西方寺
115	百萬遍供養塔　千手村久保講中	明和九年（一七七二）	栃木市千塚町久保　百目橋東百米
116	大乗妙典供養塔	明和九年（一七七二）	栃木市千塚町犬塚　東坪墓地
117	奉読誦普門品供養塔　野州中形村中	寛保元年（一七四一）	栃木市仲方町　八坂神社南
118	奉読誦大乗妙典千部供養塔	不明	栃木市吹上町上坪　正仙寺
119	奉納聖観音法□□普門品三千三百三十三□□台願…	寛保十六年（一七三一）	栃木市吹上町八日市場　伊吹山
120	奉読誦大乗妙典一千部供養塔	延享二年（一七四五）	栃木市野中町　上坪地福寺
121	普門品供養塔	慶応元年（一八六五）	栃木市野中町　上坪地福寺
122	奉読誦大乗妙典千部供養塔	寛政七年（一七九五）	栃木市泉川町　泉光院
123	奉読誦観音経一万巻　奉供養現當二世　塚田村講中	享保十九年（一七三四）	栃木市大宮町　塚田
124	奉供養普門品一萬巻　国府村同行八人	宝暦三年（一七五三）	栃木市国府町萱場
125	奉読誦普門	寛政二年（一七九〇）	栃木市大塚町宿坪　大日堂
126	奉読誦普門品　大塚村同行	文化十年（一八一三）	栃木市大塚町中区　東場
127	奉読誦普門品	寛政五年（一七九三）	栃木市惣社町宿坪
128	奉読誦普門品供養塔　天下泰平国土安全當所講中	文化二年（一八〇五）	栃木市大光寺町　本郷公民館
129	百萬遍供養塔　女人講中願主淳彦	文化三年（一八〇六）	栃木市大光寺町　本郷公民館
130	普門品供養塔	寛政四年（一七九二）	栃木市寄居町平六　天満宮
131	百万遍供養塔　講中敬白	安永六年（一七七七）	栃木市大平町真弓　中内公民館
132	普門品供養　蔵井郷中	文化六年（一八〇九）	栃木市大平町蔵井　北坪共同墓地
133	普門品供養　土與村	寛政六年（一七九四）	栃木市大平町土与　共同墓地
134	百万遍供養塔　願主當村中	明和九年（一七七二）	栃木市大平町土与　共同墓地
135	奉読誦大乗妙典一千部　為父母佛果菩提也　施主川連村持法印	元禄十一年（一六九八）	栃木市大平町川連南　共同墓地
136	念佛百万遍供養塔　當村講中	享保六年（一七二一）	栃木市大平町牛久　牛来寺
137	普門品供養　戸恒村講中三十二□	文化元年（一八〇四）	栃木市大平町伯仲　南端十字路
138	普門品供養　戸恒村　世話人名	慶応元年（一八六五）	栃木市大平町伯仲　上坪十字路
139	普門品供養　摩呵	享和四年（一八〇四）	栃木市大平町富田第二　如意輪寺
140	百萬遍供養塔	寛文十一年（一六七一）	栃木市大平町富田第四　玉正寺
141	普門品供養　白岩村講中	寛政十年（一七九八）	栃木市大平町西山田一　六角堂
142	念佛百万遍　山田村片岡村　請願□□	安永七年（一七七八）	栃木市大平町西山田片岡　山中
143	奉読誦普門品供養塔　講中敬白	元文三年（一七三八）	栃木市大平町下皆川　地蔵堂

ベイロシャノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン」(註４) を誦すことで一切の罪障を滅し、無量の福徳があるとされる。

「大乗妙典法華経」の願文では、安楽･安全･幸福祈願や仏法･仏道祈願などをしており、これに「光明真言」の除難や滅罪などの功徳が加わることを祈念したものとみられる。

「南無阿弥陀仏」名号を口に出して唱える称名念仏は、経典読誦と共に行われる事例が散見する。真岡市芳全寺塔では念仏百万遍と大乗妙典一千部、『観音経』一万巻が読誦されている。栃木市中耕地大日堂塔でも念仏百万遍と光明真言供養が行われ、栃木市下宮天王堂天明５年塔では十九夜念仏の折、『観音経』が読誦されている。ここでは僧侶が導師となって村の講で実施している。また、小山市下河原田の安永９年塔では先祖代々、信士・信女の菩提のため、個人によって百六十万遍念仏と『法華経』･「光明真言」百万遍の読誦がなされた。佐野市普門寺宝暦２年塔でも『観音経』「光明真言」供養と念仏供養が同一碑に刻されている。

このように、最も多く読誦された『法華経』･『観音経』や「光明真言」は念仏を行う場で読誦されることも多かった。会橋久保経塚でも「南無阿弥陀佛」の墨書石が発見されており、碑文でも宝積寺村の念仏講で加藤氏が施主となって『法華経』書写を行っていることと同じ動きである。このような、『法華経』と阿弥

番号	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175
銘文	奉読唱普門品供養塔　天下泰平　国土安全　村中	普門品供養　天下泰平　国土安穏　右い王ふねみち	薬師念仏供養塔	光明真言供養塔　念仏百万遍供養　下野国都賀郡只木村新田中	普門品読碑　當所発願五十畑以左衛門正孝　當社志願主…	奉自読大乗妙典千部供養　権大僧都法印裕覚　下野都賀郡飯塚	普門品　光明真言供養塔　普門品講中　光明真言善男女	奉唱百万遍供養塔　野州都賀郡大崎村向中講中	普門品供養　江川　数野講中	普門品供養塔　天下泰平国土安穏　下野国都賀郡赤間村講中	普門品供養塔　天下泰平国土安穏　野州都賀郡赤間村講中	普門品供養　天下泰平五穀成就	普門品供養　野州都賀郡中根村中　願主當所戸崎講中	奉読誦観音経三萬巻供養塔　野州都賀郡中泉庄郷中前原村鎧新田	百万遍供養　□□講中	念仏百万遍供養　帯刀村中	百万遍供養塔　村講中	普門品供養　五穀成就村内安全　野州都賀郡底谷村中	奉読誦普門品三万三千三百三十三巻供養塔　天下泰平国土安全…	奉読誦普門品三拾三万三千巻　底谷村小嶋□□…	奉読誦普門品三万巻供養塔　具一切功徳慈眼視衆生講中…	奉読誦普門品供養　為二世安楽　下野国都賀中泉庄藤岡村筌場…	奉読誦普門品七万巻供養　男三拾三人女七拾三人　女人願主…	十九夜念仏供養　奉読誦普門品　野州下宮村七軒講中　導師弘学	普門品供養　野州都賀郡下宮村鉢渕中　導師弘海	奉讀誦大乗妙典一千部供養塔　法山浄音居士　法翁妙音大姉　靈位 寛山自證居士　眞善妙量大姉　霝位	奉寄進百万遍諸霊菩提所　為結衆百九拾四人	奉供養□仏百万遍講中　三年三□□願成就了　雨谷一結□輩敬白	百万遍供養　間々田上丁同行	奉百万遍念仏供養二世安楽	百万遍供養塔　野州卒島村同行廿九人	百万遍供養塔　下生井村東講中　照誉祐信
年代	元文五年（一七四〇）	天明五年（一七八五）	安永七年（一七七八）	宝暦五年（一七五五）	安政五年（一八五八）	寛保三年（一七四三）	文化六年（一八〇九）	宝暦六年（一七五六）	文政九年（一八二六）	天明二年（一七八二）	宝暦十二年（一七六二）	嘉永元年（一八四八）	弘化四年（一八四七）	明和九年（一七七二）	天明三年（一七八三）	宝暦四年（一七五四）	天明七年（一七八七）	文政十一年（一八二八）	宝暦八年（一七五八）	元文四年（一七三九）	元文三年（一七三八）	寛保元年（一七四一）	元文四年（一七三九）	天明五年（一七八五）	文化七年（一八一〇）	寛政十一年（一七九九）	宝永五年（一七〇八）	享保十一年（一七二六）	享保十三年（一七二八）	享保	元文三年（一七三八）	寛保三年（一七四三）
所在地	栃木市藤岡町太田中坪　太田公民館	栃木市藤岡町太田中坪　太田公民館	栃木市藤岡町都賀川沼　万福寺跡	栃木市藤岡町甲　中耕地大日堂	栃木市藤岡町大前五区本郷　薬師堂	栃木市藤岡町大前五区本郷　薬師堂	栃木市藤岡町大前本郷　大前神社	栃木市藤岡町大前本郷　大前神社	栃木市藤岡町赤麻　西江川南端丁字路	栃木市藤岡町赤麻　北原中坪	栃木市藤岡町赤麻　大坪赤麻寺	栃木市藤岡町赤麻東坪　四社神社東	栃木市藤岡町中根中根新田　観音堂	栃木市藤岡町西前原　西前原研修館	栃木市藤岡町部屋部屋上　円城寺	栃木市藤岡町帯刀　共同墓地	栃木市藤岡町石川　石川研修館東	栃木市藤岡町藤岡　底谷薬師堂	栃木市藤岡町藤岡　底谷薬師堂	栃木市藤岡町藤岡　底谷薬師堂	栃木市藤岡町藤岡新町　歓喜院跡	栃木市藤岡町藤岡　筌場公民館	栃木市藤岡町藤岡町篠山　篠山神社	栃木市藤岡町下宮　天王堂	栃木市藤岡町下宮　天王堂	栃木市岩舟町古江　東光院	小山市福良　中福良公民館	小山市雨ヶ谷　雨ヶ谷公民館	小山市間々田五丁目　浄光院	小山市萱橋　薬王寺	小山市卒島　薬師堂	小山市下生井　共同墓地

陀信仰・薬師信仰・地蔵信仰の関係については、第４章第３節を参照して頂きたい。

④読誦者　「大乗妙典」の読誦は僧が代読する場合と願主や講員が集団で行う場合があった。「大乗妙典法華経」を千万部誦読するのは困難であったようで、鹿沼市薬王寺塔では、「奉読誦大乗妙典千部供養塔　戒名十八人　施主村上氏　当山順典代」として、村上氏が 18 名の菩提のために行った大乗妙典千部供養は、薬王寺の順典が代わりに読誦した。また、鹿沼市楡木町の享保 12 年塔には、２名の故人の菩提、二世願望成就のため、光順が大乗妙典一千部を読誦している。

俗人が大乗妙典千部読誦供養という一大事業を行った事例は少なくて、栃木市坂口大日堂享保９年塔では「奉読誦大乗妙典一千部供養　結衆二十八」、小山市上国府塚の明和３年塔では「南無法蓮華経一千部　上国府塚講中」として、結衆や講員という集団で読誦事業を行っているが、厳密には僧への委託代読の可能性も残る。具体的な事例では、鹿沼市延命寺の寛政 10 年塔では法華経一千部供養として、小林覚之進が９部、以下 27 名の各自部数が記されている。ここで注目すべきは、村の有力者である名主が主体となって事業を行っていることである。『法華経』読誦供養層を示している。

僧か仏名を持つ者と共同で読誦することも少数確認できる。鹿沼市千手院の享保元年塔は心誉寿貞と蔵長

番号	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200
銘文	百万遍念仏供養　講中	百万遍供養　塩沢村念仏講中　願主敬白	百万遍供養　施主講中	奉唱一百万遍為二世安楽之也　右　おやま　みふミち　左　おとめこかミち	百万遍供養塔　覚日円光居士　□鑑明照大姉	奉読誦大乗妙典一千部　法印良賢和尚　有頂無簡同入阿字　乃至法界平等利益　願主敬白　野州都賀郡塩沢村無量寺	奉読誦大乗妙典一千部　法華会上十方三世諸仏菩薩　師匠父母四世六凡同証□霊　当寺四代関叟鉄門	奉読誦普門品供養二世安楽攸　野州寒沢同行廿九人	奉□□普門品三十巻　光明真言百万遍　般若心経二万巻　為先祖代々□　并現当所安楽祈願　願主昌観	奉読誦観音経数千巻　為現世安穏後生善所也　施主野田高松村惣人数	奉読誦普門品一万巻供養　下生井村	奉漸読大乗妙典六十部供養　下野国都賀郡間間田町　天恵山龍昌禅寺七世温故新叟造立焉	普門品三万巻供養　野州都賀郡西黒田	奉読誦普門品供養　為現当二世安楽也　野田村高松講中敬白	法華妙典一千部供養塔　為先祖代々仏果菩提子孫繁昌也　塩浜伝右衛門	普門品供養塔　松沼邑講中	普門品供養塔　大川嶋村施主　楽翁慈伯居士	南無法蓮華経一千部　上国府塚講中	大乗妙典千部供養　蓮重院嶋野寿栄居士　下野国都賀郡飯田新田邑嶋野治右衛門	普門品供養　下野国都賀郡東黒田新田　講中　施主鈴木幸七ほか一四人の名	奉読誦普門品供養塔　野田村講中	奉読誦普門品経供養塔　上中宿講中	普門品一万部供養塔　下野都賀郡小林郷中	法華経供養塔　念仏百六拾万遍光明真言百万遍　安永八己亥天二月二十日柳山春恵信士　寛政八丙辰六月二十七日本道了栄信女　先祖代々　施主金久保多七	普門品供養塔　当所講中四十六人
年代	明和三年（一七六六）	明和六年（一七六九）	天明二年（一七八二）	寛政四年（一七九二）	寛政二年（一七九〇） 文政四年（一八二一）	元禄十年（一六九九）	正徳三年（一七一三）	享保八年（一七二三）	享保十二年（一七二七）	享保十三年（一七二八）	延享元年（一七四四）	延享三年（一七四六）	延享三年（一七四六）	延享三年（一七四六）	宝暦二年（一七五二）	宝暦九年（一七五九）	明和二年（一七六五）	明和三年（一七六六） 明和六年（一七六九）	明和六年（一七六九）	明和七年（一七七〇）	安永二年（一七七三）	安永五年（一七七六）	安永五年（一七七六）	安永九年（一七八〇）	天明七年（一七八七）
所在地	小山市栗宮　下宿集会所	小山市塩沢	小山市南和泉　観音堂	小山市田間　血方神社	小山市下初田　共同墓地	小山市塩沢　共同墓地	小山市網戸　長慶寺	小山市乙女寒沢　薬師堂	小山市東島田　地蔵尊立像	小山市東野田高松　共同墓地	小山市下生井　共同墓地	小山市間々田一丁目　龍昌寺	小山市西黒田　西黒田中公所	小山市東野田高松　共同墓地	小山市北飯田　共同墓地	小山市松沼　本郷公民館	小山市大川島　共同墓地	小山市上国府塚　共同墓地	小山市平和　薬師堂	小山市東黒田　須賀神社	小山市東野田　雷電神社	小山市乙女　龍泉寺	小山市南小林　共同墓地	小山市下河原田　共同墓地	小山市栗宮御鍋塚　共同墓地

が菩提のために大乗妙典千部供養を行っている。また、鹿沼市今宮神社の慶安元年塔では僧６人と俗人４人で『法華経』一千部を読誦している。また､鹿沼市下遠部下の享保５年塔では仏名 10 人で大乗妙典供養を行っており、仏名であることからも在俗者による読誦と推定される。

多くの大乗妙典奉読誦供養塔には読誦者は刻されておらず、分量からみても俗人個人では達成しがたい事業であって、僧による代読誦や聖俗混じった集団や講集団による読誦が多かったと推定される。また、僧を導師として俗人が個人で読誦することも僅かに確認できる。佐野市長慶寺塔は「大乗妙典自読千部供養　自他法界　平等利益　導師栄山叟　亀山太郎右エ門　藤原良長」とあり、願意も菩提でない大きなものである。

⑤誦読場所　読誦する所としては、先述の鹿沼市薬王寺塔は寺の境内に碑が造立されていることから、寺で住持が代読誦したと推定される。同様の事例は、日光市竜蔵寺塔でも「永代大般若　施入之面々為一世安楽当院八世覚邦代」として、竜蔵寺住持覚邦が施主に代わり『大般若経』を読誦しており、寺で代読誦した可能性がある。代読誦は僧の間でも行われ、矢板市寺山の寛政４年塔では願主が安楽寺法印道賢であるが、当山の覚慧が大乗妙典一千部供養を行っており、安楽寺で大乗妙典の代読誦を行ったと推測される。

⑥『観音経』読誦供養　『観音経』は、観音菩薩信仰に基づいて古代インドで単独成立した経典であった。

番号	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226
銘文	奉漸読法華経三千部供養塔　般若理趣分一万巻　薬師本願経一万巻 法主天明山福城寺前住大阿闍梨堅者法印広海謹言　奉巡礼四国西 国秩父板東百八十八箇所供養　平義道書　三界万霊有無両縁乃至法界 平等普潤	普門品供養　上泉村講中	普門品万部供養塔　下初田邑願主講中	普門品供養　野州寒川郡上生井村講中	普門品供養　野州下国府塚村中　世話人講中	普門品供養　当山現住十二世長端代　願主　福地彦次郎源則俊　下野国都 賀郡西黒田村講中　七人の名　世話人四人の名	普門品供養　当所願主十人の名　国分村拾人　嶋田河岸壱人　杉木 村七人小薬村二人芝村壱人　岡村弐人　三拝河岸六人小宅村四 人川子内五人高谷村六人　仲村壱人　半田村口人　大宮村七人 谷新田一人　上荒川村壱人　桶田村二人　大内川二人　右村々講中安 全	普門品供養　講中　下野国都賀郡白鳥村中　願主金沢長右衛門ほか一 二人の名	普門品供養塔　小薬村多左衛門ほか六人の名　樋田村嘉平治　横堀村 儀兵衛上川原田村佐左衛門小宅村幸蔵　大宮村重兵衛ほか六人の 名　国分村勘右衛門ほか四人の名	普門品供養塔　春山亮松清信士　覚意妙淳清信女	普門品供養塔	奉造立大乗妙典経一千部供養石塔	奉読誦大衆妙典一千部供養	奉読誦大乗妙典一千部供養	観音菩薩経三万三千巻	普門品三万三千三百三十三巻	奉読誦当塗王経供養塔	普門品供養塔	普門品百万巻供養塔	普門品供養塔	法華供養塔	普門品光明真言　奉建立念仏供養	観音経読誦供養塔　能仁寺　新田組合中	奉誦普門品光明真言為□□安楽也　法印円□　下小見村講中	奉唱満光明真言二世安楽　下多田村光明講　善男女三五人	普門品壹万為二世安楽　山越一七人　栃本一二人　厚信善侶敬 白
年代	寛政四年（一七九二）	寛政五年（一七九三）	享和二年（一八〇二）	文化十一年（一八一四）	文化十三年（一八一六）	嘉永三年（一八五〇）	文久元年（一八六一）	文久元年（一八六一）	文久三年（一八六三）		寛政四年（一七九二）	寛文十三年（一六七三）	元文二年（一七三七）	享保七年（一七二二）	貞享三年（一六八六）	宝永三年（一七〇六）	明和元年（一七六四）	天保二年（一八三一）	天保七年（一八三六）	嘉永五年（一八五二）	宝暦十二年（一七六二）	宝暦二年（一七五二）	宝暦十年（一七六〇）	元文六年（一七四一）	享保八年（一七二三）	不明
所在地	小山市福良中福良　福城寺	小山市上泉　共同墓地	小山市下初田　共同墓地	小山市上生井　大乗院	小山市下国府塚　興栄寺	小山市西黒田　光永庵	小山市黒本　薬師堂	小山市白鳥　観音堂	小山市大本岡　岡公民館	小山市下河原田　共同墓地	佐野市船津川町　雷電神社	佐野市越名町	佐野市越名町	佐野市越名町　公民館前	佐野市富岡町　引地観音	佐野市富岡町　引地観音	佐野市冨士町上	佐野市冨士町上　上講地	佐野市並木町花岡　宗光寺	佐野市並木町堀之内　徳蔵寺	佐野市赤見町町屋・萱場　恵泉寺跡	佐野市小見　普門寺	佐野市田沼本町　白竜潭墓地	佐野市小見　普門寺	佐野市山越　密蔵院	佐野市山越　密蔵院

しかし、紀元前後頃、「観世音菩薩普門品」として『法華経』内に取り込まれた。その独特の起源性のためか、『法華経』の利益 (身分・性別等の差なく、あらゆる人々の成道を説く) を代表する経典、かつ「観音 (菩薩の) 力」により様々な災厄から逃れ、諸々の功徳が得られる経典として人気が高い (渡辺 1967・1974)。実際、『観音経』読誦は、「大乗妙典千部読誦供養」以上に多数の事例が存している。

なお、『観音経』読誦供養は、この場合も個人で行う場合と講などの集団で行う場合があり、読誦者の規模も多様であり、分類して提示する。

Ａ）個人で行う場合　個人で読誦した事例では、鹿沼市寄居観音の普門品一万七百遍読誦供養碑に「眞観禅定門俗名田那島平八」と刻しているものがあるが、個人での読誦は稀である。講ではないが、鹿沼市下久我沢河原墓地の寛政６年塔では４人の俗人名があり、結縁のある少数集団の『観音経』供養の事例になる。

Ｂ）村に複数の読誦講　現在の大字に相当する規模で、比較的小規模な講である。村名の下の小さな地域集団で行う場合で、栃木市下宮天王堂の文化７年塔には『観音経』供養を行うのが下宮村の鉢渕の住民であった。これより古い天明５年塔では十九夜念仏と『観音経』読誦供養を下宮村の７軒で行った。

また、小山市東野田雷電神社の安永２年塔では『観音経』読誦を野田村講で行っているが、これより遡る

番号	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255
銘文	奉漸読大乗妙典五千部供養塔　当院第十七世天柱補衲叟	普門品十万巻供養塔　戸奈良邑　窪善男子善女等講中	大乗妙典自読千部供養　自他法界　平等利益　導師栄山叟　亀山太郎右エ門　藤原良長	奉読誦普門品供養塔　萩原村結衆中	観音経一万二千巻　大日如来真言一億　西岸直向法師霊位　未詳	奉請南謨金光明最勝王経　阿揭多光明電王　外三電王　現住太伝叟	奉読誦普門品供養塔　曲屋講中	普門品供養塔　下岩崎講	普門品供養塔　大串二鏡謹書　萩原　太子堂講中	普門品供養塔　上岡講中	奉造立馬頭観世音普門品一万巻諸願成就処　大沢村　拾四人講中敬白	読誦普門品八千部供養塔　近沢村講中	観音経供養　炭屋講中	奉読誦普門品供養塔　世話人山口講中	普門品供養塔　導師真如院住　上作原村講中一五人	普門品供養塔　地主源蔵	奉読誦普門品十万巻供養　抜井・家隆・中木戸連中	普門品一万五千遍供養　坂和村　松坂村	奉読誦普門品五千巻　小又　宮内	奉納普門品供養　当所講中	奉読誦普門品供養　悪戸講中	奉読普門品供養塔　上邑講中	普門品供養　施主講中	普門品供養塔　現行道七十六翁真実門書　具一切功徳　慈眼視衆生福聚海無量　是故応頂礼　笠松村中　高や谷戸四名	奉真読大乗妙典一千部供養尊　沙弥真応亥心	大乗普門品十番塔　観音経講中	普門品供養　寺沢講中	普門品供養　南住根　願主講中	法華供養塔　願主茂木清左衛門
年代	享保二十年（一七三五）	宝暦九年（一七五九）	享保四年（一七一九）	宝暦六年（一七五六）	明和三年（一七六六）	明和三年（一七六六）	明和五年（一七六八）	文化六年（一八〇九）	天保三年（一八三二）	安政二年（一八五五）	享保九年（一七二四）	享保十八年（一七三三）	明和九年（一七七二）	寛政三年（一七九一）	文化元年（一八〇四）	嘉永四年（一八五一）	享保元年（一七一六）	延享元年（一七四四）	延享三年（一七四六）	寛延二年（一七四九）	天明二年（一七八二）	天明三年（一七八三）	寛政十二年（一八〇〇）	文化元年（一八〇四）建　天保八年（一八三七）再建	享保四年（一七一九）	寛政八年（一七九六）	文化二年（一八〇五）	文政八年（一八二五）	安政七年（一八六〇）
所在地	佐野市戸奈良　種徳院	佐野市戸奈良久保　薬師堂	佐野市船越　長慶寺	佐野市船越　古越路薬師堂	佐野市岩崎　山崎	佐野市岩崎　三騎神社	佐野市船越　長慶寺	佐野市岩崎　宝光院	佐野市船越　太子堂	佐野市船越　岡薬師堂	佐野市長谷場　生沢	佐野市作原　栃久保	佐野市長谷場　炭屋	佐野市白岩　宝蔵院観音堂	佐野市作原　小戸口	佐野市御神楽　生沢	佐野市下彦間　佐ノ寺	佐野市閑馬上　金原	佐野市閑馬上小又　遍照寺跡	佐野市閑馬下　川西共同墓地	佐野市下彦間　本所	佐野市梅園　西光寺	佐野市下彦間　柳沢	佐野市下彦間　安養寺	佐野市塩田東	佐野市塩田東　薬師堂	佐野市寺沢　薬師堂	佐野市坂本	佐野市寺沢　薬師堂

東野田の享保 13 年塔と延享３年塔では、野田村のなかの高松講で読誦を行っている。これが同じ地域における講の構成変化とみることも可能であろう。一方、東野田の西側の西黒田村では、延享３年塔と嘉永３年塔では 100 年程の時期差があるが、村単位の講で『観音経』供養を行っている。嘉永３年の西黒田村の『観音経』供養は 11 人の講であった。

Ｃ）村単位の読誦講　講や村を単位とした同行集団で『観音経』読誦をする場合が大半であった。一例を挙げれば、佐野市長谷場生沢の享保９年塔では、馬頭観音と組む『観音経』一万巻供養は大沢村の 14 人からなり、栃木市伯仲南端十字路の文化元年塔は「戸恒村講中三十二□」の観音講である。

下野市慈眼寺の文久元年塔では講中 39 名、小山市寒沢薬師堂の享保８年塔では「寒沢同行廿九人」として、現在の大字に相当する範囲の同行者で読誦集団が結成されている。栃木市国府町萱場の宝暦３年塔では「奉供養普門品一萬巻　国府村同行八人」、栃木市赤麻北原中坪の天明２年塔では「赤間村講中」とする。安永６年のさくら市薬王寺の『大般若理趣分経』供養塔では、「檀越施興　桜野邑中」として読誦経の檀越が村単位に結成されている。村単位の観音講では 10 数人から 30 ～ 40 人前後からなる場合が多かったことが、塔の銘文から確認できる。

Ｄ）広域結合の読誦講　近隣の村で縁のある人と共同で組織した講で、 村を越えた共同読誦もあった。下野市川中子馬頭観音堂の『観音経』供養塔は読誦連中村士として国分村他 15 村の名を挙げている。また、佐野市密蔵院の誦供養塔では山越村 17 人、隣接する栃本村 12 人からなる読誦講成員であった。広域の事例は小山市黒本薬師堂の文久元年塔では、北は国分村・川中子村、南は上荒川村、西は大宮村、東は三拝河岸で５～６㎞の範囲の有縁者が各村から数名集って『観音経』供養を行っている。小山市岡公民館の文久３年塔では小薬村７名、上川原田村２名、大宮村７名、国分村５名などからなり、７～８㎞離れた村の者で『観音経』供養が行われている。また、このように、近隣の地域で、２年後にも異なった村人からなる者で供養が実施されている。

市町村などの調査成果を県内全域で通観すると、普門品供養塔は県内では小山市・栃木市・佐野市域でまとまった数が確認されており、地域的に普門品読誦供養が流行していたことが指摘できる。読誦は多くが村単位の講で行われている点も概ね共通している。経典読誦と供養、及び読誦集団の構成が地域で特色があったことを伝えるのであろう。

Ｅ）読誦集団の規模

供養塔に読誦集団人数を刻するものもあり、その規模がわかる。下野市川中子馬頭観音堂の万延元年塔では「読誦連中村士国分村　外十五名」、栃木市坂口大日堂の享保 18 年塔では「結衆廿八人」、栃木市国府町の宝暦３年塔では「国府村同行八人」、栃木市伯仲の文化元年塔では「戸恒村講中三十二□」、栃木市篠山神社の元文４年塔では「男三十三人女七拾三人」、栃木市下宮天王堂の天明５年塔では「下宮村七軒講中」、小山市寒沢薬師堂の享保８年塔は「寒沢同行廿九人」、佐野市山越密蔵院塔は「山越一七人　栃本一二人」、佐野市長谷場生沢の享保９年塔は「大沢村拾四人講中」、佐野市作原小戸口の文化元年塔は「上作原村講中一五人」などを挙げることができる。小規模なものは 10 人以下、大規模な講は 116 人に及ぶ人数であるが、20 ～ 30 人前後による『観音経』読誦が多かったようである。

（３）念仏供養と講

会橋久保経塚の経碑には、法華経書写供養とともに講で「南無阿弥陀仏」の念仏が唱えられていたことを伝える。そこで、石造物の銘から江戸時代の下野国における念仏講の様子を検討し、宝積寺村の念仏講と比較を行っていきたい。

①願意　念仏の場合に石造物に願意を刻することは比較的少ない。「二世安楽」を願うのは、那珂川町三輪宝蔵院塔・矢板市平野の宝暦２年塔があり、芳賀町下高根沢三日市南台の寛政元年念仏供養塔では（芳賀町史編さん委員会 2005）、「除三毒七難之横災」、小山市下初田の寛政２年・文政４年塔は居士・大姉の戒名を刻すことから、個人の菩提のための念仏とみられる。鹿沼市上日向田島薬師堂の地蔵菩薩座像には（鹿沼市史編さん委員会 2007、以下市内のものはこれによる。）、

願主　安心／講中廿七人／在々所々勧化／志二世安楽

寛保元辛酉歳

和讃念仏供養仏

十月吉祥日

三界万霊／有縁無縁／乃至法界／平等利益

として、書写事業の一般的な願意と同じような目的を願主安心が発して、講で念仏を行っている。

②願主・施主　念仏供養で願主は個人の場合が多く、鹿沼市菊沢地区十王堂の享保６年塔には「奉造立念仏供養塔　敬白　施主二十四人　願主五右門　惣十郎」とあり、講中の２人が願主とみられる。

講の事例として、近隣の村の仏教帰依者合同の場合もある。下野市（旧南河内町）東根中坪墓地の明和４年塔に「東根念仏講中有心情念遠里　願主七近村善男善女」とあるが、このように刻することは少ない。

念仏供養の施主は、村か講の場合が多く確認できる。村の事例は鹿沼市樅山町光明寺地蔵菩薩像に施主として籾山村の 25 人が刻されている。個人が施主になる場合は、鹿沼市高畑 (東) の寛保３年塔で「奉供養念仏講塔　高畑　下村　施主　吉介」と刻し、念仏講の造塔を吉介が施主で行った事例など、限られる。

③奉唱の方法　浄土系宗派では、七日間に百万回の口称念仏が実行できれば、阿弥陀浄土への往生が決定するとされている。このことにちなみ、10 人の僧侶が 1080 粒の大数珠を繰り回しながら念仏を 100 回 (合せて百万遍) 唱え極楽往生を願う仏事が連綿となされてきた。これが中世後半期以降、民間へも流布し、信徒が追善供養や虫送り・雨乞いなどの祈祷を行う百万遍念仏講へと展開していった。

このような、奉唱が毎月行われていたことを示す資料がある。佐野市栃本の元禄 15 年 (1702) の如意輪観音像に刻された銘文によれば（田沼町 1981）、

夫下野国栃本村優婆夷毎月集会而営念仏講今月今日涓取吉日良辰結願之次奉造立如意輪観音以定来二世資粮憑茲利現世者子孫繁昌後生頓出火血刀苦城往生西方安楽国者也

として、栃本村の優婆夷の女人念仏講は毎月営み、如意輪観音を造立して、現世の者に利益、子孫に繁昌をもたらすことなどを祈念した。下野市上坪山東福寺の念仏供養塔（享保 20 年、1735）でも

奉唱満毎月念仏一百万遍供養　　上坪山村念仏講中

として、毎月奉唱を実施して百万遍念仏を達成している。

④念仏と僧侶の関係　念仏供養塔に僧名を刻すことは少ないが、時に僧が導師として共に奉唱することが鹿沼市南上野町墓地の念仏供養塔では、

于時明暦三年十月三日　結衆　長念　長左衛門　七郎左衛門
長悦
専心　兵作　　与五左衛門
南無阿弥陀仏為別時念仏供養
願主渡部大蔵　源左衛門
導師専蓮社□念上人　　良□　新左衛門　内儀
□□
寿昌

とあって、千日念仏ではあるが、念仏奉唱する結衆に導師が付いている。

会橋久保経塚の一億万遍念仏にも導師がいた可能性がある。18 世紀後半の『宝積寺村指出帳』によれば、宝積寺村内には福寿院と宝蔵寺があり、各寺には僧１人がいた。福寿院か宝蔵寺の寺住僧が宝積寺村の念仏講の導師を勤めていた可能性がある。

同様の事例は「光明真言」供養でも確認でき、栃木市西方町真名子の光明真言供養塔 (元文５年) には、

結衆五十人導師□海
願以比切徳我等興衆生
皆乃於一切皆共仏道

とあり、「□海」という僧侶が「結衆五十人」の導師となったことが記されている（田村 2015）。

⑤講の構成　経を読誦する講にはその規模が様々であった。銘文からその規模を探っていく。

Ａ）村に複数の念仏講　現在の大字に相当する規模で、比較的小規模な講である。小山市下生井の寛保３年

塔では「下生井村東講中」、栃木市千塚町の明和９年塔では「千手村久保講中」などが挙げられる。

Ｂ）村単位の念仏講　矢板市平野の宝暦２年塔で「平野村百姓　三十軒建之」など、村単位に結成される場合が多い。

Ｃ）広域結合の念仏講　近隣の村で縁のある人と共同で組織した講である。栃木市西山田片岡の安永７年塔では「山田村片岡村」とある。那須町文久３年塔には（那須歴史探訪館 2004、以下町内のものはこれによる。）、

文久三癸亥年冬十月十六日立石
念佛供養塔　五ヶ村講中
岐雲拝書

と刻され、比較的広い範囲の帰依者で構成される講である。同様の事例は、那須町の文化元年塔でも、

念佛供養塔
成澤　村
山中　村講中
大久保村

として、３ヶ村の帰依者が結衆した講である。また、組相互での結衆もあり、鹿沼市菊沢地区見野交差点東側墓地の如意輪観音座像には、

十九夜念仏供養　文政八乙酉　霜月十九日　宮下組　鳥井戸組　講中十六人

として、異なった組を合わせて念仏講が結衆されている。

Ｄ）講の人数　小山市卒島薬師堂の元文３年塔では村の同行 29 人、先述の矢板市平野塔では村の百姓 30 軒であり、講の構成員の大要がわかる。鹿沼市油田町青木記念館南の延宝９年塔には、

南無阿弥陀仏奉供養念仏石塔三拾二人　敬白
延宝九辛酉天十月十六日

とあり、念仏供養の 32 人で南無阿弥陀仏を奉唱していた。

また、那須町の明和２年塔には「明和二　日記念佛供養塔　十月一日　上講中七人」とあり、鹿沼市東大芦地区子安地蔵尊の元文３年如意輪観音坐像では、十九夜念仏が５人の講で、これらは少人数の講である。下野市東根中坪墓地の貞享２年塔では「奉□□寒念仏供養同行四四人」と比較的多い（南河内町教育委員会社会教育課 1986）。多い事例では、鹿沼市富岡橋西側の如意輪観音坐像には、

元文元年丙辰天
十九夜念仏供養
九月十九日
講中百十六人

とある。経の読誦集団では 10 人以下から 100 人を超す場合もあり、20 ～ 30 人が多かった。念仏では大数珠を繰り回すことから最大でも 30 ～ 40 人前後が適した人員数であったと推測される。また、念仏は栃木市大光寺町の文化３年塔に「女人講中願主淳彦」とあるように、女性のみで講が結成されることも特徴である。講には世話人を置くが、女人講では男性の世話人を置く。

⑥十九夜講と念仏　この講は十九夜の月待講といわれ、主に婦人の念仏講でもあり、如意輪観音の軸を掛け、読誦・詠歌・和讃・真言などをあげ、和讃には十九夜念仏和讃をあげるという（小花波 1994）。高根沢町域の石造物でも地蔵菩薩や如意輪観音像に十九夜念仏を刻するものがある。飯室の元禄 11 年地蔵坐像には、「毎

月一会多年□□／積聚□□／楽悲願□□／元禄十一戊寅天十一月／十九夜念仏／土室講中一結諸衆／謹而造立□」として（高根沢町史編さん委員会 2003）、土室講では結衆が多年にわたり毎月十九夜念仏を行ってきた。宝積寺には、天明４年 (1784) の如意輪観音像に「十九夜念仏／天明四年□月吉日／宝積寺／女人下組中」と刻しており、会橋久保経塚の寛政５年 (1793) 経碑に宝積寺村の念仏講中と刻すことから、９年の違いがあるが、村内の念仏講にも女人下組と村の念仏講が併存していた可能性がある。

⑦個人の念仏　念仏は大人数で唱することが一般的であったが、個人で行うこともあった。鹿沼市寺町雲龍寺では、寛延２年 (1749) の塔に

寛延二己巳八月

施主意泉

真読念仏百万声為先祖

と刻され、仏名を持つ俗人とみられる人が先祖供養のために念仏を唱えており、故人供養のためであろう。このような事例は限られ、念仏は講を結成して、多くの結衆によって行われた。特に、女人講で唱えられたことが多かった。

（４）会橋久保経塚の写経・念仏供養との比較

これまで、下野国内の石造物を中心に江戸時代後期の経書写・読誦、念仏についてみてきたので、会橋久保経塚の様相と比較してみる。

①念仏講　会橋久保経塚を造った宝積寺村の念仏講の構成員について碑には刻されていないが、下野国内での江戸時代の念仏講は 20 ～ 30 人前後が多く確認された。念佛講は、村よりも小さい結成規模や村単位、複数の村に及ぶ帰依者で結成される場合があった。石造物の銘によると村単位で講を結成することが最も多く、宝積寺村の念仏講は、下野国で最も一般的な村単位の念仏講であることがわかった。当時、宝積寺村では十九夜念仏の女人講も結成されており、念仏奉唱が盛んであった。

念仏供養の施主は、多くの場合に講の人々である。会橋久保経塚の経碑では書写供養の面に「宝積寺村／加藤氏／念佛講中」と刻されている。鹿沼市高畑 (東) の寛保３年塔で、念仏講の造塔を吉介が施主で行った事例などを参照すれば、加藤氏が造塔の施主となっていた可能性がある。

会橋久保経塚の経碑で念仏供養の面には、「天下和順」と「日月清明」と願意が書かれている。念仏供養や十九夜念仏供養像塔で願意を記すことは少なく、「二世安楽」などが散見する場合が多い。会橋久保経塚の願意は、仏教教義などに通じた者で、僧の可能性もある。

②石経書写

下野国内の石造物の刻銘からみると、石経書写事業の施主は個人が多い。さらに、個人でも一人の場合、複数人の場合､僧侶の場合が確認できた。しかし､念仏講による石経書写事業は確認できなかった。このため、会橋久保経塚では、宝積寺村の念仏講に加藤氏が係わり、加藤氏が石経書写事業の施主になったと考えられる。

下野国内の経碑によると、石経書写は多くが僧によって行われている。碑と石経の字形が類似していることや石経書写者は僧が多い点からも、会橋久保経塚の石経書写と経碑の書も僧による筆と推定される。経塚近隣に僧を求めれば、宝積寺村内の真言宗福寿院か宝蔵寺の僧が書写したと考えられる。そして、経書写供養の面に願意がないが、念仏・書写ともに「天下和順」と「日月清明」を願意として、平和な社会を希求したとみられる。

第３節　『法華経』に関する基礎知識－会橋久保経塚を解釈する一助として－

本書中で度々ふれてきたように、会橋久保経塚からは『法華経』全二十八品を記した石経 2,063 個が出土している。ゆえ、この節では『法華経』に関する概要を説明したのち、『法華経』と諸信仰 (埋経信仰や浄土信仰等) との関係について整理し、本書「第３章」「第４章第１・２節」の一助としたい。

（１）インドにおける初期仏教～部派仏教～大乗仏教への流れ

はじめに、初期仏教～部派仏教～大乗仏教に至るインド仏教史を把握しておきたい。今から約 2500 年前 (B.C. 5 世紀頃)、シャカ族の王子だったゴータマ・シッダッタ (s:Gotama Siddhaita) は、人間はなぜ悩み苦しむのかを考え抜いた。そして、35 歳の時、どうやったらこの悩み・苦しみから解放されるか (解脱できるか) を悟りブッダ [s:buddha, 漢訳：仏陀] となった。そして入滅までの約 40 年間、ガンジス河中流の中インド地方を中心に各地を巡り歩き、「諸々の悪を作すこと莫れ。衆々の善を奉行すべし。自ら其の意を浄めよ」(註５) という教えを相手の能力・性質に応じて分かるように説いた (ゆえ、多数の口伝が存在することとなった)。

釈迦牟尼仏 (ゴータマ・ブッダの尊称の一つ) の入滅直後、十大弟子 (註６) の一人で長老的存在であったマハーカッサパ (摩訶迦葉) はブッダの教えの散逸を防いで教団の統一をはかるため、各地から集まった仏弟子 500 人と共に師の教えを合誦、全員の同意を得て仏説を編集した (仏典の第一結集)(註７)。

だが、仏滅後 100 年頃、戒律の解釈に異議が生じたこと、サンガ (出家者集団) が保守派の上座部と革新派の大衆部に分裂したこと等を契機に長文の経や律が編まれた（第二結集)。その後、上座・大衆の両部はさらに細分し、20 ほどの部派が生み出された。やがて、インド全域を統一したマウリア朝・アショーカ王 [在位 B.C.268 頃 -B.C.232 頃] の仏教庇護政策下、経蔵・律蔵・論蔵の整備が行われ (第三結集)、仏教はインド全土へと広まっていった。

なお、仏典第三結集以降、各部派は、各々のサンガの利益のみを求める場と化していった。加えて、シャーキャムニ・ブッダを超人化させ、出家者が、いくら修行しても阿羅漢の境地以上の悟りは得られないとされた。

これに対して、紀元前後頃、①すべての人は仏性を具えている→②それゆえ、覚りを求める心を起こして菩薩となれる→③菩薩道 (六波羅蜜などの修行) を実践すれば、(未来永劫の間には) 必ず仏陀となれるという考え (大乗仏教) が興った (註８)。

（２）『法華経』概観

第二に、『法華経』の成立史、ならびに『法華経』全二十八品の内容を概観したい。

(2-1) サッダルマ・プンダリカ・スートラの成立～漢訳年代

『サッダルマ・プンダリカ・スートラ』(Saddharma pundarika-sutram,『法華経』のサンスクリット語原題.「白い蓮華のように優れた教えの経典」の意) は、初期大乗経典の一つで、A.D. 1 世紀中葉～２世紀中葉頃、西北インド (現在のパキスタン) 付近で成立したと考えられている。サンスクリット語原典、漢訳本とも数種ある (他に、チベット語訳本、ウイグル語訳本、西夏語訳本、モンゴル語訳本、朝鮮語訳本なども存在)。だが、今昔を問わず、東アジア社会に流布しているのは、鳩摩羅什 (Kumarajiva)[344-413 または 350-409] の漢訳『妙法蓮華経』(七巻二十七品．のち八巻二十八品 .406 年訳.『大正新脩大蔵経』第９巻 - 経№ 0262) であり、その影響力は極めて強い〔これについては、後述を参照されたい。なお、羅什訳本以外にも、竺法護 (Zhu Fa-hu）[239-316] が 286 年に訳した『正法華経』十巻二十七品『大正新脩大蔵経』第９巻 - 経№ 0263)、闍那訳崛多・達摩岌多が 601 年に羅什訳本を補訂した『添品妙法蓮華経』七巻二十七品『大正新脩大蔵経』第９巻 - 経№ 0264) が現存するが、これらが用いられることは稀少である〕。

(2-2)『妙法蓮華経』全二十八品の概要

諸先学の研究をもとに鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(以下、『法華経』と略称) の全二十八品の概述を行う。

序品第一　まず、本経冒頭は、釈迦牟尼仏の教えを聞いた弟子の聞き書きとして「如是我聞…」という言葉から始まる。そして、この教えを説いた場所は王舎城 (マガダ国首都) の郊外に存在する霊鷲山であることを記す。続いて、多数の仏・菩薩、神々、仏弟子の名前が列挙される (註９)。

そして、釈迦仏が様々な奇瑞を表したのち禅定 (瞑想) に入る姿が描かれる。一同は、この光景の意義は何なのか疑問を抱く。これに対して、文殊師利菩薩は‘妙法蓮華’という大乗の教えを説くための前兆であると説明する。

方便品第二

禅定からさめた釈迦仏は、舎利弗 (釈迦十大弟子の一人) に向かい「仏陀の境地は仏陀以外のものには不可解であるから、便宜上“三乗”の教えを説く」とされた。舎利弗は釈迦仏の意図を察して“一乗”の教えを説くように請う。「その願を二度までしりぞけた仏陀は三度目の願をついに聞き届け、その法を説くことを宣言した。そのとき五千人の弟子たちはその席から立ち去った。彼らは従来の教えで満足していたので“一乗”の教えを聞くことを好まなかったのである」(註 10)。

譬喩品第三

釈迦仏の言葉を聞いて舎利弗は改めて大乗の教えを信奉することを宣言する。すると釈迦仏は舎利弗に対して記を授ける (未来の成仏の保証)。そして釈迦仏は「火宅の譬え」を説く (註 11)。

信解品第四

須菩提、摩訶迦葉、摩訶迦栴延、大目犍連 (釈迦十大弟子の四人) が、「火宅の譬え」の理解を確認する意味で「長者窮子の譬え」を語る (註 12)。そして、仏の教えを語り聞かせていく決意表明をする。

薬草喩品第五

摩訶迦葉たちの言葉を聞いた釈迦仏により、「三草二木の譬え」が説かれる (註 13)。

授記品第六

つづいて釈迦仏は、説法を理解した摩訶迦葉、須菩提、摩訶迦栴延らに対しに授記 (未来の成仏の保証) を示す。

化城喩品第七

釈迦仏は、大勢の声聞のために、遥か過去の大通智勝仏の話をする。そして、釈迦仏と声聞の結び付きは遥か遠い昔からであること (因縁) を明かす。さらに釈迦仏は、衆生をどのように導いてきたのかを「化城の譬え」で説明する (註 14)。

五百弟子受記品第八

富楼那 (釈迦十大弟子の一人) に授記する。そのあと五百人の声聞 (五百羅漢) に「普明如来」という同一の名前をもって同時に授記する (ゆえ、この品名が付けられている)。声聞らは、その喜びで「衣裏珠の譬え」を語る (註 15)。

授学無学人記品第九

阿難、羅睺羅 (釈迦十大弟子の二人) に授記する。また、二千人の学 (正式には有学．仏教において学ぶべきことがある人)・無学 (仏教において学ぶことが無くなった人．つまり修行完成者である阿羅漢) に記を授ける。

法師品第十

本品以降は、世尊滅後の弘教の付嘱が主題となる。ここでは五種の法師行 (『法華経』の受持・読・誦・解説・書写) の重要性や、本経弘教の功徳が説かれる (註 16)。

見宝塔品第十一

大地から巨大な宝塔が出現し空中に止まる。そして塔の中から、釈迦が今まで説いてきた『法華経』の教えを讃嘆する。釈迦仏は浮遊したのち、十方の分身の仏を集めて宝塔の扉を開ける。その中に坐す多宝如来に招かれて釈迦仏は宝塔へ入り、二仏は坐を分かち合う。釈迦仏は聴衆を空中に呼び寄せたのち、自身が入滅することを告げる。さらに世尊滅後の弘教がいかに大変であるかを語る。

提婆達多品第十二

悪人である提婆達多と、年齢八歳の龍女 (龍王の娘) の成仏の話が語られる (註 17)。

勧持品第十三

薬王菩薩、大楽菩薩をはじめとする二百万人などの大菩薩が、娑婆世界 (現世) でも、よその世界でも、本経を弘めることを誓う。また摩訶波闍波提 (マハープラジャパティー．釈迦の養母)、耶輪陀羅 (ヤショーダラ．釈迦の出家前の妃) をはじめ数千人の尼僧たちに授記する。なお「二十行の偈」にて、いかなる迫害が及んでもこれを忍んで弘教の決意を宣言する。

安楽行品第十四

文殊師利菩薩が、世尊滅後の悪世にあって本経を弘める要点を尋ねる。釈迦仏は、これに対し、四つ (身・口・意・誓願) の安楽の境地に住するための行を説く。そして、この安楽行が揺るぎなければ、諸仏の加護のもと悪世であっても法を説くことが出来ることを示す。

従地涌出品第十五

他方の仏国土から来た多くの菩薩たちが釈迦仏に本経の弘教を申し出る。それに対し世尊は、娑婆世界にも多数の菩薩がいるから入滅後も心配ないと応える。そして、娑婆世界に本経を弘める無数の菩薩たちが地下から現れる。釈迦仏は久遠の昔よりこれらの菩薩たちに教え導いていたことが明かされる。そこでまた新しい疑問がおこる。釈迦牟尼が出家し仏陀となってから僅か四十年の間に、このように無数の菩薩を教化することが出来るのかと (註 18)。

如来寿量品第十六

前品末尾の疑問を契機として、釈迦仏は数えきれない年月を越えて遥か遠い昔から仏陀であったこと、法身 (永遠不滅の真理)・釈迦仏の寿命は永遠不滅であることが明らかとなる。ただし、釈迦仏は、自分の存在が永遠不滅と思うと衆生が油断して修行を怠るため、仏陀は稀にしか出現しないとか、出現しても入滅することを「良医病子の譬え」で説明する (註 19)。

分別功徳品第十七～法師功徳品第十九

「功徳品」という品名からも明らかなように、第十七品から第十九品では釈迦仏の永遠の生命を信受する者が獲得する功徳・利益が繰り返し説かれる。まず、釈迦仏の生命が永遠であることを聞いて、それを信じることの功徳が明かされる。さらに、その功徳が十二分されて示される (第十七品)。本経の教えを聞いて喜んだ人が、他の人に本経を語る功徳が説かれる (第十八品)。「法師品」で説かれた五種の法師行の功徳が、六根 (眼・耳・鼻・舌・身・意) の清浄であると説かれる (第十九品)。

常不軽菩薩品第二十

釈迦仏が、六根清浄の功徳を得た実例、かつ菩薩修行の実践例として、いかなる人をも尊び礼拝する常不軽菩薩の故事を示す (註 20)。

如来神力品第二十一

釈迦仏が奇跡を示したのち、上行菩薩 (地涌の菩薩の一人) をはじめとする菩薩たちに、世尊滅後の娑婆世界での本経弘通を付嘱する。そして、『法華経』を実践する人がいる場所は、いずこであっても聖地になると説く (註 21)。

嘱累品第二十二

前品に続いて、諸菩薩に対して本経弘通を付嘱する。釈迦仏の分身たちは、各々の本国に帰り、多宝如来の仏塔も扉が閉められる (註 22)。

薬王菩薩本事品第二十三～妙荘厳王本事品第二十七

宿王華菩薩が発した薬王菩薩の所業への問いに対し、釈迦仏は薬王菩薩の過去因縁譚を説く。そして、本経ならびに本品の功徳を説く (第二十三品)。遠くの仏国土から妙音菩薩が来て、釈迦仏・多宝仏塔を礼拝。六道の衆生を救うため三十四化身を表し衆生済度することが説かれる (第二十四品)。一切の功徳を備える観世音菩薩の力により七難・三毒を免れること、三十三身を示現して衆生救済することが示される (第二十五品)。薬王菩薩、勇施菩薩、毘沙門天王、持国天王、十羅刹女が本経を弘める人に対して、陀羅尼 [dharani] を説いて守護することが説かれる (第二十六品)。妙荘厳王の王子である浄蔵・浄眼の過去因縁譚を語り、この二王子が今の薬王・薬上の二菩薩であることを明かす (第二十七品)。なお、第二十三品から第二十七品までは、後世に付け足された箇所と考えられている (渡辺 2014・植木 2018)。

普賢菩薩勧発品第二十八

東方の宝威徳上王如来の仏国土に住む普賢菩薩が『法華経』の教えを聴聞するため多くの同伴者を連れて来る。そして悪世にあっても本経を写経、読経、持経、説経受持する者を守護することを誓う。諸菩薩・諸声聞・諸天・龍王・諸人・人でない諸々のものらは、皆、大いに歓喜して、仏を礼拝したのち法会の場を去っていく。

〔小 結〕『法華経』の特徴を要約すると、次のように整理できよう。

① 一乗の教えのもと、あらゆる階層の人々の成仏を説く (序品など)。ひいては、悪人や女性、人でないものであっても仏になると説く (第十二品など)。

② 方便として造仏・造塔の功徳を説く (第二品)。さらに進んで『法華経』の精神の実践 (菩薩行) を勧めると共に、その功徳を説く (第十九品、第二十品など)。

③ 単なる教説の羅列ではなく、雄大な構成・物語性に富む (釈迦仏の「火宅の譬え」に対して、弟子が「長者窮子の譬え」で応えるなど)。

④ 釈迦仏は永遠不滅であり、その教え (『法華経』) も永遠不滅の真理である (第二十一品など)。

⑤『法華経』を実践する人がいる場所は、いずこであっても聖地になる旨 (第二十一品)、ならびに諸仏・諸菩薩・諸天の加護が常にあることを説く (第二十六品など)。

⑥ 多種多様な仏・菩薩、ならびに仏国土を示す。それゆえ、『法華経』と他の諸仏・諸菩薩の信仰が併存する環境を形成している (第二十三～二十八品など)。

(3)『法華経』が与えた影響

(3-1) インド・中国

この項目では、『法華経』がインド・中国仏教に与えた影響を整理してみたい。インドで作成された『法華経』の注釈書としてはヴァスバンドゥ (世親 [400 頃 -480 頃]) 著『法華論』(菩提流支の漢訳『妙法蓮華経憂波提舎』、勒那摩提の漢訳『妙法蓮華経論優波提舎』) がある。また、ナーガルジュナ (龍樹 [150-250 頃]) 作

第 34 表 『法華経』全二十八品の内容

品　名（羅什漢訳本）	サンスクリット本（植木説）	正法華	添品法華	説法教主	説法の場所	主な内容	備　考
序品第一	第一	第一	第一	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	『法華経』を説く準備	
方便品第二	第二	第二	第二	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	三乗は一仏乗を説くための方便であることが説かれる	
譬喩品第三	第三	第三	第三	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	舎利弗への授記.「火宅の譬え」が説かれる	
信解品第四	第四	第四	第四	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	「長者窮子の譬え」が説かれる	
薬草喩品第五	第五	第五	第五	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	「三草二木の譬え」が説かれる	
授記品第六	第六	第六	第六	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	四人の弟子への授記がなされる	
化城喩品第七	第七	第七	第七	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	「化城の譬え」が説かれる	
五百弟子受記本第八	第八	第八	第八	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	五百弟子への授記.「衣裏珠の譬え」が説かれる	
授学無学人記品第九	第九	第九	第九	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	学・無学への授記がなされる	
法師品第十	第十	第十	第十	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上	法師行の重要性、功徳が説かれる	後世の付与か
見宝塔品第十一	第十一	第十一	第十一	釈迦牟尼仏（迹門）	霊鷲山上→空中	地中から、巨大な宝塔ならびに多宝如来が現れる	
提婆達多品第十二				釈迦牟尼仏（迹門）	空中	悪人成仏と女人成仏が説かれる	後世の付与（元々は独立経典）か
勧持品第十三	第十二	第十二	第十二	釈迦牟尼仏（迹門）	空中	薬王菩薩などが本経を弘めると誓う	
安楽行品第十四	第十三	第十三	第十三	釈迦牟尼仏（迹門）	空中	仏滅後の悪世にあって本経を弘める要点が説かれる	
従地涌出品第十五	第十四	第十四	第十四	久遠の釈迦仏（本門）	空中	娑婆世界で本経を弘める菩薩たちが地中から現れる	
如来寿量品第十六	第十五	第十五	第十五	久遠の釈迦仏（本門）	空中	釈迦仏の寿命は永遠であることが示される	
分別功徳品第十七	第十六	第十六	第十六	久遠の釈迦仏（本門）	空中	釈迦仏が不滅であることを信じる功徳が明かされる。	
随喜功徳品第十八	第十七	第十七	第十七	久遠の釈迦仏（本門）	空中	本経の教えに喜んだ人が、他人に本経を語る功徳が説かれる	
法師功徳品第十九	第十八	第十八	第十八	久遠の釈迦仏（本門）	空中	五種の法師行の功徳が、六根の清浄であると説かれる	
常不軽菩薩品第二十	第十九	第十九	第十九	久遠の釈迦仏（本門）	空中	常不軽菩薩の故事を例に本経功徳が説かれる	
如来神力品第二十一	第二十	第二十	第二十	久遠の釈迦仏（本門）	空中	地涌の菩薩たちに、仏滅後の本経弘通を付嘱する。	
嘱累品第二十二	第二十七	第二十七	第二十七	久遠の釈迦仏（本門）	空中→霊鷲山上	諸菩薩に対して本経弘通を付嘱する。	本来の経末か
薬王菩薩本事品第二十三	第二十二	第二十一	第二十二	久遠の釈迦仏（本門）	（明言せず）	薬王菩薩が本経を受持する者を守護することを明かす	後世の付与（元々は独立経典）か
妙音菩薩品第二十四	第二十三	第二十二	第二十三	久遠の釈迦仏（本門）	（明言せず）	妙音菩薩が衆生済度することが説かれる	後世の付与（元々は独立経典）か
観世音菩薩普門品第二十五	第二十四	第二十三	第二十四	久遠の釈迦仏（本門）	（明言せず）	観世音菩薩が衆生済度することが説かれる	後世の付与（元々は独立経典）か
陀羅尼品第二十六	第二十一	第二十五	第二十五	久遠の釈迦仏（本門）	（明言せず）	薬王菩薩が弘教する人を守護すると説かれる	後世の付与（元々は独立経典）か
妙荘厳王本事品第二十七	第二十五	第二十四	第二十一	久遠の釈迦仏（本門）	（明言せず）	薬王・薬上の二菩薩の過去因縁譚	後世の付与（元々は独立経典）か
普賢菩薩勧発品第二十八	第二十六	第二十六	第二十六	久遠の釈迦仏（本門）	（明言せず）	普賢菩薩が本経を受持する者を守護することを明かす	後世の付与（元々は独立経典）か

とされる『大智度論』には『法華経』が引用されている。しかし、これ以後、インドの仏教哲学者たちは『法華経』を重要視していない。渡辺照宏氏によれば「チベット大蔵経にはグプタ王朝 [４～６世紀、北インドを統一した王朝] の重要な仏教の論書、注釈書がたいてい揃っているはずなのに、『法華経』の註釈だけは一つもなく、その代わりに唐の基法師の『法華玄賛』を漢文から訳して補っている」という (渡辺 1967,185 頁. ただし [ ] 内は池田補記)。

一方、中国仏教圏では事情が変わる。中国では２世紀以来、多数の大乗経典が訳出されてきた。しかし、大乗仏教の様々な教えが同時混在していた。このため、仏教者は、各経典の系譜関係等を定めるべく注釈書を作る必要に迫られた (註 23)。そうしたなか、智顗 [538-597] は、『法華玄義』で大乗経典を分類・体系化し、『法華経』が仏教最高の教えであると解釈した (註 24)。また『法華文句』にて『法華経』経文の注釈を行った。さらに『摩訶止観』では『法華経』の教えを実践するための止観の方法 (修行・瞑想法) を示した。そして、その壮大な仏教哲学は長く後世の仏教に影響を与えた。

(3-2) 日本への伝播・流布

次に、『法華経』の日本伝播～流布過程について整理する。『日本書紀』を紐解くと、推古天皇 14[606] 年条に『法華経』講義の記事が出てくること、同 15[607] 年条に聖徳太子 (厩戸皇子 [574-622]) の名で『法華義疏』等が著されていることから、７世紀初頭には『法華経』が日本に伝わっていたことは確実である。また、中国 (隋・唐) にならって鎮護国家法要・国分 (尼) 寺造営等の折、『法華経』が (護国経典の一つとして) 用いられたこと、最澄 [766 頃 -822]・円仁 [794-864]・円珍 [814-891]・安然 [841-915 頃] らが日本天台宗 (天台法華宗) (註 25) を整備・拡充したこと等もあって、古代～中世期、法華八講 (註 26) や写経・読誦などが盛んであった (ひいては『法華経』をもとにした仏教説話や、『法華経』関連文学・美術作品が生み出された) (註 27)。日蓮 [1222-1282] 率いる日蓮宗 (法華宗) は『法華経』の教学・実践両面を綜合したものということができる (だが一方では、過激な他宗排除や法華一揆などが、往々、社会問題となった)。

近世期、徳川幕府は宗派統制 (ならびに反幕府宗教勢力の排除・鎮静) をはかるため寺社諸法度や檀家制度等を定めた。また同時に教学専修を奨励した。こうしたなか、将軍家の信任篤い天海 [1536 頃 -1643] は公儀より比叡山延暦寺や、日光山輪王寺、東叡山寛永寺の復興・整備を任せられた (註 28)。併せて『天海版大蔵経』の開板、武州仙波喜多院、武州金鑽山大光普照寺、野州長沼宗光寺などの談林 (学僧の教育機関) の開設にも貢献した。

(4)『法華経』と他信仰の関係

(4-1) 埋経信仰と『法華経』の関係について

最後に、『法華経』と他信仰の関係を整理したい。先ずは、埋経 (書写経典埋納)・経塚と『法華経』の関係について記す。

釈迦入滅後、正法 (仏の教え、教えを実践する人、証りを開く人のある時期)、像法 (仏の教え、教えを実践する人のみで、証りを開く人が出現しない時期) を経て、永承７[1052] 年以降、末法 (仏の教えのみあって悪事のみが横行する時期) に至ると考えられていた。事実この頃、災害や戦乱、僧侶どうしの抗争が続出した。このため、末法到来意識が強まった。そこで、人々は、釈迦入滅 56 億７千万年後の弥勒菩薩の出現 (のち、悟りを得て如来) に備えて、経典を地中に埋納して残そうとした。なお、埋経は写経・持経等の功徳を説く『法華経』が最多である (註 29)。次いで、弥勒菩薩の所依経典である『弥勒上生経』『弥勒下生経』や、浄土往生を説く『阿弥陀経』等が見られる。さらに、即身成仏を説く『大日経』『金剛頂経』『理趣経』など密教経典の埋経も見受けられる。なお、古代の経塚は、経典を埋納容器に納めたのち、地下施設 (土坑や小

石室) に安置。その上を石や土で覆って塚を形成するのが標準的である (註 30)。

これが 13 世紀になると、六十六部聖の廻国巡礼と、人々による経典寺社奉納とが結びつく (註 31)。とりわけ、16 世紀初頭～中葉頃、六十六部聖により小型経筒 (円筒形または六角柱形) を寺社境内に埋納するタイプの経塚が全国的に流行した (経筒に「大乗妙典」「妙典」「経王」「如法経」等の銘文が見られる。『法華経』を意味するケースが多い) (註 32)。

一方、礫石経 (掌大の自然石に一字～複数字の経文を墨書や朱書) を書写・埋納した経塚も 16 世紀頃から始まる。これに伴い、小型経筒を用いた経塚造営は終焉。代わって、礫石経塚が 17 ～ 19 世紀に隆盛した。

礫石経塚は、ほぼ日本全土に分布する。塚を築いて石経 (数千～数万点が出土) を埋納する事例が主体をなす (註 33)。だが、なかには、「建造物の地鎮に用いられる例、骨蔵器と共に埋納された例、経石を散布した例」などもある (三宅・池田 [奈]2006,13 頁)。また、経塚の標識として経碑を建てるケースもある。なお経碑をみると、『法華経』書写の事例が多いようである (註 34)。

ちなみに、礫石経のほとんどは、一字もしくは数字の写経のため、「経典を復原することは不可能であり、数行にわたって書写した礫石経でも正確を期すことは困難」であると先学は言う (坂詰編 2003,107 頁)。その意味で本経塚 (会橋久保経塚) の調査成果 (1908 個の墨書石経が『法華経』全二十八品であることを解明) は特筆できる事例なのである。

(4-2) 観音信仰と『法華経』・『観音経』の関係

本章「第 2 節 下野国における『法華経』書写供養・読誦供養・念仏供養」では、下野国内の経典書写・読誦傾向の分析を行った。その結果、『観音経』読誦供養が大乗妙典千部読誦供養よりも多くみられることが明らかになった (452 ～ 465 頁)。それをふまえて、ここでは観音信仰と『法華経』『観音経』の関係整理を行う。

まず観音菩薩と、その信仰について概述する。アヴァローキテー・シュヴァラ (Avalokitesvara) の 信仰は A.D. 1 世紀にはインドで成立していたと考えられている。漢訳経典は、これを ' 光世音菩薩 '' 観世音菩薩 '' 観自在菩薩 '' 観世自在菩薩 ' 等々と呼称する。鳩摩羅什訳本が定着していることもあって、観世音菩薩－略称：観音菩薩－と呼称されることが一般的である。

観音菩薩は、三十三の化身を生じて衆生を救済することや、在俗的性格を持っていることから、あらゆる人々から人気が高い仏尊で、インド・チベット～アジア各地で盛んに信仰され続けている。日本にも 7 世紀代には伝来しており、8 ～ 9 世紀には現世利益的信仰が盛んであった。しかも、10 世紀以降、浄土信仰の盛行を背景に阿弥陀如来の脇侍としての側面が強調され、来迎引導や、六道に迷う衆生抜苦の役割をも兼ね備えるようになった。さらに、観音三十三身にちなんで観音三十三所霊場巡礼 (西国・坂東・秩父など) が成立。江戸期には大衆化して地域版の三十三観音札所 (下野三十三観音など) も出来、今日に至っている。

次に観音信仰の所依経典について整理する。観音菩薩の功徳を説く経典は多数存在する (註 35)。その中で成立年代が最も古いのは『法華経』「観世音菩薩普門品」である。これは、もともと観音信仰経典 (「観音経」プロト・タイプ) として独立していたもので、『法華経』増広時に取り込まれ「観世音菩薩普門品」となった可能性が指摘されている (註 36)。そうした歴史性に起因するのであろうか。中国や日本では「観世音菩薩普門品第二十五」を独立経典『観音経』として扱うことが多い。ゆえ、観音菩薩を本尊としている寺堂では (聖観音・変化観音の別や、宗派の枠を越えて)、朝夕のお勤めや、各種法要の折、『観音経』を読誦している。

(4-3) 阿弥陀如来・薬師如来・地蔵菩薩と『法華経』

本経塚で出土した 1908 個中 12 個の墨書石経は、「南無阿弥陀佛　南無地蔵菩薩」(「法師功徳品」99 番石経)

や、「南無薬師如來　南無釋迦如來　南無阿弥陀佛」(Ｂ－上層出土７番石経 - 裏面) 等と『法華経』本文以外の墨書文字 (仏・菩薩尊名) を記している。ここでは、それらの仏・菩薩と『法華経』の関係整理を行う。

阿弥陀如来　まず阿弥陀如来と、その信仰について概述する。アミターバ (Amitabha)、あるいはアミタユース (Amitayua) は、‘ 無量寿如来 ’‘ 無量光如来 ’‘ 不可思議光如来 ’‘ 阿弥陀如来 ’ 等々と漢訳される (日本では名号にもとづき、阿弥陀仏－略称：弥陀仏－と称されることが多い)。西方十万億土の安楽世界 (極楽浄土) の主尊で、浄土三部経 (『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』) 等を所依経典とする (註 37)。

その信仰・教義は、A.D. １～２世紀にかけて成立したのち、インド～中央アジア～東アジア諸地域に伝播・浸透していった。中国では称名念仏・念仏禅を中心とする浄土教が盛行した (本来は多くの如来の浄土が存在するが、阿弥陀信仰の流行に伴い、浄土＝阿弥陀如来の浄土をさすようになっていった)。

日本にも７世紀代から浄土教は伝っていた。だが、９世紀前半、唐から帰国した円仁が称名念仏・観想念仏をもたらしたことと、11 世紀以降の末法思想の広がりを背景に、天台宗の内・外、天皇・貴族から民衆に至る各階層で浄土信仰 (浄土教美術含む) が盛んとなっていった。そして 13 世紀以降、易行専修を説いた浄土教各宗 (浄土宗、浄土真宗、時宗) が成立・発達をとげ、現在に至っている。

ちなみに、阿弥陀如来は

> 若し女人有りて、この薬王菩薩本事品を聞きて能く受持せば、この女身を尽くして後に復、受けざらん。(略) 若し女人有りて、この経典を聞きて、説の如く修行せば、ここにおいて命終して、即ち安楽世界の阿弥陀仏の、大菩薩に囲繞せらるる住処に往きて、蓮華の中の宝座の上に生まれん (「薬王菩薩本事品第二十三」. 坂本・岩本訳注 1967,304 頁)

と転女成仏を説く場面で、僅かではあるが『法華経』中にも登場している (註 38)。

薬師如来　次に薬師如来と、その信仰について概述する。バイシャジャグル・ヴァイドゥーリヤプラバー (Bhaisajyaguru-vaiduryaprabha) は ‘ 薬師瑠璃光如来 ’ と訳される (略称：薬師如来)。東方浄土の浄瑠璃 (瑠璃光) 世界の主尊で、衆生の現世利益を司ることが『薬師経』に説かれる (註 39)。中国・朝鮮・日本で、その信仰は盛んである。

日本には、６世紀後半には伝来しており、多くの主要寺院の本尊となっている (法隆寺、薬師寺、延暦寺、神護寺等々)。また、古来から、治病の仏として病気平癒祈願が盛んである。さらに、薬師如来に懺悔する法会 (薬師悔過)、薬師如来への厄難消除・招福を祈る修法 (薬師法) も盛んに修されている (註 40)。「朝観音、夕薬師」と称されるように、観音信仰とならんで薬師信仰は民衆の身近な信仰対象として礼拝・供養されてきた。

次に薬師如来と『法華経』との関係について記す。薬師如来は『法華経』に登場しないものの、同経には薬王菩薩 (Bhaisajyaraja) の記述がある (「薬王菩薩本事品第二十三、妙荘厳薬王本事品第二十七」)。しかも、「薬王菩薩本事品」には前述した (阿弥陀) 極楽浄土への転女成仏が記されている。浄土信仰隆盛下の 11 ～ 12 世紀頃、この「薬王菩薩」(註 41) を ‘ 薬師如来 ’ と読み換え、因位観にもとづき、東方浄土の薬師如来が、西方浄土 (来世) の阿弥陀如来のもとへ衆生を導くと考えられるようになっていった。

地蔵菩薩　さらに地蔵菩薩と、その信仰について概述する。クシティガルパ (Ksitigarbhan) のクシティは「大地」、ガルパは「胎・子宮、ひいては包蔵」を意味することからは ‘ 地蔵 ’ と訳される。インドの地神プリティヴィー (Prthivi) が仏教と習合し ‘ 地蔵菩薩 ’ になったと考えられている。『地蔵十輪経』『地蔵本願経』によれば、釈迦仏入滅から弥勒如来が現れるまでの期間、六道輪廻に苦しむ衆生を救うよう、釈迦仏からゆだねられたのが地蔵菩薩である。

なお、『法華経』には ‘ クシティガルパ ’ を彷彿とさせる要素－大地から出現した無数の地涌の菩薩 (「従地涌出品第十五」) と持地菩薩 [大地を支えるもの](「観世音菩薩普門品第二十五」) の記述－はあるものの、‘ 地蔵菩薩 ’ としての登場はない。インド・中国ともに、その信仰が発達したのが 7 ～ 8 世紀以降であることと関係するのであろう (註 42)。

では、なぜ、日本では地蔵信仰が盛んであるかを簡略に記す。8 世紀頃、地蔵像・経典が日本にも伝来していたが、この時は目立った動向はなかった。だが、10 世紀以降、浄土信仰や、末法思想、六道抜苦思想・六地蔵観と結びつくことで地蔵菩薩は急速に信奉されるようになっていった。とりわけ 13 ～ 14 世紀以降、身代わり地蔵・子安地蔵・辻地蔵 (道祖神) 等々として民間習俗化、全国に広まっていった。

〔**小　結**〕阿弥陀如来・薬師如来・地蔵菩薩・『法華経』の関係について要約すると以下のようになろう。

①「薬王菩薩本事品第二十三」にみられるように、『法華経』は阿弥陀信仰を取り入れている。加えて、浄土信仰と日本天台教学は融合しあっており、矛盾するものではない。それゆえ、本経塚の経碑に念仏供養碑銘と法華経写供養塔銘が刻まれていたり、「南無阿弥陀佛」石経、三界萬霊供養石経が併存しても何ら問題はない。

② 薬師如来自体は『法華経』に登場しない。しかし、浄土信仰 (とりわけ「薬王菩薩本事品第二十三」や因位観) を介して、薬師如来は阿弥陀如来や『法華経』と接点を有している。それゆえ、本経塚から「南無薬師如來　南無釈迦牟尼如來　南無阿弥陀佛」石経が出土しても何ら問題はない。

③ 地蔵菩薩自体は『法華経』に登場しない。しかし、末法思想や浄土信仰・六道抜苦思想を介して阿弥陀如来と接点を有している。それゆえ、本経塚から「南無阿弥陀佛　南無地蔵菩薩」石経が出土しても何ら問題はない。

④ ①～③をふまえ、三界萬霊供養と『法華経』・浄土信仰との関係についても整理してみたい（第 4 章第 2 節併せて参照)。三界万霊の供養塔や供養位牌は「衆生の輪廻する三種の世界 (欲界・色界・無色界) に遍在するすべての精霊を回向」し、供養するための盆・彼岸習俗 (祖霊崇拝) である。中世末～近世期に全国へ広まっていった (浄土宗大辞典編纂委員会 1976. 塚本編 1954)。三界万霊供養と『法華経』に直接関係はない。だが、『法華経』があらゆる人々や、人でないもの (精霊含む) の成仏を説くことと、三界万霊供養は矛盾するものではない。加えて、浄土信仰・六道抜苦思想を介して阿弥陀信仰、薬師信仰、地蔵信仰とも接点を有している。それゆえ、「南無阿弥陀佛　南無地蔵菩薩」石経の別面に「三界萬霊有縁無縁　乃至法界平等利益」の菩提供養文が記されていても何ら問題はない。

【註】

１　呉訳本『仏説無量寿経』では「天下和順」を「天下太平」と訳している (中村ほか 1963,345 頁)。

２　『法華経』「化城喩品第七」の頌偈を部分改編した偈文 (「普回向文」) である。天台・真言・日蓮・禅の各宗では、読経の最後に唱えられる (浄土系宗派では「願以此功徳　平等施一切　同発菩提心　往生安楽国」を用いる)(高崎 1981,41 ～ 42 頁)。

３　三界万霊を尊崇する文言は中世前期から史料中に見受けることが出来るが、三界万霊の供養塔や供養位牌として各地に普及したのは中世末～近世期のようである。ちなみに「衆生の輪廻する三種の世界 (欲界・色界・無色界) に遍在するすべての精霊を回向」し、供養するため建てられた塔を三界万霊塔と称する。また、同じ主旨のもと木製位牌を造立 (施餓鬼棚に安置)、種々の供物が献じられるものを三界万霊牌と称する (浄土宗大辞典編纂委員会 1976．塚本編 1954)。

なお、三界万霊塔碑の供養次第等を記した文献には「集むる所の功徳は、法号家門先亡累代精霊、六親眷属七世の父母、有縁無縁三界萬霊法界の含識等に回向す」(「檀越先亡累代諷経 (総回向)」『禅林象器箋圓牌門』所収) や、「三界萬霊六道四生七世父母六親眷属等　三界萬霊六親眷属等　三界萬霊十方至聖　諸佛菩薩賢聖衆六道四生群萠類」(『大正新脩大蔵経』第 81 巻 ,668 c 頁所収の「諸回向清規式」巻四) 等の文言が見られる。

４　真言宗における光明真言の誦し方を示した (『真言宗常用経典集』)。なお、天台宗では「オン･アボキャ･ビロシャナ･マカボダラ・マニハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤウン」と唱える (天台宗ＨＰ www.tenndai.or.jp)。

５　この詩は『ダンマ・パダ』(漢訳経典としては『法句経』) や、その他の初期仏教経典 (パーリ語経典) に用いられているものである。ゴーダマ・ブッダの教えで、ほぼ間違いないと考えられている (高崎 1981,154 ～ 155 頁)。

６　今日知られている釈迦の十大弟子は『維摩経』「弟子品」にあるもので､以下の十名である。舎利弗 (サーリプッタ [巴], シャーリプトラ [梵])。大目犍連 (別名：目連, マハーモッガラーナ [巴], マウドガリヤーナ [梵])。大迦葉 (別名：摩訶迦葉, マハーカッサパ [巴], マハーカーシャパ [梵])。須菩提 (スプーティ [巴・梵])。富楼那弥多羅尼子 (別名：富楼那, プンナ･マンターニープッタ [巴], プルーナ･マイトラヤニープトラ [梵])。摩訶迦栴延 (別名：迦栴延, マハーカッチャーナ [巴], マハーカートゥヤーナ [梵])。阿那律 (アヌルッダ [巴], アニルッダ [梵])。優波離 (ウパーリ [巴・梵])。羅喉羅 (ラーフラ [巴・梵])。阿難 (アーナンダ [巴・梵]) [漢訳名・別名，パーリ語名，サンスクリット語名の順に記した](中村ほか編 2002,484 頁)。

７　「結集があって経典を読みあい、誤りを正す。結集は口伝のためのものです。もし経典が書写されるようになれば、口伝の必要がなくなります。やがてそうなるのですが､はじめの数百年はすべて口伝だったのです」(橋爪 2006,154 頁)。

８　通常、大乗仏典の成立は次の三期に分けられる。

初期大乗経典：①般若経典群 (とりわけ『小品般若経』が古手)、②『法華経』(後述)、③『華厳経』、④浄土三部経 (後述)、⑤その他の経典 (『維摩経』『首楞厳三昧経』など) が編まれた。これらは大乗仏教の骨格をなす経典群で、A.D. １～２世紀頃の成立と考えられている。

中期大乗経典：唯識説を説く『解深密経』や、如来蔵思想や仏性を説く『勝鬘経』『涅槃経』などが４～５世紀頃に成立していたと考えられる。

後期大乗経典：中期大乗経典以降 (おおむね６世紀以降) に成立したもの。『大日経』『金剛頂経』『理趣経』など密教経典群は、この時期の成立である。

９　「『法華経』があらゆる人々の成仏を説く経典であることの象徴として、あらゆる階層の人々を列挙した」からであると植木雅俊氏は説く (植木 2018,26 頁)。

10　「菩薩に至る三つの段階に合わせて、『法華経』が説く一乗の教えを理解してもらうため」、本品以降、第九品まで様々な声聞たちへの授記が続く (植木 2018,56 頁)。

なお「“ 三乗 ” というのは “ 小乗 ” というのと等しい。すなわち (一) 自分だけの解脱を最高の理想とする “ 声聞 ”(“ ことばの弟子 ”) と (二) 因果の道理を悟っても自分だけで満足して他人に説法しない “ 独覚 ”(または “ 縁覚 ” “ 孤独の仏陀 ”) とが小乗である。そのほかに (三) 完全な仏陀のいることは承知しているが、自分たちには縁がないとあきらめている。これが小乗の立場である。それに対して「仏陀になる道は誰にでも開かれている」というのが “ 一乗 ” すなわち “ 大乗 ” であり、これが『法華経』の立場である」(渡辺 1967,184 頁)。

11 「火宅の譬え」要約〜ある大富豪が大きな邸宅に住んでいた。ある日、邸宅が火事 [煩悩を暗喩] になった。父親の大富豪 [如来] は脱出 [解脱] できたが、子供たち [六道輪廻の衆生] は遊びに夢中になって火事の邸宅から出てこない。父親が「出てこい」と言っても、聞き入れない。そこで「外には面白いものがある。玩具の羊や鹿や牛の車 [声聞乗・縁覚乗・菩薩乗] がある。早く出てきてこれで遊ぶがよい」という言葉 [方便] で誘い子供たちが、ようやく火宅から出てくる。そこで、富豪は子供たちに白牛に引かせた本物の車を [一仏乗] を与えた。

12 「長者窮子の譬え」要約〜ある男の子が父のもとを去り、乞食となって久しく国々を放浪していた。その間に父は大富豪になっていたが、我が子のことを想う日々が続く。息子は五十年たって、父の豪邸 [そうとは知らない状態] の前を偶々通り過ぎる [そうとは知らず]。父は一目で我が子と知り人をやって呼ばせる。乞食は罰せられると思い気を失ってしまう。やがて冷水をかけられて気が付いた青年は釈放される。「父はことさらに貧相な男に命じて跡を追わせ、「一緒に働く気はないか。よい仕事があるぞ」と誘う。青年は喜んで下賤の仕事をするためとして雇われる [小乗の教えを釈迦仏から示してもらった暗喩]。やがて富豪は自分も粗末ななりをして青年に近づき、次第に親しくなる。なお二十年の間、青年は富豪の邸宅の労働に従事し、富豪は徐々に青年に全財産の管理を任せていく。しかし青年は無欲で自分とは無縁の者と一線を画す [菩薩の教えが自分とは無縁と思うことの暗喩]。やがて富豪が臨終を迎える時、親族や土地の有力者たちの面前で、青年が我が実子 [釈迦仏の後継者] であることを宣言し、全財産 [大乗の教え] を相続させる。息子 [釈迦弟子] は「この上ない宝物を求めずして自ら得た」と語る。

13 「三草二木の譬え」要約〜「この世界にはさまざまな植物がある。そこに雨雲は現われて一度に全世界に雨を降らせる。降る雨の水はみな同じであるが、大中小の草木はそれぞれ自分に応じた分量の水を吸収し、それに応じてそれ相応に異なる花を咲かせ、異なる果実を結ぶ。

仏陀もまったく同じである。人人や神神やその他あらゆる存在の前に立って同じ法を説いて聞かせる。しかし草木に大中小の区別があるように、法を聞く側にもまた大中小の区別があり、“ ことばの弟子 ”(声聞) たちは小さい草木のように僅かの教えで満足する。“ 孤独の仏陀 ”(縁覚) たちは中くらいの草木の如く、ある程度の覚りで満足する。しかし、大きい草木と比較されるボサツたちは仏陀の最高の境地を目標として成長する」(渡辺 1967,186 〜 187 頁)。

14 「化城の譬え」要約〜「宝の島を目指してキャラバン隊が歩いているが、剣難な土地を歩いてみんな疲れてしまった。「もう帰る」と弱音を吐く人に、蜃気楼のような幻の城を作って見せて、「あそこに目的地が見えてきた」と言って勇気づけ、そこで少し休ませる。すると、目的地に到着したと思って安心し、みんなの疲れは吹き飛んでしまう。そこで幻の城 [声聞・縁覚・菩薩の三乗] を消し、本当に目的とすべき宝の島は近いことを告げ改めて出発、無事に宝処 [一仏乗] に到着した。

15 「衣裏珠の譬え」要約〜「ある男が親友の家に来て酔いつぶれてしまった。親友はかねてからその男を助けてやろうと思っていたが、急用ができたので、眠っている男の着物の中に高価な宝石を縫い込んで外出してしまった。男は目がさめて他国に行き、苦労して働き、貧しい生活をしていた。たまたま旧友がそれを見て「せっかく宝石をやったのに何をしているのだ。早く都会に出てこい」という。

弟子たちはこの譬え話をしていう。「仏陀はとうの昔に私たちにボサツの道を授けてくださったのに、私たちはそれを忘れて、小乗の教えに満足していた」」と (渡辺 1967,187 〜 188 頁)。

16　第十品は、後世に付け足された箇所と考えられている (渡辺 1967. 植木 2018)。ちなみに法師とは漢訳でいろいろに解釈されるが、原語から言えば「法を読誦する者」という意味である。特に法華経においては、この経典を信者のために読んで聞かせることを職分とする者のことである」(渡辺 2014,114 頁)。

17 「これは後世に付け足された箇所で、もともとは別の経典だったのではないかと考えられ」ている。植木氏によれば「あらゆる人が成仏できるという『法華経』最大のテーマからすれば、「悪人成仏」と「女人成仏」があればさらに完璧になるという考えから挿入された」という (植木 2018,68 頁)。

ちなみに、提婆達多 (デーヴァダッタ) は、仏教教団を分裂させた悪人であると多くの経典は説く。一方、龍女は畜生であり、女性 (インドにおける女性への差別は苛烈) であり、一人前の人間でない存在 (八歳以下は人間と認められていない) である。

18　序品から第十四品までの前半は迹門と呼ばれる。他方、本品 (第十五品) から第二十八品までの後半は本門と呼ばれる。なお、迹門とは、人々を救済するための手段として変化身 (歴史上の釈迦として現世に出現) が説いた教え。本門とは、

法身 (永遠不滅の真理) ・釈迦仏の教えのこと。

19 「良医病子の譬え」要約～「すぐれた医者が留守のあいだにその子供たちが毒を飲んだ。医者は戻ってきて薬を調合して与えた。正気の子供たちはすぐに薬を呑んで全快したが、毒のために狂ったものは薬を飲もうとはしない。父は方便を設けて他国に行き、やがて死んだという知らせが届いた。子供たちは父を思い出して薬を呑んでみな健康を取り戻した。死んだと思った父がそのとき戻ってきた。仏陀が入滅するのもそれと同じように方便である」(渡辺 1967,190 頁)。

20　常不軽菩薩が、いかなる人をも尊び礼拝するのは、「いかなる人も仏性を持っていて仏になる可能性を持っている」ことの暗喩である。余談であるが、詩人 , 童話作家・宮沢賢治 [1896-1933]「雨ニモマケズ」は、この常不軽菩薩の礼拝行をモデルにしていると言う (植木 2018,97 頁)。

21　紀元前後頃、釈迦牟尼仏ゆかりの地は聖地化され、ストゥーパ礼拝や仏跡巡礼が盛んになった。一方、法華経はそれと、少し違う視点を示す。つまり、釈迦牟尼仏ゆかりの特定の場所を聖地化することを否定する。そして『法華経』を「実践する場所こそ最も重視すべきである。そうすると、であれ、法華経を受持・読誦・解説・書写するところこそが、お釈迦さまの成道・初転法輪・般涅槃の地である」＝「法華経が実践されているところ、実践している人をこし重視すべき」と説く (橋爪・植木 2015,414 頁)。

22 「嘱累品は一般的には、経末に置かれるものなので、鳩摩羅什訳においてこのように中途に置かれることは奇妙な印象を与える。嘱累品がこの位置に置かれる問題に関して、『法華経』の発展のある段階においては、『法華経』はこの範囲までしか成立していなかったのではないかという推定がなされたり、反論が出されたり」している (菅野 2001,73 ～ 74 頁)。

23　中国の『法華経』注釈書をあげると、道生 [355 頃 -434] の『妙法蓮花経疏』をはじめ、光宅寺の法雲 [467-529] の『法華義記』、吉蔵 (嘉祥大師) [549-623] の『法華玄論』『法華義疏』、基 (慈恩大師) [632-682] の『法華玄賛』のほか、智顗 (天台大師) が著した天台三大部 (『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』) などがある。

24　智顗は、釈迦仏の教えを時系列的に五時期 [華厳時→阿含時→方等時→般若時→法華涅槃時] に分類するとともに、説法の様式を四つ [頓教、漸教、秘密教、不定教]、説法の浅深を四つ [三蔵教→通教・別教→円教] に分け、(法華) 円教が最高の教えであると説く。

25　最澄は遣唐請役僧として中国 (唐) へ渡り、『法華経』に基づく天台宗の教え (法華円教) と、禅、戒律、密教を併学して帰国。これらの教えを融合し、総合仏教としての日本天台宗を誕生させた。また、円仁、円珍、安然らによって法華円教、ならびに天台密教が整備・充実された。他方、円仁が中国五台山からもたらした修行法 (常行三昧に基づく観想念仏・称名念仏) が僧俗ともに広まっていった。加えて、11 世紀以降、末法思想・往生思想と融合し天台系浄土信仰が形成されていった (源信 [942-1017] の『往生要集』、良忍 [1072-1132] の「融通念仏」は、その普及に一役買っている)。

26　法華八講とは、『法華経』八巻を一巻ずつ (一之座から八之座まで) 連日講義する法会である。延暦 15[796] 年、勤操 [754-827] が大和石淵寺で『法華経』八巻の講義を行ったのが始まりとされる。各寺院はもとより、貴族の邸宅、神社などで盛んに行われた (この他に法華十講、法華三十講もある)。

27 『日本霊異記』『日本往生極楽記』『今昔物語』等には、『法華経』にまつわる説話が収録されている (『法華経』霊験譚のみを掲載した『法華験記』も編まれている)。また、『法華経』二十八品を題材とした二十八品歌を詠ずることが流行ったり (『発心和歌集』『山家集』『梁塵秘抄』等に収録)、『法華経』の装飾経 (意匠をこらした写経.「平家納経」が有名) 作られるなど貴族層による『法華経』美術も形成された。

28　比叡山延暦寺は、元亀 2 [1571] 年の織田信長による焼き討ちにより衰退していた。加えて日光山も、天正 18[1590] 年の豊臣秀吉による小田原攻めの折、小田原方に与したため所領没収され衰退していた。東叡山寛永寺は天海を開山とし徳川家菩提寺として新たに建立された。

29 『法華経』「如来神力品第二十一」の「どこでも聖地」論を根拠に経塚が写経・埋納されたのではなかろうか。なお、これについては、今後も、さらに検討を続けていきたく考えている。

30　11 ～ 12 世紀にかけて、ほぼ全国で造立される (最古例は畿内・北九州に濃密に分布)。だが、古代的な経塚は、13 世紀以降、急激に減少・消滅していく。なお、塚に納められた経典は紙本経をベースとするが、ほかに瓦経、銅板経、石経、柿経などがある。また、これらを納めた外容器 (金属製・石製・陶磁器製などの経筒や経箱)、副葬品 (鏡・小刀・銭貨・仏像・仏具など) があった。

31　原則的には、『法華経』を六十六部書写し、全国六十六州の霊場に巡礼・奉納する聖のこと、または書写した経典 (紙本経) 自体を六十六部 (略称：六部．別称：回国聖) と称する。笈に経巻を入れて背負い、托鉢によって路用を調達し、民家宿を渡り歩いた。

なお、中世期、人々が行える作善 (仏縁を結ぶための善い行い) として経典 (紙本経、柿経、貝殻経など) を寺院や神社に奉納することが流行した。なお寺社への写経奉納は、『法華経』のほか、『大般若経』『般若心経』、浄土三部経などが見られる。

32　経筒は、土中に埋納する場合と、寺社境内に設けられた奉納所や鉄塔に奉納するものが併存する。副葬品 (鏡・小刀・銭貨・仏像・仏具など) の事例もあるが、古代の経塚と比べて数・種類は多くない傾向にある。

33　礫石経塚は、容器には陶磁器製・石製・木製などを用いることや、副葬品 (鏡・利器・銭貨・仏像・仏具・火内鎌など) を伴う例も確認されるが、いずれも稀である。

34　礫石経塚の標識として建立された石碑や石塔のことを経碑という。願意 (築造の目的)、供養者名、供養の年月日、書写経典名などを記している。17 世紀以降、多数造立されるが、碑下の埋経については十分な調査がされておらず未確認の事例が多い。ちなみに、願意をみると、多数作善 (多くの人々が結縁することを目的) の例、追善供養の例、現世利益を求める例など多種多様である。

35　当初の信仰形態は聖 (正) 観音像のみであった。しかし、6 世紀以降、密教の隆盛に伴い十一面観音 (『十一面観自在菩薩随願即得陀羅尼経』等)、不空羂索観音 (『不空羂索呪経』等) 、千手観音 (『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』) などの変化観音があいついで成立。これに伴い儀軌・図像類も整備された。

36　渡辺 2014,297 頁 . 植木 2018,116 頁．中村 2018,172 頁をもとに記述。なお、これには反論もあり、「この品は法華経の制作者によってはじめて成立したという説」も示されている (菅野 2001,181 頁)。

37　阿弥陀浄土に関する 3 種の経典で、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』をいう (法然が浄土三部経と命名したのが由来)。浄土教諸宗の所拠経典で『無量寿経』を「大経」、『観無量寿経』を「観経」、『阿弥陀経』を「小経」とも略称する。『阿弥陀経』(スカーヴァティーヴィユーハ) は A.D.100 年頃、北西インドで成立。『無量寿経』(大スカーヴァティーヴィユーハ) は、1 世紀頃、インドおよび近隣諸国の影響下成立か。『観無量寿経』はサンスクリット原典ならびにチベット語訳本が発見されていない (中国撰述説、中央アジア撰述説などがある)。

38　薬王菩薩の由来を語る本品も、もともと独立していたもので、『法華経』増広時に取り込まれ「薬王菩薩本事品第二十三」となった。その折、世間で流行していた阿弥陀信仰の要素を本品に取り込んだと考えられている (本来、転女成仏思想と、法華経の悉皆成仏思想とは矛盾することも根拠)(橋爪・植木 2015,432 頁)。

なお阿弥陀如来は、大通智勝如来の十六人中九番目の沙弥、のち悟りを得た仏として『法華経』「化城喩品第七」にも、その名が記されている。

39　達摩笈多訳『薬師如来本願経』、玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』、チベット訳本が存在する (『薬師経』は、これらの総称)。なお、長らく『薬師経』のサンスクリット原典は不詳とされてきたが、「薬師経のサンスクリット原文が発見され」、「この信仰がインドで行われていたことは確実である」旨の記述が存在する (中村ほか 2002,1013 頁)。

40　密教修法のパフォーマンス的要素、ならびに薬師如来の霊験利益譚・功徳讃嘆などの流布が、薬師信仰の展開に及ぼした影響は計り知れない。ちなみに「朝観音、夕薬師」とは、「江戸時代の信仰で、毎月、観音の縁日十八日には朝。薬師の縁日八には夕方、参詣する風習をいう」(中村ほか 2002, 7 頁)。

41　薬王菩薩は、薬をもって人々の身心両面の治病をする存在である。「薬王菩薩本事品」以外だと、『観薬王薬上二菩薩経』に登場する。薬師如来の八大菩薩や、阿弥陀如来の二十五菩薩の一尊でもある。

42　インドでは、地蔵菩薩として単独造立された遺例がないことから、その信仰が発達するのは 8 世紀以後だと考えられている。中国では 397 ～ 439 に『十輪経』が訳されている。だが、こちらも地蔵信仰が盛んになるのは隋・唐時代 [581 ～ 907] である (その背景には末法思想や堕地獄観があった)。つまり、『法華経』が成立した 1 ～ 2 世紀では、地蔵菩薩は未だ形成途中 (その痕跡が、無数の地涌の菩薩と持地菩薩の記述) であった可能性が高い。

【引用・参考文献】

芦田正次郎　1994「万霊塔」『日本石仏事典第二版』初版は 1975 年）
粟野町文化財保護審議会　1992『粟野の野佛』粟野町教育委員会
飯塚幸謙　1987『薬師如来－病苦離脱へ－』集英社
池上　悟　2000「平成 10 年度・足利市域石造物所在調査報告」『平成 10 年度文化財保護年報』足利市教育委員会
石倉重継　1900『真宗名所図会第２編　高田派本山名所図会』尾呂志屋書店
石橋町教育委員会　1990『石橋町の野仏』
今市市史編さん委員会　1998『いまいち市史　通史編Ⅲ』今市市
植木雅俊　2018『ＮＨＫテキスト 2018 年４月Ｅテレ「100 分ｄｅ名著」 法華経』ＮＨＫ出版
氏家町史作成委員会　1989『氏家町史　民俗編』氏家町
海老沢雄蔵　1980『二宮の野仏』
大角　修　2011『法華経の事典　信仰・歴史・文学』春秋社
太田市教育委員会　2016『相場観音経塚発掘調査報告書』
大平町野仏を愛する会　1991『ふるさと大平の野仏』大平町教育委員会
小川町碑塔・野仏調査委員会　1984『小川町の碑塔と野仏』小川町教育委員会他
小山市史編さん委員会　1983『小山市史　史料編・近世Ⅱ』
大和久震平　1967 『堀端経塚発掘調査報告書』今市市教育委員会
大和久震平他　1969『上蒲生遺跡発掘調査報告書』日産自動車株式会社
柿園生　1927「伊王野に於ける經塚」『下野史談』第４巻第６号
加藤智見　1999『誰でもわかる浄土三部経』大法輪閣
加藤政久　1990『石仏偈頌辞典』国書刊行会
加藤政久　1993『続石仏偈頌辞典』国書刊行会
鹿沼市史編さん委員会　2007『鹿沼の近世石造物Ⅰ』・『鹿沼の近世石造物Ⅱ』
上三川町教育委員会　1983『上三川町の野仏』
川勝政太郎著・歴史考古学研究会編　1984『偈頌　川勝政太郎講述』言叢社
国分寺町教育委員会　2000『石に刻まれた願い－国分寺の野仏－』
小花波平六　1994「十九夜塔」『日本石仏事典第二版』初版は 1975 年）
坂詰秀一編　2003『仏教考古学事典』雄山閣
坂本幸男・岩本　裕訳注　1962・1964・1967『法華経』上・中・下巻、岩波文庫
佐野市史編さん委員会　1972『佐野市史資料第１集 佐野の野佛』
塩原町誌編纂委員会　1980『塩原町誌』塩原町
塩谷町史編さん委員会　1994『塩谷町史　第２巻　近現代史料編』塩谷町
浄土宗大辞典編纂委員会　1976『浄土宗開宗八百年記念出版　浄土宗大辞典』２　山喜房仏書林
清水長明　1994「疱瘡供養塔」『日本石仏事典第二版』初版は 1975 年）
菅野博史　2001『法華経入門』岩波新書
関　正　2017『小山市大谷の野仏』
関　正　2018『小山市の野仏№２【豊田地区】』
関　秀夫　1985『考古学ライブラリー 33　経塚』ニュー・サイエンス社
関　秀夫　1990『日本の美術』№ 292　経塚とその遺物、至文堂
関　秀夫　1990『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版
大正大学仏教学科編　1999『仏教とはなにか　その思想を検証する』大法輪閣
高崎直道　1981『日常唱える偈文の解説』大本山総持寺出版部
高根沢町史編さん委員会　2003『高根沢町史　民俗編』高根沢町

田沼町　1981『田沼町史　第２巻　資料編１金石』
田村右品　2015『しもつけ石仏探察拾遺抄』歩行社
栃木県教育委員会　1973『緊急塔碑類調査報告　下野の野仏』
栃木県教育委員会事務局文化課　1983『栃木県の工芸品・書跡・考古資料』(財) 栃木県文化振興事業団
塚本善隆編　1954『望月仏教大辞典』第２巻増訂版　世界聖典刊行協会
中島　昭　1992『栃木市　野仏の風景』
中島　昭　1997『藤岡町　野仏の風景』
中村　元　2002『現代語訳大乗仏典２　法華経』東京書籍
中村　元ほか　1963『浄土三部経』上巻　岩波文庫
中村　元ほか編　2002『岩波仏教辞典　第二版』岩波書店
中村　元・前田専學　2018『< 仏典を読む > ３　大乗の教え』(上)　般若心経・法華経ほか、岩波書店
那須歴史探訪館　2004『那須の石仏　芦野編』那須町教育委員会
新治村教育委員会　1988『三国街道　大般若塚発掘調査報告書』
西　海平『くろばねの塔碑』(私家版)
日光市文化財保護審議委員会　1996『日光の石造美術品』日光市教育委員会
芳賀町史編さん委員会　2005『芳賀町の野仏』
橋爪大三郎　2006『世界がわかる宗教社会学入門』ちくま文庫
橋爪大三郎・植木雅俊　2015『ほんとうの法華経』ちくま新書
馬頭町文化財調査委員会　1982『馬頭町文化財誌 第４集　塔碑と野佛』馬頭町
花山勝友　1987『阿弥陀如来－今を生きる－』集英社
早島鏡正ほか　1982『インド思想史』東京大学出版会
速水　侑　1975『地蔵信仰』塙新書
速水　侑　1996『観音・地蔵・不動』講談社現代新書
佛教史学会編　2017『仏教史研究ハンドブック』法蔵館
壬生町史編さん委員会　1987『壬生町史　資料編　原始古代・中世』壬生町
南河内町教育委員会社会教育課　1986『南河内町の野仏』南河内町教育委員会
南那須町文化財保護審議委員会　1987『わが町の碑塔と石仏』南那須町教育委員会
三宅　慶・池田奈緒子　2016『立正大学博物館 第 10 回特別展　経塚の諸相』立正大学博物館
真岡市史編さん委員会　1986『真岡市史　第５巻　民俗編』真岡市
真岡市文化財保護審議会　1977『真岡市の文化財４　野仏編』真岡市教育委員会
矢板市教育委員会他　1998『矢板の石仏と塔碑』
矢板市教育委員会　1999『矢板の石仏と塔碑－地区別一覧－』
渡辺照宏　1958『日本の仏教』岩波新書
渡辺照宏　1967『お経の話』岩波新書
渡辺照宏　1974『仏教　第二版』岩波新書
渡辺照宏　2014『法華経物語』岩波現代文庫

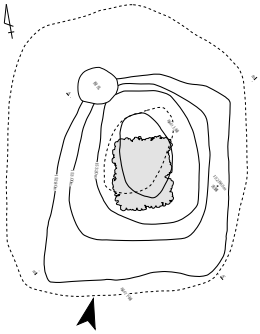
写 真 図 版

会橋久保経塚の経碑と日光連山

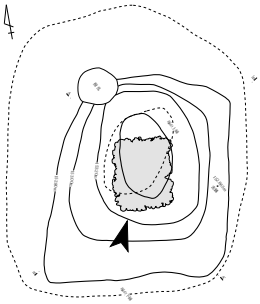
図版一　遠景・遺構一

会橋久保経塚遠景
（南西から）

経塚・碑全景

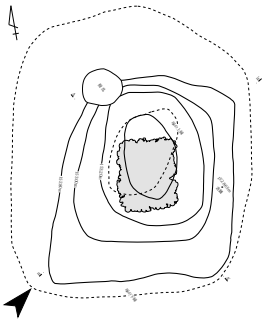


経碑

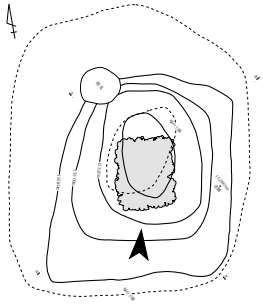


図版二一　遺構二一

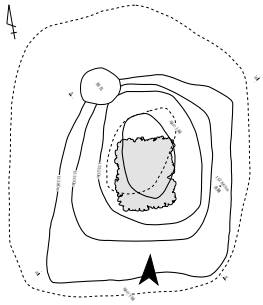
表土除去状況



Cグリッド土層と
積石確認状況

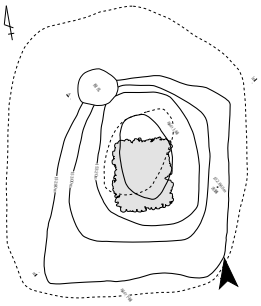


Cグリッド積石確認状況

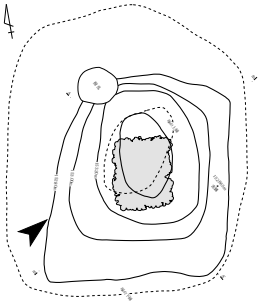


図版三　遺構三

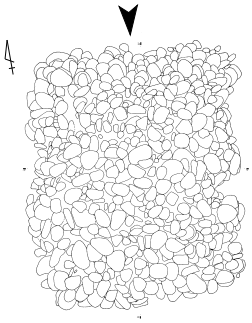
古銭出土状況



Bグリッド土層と
積石確認状況

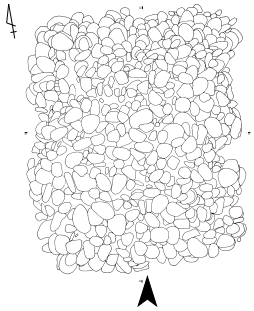


積石全景

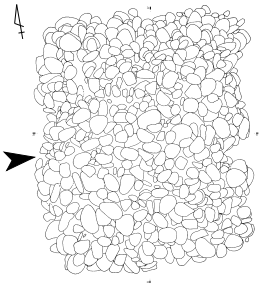


図版四　遺構四

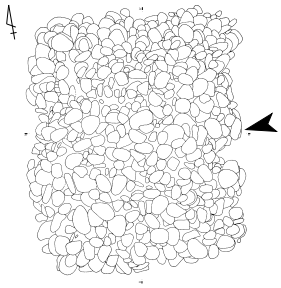
積石全景



積石全景

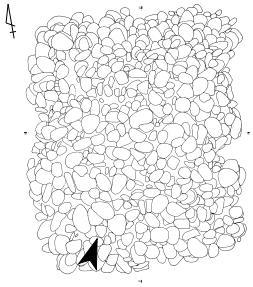


積石全景

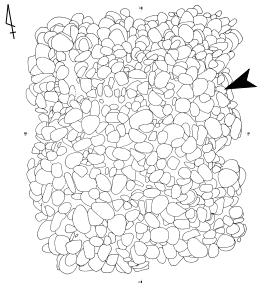


図版五　遺構五

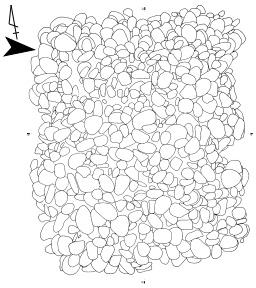
Dグリッド積石上面



Bグリッド積石石経

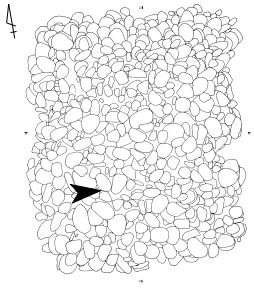


Cグリッド積石上面

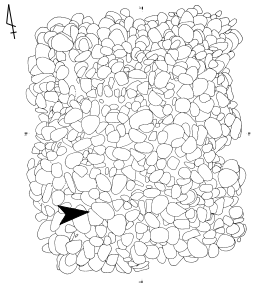


図版六　遺構六

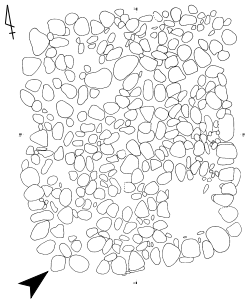
Dグリッド積石上面



Dグリッド積石石経

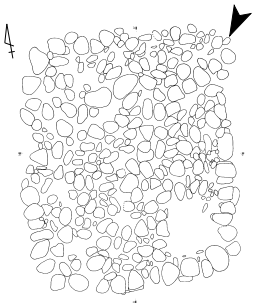


積石断面

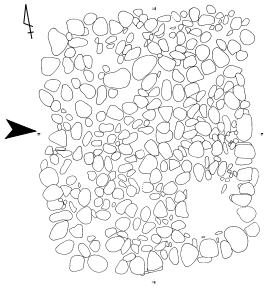


図版七　遺構七

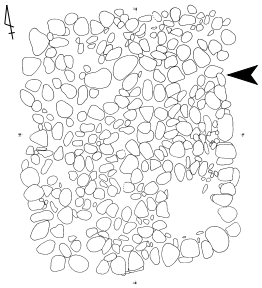
積石断面



積石の南北断面



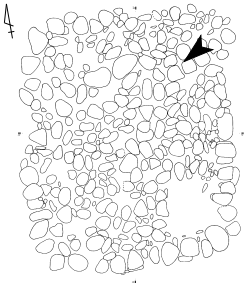
Ｄグリッド下面の石経



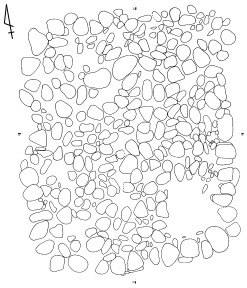
図版八

遺構八

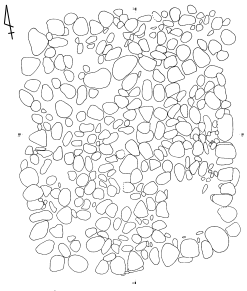
Bグリッド下面の石経



下面の石経全景

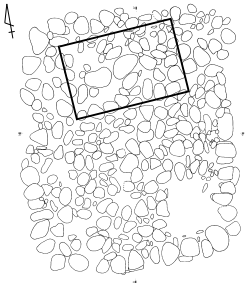


下面の石経全景

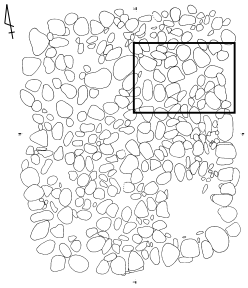


図版九　遺構九

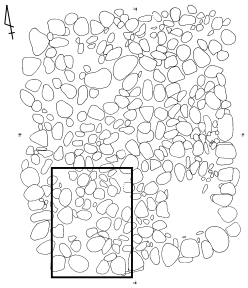
Ｂ・Ｃグリッド下面の石経



Ｂグリッド下面の石経



Ｄグリッド下面の石経



報 告 書 抄 録

ふ り が な	かいばしくぼきょうづかはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	会橋久保経塚発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	高根沢町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第９集
編 著 者 名	津野　仁・池田敏宏・石橋知明
編 集 機 関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒３２９－０４１８　栃木県下野市紫４７４番地　TEL ０２８５－４４－８４４１
発 行 機 関	高根沢町教育委員会
発 行 年 月 日	西暦　2019 年３月 14 日　（平成 31 年３月 14 日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
会橋久保経塚（かいばしくぼきょうづか）	高根沢町（たかねざわまち） 大字宝積寺（おおあざほうしゃくじ） 字会橋久保（あざかいばしくぼ）	09386	2429	36° 37′ 05″	139° 58′ 58″	20170206 ～ 20170310	16 ㎡	町道建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
会橋久保経塚	経 塚	江 戸 時 代	多字一石経の積み石塚	妙法蓮華経八巻二十八品の多字一石経 南無阿弥陀佛などの墨書石 寛永通寶	多字一石経

要 約	妙法蓮華経八巻二十八品と「南無阿弥陀佛」・菩提などに関する墨書が総数 2,063 個の川原石に書かれていた。このうち 1,908 個の墨書について文字が判読でき、経典の順に配置した。石に多くの文字を書写する多字一石経であり、誤字・脱字・重複書写などもあるが、筆跡と字形から一人で書写したと判断した。石経は逆方錘形に積み、土で固く被覆して塚を造っていた。塚には経碑があり、寛政５年 (1793) に宝積寺村の念仏講と施主加藤氏が係わった書写事業であったことを伝える。 下野国内で江戸・明治時代の石経書写事業を示す経碑は県下で 36 基確認できた。江戸時代と目される一字一石経が９箇所程存在し、石経書写が盛んであったことが確認された。碑文により、書写事業は富裕者個人や寺住僧が行う場合が多く、地域の有志による場合、陸奥や豊後の遠方の者が願主であった場合も確認できた。また、日光の山内周辺では石経書写供養が盛んに行われ、寺社による霊地であったことが考えられる。一方、村の書写事業も各地で行われ、江戸時代に安楽・安全や功徳を求める法華経信仰が盛んであったことが明らかになった。

高根沢町埋蔵文化財調査報告第９集

会 橋 久 保 経 塚

発 掘 調 査 報 告 書

発　行　高根沢町教育委員会
塩谷郡高根沢町大字石末 1825 番地
ＴＥＬ　028（675）3175

編　集　公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫 474 番地
ＴＥＬ　0285（44）8441

発行日　平成 31 年３月 14 日発行

印　刷　株式会社　松井ピ・テ・オ・印刷